

佐久市

NIGORI

濁り遺跡

KUBOTA

久保田遺跡

NISHIICHRIZUKA

西一里塚遺跡群

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4

－ 佐久市内 4 －

2012. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



遺跡から浅間山を仰ぐ（平成 16 年）



西一里塚遺跡群から平尾山方面を望む（平成 18 年）

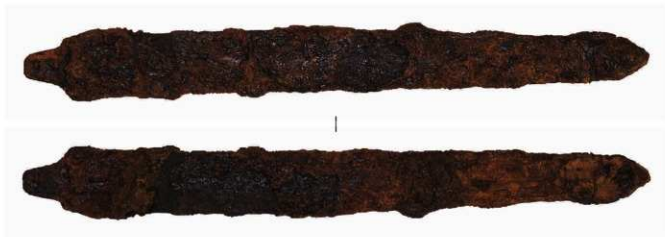


頭上から

西一里塚遺跡群 人形土器 (第106図-29・長28.2cm)



西一里塚遺跡群 人形土器 (第106圖-29)



西一里塚遺跡群 SM14 鉄剣 (第56図-1・長33.3cm)



西一里塚遺跡群 SM07 鉄釧 (3方向から 第62図-1・幅7.2cm)



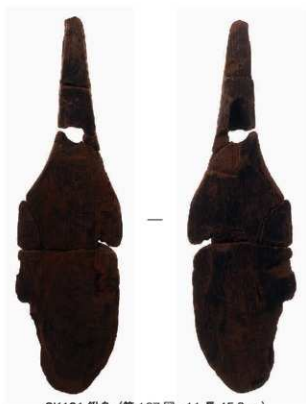
西一里塚遺跡群 SM07 ガラス玉 (第61図左から4～12・縮尺約1:1)



西一里塚遺跡群 SK101 木製品出土状況



SK101 破風板 (第 169 図-21・長 123.7cm)



SK101 銀身 (第 167 図-11 長 45.8cm)



曲柄 拡大



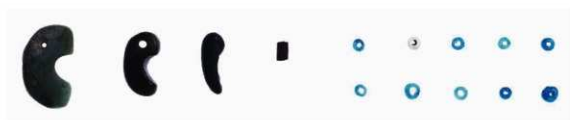
SK101 直柄 (第 167 図-13・長 84.8cm)



SK101 曲柄 (第 167 図-12 長 81.8cm)



西一里塚遺跡群 人形土器 (第 107 図-32・長 5.6cm)



西一里塚遺跡群 玉類 (第 112 図・縮尺約 1:1)



西一里塚遺跡群 中近世 陶磁器 (PL68・縮尺不同)



西一里塚遺跡群 SB03 土器 (第 41 図-4・縮尺不同)



西一里塚遺跡群 SD15 土器 (第 73 図-5・縮尺不同)



西一里塚遺跡群 SB12 出土土器



西一里塚遺跡群 SB10 出土土器

はじめに

中部横断自動車道は、日本海側と太平洋側を結ぶ高速自動車国道として建設が進められています。長野県内では小諸市の佐久小諸ジャンクションから佐久穂町の八千穂インターチェンジ（仮称）までの約23km区間について建設工事およびそれに先立つ発掘調査が進んでいます。そして、平成23年3月26日には、佐久南インターから佐久小諸ジャンクションまでの7.8kmが供用開始となりました。

本書に掲載する濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群はこの供用が開始された区間に所在し、平成16年度～19年度に発掘調査が行われました。本書はその発掘調査の成果を報告するものです。

千曲川右岸の佐久平北部では、田切り地形と呼ばれるこの地域独特の箱形に切り立った台地上に多くの遺跡が営まれています。本書に掲載する3遺跡は、そうした田切り地形が消滅し、湿地帯の低地と微高地、それに「流れ山」と呼ばれる残丘からなる地形に立地するものです。佐久平では調査事例の少ない低地にも調査の手がはいったため、台地上では残ることが稀な木製品の出土をみたことは大きな成果です。さらに西一里塚遺跡群では平安時代以降の水田跡も計4面が発見され、この低地が生産域にあっていたこともわかりました。この他にも鉄鋼や鉄剣、人形土器など出土例が少ない注目される遺物の出土もみえました。

濁り遺跡と久保田遺跡は一連の遺跡であることが判明し、平安時代には集落が営まれていました。調査区内で検出された遺構は少なかったものの墨書・刻書土器の出土もみられます。田切り台地に展開する古代集落とは立地を異にするものであり、律令体制が崩れていく時期に出現した集落といえるでしょう。

今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘から整理作業、本報告書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局の方々、長野県教育委員会や佐久市・佐久市教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

例言

- 1 本書は、長野県佐久市に所在する濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う事前調査として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』21～23・26で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は、濁り遺跡・久保田遺跡では世界測地系を、西一里塚遺跡群では日本測地系（旧測地系）を用いている。
- 6 発掘調査にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくはご指導・ご協力を得た。（敬称略）
測量・空中写真撮影：(株) みず総合コンサルタント（濁り遺跡・久保田遺跡）
(株) ユーアール測量設計（西一里塚遺跡群）
土器・木製品実測：大成エンジニアリング（株）
人骨・獣骨鑑定：京都大学名誉教授 茂原信生、総合研究大学院大学准教授 本郷一美
石器・石材鑑定：信州大学教授 原山 智
自然科学分析：(株) バリノ・サーヴェイ、(株) パレオラボ
鉄製品保存処理：(株) 文化財ユニオン
遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する。（敬称略）
茂原信生、設楽博己、本郷一美、原山 智、山田昌久、佐久市教育委員会、佐久考古学会、市原市埋蔵文化財調査センター、(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団、中之条町歴史と民俗の博物館「ミューゼ」
- 8 発掘調査・整理作業の担当者等は第2章に記載した。
- 9 本書は、調査研究員櫻井秀雄が執筆し、調査第2課長岡村秀雄が校閲し、調査部長大竹憲昭が総括した。
- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を取録した。
本文PDFファイル、写真データ、自然科学分析報告書

凡例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付してある。調査段階で欠番になっているものや整理作業において遺構として認定しなかったため欠番としたものがある。整理作業段階で新たに遺構番号を付したのものもある。
- 2 実測図の遺物番号は、出土遺構ごとに付してある。遺構外から出土した遺物については調査地区（①～③区、④区、⑤区、⑥区）ごとに遺物番号を付した。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
 - (1) 遺構図
遺構配置図 1:200～1:500 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・周溝墓 1:80 炉等住居内施設・土坑 1:40 遺物集中 1:30 溝跡 1:100～1:250
 - (2) 遺物図
土器・陶磁器 1:4 土器拓影・土器破片実測 1:3 石鏃等小形石器 2:3 磨石・敲石・砥石等 1:3～1:6 軽石 1:2～1:4 木製品 1:2～1:8
 - (3) 木製品の断面図には、年輪の横断面を模式的に表現して木取りを示している。
 - (4) 遺物写真は原則として遺物図とおおよそ同じだが、任意縮尺にしているものもある。なお、写真図版では土器・石器・木製品といった種別でまとめて掲載した。
- 4 基本層序及び遺構埋土、観察表中の土器胎土の色調は「新版 標準土色帳」による。
- 5 実測図中のスクリーントーンは、下記のとおり使用した。これ以外の場合は、該当箇所説明してある。
 - (1) 遺構図

焼土  柱痕  地山 

(2) 遺物図

①土器 赤彩  黒色処理 
須恵器断面  陶磁器断面 
②石器 磨面・砥面 
③木製品 炭化範囲  欠落・剥落範囲 

目次

巻頭図版	
はじめに	
例言	
凡例	
本文目次	
挿図目次	
挿表目次	

第1章 調査に至る経緯

第1節 事業の概要と保護協議	1
1. 中部横断自動車道の建設計画	1
2. 埋蔵文化財の保護協議	1
3. 文化財保護法手続き	3
第2節 発掘作業と整理作業の体制	3

第2章 調査の経過

第1節 発掘作業の経過	4
1. 発掘作業の方法	4
(1) 遺跡名称と遺跡記号 (2) 遺構名称と遺構記号 (3) 調査区(グリッド)の設定と呼称 (4) 遺構の発掘 (5) 測量と写真 (6) 遺跡の公開	
2. 日誌抄	8
第2節 整理作業の経過	9
1. 整理作業の方法	9
(1) 基礎整理作業 (2) 本格整理作業 (3) 報告書の作成 (4) 資料の収納 (5) 報道公開	
2. 日誌抄	

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	12

第4章 濁り遺跡・久保田遺跡

第1節 遺跡の概観	23
第2節 調査の概要	25
第3節 基本層序	28
第4節 遺構と遺物	33
1. 掘立柱建物跡	33
2. 溝跡	35
3. 土坑	38
第5節 遺構外出土の遺物	47
1. 土器・土製品	47

2. 石器・石製品	47
3. 木製品	47
4. 銭貨	47
5. 自然遺物	48
第6節 小結	48
第5章 西一里塚遺跡群	
第1節 遺跡の概観	49
第2節 調査の概要	51
第3節 基本層序	53
第4節 遺構と遺物	55
1. はじめに	55
2. ①区・②区・③区	55
(1) 層序と調査面 (2) 第1調査面 ア 水田跡(第2水田)	
(3) 第2調査面 ア 水田跡(第3水田)	
(4) 第3調査面 ア 竪穴住居跡 イ 掘立柱建物跡 ウ 円形周溝墓・ 方形周溝墓 エ 木棺墓 オ 土器棺墓 カ 溝跡 キ 土坑 ク 遺物集中	
(5) 遺構外出土の遺物 ア 土器 イ 人形土器 ウ 土製品 エ 石器 オ 玉類 カ 骨角器 キ 銭貨	
3. ④区	147
(1) 層序と調査面 (2) 第1調査面 ア 水田跡(第1水田)	
(3) 第2調査面 ア 水田跡(第2水田)	
(4) 第3調査面 ア 水田跡(第3水田)	
(5) 第4調査面 ア 竪穴住居跡 イ 方形周溝墓・円形周溝墓 ウ 溝跡 エ 土坑	
(6) 遺構外出土の遺物	
4. ⑤区	177
(1) 層序と調査面 (2) 第1調査面 ア 水田跡(水田A)	
(3) 第2調査面 ア 水田跡(水田B) (4) 第3調査面 ア 水田跡(水田C)	
(5) 第4調査面 ア 溝跡 イ 土坑	
(6) 遺構外出土の遺物	
5. ⑥区・⑦区	219
(1) 層序と調査面 (2) 第1調査面 ア 溝跡 イ 土坑	
(3) 第2調査面 ア 竪穴住居跡 イ 溝跡 ウ 土坑 エ 低地部	
(4) 遺構外出土の遺物	
第5節 小結	245
1. 弥生時代の遺構配置	245
2. 土器・土製品	247
3. 人形土器	248
4. 石器・石製品	251
5. 木製品	251

6. 金属製品	257
7. 玉類	257
8. 水田跡	258
第6章 科学分析	
1. 放射性炭素年代測定	
(1) 分析目的	
(2) 分析試料・結果概要	ア 竪穴住居跡出土の炭化材 イ 溝跡出土の立木 ウ 土器に付着した炭化物 エ 濁り遺跡および西一里塚遺跡群出土の木製品
2. リン酸分析	
(1) 分析目的	(2) 分析試料・結果概要
3. 材質分析	
(1) 分析目的	
(2) 分析試料・結果概要	ア 鉄釧に付着した繊維 イ 鉄剣の鞘 ウ 土器内の植物遺体
4. 樹種同定	
(1) 分析目的	
(2) 分析試料・結果概要	ア 西一里塚遺跡群出土の炭化材 イ 西一里塚遺跡群出土の流木 ウ 濁り遺跡および西一里塚遺跡群出土の木製品
5. 土壌分析	
(1) 分析目的	
(2) 分析試料・結果概要	ア ②-2区、③-2区、④-1区、⑤区、⑥-2区低地 イ ⑥-1区低地(砂層)、⑥-2区低地(砂層)、SK70
第7章 総括	
1. 遺跡の立地	273
2. 旧石器時代・縄文時代	273
3. 弥生時代	274
4. 古墳時代から平安時代	274
5. 中近世	275
6. 近現代	276
7. おわりに	276
遺構一覧表 遺物観察表	279
写真図版 抄録	

挿 図 目 次

<p>第1図 中部横断道遺跡位置図(佐久小諸JCT～ 佐久南1C間)……………2</p> <p>第2図 西一里塚遺跡群 グリッド設定図……………6</p> <p>第3図 濁り遺跡・久保田遺跡 グリッド設定図…7</p> <p>第4図 周辺の遺跡分布図(1) 縮尺1:50000…18</p> <p>第5図 周辺の遺跡分布図(2) 縮尺1:25000…19</p> <p>第6図 濁り遺跡・久保田遺跡 遺跡範囲図……………24</p> <p>第7図 年度別調査区……………25</p> <p>第8図 確認調査 トレンチ配置図……………26</p> <p>第9図 全体図……………27</p> <p>第10図 層序模式図……………29</p> <p>第11図 遺構配置図(①-1区)……………30</p> <p>第12図 遺構配置図(①-2区)……………31</p> <p>第13図 遺構配置図(①-3区)……………32</p> <p>第14図 トレンチ26～29・SD03……………33</p> <p>第15図 ST01 遺構図・遺物図……………34</p> <p>第16図 ST02 遺構図・遺物図……………35</p> <p>第17図 SD01 遺構図……………36</p> <p>第18図 SD01 遺物図……………37</p> <p>第19図 SK03・05・06 遺構図・遺物図……………39</p> <p>第20図 SK25～27 遺構図・遺物図……………40</p> <p>第21図 SK28 遺構図・遺物図……………41</p> <p>第22図 SK30・31 遺構図・遺物図……………42</p> <p>第23図 SK 遺構図(その他)……………43</p> <p>第24図 ①区 遺構外出土遺物図(1)……………45</p> <p>第25図 ①区 遺構外出土遺物図(2)……………46</p> <p>第26図 ②・③区 遺構外遺物図……………47</p> <p>第27図 年度別調査区……………49</p> <p>第28図 西一里塚遺跡群 遺跡範囲図……………50</p> <p>第29図 確認調査トレンチ配置図(縮尺不同)……………51</p> <p>第30図 層序模式図……………54</p> <p>第31図 ①～③区の層序……………56</p> <p>第32図 ③-2区 第1調査面(第2水田) 遺構図……………57</p> <p>第33図 ③-2区 第2調査面(第3水田) 遺構図・遺物図……………59</p> <p>第34図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(1)……………60</p> <p>第35図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(2)……………61</p> <p>第36図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(3)……………62</p> <p>第37図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(4)……………63</p> <p>第38図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(5)……………64</p> <p>第39図 SB01 遺構図・遺物図……………66</p> <p>第40図 SB02 遺構図・遺物図……………67</p>	<p>第41図 SB03 遺構図・遺物図……………68</p> <p>第42図 SB05 遺構図・遺物図……………69</p> <p>第43図 SB06 遺構図……………70</p> <p>第44図 SB06 遺物図……………71</p> <p>第45図 SB08 遺構図・遺物図……………72</p> <p>第46図 ST01 遺構図……………73</p> <p>第47図 SM01 遺構図・遺物図……………74</p> <p>第48図 SM02 遺構図……………75</p> <p>第49図 SM03 遺構図・遺物図……………76</p> <p>第50図 SM04 遺構図・遺物図……………78</p> <p>第51図 SM05 遺構図・遺物図……………79</p> <p>第52図 SM06 遺構図……………80</p> <p>第53図 SM08 遺構図・遺物図……………81</p> <p>第54図 SM09 遺構図・遺物図……………82</p> <p>第55図 SM14 遺構図・遺物図……………82</p> <p>第56図 SM14 遺物図(2)……………83</p> <p>第57図 SM18(左)・19(右)遺構図……………84</p> <p>第58図 SM20・21 遺構図・遺物図……………85</p> <p>第59図 SM22・23 遺構図・遺物図……………87</p> <p>第60図 SM26～29 遺構図……………88</p> <p>第61図 SM07 遺構図・遺物図……………90</p> <p>第62図 SM07 遺物図(2)……………91</p> <p>第63図 SK47 遺構図・遺物図……………92</p> <p>第64図 SK08 遺構図・遺物図……………93</p> <p>第65図 SD15 上面土器棺群……………95</p> <p>第66図 SD15 上面土器棺(1)……………96</p> <p>第67図 SD15 上面土器棺(2)……………97</p> <p>第68図 SD15 上面土器棺(3)……………98</p> <p>第69図 SD01～05・07・08・82 遺構図……………100</p> <p>第70図 SD01・05 遺物図……………101</p> <p>第71図 SD14 遺構図……………101</p> <p>第72図 SD15・41 遺構図……………103</p> <p>第73図 SD15 遺物図……………104</p> <p>第74図 SD41 遺物図……………104</p> <p>第75図 SD36 遺構図・遺物図……………105</p> <p>第76図 ②-2区 SD37 遺構図……………106</p> <p>第77図 SD37 遺物図……………107</p> <p>第78図 SD38 遺構図(1)……………108</p> <p>第79図 SD38 遺構図(2)……………109</p> <p>第80図 SD38 遺物図(1)……………110</p> <p>第81図 SD38 遺物図(2)……………111</p> <p>第82図 SD38 遺物図(3)……………112</p> <p>第83図 SD38 遺物図(4)……………113</p>
---	--

第84図	SD38 遺物図 (5)	114
第85図	SD38 遺物図 (6)	115
第86図	SD36～39 遺構図	116
第87図	SD39 遺物図	117
第88図	SD40 遺構図	118
第89図	SD40 遺物図 (1)	119
第90図	SD40 遺物図 (2)	120
第91図	SD44・45・48・50 遺構図	121
第92図	SD49 遺構図 SD44・50 遺物図	122
第93図	SD81 遺構図	123
第94図	①区 SK 遺構図	124
第95図	①・②区 SK 遺構図	125
第96図	②・③区 SK 遺構図	126
第97図	③区 SK 遺構図	127
第98図	SK07・48・49・63・92 遺物図	128
第99図	SQ01 遺物出土図	130
第100図	SQ02 遺物出土図・遺物図	131
第101図	SQ03 遺物出土図	132
第102図	SQ03 遺物図 (1)	133
第103図	SQ03 遺物図 (2)	134
第104図	①～③区 遺構外遺物図 (1)	137
第105図	①～③区 遺構外遺物図 (2)	138
第106図	①～③区 遺構外遺物図 (3)	139
第107図	①～③区 遺構外遺物図 (4)	140
第108図	①～③区 遺構外遺物図 (5)	141
第109図	①～③区 遺構外遺物図 (6)	142
第110図	①～③区 遺構外遺物図 (7)	143
第111図	①～③区 遺構外遺物図 (8)	144
第112図	①～③区 遺構外遺物図 (9)	145
第113図	①～③区 遺構外遺物図 (10)	145
第114図	④区の層序	148
第115図	④-2区 第1調査面 (第1水田) 遺構図・遺物図	149
第116図	④区 第2調査面 (第2水田) 遺構図 (1)	152
第117図	④区 第2水田 遺構図 (2)	153
第118図	④区 第2水田 遺構図 (3)	154
第119図	④区 第2水田 遺物図	155
第120図	④区 第3調査面 (第3水田) 遺構図 (1)	157
第121図	④区 第3水田 遺構図 (2)	158
第122図	④-1区 第3水田 遺物図	159
第123図	④区 第4調査面 遺構配置図	160
第124図	④区 第4調査面 遺構配置拡大図	161
第125図	SB04 遺構図	162

第126図	SB04 遺物図	163
第127図	SM10・11・17 遺構図	164
第128図	SM10・17 遺物図	165
第129図	SM12 遺構図	166
第130図	SM13・15・16 遺構図・遺物図	167
第131図	SD20～24 遺構図	169
第132図	SD31～35 遺構図	170
第133図	SD22～24・30～33 遺物図	171
第134図	SD34・35 遺物図	172
第135図	SD61～64 遺構図・遺物図	173
第136図	④区 SK 遺構図	174
第137図	④区 遺構外遺物図	175
第138図	⑤区の層序	178
第139図	⑤区 第1調査面 (水田A) 遺構図 (1)	180
第140図	⑤区 水田A 遺構図 (2)	181
第141図	⑤区 水田A 遺構図 (3)	182
第142図	⑤区 水田A 遺物図	183
第143図	⑤区 第2調査面 (水田B) 遺構図 (1)	185
第144図	⑤区 水田B 遺構図 (2)	186
第145図	⑤区 第3調査面 (水田C) 遺構図 (1)	189
第146図	⑤区 水田C 遺構図 (2)	190
第147図	⑤区 水田C 遺構図 (3)	191
第148図	⑤区 水田C 遺構図 (4)	192
第149図	⑤区 水田C 遺構図 (5)	193
第150図	⑤区 水田C 遺物図	194
第151図	⑤区 第4調査面 遺構配置図	195
第152図	SD65 遺構図 (1)	197
第153図	SD65 遺構図 (2)	198
第154図	SD65 遺物図 (1)	199
第155図	SD65 遺物図 (2)	200
第156図	SD65 遺物図 (3)	201
第157図	SD65 遺物図 (4)	202
第158図	SD65 遺物図 (5)	203
第159図	SD65 遺物図 (6)	204
第160図	SD65 遺物図 (7)	205
第161図	SD65 遺物図 (8)	206
第162図	SD65 遺物図 (9)	207
第163図	SD68～74 遺構図	209
第164図	SD70～74 遺物図	210
第165図	SK101 遺構図	211
第166図	SK101 遺物図 (1)	212
第167図	SK101 遺物図 (2)	213

第168図	SK101 遺物図(3)	214
第169図	SK101 遺物図(4)	215
第170図	SK101 遺物図(5)	216
第171図	SK101 遺物図(6)	217
第172図	⑥・⑦区の層序	220
第173図	⑥-2区 第1調査面 遺構配置図	222
第174図	SD52・53 遺構図	223
第175図	⑥区 第2調査面 遺構配置図	224
第176図	⑥区 第2調査面 遺構配置拡大図	225
第177図	SB09・11・14 遺構図	226
第178図	SB09 遺物図(1)	227
第179図	SB09 遺物図(2)	228
第180図	SB10 遺構図	229
第181図	SB10 遺物図	230
第182図	SB11 遺物図	231
第183図	SB12 遺構図・遺物図	232
第184図	SB13 遺構図・遺物図	232
第185図	SD46・51 遺構図	234
第186図	SD46・51 遺物図	235

第187図	⑥区低地(砂層)全体図	236
第188図	⑥区 SK 遺構図	237
第189図	⑥区低地 遺物図(1) [黒色土層・ 泥炭層]	239
第190図	⑥区低地 遺物図(2) [黒色土層・ 泥炭層]	241
第191図	⑥区低地 遺物図(3) [砂層]	242
第192図	⑥-1区 遺構外遺物図(1)	243
第193図	⑥-1区 遺構外遺物図(2)	244
第194図	弥生時代の遺構配置図・模式図	246
第195図	人形土器の出土地	249
第196図	木製品(1) [農具]	253
第197図	木製品(2) [建築部材]	254
第198図	木製品(3) [桶ほか]	255
第199図	木製品(4) [古代以降]	256
第200図	水田の変遷(1)	259
第201図	水田の変遷(2)	260
第202図	土壌試料採取地点図(1)	266
第203図	土壌試料採取地点図(2)	267

挿 表 目 次

第1表	文化財保護法手続き	3
第2表	調査体制	3
第3表	周辺遺跡一覧(1)	20
第4表	周辺遺跡一覧(2)	21
第5表	周辺遺跡一覧(3)	22
第6表	SK一覧表	44
第7表	西一里塚遺跡群出土の 人骨の上顎歯の計測値	91

第8表	西一里塚遺跡群出土の 人骨の下顎歯の計測値	91
第9表	①～③区 SK 一覧表	129
第10表	④区 SK 一覧表	176
第11表	⑥区 SK 一覧表	238

写 真 図 版

濁り遺跡・久保田遺跡…………… PL1～PL10

西一里塚遺跡群…………… PL11～PL90

付 表

遺構一覧表・遺物観察表……………279

第1章 調査に至る経緯

第1節 事業の概要と保護協議

1. 中部横断自動車道の建設計画

中部横断自動車道は、静岡県静岡市を起点として、山梨県を經由しながら長野県小諸市に至る延長約132kmの高速自動車国道である。これにより新東名高速道路と上信越自動車道が接続され、日本海側地域と太平洋側地域が結ばれることになる。長野県内分は約45kmに及び、長野県小諸市の佐久小諸ジャンクション（以下、JCTと略称）で上信越自動車道と連結する。

中部横断自動車道事業の経緯については、平成24年度刊行予定の『鎌田原遺跡・和田原遺跡群・近津遺跡群－中部横断自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』で詳しく記述することになるので、本書では概略を述べるにとどめる。

長野県については、平成3年に長野県八千穂村（現佐久穂町）から佐久市までの約23km区間の基本計画が決定され、平成8年に整備計画が決定し、佐久南インターチェンジ（以下、ICと略称）～佐久小諸JCT間の施行命令が日本道路公団に出された。

平成16年には整備計画変更により八千穂IC（仮称）～佐久小諸JCT間は新直轄方式で建設されることが決定した。新直轄方式とは、国が4分の3、地方が4分の1の負担により、国土交通大臣が高速自動車国道の整備を行うものである。開通後は無料の高速自動車国道となる。

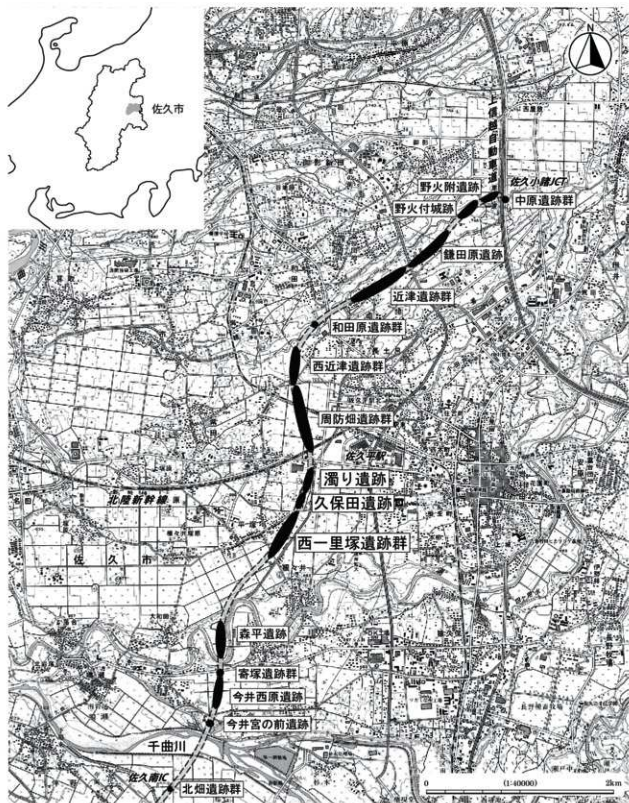
上信越自動車道と連結するJCTについては佐久小諸JCTとの名称が正式決定され、佐久南IC～佐久小諸JCT間の7.8kmについては平成23年3月26日に供用開始となっている。

2. 埋蔵文化財の保護協議

長野県教育委員会（以下、県教委と略称）では平成3年の基本計画決定を受けて、中部横断自動車道の建設予定地の埋蔵文化財について、小諸市から八千穂村（現佐久穂町）間の子想されるルートの幅1km前後を現地踏査する遺跡詳細分布調査を平成6年度に実施した。その後も事業の進捗状況にあわせ、分布調査や試掘調査を行ってきている。本書掲載遺跡については、平成15年度の試掘調査で西一里塚遺跡群隣接地が調査対象となり、遺跡範囲拡大が行われた。また平成17年度には、濁り遺跡隣接地の試掘調査が行われ、濁り遺跡の範囲拡大と新発見の久保田遺跡の埋蔵文化財包蔵地への新規登載がなされた。

佐久南IC～佐久小諸JCT内の埋蔵文化財については、平成11年度に日本道路公団と文化庁、日本道路公団と長野県教育委員会（以下、県教委と略称）の間で保護協議が行われ、文化庁の勧告により記録保存が決定した。そして日本道路公団の委託を受けた県教委から（財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略称）に再委託され、平成13年度から佐久南IC～佐久小諸JCTの遺跡の発掘調査を開始した。

平成16年には、日本道路公団、県教委、埋文センターの3者で、中部横断自動車道（佐久～佐久南）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定を締結した。また同年度からは埋文センターと日本道路



第1図 中部横断道遺跡位置図 (佐久小諸JCT~佐久南IC間)

太字は本書掲載遺跡

公団とが契約を結ぶことに変更することとなった。平成16年には国土交通省による新直轄方式に整備計画が変更されることになった。整備計画変更に伴い、平成18年度には同年4月18日付で国土交通省、県教委、長野県文化振興事業団の3者による協定書が締結され、同年からは国土交通省関東地方整備局との契約に変更された。協定書はその後、平成22年3月31日付で第一回変更契約がなされた。

整備計画は変更されたが、佐久小諸JTC～料金所（有料区間と無料区間の境目）間は、平成17年10月1日をもって民営化され、新たに日本道路公団の権利義務を引き継いだ東日本高速道路株式会社の事業区間（上信越自動車道分）として残された。この区間に所在する小諸市の中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡の3遺跡については東日本高速道路株式会社事業分として整理を進め、平成21年3月に報告書を刊行した（埋文センター2009）。

3. 文化財保護法手続き

本書掲載遺跡の文化財保護法手続きは第1表のとおりである。

	発掘届		県教委指示		発見届		文化財認定	
	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付
濁り遺跡 (H18)	18長埋第1-8号	H18.8.7	18教文第4-20号	H18.9.5	18長埋第2-14号	H18.11.15	18教文第6-97号	H18.12.5
濁り遺跡 (H19)	18長埋第1-21号	H19.3.14	19教文第4-39号	H19.3.26	19長埋第9-2号	H19.5.24	19教文第6-31号	H19.6.6
久保田遺跡 (H18)	18長埋第1-7号	H18.8.7	18教文第4-19号	H18.9.5	18長埋第2-15号	H18.11.15	18教文第6-98号	H18.12.5
西一里塚遺跡群 (H16)	16長埋第12号	H16.4.1	16教文第4-11号	H16.4.9	16長埋第135号	H16.12.24	16教文第6-116号	H17.1.17
西一里塚遺跡群 (H17)	17長埋第12-6号	H17.4.1	17教文第4-6号	H17.4.11	17長埋第13-16号	H17.12.28	17長埋第6-122号	H18.1.12
西一里塚遺跡群 (H18)	17長埋第12-27号	H18.3.23	18教文第4-8号	H18.4.6	18長埋第2-6号	H18.9.15	18長埋第6-63号	H18.10.3

第1表 文化財保護法手続き

第2節 発掘作業と整理作業の体制

本書掲載の3遺跡（濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群）に関する、平成16・17・18・19・21・22・23年度までの調査・整理体制は第2表に示した。

年度	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成21年	平成22年	平成23年
所長	小沢将夫	仁科松男	仁科松男	仁科松男	仁科松男	窪田久雄	窪田久雄
副所長	藤岡俊文	根岸誠司	根岸誠司	根岸誠司	阿部精一	阿部精一	阿部精一
管理部長補佐	上原 貞	上原 貞					
管理課長							窪田秀樹
管理係長			山崎勇治	山崎勇治	窪田秀樹	窪田秀樹	西澤宏明
調査部長	市澤英利	市澤英利	市澤英利	平林 彰	平林 彰	大竹憲昭	大竹憲昭
担当課長	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘	上田典男	寺内隆夫	大竹憲昭	上田典男	岡村秀雄
担当調査研究員 (担当遺跡)	上田 真 白沢勝彦 寺内隆夫 戸矢崎通明 櫻井秀雄 (西一里塚)	櫻井秀雄 白沢勝彦 寺内隆夫 (西一里塚)	櫻井秀雄 土屋哲樹 (西一里塚) 櫻井秀雄 (濁り・久保田)	川崎保 (濁り)	櫻井秀雄 (濁り・久保田・西一里塚)	櫻井秀雄 (濁り・久保田・西一里塚)	櫻井秀雄 (濁り・久保田・西一里塚)

第2表 調査体制

第2章 調査の経過

第1節 発掘作業の経過

1. 発掘作業の方法

埋文センターでは調査の統一を図るため、「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査もこれに準じた。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は以下のとおりである。

- | | |
|------------------------|----------|
| ○濁り遺跡（にごりいせき） | 遺跡記号 DIO |
| ○久保田遺跡（くぼたいせき） | 遺跡記号 DKU |
| ○西一里塚遺跡群（にしいちりづかいせきぐん） | 遺跡記号 DNI |

遺跡記号は、記録の便宜を図るために大文字アルファベット3文字で表記する埋文センター独自のものである。頭文字の「D」は長野県内を9地区に分割したうちの佐久地区を示し、2番目・3番目の文字は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。各種台帳や遺物の注記には、この記号を使用している。

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、遺構の形状及び特徴で区分した。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては整理段階で新たに付けている。

今回の発掘調査で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

S B：おおむね、一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み。

【**竪穴住居跡、竪穴状遺構**】

S K：単独もしくは他の掘り込みとの関係が認められないS Bよりも平面形が小さな掘り込み。

【**土坑、井戸**】

S T：S Bよりも平面形が小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配列されるもの。

【**掘立柱建物跡**】

S D：帯状の掘り込み。【**溝跡、自然流路跡**】

S Q：遺物が集中する箇所

S C：連続する固い面や帯状の盛り土やS Dに挟まれる帯状の面。【**畦、畝**】

S L：複数の帯状の掘り込みや盛り上がり規則的に配列し、ひとつの面を形成しているもの。

【**畑跡、水田跡（水田区画）**】

S X：その他、性格不明遺構。

なお、S B内の柱穴・貯蔵穴等やS Tを構成する個々の掘り込みにはPitを付した。

(3) 調査区（グリッド）の設定と呼称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X = 0.0000、Y = 0.0000）を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した（第2、3図）。

大々地区は、200 × 200 mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を40 × 40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を8 × 8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、大地区を2 × 2 mの400区画に分割したもので、西から東へA～Tのアルファベット、北から南へ1～20のアラビア数字を組み合わせて番号を与えるものだが、今回の調査では用いなかった。

現場におけるグリッド設置は、業者委託で実施した。標高は公共水準点を利用し、ベンチマークを設定した。

グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書中でもそうした表記になっている場合がある。

座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、西一里塚遺跡群は日本測地系の座標値を用いたが、濁り遺跡と久保田遺跡では世界測地系を用いた。そのため本書では遺跡により異なる座標値で表記されていることにご留意願いたい。

(4) 遺構の発掘

西一里塚遺跡群では、遺跡の性格を把握するために本格調査にはいる前段階で、確認調査として重機によるトレンチを入れた。1面から4面までの複数面にわたる調査を行った。湧水対策も兼ねて調査区際に掘削したトレンチで土層観察をし、調査面を決定した。各調査面までの間層は重機で掘り下げ、その後、人力による遺構検出作業を実施したが、間層が薄い場合には重機を用いずに人力で掘り下げた調査区もある。出土した遺物については包含された層位名またはグリッド名あるいは遺構名を付して取り上げた。検出された遺構の調査には、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、重複関係の新しい遺構から古い遺構へ、という流れで行った。遺構はそれぞれに十字方向あるいは単一の方向で土層を観察し、記録した。掘り上がった状態で写真撮影と測量の記録を行ったが、遺物の出土状況に特徴のあるものなどは、調査途中の状況も、写真と測量の記録を行った。また竪穴住居跡では、掘り上がった状態で写真撮影と測量の記録を行った後に床面下（掘り方）の状況を確認して調査を終了した。

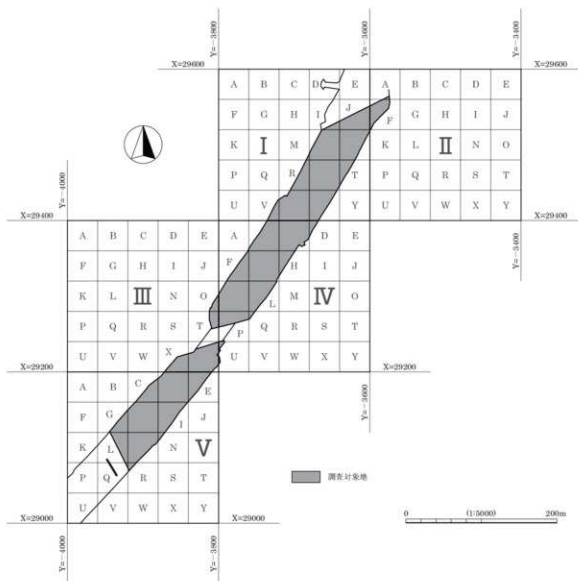
水田跡については、被覆砂層の中位までを重機で剥き取り、その後、人力により砂層を除去し、畦畔および水田面の検出を行った。

濁り遺跡・久保田遺跡では、確認調査として重機によるトレンチを入れ、遺構が確認された範囲を中心に面的に広げる部分を決定した。遺構の検出以降の工程は西一里塚遺跡群と同じである。

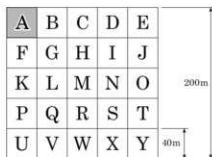
(5) 測量と写真

遺構の測量は、調査研究員及びその指導のもとに発掘補助員が行った。西一里塚遺跡群においては前記の測量基準杭を基準とする簡易遺り方測量を基本としたが、業者委託の単点測量と空中写真測量も併用した。遺構測量は、中地区（8 m × 8 m）単位に区切った割り付け図を基本としたが、必要に応じて住居跡などは個別の遺構図を作成した。遺構測量の縮尺は1：20を基本としたが、水田跡や溝跡などは1：40、遺物集中など微細な図については1：10で実測した。濁り遺跡・久保田遺跡では、面的に調査した範囲が狭いことと遺構数がそれほど多くなかったため、すべて業者委託の単点測量で遺構図を作成した。

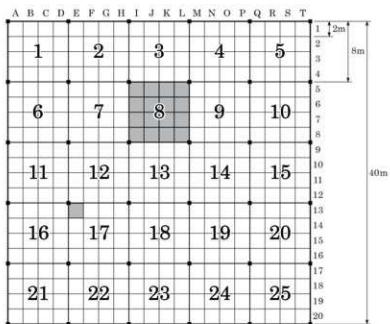
発掘中の遺構等の撮影は、マミヤRB・ペンタックス（6 × 7）とニコンFM2（35mm）を併用し、と



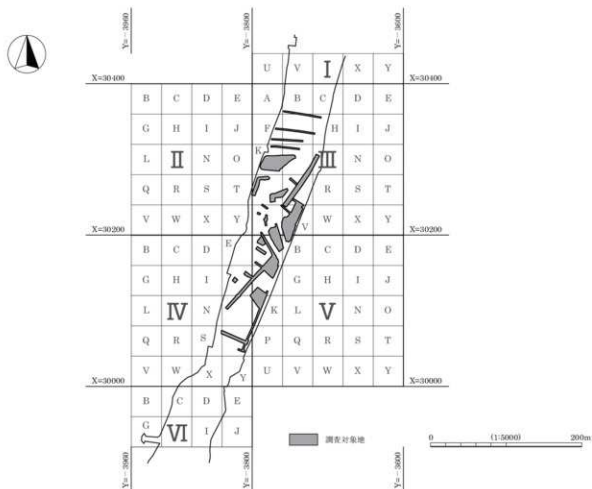
大々地区(200m) : I・II・III・IV…
 大地区(40m) : A・B…R…



中地区(8m) IVA8
 小地区(2m) VIIAE13 ▶



第2図 西一里塚遺跡群 グリッド設定図



第3図 瀧り遺跡・久保田遺跡 グリッド設定図

もにモノクロネガフィルム（ネオパン 100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム 100F）で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼き付けは業者委託とした。また、西一里塚遺跡群では調査区の遺構全体写真を業者委託により実施した。

(6) 遺跡の公開

西一里塚遺跡群では、現地説明会を発掘調査期間中に3回実施した。第1回目は平成16年11月20日に開催し、62名の参加者を見た。第2回目は平成17年11月19日に112名の参加者を得て実施した。

第3回目は平成18年9月2日に開き、112名の参加者を得た。いずれも地元の方の参加が多く、関心の高さを実感した。

展示については、埋文センターが長野県立歴史館（以下、歴史館と略称）及び伊那文化会館にて開催している速報展にパネルや遺物などを展示した（長野県埋蔵文化財センター速報展「長野県の遺跡発掘2004・2006・2007・2010」）。「長野県の遺跡発掘2004」関連行事として4月10日に開催された遺跡報告会で調査概要を発表した。

また浅間縄文ミュージアム（御代田町）で開催された企画展「原始の顔 古代のよそおい」（平成18年1月～2月）、「金・銀・ジュエリーの語る古代展」（平成23年4月～8月）には人形土器・ガラス玉が展示された。地元の方に見ていただける良い機会となった。

考古学研究者に向けては、平成18年6月18日に開かれた長野県考古学会総会の遺跡報告会において遺跡の概要を発表した。

濁り遺跡・久保田遺跡については、調査期間が短かったことや検出遺構数・出土遺物量が少なかったことなどから現地説明会は実施しなかった。



平成 16 年度現地説明会



平成 17 年度現地説明会



平成 18 年度現地説明会



平成 18 年度現地説明会

2. 日誌抄

(1) 濁り遺跡・久保田遺跡

① 平成 18 年度

平成 18 年 9 月 20 日 重機によるトレンチ掘削を開始する。
 9 月 25 日 補助員従事を開始する。
 10 月 10 日 面的に調査する範囲を決定し、②区の表土剥ぎから始める。
 10 月 20 日 ①区の表土剥ぎにはいる。
 10 月 26 日 ②区の調査を終了する。
 10 月 31 日 ③区の表土剥ぎにはいる。

11 月 6 日 ③区の調査を終了する。遺構はなし。
 11 月 9 日 業者委託の単点測量を実施する。
 11 月 14 日 ①区の調査を終了する。
 12 月 25 日 基礎整理作業を開始する。
 平成 19 年 3 月 9 日 本製品について山田昌久首都大学東京教授による指導を受ける。
 3 月 30 日 基礎整理作業を終了する。

② 平成 19 年度

平成 19 年 4 月 18 日 調査補助員従事を開始する。重機によるトレンチ掘削をはじめめる。
 4 月 19 日 土層断面精査を開始する。

5 月 24 日 調査を終了する。
 12 月 25 日 基礎整理作業を開始する。
 平成 20 年 3 月 31 日 基礎整理作業を終了する。

(2) 西一里塚遺跡群

① 平成 16 年度

平成 16 年 4 月 15 日 用地境の仮駐車の造成工事を行う。
 8 月 9 日 調査研究員 1 名により確認調査を開始する。
 8 月 24 日 確認調査を終了する。
 8 月 25 日 重機による表土剥ぎを開始する。
 9 月 28 日 調査補助員従事を開始する。
 11 月 5 日 県遺跡調査指導委員会の視察。

11 月 20 日 現地説明会開催。参加者 62 名。
 11 月 30 日 空中写真撮影を実施する。
 12 月 20 日 調査を終了する。
 12 月 21 日 基礎整理作業を開始する。
 平成 17 年 3 月 31 日 基礎整理を終了する。

② 平成 17 年度

平成 17 年 4 月 25 日 重機による表土剥ぎを開始する。

10 月 7 日 ④区の表土剥ぎを開始する。

5月10日	調査補助員従事を開始する。 ②-2区から検出作業をはじめ。	10月28日	⑦-1区の表土剥ぎを開始する。
5月23日	人形土器の胴部分がSD37より出土する。	11月19日	午前中、現地説明会を実施する。 参加者112名。
6月2日	③-2区の検出作業を開始する。	12月7日	第2回目の空中写真撮影を実施する。
7月5日	①-3区の調査にはいる。	12月21日	調査を終了する。
7月14日	補助員を増員する。	12月26日	基礎整理作業を開始する。
7月21日	①-4区の検出作業を始める。	平成18年2月28日	次年度調査区のうち①-5区、③区の表土剥ぎを先行して開始する。
8月11日	第1回目の空中写真撮影を実施する。	3月14日	今年度の表土剥ぎは終了する。
8月22日	本日より新発見の森平遺跡の表土剥ぎにも対応することとなる。	3月27日	工事用道路敷設のため、⑦-2区の表土剥ぎ及び検出を行い、遺構がないことを確認する。
9月15日	森平遺跡の調査のため、本日で本遺跡群の調査は中断することとなる。	3月31日	基礎整理作業を終了する。
10月4日	本日から西一里塚遺跡群の調査再開する。 森平遺跡との並行調査となる。		
③ 平成18年度			
平成18年4月18日	重機の稼働を開始する。③区の排水用トレンチの掘削をはじめ。	7月13日	③区水田B調査を終了する。
4月25日	調査補助員の従事を開始する。①-5区の検出作業を行う。	7月19日	前夜からの多量の降雨により調査区が水没する。その後の降雨や排水作業のため、24日まで調査はできず。
4月28日	③区では水田面が複数存在することが判明する。	7月25日	③区水田Cの表土剥ぎを開始する。
5月9日	③区水田Aの表土剥ぎを開始する。	8月3日	第1回目の空中撮影を実施する。
5月11日	④-2区の表土剥ぎを開始する。	8月8日	④-2区第3調査面を終了する。
5月22日	①-5区の調査を終了する。	9月2日	現地説明会開催（参加者112名）。
5月30日	⑦-2区にトレンチを入れたが遺構はなく、調査を終了する。	9月4日	第2回目の空中撮影を実施する。
6月16日	③区水田Aの調査を終了する。	9月11日	③区第4調査面の調査を終了する。
6月19日	③区水田Bの検出作業を開始する。	12月25日	基礎整理作業を開始する。
6月29日	④-2区第2水田調査を終了する。	平成19年3月9日	木製品について山田昌久首都大学東京教授による指導を受ける。
		3月31日	基礎整理作業を終了する。

第2節 整理作業の経過

1. 整理作業の方法

(1) 基礎整理作業

発掘調査年度に基礎整理作業として図面整理、写真整理、遺物洗浄及び注記等の作業を行った。

遺構図面類は原因を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、竅穴住居跡など一部の個別図についてはトレースのための2次原因作成まで行った。遺構写真については、モノクロ写真はバタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムについては、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納している。写真の注記は、35mmカラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに、遺跡記号・地区・撮影内容・撮影方向を記している。遺物は、洗浄・注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。また木製品についてはシーラーパックの状態で本格整理が始まるまでの間は収納することにした。金属製品については、歴史館にてレントゲン透過写真撮影を実施し、本格整理作業に備えた。

(2) 本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、調査成果を公表できるように整備する作業を平成21～23年度に実施した。

遺構図面類は、基礎整理作業で作成した修正図や2次原因をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図(全体図)などを作成し、IllustratorCS3ソフトを用いてデジタルトレースで作成した。

遺物は、土器・土製品、石器・石製品、木製品、金属製品、その他の遺物に大別して整理作業を進めた。土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。出土遺物は遺構単位に観察し、全体像を把握した後に遺構内外の出土遺物ともできる限り図化・掲載した。実測は手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。一部については業者委託で行った。また必要に応じて拓本も行った。トレースはすべて製図ペンを用いた手作業で埋文センターにおいて実施した。掲載した土器・土製品については、観察表を作成した。

石器・石製品は分類を行いながら、報告書掲載遺物を抽出した。実測はすべて手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースはすべて製図ペンを用いた手作業で埋文センターにおいて実施した。掲載した石器・石製品については、観察表を作成した。

木製品については、シーラーバックから取り出し、再洗浄した後に分類し、報告書掲載遺物を抽出した。分類にあたっては首都大学東京の山田昌久教授のご指導を賜った。木製品は4段階に分類した。1段階は未加工の自然木および伐採あるいは分割されただけの状態のものがあたる。2段階は加工を施した芯持丸木材や角材、板材などがあたる。3段階は整形加工された段階で、柱や成形された板などが該当する。2・3段階には未製品も含める。4段階は製品として完成された状態のものである。杭については先端に加工がなされたものや表面を成形するものを3段階に、成形されていないものを2段階に比定した。報告書の掲載については、3～4段階を最優先としたが、佐久地方において木製品の出土例は僅少であることから、2段階についても可能な限り図示を行った。写真のみを掲載したものもある。なお石川条里遺跡での分類と対比するならば、石川条里遺跡のAランクが4段階、Bランクが3段階、Cランクが2段階、Dランクが1段階におおよそ対応する(埋文センター1997)。実測は手実測により、1:1縮尺で耐水性のあるマイラー用紙に鉛筆で図化した。一部については業者委託でデジタルトレースまで行った。トレースは業者委託分を除き、埋文センターで、IllustratorCS3ソフトを用いてデジタルトレースで作成した。したがって木製品については、手トレースは行っていない。

金属製品のうち、鉄鋼・鉄剣・鑿状鉄製品に関しては保存状態が悪く現状のままでは図化することが難しいため、業者委託の保存処理を実施した後に図化を行った。図化は埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で行い、製図ペンで手作業にてトレースした。銭貨については拓本を行った。

その他の遺物には、骨角器1点があるが、手作業で実測・トレースした。

トレースした遺物図は、スキャンし、デジタルトレースした遺構図とあわせてIllustratorCS3ソフトを用いてデジタルデータ化して図版を作成した。

遺物写真は、業者委託により実施した。撮影には巻頭カラー図版用にカラーリバーサルフィルム、モノクロ写真図版用にはモノクロフィルム(ともに6×7カメラ使用)を使用した。テスト撮影を兼ねて一眼レフデジタルカメラでも撮影した。

(3) 報告書の作成

本書では、濁り遺跡と久保田遺跡については、一連の遺跡ととらえられるため一括して第4章にて報告する。西一里塚遺跡群については、第5章にて報告するが、調査区は長さ約580mにもおよび、また各調査区により調査面の数も異なるため、①～③区、④区、⑤区、⑥・⑦区と4つに大別してそれぞれを行う。また溝跡については、調査区を越えたつながりが見つからないものもあることから、調査区ごとに遺構番号を付けている。

写真図版については、遺構は遺構種(堅穴住居跡、周溝墓、溝跡、土坑等)ごと、調査区ごとに掲載する。遺物については遺物種(土器、石器、木製品、金属製品等)ごとに掲載するため、本文図版の掲載順と異なるところがある。

(4) 資料の取納

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、土器・土製品、木製品は出土遺構・地区別に、石器・石製品は器種別にテンパコに取納するとともに、遺物取納台帳に登録した。

実測図面は、手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面取納台帳に登録し、図面ファイル等に取納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真取納台帳に登録し、アルバム（ファイル）に取納した。

(5) 報道公開

本格整理作業中での報道公開としては、整理作業によりほぼ全体がわかる人形土器（発表時の名称は土偶形容器であった。名称を変更した経緯は第5章を参照）が復元されたことを受けて、平成22年2月19日に記者発表を行い、5社（共同通信・朝日新聞・信濃毎日新聞・読売新聞・中日新聞）の取材を受けた。

2. 日誌抄

濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群の整理作業は平成21～23年度に実施した。

整理作業は3遺跡あわせて行ったため、整理日誌抄はまとめて記す。

① 平成21年度

平成21年4月1日	整理作業を開始する。	12月11日	土器復元を終了する。
4月13日	整理補助員開始。土器分類・接合からはじめる。	12月17日	濁り遺跡・久保田遺跡の土器接合終了する。復元・台帳作成はいる。
4月21日	土器復元・実測も開始する。	平成22年1月5日	土器の実測を業者へ委託する。
6月22日	遺構図のデジタルレース開始する。	2月19日	人形土器について報道公開を行う。
7月8日	石器実測を開始する。	2月22日	木製品の再洗浄をはじめ。
11月24日	土器接合・分類が終了する。	3月12日	整理補助員仕事を終了する。
12月1日	濁り遺跡・久保田遺跡の整理作業開始する。	3月31日	整理作業を終了する。

② 平成22年度

平成22年4月1日	本格整理作業を開始する。	10月8日	木製品の実測を業者へ委託する。
4月12日	整理補助員の仕事を開始する。	10月29日	石器の分類・選別作業を開始する。
6月15日	木製品の整理を始める。 台帳チェック・整理カード作成。	12月2日	石器実測を開始する。
7月20・21日	首都大学東京山田昌久教授に 木製品整理の指導を受ける。	平成23年1月11日	木製品実測を開始する。
		3月1日	実測委託木製品を業者より搬出する。
		3月31日	本年度の整理作業を終了する。

③ 平成23年度

平成23年4月1日	本格整理作業を開始する。	10月14日	設楽博己東京大学大学院教授から 人形土器の指導を受ける。 (12月2日にも来訪)
4月5日	整理補助員の仕事を開始する。	11月29日	原山智信州大学教授から石器石材鑑定 の指導を受ける。
6月16・17日	木製品の樹種同定等の科学分析の 科学分析の試料採取を行う。	12月14～16日	人形土器の資料調査を行う。 (千葉県、群馬県)
6月23日	鉄製品の保存処理を業者へ委託する。	平成24年1月13日	保存処理委託鉄製品の納品。
7月20日	遺物写真撮影を開始する。(～8月17日)	1月25日	第2回目の遺物写真撮影を行う。
9月14日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美 総研大准教授による出土骨董の鑑定 を受ける。		
1月27日	印刷、製本業者決定。		
3月21日	報告書発行。		

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

通称佐久平と呼ばれる一帯は、北に浅間山、東に荒船山や八風山などの関東山地（佐久山塊）、南に蓼科山・八ヶ岳の山々に囲まれた標高700m前後の高原性盆地である（註1）。佐久平の中央部ではこれらの山々から流れ出た湯川・濁川・滑津川・片貝川などの中小河川を集め、川上村を源流とし南から北へ流下する千曲川に合流する。

佐久平の地形は千曲川の右岸と左岸で大きく異なる。千曲川右岸の佐久平北部では浅間山の火山活動により形成された地形が広がる。浅間山は、黒斑山・仏岩・前掛山の3つの火山の集合からなる。数万年前に火山活動を開始した浅間山のもっとも古い山体である黒斑山が約23,000年前に大規模な水蒸気爆発した。その際に黒斑山の東半分が大規模な山体崩壊を起こし、土石なだれとなって群馬県北麓と長野県側の南麓を襲った。このうち長野県側のものは塚原土石なだれと呼ばれ、その残丘である「流れ山」が佐久市塚原地籍を中心に点在している。

その後、約13,000年前には大規模な噴火によって軽石流とも呼ばれる火砕流が浅間山南麓から佐久平を覆った。これが浅間第一軽石流である。約11,000年前にも火砕流が発生し、こちらが浅間第二軽石流である。軽石流堆積物の最大の厚さは30mにも達するという（佐久市志刊行会1988）。これらの軽石流は小河川でも浸食されやすいため浅間南麓から放射状に浸食谷が形成され、「田切り地形」と呼ばれる箱形に切り立った佐久平北部独特の地形を造り出している（註2）。こうした田切りの台地上には畑作地、田切りの底面には水田が広がっている。なお、この田切り地形がみられるのは、おおそ佐久市長土呂地籍の小海線付近までである。その南側では田切り地形は消滅し、湿地帯の低地と微高地、それに流れ山からなる地形が広がっている。千曲川右岸の佐久平北部ではこのような浅間山からの噴出物や土石なだれ、軽石流が厚く堆積しているため、千曲川左岸の佐久平南部よりも一段高い段丘面を形成している。

一方、千曲川左岸の佐久平南部では山地部分と平地部分に分かれる。山地は蓼科・八ヶ岳山麓から筋状に伸びる尾根からなり、それらの谷筋から流れ出る布施川・宮川・中沢川・大沢川・片貝川など小河川は小規模な扇状地を造り出している。平地には千曲川の氾濫により形成された沖積扇状地が広がっている。

本書に掲載する濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群の今回の調査範囲は、千曲川右岸の佐久平北部にあたる濁川右岸の佐久市塚原・平塚・岩村田地籍に所在し、田切り地形が消滅する地域にあたる。塚原土石なだれを基盤とし、その上に軽石流の二次堆積物とみられる層が積み重なっている。また流れ山が最も多くみられる地域である。

第2節 歴史的環境

佐久地方（小諸市・佐久市・軽井沢町・御代田町・立科町・佐久穂町・小海町・北相木村・南相木村・南牧村・川上村）では約2,500箇所の遺跡が残されている。ここでは、濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群の所在する千曲川右岸の佐久平北部を中心として概観する（註3）。

旧石器時代

佐久地方で最も古い遺跡は、西山の蓼科山麓から伸びる尾根上に立地する立科F遺跡との香坂川流域の八風山Ⅱ遺跡、香坂山遺跡であり、約30,000年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。立科F遺跡では黒曜石製の台形棒石器が出土し、放射性炭素年代測定により約31,000年前のものであることが判明した。群馬県境に近い八風山は良質なガラス質安山岩の産地であるが、八風山Ⅱ遺跡ではそのガラス質安山岩を用いた石刃素材のナイフ形石器が出土した。放射性炭素年代測定によれば約32,000年前という数値が出ており、この時期からこの原産地が開発されていたことがわかる。3遺跡ともに始良丹沢火山灰(AT)の下層からの出土である。AT以前の遺跡は、今回の中部横断自動車道建設に伴う発掘調査により確認された西山地域の高尾A遺跡も含めた4遺跡をあげるにすぎないが、AT以降の後期旧石器時代後半期には遺跡が急増する。この時期の遺跡は100箇所を超えるが、南牧村野辺山高原や川上村などの高原地帯に集中する。野辺山高原では、国内ではじめて細石刃文化が発見された国史跡の矢出川遺跡や中野原遺跡、川上村では馬場平遺跡、三沢遺跡、柏垂遺跡などがある。

一方、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけては、ガラス質安山岩の産地に近い香坂川流域の下茂内遺跡では槍先形尖頭器を大量に製作していたことが明らかとなった。また今回の中部横断自動車道建設に伴う発掘調査でも、佐久穂町の満り久保遺跡で槍先形尖頭器、細石刃等が出土している。

これに対して佐久平北部では、旧石器時代の遺跡の存在は皆無といってよい。これは、前節でも記したように、約13,000～11,000年前に噴出した軽石流の堆積により、それ以前の遺跡は厚い軽石流の下に埋没しているか、あるいは押し流されてしまった可能性が高いからである。

縄文時代

佐久地方における縄文時代の集落遺跡の分布をみると佐久平の周縁部に多くみられることがわかる。縄文遺跡は、立科町から佐久市の西山地域、佐久穂町、小海町にかけての蓼科・ハヶ岳山麓、佐久市の東山地域から佐久穂町、小海町、北相木村、南相木村、川上村にかけての関東山地、小諸市、御代田町、軽井沢町の浅間山麓にその分布の主体がある。蓼科・ハヶ岳山麓では、早期の北相木村栃原岩陰遺跡、前期の小海町中原遺跡、中期の川上村大深山遺跡、佐久市(旧望月町)平石遺跡などが、関東山地では中期の吹付遺跡や寄山遺跡、権現平遺跡、和田上遺跡などがある。浅間山麓では標高約700～850mにかけての地帯に縄文遺跡は集中している。これはこの標高地帯が浅間第一伏流水の湧水群地帯にあたることに起因し、主な遺跡としては縄文前期初頭の「塚田式」の標識遺跡である御代田町塚田遺跡、国重要文化財の指定を受けた中期中葉の焼町式土器を多数出土した御代田町川原田遺跡、中期後半の中核的集落跡である小諸市郷土遺跡、遮光器土偶や人面付注口土器といった稀少な遺物が認められる後晩期が主体の小諸市石神遺跡群などがある。またこの地域ではハヶ岳西南麓よりもやや遅れて中期後半から後期に最盛期を迎える。湯川左岸の山地と丘陵地帯にあたる東山地域では吹付遺跡、権現平遺跡、和田上遺跡などがみられる。

これに対して田切り地形が発達する中央平地では大規模な集落遺跡は見られていない。軽石流により厚く覆われたこの地は集落を営むには適していなかったであろう。近年、西近津遺跡群で縄文時代中期の住居跡が2軒発見されたことは注目されるが、やはり集落遺跡の存在は稀少な地域であることは間違いない。このような集落遺跡の僅少さに対して陥し穴の検出事例は着実に増加している。長土呂地籍の長土呂遺跡群、近津遺跡群、聖原遺跡などである。ハヶ岳西南麓でみられるような一遺跡で数十単位の陥し穴が検出される事例はないが、佐久平北部の平坦部は狩猟場となっていたことが推測できよう。

こうしたなか、千曲川右岸、雨川の扇状地にあたる田口地籍の大奈良遺跡では狭い調査区であったにもかかわらず中期の堅穴住居跡17軒等が検出され、約3,500点もの打製石斧も出土している。事例が少な

い平坦部での大規模な集落遺跡であり、注目される。

弥生時代

佐久地方での縄文時代晩期終末から弥生時代中期前半の遺跡は稀少であり、晩期の標識遺跡である小諸市氷遺跡の他、佐久徳町中原遺跡、佐久市（旧臼田町）月夜平遺跡、南牧村矢出川遺跡などで土器が出土するにすぎず、佐久平北部の平坦部では、岩村田地籍の下信濃石遺跡で氷式土器が検出されている程度である。そのなかでは、佐久徳町館遺跡で中期前半に比定できる土偶形容器の出土をみるのが特筆できる。

中期後半になると、佐久平北部に集落が形成されはじめる。北西の久保遺跡、成澤遺跡群五里田遺跡、西一本柳遺跡、根々井芝宮遺跡、森平遺跡などである。これらの遺跡は湯川右岸の根々井地籍から岩村田地籍に集中する。昭和59・60年に行われた発掘調査により92軒の堅穴住居跡が発見された北西の久保遺跡が中期後半の代表的遺跡と考えられてきたが、その東に隣接する一本柳遺跡群西一本柳遺跡では現在までに約230軒以上の住居跡が、西に隣接する鳴澤遺跡群五里田遺跡でも43軒の住居跡が検出され、これら3遺跡は中期後半の一続きの大規模集落であったことが判明しつつある（小山2011）。この他、湯川左岸の根々井芝宮遺跡や右岸の森平遺跡でも集落の出現をみている。他の地域では瀬戸の和田上遺跡群や伴野の西裏・北裏遺跡群などでも集落が出現する。

後期になると段丘上や低地に臨む台地縁部にも進出し、遺跡数は拡大する。湯川・濁川が流下する岩村田・長土呂地籍には佐久平でも最もこの時期の遺跡が集中する。なかでも岩村田地籍の円正坊遺跡周辺、長土呂地籍の西近津遺跡群・周防畑遺跡群周辺、それに中期後半以来の西一本柳遺跡周辺にその中心がある。これらは田切り地形が消滅した常田・塚原地籍の低地を取り囲むように立地している。この低地では濁り遺跡や西一里塚遺跡群で平安時代以降の水田跡が検出されている。いまだ弥生時代の水田跡の発見はないが、弥生時代においてもこの低地周辺が生産基盤であったであろうことは古くから指摘されている。一方、千曲川左岸の佐久平南部の広大な沖積平野は弥生時代にはまだ開拓が進んでいなかったようであり、遺跡の発見事例は少ない。西裏・北裏遺跡群や後沢遺跡などのように丘陵地帯に拠点的集落がみられる。

古墳時代

佐久平北部で繁栄した弥生後期の大集落遺跡は、古墳時代にはいとと解体し、小規模な集落遺跡が点状になるようになる。古墳時代前期の集落はその立地も弥生時代集落密集地帯の外縁部にあたる場所に目立ってくる。近津遺跡群、栗毛坂遺跡群、腰巻遺跡、小諸市の鎌田原遺跡、和田原遺跡群、久保田遺跡などの他、石神遺跡群、御代田町塚田遺跡、軽井沢町県遺跡などの浅間山南麓でも小規模な集落が営まれるようになる。ただしこれらは短期間で終焉したものが多く、中期後半になると、北西の久保遺跡や下芝宮遺跡、下聖端遺跡などのように前期には放棄されていた弥生時代の集落密集地帯に再び集落が形成され、また御代田町前田遺跡のように縄文時代から古墳時代前期までは居住域としては利用されなかった田切り台地上のより奥部でも場所集落が出現するようになる。千曲川左岸地域でも沖積低地にある市道遺跡などで新たに集落の出現をみる。後期には立地は中期を踏襲しながら、飛躍的に規模を大きくし、遺跡数も増大する。佐久平北部の田切り台地上には古墳時代後期から平安時代前期にかけて継続する大規模集落がいたるところでみられてくる。小諸市・御代田町・佐久市にまたがる鋤小屋遺跡群、佐久市の聖原遺跡、西近津遺跡群、周防畑遺跡群、芝宮遺跡群、栗毛坂遺跡群、小諸市の中原遺跡群などである。なお、平質地籍の樋村遺跡も大集落遺跡として知られている。

墳墓については、西一里塚遺跡群にほど近い根々井大塚古墳が佐久地方最古の墳丘墓に位置づけられ、千曲川左岸では前方後方型墳丘墓の叢の峯1号墳・2号墳がみられる。他には藤塚古墳や西近津遺跡群で検出された2基の古墳が前期古墳として理解されるのみであり、佐久地域では前期古墳は稀少である。前

期の小諸市野火付遺跡では古墳からの出土が一般的である石剣が前期の竪穴住居跡から発見されているが、これは前期古墳が少ないこの地域の特性を如実に示していると考えられる(桜井2011)。中期古墳も数は少なく、調査されたものとしては北西の久保古墳群をあげる程度である。古墳の築造は爆発的に増大するのは後期の6世紀後半から7世紀代である。

佐久地方に約500基ある古墳のうちの大半が後期以降の古墳である。そのなかには径約30mという佐久地方最大の三河田大塚古墳、金銅製馬具の優品が出土した岩村田地籍の東一本柳古墳、長野県内では珍しい形象埴輪が多量に出土した北西の久保17号墳などがある。また祭祀遺跡としても軽井沢町入山峠祭祀遺跡や立科町雨境峠祭祀遺跡群がみられ、これらを結ぶルートは古東山道として理解されている。

古代(奈良・平安時代)

701年に制定された大宝律令により確立された律令体制のもとで、佐久地方は、信濃国佐久郡という行政単位に編成されることとなった。佐久郡には八つの郷が置かれた。『和名類聚抄』には美理郷、大村郷、大井郷、刑部郷、青沼郷、茂理郷、小沼郷、余戸郷の名が記されている。官道である東山道も佐久地方を通過し、清水駅、長倉駅が置かれた。また御牧も望月牧、塩野牧、長倉牧の3つの牧が置かれ、なかでも望月牧は、「望月の駒」として全国的にも名馬の産地として誉れ高いものであった。遺跡としては前述したように古墳時代後期から継続するものが多いが、これらは奈良時代から平安時代前期に最盛期を迎える。そのうちのひとつである小諸市・佐久市・御代田町にまたがる鋤師屋遺跡群は面的調査した部分が約10万㎡という県内でも例をみない広大な面積であった。古墳時代後期から平安時代にかけて357軒を超える竪穴住居跡と掘立柱建物跡434棟などが発見され、このうち約130軒の竪穴住居跡が奈良時代に比定される。同遺跡群を構成する遺跡のうち御代田町・野火付遺跡では平安時代の埋葬馬が発見された。また同遺跡群に隣する小諸市・宮の反A遺跡群では現在のところ佐久地方唯一の官衙跡が発見され、長倉駅の駅稲を納める倉庫であるとの見解も近年出されている(田中2009)。この周辺に東山道および長倉駅が存在していた可能性が高くなっている。長土呂地籍の聖原遺跡も約10万㎡の調査面積であり、竪穴住居跡818軒、掘立柱建物跡869棟が検出された。この他にも栗毛坂遺跡群では竪穴住居跡約150軒・掘立柱建物跡約140棟などが、また芝宮遺跡群では竪穴住居跡約250軒、掘立柱建物跡90棟などが検出され、海獣歯鏡も出土している。芝宮遺跡群と田切りを挟んで北に隣接する小諸市中原遺跡群でも竪穴住居跡約140軒・掘立柱建物跡約90棟などが発見されている。中部横断自動車道建設に伴い調査した西近津遺跡群、周防畑遺跡群でもこの時期の相当規模の集落が姿をあらわしている。これらの遺跡は規模が大きいかも特筆されるが八椀鏡や帯金具、円面硯、皇朝十二銭、銅鏡、瓦塔、金銅製鈴、馬鈴、銅印、石印など稀少遺物の出土も少なくない。また県内で数例しかない漆紙文書が出土した小諸市宮の反A遺跡群竹花遺跡も注目される。

佐久郡衙の比定地ははまだ確定していないが、佐久平北部の田切り台地上に存在している可能性が高い。なお、「大井」と記された墨書・刻書土器が長土呂地籍を中心とした佐久平北部から出土する事例が数例みられ、ここが「大井郷」であった可能性は極めて高い。こうした佐久平北部に栄えた大規模集落遺跡は律令体制の崩壊する10世紀には住居数の急激な減少がみられ、解体の遺をたどる。これに呼応するかのよう9世紀後半以降には浅間山南麓や南佐久郡南部など、それまで集落が営まれなかった山間地にも小さな集落が点在するようになる。そして時代は中世へと移っていくのである。

ところで、平安時代は甚大な自然災害に見舞われた時代でもあった。仁和4(888)年の千曲川の大洪水(仁和の大洪水)の爪痕は佐久市(旧浅科村)砂原遺跡の2mを超える堆積砂層や上中込地籍の離山遺跡にも残されている。また1108年の浅間山の大噴火(天仁の大噴火)は御代田町東部から軽井沢町西部を火砕流が襲いかかった。現在でも平均8mの厚さをもつ追分火砕流の下には御代田町池尻遺跡のように

眠っている遺跡が少なくないであろう。またその際に降下した浅間Bテフラも軽井沢町県遺跡で確認されている（川崎ほか2012）。

中世（鎌倉時代・室町時代・戦国時代）

佐久地方に根拠をもつ武士には、桜井太郎・次郎、根井小跡太、小室太郎、望月次郎、落合五郎などが知られ、佐久党と呼ばれる武士団を形成し、木曾義仲拳兵の際には義仲に従って活躍した。そのひとり根井行親の居館跡は根ヶ井の正法寺一帯に比定されており県史跡になっている。

義仲滅亡後は伴野庄地頭職に任ぜられた小笠原長清を祖とする大井氏と伴野氏が次第に台頭し、千曲川右岸は大井氏、千曲川左岸に伴野氏が勢力を伸ばした。岩村田・長土呂地籍には大井氏に関係するとみられる遺跡が少なくない。方形の地割をもつ長土呂館跡は大井氏の初期の館跡ともいわれる。大井城は王城（県史跡）・石並城・黒岩城からなるが大井氏の城とされる。発掘調査も実施されており、15～16世紀の遺構や遺物が出土している。また大井氏が開基した龍雲寺の可能性が高い建物跡が発見された下信濃石遺跡や時宗の開祖・一遍が弘安2（1279）年に佐久へ進出した際に訪れたといわれる大井太郎の館の可能性が指摘される柳堂遺跡などもある。岩村田地籍の若宮八満神社も大井氏の創建と伝えられる。

一方の佐久平南部では伴野氏の館跡とみられる野沢館跡があり、十回にのぼる発掘調査が行われ県史跡となっている。

集落遺跡では、12～13世紀の中世初期頃の遺跡の発見例は佐久でも少ない。そのなかで御代田町と佐久市にまたがる栗毛坂遺跡群前藤部遺跡は1,000基以上の土坑と80棟以上の竪穴状遺構などが発見され注目できる。14世紀代も多数の遺構群がみられ豊富な遺物がみられている。他には野火付遺跡や前田遺跡で集落跡がみつまっている。また北西の久保遺跡に隣接して鎌倉中期から後期の五輪塔などからなる石造塔婆群がみられる。生産遺跡としては、岩村田地籍の松ノ木遺跡で水田跡が発見されている。

室町時代も応仁の乱以降になると、佐久地域では大井氏と伴野氏が抗争を繰り返した末に、文明16（1484）年に村上氏により大井氏の宗家はここにほろんだ。それ以後は盟主不在の地となり、小田井城の尾台氏や志賀城の笠原氏、田口城の田口氏、芦田城の依田氏など多くの小領主が割拠することとなる。戦国時代の城郭は多く、黒岩城、金井城で調査が実施されている。天文9（1540）年からは武田信玄の侵略を受け、天文18（1549）年には武田氏の支配下に下ることになった。武田信玄は南牧村海尻城を奪い佐久へ進み、前山城を拠点とした。そして内山城、志賀城などを攻め落とした。

近世

依田信蕃・松平康国父子により佐久地方は統一され、仙石氏がその後を引き継いだものの、その後は松平忠憲が寛永元（1624）年に徳川忠長領であった佐久郡のうちの約3万5千石を分与されたことで分割支配がはじまった。年とともに細分化がさらに進み、信濃で最も所領関係の複雑な地域のひとつとなった。小諸藩は石高を次第に減らし、代わって幕府領（天領）が増え、後年には岩村田藩や田野口藩も置かれることとなる。この他にも旗本知行所などもみられる分割状態であった。天領の陣屋は小諸市御影に置かれ、県史跡となっている。幕末に築城された田野口藩の龍岡城跡は全国で2例しかない星形城郭として著名であり、国史跡の指定を受けている。

五街道のひとつである中山道も整備され、佐久には9つの宿が置かれ、一里塚も各地に設置された。本書掲載の西一里塚遺跡群も中山道沿いに位置しており、現在は残されていないが遺跡近くに一里塚があったことが字名の由来である。岩村田宿と塩名田宿を間に位置する。

17世紀中頃には新田開発も盛んとなり、佐久では五郎兵衛新田・御影新田・塩沢新田・八重原新田が有名である。これらは用水堰を新たに切り開いたものであり、佐久平北部の台地でも水田耕作が可能となっていたのである。濁り遺跡に近い常田居屋敷遺跡群では近世以降とみられる水田跡が発見されてい

る。

災害にもたびたび見舞われたが、とりわけ寛保2（1742）年の千曲川の大水害は戊の大満水と呼ばれ、被害は甚大であった。浅間山も天明3（1783）年に大噴火し、群馬県側に大被害をもたらした。

近代以降

明治12年の郡区町村編成法により、佐久は南北両郡に分けられ、それぞれに郡役所が設けられた。また町村の合併も進められ、明治22（1889）年には南佐久郡は23ヶ村、北佐久郡は小諸町・岩村田町の2町と26ヶ村となった。

第二次世界大戦後、昭和28（1953）年に町村合併促進法が公布されたことにより佐久地方でも昭和の大合併が相次いだ。そして佐久市が昭和36（1961）年に誕生したことで昭和の合併は一区切りがつき、佐久市・小諸市の2市と、北佐久郡は御代田町・軽井沢町・立科町・望月町・浅科村・北御牧村の4町2村、南佐久郡は白田町・佐久町・小海町・八千穂村・北相木村・南相木村・南牧村・川上村の3町5村となった。

この行政体制は平成まで続いたが、平成の大合併により平成17（2005）年4月1日をもって佐久市・望月町・浅科村・白田町は合併し、新「佐久市」が誕生した。また佐久町と八千穂村も平成17年3月20日に合併して佐久穂町となった。北御牧村は東部町と合併し東御市となり、平成16（2004）年4月1日に佐久地方から離れた。

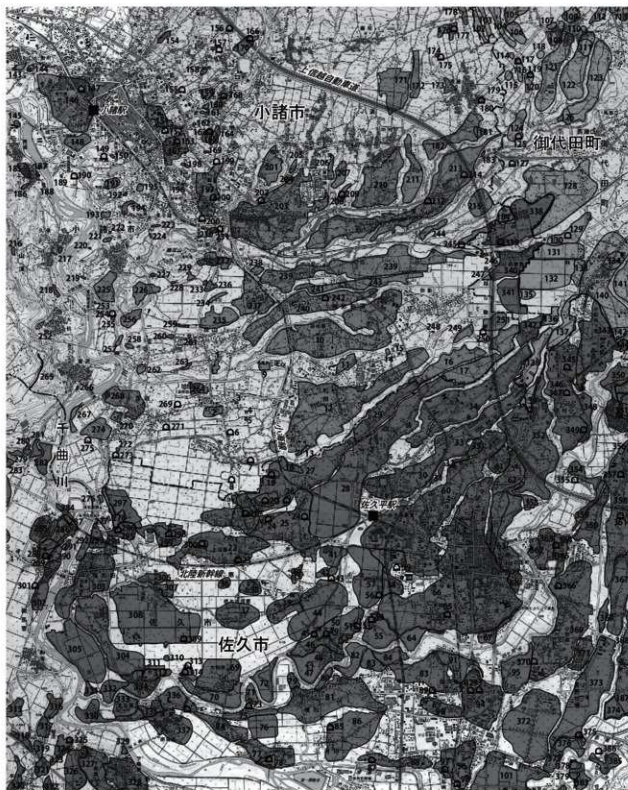
本書掲載遺跡が所在する地籍についてみると塚原は、鎌倉時代からその地名はみられ、大井庄に属していたことも知られる。戦国期には「塚原之郷」と郷名でみられる。明治9（1876）年に赤岩村・中地村・上塚原村・下塚原村・根々井塚原村が合併して塚原村となった。平塚は、江戸時代の慶長年間の中山道整備により人家が立ち並び塚原新町と称せられたのがはじまりと考えられ、のちに平塚村となった。この平塚村、塚原村が、明治22年に常田村、根々井村と合併して誕生したのが中佐都村である。米作地帯で有名であり、村の産出量は埴科郡に匹敵し、大正期から昭和期にかけては佐久地方の穀倉と呼ばれた。また製糸業や酒や醤油の醸造業も盛んな地であった。岩村田は、中世・大井庄の中心地と考えられている。江戸時代には岩村田村として、岩村田藩の陣屋も置かれた。また中山道宿駅のひとつとしてにぎわっていた。明治22年に岩村田町となり北佐久郡役所が置かれ、北佐久郡の中心的存在を担っていた。中佐都村はこの岩村田町・平根村・高瀬村と合併し、浅間町となり、そして昭和36年に佐久市となったのである（註4）。

註1 市川健夫氏は、地形学的に厳密な意味での佐久盆地は、佐久市白田から野沢・中込・桜井・岸野の沖積扇状地に限られるとし、「岩村田・小諸・追分原などは浅間山から噴出した火砕流が堆積したシラス台地であり、地形学的にみると盆地とはいえない」ことを指摘する（市川2007）。

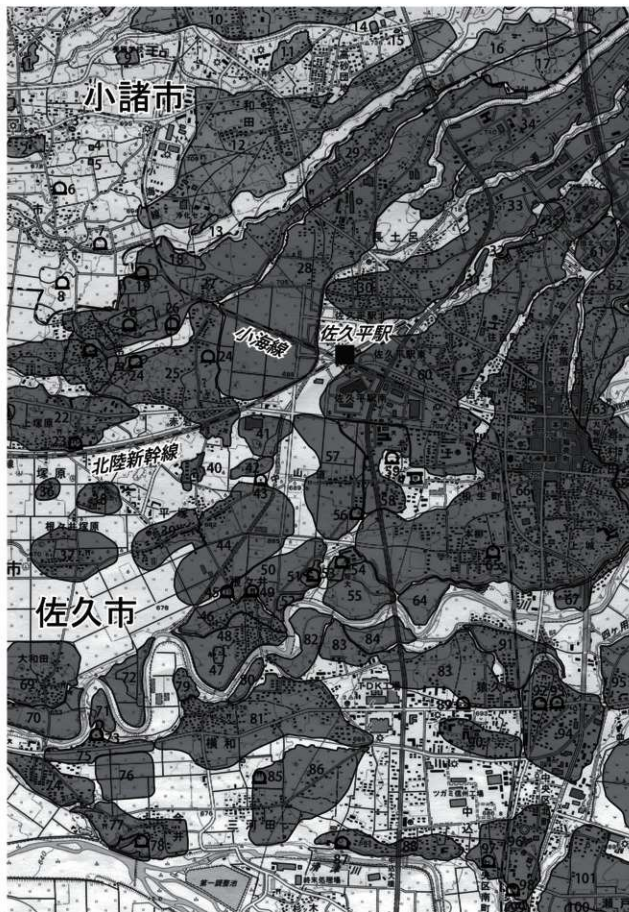
註2 軽石流堆積物は固結度もゆるく縦に割れやすいので、ごく小さい河川により垂直に侵食される。そして浸食された谷がその堆積物の底の地下水位まで達すると下割はとどまる。そして両側の谷壁も浸食により切り崩され、谷底を広げていく（小諸市誌編纂委員会1986）。この作用により田切り地形は形成される。

註3 佐久平の遺跡の立地地形については「佐久市誌 自然編」では東部山地、西部山地、中央低地に分類している。東部山地は関東山地（佐久山塊）の北半部で、西部山地は八ヶ岳・蓼科山地にあたる。地元ではそれぞれ「東山」地域、「西山」地域と呼ばれていることから、本稿では東山地域、西山地域の語を用いる。また、遺跡名については、佐久市内のものについては地籍名をみの標記とする。

註4 高瀬村は、鳴瀬村・今井村・三河田村・横和村が合併して誕生した。村名の由来は、「千曲川の断崖上であり、湯川と千曲川の合流する水声にもとづく」ものであったという（平林1975）。



第4図 周辺の遺跡分布図(1) 縮尺 1:50,000



第5図 周辺の遺跡分布図 (2) 縮尺 1:25,000

第3章 遺跡の位置と環境

地図 番号	遺跡名	市町 村名	遺跡 番号	所在地	時 代				
					旧	縄	古	中	近
1	森久保	小浜市	220	青山					
2	五ヶ城	小浜市	224	市					
3	荒宮	小浜市	225	市					
4	北森久	小浜市	226	市					
5	北森宮	小浜市	227	市					
6	北古吉	小浜市	229	市					
7	秩葉山古墳群	小浜市	245	市					
8	藤保古墳	小浜市	246	市					
9	中原	小浜市	221	耳取					
10	谷地原遺跡群	小浜市	201	磯部新田					
11	人北原	小浜市	231	相田					
12	相田原遺跡群	小浜市	230	相田					
13	筑城跡	小浜市	247	相田					
14	相田原A	小浜市	232	相田					
15	相田原B	小浜市	233	相田					
16	藤田原	小浜市	235	磯部新田					
17	中原遺跡群	小浜市	236	磯部新田					
18	森林城址	佐久市	30	菅田					
19	藤保古墳群	佐久市	37	長上戸					
20	粟鹿下古墳群	佐久市	36	菅田					
21	粟鹿上古墳群	佐久市	33	菅田					
22	前山遺跡群	佐久市	27	塚原					
23	宮ノ塚古墳	佐久市	89	塚原					
24	大耳塚古墳群	佐久市	34	塚原					
25	菅田原岡遺跡群	佐久市	28	菅田					
26	下大塚古墳群	佐久市	35	長上戸					
27	西山寺遺跡群	佐久市	29	長上戸					
28	岡野遺跡群	佐久市	7	長上戸					
29	沼津遺跡群	佐久市	6	長上戸					
30	長上戸跡群	佐久市	40	長上戸					
31	下野津遺跡	佐久市	38	長上戸					
32	新成遺跡	佐久市	45	菅田					
33	長上戸遺跡群	佐久市	9	長上戸					
34	芝宮遺跡群	佐久市	8	長上戸					
35	菅田新成遺跡	佐久市	541	菅田					
36	藤保遺跡	佐久市	85	菅田					
37	遠志遺跡	佐久市	87	塚原					
38	宮の前遺跡	佐久市	86	塚原					
39	塚原野宮遺跡	佐久市	88	塚原					
40	熊子前遺跡	佐久市	91	塚原					
41	薄戸遺跡	佐久市	29	塚原					
42	久保田	佐久市	594	塚原					
43	長山古墳	佐久市	595	塚原					
44	西一宮塚遺跡群	佐久市	92	菅田					
45	根ヶ方大塚古墳	佐久市	109	根ヶ方					
46	行向原遺跡群	佐久市	93	根ヶ方					
47	根ヶ方氏館跡	佐久市	95	根ヶ方					
48	根ヶ方岩屋敷遺跡	佐久市	94	根ヶ方					
49	藤宮塚古墳	佐久市	110	根ヶ方					
50	鳴津遺跡群	佐久市	96	根ヶ方					
51	上鳴津古墳群	佐久市	111	根ヶ方					
52	根ヶ方東原跡	佐久市	108	根ヶ方					
53	北西久保遺跡	佐久市	98	菅田					
54	北西の久保古墳群	佐久市	116	菅田					
55	中西の久保遺跡群	佐久市	99	菅田					
56	新平治山古墳	佐久市	112	菅田					
57	上野田遺跡	佐久市	103	菅田					
58	松の本遺跡	佐久市	102	菅田					
59	国蔵山古墳	佐久市	114	菅田					
60	鹿毛取遺跡群	佐久市	41	菅田					
61	中久保田遺跡	佐久市	42	菅田					
62	西赤坂遺跡	佐久市	43	菅田					
63	大井城跡	佐久市	51	菅田					
64	中塚津遺跡群	佐久市	100	菅田					
65	東一本柳古墳	佐久市	115	菅田					

地図 番号	遺跡名	市町 村名	遺跡 番号	所在地	時 代				
					旧	縄	古	中	近
66	岩村田遺跡群	佐久市	52	岩村田					
67	岩井堂遺跡	佐久市	134	岩村田					
68	下須藤古遺跡	佐久市	118	岩村田					
69	大和田原後遺跡群	佐久市	236	鳴瀬					
70	大和田遺跡群	佐久市	227	鳴瀬					
71	鍋田田遺跡	佐久市	232	鳴瀬					
72	轟平	佐久市	303	轟平					
73	善原古墳	佐久市	239	轟平					
74	白山遺跡群	佐久市	230	鳴瀬					
75	善原遺跡群	佐久市	231	轟平					
76	今井宮遺跡	佐久市	234	今井					
77	今井宮の前遺跡	佐久市	235	今井					
78	今井城跡	佐久市	236	今井					
79	北久保遺跡	佐久市	233	轟平					
80	赤石河原遺跡	佐久市	242	轟平					
81	宮の上遺跡群	佐久市	240	轟平					
82	諏訪分遺跡群	佐久市	106	根ヶ方					
83	寺尾遺跡群	佐久市	107	根ヶ方					
84	神田遺跡	佐久市	252	藤久保					
85	上宮古墳	佐久市	243	三河田					
86	中塚遺跡群	佐久市	241	今井					
87	三河田大塚古墳	佐久市	244	三河田					
88	野の末遺跡-1	佐久市	251	中込					
89	富士塚古墳	佐久市	246	藤久保					
90	西赤坂遺跡	佐久市	247	中込					
91	藤久保原後遺跡	佐久市	123	藤久保					
92	藤原塚古墳	佐久市	259	藤久保					
93	東北塚古墳	佐久市	260	藤久保					
94	藤原前遺跡群	佐久市	248	藤久保					
95	野宮堂遺跡群	佐久市	122	藤久保					
96	大塚遺跡群	佐久市	249	中込					
97	野々古墳	佐久市	245	中込					
98	中込大塚古墳	佐久市	249	中込					
99	深城城跡	佐久市	346	轟平					
100	藤戸川原古墳群	佐久市	350	轟平					
101	藤原遺跡群	佐久市	255	轟平					
102	下大宮	藤代町	71	藤野					
103	西宮跡	藤代町	1	藤野					
104	東宮跡	藤代町	2	藤野					
105	藤	藤代町	69	藤野					
106	滝沢	藤代町	6	藤野					
107	上西田	藤代町	30	藤野					
108	西島	藤代町	32	藤野					
109	赤安	藤代町	33	藤野					
110	下藤原	藤代町	37	藤野					
111	藤野城跡	藤代町	60	藤野					
112	上藤原	藤代町	12	藤野					
113	藤野高塚	藤代町	29	藤野					
114	中尾原	藤代町	68	藤野					
115	下尾田	藤代町	62	藤野					
116	藤田	藤代町	61	藤野					
117	藤田赤塚	藤代町	15	藤野					
118	下赤安	藤代町	67	藤野					
119	塚田古墳群	藤代町	16	藤野					
120	塚田	藤代町	63	藤野					
121	馬場	藤代町	17	藤野					
122	下ノ平	藤代町	72	藤野					
123	北原	藤代町	73	藤野					
124	尾藤	藤代町	74	藤野					
125	のぐら山古墳群	藤代町	18	藤野					
126	藤原上城跡	藤代町	66	藤野					
127	下尾古墳群	藤代町	19	藤野					
128	西向原	藤代町	57	藤野					
129	藤草	藤代町	43	小田井					
130	藤原古墳	藤代町	44	小田井					

第3表 周辺遺跡一覧(1)

地図 番号	遺跡名	市町 村名	遺跡 番号	所在地	時代					
					旧	中	古	中	近	近
131	十二	柳代田町	42	小田井	+					
132	前田	柳代田町	41	小田井	+					
133	13号城跡	柳代田町	76	小田井	+					
134	長谷城跡	柳代田町	75	小田井	+					
135	野木付	柳代田町	40	小田井	+					
136	曾根城跡	柳代田町	53	小田井	+					
137	神坂	柳代田町	54	小田井	+					
138	聖原庄	柳代田町	56	小田井	+					
139	前森庄	柳代田町	55	小田井	+					
140	中金井	柳代田町	46	小田井	+					
141	小田井城跡	柳代田町	20	柳代田	+					
142	金井城跡	柳代田町	45	小田井	+					
143	手代塚城跡	小田市	76	内	+					
144	横山	小田市	77	内	+					
145	西浦下字	小田市	106	山浦	+					
146	小島城跡	小田市	78	丁	+					
147	飯高古墳	小田市	79	丁	+					
148	七古三郎城跡	小田市	108	甲	+					
149	万手海上古墳	小田市	109	甲	+					
150	万手海上	小田市	110	甲	+					
151	野井	小田市	121	甲	+					
152	与良古墳	小田市	126	甲	+					
153	加増古墳群	小田市	128	加増	+					
154	粟沢城跡	小田市	81	甲	+					
155	古瀬野古墳	小田市	82	甲	+					
156	松吉古墳	小田市	82	甲	+					
157	北瀬古墳群	小田市	83	甲	+					
158	中込古墳	小田市	86	甲	+					
159	柳野裏A	小田市	88	甲	+					
160	柳野裏B	小田市	122	甲	+					
161	兼野野	小田市	123	甲	+					
162	柳川小	小田市	124	加増	+					
163	藤太古墳5号墳	小田市	131	加増	+					
164	日向	小田市	129	加増	+					
165	乙女城跡	小田市	130	加増	+					
166	郷土古墳群	小田市	85	甲	+					
167	加増遺跡群	小田市	127	加増	+					
168	飯下古墳群	小田市	89	甲	+					
169	藤	小田市	132	加増	+					
170	郷土	小田市	84	甲	+					
171	石神遺跡群	小田市	90	八雲	+					
172	長坂	小田市	91	八雲	+					
173	宮崎城跡	小田市	95	塩野	+					
174	寺中	小田市	90	八雲	+					
175	寺玲塚古墳	小田市	94	塩野	+					
176	沼辺	小田市	92	八雲	+					
177	密仁古墳	小田市	96	塩野	+					
178	中入空	小田市	97	塩野	+					
179	下荒田	小田市	98	塩野	+					
180	柳野古墳	小田市	153	塩野	+					
181	三上三郎城跡	小田市	154	平原	+					
182	三田原遺跡群	小田市	150	平原	+					
183	石石城跡	小田市	155	平原	+					
184	萩野原	小田市	202	平原	+					
185	松ノ入口	小田市	111	山浦	+					
186	日向	小田市	113	山浦	+					
187	上ノ平城跡	小田市	112	山浦	+					
188	聖祖	小田市	114	山浦	+					
189	北野田	小田市	115	丁	+					
190	与良平古墳	小田市	116	甲	+					
191	与良城跡	小田市	117	甲	+					
192	栗畑	小田市	118	甲	+					
193	大裏	小田市	167	甲	+					
194	六浦B	小田市	120	甲	+					
195	六浦A	小田市	119	甲	+					

地図 番号	遺跡名	市町 村名	遺跡 番号	所在地	時代					
					旧	中	古	中	近	近
196	豊後一里塚	小田市	135	甲	+					
197	大塚遺跡群	小田市	136	加増	+					
198	加増城跡	小田市	133	加増	+					
199	八子塚城跡	小田市	134	加増	+					
200	豊後古墳群	小田市	137	加増	+					
201	古原館	小田市	138	朽木	+					
202	新原古墳	小田市	141	朽木	+					
203	杉木東遺跡群	小田市	142	朽木	+					
204	朽木西城跡	小田市	140	朽木	+					
205	朽木北城跡	小田市	139	朽木	+					
206	坪ノ内	小田市	143	朽木	+					
207	柳田A	小田市	144	朽木	+					
208	久保田古墳群	小田市	147	平原	+					
209	久保田	小田市	146	平原	+					
210	平原城跡	小田市	148	平原	+					
211	北原遺跡群	小田市	149	平原	+					
212	寺裏塚古墳	小田市	152	平原	+					
213	三子塚遺跡群	小田市	151	平原	+					
214	三子塚1号墳	小田市	156	平原	+					
215	赤道	小田市	158	平原	+					
216	岩根	小田市	165	山浦	+					
217	中村	小田市	166	山浦	+					
218	轟瀬川	小田市	172	山浦	+					
219	上瀬田	小田市	173	甲	+					
220	藤久保	小田市	171	甲	+					
221	西原田	小田市	170	甲	+					
222	北原田	小田市	169	甲	+					
223	久慈館	小田市	180	甲	+					
224	新原田	小田市	181	甲	+					
225	窪田城跡	小田市	174	甲	+					
226	豆塚	小田市	176	甲	+					
227	上鶴巻	小田市	184	甲	+					
228	南瀬田	小田市	185	甲	+					
229	北瀬田	小田市	186	甲	+					
230	鐘久川城跡	小田市	182	甲	+					
231	乙女古墳	小田市	183	甲	+					
232	仏ノ前	小田市	188	甲	+					
233	上山ノ前	小田市	187	甲	+					
234	関口A	小田市	190	甲	+					
235	船塚遺跡群	小田市	196	轟山	+					
236	関口B	小田市	189	甲	+					
237	山神	小田市	192	轟山	+					
238	茶神	小田市	191	轟影新田	+					
239	宮ノ反ノ上遺跡群	小田市	193	轟影新田	+					
240	大塚東遺跡群	小田市	197	轟影新田	+					
241	轟巻	小田市	194	轟影新田	+					
242	一ツ身大塚	小田市	199	轟影新田	+					
243	轟屋館跡	小田市	200	轟影新田	+					
244	三弘山山城跡	小田市	198	平原	+					
245	長野原塚古墳	小田市	203	平原	+					
246	宮ノ反B	小田市	204	轟影新田	+					
247	鎌倉館跡	小田市	205	轟影新田	+					
248	春久保	小田市	234	新田	+					
249	野火付城跡	小田市	237	轟影新田	+					
250	野火付古墳	小田市	238	轟影新田	+					
251	野火付遺跡	小田市	252	轟影新田	+					
252	社宮向神社境内	小田市	206	山浦	+					
253	下塩田	小田市	175	甲	+					
254	八幡在来古墳	小田市	177	甲	+					
255	八幡在来	小田市	178	甲	+					
256	北ノ城跡	小田市	179	耳取	+					
257	新成城跡	小田市	209	耳取	+					
258	大林	小田市	210	耳取	+					
259	宮浦	小田市	195	轟山	+					
260	西成跡	小田市	216	轟山	+					

第4表 周辺遺跡一覧(2)

第3章 遺跡の位置と環境

地図 番号	遺跡名	市町 村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					旧	縄	弥	古	中・近 世	近 現
261	森山城跡	小浜市	217	森山					○	
262	長林	小浜市	211	耳取					○	
263	大浜前	小浜市	219	森山					○	
264	牛原	小浜市	222	耳取					○	
265	人回車	小浜市	237	山道					○	
266	宮沢道下	小浜市	238	山道					○	
267	久保田	小浜市	215	耳取		○	○	○	○	
268	耳取城跡	小浜市	212	耳取		○	○	○	○	
269	十字塚古墳群	小浜市	223	耳取					○	
270	五ヶ丘城跡	小浜市	213	耳取					○	
271	耳取大塚古墳	小浜市	228	耳取					○	
272	宮ノ前	小浜市	240	耳取					○	
273	宮ノ前古墳	小浜市	241	耳取					○	
274	宮ノ北	小浜市	214	耳取		○	○	○	○	
275	宮ノ古墳	小浜市	239	耳取					○	
276	五浦A	小浜市	242	耳取					○	
277	五浦C	小浜市	244	耳取					○	
278	五浦B	小浜市	243	耳取		○	○	○	○	
279	久保田台遺跡	佐久市	830	桑山					○	
280	久保田A遺跡	佐久市	829	桑山					○	
281	久保田C遺跡	佐久市	903	桑山					○	
282	伊比乎遺跡	佐久市	827	桑山			○			
283	上小遺跡	佐久市	807	甲			○			
284	熊野宮城跡	佐久市	830	熊野宮					○	
285	熊野宮遺跡	佐久市	904	熊野宮					○	
286	甲中島遺跡	佐久市	819	熊野宮			○	○	○	
287	甲上遺跡	佐久市	818	熊野宮					○	
288	上平遺跡	佐久市	823	熊野宮					○	
289	上平塚古墳	佐久市	824	熊野宮					○	
290	牧野遺跡	佐久市	822	熊野宮					○	
291	下平遺跡	佐久市	821	熊野宮					○	
292	下田原遺跡	佐久市	815	熊野田					○	
293	砂原遺跡	佐久市	813	熊野田			○	○	○	
294	山ノ上遺跡	佐久市	814	熊野田					○	
295	五反城跡	佐久市	812	熊野田					○	
296	網ノ古墳	佐久市	811	熊野田					○	
297	藤名河原遺跡	佐久市	25	箕田					○	
298	藤塚古墳群	佐久市	31	保尾					○	
299	藤塚遺跡	佐久市	35	保尾					○	
300	藤小石古墳群	佐久市	32	保尾					○	
301	上ノ山古墳	佐久市	826	熊野宮					○	
302	神字遺跡	佐久市	825	熊野宮					○	
303	原島裏遺跡群	佐久市	816	熊野田					○	
304	網ノ堂遺跡	佐久市	78	鳴瀬					○	
305	藤田遺跡群	佐久市	75	鳴瀬					○	
306	新城遺跡	佐久市	80	塚原					○	
307	宮ノ前田遺跡	佐久市	82	塚原					○	
308	川辺遺跡群	佐久市	79	鳴瀬					○	
309	風塚古墳	佐久市	90	塚原					○	
310	中津遺跡	佐久市	83	塚原					○	
311	湯合神明祠跡	佐久市	237	鳴瀬					○	
312	鳴瀬神明遺跡	佐久市	224	鳴瀬					○	
313	北見塚古墳	佐久市	238	鳴瀬					○	
314	北見見遺跡	佐久市	225	鳴瀬					○	
315	向ノ原遺跡	佐久市	208	坪野					○	
316	倉庫遺跡	佐久市	209	坪野					○	
317	泉原遺跡	佐久市	210	坪野					○	
318	立石遺跡	佐久市	213	観音					○	
319	熊塚古墳	佐久市	214	観音					○	
320	上野遺跡	佐久市	215	観音					○	
321	小倉子遺跡	佐久市	216	観音					○	
322	中島遺跡	佐久市	303	観音					○	
323	合浜田遺跡	佐久市	217	観音					○	
324	湯松取遺跡	佐久市	218	坪野					○	
325	火の浦塚古墳	佐久市	223	坪野					○	

地図 番号	遺跡名	市町 村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					旧	縄	弥	古	中・近 世	近 現
326	舞石遺跡	佐久市	220	坪野					○	
327	保石遺跡	佐久市	219	坪野					○	
328	下思成遺跡群	佐久市	221	坪野					○	
329	兼堂中ノ遺跡	佐久市	222	坪野					○	
330	若尾遺跡	佐久市	206	鳴瀬					○	
331	船田遺跡	佐久市	202	鳴瀬					○	
332	熊野遺跡	佐久市	203	鳴瀬					○	
333	下ノ北古遺跡	佐久市	207	鳴瀬					○	
334	湯合屋敷遺跡	佐久市	204	鳴瀬					○	
335	鳴瀬宮の前遺跡	佐久市	205	鳴瀬					○	
336	上平遺跡群	佐久市	228	鳴瀬					○	
337	鳴瀬中層遺跡群	佐久市	229	鳴瀬					○	
338	下前田原遺跡群	佐久市	1	小田井					○	
339	下前田原古墳群	佐久市	5	小田井					○	
340	新田遺跡群	佐久市	2	小田井					○	
341	藤原川遺跡群	佐久市	3	小田井					○	
342	新築城遺跡	佐久市	4	小田井					○	
343	東舟城跡	佐久市	840	小田井					○	
344	相取遺跡群	佐久市	21	小田井					○	
345	新田古墳	佐久市	13	小田井					○	
346	中倉子遺跡群	佐久市	12	小田井					○	
347	高原古墳	佐久市	14	小田井					○	
348	藤取遺跡群	佐久市	11	小田井					○	
349	からむし古墳	佐久市	15	横根					○	
350	芋の原遺跡群	佐久市	17	横根					○	
351	延寿遺跡	佐久市	329	横根					○	
352	善毛城遺跡群	佐久市	10	小田井					○	
353	上子子遺跡	佐久市	44	小田井					○	
354	赤石遺跡	佐久市	53	上平					○	
355	濃石古墳	佐久市	54	上平					○	
356	白岩遺跡（東古城）	佐久市	67	上平					○	
357	塚原古墳	佐久市	71	上平					○	
358	兼大入原遺跡群	佐久市	56	上平					○	
359	藤巻遺跡	佐久市	46	上平					○	
360	西大入原遺跡群	佐久市	47	上平					○	
361	宮ノ西古墳	佐久市	73	下平					○	
362	下小平遺跡	佐久市	50	宮村田					○	
363	上小平遺跡	佐久市	49	宮村田					○	
364	棟敷古墳	佐久市	55	安原					○	
365	棟敷遺跡	佐久市	48	安原					○	
366	塚原古墳群	佐久市	126	安原					○	
367	戸原遺跡群	佐久市	127	安原					○	
368	藤久保遺跡群	佐久市	128	安原					○	
369	萩原遺跡群	佐久市	119	新子田					○	
370	野島古墳	佐久市	125	新久保					○	
371	粟内色遺跡	佐久市	121	新子田					○	
372	熊川1遺跡群	佐久市	250	新子田					○	
373	熊川町遺跡群	佐久市	129	新子田					○	
374	亀尾城跡	佐久市	270	新子田					○	
375	和上田古墳	佐久市	263	新子田					○	
376	新田遺跡群	佐久市	253	新子田					○	
377	箕ノ宮遺跡	佐久市	254	新子田					○	
378	中城半城跡	佐久市	257	新子田					○	
379	中城半古墳群	佐久市	258	新子田					○	
380	八反田城跡	佐久市	347	新子田					○	
381	中反遺跡群	佐久市	236	新子田					○	
382	新田安遺跡	佐久市	338	新子田					○	
383	中本峯遺跡	佐久市	337	新子田					○	
384	大日山古墳	佐久市	251	新子田					○	
385	新山遺跡群	佐久市	256	新子田					○	
386	新山古墳	佐久市	262	志賀					○	
387	戸取遺跡群	佐久市	263	新子田					○	
388	熊野遺跡群	佐久市	130	安原					○	

第5表 周辺遺跡一覧(3)

第4章 濁り遺跡・久保田遺跡

第1節 遺跡の概観

濁り遺跡は、佐久市塚原字濁り524番地の1ほかに所在する。久保田遺跡は、佐久市平塚字除石50番地の1ほかに所在する。両遺跡とも主要地方道下仁田浅科線と県道塩名田佐久線（旧中山道）の間に位置し、濁川の右岸そばに位置する（第6図）。この間の地形は、低地と約23,000年前の浅間山黒斑期に起きた噴火による塚原土石なだれの残丘である流れ山からなり、低地では流路が幾重にも流れている。隣接する両遺跡はこうした共通する地形環境に立地している。標高は約690mであり、南へ向かうにつれて地形は下がっていく。

北方から北東方には、約13,000年前に噴出した浅間第一軽石流が浸食されて形成された田切り地形がみられ、この台地上には西近津遺跡群、周防畑遺跡群、長土呂遺跡群など弥生時代から平安時代にかけての大規模な集落遺跡が多く認められている。これに対して、両遺跡を含む濁川の両岸にひろがる低地は、かねてから水田生産地帯であった可能性が指摘されていた。

濁り遺跡は、諏訪倉庫株式会社の倉庫及び事務所建設に先立って平成4年度に佐久市教育委員会（以下、佐久市教委と略称）が実施した試掘調査により、新たに発見された遺跡である。引き続いて行われた本調査では、水田跡3面が検出された。佐久地方でははじめて面的に検出することができた水田跡となった。出土遺物には弥生時代後期土器、須恵器、近世陶磁器などがみられたが、それぞれの所産時期を決定付けることはできなかった（佐久市教委1996）。今回の発掘調査はこの平成4年度に次いで2度目ということになる。今回の調査区は中部横断自動車道建設に先立って平成17年度に県教委が実施した濁り遺跡隣接地の試掘調査により、拡大された範囲である。試掘調査では平安時代の須恵器片などが出土した。

久保田遺跡は、上記の平成17年度に県教委が実施した濁り遺跡隣接地の試掘調査により、新発見された遺跡である。試掘調査では中世のかわらけ片や青磁碗の破片などが出土した（県教委2009）。久保田遺跡は今回が初めての発掘調査となる。



濁り遺跡・久保田遺跡遠景（平成18年度撮影）



第6図 濁り遺跡・久保田遺跡 遺跡範囲図

第2節 調査の概要

発掘調査は、久保田遺跡は平成18年度に実施したが、濁り遺跡については、平成18年度と19年度の2ケ年にわたり実施した（第7図）。

両遺跡とも主要地方道下仁田浅科線と県道塩名田佐久線（旧中山道）の間に位置する。この間の地形は、低地と「流れ山」と呼ばれる残丘からなり、低地では流路が幾重にも流れている。こうした共通する地形環境に立地する遺跡であることや遺跡範囲は接していることを踏まえて平成18年度の調査は両遺跡を一括して行った。

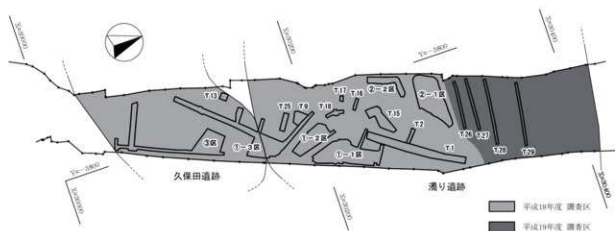
平成18年度は本調査に入る前に、全体の状況を把握することを目的として重機によるトレンチを25カ所（T1～25）掘削し、遺跡の性格や遺構の広がりなどを確認した（第8図）。この確認調査を踏まえ、面的に広げる範囲を決めた。

調査区は現道を主な境として①～③区に分けた。さらに①区は3地区に、②区は2地区に細分した。なおトレンチは濁り遺跡と久保田遺跡を遺跡範囲で区切らず、両遺跡を通して設定したため、遺跡範囲と調査区は対応していない（第9図）。①-1・2区と②区は濁り遺跡に、③区は久保田遺跡にそれぞれあたり、そして①-3区は両遺跡にまたがることになる。検出された遺構は濁り遺跡の範囲にみられた。なお、①-3区から出土した遺物はすべて濁り遺跡としてとりあげた。

遺構が検出できたのは①区のみであり、②区と③区では遺構は検出されなかった。

平成18年度の調査面積は8,580㎡、久保田遺跡7,220㎡であった（第11～13図）。

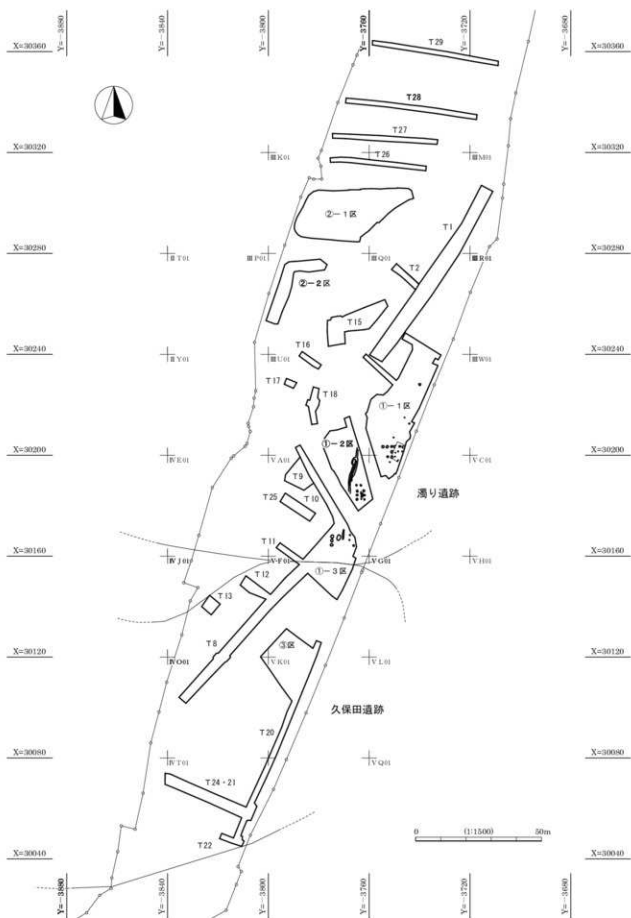
平成19年度は濁り遺跡の残件部分の調査面積5,300㎡であったが、一部用地収用が済んでいない箇所があった。調査可能な範囲については重機によるトレンチを4カ所入れた（T26～29）。その結果、遺物を全く含まない自然流路1条を確認できたのみであり、しかもこれは最北のT29には続かないことが判明したため、北側の用地未収用部分も遺構の存在する可能性は低いと判断し、残件部分の用地収用を待たずに、調査は終了することとした（第14図）。



第7図 年度別調査区



第8図 確認調査 トレンチ配置図



第9図 全体図

第3節 基本層序

濁り遺跡と久保田遺跡を通して掘削したトレンチ調査により、両遺跡に際だった土層の相違はみられず、一連の遺跡としてとらえることができる（第10図）。

現耕土（Ⅰ層）の直下には、南隣する西一里塚遺跡群ではみられない洪水砂層（Ⅱ層）が確認された。このⅡ層は暗赤褐色の非常に堅くしまった砂層であるが、ビニールや空き缶などの現代品も含まれていたためそれほど古い所産ではないと考えた。このことについて地元の方にお話をうかがったところ、昭和34年の伊勢湾台風による洪水砂層であるとのことであった。現耕土直下に堆積する砂層であること、また空き缶等の現代品が包含されていることを踏まえれば、聞き取り情報のとおり、Ⅱ層は現代の所産とみてよいだろう。昭和34年は佐久地方にとって8月14日の台風7号、9月27日の台風15号（伊勢湾台風）をはじめ、5月～8月には4回の降雹もあるなど甚大な自然災害に見舞われた一年であった。台風7号では家屋や樹木の倒壊や河川の増水が激しく、住居浸水や農作物など総額約5億5千万円にのぼるに多大な被害を受けている（佐久市志刊行会2003）。こうした点を踏まえてⅡ層はこの昭和34年の一連の台風が引き起こした濁川の氾濫によるものとして比定するに至った（註1）。なおⅡ層は7地点および②区（8地点）、平成19年度調査範囲（9地点）では堆積はみられなかった。また、このⅡ層にバックされたⅢ層上面では水田もしくは畑の畝が確認できた。Ⅲ層は1～4層に細分した。

Ⅲ層以下の様相は1・2地点、3～5地点、6・7地点、8地点、9地点でそれぞれ異なる。1・2地点ではしまりの強いシルトおよび砂質土（a～d及びA～D）が堆積するのに対し、3～5地点では遺物を包含するⅣa層がみられたが、堆積は5地点付近まででありそれより北側には堆積していない。Ⅳb層はⅣa層と比べてしまりが弱いことから分層したが、ここでも遺物の包含をみた。Ⅳb層は5地点では認められず、①-2区の南際にあたる4地点付近から①-3区にかけて堆積する。Ⅴ層・Ⅵ層もシルト質でしまりが強いが、遺物は包含しない。Ⅵ層は3地点のみにみられる土層である。

遺構は①-1～3区のみで確認された。遺構がⅣa層から掘り込まれていることは①-1区の東壁断面（5地点付近）にて判断できた。①-1・2区では基本的に地上上面で検出したが地山が落ち込む箇所についてはⅤ層上面にて検出した。①-3区ではⅣa層が遺物を豊富に含むことがトレンチ調査で判明していたため、Ⅳa層およびⅣb層は人力で掘り下げて遺物採集を行った。その際、Ⅳb層中位で柱材と思われる木材を伴う土坑が検出されたため、Ⅴ層上面にて遺構検出を行った。

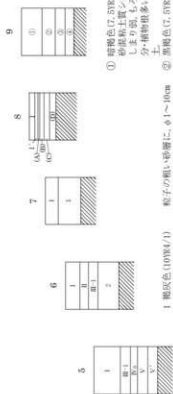
6・7地点は現耕土（Ⅰ層）および現代の洪水砂層（Ⅱ層）に覆われた旧耕土（Ⅲ-1層）の下層は流水性砂層となっており、流路であったことが理解できる。流路は、①-1区の西側からトレンチ1・2・9・13・15～18・25、③区西側にかけて確認されている。

②-1区の8地点ではⅠ層の下には砂～シルトが堆積する。地上上面にて検出を行ったが遺構は確認できなかった。

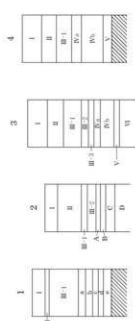
9地点では地山の上面にはシルト質粘土が堆積するが、遺物をほとんど含まない。

註1 戦後の佐久地方に甚大な被害をもたらした台風には他にも昭和24年のキティ台風、昭和25年のシェーン台風、昭和33年の台風21号などがあるが、聞き取り調査での知見から昭和34年の台風7号あるいは台風15号（伊勢湾台風）のものとして判断した。

692.00m
694.00m
696.00m
698.00m



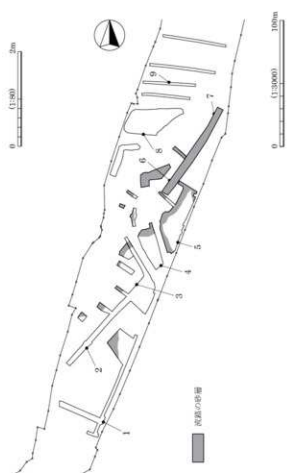
692.00m
694.00m
696.00m
698.00m

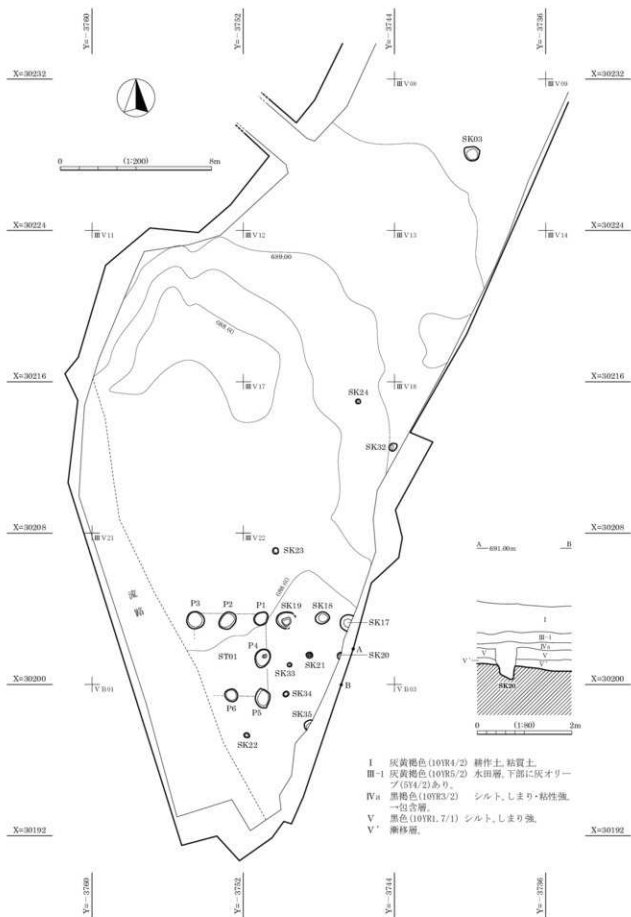


- I 灰黄褐色(10YR4/2) 耕作土粘質土。
- II 暗褐色(5YR3/3) 腐水成層、しまり強。
- III-1 灰黄褐色(10YR5/2) 水田層、下部に灰オリーブ色(5Y4/2)あり、硬の硬が確認される層相もあり。
- III-2 黒褐色(10YR3/1) 砂質シルト、灰白色砂層を間層にはさむところもあり、水田層。
- III-3 暗灰色(10YR5/1) シルト、しまり強、水田層。
- III-4 黒色(10YR2/1) シルトに腐植層が間層にはいる、水田層。
- IVa 黒褐色(10YR3/2) シルト、しまり、粘性強→包管層
- IVb 灰黄褐色(10YR4/2) シルト、しまり弱、粘性強→包管層
- V 黄色(10YR7/1) 粘土、しまり強。
- VI 灰オリーブ色(5Y4/2) シルト、しまり強。

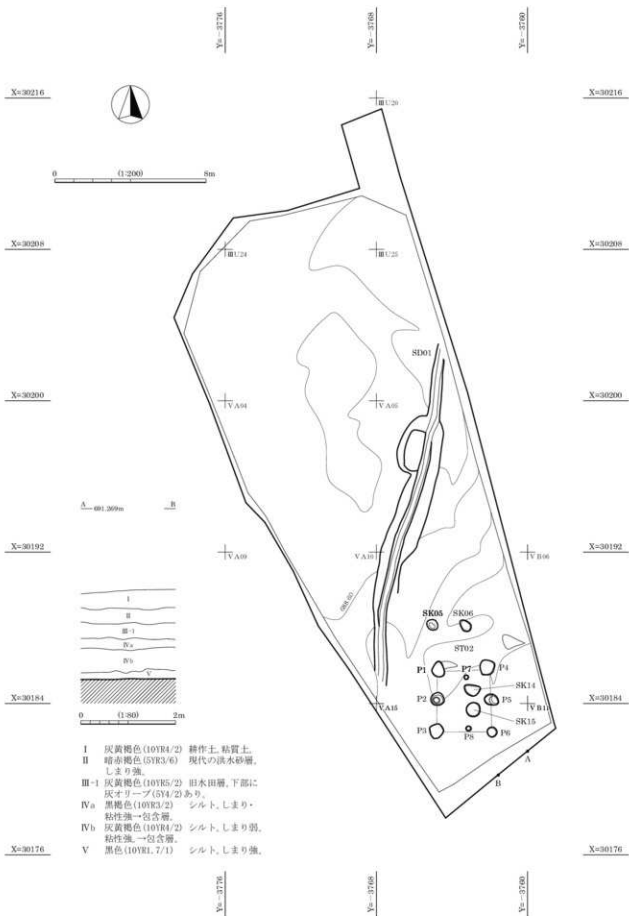
- A 濃い黄褐色(10YR4/3) シルト、しまりあり、弱いマンガン沈積あり。
- B 褐色(10YR4/4) 砂～シルト、しまり強、粗い砂質土混入。
- C 灰黄褐色(10YR4/2) シルト、しまり強。
- D 黒褐色(10YR3/1) 粘土、しまり強。
- a 灰黄褐色(10YR4/2) シルト、しまりあり。
- b 暗褐色(10YR3/2) 砂質シルト、しまりあり。
- c 暗褐色(10YR3/1) シルト、しまり強。
- d 暗褐色(10YR3/4) シルト、しまり弱。
- e 黒色(10YR2/1) シルト、しまりあり。

第10図 層序模式図

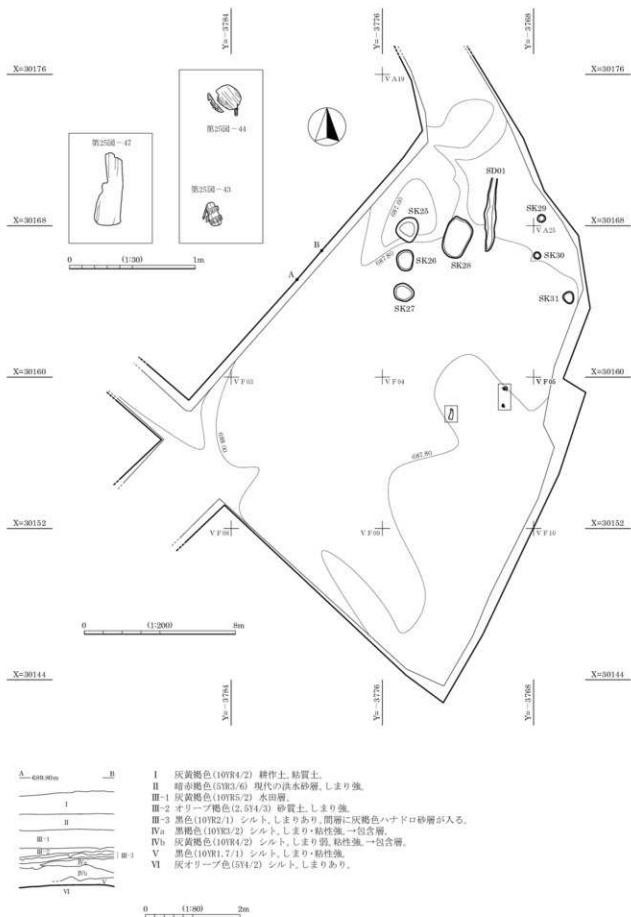




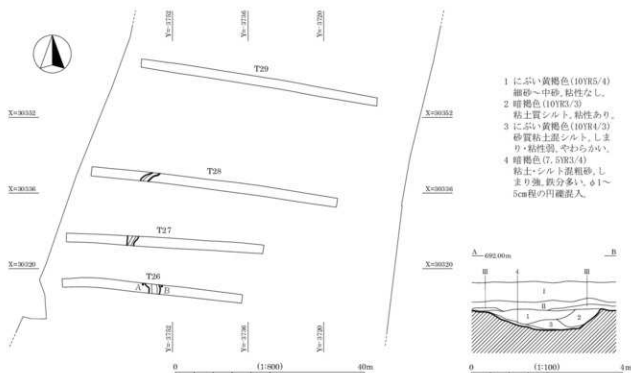
第11図 遺構配置図(①-1区)



第12図 遺構配置図(①-2区)



第13図 遺構配置図(①-3区)



第14図 トレンチ26～29・SD03

第4節 遺構と遺物

1. 掘立柱建物跡

ST01 [第15図 PL6]

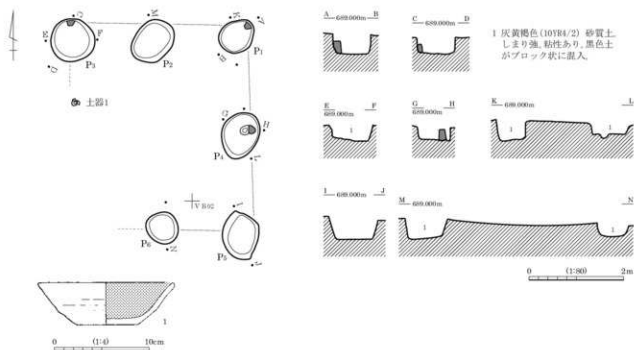
位置：①-1区 III V21・III V 22・V B01・V B02 グリッド

検出・重複関係：地山上面にて検出した。柱材を有するピットも含め、方形に配列される6基のピットが認められたため、掘立柱建物跡と認定した。重複関係はなかった。P1～P6までを確認した。南西部にもピットが存在していたはずだが、流路により削平された部分にあたるため検出できなかった。

規模：前述のとおり南西部のピットは流路のため削平されたと思われるが、桁行は2間で約4.35m、梁行が1間で約3.75mの側柱建物跡である。主軸方位はN-4°-Wを示す。柱間寸法は桁行が、約2.2m、梁行が約1.8～2mをはかる。柱穴は直径約70～100cmのやや不整な円形を呈する。検出面からの深さは約25～50cmをはかる。P1・P3・P4には柱材が残っていたが、腐食が激しくとりあげることはできなかった。柱材は径約10～15cmの太さであり、ピットの中心ではなく北側際および東側際に設置されていたことがわかる。埋土は灰黄褐色土の単層であった。

出土遺物：本跡を構成するピットからは、P1から須恵器坏片1点、P2から須恵器坏片1点、P3から内面黒色処理の土師器坏片1点、P4から須恵器坏片1点が出土したにすぎず、図示できるものはなかった。ただし、ピット内出土ではないがP3の南において内面黒色処理された土師器坏片(第15図-1)が地山上面から検出され、本跡に関連する遺物と理解した。

時期：図示した土器から、平安時代・9世紀後半に位置づける。



第15図 ST01 遺構図・遺物図

ST02 [第16図 PL8・9]

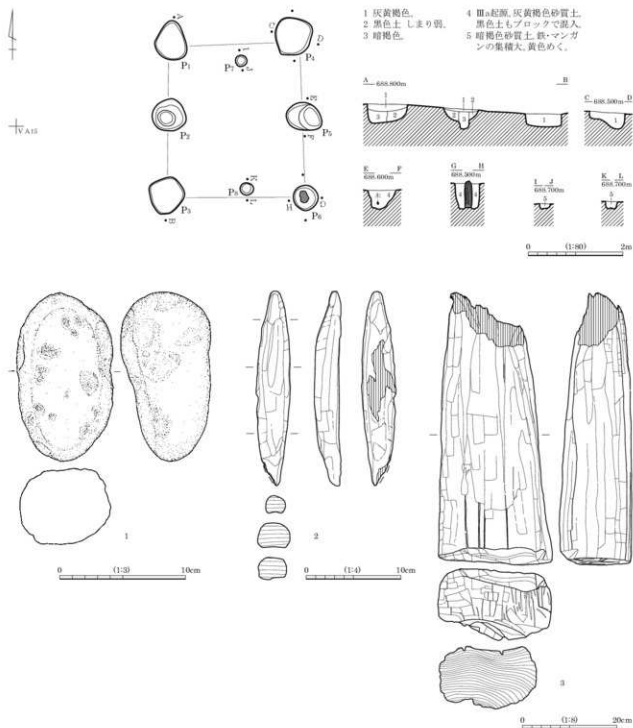
位置：①-2区 V A10・V A15グリッド

検出・重複関係：地山上面にて検出した。柱材を有するピットも含め、方形に配列されるピットが認められたため、掘立柱建物跡と認定した。SK14・SK15が本跡の内部にみられるが、本跡とは関連しない土坑と判断した。

規模：P1 から P6 までが主柱穴であり、P7 と P8 は補助的な役割を果たす柱穴と考えられる。桁行は2間で約3.3m、梁行は1間で約2.95mの側柱建物跡である。主軸方位はST01と同じくN-4°-Wを示す。柱間寸法は桁行が、約1.7m、梁行が約2.8mをはかる。柱穴はP1～P6については径約55～85cmのやや不整な円形を呈する。検出面からの深さは約25～55cmをはかる。P7・P8については径約25cmの小さめの柱穴であり、検出面からの深さ約10～15cmをはかる。P4とP6では柱材が残っていた。P4については腐食が進んでいたため取り上げられなかったが、P6の柱材は残りが良好であり、図示した。柱材はP4では西側に傾いた状態で検出されたが、本来はピット南東際に設置されていたことが理解できる。P4では中心に据えられていたことがわかる。埋土の観察によればP1およびP2の第3層は柱痕である可能性がある。

出土遺物：土器の出土はなかったが、石器と木製品が出土し、2点を図示した。P1から1の石器が出土した。敲打痕は明瞭ではないが、浅間山の天仁元年(1108)の噴火による追分火砕流、いわゆる「浅間の焼け石」を用いた敲石とみられる。2はP5から出土した角棒状の木製品であり、鍋蓋などの器具の取っ手である。削り出しの芯去分割材で作られている。樹種はヤマグワである。3はP6の柱材である。芯去分割材を用いた角材状の柱材であり、樹種はサワラである。

時期：土器の出土はみないが、ST01とは主軸方位も規模も近似しているため、ほぼ同時期の所産と判断し、平安時代・9世紀後半に位置づけたい。



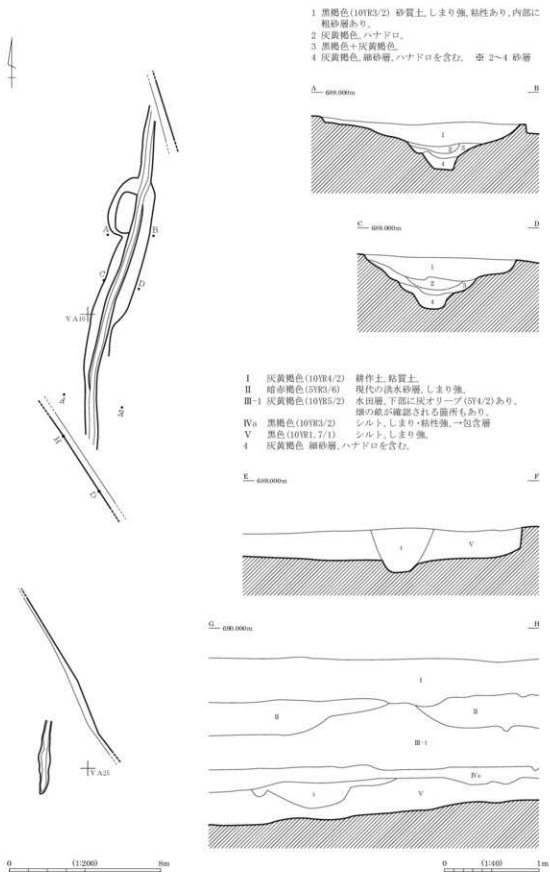
第16図 ST02 遺構図・遺物図

2. 溝跡

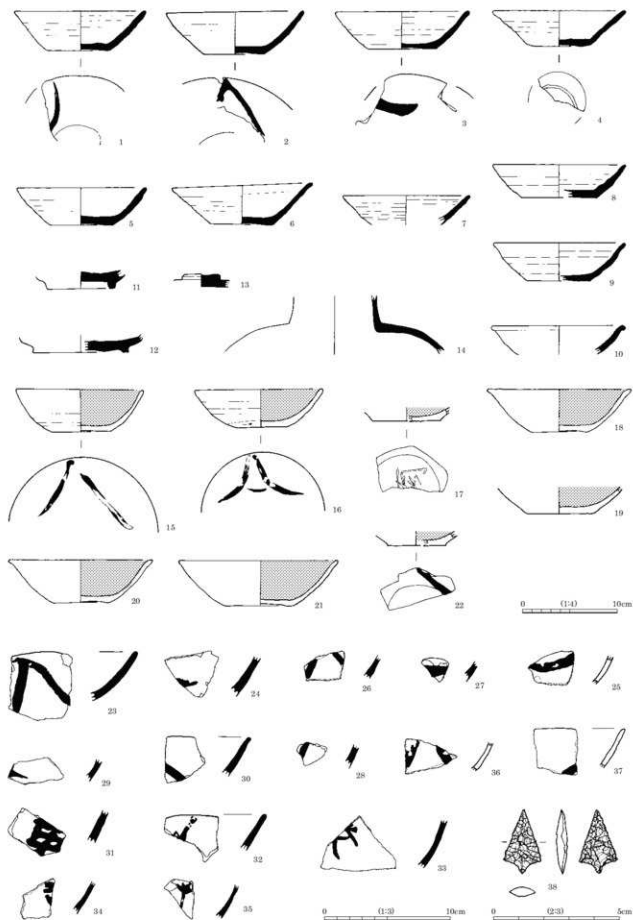
SD02は欠番である。またSD03については自然流路であるため、トレンチ調査で終了している。トレンチ26～29の配置図（第14図）のなかにその位置は示してある。

SD01 [第17図 PL5～7]

位置：①-2区・①-3区、IV U25・VI A05・VI A09・VI A10・VI A19・VI A24 グリッド



第17図 SD01 遺構図



第18図 SD01 遺物図

検出・重複関係：①-2区では地山上面で検出作業を行ったが、地形が下がるにつれてV層の堆積が厚くなる①-2区南壁際付近から①-3区にかけては、V層上面にて遺構検出した。

規模：幅は約30～210cmをはかるが、①-2区では部分的に広がる箇所がみられる。検出面からの深さは南へ向かうにつれ浅くなり、①-2区では約25～55cm、①-3区では約10cmである。検出できたのは①-3区の北側までであった。①-2区での断面形は中位で段を有した形態が見て取れる。埋土は①-2区では4層に分けられるが、南側では単層となっている。砂層が主体の埋土であり、流水を伴う溝跡であることが理解できる。

出土遺物：土器の出土は多く、約1,000点・約7,900gを数えた。弥生土器2点と灰軸陶器1点を除き、他は須恵器と土師器である。図示したのは土器37点と石器で唯一出土したチャート製石鏃1点である。須恵器・土師器ともに坏が多く、しかも破片資料が目立つ。土師器坏はすべて内面黒色処理されたものである。坏以外の器種は図示した須恵器の坏蓋(13)・長頸壺(14)の他には、須恵器甕、土師器甕の破片等がわずかに検出された程度である。本跡で特筆できるのは、須恵器坏も内面黒色処理された土師器坏も墨書・刻書されたものが多いことである。墨書・刻書された22点すべてを図示した。2・15・16・23は「八」と書かれており、「入」か「人」と記したものの、あるいは「八」という記号とも考えられる。1・3・22～37も同様であると理解できよう。この他は5点にすぎず、17は「南」、31は「甲」、33は「本」あるいは隣の「父」と記されている。「大井」を一字で示している可能性もあろう。34・35は不明である。また馬の上顎白歯2点と切歯1点が出土している。

時期：出土遺物から平安時代・9世紀後半に位置づける。

3. 土坑

土坑は23基が検出された。ここでは9基についてのみ記述し、他については第6表を参照していただきたい。なお、SK01・SK02、SK07～SK12は欠番である。

SK03 [第19図]

位置：①-1区、IV V 03 グリッド

検出・重複関係：地山上面にて検出した。重複関係はない。

規模：80×75cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さは最深部で28cmをはかる。埋土は2層に分けられた。

出土遺物：出土しなかった。

時期：出土遺物をみなかったため、時期決定は難しいが、他の検出遺構・出土遺物がほとんど9世紀後半に限定されるため、同時期に比定される可能性が高いと思われる。

SK05・SK06 [第19図 PL6]

位置：①-2区、VI A10 グリッド

検出・重複関係：地山上面にて検出した。重複関係はない。柱痕とみられる土層が観察されたため、当初は本跡の東に位置するSK06とともに掘立柱建物を構成するピットとも考えたが、他に組むことができるピットがないため、土坑として報告する。

規模・出土遺物：SK05は、62×53cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さは最深部で45cmを測る。埋土は6層に分けられたが第6層は柱痕の可能性が高い。富壽神宝1点が出土した。他には平安時代の土師器片2点・須恵器片2点(計約30g)が出土したのみであり図示できるものはなかった。SK06は、

71 × 52cmの不整な楕円形を呈し、検出面からの深さは最深部に43cmを測る。埋土は3層に分けられ、第3層は柱痕の可能性がある。遺物は須恵器坏片1点と内面黒色処理された土師器坏片1点(約10g)のみの出土であり、図示できるものはなかった。

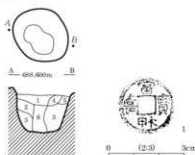
時期: SK05からは、皇朝十二銭のひとつである富壽神宝(初铸 弘仁9年・818年)が出土しているものでそれ以降の所産ということになる。伴出した土器片から9世紀後半頃に位置づける。埋土の様相や形態が類似するSK06も同時期と考える。

SK03



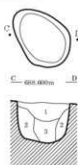
- 1 黒褐色(10YR3/2) 砂質土。しまり・粘性あり。バミス粒を多く含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3) 砂質土。しまり・粘性あり。バミス粒を多く含む。

SK05



- 1 灰黄褐色土。
- 2 暗褐色 砂質土。粒子均一。
- 3 黒褐色 地山の土がブロックで混入。
- 4 にぶい黄褐色 砂質土。
- 5 黒褐色 砂質土。
- 6 暗褐色 砂質土。柱痕か?

SK06



- 1 灰黄褐色土。
- 2 黒褐色 砂質土。
- 3 黒色 地山の土がブロックで混入。柱痕か?

第19図 SK03・05・06 遺構図・遺物図

SK25・SK26・SK27 [第20図 PL8～10]

位置：①-3区、VI A19・VI A24グリッド

検出・重複関係: 重複関係はない。V層上面にて検出した。いずれも柱材を伴うものであり、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、対応するビットがみあたらず、建物として組むことはできないため、土坑として報告する。

規模・出土遺物: SK25は、125 × 112cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さは最深部に50cmを測る。重機で剥いでいたところ、柱材と考えられる3を引っかけてしまい、現位置を失ってしまったが本跡に伴うものである。柱材が動いてしまったため埋土は不明であり、また掘り方の形状もその影響を受けている可能性がある。柱材はコナラ節を用いている。他にも木製品には著の欠損品が出土する。サワラの芯持丸木材である。土器は、須恵器片5点、土師器片10点(計約250g)が検出されたのみであり、このうち須恵器坏片1点を図示した。糸切り底の底部である。また種実7点(オニグルミ)も検出された。SK26は、110 × 90cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さは最深部に35cmを測る。柱材はクリの芯持丸木材である。これも重機の剥ぎの際に現位置を失っている。木製品では4も出土している。サワラの棧材である。土器は図示した須恵器2点・63gのみであり、ともに糸切りの底部のみの残存であった。この他、4点の種実(オニグルミ)も出土している。SK27は、105 × 95cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さは最深部に75cmを測る。埋土の中位から柱材が斜めの状態で検出された。これも現位置は保っていない可能性がある。芯持丸木材のコナラ節の柱材である。他の遺物はまったく出土しなかった。

時期: SK25とSK26は出土土器から9世紀後半の所産と考えられる。SK27は出土土器をみないため不明であるが、形態が類似しているためSK25・26と同時期である可能性が高いと思われる。

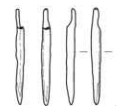
SK 25



A
600.000m



0 (1:40) 1m

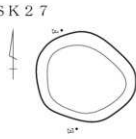


0 (1:4) 10cm

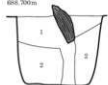


0 (1:8) 20cm

SK 27



E
600.000m



0 (1:40) 1m



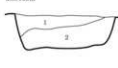
0 (1:8) 20cm

1 黒褐色 しまり
強、粒子細かい。
2 黒色 シルト。
粒子細かい。

SK 26



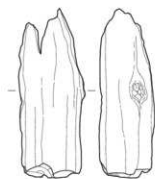
C
600.000m



0 (1:40) 1m



0 (1:4) 10cm



0 (1:8) 20cm

1 黒褐色 しまり強、粒子細かい。
2 暗褐色 地山の土がブロックで
混入。

第20図 SK25~27 遺構図・遺物図

SK28 [第21図 PL6・8]

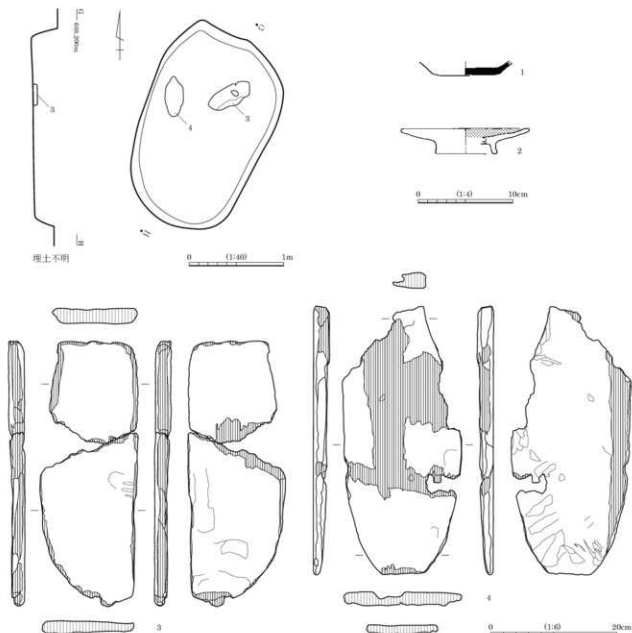
位置：①-3区、VI A19 グリッド・VI A24 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。規模：210 × 140cmのやや不整な楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。

出土遺物：底面から木製品2点が出土した。ともに直柄楸の未製品及び素材と思われる。鋤である可能性もある。樹種はともにコナラ属コナラ亜属クスギ節である。土器は、約200gが出土し、図示した須恵器坏1点と内面黒色処理された土師器皿1点の他は、須恵器・土師器の小破片が検出された。他にはチャート石核1点、種実3点（オニグルミ）が出土しているのみである。

科学分析：図示した木製品2点の放射性炭素年代測定を行った。3が $1,190 \pm 20$ yrBP、4が $1,235 \pm 20$ yrBPの値を得た。暦年校正結果では、3がcalAD782 - calAD880、4がcalAD695 - calAD855である。出土した土器は9世紀後半に比定できるので、大きな齟齬はない。

時期：出土遺物および放射性炭素年代測定結果から9世紀後半に位置づける。



第21図 SK28 遺構図・遺物図

SK30・SK31 [第22図 PL9]

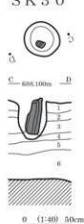
位置：①-3区、VI A25 グリッド

検出・重複関係：重複関係はない。V層上面にて検出した。ともに柱材を伴うものであり、SK25～SK27と同様に掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、対応するピットがみあたらず、建物として組むことはできないため、これらも土坑として報告する。

規模・出土遺物：SK30は、径37cmの円形を呈し、検出面からの深さは最深部で40cmを測る。土器等の遺物は出土しなかった。柱材はサワラの芯去分割材を用いており、搬送時の紐掛け溝が認められる。SK31は、径60cmの円形を呈し、検出面からの深さは最深部で40cmを測る。出土遺物は土師器小片1点(約5g)が出土したにすぎない。柱材はコナラ属コナラ亜属クスギ節の芯持丸木材を用いている。

時期：出土遺物から所産時期を判断するのは難しいが、他の検出遺構・出土遺物がほとんど9世紀後半に限定されるため、同時期に比定される可能性が高いと思われる。

SK30



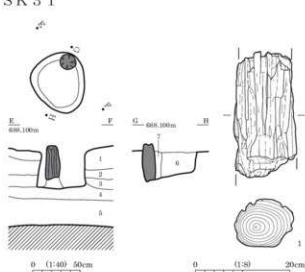
- 1 IVb層。
- 2 灰黄褐色 粗砂層。
- 3 オリーブ黒色 シルト、しまりあり。
- 4 黒色 シルト、灰黄褐色砂質土含む。
- 5 褐色(10YR4/1) シルト。
- 6 黒色(2.5YR2/1) シルト～粘土、しまりあり。

3・4 V層に対応。
5・6 VI層に対応。



0 (1:40) 50cm

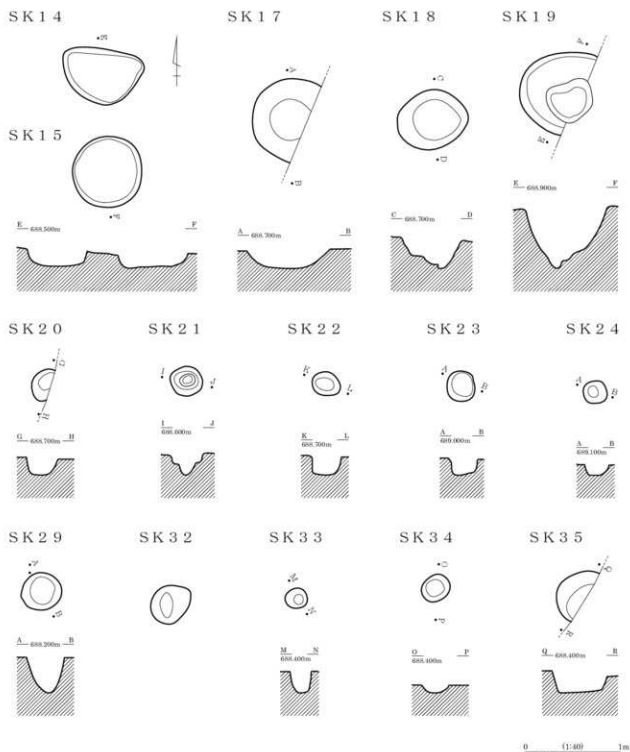
SK31



- 1 IVb層。
 - 2 オリーブ黒色 シルト、しまりあり。
 - 3 黒色 シルト、灰黄褐色砂質土含む。
 - 4 褐色(10YR4/1) シルト。
 - 5 黒色(2.5YR2/1) シルト～粘土、しまりあり。
 - 6 灰黄褐色 シルト、IVa層起源の上。
 - 7 灰褐色 シルト、しまり強。
- 2・3 V層に対応。
4・5 VI層に対応。

0 (1:8) 20cm

第22図 SK30・31 遺構図・遺物図

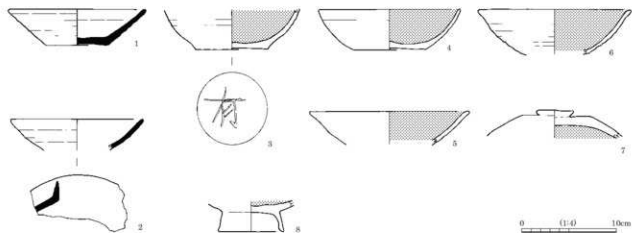


第23図 SK 遺構図 (その他)

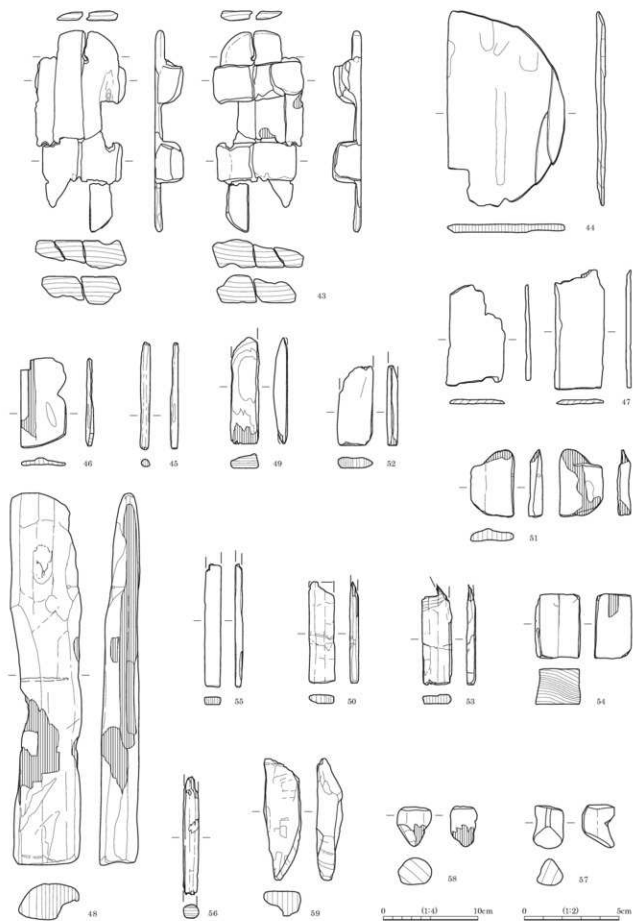
第4章 濁り遺跡・久保田遺跡

遺構番号	遺構図版	地区	グリッド	平面規模 (cm)	深さ (cm)	層 土	出土遺物		備 考
							種別数量	掲載遺物	
SK01	SK01 欠番								
SK02	SK02 欠番								
SK03	第19図	①-1	BV03	80×75	26	1.黒褐色 (10YR3/2) 砂質土。 しまり・粘質あり。パリス粒を多く含む。 2.にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土。 しまり・粘質あり。 パリス粒を多く含む。	なし	なし	本文に記載あり
SK04	欠番								
SK05	第19図	①-2	MA10	62×53	40	1.灰黄褐色土。 2.暗褐色 砂質土。粒子細かい。 3.黒褐色 地山の土がブロックで混入。 4.にぶい黄褐色 砂質土。 5.黒褐色 砂質土。 6.暗褐色 砂質土。粒粗め。	土器 約30g (土師器・須恵器類) 種実 (オニズル) 1点 1個 骨 (鹿本産)	第19図 SK05-1	本文に記載あり
SK06	第19図	①-1	MA10	71×32	43	1.灰黄褐色土。 2.黒褐色 砂質土。 3.黒色 地山の土がブロックで混入。粒粗め。	土器 約10g (土師器・須恵器)	なし	本文に記載あり
SK07	欠番								ST02 P1～欠票
SK08	欠番								ST02 P2～欠票
SK09	欠番								ST02 P3～欠票
SK10	欠番								ST02 P4～欠票
SK11	欠番								ST02 P5～欠票
SK12	欠番								ST02 P6～欠票
SK13	欠番								ST02 P7～欠票
SK14	第23図	①-1	MA10	80×62	16	灰黄褐色土の単層	なし	なし	
SK15	第23図	①-1	MA10 MA15	76×73	13	灰黄褐色土の単層	なし	なし	
SK16	欠番								ST02 P8～欠票
SK17	第23図	①-1	BV22	88×36	20	黒色土の単層	なし	なし	
SK18	第23図	①-1	BV22	76×64	30	黒色土の単層	なし	なし	
SK19	第23図	①-1	BV22	93×78	63	灰黄褐色土。(10YR4/2) しまり強。粘質あり。 褐色土がブロック状に混入。	土器 約20g (土師器・須恵器) 種実 (オニズル) 1点 7点	なし	
SK20	第23図	①-1	BV22	35×20	18	黒色土の単層	土器 約20g (土師器)	なし	
SK21	第23図	①-1	BV22	34×31	22	黒色土の単層	なし	なし	
SK22	第23図	①-1	BV02	31×26	20	黒色土の単層	土器 約10g (須恵器)	なし	
SK23	第23図	①-1	BV22	32×29	18	黒色土の単層	なし	なし	
SK24	第23図	①-1	BV17	25×23	11	黒色土の単層	なし	なし	
SK25	第20図	①-3	MA19 MA24	125×112	50	黒色土の単層	土器 約250g (土師器・須恵器) 種実 (オニズル) 1点 7点	第20図 SK25-1～3	本文に記載あり
SK26	第20図	①-3	MA24	110×90	35	1.黒褐色 しまり強。粒子細かい。 2.暗褐色	土器 約60g 材料1点 種実 (オニズル) 1点 4点	第20図 SK26-1～3	本文に記載あり
SK27	第27図	①-3	MA24	105×95	75	1.黒褐色 しまり強。粒子細かい。 2.黒色 シルト。粒子細かい。	材料 1点	第20図 SK27-1	本文に記載あり
SK28	第21図	①-3	MA19 MA24	210×140	30	黒色土の単層	土器 約200g (土師器・須恵器) 種実 (オニズル) 2点 3点	第21図 SK28-1～4	本文に記載あり
SK29	第23図	①-3	MA20	42×39	38	黒色土の単層	土器 約3g (土師器)	なし	
SK30	第22図	①-3	MA25	37×37	40	1.BV5層。 2.灰黄褐色 粗砂層。 3.オリーブ褐色 シルト。しまりあり。 4.黒色 シルト。灰黄褐色砂質土含む。 5.黒褐色 (10YR4/1) シルト。 6.黒褐色 (2.5YR2/1) シルト～粘土。しまりあり。 7.4 V層に対応。 8.4 V層に対応。	材料 1点	第22図 SK30-1	本文に記載あり
SK31	第22図	①-3	MA25	60×60	40	1.BV5層。 2.オリーブ褐色 シルト。しまりあり。 3.黒色 シルト。灰黄褐色砂質土含む。 4.暗褐色 (10YR4/1) シルト。 5.黒色 (2.5YR2/1) シルト～粘土。しまりあり。 6.灰黄褐色 シルト。B4層粘質土の上。 7.灰褐色 シルト。しまり強。 8.3 V層に対応。 4-5 V層に対応。	土器 約5g (土師器) 材料 1点	第22図 SK31-4	本文に記載あり
SK32	第23図	①-1	BV17 BV18	40×40		黒色土の単層	なし	なし	
SK33	第23図	①-1	BV22	23×23	24	黒色土の単層	なし	なし	
SK34	第23図	①-1	BV02	31×26	9	黒色土の単層	なし	なし	
SK35	第23図	①-1	BV02	58×31	22	黒色土の単層	なし	なし	

第6表 SK 一覧表



第24図 ①区 遺構外出土遺物図 (1)



第25図 ①区 遺構外出土遺物 (2)

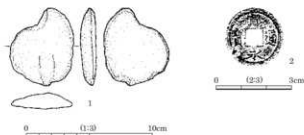
第5節 遺構外出土の遺物

1. 土器・土製品 (第24図 PL6・7)

遺構外では、トレンチから約400gの須恵器片・土師器片が検出された。また①-3区のIV a層・IV b層からは約5,300gが出土した。このうち約2,520gが須恵器であり、約2,940gが土師器である。内面黒色処理された土師器の坏・蓋類が4480gと大半を占め、甕・壺類は980gをはかるにとどまる。図示したのは須恵器坏28と土師器坏・蓋類13点である。SD01と同じく墨書・刻書土器が多く、こちらも「へ」と記されたものが28点(2・9～29・35～40)を数える。他には3の「有」、32～34の「甲」、判読不明な30・31・41がある。この他には、灰釉陶器の小片が1点のみ検出された。弥生土器は30点・約250gが出土しており、いずれも破片で摩耗が激しいが、後期が主体とみられる。また中近世土器も15点・約350gが検出されている。いずれも破片であるため図示したものはないが、中世では古瀬戸の甌子や香炉、天目茶碗、常滑の壺や内耳鍋などがみられ、近世では瀬戸美濃の灰釉丸碗や瓶類、地元・前山焼の徳利や碗などが認められる。

2. 石器・石製品 (第24・26図 PL7)

遺構外から8点が出土した。①-1区から出土した第24図-2は一部欠損しているが、黒曜石製の石錐である。第26図-1は②-1区から出土した軽石製の石錘であり、上下両端に紐掛け部の溝がみられる。図示していないが他には①-3区からチャートの剥片や石核が6点出土している。



第26図 ②・③区 遺構外遺物図

3. 木製品 (第25図 PL8・10)

24点が出土し、このうち16点を図示した。すべて①-3区のIV b層から出土している。43・44・47は①-3区のV F04グリッドのIV b層から近接して出土した(第13図)。43はキハダの連南下駄であり、鼻緒孔が右に偏っているため左足用である。さらに左側が減っていることからO脚の人が履いていた可能性も指摘できる。44はサワラ材の円形の曲物の底板である。47はヒノキ科の板目の薄いへぎ板であり、屋根材の可能性がある。取り上げ時に約20片に分かれてしまったが、このうちの2片を図示した。45は欠損しているがヒノキ科材の箸である。46も円形曲げ物の底板である。サワラである。48は成形角材で何らかの部材と思われる。樹種はサワラである。49は角材であり、椀材の一部の可能性がある。ヒノキ科である。44と同一とみられる。50はサワラ材の椀目板でこちらも椀材の可能性が高い。51は欠損部分が多い不明製品だが、鋸類の刃部の可能性がある。コナラ属コナラ亜属コナラ節である。52・53・55は椀材の一部である。樹種は52がヒノキ科、53・55がサワラである。54は芯去分割材を用いた角材であり、建築部材の端材と考えられる。樹種はサワラである。56・57・58は棒状木製品である。樹種は56がサワラ、57がコナラ属コナラ亜属クスギ節である。57は又鋸の刃部である可能性もある。58は樹種同定していないが、棒状木製品の断欠品である。59は鋸類の断欠品と思われる。

4. 銭貨 (第26図 PL6)

③区の遺構外から寛永通宝が1点(第26図-2)出土した。本遺跡から銭貨はSK05出土の富壽神宝とあわせて2点の出土をみた。

5. 自然遺物(種実)

①-3区のⅣa層から245点の種実が検出された。その他、トレンチ14のⅣa層から18点、トレンチ20のⅡ層から1点が出土している。すべてオニグルミである。

第6節 小結

隣接する濁り遺跡と久保田遺跡は、別の遺跡名にはなっているが、一連の遺跡と考えられる。トレンチによる確認調査の結果を踏まえて面的調査範囲を決定したが、①-1・2区、②区は濁り遺跡の範囲に含まれ、③区は久保田遺跡の範囲となる。そして①-3区で両遺跡が接することになる。遺構が検出されたのは濁り遺跡の範囲内に限られる。久保田遺跡から出土した遺物は③区から出土した寛永通宝1点(第26図-2)の他は、トレンチT20～24から検出された土器片約20点にすぎない。

濁り遺跡の範囲内で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟と溝跡1条と土坑23基である。トレンチによる確認調査によれば、両遺跡の立地する地形は、低地と「流れ山」の残丘からなり、低地では流路が幾重にも流れていることが判明した(第10図)。検出された遺構は調査対象地の東側に限られており、流路を避けた場所に集落を営んだことが理解される。ただし掘立柱建物跡ST01のピットの一部分が流路により失われていることを踏まえれば、流路となっている場所にも遺構が存在した可能性も否定できない。

調査区内においては、竪穴住居跡はみられず、掘立柱建物跡と土坑、それに溝跡から成る集落であることがわかる。検出された遺構の配置からみれば調査区外の東側に集落は広がっていくものと推測される。

これらの遺構の所産時期は、伴出遺物から9世紀後半に位置づけられる。伴出遺物をみない土坑もあるが、埋土の様相や遺構およびⅣa層・Ⅳb層から出土した遺物はこの9世紀後半に限られるため、これらも同時期の所産である可能性が高いであろう。

また検出された遺構は少なかったものの、墨書・刻書土器がSD01から22点、遺構外から35点の計57点の出土をみている。溝跡から墨書土器が多量に出土する事例は松本市下神遺跡SA102、長野市榎田遺跡SD47などにもみられる。本遺跡で特筆されるのは「へ」と記されたものが57点のうち45点と圧倒的な割合を占めていることである。「入」「人」と書かれたものである可能性が高いが、「へ」という記号墨書の可能性も否定できない。いずれにせよ本遺跡を特徴づける墨書である。

両遺跡が立地する濁川の右岸およびその対岸にひろがる低地は、かねてから水田生産地帯であった可能性が指摘されていた。そして濁り遺跡の平成4年度の発掘調査では所産時期は明確にならなかったものの佐久地方ではじめて面的に水田跡が検出されている。しかしながら今回の調査区では水田跡は認められず、幾重にも流れる流路とそれに近接する場所に9世紀後半の集落が営まれていたことが判明した。佐久平の古代集落を考える上で貴重な資料を得ることができたといえよう。

第5章 西一里塚遺跡群

第1節 遺跡の概観

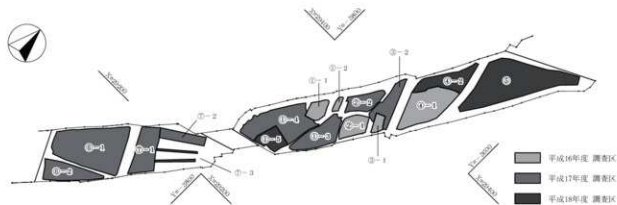
西一里塚遺跡群は、佐久市岩村田地籍・平塚地籍に所在し、湯川右岸に位置する（第28図）。地番は岩村田1614番地・平塚213番地ほかである。地形は南へ行くにしたがい低くなり、標高は約680mから685mを測る。現景観では、地形は平坦な微高地と、流れ山と呼ばれる浅間山による約23,000年前の塚原土石なだれによる残丘とがみられていた。平坦な微高地は、今回の調査により北端および西端で黒色土が厚く堆積する湿地状の低地へと落ち込んでいくことが判明した。このように多様な地形の上に営まれていた遺跡である。

西一里塚遺跡群は、餅田遺跡と西一里塚遺跡からなる。餅田遺跡については昭和9年に刊行された八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学調査』において土製紡錘車と土製勾玉の出土が紹介されており、以来、弥生時代後期から平安時代に至る遺跡として周知されていた（八幡1934）。

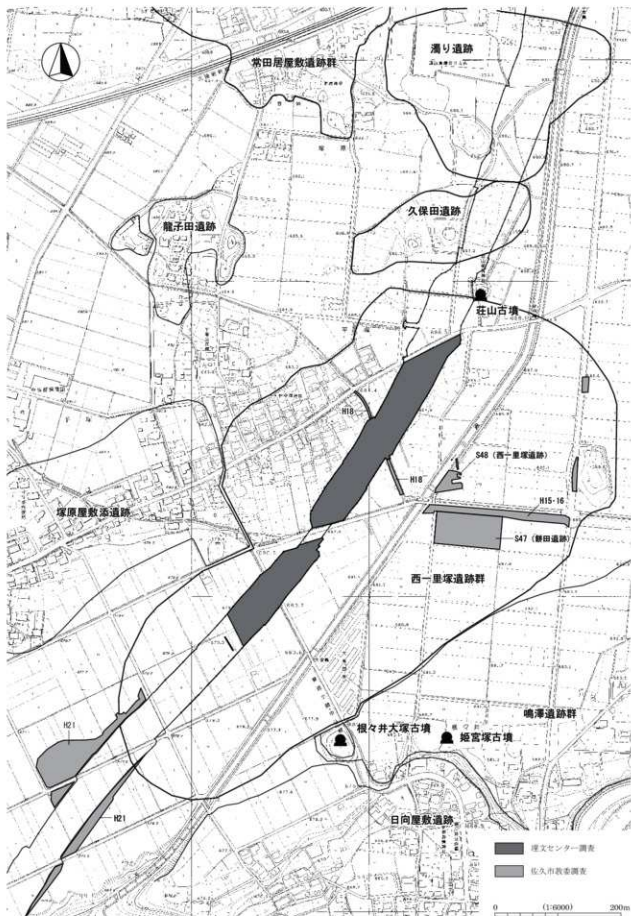
昭和40年代後半に至ると、本遺跡群も含む佐久平地区圃場整備事業が計画されることとなり、それに伴い佐久市教委が、昭和47年には餅田遺跡を、昭和48年には西一里塚遺跡を発掘調査した。餅田遺跡では弥生後期以降とみられる溝3条が、西一里塚遺跡からは弥生後期の竪穴住居跡11軒、土坑7基、溝6条、環壕1条が検出された。弥生時代の環壕の発見は千曲川流域では初めてのことであり、大きな注目を集めた（佐久市教委1973、臼田1982）。また、昭和58年には表面採集ではあるが、西一里塚遺跡で南関東系の外来系土器がみつかった（佐久考古学会1990）。

西一里塚遺跡については、他にも以下の発掘調査が佐久市教委により行われている。平成15年・16年には県道塩名田佐久線の改良工事に伴い、発掘調査を行った（西一里塚遺跡Ⅱ）。平成15年調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡7軒、土坑1基、ピット74基、溝3条が、平成16年調査では、溝状遺構2条、土坑1基、ピット34基が検出されている（佐久市教委2004a・2005）。

本報告の埋文センターによる中部横断自動車道用地内の発掘調査は前記のとおり平成16年～18年に行った。平成16年3月に県教委が実施した西一里塚遺跡群隣接地の試掘調査により、従来の遺跡範囲より南西側に伸びていることが確認され、遺跡拡大となった（県教委2007）。今回の調査区でいえば⑥区にあたる範囲である。なお、①区と⑦区の間部分については、長野県佐久建設事務所による道路改良工事



第27図 年度別調査区



第28図 西一里塚遺跡群 遺跡範囲図

(市道11-1号)が計画されていたため、佐久市教委で対応することになり、平成17年に試掘調査が実施され、遺構は検出されなかった。佐久市教委の遺跡範囲は県道塩田田佐久線(旧中山道)の北側にまで伸びているが、この部分は県教委の試掘調査により遺構・遺物が確認されなかったため、今回の調査区からは外すこととなった。

また、佐久市高速交通課が計画する関連事業も急ピッチで進められ、平成18年には中部横断道路に隣接する市道(S2-232号)の改良工事に伴う発掘調査が実施された(西一里塚遺跡Ⅲ)。検出された遺構には、弥生時代中・後期の竪穴住居跡8軒、土坑1基、溝状遺構9条がある(佐久市教委2009a)。

平成21年には中部横断道の地域活性化インターチェンジ整備事業(中佐都IC)に伴う発掘調査が実施された(西一里塚遺跡Ⅳ)。土坑4基、溝状遺構2条、ピット3基が検出された。出土土器には弥生時代後期の他、須恵器等がみられる。弥生時代後期土器片が出土するM2号溝状遺構は微高地を囲むような形状を呈しており、集落の区画溝の可能性が指摘されている(佐久市教委2010)。

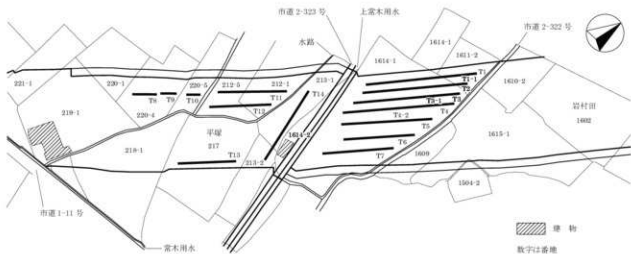
他にも佐久市教委による試掘調査や立会調査が幾度にもわたり実施されてきている(佐久市教委2004b・2006・2007・2008・2009b)。

第2節 調査の概要

本遺跡群の発掘調査は、平成16・17・18年度の3カ年度に及んだ。調査表面積は計25,350㎡にのぼる。

調査対象地は幅約50m、長さ約580mにも及ぶため調査区は①～⑦区に分けた。調査区は用地取用や工事工程との兼ね合い、また湧水が激しく調査区ごとに排水用トレンチを掘削する必要があることや遺跡内を通る水路は現状で維持することが求められたことなどからさらに細分することとなった。①区は4地区に、②・③・④・⑥はそれぞれ2地区に、⑦区は3地区に細分した(第27図)。

平成16年度は、10月から本格調査を開始する予定であったが、そのためには用地境に仮畦畔をつくる必要があるため、4月に仮畦畔を造り調査に備えた。また本調査に入る前に遺跡の性格を把握するため、8月に1名の調査研究員により確認調査を実施した。確認調査では、平成16年度調査予定の②区・③区・④区にあたる箇所に重機によるトレンチを入れた(第29図)。④-1区では湧水が激しく地山面まで掘り下げることはできなかったが、複数の調査面の存在を把握できた。本格調査は3名の調査研究員で9月か



第29図 確認調査トレンチ配置図(縮尺不同)

らスタートしたが1名は11月から他遺跡の整理作業に回り、後に今井西原遺跡調査班が合流し、4名体制で調査を終えることとなった。②-1区、③-1区、④-1区を調査対象とした。低地にあたる④-1区については水田面2面を含む3面を調査した。

平成17年度は2名の調査研究員で開始した。用地取用の状況から当初は②-2区と③-2区のみが調査対象であったが、6月に用地取用が終わったことから、①-3・4区、⑥-1・2区も調査することとなった。ところが、7月に県教委の試掘調査により佐久市横和地籍で森平遺跡が新発見された。すでに工事着手していた部分でもあることから発掘調査が急がれ、この森平遺跡も西一里塚遺跡群調査班が対応することになった。そこで並行して8月22日から森平遺跡の表土剥ぎを開始し、9月15日をもって西一里塚遺跡群の調査を中断した。森平遺跡の発掘調査が軌道に乗った10月4日から西一里塚遺跡群の調査を再開した。⑦区についてはボックス部分のみを当該年度中に引き渡してほしいとの事業者側の要望に応じて、当該部分を⑦-1区として調査した。③-2区では水田面2面を含む3面の調査、⑥-2区については2面の調査となった。

また、次年度調査の効率を上げるため、平成18年2月28日～3月14日までの期間に①-5区及び⑤区の表土剥ぎを実施した。⑦区の残件部分については工事用道路を敷設する必要が生じたため、北側部分(⑦-2区)については、事業者側の重機を用いて3月27日に地山面までの剥ぎ及び検出作業を行ったが、遺構は確認されなかった。

平成18年度は、2名の調査研究員でスタートしたが、8月2日からは1名が他遺跡へ回った。残った①-5区、④-2区、⑤区、⑦-3区の調査を実施した。このうち④-2区は2面、⑤区については4面の調査となり、9月11日にすべての発掘調査を終了した。



②-2区 調査風景



⑥-1区 調査風景

第3節 基本層序

本遺跡の調査区は北東-南西方向に約580mに伸び、立地する地形は、微高地、低地、流れ山残丘の3つに大別される。こうした多様な地形に応じて土層も地区により異なっている。そのため、細かい土層説明は地区ごとに行い、ここでは全体的な層序について概略を述べる(第30図)。

①～⑤区の基本層序としては調査初年度(平成16年度)に実施した④-1区低地の土層を基軸とした。

④-1区低地では、現耕土の下層に水田層3面が確認された。現耕土～第1水田被覆砂層をⅠ層とし、第1水田層～第2水田被覆砂層をⅡ層、第2水田層～第3水田被覆砂層をⅢ層、第3水田層をⅣ層とし、地山の浅間軽石流堆積物をⅤ層とした。Ⅳ層は遺物包含層でもある。

②-2区、③-2区もこの層序に沿って観察した。第1水田及び第2水田は北壁断面では被覆砂層が認められたが、砂層の堆積範囲は狭く、面的調査はできなかった。②-2区低地部では第2水田の直下には砂層がみられず、水田面としては検出できなかった。しかしながら層序からすれば第3水田に相当する層であると理解できたため、本層をⅣ層とした。また遺物包含層にもあたる。

③-2区では第1水田が認められなかった。また低地部では低地流路の直上に第3水田がみられる。

微高地にあたる①-3区、①-4区でも北壁断面では現耕土の下に水田層はみられたが、対応関係は不明といわざるをえなかった。ただし、地山直上の遺物包含層の堆積は共通しているため、これをⅣ層とした。

また②-2区微高地では現耕土直下に水田層があり、その下層に第2水田に対応すると考えられる土層の堆積がみられたため、Ⅲ層とし、さらにa～c層に細別し、この層位ごとに遺物をとりあげた。

同じ低地の⑤区でも水田層が3面確認されたが、③-2区・④-1区とは対比できない水田層もあったため、上層より水田A・水田B・水田Cとした。水田Aは第1水田に、水田Cは第2水田に比定できるが、水田Bは他地区での対比はできない。また第3水田は検出できなかったが、遺物を包含する相当層が確認できたため、これをⅣ層とした。

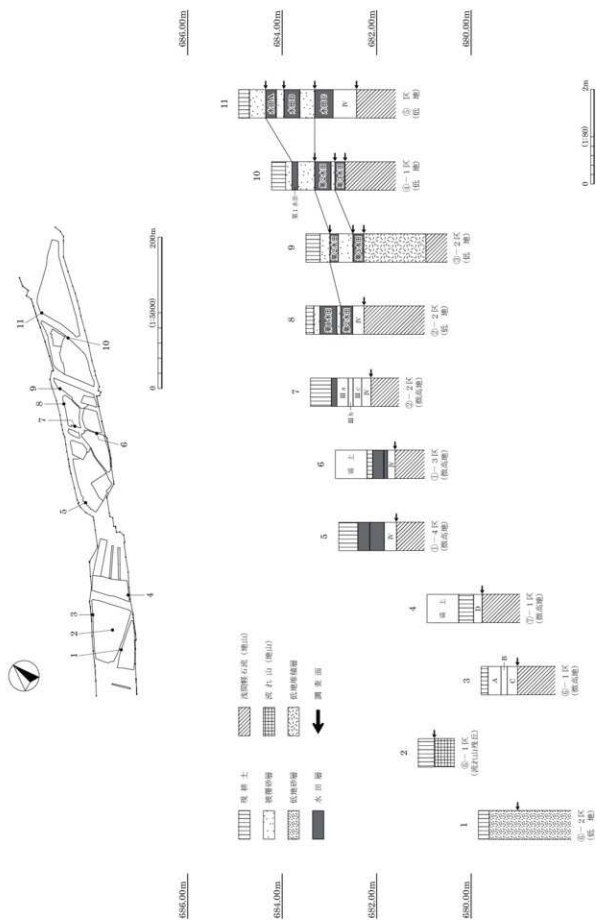
このように①～⑤区低地では砂層に覆われた水田面が4面(上層より第1水田=水田A、水田B、第2水田=水田C・第3水田)認められ、⑤区の水田Bを除いてほぼ対応する。微高地では水田面は検出できなかったが、層位としては第2水田および第3水田に対応する層がつかっており、それぞれⅢ層とⅣ層として理解した。

⑥区と⑦区は①～⑤区とは全く異なる土層である。

⑥区は微高地、流れ山残丘、低地にわかれる。微高地では耕土直下に遺物を包含する黒色土(B層)が、その下層には漸移層(C・D層)がみられる。流れ山残丘では現耕土の直下は地山の流れ山(塚原土石なだれ)である。これをⅥ層とした。低地部では水田層(A層)の直下は低地流路となっている。

⑦区は地山の上層に暗褐色土層があり、わずかながらの遺物を含む。

地山は浅間軽石流堆積物および塚原土石なだれの流れ山山であるが、浅間軽石流堆積物は流水作用により2次堆積されたものとみられる。



第30図 層序模式図

第4節 遺構と遺物

1. はじめに

今回の発掘調査は、南北に約580mという長大な調査範囲となり、地形も遺跡の内容も地区により大きく異なる。そこで①～③区、④区、⑤区、⑥・⑦区に分けて、それぞれに遺構と遺物の報告をする。

また、以下の遺構番号は欠番となっている。

SB07、SM24、SM25、SD06、SD09-13、SD25、SD26、SD30、SD42、SD43、SD47、SD66、SD67、SD76-80、SD83、SK01-04、SK32、SK36、SK43、SK52-55、SK62、SK64、SK65-69、SK102-110、SK122

2. ①区・②区・③区

(1) 層序と調査面

①～③区は、微高地と低地に分かれる。微高地は調査区の北西側で低地へと落ち込んでいく。④-1区低地を基軸とする本遺跡の基本土層、Ⅰ層＝現耕土、Ⅱ層＝第1水田層、Ⅲ層＝第2水田層、Ⅳ層＝第3水田層、Ⅴ層＝地山（浅間軽石流堆積物）に沿って、土層を観察した（第31図）。

低地の③-2区の土層5では、第1層が現水田、第2層も水田層であり、被覆砂層がないためはっきりしないが第1水田に対応するとみられる。第6層が第2水田で、第3～5層がその被覆砂層となる。土層5より南では被覆砂層がみられなくなる。第8層は第3水田で、第7層がその被覆砂層である。第9層以下は低地堆積土にあたり、第16層が地山（浅間軽石流堆積物）となっている。低地堆積土は最深部で約1.3mを測り、地表面から地山まで最深部では約2.5mとなっている。③-2区では水田跡2面（第2水田＝第1調査面・第3水田＝第2調査面）とⅤ層上面（第3調査面）の計3面を調査した。土層5付近では第3水田層（第8層）の下層が低地堆積土となり、第4調査面は認められなかった。

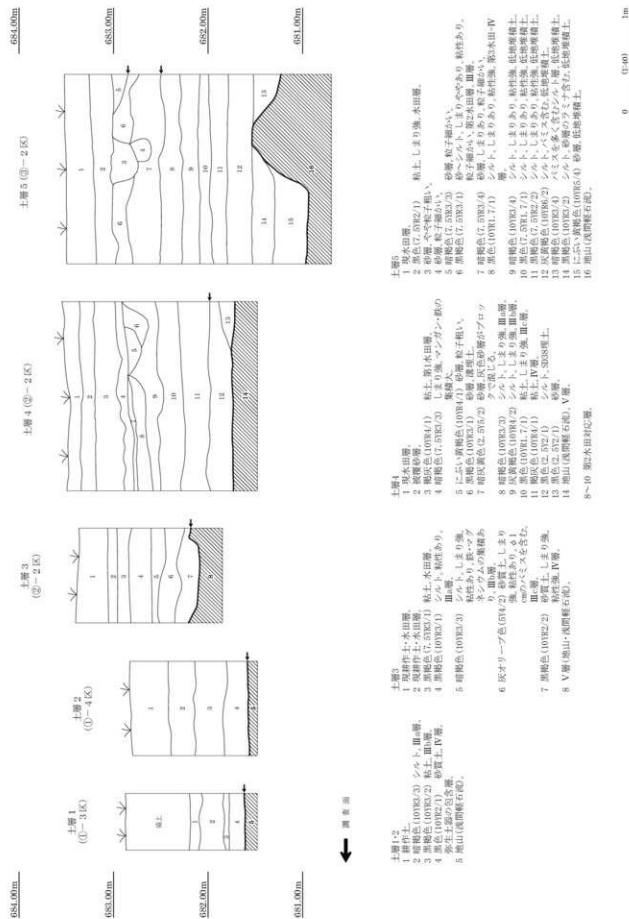
同じく低地の②-2区の土層4では、現耕土（第1層）の下には被覆砂層の第2層がみられ、あわせて基本土層のⅠ層にあたる。第3・第4層は第1水田層にあたる。第4層はマンガンや鉄の集積が著しい。第8・第9・第10層は土色・土質の違いから細分したが第2水田層に相当するものと比定し、第5・第6・第7層がその被覆砂層となる。第11層は砂層をはさまないが、第3水田に対応するⅣ層として理解した。第12層・第13層は低地への落ち際に掘られた溝（SD38）の埋土である。地山は第14層の浅間軽石流堆積物である。②-2区低地部は、土層4で第1水田（第3層）は確認できたが、面的には追うことができなかった。第2水田に対応する層（基本土層のⅢ層）は、3つの層（第8層・第9層・第10層）に細分でき、それぞれⅢa層・Ⅲb層・Ⅲc層とした。

微高地ではⅤ層上面のみ調査となった。土層3では、低地の土層4との層位的つながりがつかめ、第4～第7層がそれぞれⅢa層・Ⅲb層・Ⅲc層・Ⅳ層に対応することがわかる。

土層1・2では、第2・第3層は被覆砂層をはさまない水田層であり、第4層がⅣ層に対応する。

②-1区では、細分ができなかったものの、Ⅲ～Ⅳ層にあたる黒色土層から多量の遺物が出土している。また②-2区では、Ⅲa層～Ⅴ層上面までを手掘りで層位ごとに掘り下げ、遺物を採集した。①-3・4区では第1～第3層まで重機で剥ぎ取り、第4層（Ⅳ層）を手掘りでⅤ層上面まで掘り下げた。

調査面は③-2区北側が3面調査となった以外は、地山上面にて検出した第3調査面の1面調査であった。



第31図 ①～③区の層序

(2) 第1調査面

ア 水田跡

第2水田 [第32図 PL39]

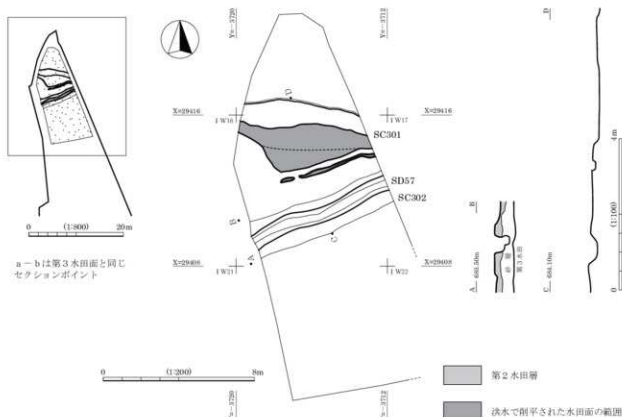
位置：③-2区、I W11・12・16・17・21・22 グリッド

調査の経過：調査区の西壁際および北壁際に排水用を兼ねたトレンチを入れて土層観察を行い、砂層に覆われた2面の水田跡の存在を確認した。②-2区の土層断面では第1水田の存在も観察できたが、被覆砂層がごく狭い範囲でしか認められなかったため面的調査は行わなかった。本水田跡も面的調査が可能であったのは③-2区の北側部分のみであった。

被覆砂層の堆積状況：約10～20cmの厚さの暗褐色砂層が調査区の北側に堆積する。東西は約6m、南北は低地にあたる北側20m程の範囲に認められる。東西は調査区外に広がる。

水田の検出：重機で砂層中位まで剥ぎ取り、残りの砂層を人力で掘り下げた。第31図-土層5の第6層上面において、溝跡を伴う畦畔および砂層が落ち込む窪みが検出された。

水田の構造：④-1区第2水田の大畦畔SC06から続く畦畔状の高まりが検出されたため、畦畔と判断した。当初はひとつの畦畔と理解したが、調査を進めていくなかで主軸方向N-67°-Eを示す北側の畦畔と主軸方向N-81°-Wを示す南側の畦畔の2つからなるものと判断した。北側畦畔をSC301、南側畦畔をSC302とした。SC301は南側を洪水砂による削平を受けているため、規模や形態が不明瞭となっているが、幅約2.5mを測ると推測される。畦畔の高まりは数cm程である。SC302は水路であるSD57を伴う。高まりは数cmを測るにすぎない。幅長はSD57を含めて約1.5m～1.8mである。SD57は幅約75～90cm、検出面からの深さは約20cmを測る。SC302の北側には帯状の落ち込みがみられるが、これは洪水の際の流水跡であろう。



第32図 ③-2区 第1調査面 (第2水田) 遺構図

水田の範囲：本跡が確認された範囲は被覆砂層の堆積と同じく東西約6m、南北約20mの部分である。

水口：調査区内では水口は検出されていない。

水田層および水田面の状況：水田層（第31図土層5の第6層）は粘性のある砂質土～シルトの黒褐色土層である。約15～20cmの厚さで堆積する。窪みは水田跡全域で認められている。畦畔SC301では窪みが顕著であるが、SC302では窪みは少ない。形状の異なる窪みがみられ、砂で埋まっていた。窪みにはPL39-5のように、つま先の指の形状がわかり人間の足跡として認定できるもの以外に円形のものもみられたが、何の窪みであるか特定はできなかった。

出土遺物：土器のみ約400g出土している。このうち弥生土器が約360gを占める。すべて破片であり、図示できるものはなかった。被覆砂層からの出土が大半である。平安時代の土器としては、被覆砂層から須恵器坏片1点と土師器片1点が、また本跡に伴う水路SD57から須恵器片1点が出土している。

科学分析：③-2区北壁断面において層位ごとに7点の試料を採取し、土壌分析（植物珪酸体分析・珪藻分析・花粉分析）を実施した。このうち本水田跡の水田層（第6層）におけるイネ属の植物珪酸体含量は短細胞珪酸体が約500個/g、機動細胞珪酸体は約1,100個/g、穎珪酸体が約100個/gと概して少ないことがわかる。洪水砂により耕土はかなりの部分が削平されてしまったことが推測される。

時期：最も新しい出土遺物である土師器片・須恵器坏片の時期および層位的には④-1区第2水田と対応すると考えられるため、平安時代・9世紀代を所産の上限に位置づけたい。

(3) 第2調査面

ア 水田跡

第3水田 [第33図 PL40・71・84・87]

位置：③-2区、I W11・12・16・17・21・22グリッド

調査の経過：第2水田の項でも記したように、調査区の西壁際および北壁際に排水用を兼ねたトレンチを設定した。土層観察により砂層に覆われた2面の水田跡を確認した。このうち下位層が本水田跡である。

被覆砂層の堆積状況：約30～35cmの厚さの暗褐色砂層が調査区の北側に堆積する。この層は東西が約5.8m、南北は約16mの範囲に認められる。東西は調査区外に広がる。

水田の検出：遺物採集のため、第2水田層から被覆砂層（第31図土層5～7層）までを人力で掘り下げた。第31図-土層5の8層上面において、溝跡を伴う畦畔および砂層が落ち込む窪みが検出された。

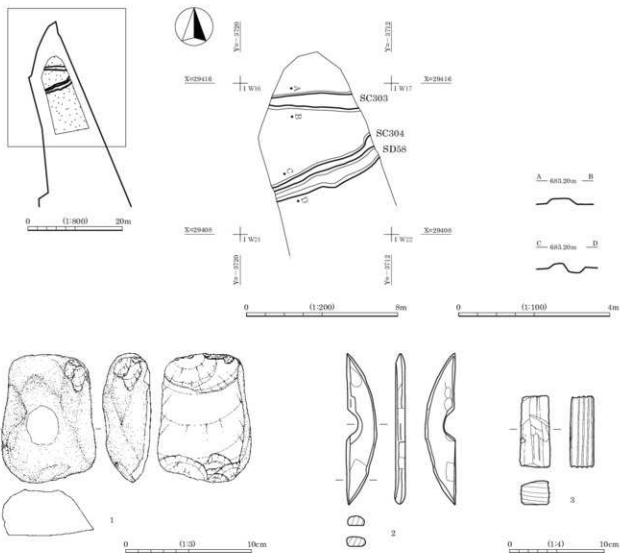
水田の構造：確認された畦畔は東西に走る2条の畦畔（SC302・303）のみであるため、水田構造は不明である。ただし、位置的にみると④-1区第3水田の大畦畔SC08・09から続くものと理解できる。SC303は、上端幅約40～75cm、下端幅約75～105cmを測り、主軸方位はN-85°-Eを示す。畦畔の高まりは、水田面と約5cmの比高差がある。SC304は、水路SD58を含めて上端幅約60～120、下端幅は約90～155cmを測る。このうちSD58は幅約55～100cmである。主軸方位はN-65°-Eを示す。畦畔の高まりは北側（SC302側）の水田面と約8cm、南側では約5cmの比高差があり、畦畔を境に若干の段差がある。

水田の範囲：本跡が確認された範囲は被覆砂層の堆積と同じく東西約5.8m、南北約16mの部分である。

水口：調査区内では水口は検出されていない。

水田層および水田面の状況：水田層（第31図土層5～8層）は粘性の大きいシルトの黒色土層である。約20～30cmの厚さで堆積する。窪みは水田跡全域で認められている。形状の異なる窪みがみられ、砂に埋まっていた。畦畔上にはごくわずかしみられなかった。人間の足跡として認定できるもの以外にも、円形の窪みもみられたが、何の窪みであるかは特定できなかった。

出土遺物：土器は約2,500gが出土した。被覆砂層から6点・約70gが出土した他は、調査最終段階で畦

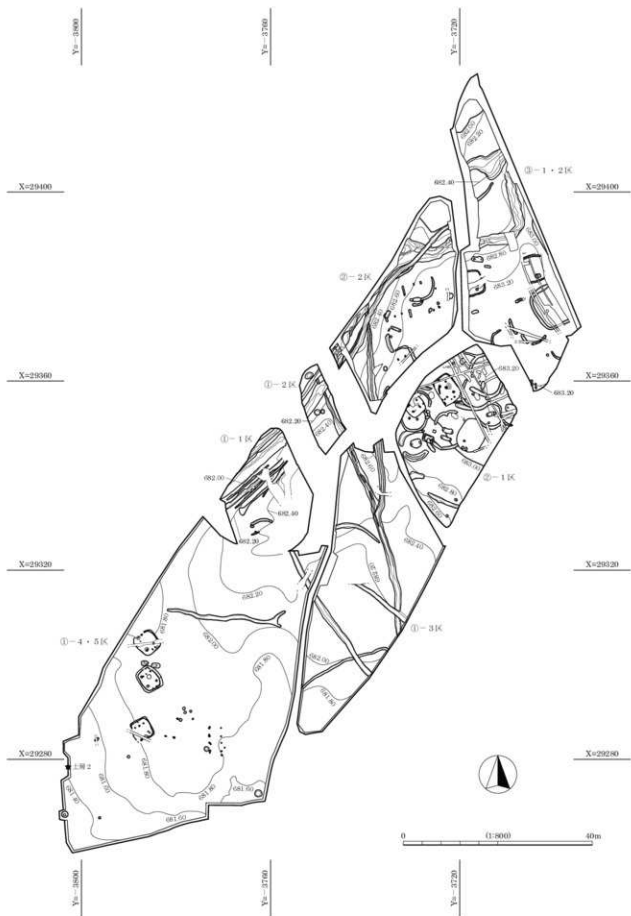


第33図 ③-2区 第2調査面(第3水田)遺構図・遺物図

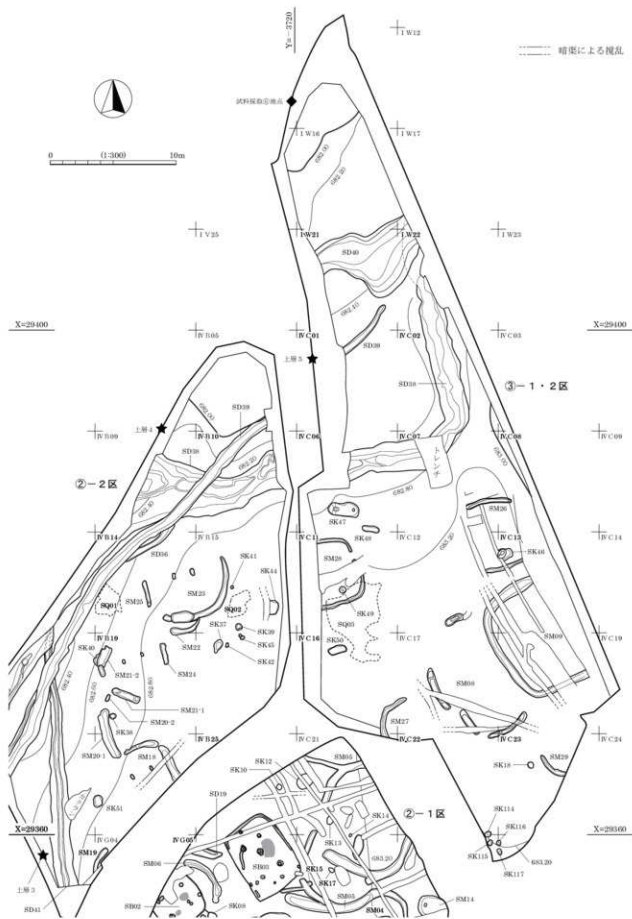
畔解体および水田層を人力で掘り下げた際に検出されたものである。すべて破片であり、図示できるものはなかった。大半は弥生土器であるが、畔畔解体の際に土師器1点が、また掘り下げた水田層からは8点・約130gの土師器が出土した。平安時代の糸切り底坯などがみられた。他の出土遺物は図示した石器1点と木製品2点である。1は畔内から出土したもので、安山岩製の両極刺痕痕のある礫であり、くさび形石器と考える。2・3は木製品である。ともに水田層(第31区土層5～8層)から出土する。2はヒノキ科の桶板あるいは樽類の蓋か栓と思われる。中央部には孔を形作っている。3は芯去分割材で四方を加工しており、何らかの施設部材の一部であると思われる。樹種はカラマツである。

科学分析: ③-2区北壁断面において層位ごとに7点の試料を採取し、土壌分析(植物珪酸体分析・珪藻分析・花粉分析)を実施した。このうち本水田跡については被覆砂層と水田層の2箇所から採集した。イネ属の植物珪酸体含量は、被覆砂層では短細胞珪酸体が約300個/g、機動細胞珪酸体は約700個/g、水田層では短細胞珪酸体が約2400個/g、機動細胞珪酸体は約9200個/gであった。

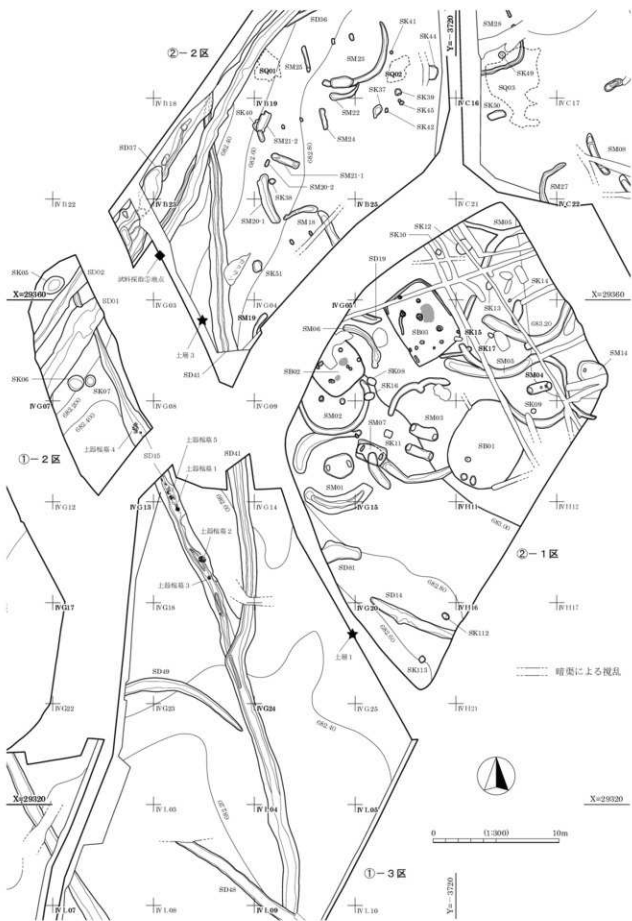
時期: 第2水田より下層からの検出であるわけだが、最も新しい出土遺物である平安時代の糸切り底坯などからすれば、それほど時期差はないのではないかと考えられる。層位的には④-1区第3水田に対応するとみられる。



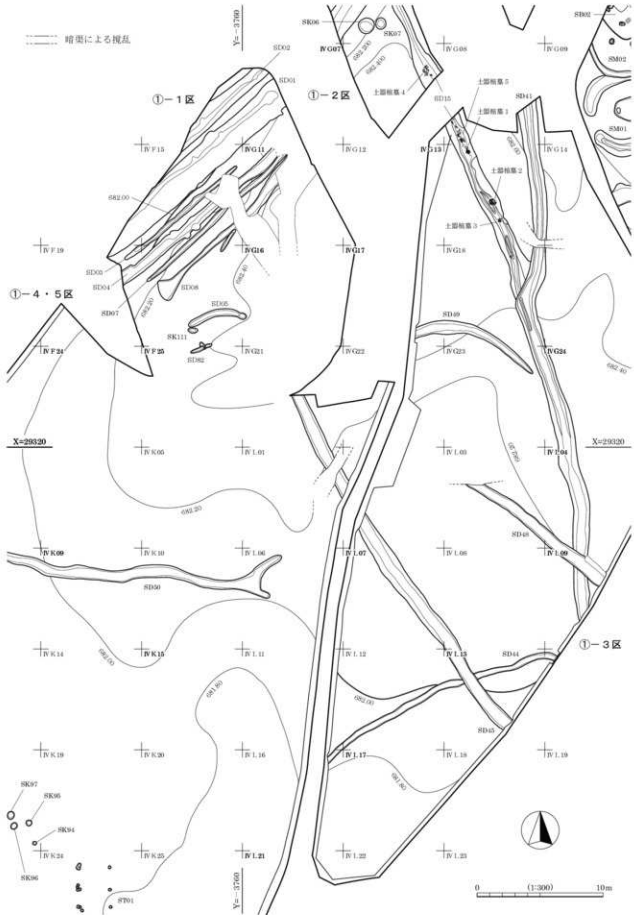
第34図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(1)



第35図 ①~③区 第3調査面 遺構配置図(2)



第36図 ①~③区 第3調査面 遺構配置図 (3)



第37図 ①～③区 第3調査面 遺構配置図(4)

(4) 第3調査面

ア 竪穴住居跡

SB01 [第39図 PL15・52・53・74]

位置：②-1区 IV G10・IV H01・IV H06グリッド

検出・重複関係：地山のV層上面にて検出した。プラン検出は容易ではなく、先行トレンチを入れて確認した。北東部は不明瞭であった。暗渠による攪乱で一部を壊される。円形周溝墓SM03、SM04とは空間的には重なるが、直接の重複関係はみられず、検出段階では新旧関係はつかめなかった。出土土器から判断すると本跡の方が古いと考えられる。

形状・規模：南北径が暗渠に壊されているため不明だが6.3m程度、東西径が5.48mを測る楕円形を呈する。壁高は最大部分では26cmを測るが、大半は10cm程度と浅い。長軸方位はN-33°-Eを示す。

埋土：粘性が強い黒褐色土が浅く覆っていた。

床面：凸凹が激しい。埋土が浅く、また堅緻な面もみられなかったため、調査時に掘り方まで掘り下げてしまった可能性が高い。

炉：検出できなかったが、1は床面出土であり位置的にみて土器敷の痕跡である可能性もある。

柱穴・ピット：3基を検出した。P1・P3は出入り口施設に関係したものと考えられる。P2は深さ30cmを測り、柱穴の可能性もあるが断言はできない。

出土遺物：土器は約5,000g出土し、3点・約1,800gを図示した。1・2はコの字重ね文の甕である。1の円形浮文は2箇所で残存していたが、本来は4単位になるものと考えられる。口唇部には縄文を施す。2は円形浮文が1箇所が残っていたが単位は不明である。3の甕は縄文を充填した後に波状と横走の沈線文を巡らす。石器は図示した3の砂岩製の砥石の他、細粒砂岩製の打製石斧片と石核が出土した。3には線条痕が明瞭に残る。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半に位置づける。

SB02 [第40図 PL15]

位置：②-1区、IV G04・IV G05グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓SM02とは空間的には重なるが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。

形状・規模：北西部は調査区外にあたり、また攪乱で一部が壊されているため、形状は不明といわざるをえないが、北西-南東径は3.5m以上、北東-西南径は4.05mを測る。隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は数cm程度と浅く、最大部分でも13cmにすぎない。長軸方位はN-46°-Wを示す。

埋土：黒褐色土が浅く覆っていた。

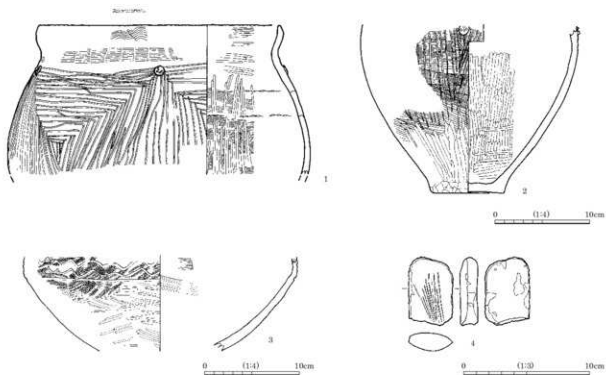
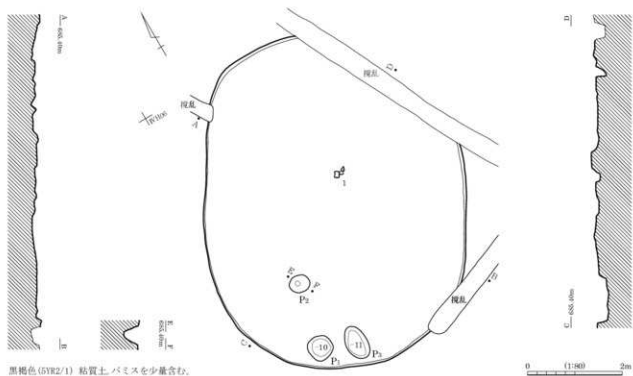
床面：荒掘りした掘り方を埋土で床を造るが、堅緻な面は認められなかった。また2か所で焼土範囲がみられた。

炉：検出できなかった。攪乱部分に存在したものと考えられる。

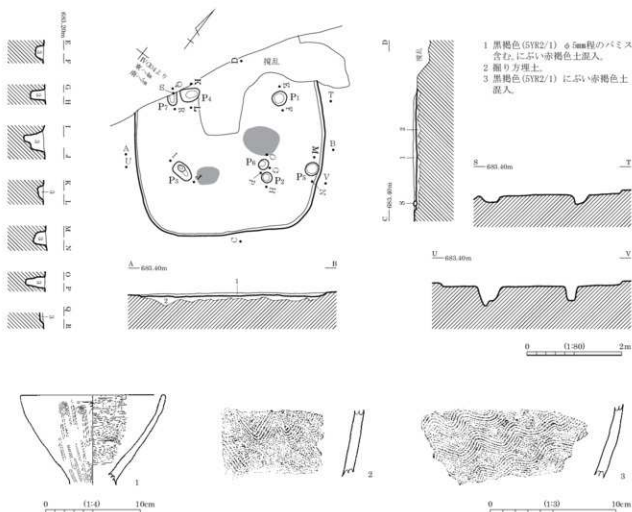
柱穴・ピット：ピットは7基がみられたが、このうち位置的にはP5を除く6基が柱穴と考えられる。P2とP6およびP4とP7は建て替えによるものであろう。

出土遺物：遺物は土器が約750g出土したのみである。いずれも小破片であり3点・約220gを図示した。1は鉢の口縁部かと思われるが、外面は粗雑なミガキを施し、ハケメも残る。2はP1から出土したもので甕の胴部破片、3も甕の破片である。ともに柳描波状文を巡らす。

時期：出土遺物は僅少であるが、弥生時代中期後半に位置づけたい。



第39図 SB01 遺構図・遺物図



第40図 SB02 遺構図・遺物図

SB03 [第41図 PL15・53・75]

位置：②-1区、IV B25・IV G05・IV H01 グリッド

検出・重複関係：V層上面で検出した。重複関係はみられないが、暗渠などによる攪乱を一部受けている。
 形状・規模：北西-南東径が6.03m、北東-南西径が4.45mを測り、隅丸長方形を呈する。壁高は数cm程度とごく浅い。最深部でも21cmである。長軸方位はN-37°-Wを示す。

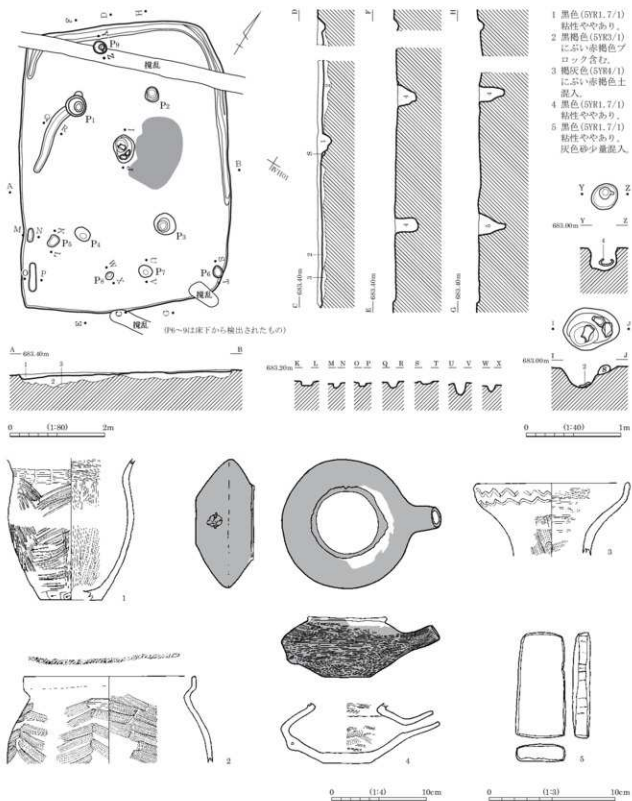
埋土：やや粘性をもつ黒色土が浅く覆っていた。

床面：赤褐色土の混じった黒褐色土を貼床としている。炉の東側は焼けている部分がある。周溝は北側および、北西側に認められる。

炉：中央やや北寄りに設けられている。炉石が残存しているため石囲炉であったと推定される。焼土は認められなかった。

柱穴・ビット：P1・P2・P3・P4が柱穴と考えられる。P10～13は掘り方調査の際に床下から検出されたものだが、このうちP7・8は出入り口施設に関するものと推定される。

出土遺物：土器は約2,800g出土した。このうち4点・約680gを図示した。1は甕であり、口縁部を欠している。2は炉から出土した受け口口縁の甕で口唇部に刻みを、胴部には櫛描の縦羽状文を施す。3は受け口口縁の甕であり、口縁部には波状沈線文を巡らす。胴部にはハケメが残る。4は床下から検出されたビット・P9から出土した注口土器である。口縁部を欠損しているが、その他はほぼ完形である。底面



第41図 SB03 遺構図・遺物図

と頸部の一部を除いて全体を赤彩している。注口の反対側には穿孔された突起がみられる。石器は図示した5の砂岩製の砥石の他に、デイサイト製の打製石斧片が出土した。5の砥石は下方にやや広がる短冊状に整形しており、側面に線状痕が認められる。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半に位置づける。

SB05 [第42図 PL16]

位置：①-4区、Ⅳ K12・Ⅳ K13・Ⅳ K17・Ⅳ K18 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。土坑 SK56・SK57 と重複し、検出段階で本跡の方が新しいと判断した。

形状・規模：5.43m × 4.55m を測る南北にやや長い隅丸長方形を呈する。壁の立ち上がりは不明瞭であった。壁高は数cm程度、最大でも 15cm を測るにすぎない。長軸方位は N-36°-W を示す。

埋土：非常に浅く、黒褐色土が覆われていたのみであった。

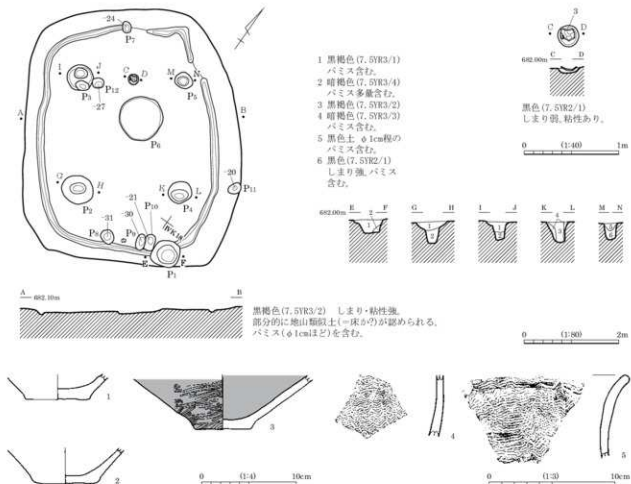
床面：明確な貼床はなく、掘り方は確認できなかった。周溝は北東の一部を除いて全周する。

炉：柱穴 P3・P5 を結ぶ線上に土器数炉が設置されていた。

柱穴・ピット：ピットは 11 基が検出された。このうち P2、P3、P4、P5 が主柱穴とみられる。これらの断面をみると、中位で段を有しているため、五平柱と呼ばれる断面が長方形の柱が設置されていた可能性が指摘できる。出入り口施設に伴うものと考えられる。P9 と P10 は造り替えによるものであろうか。P6 はごく浅い掘りこみであり、性格は不明である。

出土遺物：遺物は、土器約 960 g が出土したにすぎない。5 点・約 600 g を図示した。1 は壺の底部であり、外面には縦方向のミガキがみられる。床面よりわずかに浮いた状態で出土している。2 は甕の底部であり、外面にはハケメが残る。炉に用いられた 3 は赤彩を施した鉢かと思われる底部である。4・5 は甕の破片資料であり拓影で示した。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。



第42図 SB05 遺構図・遺物図

SB06 [第43・44図 PL17・53・54・69・72]

位置：①-4区、IV K07・IV K08・IV K12・IV K13 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。ほぼ東西方向に暗渠による攪乱を受けている。検出作業は難しく、とりわけ北壁付近のプランがはっきりしなかった。

形状・規模：北壁のプランが不明確だが南北径は5m程度と推定され、東西径は4.66mを測る。不整な隅丸長方形を呈すると思われる。壁高は10cm程である。長軸方位はN-36°-Wを示す。

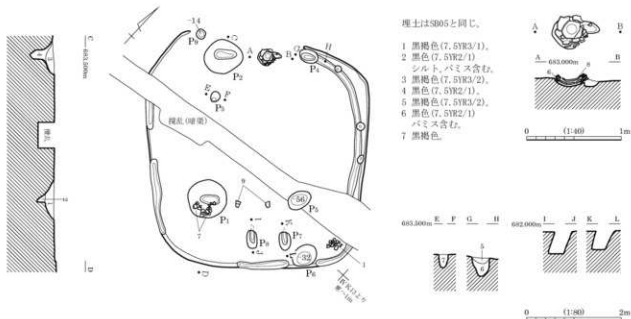
埋土：SB05と同じく黒褐色土がわずかに堆積していたにすぎない。

床面：貼床はない。周溝が巡るが、西壁側では部分的にみられるのみである。

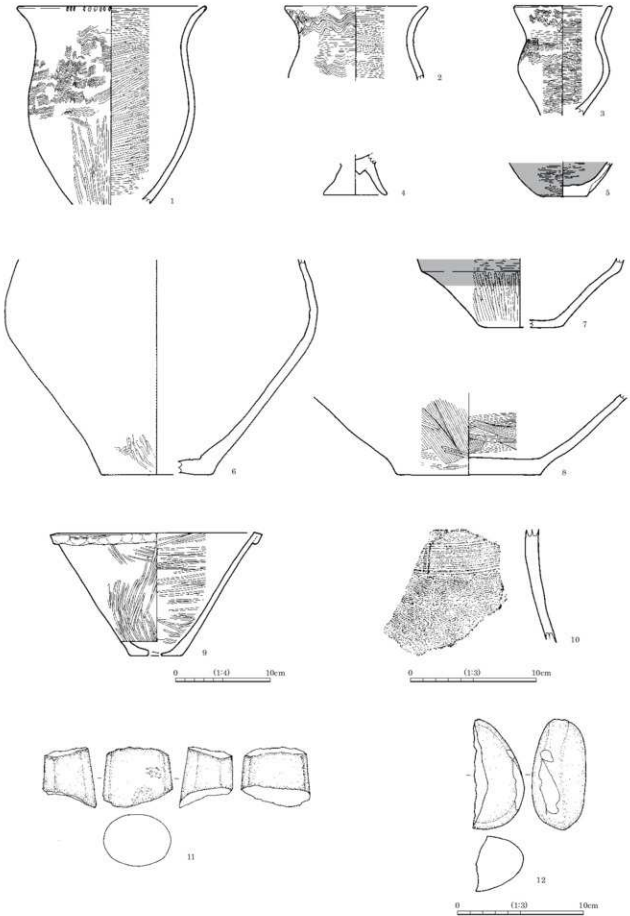
炉：北壁際に土器敷炉が設置されている。北壁側のプランは不明確だが、壁際直近に設けられていることは間違いない。炉に用いられた土器は2個体(6・8)である。6の壺胴部破片の上に8の壺底部を重ねて構築されていた。6の土器の下には灰層が認められた。

柱穴・ピット：ピットは8基が検出された。このうちP1・P2・P5が主柱穴である。いずれも東西方向に長い楕円形を呈し、その柱は断面が長方形となる五平柱であると考えられる。炉とP2との線上に位置するP4も柱穴の可能性が高い。P7とP8については、完掘後に南北方向に断ち割ってみたところ、その掘り方は北壁に向かい斜めに掘られていることがわかり、扁平な板を用いた梯子等の出入り口施設の設置方法が知られる資料となった。

出土遺物：土器は約5,800gが出土し、9点・約4,200gを図示した。1の甕は南東隅の床面から出土したが、1片のみ炉から出土したものと接合している。口縁端部に刻みがみられる。2も甕であり胴部下位以下を欠している。3は小形甕で頸部に櫛描縞状文を、口縁部と胴部上位に櫛波状文を施す。4は台付甕の台部とみられるが外面の摩耗が激しい。5は赤彩された鉢とみられる。口縁部は欠している。6と8は炉に用いられた土器であり、壺胴部の破片6の上に8の壺底部が重なっていた。6の外面は摩耗が激しいがわずかに赤彩の痕跡が認められた。7はP1のテラス部分から出土した壺の底部である。外面はかなり摩耗しており、赤彩も剥落している箇所が多い。9は床面から出土した底部穿孔の甕である。10は甕の破片の拓影である。頸部に櫛描縞状文、胴部に櫛波状文を巡らす。石器は2点が出土し、ともに図示し



第43図 SB06 遺構図



第44図 SB06 遺物図

た。11は閃緑岩製の太型蛤刃石斧で、12は砂岩製の敲石である。いずれも欠損している。なお須恵器片1点も検出されたがこれは混入したものと考える。

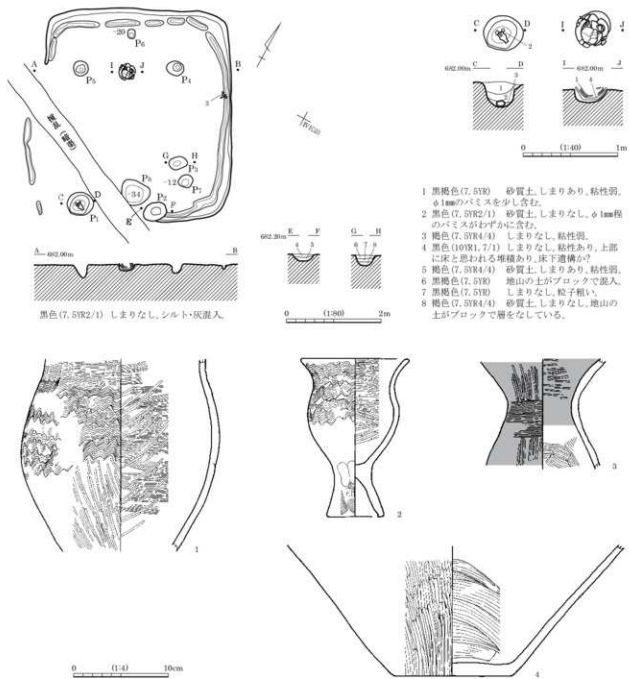
時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

SB08 [第45図 PL17・54]

位置：①-4区、IV K17・IV K22グリッド

検出・重複関係：V層上面で検出した。重複関係はない。暗渠による攪乱を一部を受けている。

形状・規模：南西側のプランがはっきり検出できず、周溝のみが確認できた。南北径4.45m、東西径4.03mを測る隅丸長方形を呈する。南西側の周溝がやや膨らむプランである。長軸方位はN-27°-Wを



第45図 SB08 遺構図・遺物図

示す。壁高は最大でも13cmと浅い。

埋土：灰を含む黒色土が覆われていたにすぎない。

床面：貼床はない。周溝は南西部分では認められないが、それ以外はほぼ全周している。

炉：中央北寄りに土器敷炉が設置されている。2個体の土器を用いている。

柱穴・ピット：ピットは8基が検出された。このうちP4・P5は主柱穴と考えられる。これに対応する南側の主柱穴はP1とP7が該当するかもしれないが、断定はできない。

出土遺物：土器は約4,000gが出土し、図示したのは4点・約3,600gである。1と4は炉に用いられた土器であり、4の壺底部の上に1の甕を重ねている。1は口縁部と底部を欠する。2はP1の底部から出土した小形台付甕で、完形である。3は東壁際の周溝上から出土した赤彩壺である。石器は細粒砂岩製の刮片1点が検出されたのみである。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

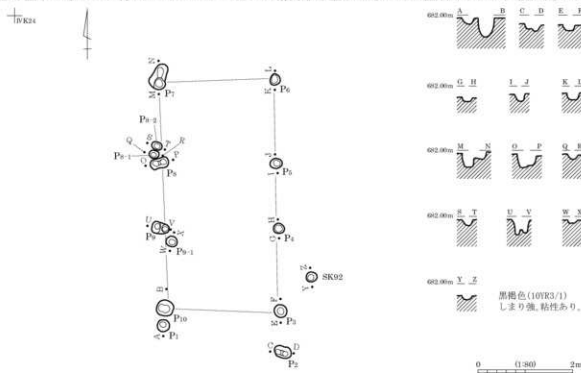
イ 掘立柱建物跡

ST01 [第46図 PL26]

位置：①-5区、IV K24 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。ピットが13基検出され、長方形に配列することが認められたので掘立柱建物跡と判断した。P3、P4、P5、P6、P7、P8、P9、P10から構成され、P8-1、P8-2、P9-1はそれぞれP8およびP9の建て替えによるものと理解した。P1もP10の建て替えによるとみられる。P2については桁行の線上に並ぶことから、これもP3の建て替えに伴うものである可能性が指摘できる。

規模・埋土：桁行は3間で約4.9m、梁行が1間で約2.5mを測る掘立柱建物跡である。主軸方位はN-3°-Wを示す。柱間寸法は桁行が、約1.4~1.8m、梁行が2.4~2.5mを測る。柱穴は直径約25~35cmの円形を呈するものと、約40~50×25~35cmの楕円形を呈するものの2種類みられる。検出面からの深



第46図 ST01 遺構図

さは約15～40cmを測る。埋土はいずれもしまりのない黒褐色土の単層であり、柱痕はみられなかった。

出土遺物：土器の破片がP5から1点、P6から4点の計5点・約260gが出土したのみである。いずれも弥生時代後期の壺の破片である。南東にSK92があり、土器の出土をみる（第98図SK92-1）。近接する遺構であるため、本跡と関連する可能性がある。

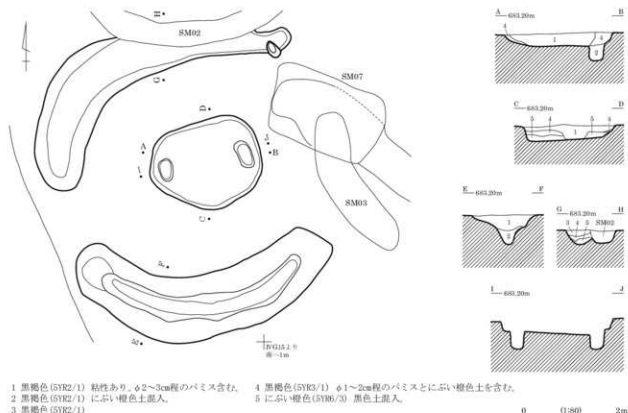
時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づける。

ウ 円形周溝墓・方形周溝墓

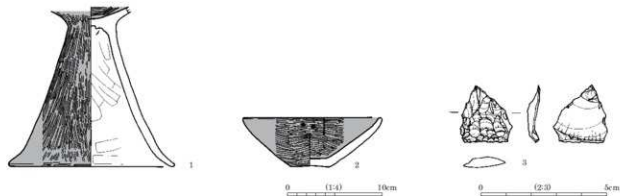
SM01 [第47図 PL20・56・69]

位置：②-1区、IV G09・IV G10・IV G14・IV G15 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。円形周溝墓SM02と重複し、周溝の断面観察から本跡の方が古いと判断した。また東側では円形周溝墓SM03・木棺墓SM07とも空間的には重なる



- 1 黒褐色(SYR2/1) 粘性あり、φ2～3cm程のバミス含む。
- 2 黒褐色(SYR2/1) にふい・橙色土混入。
- 3 黒褐色(SYR2/1)
- 4 黒褐色(SYR3/1) φ1～2cm程のバミスとにふい・橙色土を含む。
- 5 にふい・橙色(SYR6/3) 黒色土混入。



第47図 SM01 遺構図・遺物図

が、検出段階では新旧関係はつかめなかった。

規模：径約 6.6 m を測る。周溝は幅約 100～120cm、深さは 30cm から最深部では 65cm を測る。西側と東側の 2 か所で溝の掘り残し部分がある。

埋土：黒褐色土の 3 層に分けられた。

主体部：小口穴を有する土坑が検出された。240×190cm のやや不整な楕円形を呈する。小口穴は 50～60×30cm、深さは 40cm を測る。長軸方位は N-83°-E を示す。小口穴の位置から推定すれば、170cm 程度の木棺と考えられる。

出土遺物：土器は約 3,600 g 出土し、2 点・約 900 g を図示した。脚部のみ残存する赤彩高坏の 1 は主体部からの出土、赤彩鉢の 2 は周溝からの出土である。2 の口縁部には 2 ケの穿孔が認められる。石器は 3 の黒曜石製の石鏃未製品 1 点が周溝から検出されたのみである。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。

SM02 [第 48 図 PL20]

位置：②-1 区、IV G04・IV G05・IV G09・IV G10 グリッド

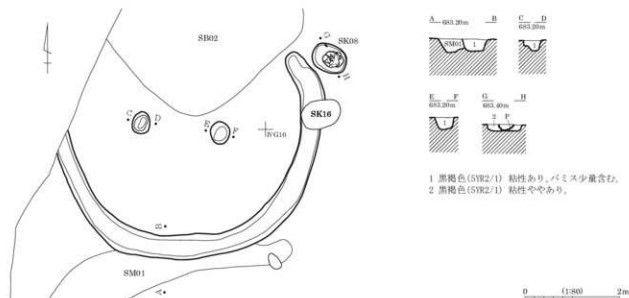
検出・重複関係：V 層上面にて検出した。円形周溝墓である。円形周溝墓 SM01 と周溝が重複し、周溝の断面観察から本跡の方が新しいと判断した。また北側では竪穴住居跡 SB02、円形周溝墓 SM06 と空間的には重なるが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。また土坑 SK16 が本跡より新しいことは検出段階でわかった。土器棺墓 SK08 が東側に近接する。

規模：北西側が調査区外にあたるため、規模ははっきりしないが、径 6 m 程度と推定できる。周溝は幅約 50～60cm、深さは 20cm 程である。

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：小口穴のみが検出され、土坑部分は削平されている。小口穴は 45×40～45cm、深さは最大で 25cm を測る。小口穴の位置から推定すれば、170cm 程度の木棺と考えられる。長軸方位は N-100°-E を示す。

出土遺物：土器が約 970 g 出土したが、小破片が多く図示できるものはなかった。石器は磨石と思われるものが 1 点出土しているのみである。



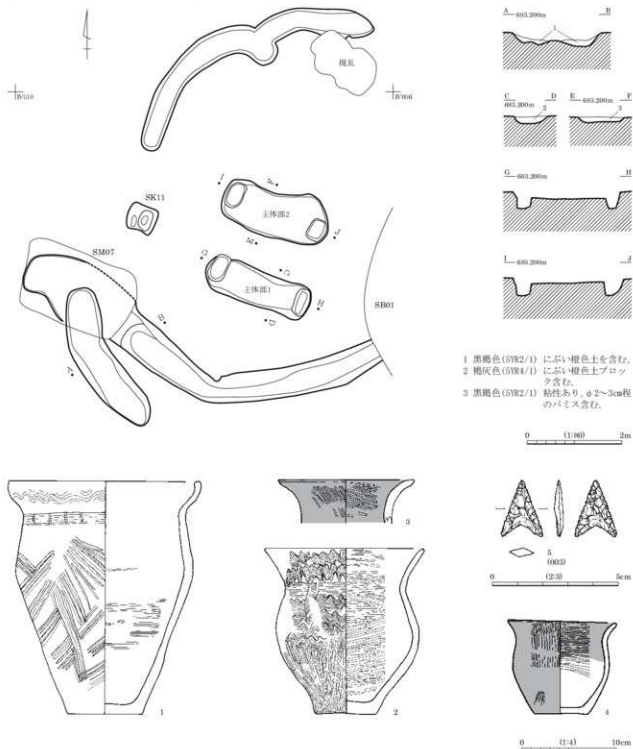
第48図 SM02 遺構図

時期：時期決定に足る資料はないが、切り合い関係からSM01より新しいことがわかるため、弥生時代後期に位置づけられる。

SM03 [第49図 PL20・56・69]

位置：②-1区、IV G05・IV G10 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。周溝の掘り下げを進めている途中で、本跡



第49図 SM03 遺構図・遺物図

より新しい木棺墓 SM07 の存在に気が付いた。竪穴住居跡 SB01 とは空間的には重なるが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。出土遺物からすれば SB01 よりも新しい所産と考えられる。

規模：径 8 m 程度のかなり不整な円形を呈する周溝である。南東側に弧状の切り合う周溝もみられた。これも本跡の周溝として調査を進めたが、実際に本跡に伴うものかどうかは不明といわざるをえない。また北側の周溝にも切り合いがみられている。西側と北東側にブリッジがある。東側は SB01 と重複するため不明である。周溝は幅約 50～90cm、深さは 10～35cm である。周溝が途切れている箇所があるが、ブリッジなのか削平されたのかは不明である。SK11 は別の土坑としたが、位置的にみれば、本跡の周溝の一部である可能性もあろう。

埋土：周溝は黒褐色土が浅く覆っていた。

主体部：小口穴をもつ土坑 2 基が検出された。主体部 1 とした土坑は、長軸方位は N-113°-E を示し、230×75cm、深さ 3cm を測る。褐色土がわずかに覆っていた。小口穴は、50×60×30～35cm の規模で、深さ 23cm である。主体部 2 とした土坑は長軸方位 N-111°-E を示し、235×95～105cm、深さ 11cm を測る。こちらは黒褐色土が覆っていた。小口穴は、42～55×35～40cm、深さ 25cm を測る。小口穴の位置から推定すれば、190cm 程度の木棺と考えられる。2 つの主体部はその長軸方位がほぼ同じである。

出土遺物：土器は約 5,200 g が出土し、4 点・約 1,400 g を図示した。周溝から 1・2 が出土している。3 と 4 は主体部からの出土であるが、一括して取り上げた。1 は受け口口縁の裏で頸部に櫛描縹状文を、胴部には櫛描縦羽状文を施す。2 は口縁部と胴部上位に櫛描波状文を巡らし、頸部に櫛描縹状文を施文する。3 は赤彩された鉢の口縁部とみられる。4 も赤彩の鉢である。石器はチャート製の石鏃である 5 が出土している。

時期：出土土器から弥生時代後期に位置づけたい。

SM04 [第 50 図 PL20]

位置：②-1 区、IV H01・IV H02・IV H06・IV H07 グリッド

検出・重複関係：V 層上面にて検出した。円形周溝墓である。西側を暗渠の攪乱により壊されている。東側周溝は SM14 と、また周溝の北側は SM05 とそれぞれ接続・共有している。検出段階で新旧関係をつかむことはできなかったが、周溝の形状は SM05 の方へ向いて整っているため、本跡よりも古い所産と考えられようか。

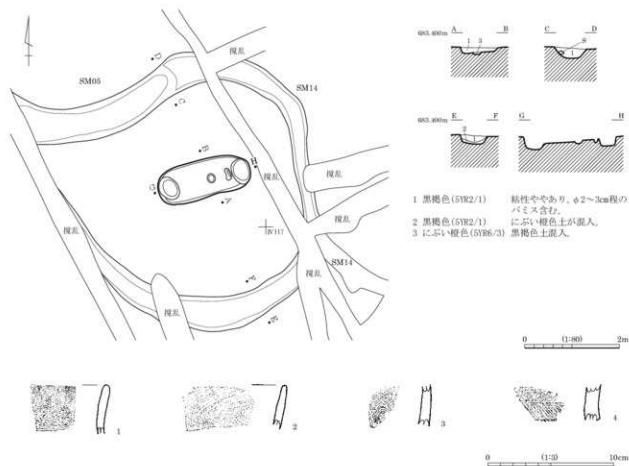
規模：暗渠による攪乱が縦横にあるが、周溝は径 5 m 程度を測る。周溝は幅約 35～70cm、深さは 13～23cm を測る。

埋土：周溝には黒褐色土が浅く覆っていた。

主体部：小口穴をもつ土坑が検出された。長軸方位 N-77°-E を示し、200m×78cm、深さ 16cm を測る。こちらは黒褐色土が覆っていた。小口穴は、52～57×38～40cm、深さ 15～23cm を測る。小口穴の位置から推定して、160cm 程度の木棺と考える。小口穴以外にも落ち込み部分が見られるが、性格は不明である。

出土遺物：土器が約 230 g 出土したのみである。4 点・約 50 g の拓影を図示した。1～3 は裏であり、1・3 は口縁部に櫛描波状文を施す。4 は籠描矢羽状文をもつ壺の頸部である。石器は砂岩製の砥石が 1 点出土したのみである。

時期：破片資料が多いが、出土土器から弥生時代後期に位置づけたい。



第50図 SM04 遺構図・遺物図

SM05 [第51図 PL20・72]

位置：②-1区、IV C21・IV H01・IV H02・IV G05 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。方形周溝墓と思われる。東側は調査区外にあたり、暗渠による攪乱が縦横に巡らされている。北側の周溝は北西へ分かれて伸びるものもあり、別の周溝墓と共有しているとみられるが、便宜的に本跡に含めて報告する。また南側では周溝が三重にめぐっており、外側の周溝はSM04と共有する。西側に伸びる周溝もあり、別遺構としては取り上げなかったが、本跡に伴うものなのかどうかは不明である。SM04との新旧関係は検出段階ではつかむことはできなかった。周溝の形状はSM05の方へ向いて整っているため、本跡の方が古いと考えられようか。またSK15とも重複するが、新旧関係はつかめなかった。本跡の範囲内には土坑SK13・14・17も検出されたが、重複関係はなかった。

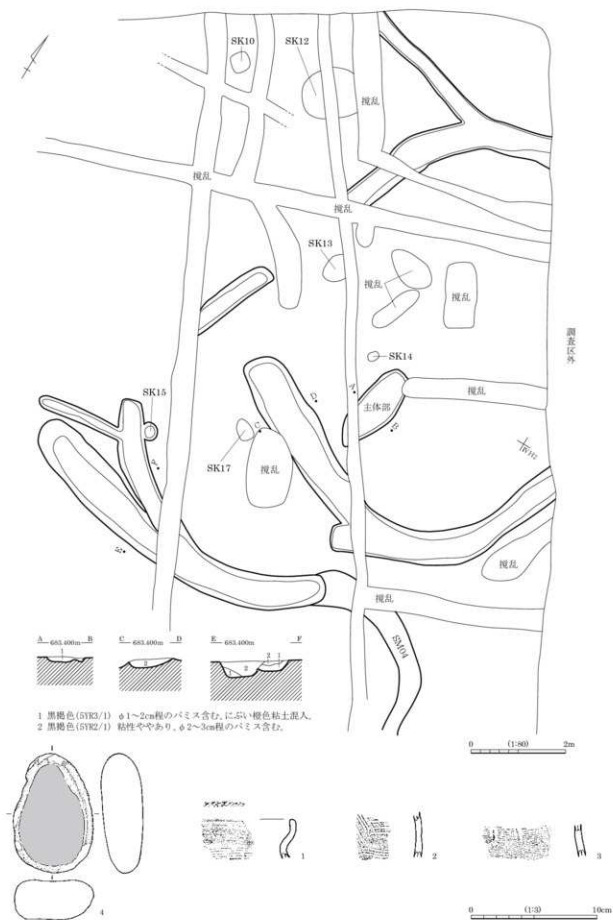
規模：周溝は東西径7.2m程度、南北径は一番外側の周溝までで13m程度を測る。周溝は幅約55~95cm、深さは22~31cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：主体部と考えられる土坑が検出された。長軸方位N-9°-Eを示し、200m×60cm、深さ27cmを測る。ただし小口穴は認められなかった。また位置的にみれば内側の周溝には伴わないとみられる。

出土遺物：土器は約720gが出土し、3点・約25gを拓影で図示した。1は口唇部に縄文を施す。石器は図示した4の砂岩製の磨石1点のみであった。外側の周溝から出土している。

時期：出土土器は破片資料のみであるが、弥生時代中期後半から後期のものがみられる。後期に位置づけられるのではないかと考える。



第51図 SM05 遺構図・遺物図

SM06 [第52図]

位置：②-1区、IV G04・IV G05 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。西側は調査区外に当たり、SB02、SM02と空間的には重なるが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。北側の周溝が検出されたのみである。また土器棺墓SK08は位置的にみて、何かしらの関係がある可能性も否定できない。

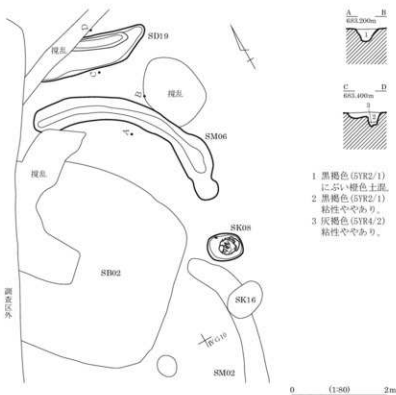
規模：北側の周溝のみが検出されているため、全体の規模は不明である。周溝の幅は約45～70cm、深さは34～49cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土の単層であった。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：弥生土器が約160g出土したに過ぎず、図示できたものはない。

時期：時期決定に足る遺物の出土はみなかったが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。



第52図 SM06 遺構図

SM08 [第53図 PL20]

位置：③-1区、IV C12・IV C17・IV C18・IV C22・IV C23 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。東側のSM09、西側のSWM27と空間的には重なるが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。

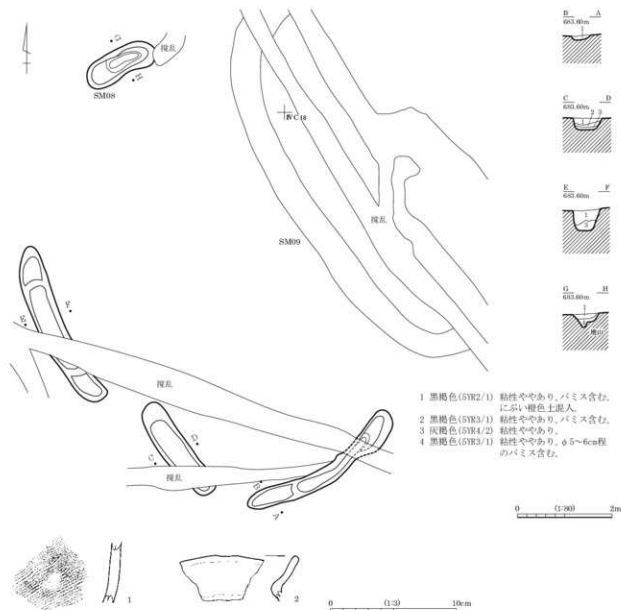
規模：周溝は南北径で10.2m程度を測る。周溝は幅約50～60cm、深さは27～46cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：主体部と考えられる土坑は検出されなかった。

出土遺物：弥生土器が約100g出土した。このうち2点・約60gを図示した。1は甕の胴部、2は壺の口縁部とみられる。

時期：時期決定に足る遺物の出土はみなかったが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。



第53図 SM08 遺構図・遺物図

SM09 [第54図 PL20]

位置：③-1・2区、IV C12・IV C13・IV C17・IV C18 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。方形周溝墓である。平成16・17年度と2カ年にまたがり調査した。空間的にはSM08と重複するが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。

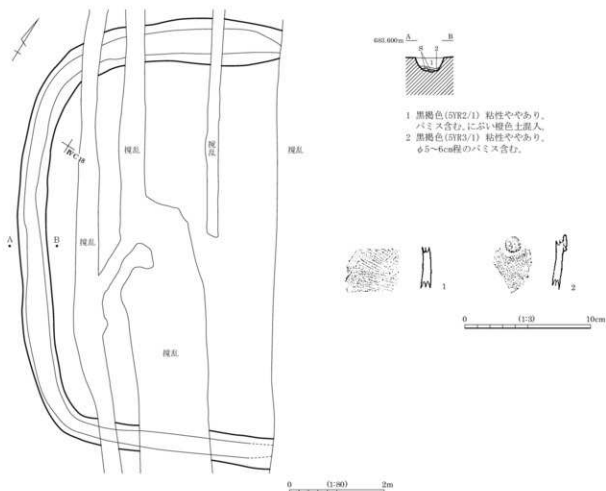
規模：南北径は9.3m程度を測るが、東側は攪乱および調査区外にかかるため、東西径は不明である。周溝の幅は約55～96cm、深さは15～23cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：土器は約780gが出土し、このうち2点・約25gを拓影で図示した。ともに甕であり、2は刺突のある円形浮文を貼付する。

時期：出土土器には弥生時代中期後半から後期のものがみられる。後期の所産であると推定する。



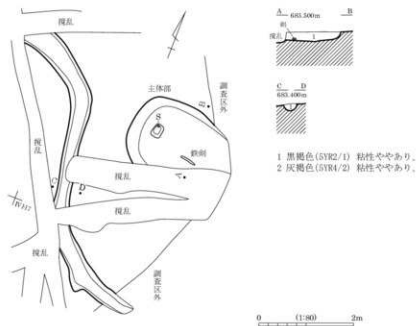
第54図 SM09 遺構図・遺物図

SM14 [第55・56図 PL21・89]

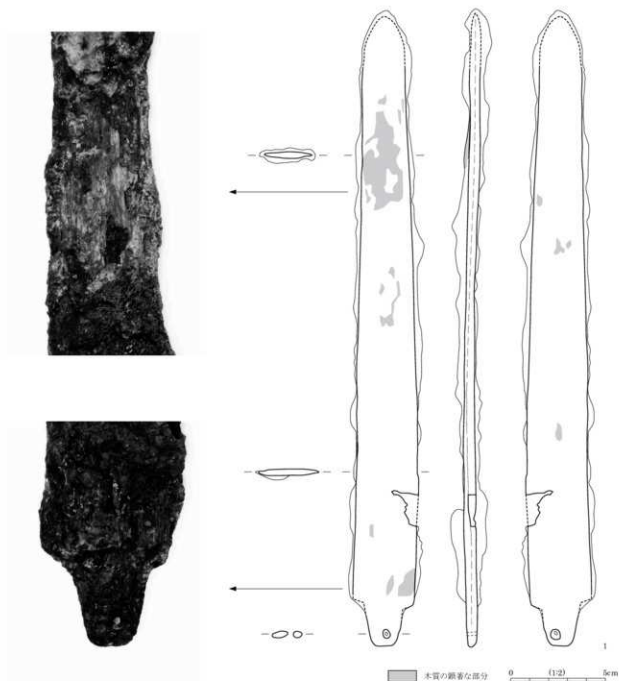
位置：②-1区、IV H01・IV H02・IV H07 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。東側は調査区外にあたり、暗渠による視孔部分も少ない。西側の周溝はSM04と接続・共有する。北側もSM05と共有する可能性はあるが、定かではない。検出段階ではSM04との新旧関係はつかめなかったが、周溝がSM04側に湾曲することを重視するならば、本跡の方が新しいと言えるかもしれない。

規模：周溝は幅約30～40cm、



第55図 SM14 遺構図・遺物図



第56図 SM14 遺物図 (2)

深さは15cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：主体部と考えられる土坑が検出された。長軸方位N-110°-Eを示す。楕円形を呈するとみられるが、攪乱と調査区外にかかるため、規模は不明である。深さは21cmを測る。小口穴は西側のみが検出された。30×20cm、深さ11cmを測る。

出土遺物：主体部から鞘付の鉄剣が検出された。底面より数cm上からの出土である。木質も含めて錆化が進んでおり脆弱であり、保存処理を実施した。錆も含めた全長は33.3cmであり、身幅は3.1cm、身厚は0.6cmを測る。関と刃先はX線透過写真(PL89-3)でも不明瞭であったため推定線で表現してある。茎長

は約2.2cm、保存処理後の重さは153.7gである。一部欠損しているが、身から茎まで残るほぼ完形品である。目釘孔が茎尻に1箇所みられる。X線透過写真では鍔のはっきりと確認できる。土器は約260gが出土したが、小破片であり、図示できるものはなかった。

科学分析：鉄剣の表面には鞘と思われる木質が付着していたため、電子顕微鏡を用いた観察同定を行った。その結果、複数箇所において付着していた木質は、針葉樹であることが確認できた。ただし全体的に鉄分が吸着しているため、樹種の同定まではできなかった。

時期：出土遺物は僅少であったが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM18 [第57図 PL.22・23]

位置：②-2区、IV B24 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。残存部分が少ないが四隅が切れる方形周溝墓と考えられる。南側は調査区外にあたり、西側では周溝が検出できなかったため、規模は不明であるが、径5.5m程度と推定されようか。暗渠による攪乱が中央付近にみられる。北側の周溝は、SM20と共有している。

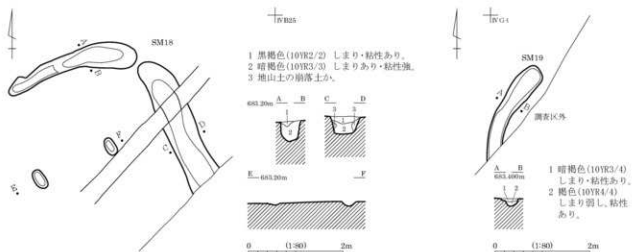
規模：周溝は幅約32～67cm、深さは8～40cmを測る。

埋土：周溝は基本的には黒褐色土と暗褐色土の2層に分けられる。

主体部：主体部の土坑は削平されていたが、小口穴が検出された。長軸方位N-63°-Eを示す。小口穴は40～45×23～25cmを測り、検出面からの深さは3～9cmと浅い。小口穴の位置から推定すれば、165cm程度の木棺と考えられる。

出土遺物：出土遺物はなかった。

時期：出土遺物がないため不明ではあるが、他の周溝墓の時期からみて弥生時代後期の所産と推定する。



第57図 SM18 (左)・19 (右) 遺構図

SM19 [第57図 PL.22・23]

位置：②-2区、IV G03・IV G04 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。北西の一部の周溝が検出されたのみであり、大半は調査区外にかかるため、形状は明確ではないが円形周溝墓と考えられる。重複関係はない。

規模：周溝は幅約33～45cm、深さは16cmを測る。

埋土：周溝は暗褐色土と褐色土の2層に分けられた。

主体部：主体部は検出できなかった。

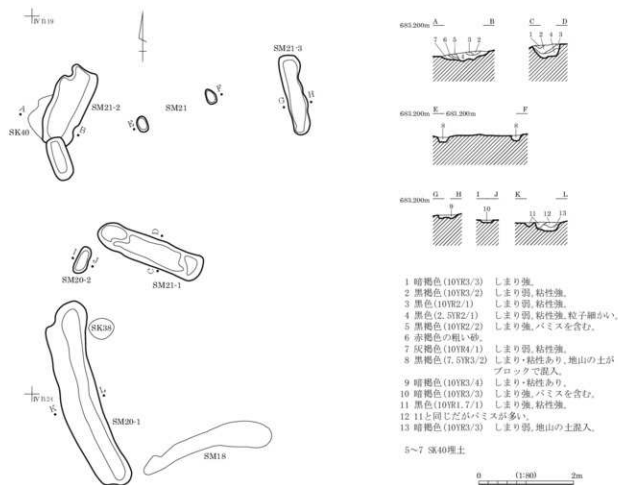
出土遺物：出土遺物はなかった。

時期：出土遺物がないため不明ではあるが、他の周溝墓の時期からみて弥生時代後期の所産と推定する。

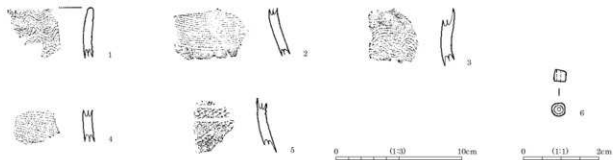
SM20 [第58図 PL22・23]

位置：②-2区、Ⅳ B19・Ⅳ B24 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。南側の周溝をSM18と共有していると思わ



SM21



第58図 SM20・21 遺構図・遺物図

れる。東側および北側の周溝は検出できなかった。そのため規模はあくまでも推定にはなるが、径5.5m程度を測ると考えられようか。

規模：周溝は幅約27～76cm、深さは4～25cmを測る。

埋土：周溝は暗褐色土に黒色土である。

主体部：主体部は検出できなかった。

出土遺物：出土したのは土器1点・約20gのみである。

時期：出土遺物が僅少ではあるが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM21 [第58図 PL22・23]

位置：②-2区、IV B19 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。SK40と重複するが、検出段階で本跡の方向が新しいと判断できた。周溝は途切れて検出されたため、それぞれSM23-1・2と枝番号を付けた。またSM21-3の周溝は調査段階では別遺構としてとらえたものだが、これらの周溝とは一連のものと理解し、あわせてSM21の周溝と判断した。本跡と北側の周溝は検出できなかったが、径5.5m程度を測るものと考えられる。

規模：周溝は幅約37～70cm、深さは10～30cmを測る。

埋土：周溝は6層に分けられた。

主体部：主体部と考えられる土坑は削平されており、小口穴のみが検出された。長軸方位N-68°-Eを示す。小口穴は35×20～25cm、深さ14～18cmを測る。小口穴の位置から推定すれば、160cm程度の木棺と考えられる。

出土遺物：土器はSM21から約400g、SM21-3から約200gの計600gが出土した。このうち図示できた5点・約70gを掲載した。1・2はSM21-2の周溝から、3・4・5はSM21-3から出土した。他には6のスクイブルーを呈するガラス玉1点が西側の小口穴から検出された。

時期：出土土器には弥生時代中期後半から後期のものがみられる。後期の所産と推定する。

SM22・SM23 [第59図 PL22・23・24・67]

位置：②-2区、IV B14・IV B15・IV B19 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。SM23の周溝は途切れるため、便宜的にSM23-1、SM23-2として区分した。北側の周溝は検出できなかったが、径6.5m程度を測るものと考えられる。SM22はSM23より新しいものだが、本項にてあわせて報告する。SM23周溝の拡張である可能性もあろう。

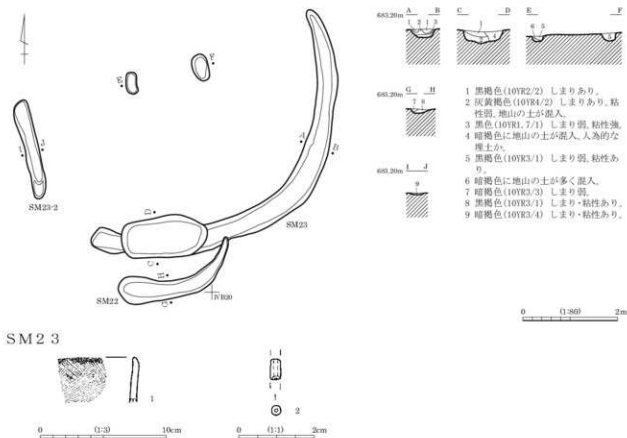
規模：周溝はSM22が幅約40cmで深さ10cmを測る。SM23-1は幅55～80cmで深さ20～30cmを測り、SM23-2は幅28cm、深さ7cmを測る。

埋土：周溝は3層に分けられた。

主体部：主体部と考えられる土坑は削平されており、小口穴のみが検出された。長軸方位N-78°-Eを示す。小口穴は45～57×22～33cm、深さ16～27cmを測る。小口穴の位置から推定すれば、150cm程度の木棺と考えられる。

出土遺物：SM23から図示した1を含む弥生土器約980gと2の赤色を呈する鉄石英製の菅玉が出土したのみである。2は小口孔からの検出である。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。



第59図 SM22・23 遺構図・遺物図

SM26 [第60図 PL24]

位置：③-2区、IV C07・IV C08・IV C12・IV C13 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。攪乱で壊されている箇所が多いが円形周溝墓と考えられようか。重複関係はない。SK46が本跡の内部にみられるが新旧関係は不明である。

規模：東側および西側を攪乱により壊されているので、東西径は不明である。南北径は、約5.8mを測る。周溝は2.5mほどしか調査区内では検出できなかったため、規模は不明である。周溝の幅は約24～40cm、深さは9～20cmを測る。

埋土：周溝は暗褐色土の単層である。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：弥生土器が約90g出土したにすぎず、図示できたものはなかった。

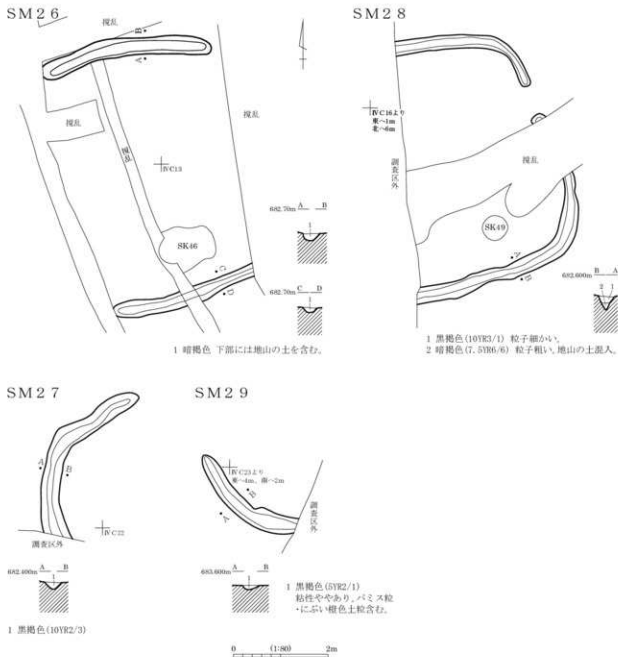
時期：出土遺物が僅少ため不明ではあるが、近隣する周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM27 [第60図 PL24]

位置：③-2区、IV C16・IV C17・IV C21 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。南側は調査区外にあたり、東側の平成16年度調査範囲の③-1区では確認できなかった。そのため、北西部分の約4分の1の周溝が検出できなかった。

規模：周溝が周溝は幅約35～45cm、深さは12～25cmを測る。



第60図 SM26～29 遺構図

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：主体部は検出されなかった。

出土遺物：土器が1点・約40g出土したにすぎず、図示できたものはなかった。

時期：出土遺物が僅少ため不明ではあるが、近隣する周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM28 [第60図 PL24]

位置：③-2区、IV C11 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。方形周溝墓ととらえられようか。西側は調査区外にあたり、中央やや南側は攪乱で壊されている。そのため、東西径は不明、南北径は約5.5mを測る。土坑SK49が内

部で検出されたが、新旧関係は不明である。また、遺物集中SQ03は本跡の南側にもかかっている。本跡にかかっている部分でSQ03としてとりあげた遺物のなかには本跡に伴うものが含まれている可能性も捨てきれないため、新旧関係は不明としておきたい。

規模：周溝は幅約25～40cm、深さは12～22cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土と暗褐色土の2層からなる。

主体部：主体部は検出されなかった。

出土遺物：周溝から弥生土器1点・約20gが出土したにすぎない。

時期：出土遺物が僅少のため不明ではあるが、近隣する周溝墓の状況から弥生時代後期の所産である可能性が高い。

SM29 [第60図]

位置：③-1区、IV C23 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模：周溝は2.5mほどしか調査区内では検出できなかったため、規模は不明である。わずかに残る周溝の形状は円形を呈するものと考えられるため、円形周溝墓として認識した。周溝の幅は約35～47cm、深さは11cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土の単層である。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：出土した遺物はなかった。

時期：出土遺物がないため不明ではあるが、近隣する周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

エ 木棺墓

SM07 [第61・62図 PL24・69・90]

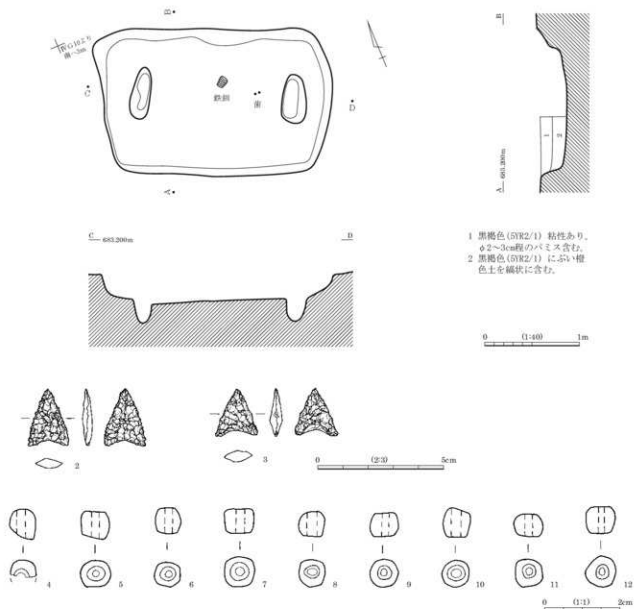
位置：②-1区、IV G10 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓 SM03 の周溝を掘り下げている途中で、より新しい所産である本跡との重複に気がついた。SM01とも空間的には重なるが、検出段階では新旧関係はつかめなかった。

規模：長軸方位N-116°-Eを示し、240×157cmを測る。深さは20cmである。小口穴を有し、50～55×18×25cm、深さ25cmを測る。小口穴の位置から推定すれば、160cm程度の木棺と考えられる。底面からはSM03の周溝の痕跡がみられた。周辺では方形周溝墓や円形周溝墓が認められるが、本跡に伴う溝はみられないため、木棺墓と判断した。

埋土：黒褐色土の2層に分けられた。ただし前述のとおりSM03を掘り下げている途中で本跡の存在に気付いたため埋土の記録は短軸方向の南側のみでしか残していない。

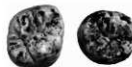
出土遺物：鉄銅が出土している。錆化が著しく脆弱である。欠損のためつながりが途切れる箇所も少なくないため不明瞭ではあるが9段の螺旋状に巻き上げる螺旋型鉄銅とみられる。佐久市後家山遺跡例のように2組あるいはそれ以上で構成されている可能性もある。両端部は残存しない。第62図に示す下位から上位へ向かい反時計回り（左巻き）で重複しながら巻き上げている。9段の残存幅は7.2cmを測る。図上では上位の径が小さく、下位に向かい径が大きく全体として台形状になっている。また土圧のためか、径は横にややつぶれた状態の楕円形を呈する。横方向で内径5.1～7.8cm、外径6.0～8.4cmを測る。保存処



第61図 SM07 遺構図・遺物図

理後の重量は57.4gである。材幅は0.6~1.0cm、材厚は0.2~0.25cmを測る。断面形態は明瞭な稜を有する二等辺三角形を呈する。外面には繊維痕がみてとれる。電子顕微鏡観察により絹であることが判明している。経糸が目立つ。着衣の一部である可能性もあるが、これだけ明瞭に繊維痕が残ることからすれば、遺体を絹布で緊縛に近い状態で覆ったものと想定した方がよいのではなかろうか。なお、内面には繊維状痕跡は認められなかった。菌は2点が出土している。菌の出土位置とあわせて考えると、頭位を南東にもち、鉄削は右腕に装着されていたことがわかる。出土位置はともに底面から数cm上からである。またコバルトブルーを呈するガラス小玉も9点出土している。土器は11点・約45gが出土したにすぎず、図示できたものはなかった。石器は図示した黒曜石製の石鏃2点が検出されたのみである。

出土菌の鑑定報告：茂原信生京都大学名誉教授に出土した人間の菌2本の鑑定をしていただいた。2本の菌は上顎右大白菌(写真右側)と下顎



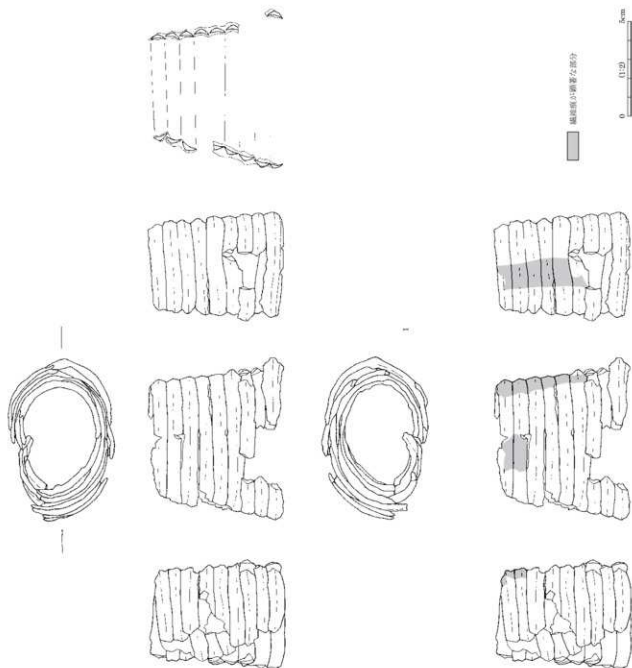
1 cm

SM07 出土菌

遺跡名	時代	性別	M1		M2		M3	
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
西一里塚遺跡					10.8	11.4		
北村遺跡	縄文	♂	10.0	11.3	8.5	11.3	8.0	11.0
(茂原1993)		♀	9.9	11.1	8.4	11.1	8.1	10.2
土井ヶ浜遺跡	弥生	♂	11.0	12.1	10.0	11.4	9.7	11.1
		♀	10.6	11.3	9.5	11.2	8.3	10.7
江戸時代人	江戸	♂	10.5	11.6	10.0	11.7	9.5	11.3
(Brace 1982)		♀	10.4	11.4	9.9	11.5	9.7	11.6
現代日本人	現代	♂	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
(藤田,1959)		♀	10.47	11.40	9.74	11.30	8.86	10.30

遺跡名	性別	M1		M2		M3	
		m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
西一里塚遺跡				10.3	9.8		
北村遺跡	♂	11.1	10.9	10.1	9.9	9.2	9.0
(茂原1993)	♀	11.7	10.9	10.6	9.8	10.2	9.5
土井ヶ浜養生人	♂	11.7	11.2	11.2	10.6	10.9	10.3
	♀	10.7	11.3	10.2	10.9	10.1	10.8
江戸時代人	♂	11.5	11.0	11.3	10.6	10.7	10.1
(Brace 1982)	♀	11.1	10.7	10.9	10.4	10.5	9.9
現代日本人	♂	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
(藤田,1959)	♀	11.32	10.35	10.89	10.20	10.65	10.02

第7表：西一里塚遺跡群発掘の人骨の上顎歯の計測値(単位はmm) 第8表：西一里塚遺跡群出土の人骨の下顎歯の計測値(単位はmm)



第62図 SM07 遺物図(2)

左大白歯（写真左側）である。その鑑定報告は以下のとおりである。

○上顎右大白歯は、第2大白歯、あるいは第1大白歯であり、咬耗がない。隣接面磨耗もない。

○下顎左大白歯は、第2大白歯、あるいは第3大白歯であり、咬耗がない。隣接面磨耗は不明である。この歯が上顎第2大白歯とすると、この歯が正常な成長過程で萌出するのは12歳前後である。もし第1大白歯とすると、6歳前後ということになる。また、いずれにせよ12歳より若い個体であると推測される。上顎の大白歯には舌側の咬頭に小さな咬耗があり、下顎の大白歯には咬耗がない。上顎の大白歯の近心面には小さな隣接面磨耗があり、一方遠心面には隣接面磨耗がない。第2大白歯とするとまだ第3大白歯が萌出していないことになる。咬耗の程度はこれら2本では大きな差がなく、これらの歯は同一個体のものと考えて差し支えないだろう。

歯の大きさは、上顎第2大白歯とすれば近遠心径、頬舌径ともに土井ヶ浜の渡来系弥生人よりやや大きめであり、縄文時代人よりはかなり大きい。第1大白歯としても土井ヶ浜弥生人とほぼ匹敵する大きさである。下顎歯はかなり小さな大白歯で、縄文時代人よりわずかに大きい、土井ヶ浜弥生人よりも小さい。

以上の所見をまとめると本遺構からは同一個体と考えられる歯冠が2本出土している。上顎大白歯が1本、下顎大白歯が1本で、それぞれ第2大白歯の可能性が高い。咬耗がないことからこの個体は10歳代前半の若い個体である。性別は不明である。

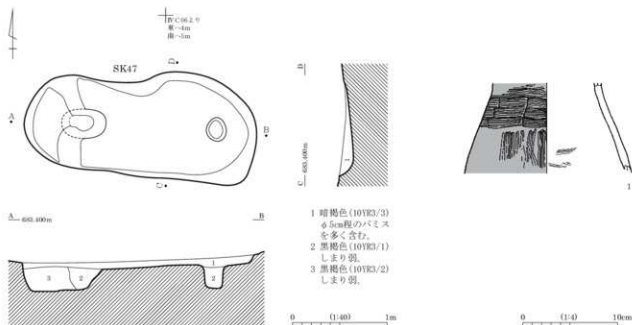
科学分析：鉄鋼の表面に付着した繊維について実体顕微鏡による観察を行った後に、保存状態の良い箇所について電子顕微鏡を用いて観察同定した。その結果、全体的に鉄分が吸着しているが、平織状の組織が観察され、それは絹の繊維であることが同定された。

時期：出土遺物は僅少であるが、近隣する遺構の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SK47 [第63図 PL24]

位置：③-2区、IV C06 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。土坑として調査を進めたが、小口穴が確認さ



第63図 SK47 遺構図・遺物図

れたため、木棺墓と認定した。

規模：長軸方位 N-93°-E を示し、245 × 113cm を測る。深さは 18cm である。西側の小口穴は広めに掘った後に、小口を埋設したと考えられる。推定される小口穴は 48 × 30cm、深さ 24cm を測る。東側の小口穴は 27 × 22cm、深さ 25cm を測る。小口穴の位置から推定すれば、140cm 程度の木棺であったと考えられる。

出土遺物：土器が約 700 g 出土し、このうち 1 の赤彩された壺（約 180 g）を図示した。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

オ 土器棺墓

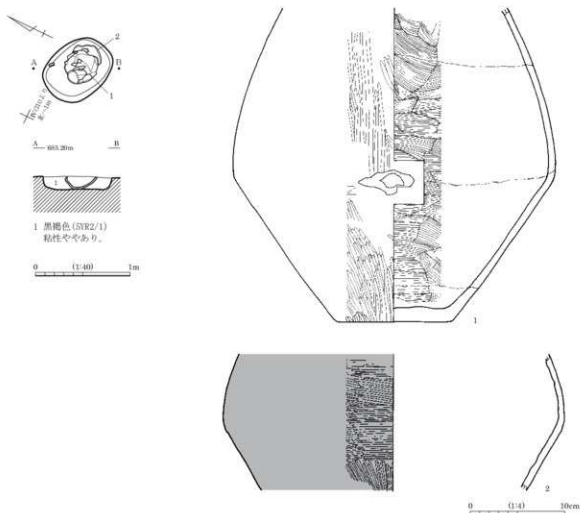
土器棺墓は SK08 として調査した 1 基および SD15 の上面から出土した 5 基の計 6 基を検出した。

SK08 [第 64 図 PL24・60]

位置：②-1 区、IV G 05 グリッド

検出：V 層上面にて検出した。SM06 と近接する。検出段階では、やや斜位に置かれた土器 1 の上半部は削平のため欠していた。

規模：75 × 58cm の掘り方に壺 1 が設置されていた。検出面からの深さは 13cm を測る。1 の壺は胴部最大



第64図 SK08 遺構図・遺物図

径付近に穿孔がある。焼成後の穿孔されたものである。口縁部を欠しているが、もともとなかったのか、削平により失ったのかは不明である。1の壺の下に重なって2の赤彩壺が出土している。

科学分析：内部の土をリン酸分析した。土器外部は1.70mg/g、土器内部は2.34mg/gと試料間に差異が認められたが、これらは火山性堆積物に由来する土壌で自然状態に含まれるリン酸量（3mg/g）の範囲内にあるため、遺体埋納の指標となりうる有意差と指摘することはできないとの鑑定結果が出ている。

時期：土器から弥生時代後期に位置づけられよう。

SD15 上面土器棺墓1 [第65・66図 PL25・57・67]

位置：①-3区、IV G13グリッド

検出：①-3・4区については、IV層からの遺物の出土が少なくないため、IV層は人力で掘り下げ、V層上面にて遺構検出を行った。そうしたなか溝SD15の検出面直上で完形に近い土器の出土が相次いだことから、土器棺墓であると判断した。取り上げる際にはSD15の土器ナンバーをつけたが、これらの5基はSD15の埋土上面において構築されたものであり、SD15の埋土内出土遺物とは別のものとして認識した。このうち土器1・2からなる土器棺墓が本跡である。1は頸部に沈線で区画した内側に櫛波状文を施す。2は口縁部を欠しており、胴部には焼成後の穿孔がなされている。土器内からは人骨、遺物等は出土しなかった。

規模：土坑に納められたものと考えられるが、その土坑の掘りこみは検出できなかった。1と2は、合わせ口の土器棺墓であるとみられるが、検出段階での合わせ口部分はやや離れている。1は完形の壺である。2は口縁部を欠した壺であり、胴部に焼成後の穿孔がある。ともに赤彩はみられない。

時期：弥生時代後期に位置づけられる。

SD15 上面土器棺墓2 [第65・66図 PL25・57]

位置：①-3区、IV G13グリッド

検出：検出までの経緯は土器棺墓1と同じであり、土器3・4をもって本跡と理解した。

規模：本跡も土坑の掘りこみは検出できなかった。口縁部を欠した壺3と口縁部と底部を欠した壺4からなる。寛描矢羽状文を施す頸部以外の外面には赤彩されている。本来は合わせ口の土器棺と考えられるが、検出段階ではすでに現位置をとどめていなかった可能性がある。土器内からは人骨、遺物等は出土しなかった。

時期：弥生時代後期に位置づけられる。

SD15 上面土器棺墓3 [第65・67図 PL25・58]

位置：①-3区、IV G13グリッド

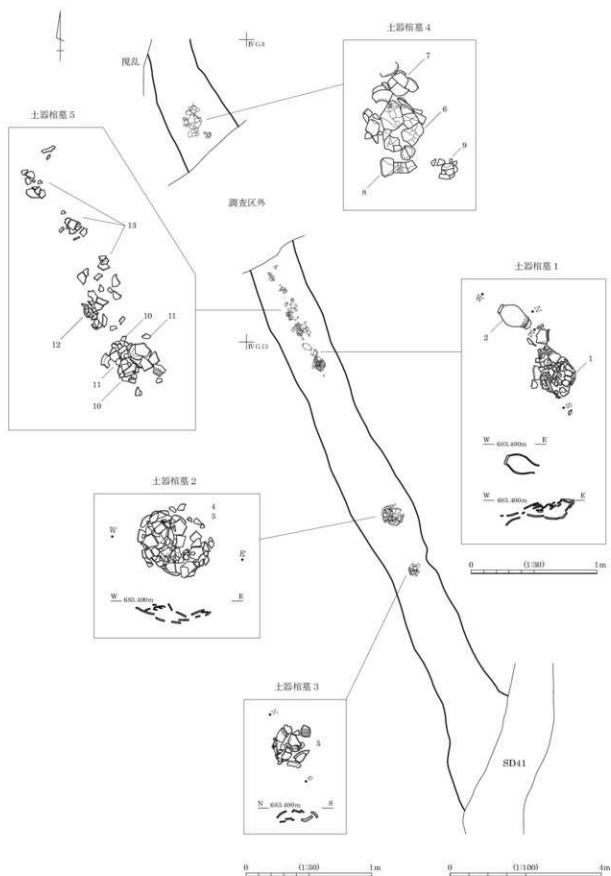
検出：検出までの経緯は土器棺墓1と同じであり、土器5からなるのが本跡である。

規模：本跡も土坑の掘りこみは検出できなかった。5は口縁部を欠した壺であるが、検出段階ではすでに現位置をとどめていなかった可能性がある。頸部には寛描矢羽状文が施される。土器内からは人骨、遺物等は出土しなかった。

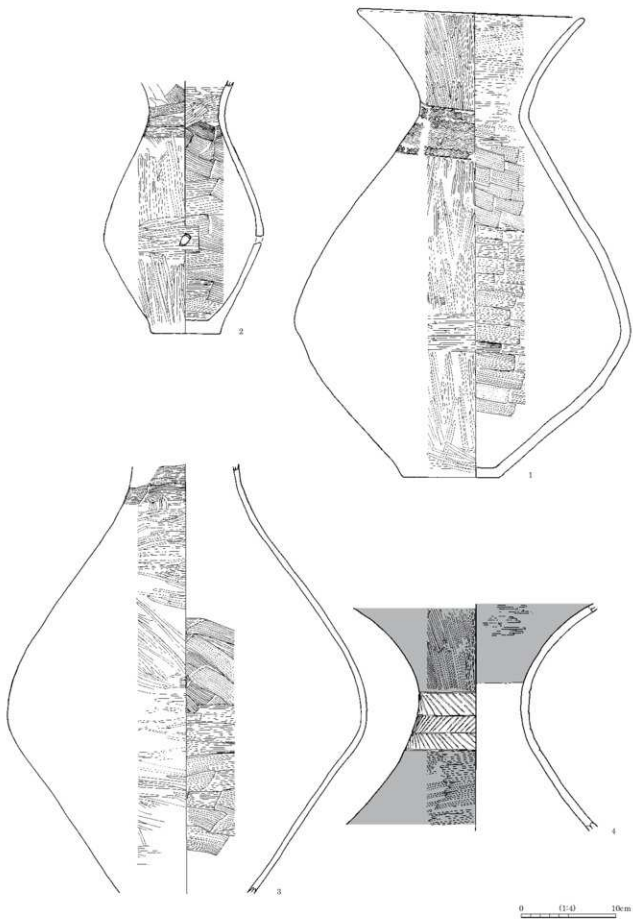
時期：弥生時代後期に位置づけられる。

SD15 上面土器棺墓4 [第65・67図 PL25・58・59]

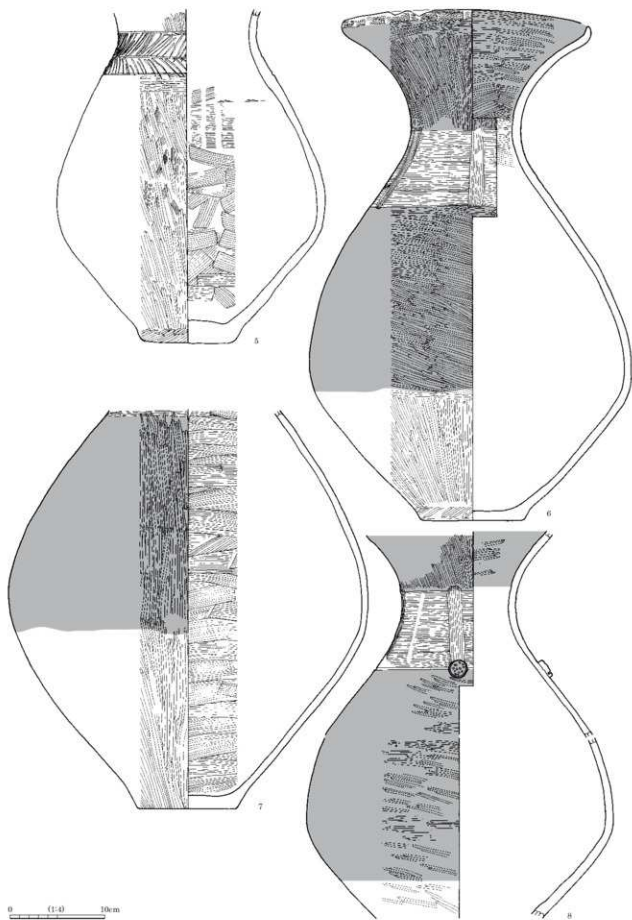
位置：①-2区、IV G7グリッド



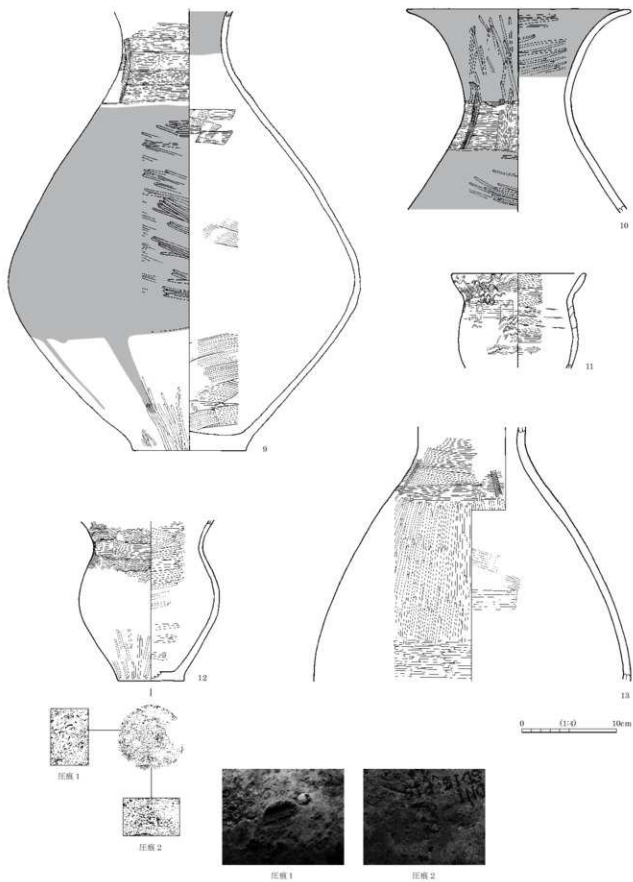
第65図 SD15上面土器棺墓群



第66図 SD15上面土器棺(1)



第67図 SD15上面土器棺 (2)



第68図 SD15上面土器棺 (3)

検出:平成16年度に調査した①-2区のSD15で検出されたものである。SD15の埋土上面よりもやや低いレベルで検出されているもののSD15上面土器棺墓1~3と同じ出土状態であることから、整理段階でSD15上面土器棺墓4として認定した。土器6~9からなる。ただし検出段階ですでに現位置をとどめていなかった可能性が高いと思われる。

規模:本跡も土坑の掘りこみは検出できなかった。4点の土器からなり、6はほぼ完形の赤彩された壺、7・9は口縁部を欠した壺、8は口縁部および底部を欠した赤彩された壺である。土器内からは人骨、遺物等は出土しなかった。

時期:弥生時代後期に位置づけられる。

SD15 上面土器棺墓5 [第65・68図 PL59]

位置:①-3区、IV G08 グリッド

検出:SD15 上面土器棺墓1の北側に近接して、土器がSD15の埋土上面に広がっていることが認められた。図示した10~13の土器4点である。かなりの広範囲に破片がおよんでいる13をはじめこれらは現位置を留めていないと思われるが、土器棺墓1に近接しており、かつSD15の埋土上面で検出されたことから、土器棺墓として認定した。ただし複数の土器棺やそれ以外の土器も混在してしまっている可能性が高い。本来は複数の土器棺墓が存在したとも考えられる。12の甕の底面には粗らしき土痕がみられる。

出土遺物:土器内および周辺からは人骨等は認められなかった。

時期:弥生時代後期に位置づけられる。

カ 溝跡 (SD)

SD01・02 [第69・70図 PL27・52・61・77]

位置:①-1・2区、IV B22・IV F10・IV F14・IV F15・IV F19・IV G01・IV G02・IV G06・IV G11 グリッド

検出・重複関係:V層上面にて検出した。SD15と重複し、検出段階で本両跡の方が新しいと判断した。V層を掘り込んでいる。

規模・埋土:①-1区・2区にまたがり、その北西際を並走する。SD01は幅約180~280cm、深さ10~30cm程度を測る。SD02は幅約100~220cm、深さ20cm程度である。埋土は、SD01が砂層主体の4層に、SD02は砂層と粘質土の2層に分けられた。

出土遺物:SD01は土器が約6,000g出土し、このうち3点・約300gを図示した。1は縄文時代早期の押型文土器、2は弥生時代後期の甕である。3は破片であるが底部に穿孔がある手握土器とみられる。底部中央に穿孔があるが、それ以外にも小孔12ヶが認められる。この小孔のなかには貫通していないものもある。木製品は2点が出土し、うち1点を図示した(4)。アサダを用いた板状の成形品だが何の製品かは不明である。もう1点も接合はしないが1と同じ個体とみられる。写真(PL77-2)のみを掲載した。SD02は弥生土器が約350g検出されたが、図示できるものはなかった。

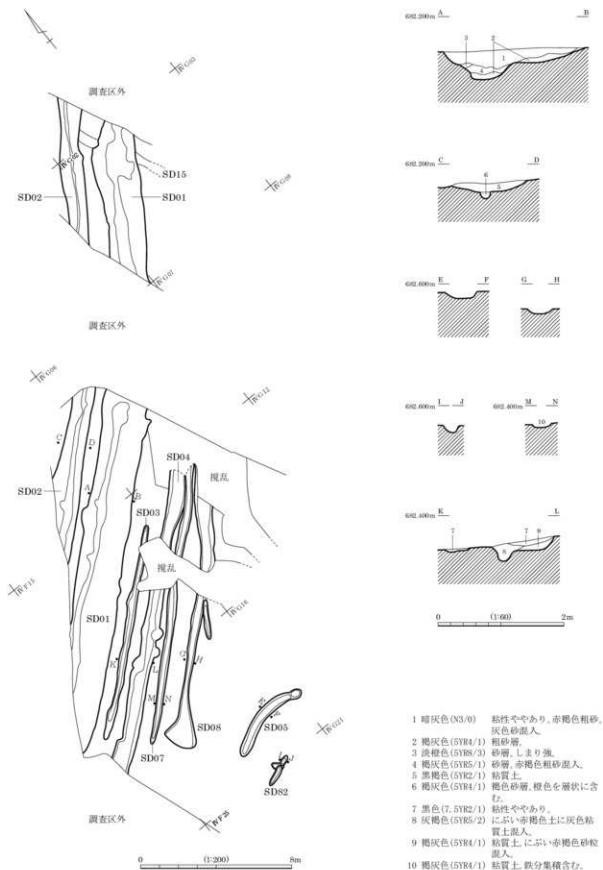
時期:SD01は弥生時代後期と考えられる。SD02は弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで所産時期をとらえたい。

SD03・04・07・08 [第69図 PL27]

位置:①-2区、IV F15・IV F19・IV F20・IV G11 グリッド

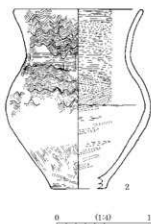
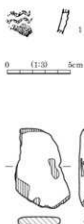
検出・重複関係:V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模・埋土:①-2区をSD01・02もあわせた6条の溝跡が北東-南西方向に並走する。SD01・02との

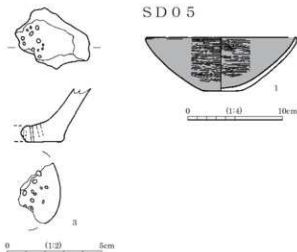


第69図 SD01～05・07・08・82 遺構図

SD01



SD05



第70図 SD01・05 遺物図

相違はこれら4条が①-1区にはみられないことである。SD03は幅約30～50cm、深さ5cm程度と浅い。SD04は幅約70～100cm、深さ20cm程度である。SD07は幅約30～50cm、深さ15cm程度、SD08は幅約30～90cmだが、南西隅ではやや広がり約190cmを測る。深さは5～10cmにすぎない。埋土は砂層と粘質土からなる。

出土遺物：遺物は弥生土器のみであり、その土器もSD03が約270g、SD04が約150g、SD07が約5gを出土したにすぎず、図示できたものはなかった。SD08からはまったく遺物の出土をみなかった。

時期：いずれも弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで所産時期をとらえたい。

SD05・82 [第69・70図 PL27]

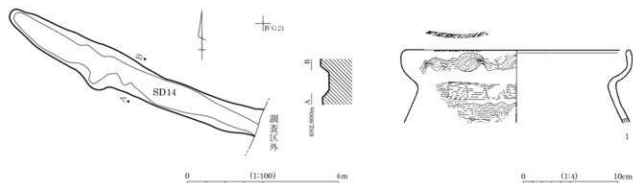
位置：①-2区、IV F20・IV F25・IV G16グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模・埋土：SD05は長さ4.5m程が検出されたもので、幅約45～55cm、深さ5cm程度である。SD82は長さ2m程が検出され、幅約30cm程度、深さ10cm程度である。埋土は不明である。

出土遺物：SD05は土器が約860g出土し、うち1の赤彩された鉢を図示した。SD82は出土遺物をみなかった。

時期：ともに弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで所産時期をとらえたい。



第71図 SD14 遺構図

SD14 [第71図 PL27]

位置：②-1区、IV G15、IV G20 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模・埋土：幅約80～120cm、検出面からの深さは約20cmを測る。②-1区の南際で検出されたものである。埋土は現場段階での記録がなく不明である。

出土遺物：弥生土器が約550g出土し、このうち1点・約90gを図示した。1は受け口口縁の甕であり、口唇部には縄文を施す。

時期：弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで所産時期をとらえたい。

SD15 [第72・73図 PL27・31・56～59・67・71・72]

位置：①-2区、①-3区、IV B22・IV G02・07・08・13・18 グリッド

検出・重複関係：SD15 上面土器棺墓1～5の項でも述べたように、①-3・4区については、IV層からの遺物の出土が少なくないため、IV層は人力で掘り下げ、V層上面にて遺構検出を行った。本跡の検出面直上では完形に近い土器の出土が相次いだことから、土器棺墓1～5と認定した。本跡の埋土上面に存在するため、本跡の埋没後に構築されたもので、より新しい所産であると理解できる。またSD01・02・41とも重複するが、検出段階で本跡が最も古いと判断できた

規模・埋土：深さ約50～190cm、検出面からの深さは約25～45cmを測る。SD41に切られるが、南側は重複している。SD41は北側部分のみを新しく掘削し、本跡と重複する南側部分はそのまま利用したものと理解できる。埋土は2層に分けられ、いずれも黒褐色粘土である。SD41の埋土が砂層主体であるのと対照的であり、これはSD15を人為的に埋めたことを示すのではないかと考える。本跡を境にして西側では円形・方形周溝墓は認められず、集落域としても堅穴住居跡は中期後半のものはみられない。区画溝であると考える。

出土遺物：SD15 上面土器棺墓1～5を除いたものを本項でとりあげる。土器棺は現位置をとどめていないものが少なくないため、本跡出土品として掲載した遺物のなかにも土器棺として用いられたものも含まれている可能性もある。またその逆の場合も考えられよう。土器は約3,000gが出土し、5点を図示した。1・2・3は壺、4は口縁部を欠しているが赤彩された鉢で穿孔が1箇所認められる。5は壺と考えられるが胴部の最大径よりやや下に剥落痕がみられる。取っ手状のものが付けられていた可能性がある。6は砂岩製の刃器、7は輝石安山岩製の磨石である。

時期：弥生時代後期に位置づけられよう。

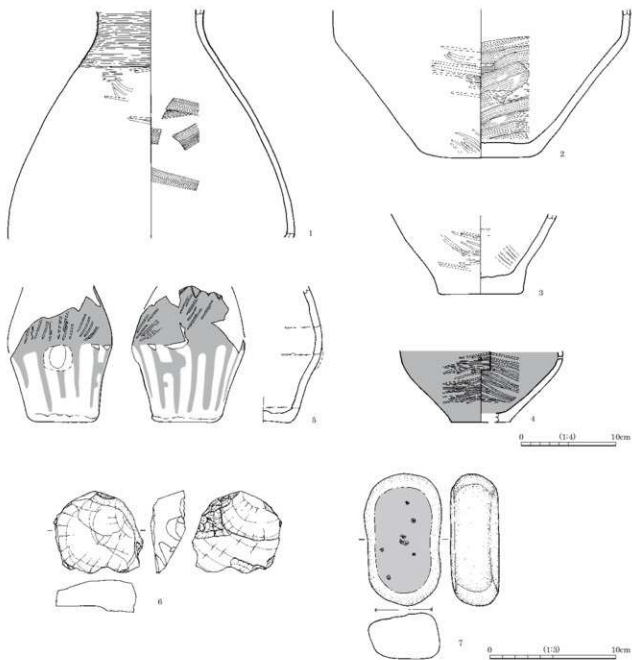
SD36 [第75・86図 PL52]

位置：②-2区、IV B09・IV B14 グリッド

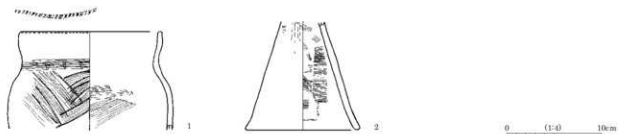
検出・重複関係：V層上面にて検出した。SD39と重複するが、SD39は第2水田の被覆砂層（第31図土層4～7層）を掘り込んでいることが②-2区東壁の観察で判明したため、本跡よりも新しい所産である。規模・埋土：SD39は幅約50～150cm、検出面からの深さは約20cmを測る。③-2区の中途から掘り込みが確認され、②-2区では北東-南西方向に延びるが、①-2区では検出できなかった。SD36はSD39に切られるため、5mほどの長さしか検出できなかった。検出面からの深さは約20cmである。埋土は黒褐色土の砂層である。

出土遺物：縄文時代前期前半に比定される土器が2点出土し、うち1点を図示した(1)。

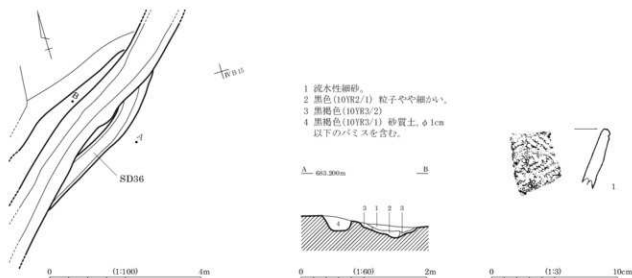
時期：出土遺物は縄文時代のものであるが、近隣の溝跡は弥生時代中期後半から後期という幅のなかで所



第73図 SD15 遺物図



第74図 SD41 遺物図



第75図 SD36 遺構図・遺物図

産時期がとらえられているので、本跡も同様の時期の所産と推測される。

SD37 [第76・77図 PL72・76]

位置：②-2区、IV B13・17・18・22・23グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。②-2区および③-2区では北西に向けて微高地から低地へ地形が下がっていく。その低地への落ち際に構築された溝跡である。SD41と重複するが、トレンチを入れて土層を観察した結果、本跡の方が新しいと判断した。SD38とは調査区内ではつながらないため、別の遺構番号にしたが、同一の溝跡と考えられよう。

規模・埋土：調査区際にあることから、北側の立ち上がりは一部を除いて調査区外にあたっている。確認できた箇所では幅は約1.5～3.5mを測る。検出面からの深さは25～110cm程度と起伏がある。埋土は砂層が主体である。

出土遺物：土器の出土量は多く約14kgを測る。このうち6点・約3,000gを図示した。1～3は壺である。3は受け口口縁であり、口唇部には縄文を施す。4は赤彩された鉢もしくは高坏と考えられる。5は赤彩の大形高坏とみられる。6は甕とみられるが底部に穿孔を認める。焼成後に両側から穿孔されており、2次利用として紡錘車などに用いたものと考えられる。石器は7点が出土し、うち3点を図示した。7は敲石、8は凹石、9は軽石製品である。他に敲石3点、打製石斧片1点が出土された。

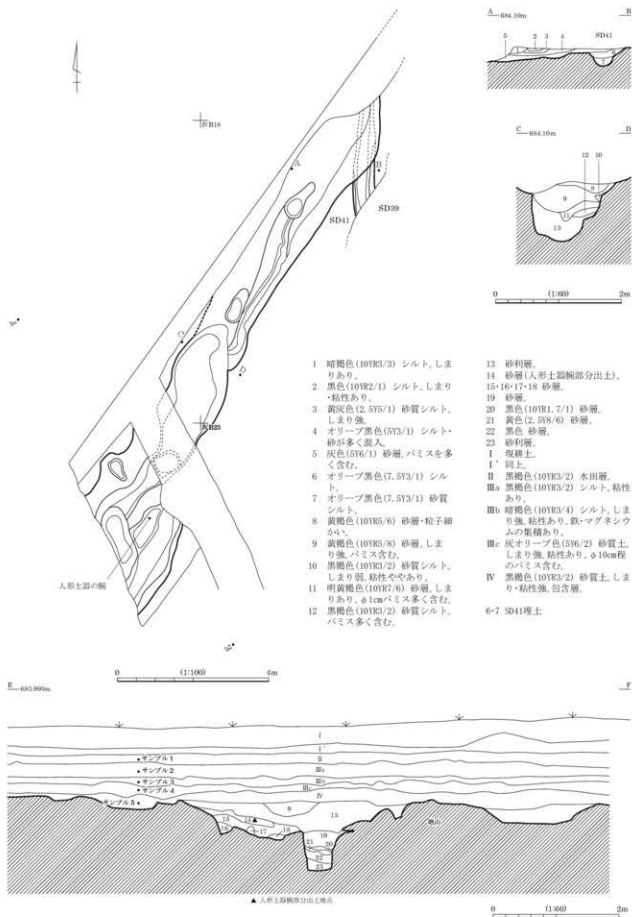
また人形土器の左腕部が出土した。E-F断面を精査していたところ第14層の砂層より出土したものである。他の部位は遺構外からの出土のため、遺構外遺物の項で記述する。

時期：土器は弥生時代中期後半から後期のものがみられるが、出土層位で時期を分けることはできなかった。後期まで本跡は機能していたとみられる。

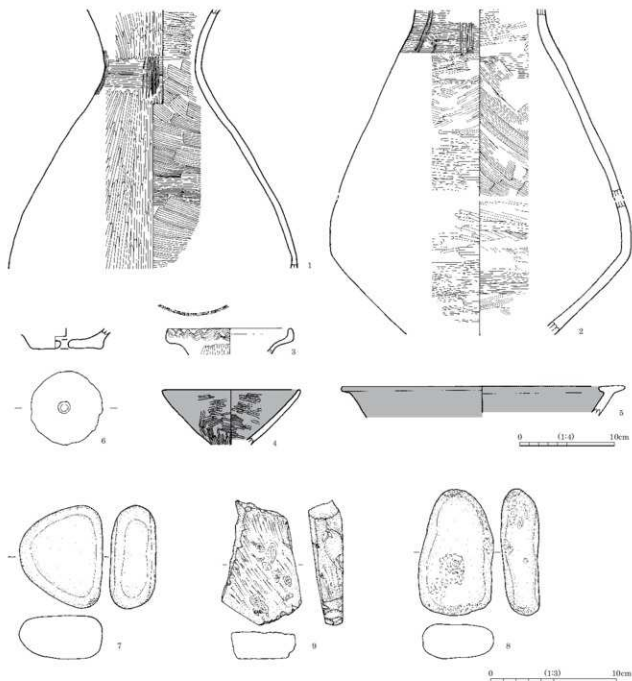
SD38 [第78～85図 PL29・30・52・61・66・67・69～78・84]

位置：②-2区、③-2区、I W22・IV B09・10・13・14・IV C02・06・07

検出・重複関係：V層上面にて検出した。前記したように、②-2区および③-2区では北西に向けて微高地から低地へ地形が下がっていくが、南側の立ち上がりは地山のV層に沿っており、その低地への落ち際に構築された溝跡である。一方の北側立ち上がりは低地堆積土を掘り込んでいる箇所もあったが、適宜



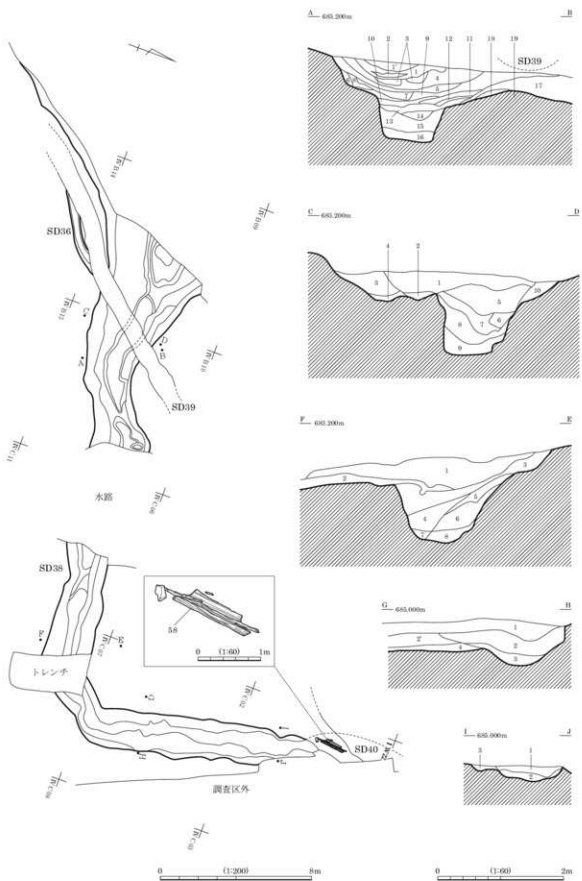
第76図 ②-2区 SD37 遺構図



第77図 SD37 遺物図

トレンチを入れて土層を観察し、平面プランを確定した。SD39と重複するが、SD39はIV層中から掘り込まれていたため、本跡よりも新しい。

規模・埋土：②-2区では東西方向に流れ、北西壁で調査区外へ出る。③-2区では東壁近くで南北方向へ90°近く屈曲する。幅は約2～3mだが、②-2区北西壁際では約5mと徐々に広がっていく様子がみとれる。検出面からの深さは大半が約80～130cm程度であるが、③-2区では東壁近くになると約20cmと浅くなっている。埋土についてみると、大半は流水性の砂層および粘性の強い黒色土・黒褐色土である。SD37との直接のつながりは調査区内ではみられなかったが、ともに低地落ち際に構築された溝跡であることを踏まえて、同一遺構とみる。一方、①-1・2区のSD01・02は低地落ち際ではなく、微高地上に存在することから、SD37・38とはつながらない別の遺構であるとする。③-2区のSD38での状



第78図 SD38 遺構図 (1)

断面図 A-B の埋土の性質

- 1 黒褐色(10YR3/1) シルト、しまり強、粘性、1' 成性粗砂。
- 2 1にバミスが多く混入。
- 3 黒褐色(10YR3/1) 砂質シルト、しまり弱、粘性強。
- 4 黒褐色(7.5YR2/1) シルト、しまり弱、粘性強。
- 5 黒褐色(10YR2/1) 砂質シルト、粒子粗い。
- 6 地山の崩落土に8の土が混入。
- 7 オリーブ黒色(5Y3/1) しまり弱、粘性強。
- 8 オリーブ黒色(5Y3/3) しまり弱、粘性強。
- 9 オリーブ黒色(5Y3/1) シルト、しまり弱、粘性強。
- 10 黒褐色(10YR2/2) シルト、しまり弱、粘性強。
- 11 暗褐色(10YR3/4) シルト、しまりあり、粘性強、砂や混入。
- 12 黒褐色(10YR3/1) 砂質土、しまり弱、粒子やや粗い。
- 13 黒褐色(2.5YR3/1) 砂質土、粒子粗い。
- 14 黒色(10YR2/1) シルト、しまり弱。
- 15 オリーブ黒色(5Y3/1) 地山の土混入。
- 16 粗砂。
- 17 暗褐色(10YR3/3) 砂質シルト、しまり強。
- 18 黒褐色(10YR3/1) シルト、しまりあり。
- 19 地山。

断面図 C-D の埋土の性質

- 1 黒色(10YR1, 7/1) 砂質シルト、しまり弱、粘性強。
- 2 黒色(2.5Y2/1) 砂質シルト、しまり弱、粘性強、砂質土を含む。
- 3 黒色(10YR1, 7/1) 1よりもしまり弱、ラミナを含む。
- 4 2と同じだが、しまり弱。
- 5 にぶい褐色(7.5YR6/4) 地山の土に黒色土混入、人為的埋土か。
- 6 オリーブ黒色(5Y3/1) シルト、しまり弱、粘性強。
- 7 6の上に地山の土が混入、5よりは地山の割合が小さい。
- 8 黒色(2.5YR2/1) シルト、しまり弱、粘性強。
- 9 黒褐色(2.5YR3/1) シルト、しまり弱、粘性強。
- 10 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト、しまり強、粘性小。

- 4 暗褐色 砂質土、粒子細かい。
- 5 暗褐色 ϕ 1~2cm程のバミス多く含む。
- 6 黒褐色 粒子細かい、バミスわずかに含む。
- 7 黒色 粘性強、粒子細かい、地山の土が混入。
- 8 砂礫。
- 9 黒褐色 シルト(場所によっては細分できる)。

断面図 G-H の埋土の性質

- 1 粗砂、バミス含まれる。
- 2 黒褐色(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。
- 2' 2と同じだが細石はみられない。
- 3 細砂に黒褐色土がわずかに混入、 ϕ 5cm以下のバミス含む。
- 4 黒褐色(7.5YR3/1) シルト、 ϕ 2~3cm程のバミス含む。

断面図 I-J の埋土の性質

- 1 黒褐色(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。 ϕ 2~3cm程のバミス含む。
- 2 暗褐色(10YR3/3) 粘土、粘性強。 ϕ 5cm程のバミス非常に多く含む。
- 3 黒褐色(10YR2/3) シルト、バミスが少ない、SD40の4層。

断面図 E-F の埋土の性質

- 1 青味がかった黒褐色粘土。
- 2 黄褐色 砂質土、 ϕ 2~3cm程のバミス含む。
- 3 黒褐色(暗褐色に近い色調) 砂質土、 ϕ 1cmのバミス含む、炭化物混入。

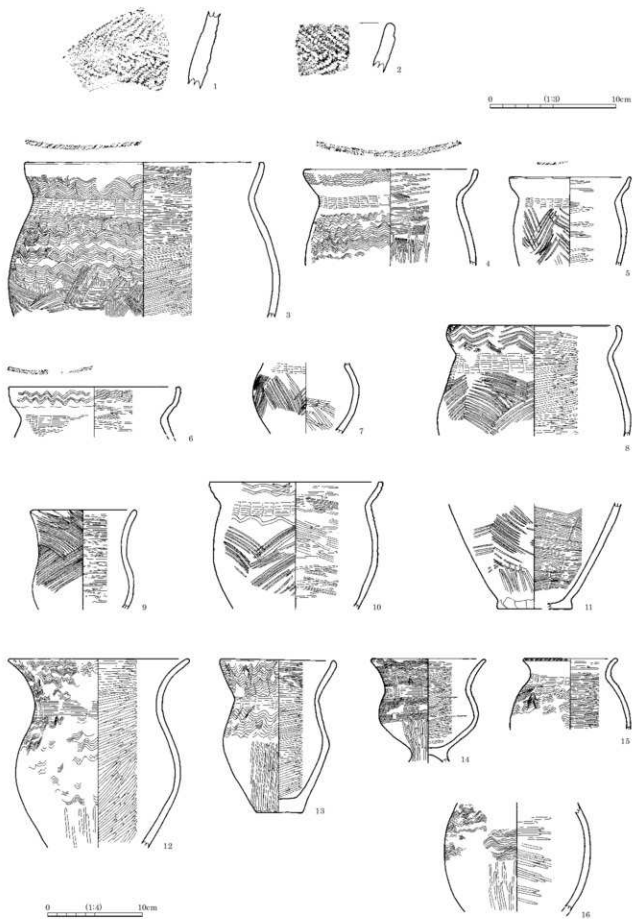
第79図 SD38 遺構図(2)

況と同じく、SD37・38は低地落ち際に沿って、①-2区との間で北側へ屈曲するものと理解したい。

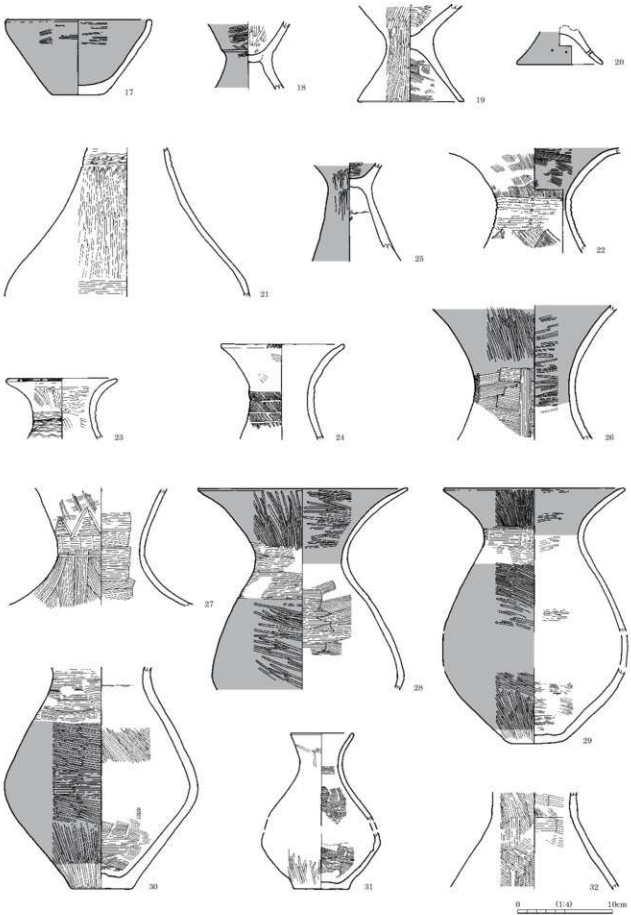
出土遺物：土器の出土は非常に多く約50kgを測る。うち甕は約18kg、甍が約30kgを測る。1・2は縄文時代前期前半に比定される。同時期の土器片は他に2点が出土している。3~16は甕である。3~6は口唇部に縄文や刻みを施す。これらは中期後半に比定できよう。12~14・16は後期に位置づけられるものである。15は口縁端部に縄文を巡らすため中期後半の可能性が高い。17は赤彩鉢、18は高坏だが脚部と坏部とで段を有する。19は台付の甍か甕の脚部と思われる。内面には火を受けた痕跡がある。20は高坏脚部とみられるが、穿孔が2箇所ある。内面からは貫通していないがもう1箇所穿孔を試みた痕跡がある。何のための穿孔かは不明である。21~24、26~38は甍である。25は高坏で赤彩されている。39は蓋であるが指頭痕がよく残り手捏土器の一種として理解したい。

石器・石製品は26点が出土し、16点を図示した。40は安山岩製とみられる石鏃で欠損している。41はデイサイト製の打製石斧の欠損品、42・43は細粒砂岩製の刃器、44・46は敲石で凹みを有する。45は側面には敲打面があるが台石とみられる。石材は44・45が砂岩製、46は輝石安山岩製である。47は砂岩製の敲石と思われる。48~50は砂岩製の砥石である。51は砂岩製の台石で一部欠損する。表面には磨面がみられる。52~54も砥石である。52・53は砂岩製、54は砂泥互層岩製で表面は剥離している。側面にも砥面がみられる。55は安山岩製の石製紡錘車であろう。

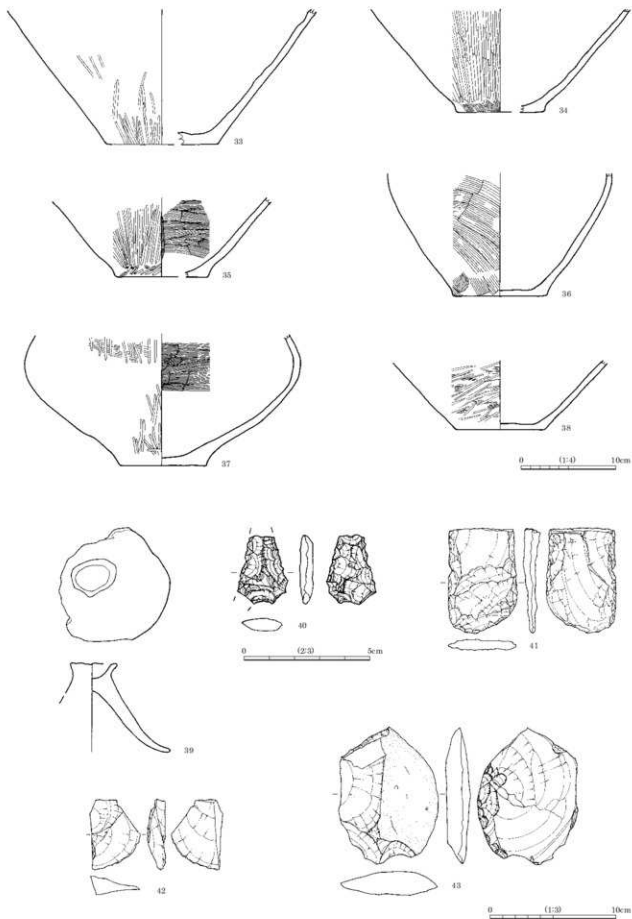
木製品は15点を図示した。56は鎌身の欠損品と思われる。コナラ節で曲柄又鎌の刃部の一部とみられる。57は中央に穿孔があるため、糸巻きの可能性もあるがヒノキ科の用途不明製品としておきたい。58は130cm以上を測る槌であり、半丸木状のサワラを削り貫いて作っている。59は杭である。樹種はネムノキで、先端の加工は石斧によるものと思われる。60はサクラ属の柱材である。現存長は約138cmを測るが本来は2m以上はある柱を床から切断したものと思われる。下部は鉄斧で切断している。上部の木股の部分は横に渡す木を乗せたものであろう。切り込みが認められるがこれは調査時に付けてしまったものである。61は一本櫛の柄の一部とみられる。樹種はクスギ節である。62はヒノキ科の棒状木製品であり、竿の一部かと思われる。63はクスギ節で、61と同様に一本櫛の柄である。61と同一個体の可能性もある。64は成形されたケンボナシ属の角材でくびれを有する部材である。建物等の横架材の端部と思われる。



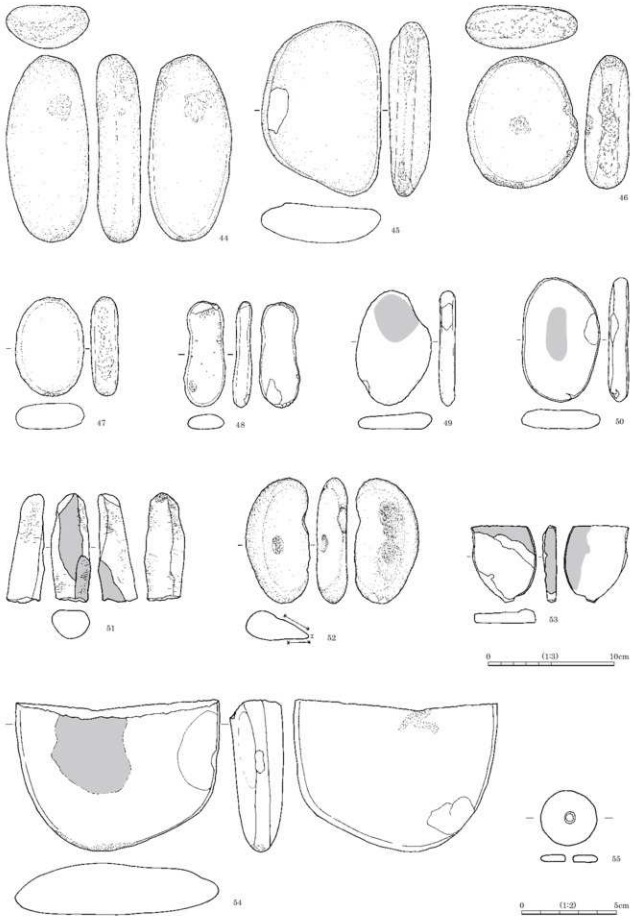
第80图 SD38 遺物图 (1)



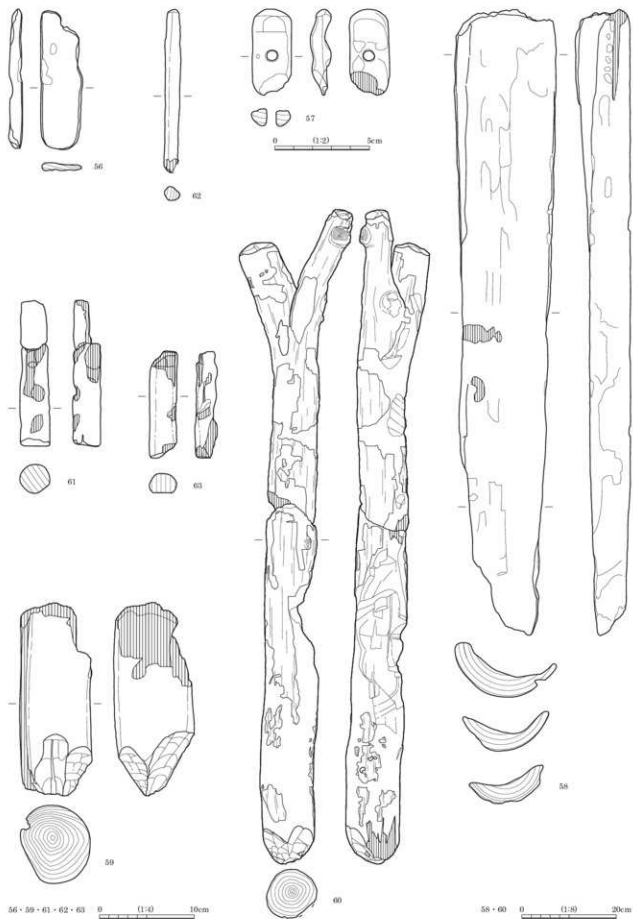
第81図 SD38 遺物図 (2)



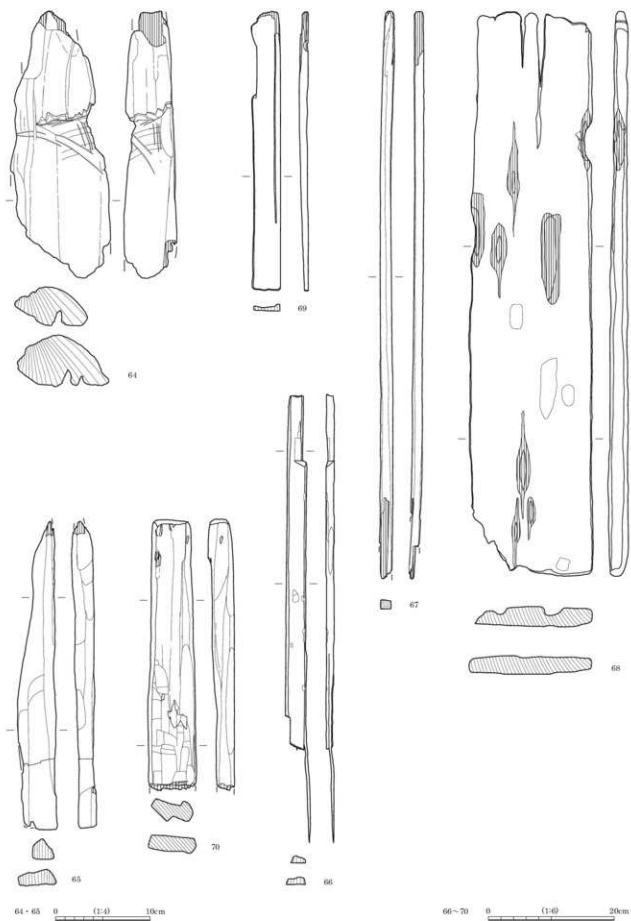
第82図 SD38 遺物図 (3)



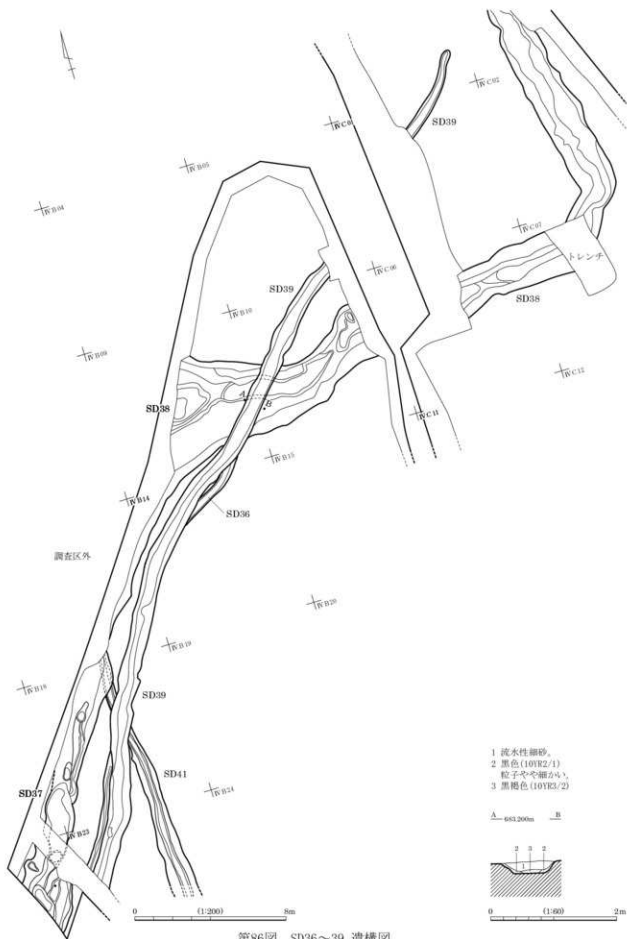
第83図 SD38 遺物図 (4)



第84图 SD38 遺物图 (5)



第85図 SD38 遺物図 (6)



第86図 SD36～39 遺構図

65・66・67は材材である。樹種は65がコナラ節、66・67がサワラである。68は建築部材で壁材あるいは床材とみられる。樹種はサワラである。69・70は板材である。70は分割製材し、ちょうなで両面を整形加工して使用した残りの材で、下端は切り落としたことがよくわかる。この他オニグルミなどの種実も数点検出された。

時期：土器は弥生時代中期後半から後期のものがみられるが、出土層位で時期を分けることはできなかった。後期まで本跡は機能していたとみられる。

SD39 [第86・87図 PL30・72]

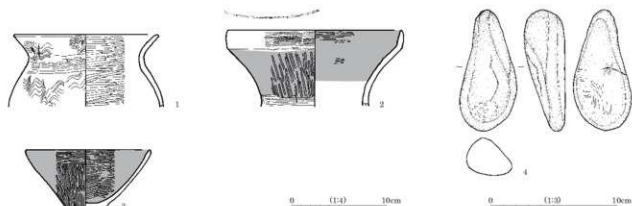
位置：②-2区・③-2区、I W21・IV B05・09・10・13・14・18・23・IV C01グリッド

検出・重複関係：SD39はIV層中から掘り込んでいることが②-2区東壁の観察でつかめたため、重複するSD36・38・41よりも新しい所産である。

規模・埋土：SD39は幅約50～150cm、検出面からの深さは約20cmを測る。③-2区の中途から掘り込みが確認され、②-2区では北東-南西方向に延びるが、①-2区では検出できなかった。埋土は砂層である。

出土遺物：土器は約5,100gが出土し、うち3点・約300gを図示した。1は甕、2は赤彩された受け口口縁の壺、3は赤彩鉢である。4は敲石だが裏面には線状痕が認められる。石器は他に敲石1点がみられる。

時期：他の周辺遺構よりも上位層で検出されたものだが、弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで位置づけたい。



第87図 SD39 遺物図

SD40 [第88・89・90図 PL30・83]

位置：③-2区、I W16・17・21・22グリッド

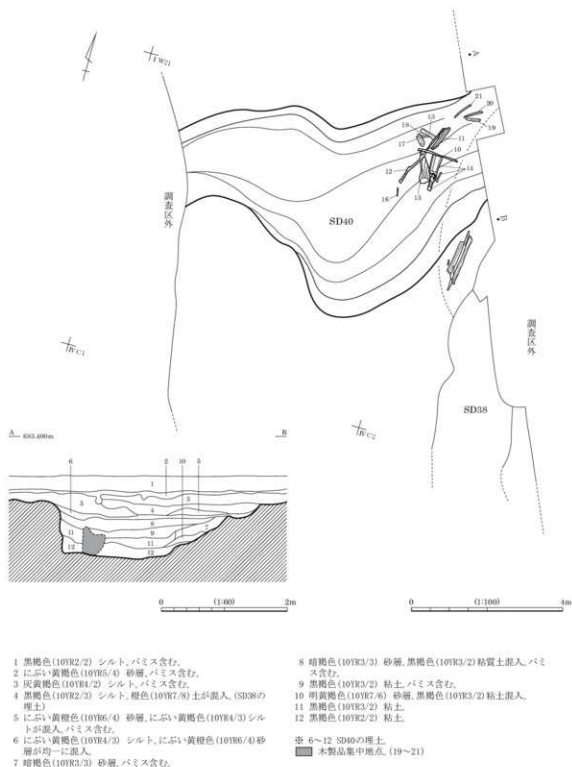
検出・重複関係：SD38の調査を進めていくなかで、本跡の存在が確認できた。③-2区東壁際でのSD38の検出作業において別の溝状落ち込みの存在に気が付いたため、東壁際にトレンチを入れ、土層を確認した。その結果、SD38の下層から掘り込まれた溝跡であることが理解できたため、本跡の方がSD38よりも古い所産であると判断した。

規模・埋土：調査区を東西方向に走る。幅は約2m～5m、検出面からの深さは約70cmを測る。埋土は7層に分けられた。

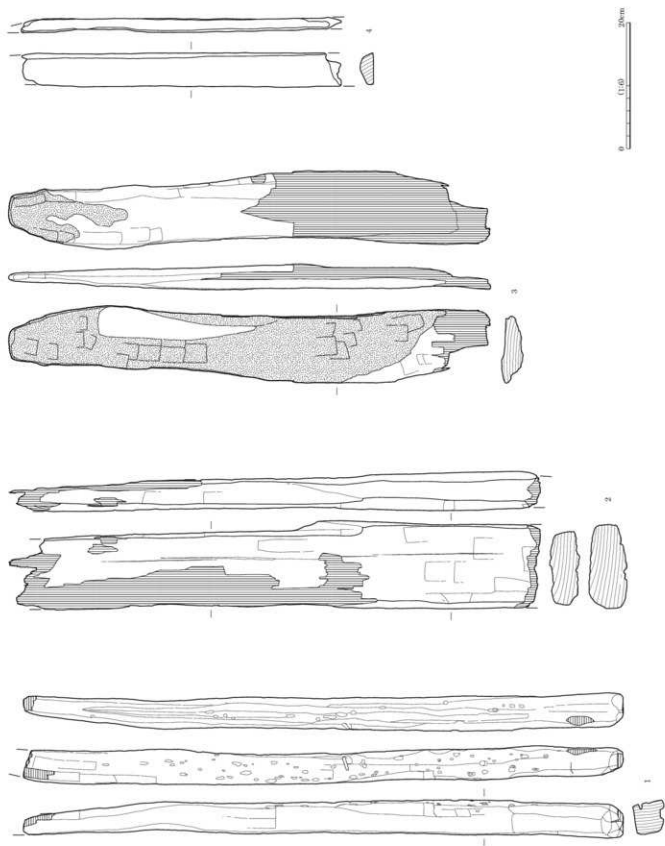
出土遺物：土器は約150gが検出されたにすぎない。東壁際から木製品がまとまって出土した。図示したのは6点である。1はサワラの分割角材であり、梁や桁などの横架材あるいは施設部材と思われる。2は床材とみられ、樹種はサワラである。3もサワラの桁材である。火を受けて炭化している。4は割った

けの板材、樹種はサワラである。5はオニグルミの芯持丸木材を使ったもので、表面の凸凹を除去しており、さらに切り込み痕が認められるため、作業台と考えられる。6はサワラの芯去分割材であり、一方の木口は欠損している。施設部材と考えられ、中央部には加工痕が残る。

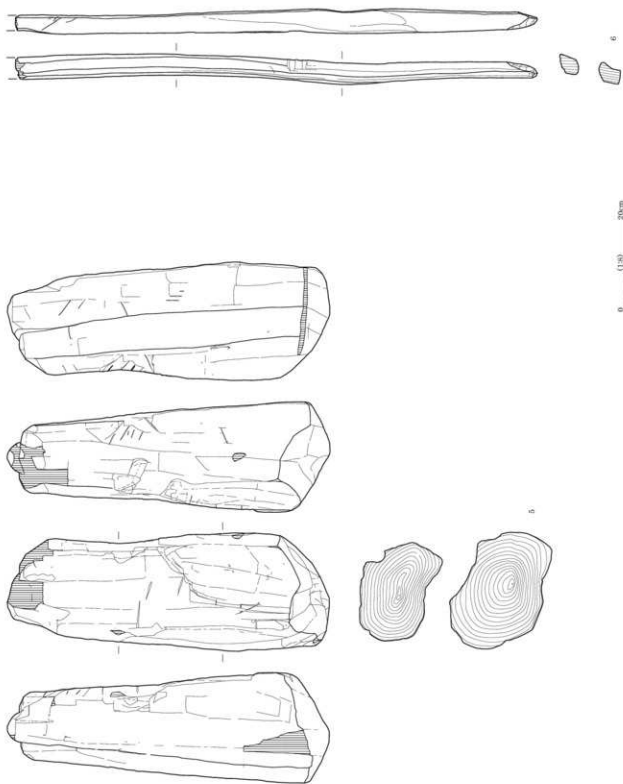
時期：層位的にはSD38より古いが、弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで位置づけたい。



第88図 SD40 遺構図



第89図 SD40 遺物図(1)



第90図 SD40 遺物図(2)

SD41 [第72・74図 PL30・31]

位置：①-3区・②-2区、IV B13・18・23・IV G03・08・13・14・18・19・23・24・IV L04・09グリッド

検出・重複関係：検出段階でSD15より新しく、SD37・SD39・SD48より古い所産であると判断できた。一部は攪乱を受けている。

規模・埋土：②-2区から①-3区へはほぼ南北方向に掘削され、南北ともに調査区外へ延びている。幅は約55～85cm、検出面からの深さは約20～45cmを測る。埋土は砂層が主体である。SD15と同様に本跡を境にして西側では円形・方形周溝墓は認められず、堅穴住居跡も中期後半のものはみられない。SD15の北側部分を造り替えた同じく区画溝であると考えたい。

出土遺物：土器は約10kgが出土した。3点を図示した。1は甕、2は高坏の脚部である。2は外面の摩耗が著しく赤彩は認められなかった。

時期：弥生時代後期の所産と理解したい。

SD44・45・48・49・50 [第91・92図 PL31・32・69]

位置：①-3区・①-4区、IV G17・18・21・23・IV K08～10・IV L01～04・06～09・11～14・16グリッド

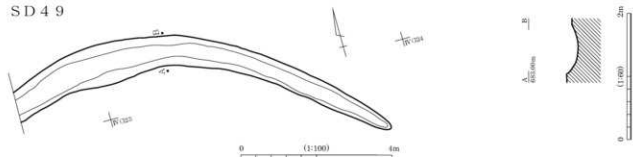
検出・重複関係：V層上面にて検出した。検出段階でSD45はSD44より新しく、SD48はSD41より新しいことが判断できた。

規模・埋土：SD44は幅約50cm、検出面からの深さは約10cm。SD45は幅約100～170cm、深さ約15～55cm。SD48は幅約50cm、深さ約15cm。SD49は幅約60～110cm、深さ約15cm。SD50は幅約約80～100cm、深さ15cmを、それぞれ測る。埋土は粘質土が主体である。

出土遺物：SD44からは約300gの弥生土器が検出されたが、他にも18世紀末から19世紀後半の伊万里片1点が出土している(第92図SD44-1)。SD45は弥生土器約30g、SD48は約200gの弥生土器が出土している。またSD49からは約600gの弥生土器の他、平安時代に比定できる須恵器破片約70gが出土している。SD50からは黒曜石製の石鏃3点(第92図SD50-1～3)、敲石1点も出土しているが平安時代の須恵器片約80gも検出された。

時期：SD44は近世末の伊万里片が出土しており、そのSD44を切るSD45はそれ以降の所産と考えられる。これら5基の溝跡は埋土や断面形態が類似しているため、SD44・45と同様の時期に位置づけたい。

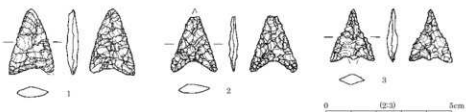
SD49



SD44



SD50



第92図 SD49 遺構図 SD44・50 遺物図

SD81 [第93図]

位置：②-1区、IV G14、IV G15 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

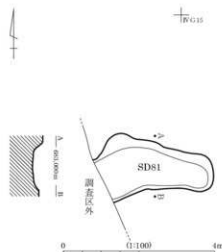
規模・埋土：調査区外に伸びるため、検出長は3mほどにすぎない。幅は1.1m～1.7m程度を測り、検出面からの深さは約25cmである。埋土は不明である。

出土遺物：遺物はまったく出土しなかった。

時期：出土遺物がいないため、不明と言わざるをえない。

キ 土坑

土坑は52基が検出された。このうち出土遺物を図示したものを中心に6基のみ個別記載する。他の土坑については第9表に一覧表を掲載してあるので、それを参照していただきたい。



第93図 SD81 遺構図

SK07 [第94・98図]

位置：①-4区、IV G02 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模：90×80cmの円形を呈し、深さは28cmを測る。

出土土器：土器約250gが出土し、窠1点を図示した。1は口唇部には刻みが入れられ、口縁部には縄文を施す。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

SK48 [第97・98図 PL33]

位置：③-2区、IV C06・IV C11 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模：138×47cmの東西に長い楕円形を呈する。深さは21cmである。

出土遺物：土器は約500gが出土し、3点・約300gを図示した。1は壺の口縁部、2は壺の底部で火を受けた痕跡が著しい。3も壺である。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

SK49 [第97・98図 PL75]

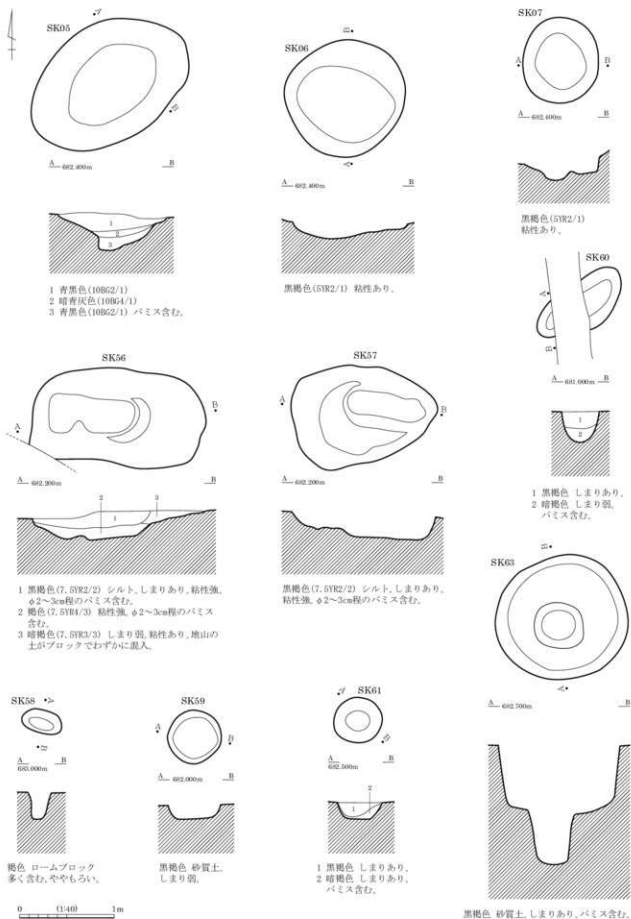
位置：③-2区、IV C11 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

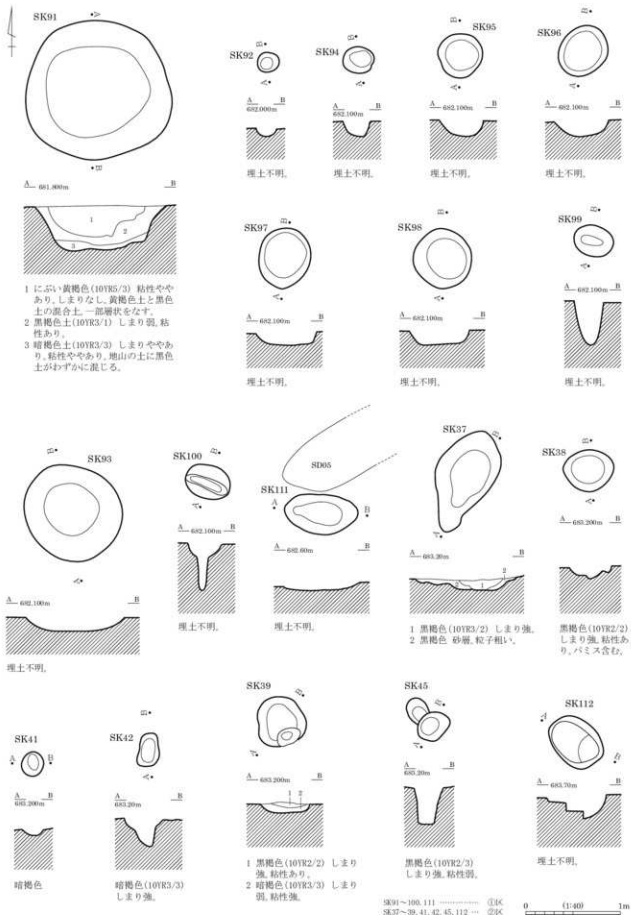
規模：53×52cm、深さは21cmを測る。

出土遺物：土器は約120gが出土したにすぎなかった。図示したのは石器1点のみである。1は砂泥互層岩製の砥石である。表面には剥離痕がみられる。側面にも砥面がある。

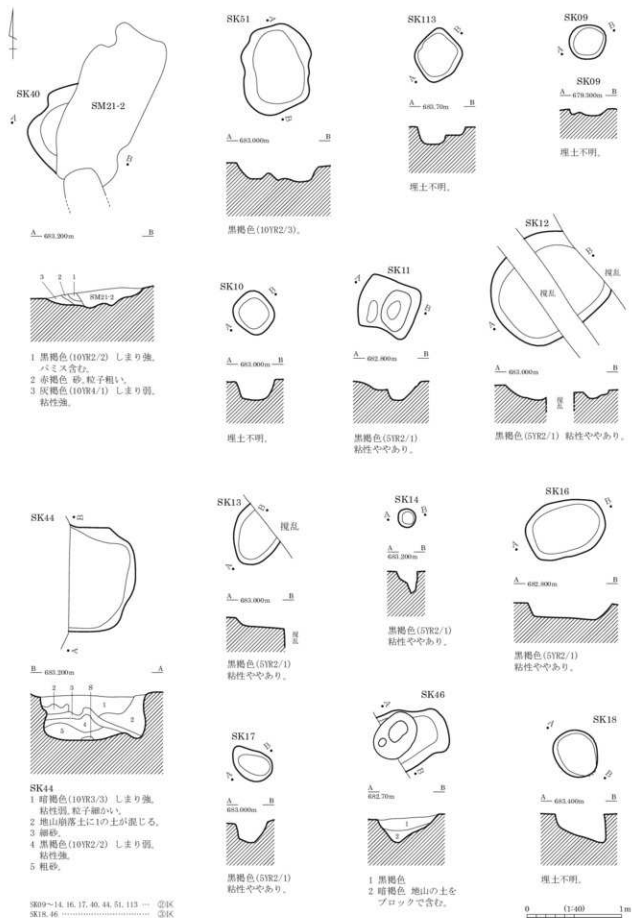
時期：時期決定に足る土器の出土はなかったが、弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかで位置づけた。



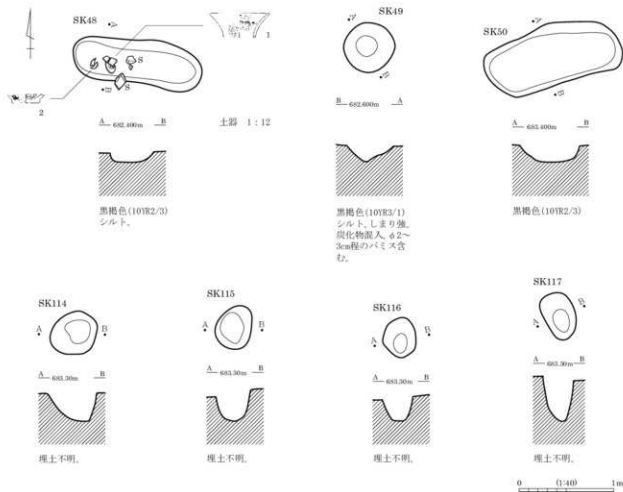
第94図 ①区 SK 遺構図



第95図 ①・②区 SK 遺構図



第96図 ②・③区 SK 遺構図



第97図 ③区 SK 遺構図

SK63 [第94・98図 PL33]

位置：①-4区、IV T10 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模：140 × 130cmの円形を呈し、深さは130cmを測る。検出面から70cmのところまで中段をもつ。埋土は黒褐色土の単層である。調査段階でも湧水が激しく、また形態的にも井戸の可能性がある。

出土遺物：土器は2点・約580gが出土し、1点・約540gを図示した。1は底面近くから出土した。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられようか。

SK91 [第95図 PL33]

位置：①-5区、IV P05 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模：156 × 148cmのやや不整な円形を呈し、深さは48cmを測る。埋土は3層に分けられ、第2層は黒褐色土がレンズ状に堆積する。第1層は黄褐色土と黒色土の混じった土層であり、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

出土遺物：土器が約90g出土したが図示できるものはなかった。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられようか。

SK92 [第95・98図 PL33・65]

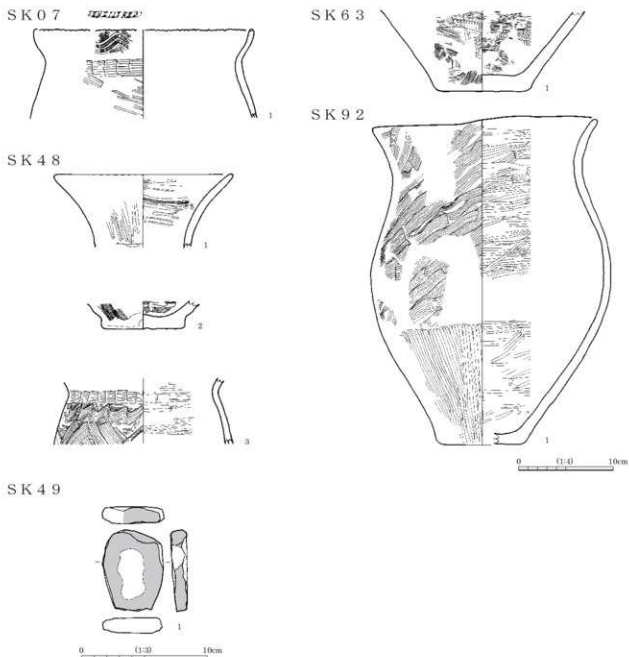
位置：①-5区、IV K24 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はないがST01に近接している。

規模：25 × 20cmの円形を呈し、深さは7cmである。

出土遺物：土器は約1,600gが出土した。その大部分を占めるのが図示した1である。1は本跡出土破片と付近の遺構外出土土器片が接合したものである。これ以外には2点・約160gの土器が出土したにすぎない。本跡はST01と関連するものである可能性も高い。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。



第98図 SK07・48・49・63・92 遺物図

遺構番号	遺構種類	地区	グリッド	平面規模 (cm)	深さ (cm)	出土遺物		備考
						種類数量	掲載遺物	
SK05	第94区	①-2区	FK21, FK22	180×125	40			
SK06	第94区	①-2区	FK02	125×125	16	弥生土器約 20g		
SK07	第94区	①-2区	FK02	90×80	28	弥生土器約 250g	第98区 SK07-1	本文に記載あり。
SK111	第95区	①-1区	FK20	80×43	8			
SK56	第94区	①-4区	FK12, FK13	185×98	37			SB05より古。
SK57	第94区	①-4区	FK12	155×108	37			
SK58	第94区	①-4区	FK23	43×25	28	弥生土器約 130g		
SK59	第94区	①-4区	FK22	57×56	15	弥生土器約 80g		
SK60	第94区	①-4区	FK21	108×150	33	弥生土器約 70g		船渠に切られる。
SK61	第94区	①-4区	FK06	50×48	18	弥生土器約 20g		
SK63	第94区	①-4区	FK10	140×130	130	弥生土器約 580g	第98区 SK63-1	本文に記載あり。
SK91	第95区	①-5区	FK05	156×148	48	弥生土器約 90g		本文に記載あり。
SK92	第95区	①-5区	FK24	25×20	7	弥生土器約 1600g	第98区 SK92-1	本文に記載あり。
SK93	第95区	①-5区	FK24	104×104	13			
SK94	第95区	①-5区	FK18	35×28	15			
SK95	第95区	①-5区	FK18	50×46	17			
SK96	第95区	①-5区	FK18	56×50	18			
SK97	第95区	①-5区	FK18	66×65	15	弥生土器約 30g		
SK98	第95区	①-5区	FK18	62×53	13	弥生土器約 450g		
SK99	第95区	①-5区	FK18	42×32	47	弥生土器約 140g		
SK100	第95区	①-5区	FK23	50×35	53			
SK08	第64区	①-1区	FK05	78×58	13	弥生土器約 2300g	第64区 SK08-1-2	土器破壊了。
SK09	第96区	②-1区	FK06	40×35	6			SM04内部にあり、新旧関係不明。
SK10	第96区	②-1区	FK25	43×40	22			
SK11	第96区	②-1区	FK10	60×53	21	弥生土器約 25g		
SK12	第96区	②-1区	FK21	(116)×106	11			船渠に切られる。
SK13	第96区	②-1区	FK21	(48)×53	9			SM05内部にあり、新旧関係不明、船渠に切られる。
SK14	第96区	②-1区	FK21, FK101	20×20	21			SM05内部にあり、新旧関係不明。
SK15	第51区	②-1区	FK101	38×(28)	16			SM05と切り合うが新旧関係不明。
SK16	第96区	②-1区	FK05	83×57	15			SM02より新。
SK17	第96区	②-1区	FK101	45×32	21			SM05内部にあり、新旧関係不明。
SK112	第95区	②-1区	FK20	63×47	10			
SK113	第96区	②-1区	FK20	50×48	10			
SK37	第95区	②-2区	FK20	115×62	18	弥生土器 170g		
SK38	第95区	②-2区	FK19	55×45	10	弥生土器 40g		
SK39	第95区	②-2区	FK15	50×50	14	弥生土器 70g		
SK40	第96区	②-2区	FK18, FK19	105×85	16	弥生土器 60g		SM21より古。
SK41	第95区	②-2区	FK15	65×35	28			
SK42	第95区	②-2区	FK20	32×25	18	弥生土器 25g		
SK44	第96区	②-2区	FK15	110×110	48	弥生土器 440g		船渠に切られる。
SK45	第95区	②-2区	FK20	50×35	41			
SK51	第96区	②-2区	FK23, FK24	90×75	26			
SK18	第96区	③-1区	FK23	50×45	20			
SK114	第97区	③-1区	FK22, FK102	46×45	27			
SK115	第97区	③-1区	FK102	46×36	35			
SK116	第97区	③-1区	FK102, FK103	43×35	27			
SK117	第97区	③-1区	FK102, FK103	50×35	45			
SK46	第96区	③-2区	FK13	(100)×97	47			SM28の内部にあり、新旧関係不明。
SK47	第63区	③-2区	FK06	245×113	18	弥生土器約 700g	第63区 SK47-1	木棺蓋。
SK48	第97区	③-2区	FK06, FK11	138×47	21	弥生土器約 500g	第98区 SK48-1～3	本文に記載あり。
SK49	第97区	③-2区	FK11	53×52	21	弥生土器約 120g	第98区 SK49-1	
SK50	第97区	③-2区	FK16	145×64	17	弥生土器約 30g		

第9表 ①～③区SK一覽表

ク 遺物集中

SQ01 [第99図 PL26]

位置：②-2区、IV B14 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。掘り込みがなく、約2.7m×2.0mの範囲に遺物が集中する箇所をSQ01として認定した。SD39に近接するが、重複関係にはない。

出土遺物：本跡としてとりあげたのは112点・約400gの土器片と礫2点である。土器は小破片で、しかも壺が多く、図示できるものはなかった。

時期：土器は小破片であったが、弥生時代後期に位置づけられるものである。

SQ02 [第100図 PL26・70・74]

位置：②-2区、IV B15 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。掘り込みがなく、約2.2m×1.7mの範囲に遺物が集中する箇所をSQ02として認定した。SM23の南東に近接するが、重複関係はない。

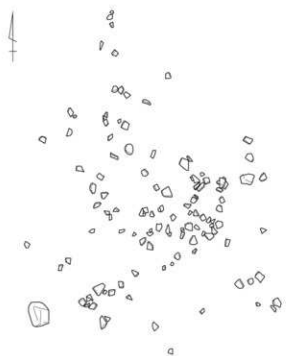
出土遺物：土器は約500gが出土したが、小破片のため図示できるものはなかった。赤彩壺や高坏などが認められた。石器3点はすべてを図示した。

時期：弥生時代後期の所産と考えられる。

SQ03 [第101～103図 PL26・60・61・73]

位置：③-2区、IV C11、IV C16 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて、掘り込みもなく、遺物が集中する箇所が認められたため、遺物集中SQ03として調査したものである。南北約6.5m、東西約4.2mの範囲に遺物は広がっていた。SM28と空間的には重複するが、掘り込み面がないため切り合い関係は不明である。遺物の広がりやSM28の南側周溝付近も覆うため本跡の方が新しいと見てとれそうではあるが、はたしてそのすべてを確実に本跡に伴うものとみることが出来るかは判断に悩むところである。SM28に関連するものも含まれている可能性も否定できない。これらの土器はほぼ同じレベルにあり、SM28の検出面（地山上面）から数cm浮いての出土であった。そのなかで特異な出土形態を示すのが土器1～4である。4分の1程度の胴部破片を重ねたもので、レベルもSM28と同様に地山上面に置かれたものであった。これは竪穴住居跡の土器敷炉である可能性も高いだろう。ただし、遺物を取り上げたのち、周辺を精査したがピットや貼床、硬化面などは確認できなかった。1～4の土器と他の土器とではレベル差が数cmはあるため、別のものとして理解すべきか



第99図 SQ01 遺物出土図

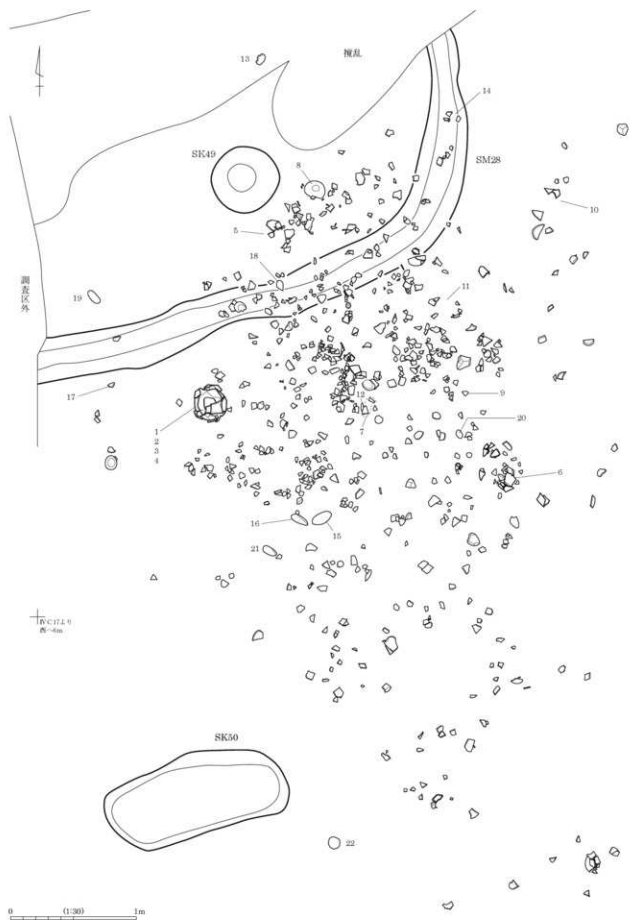


第100図 SQ02 遺物出土図・遺物図

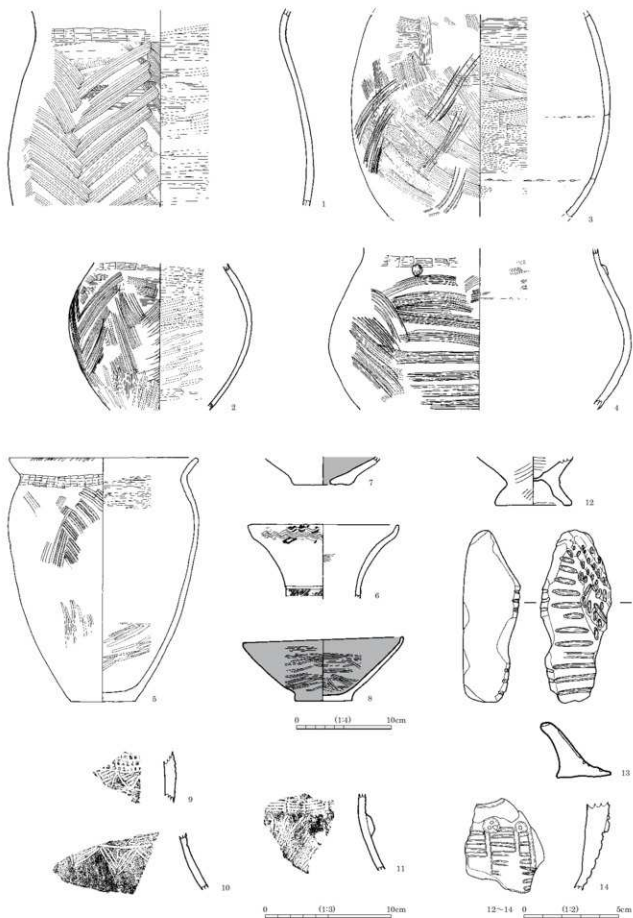
もしれない。

出土遺物：土器は約14kgが出土し、14点・約2,400gを図示した。前述の1～4の甕で約1400gの重量を測る。5は口縁端部に刻みを入れた甕、6は口縁部と頸部に縄文を施す壺、7は内面を赤彩するが、底部に穿孔がある。8は赤彩鉢、9・10は鋸歯文をもつ壺の破片、11は甕の破片の拓影である。12は台付甕もしくは台付鉢の脚部と思われる。13は確認調査でのトレンチ掘削による攪乱部分からの検出であったが、本跡に含めた。鳥形土器の一部であろうか。14は円形浮文を貼付した甕であろう。弥生時代中期後半の土器が多いが、後期と思われる土器片も混じっている。石器は敲石8点を掲載した。17・20には凹みが見られる。石器は他にも敲石1点が検出されている。

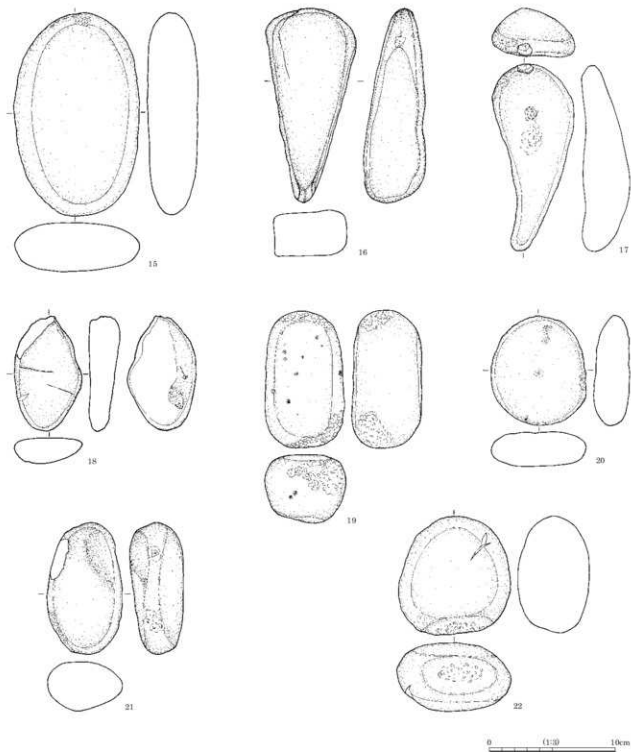
時期：出土遺物から弥生時代中期後半のものが多いが、後期まで含めた時間幅の中で位置づけたい。



第101図 SQ03 遺物出土図



第102図 SQ03 遺物図 (1)



第103図 SQ03 遺物図 (2)

(5) 遺構外出土の遺物 [第104～113図]

①～③区の遺構外からの出土遺物は、土器は①区が約90kg、②区が約170kg、③区が約40kgの計約310kgをはかる。①～③区は集落域にもあたることや遺物包含層にあたるIV層を人力で掘り下げたことから他地区に比べても土器の出土量は多い。なお、図版では①～③区遺構外出土遺物として番号を付けている。写真図版でもこの番号で表記しているが、調査区についてはより細かい地区の名称にしている。

ア 土器

a. 縄文土器 [第104図 PL52]

縄文土器は14点出土し、8点を図示した。1は前期前半、2は前期後半以降、3は中期末以降の両耳壺の耳部にあたる。4～7は後期の土器片である。うち4～6は堀之内式、7は加曾利B式に比定できようか。8は網代底を有する。

b. 弥生土器 [第104～105図 PL65・66]

最も出土量の多いのが弥生土器である。20点を図示した。9～18は壺である。19は甕とみられる。20～25は甕、20は受け口口縁である。24はコの字重ね文で円形浮文がみられた。残存しているのは2箇所のみであり、本来は3単位とみられる。25は口唇部に縄文を充填する。26も甕と思われるが底部には木葉状の線刻が認められる。27は底部穿孔の甕、28も底部に穿孔があるが壺と思われる。

c. 古代以降の土器 [第113図 PL68]

古代土器は約2,000gが出土した。多くは破片資料であり、2点を図示した。110は内面黒色処理された坏である。111は須恵器坏の破片で墨書されているが、文字は判読できなかった。ともに平安時代に比定できよう。他も平安時代の土師器時期・須恵器の破片がほとんどである。

また中近世土器も約140点が出土している(PL68-13・14)。すべて破片資料である。中世では青磁碗、常滑、古瀬戸、かわらけ、内耳鍋が、近世では地元・前山、伊万里、瀬戸美濃、唐津、肥前などがみられる。青磁碗は3点が検出された。近世では18世紀後半から19世紀前半に比定できるものが多い。

イ 人形土器 [第76・106・107図 巻頭カラー]

2個体の人形土器が出土している(註1)。29は一部欠損している部分もあるが、頭部から底部までの全体像がわかる資料である。頭部は①-2区の遺構外からの出土、左腕部は②-2区・SD37の第14層(第76図)からの出土、胸部～底部までは②-2区の遺構外からの出土である。SD37からの出土部位もあるが、その他は遺構外出土であるため本項で報告する。

頭部と左腕部は発掘調査段階で発見されたものだが、胸部～底部は、本格整理に入り接合作業を進めるなかで同一個体と判明したものである。頭部1点、腕部1点、胸部～底部8点の破片が接合した。出土位置を押さえられたのは左腕部のみであるが、部位により調査区を異にしていることがわかる。

頭頂と底面がわずかに欠損・剥落しているが、現存する全長は28.2cmを測る。胴部の最大径は欠損しているが12cm以上はであると推定できる。頭部は中実である。頭頂部は先述のとおり若干欠損しているが、盛り上がりがあり、髪形を表現していると思われる。後頭部をみると大部分は剥落しているが頭頂から粘土紐を貼り付けた痕跡がうかがえる。髪を中央で編んで垂らした形を示していると考えられる。顔面は左側が欠損しているため、鼻・口と右目、右耳が残っている。顔面は上向きであり、30度ほどの角度を有する。顎の一部も欠損する。鼻は高く、鼻筋が弓なりに曲がるいわゆる鷲鼻状である。鼻孔は2ケで約8mmの深さまで穿されている。口は「上」状に刻まれている。口蓋裂を表現したものであろう。右目は深く彫り込んで形成されている。右耳は中央やや上側に穿孔を施しているが、この小孔より下側は一部欠損している。こうした小孔と沈線で耳を表現していることがわかる。また器面調整はやや粗く、鼻と耳は

貼り付けていることがよく観察できる。後頭部は剥落している部分が多いこともあるが、概して粗いつくりである。赤彩の痕跡は右目から鼻の上側、顎・頸部の一部に残されている。頸部では後ろ側にも赤彩が認められている。左腕部は指頭痕がよく残り、指は先端を欠損しているが5本を表現する。右腕は欠損するが、剥落部分は左腕より下側にあることがわかるため、左右の腕の伸びる方向はやや異なっていた可能性もある。胸部～底部は欠損部分が多いが、胸部に開口部が認められる。横幅は約4cmを測るとみられる。縦幅は下側が欠損しているため不明であるが、割れ口の観察から最大でも約1.5～2cm程度ではないかと推測する。赤彩は胸部から底部に至るまでその痕跡が認められる。おそらく頭部から底部までの全体に赤彩していたと考えられる。胸部～底部の内面はハケメも一部みられるが、指頭痕がよく残っている。製作技法についてみると、胸部から底部までをつくった後に、腕部と頭部を付けたことが理解できる。

30・31は底部片である。29と同一個体とみられるが、接合はしない。一方では別個体の可能性も否定できない。なお、この他にも接合はしなかったものの、29と同一個体とみられる破片7点が検出されている。

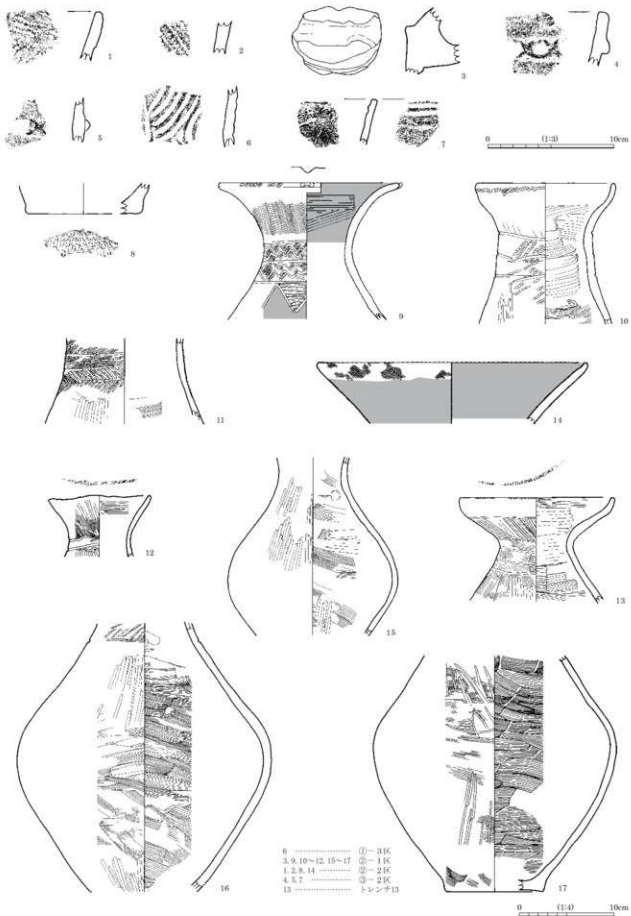
32は、③-2区のIV層から出土し、頭部の顔面右半部のみが検出されたものである。頭部は中空であり、開口部が後頭部側にある。耳には2ケの小孔が穿かれている。口も孔で表現している。耳の背後には髪形を表現したとみられる突起が広がっている。わずかに剥落した箇所もあるが顔面は扁平であるのが特徴であり、いれずみ等はみられない。顔面には酸化鉄の付着が目立つ。内面には指頭痕が明瞭に認められる。なお、接合はしないものの同一個体とみられる破片が他に1点検出されている。33は不明土製品としたが32と同一個体の可能性がある。

ウ 土製品 [第108図 PL52・67]

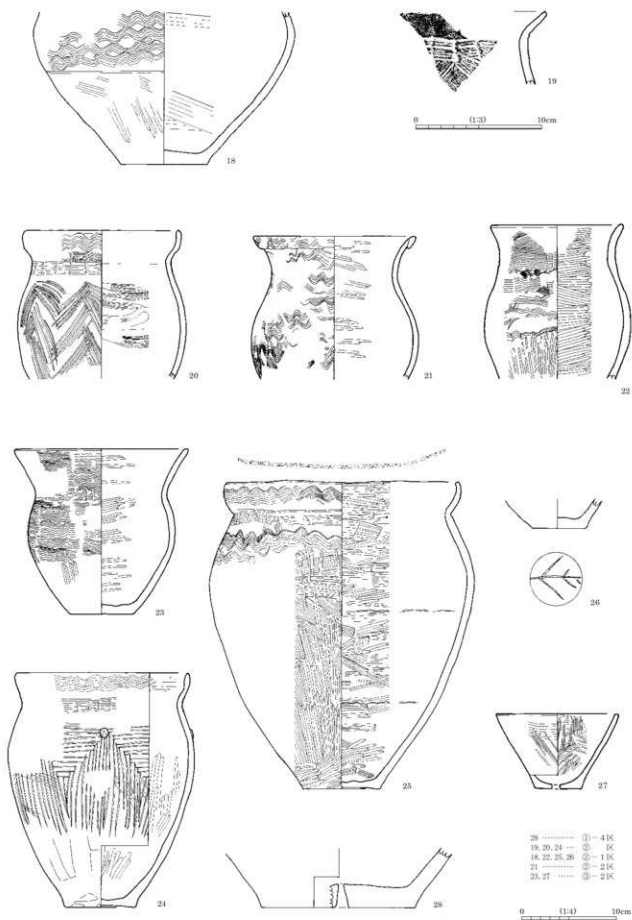
34は不明土製品としたが、籬状文がみられるので土器の一部である可能性もある。35～39は手捏土器である。37～39は甕形で焼成前に施された穿孔が底部にある。40～42は蓋であるが、手捏土器の一種として理解する。43～46は土器片を用いた円板であり、43は赤彩壺片を利用している。44～46は摩耗が激しい。47は土製紡錘車と思われるが、つくりがやや粗雑であり指頭痕も残る。48は非常に粗雑な作りであり、穿孔も中心からずれているため紡錘車とは考えにくい。49は不明土製品といわざるをえない。

エ 石器 [第109～111図 PL69～72・74～76]

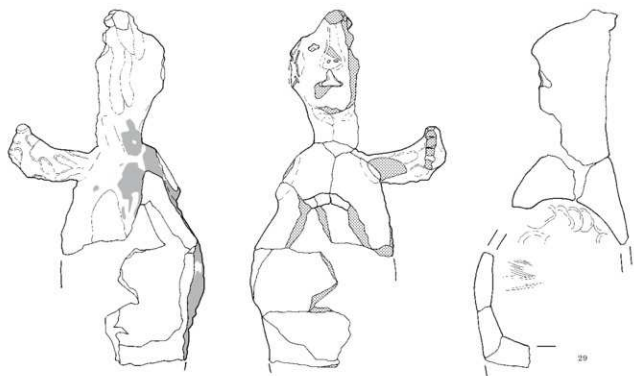
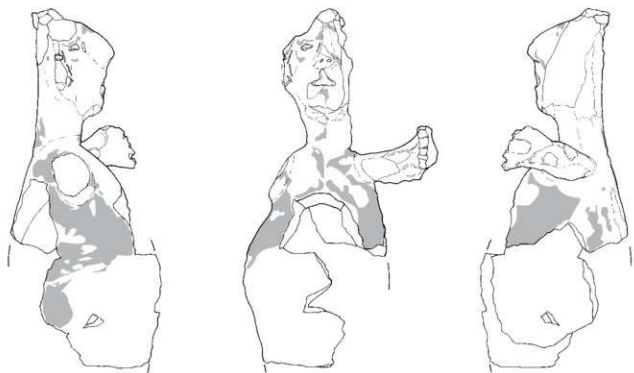
45点を図示した。50～66は石鏃である。50・53・54・57・がチャート製、53は赤色を呈する。56は泥岩製、60は安山岩製、それ以外は黒曜石製である。67は黒曜石製の石錐、68は珪質泥岩製の磨製石鏃の欠損品。69・70は打製石斧、石材は69がデイサイト製、70は凝灰岩製である。71は磨製石斧の欠損品で緑色凝灰岩製である。72は砂岩製の刃器、73は凝灰岩製の石核、74は泥岩製で両極剥離痕があり、くさび形石器とみる。75は凝灰岩製の2次加工のある剥片と思われる。76～78は輝石安山岩製の敲石である。76～78には凹みが認められた。なかでも76は表裏両面と両側面に凹みがみられる。79も砂岩製の敲石と思われるが砥石の可能性もある。80は流紋岩製の石槌である。81～85は砥石である。86は細粒砂岩製の磨製石斧と思われるが自然石を利用した扁平両刃石斧の可能性も高い。石材は81が流紋岩、82～85が砂岩である。87～93は軽石製品である。いずれも用途は不明である。87は表面に刻みが入れている。90・92は中央部をやや掘り窪めたもの、89・91は球形を呈する。93は欠損しているが中央部に貫通孔が認められる。94は搗臼である。石材は浅間山の火山岩で、天仁元年(1108)の大噴火により流出した追分火砕流に由来する、地元で浅間の焼石と呼ばれるものである。側面に安山岩製の礫が含まれているが、これは火砕流の流出の際に巻き込んだものであろう。第112図の109は油脂状の被膜に覆



第104図 ①~③区 遺構外遺物図 (1)



第105図 ①~③区 遺構外遺物図 (2)

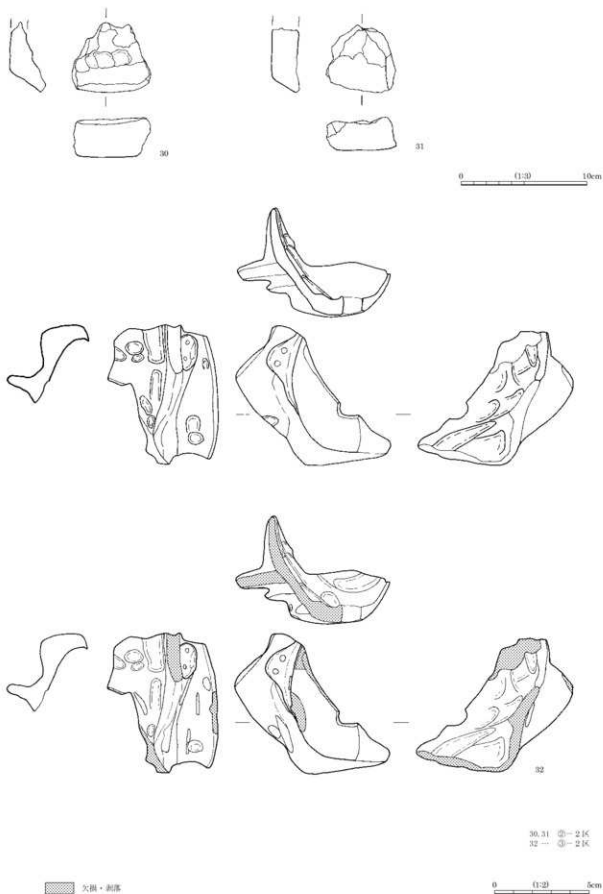


■ 赤影 ▨ 欠損・剝落

頂部 … ①～②区
 胴部 … S D 3 7
 胸～底部 … ②～2区

0 (13) 10cm

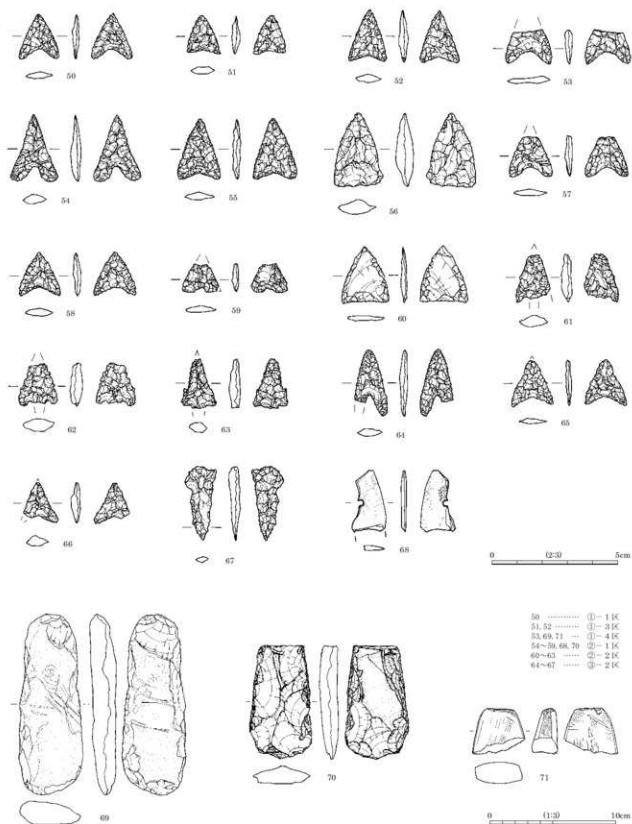
第106図 ①～③区 遺構外遺物図 (3)



第107図 ①~③区 遺構外遺物図 (4)



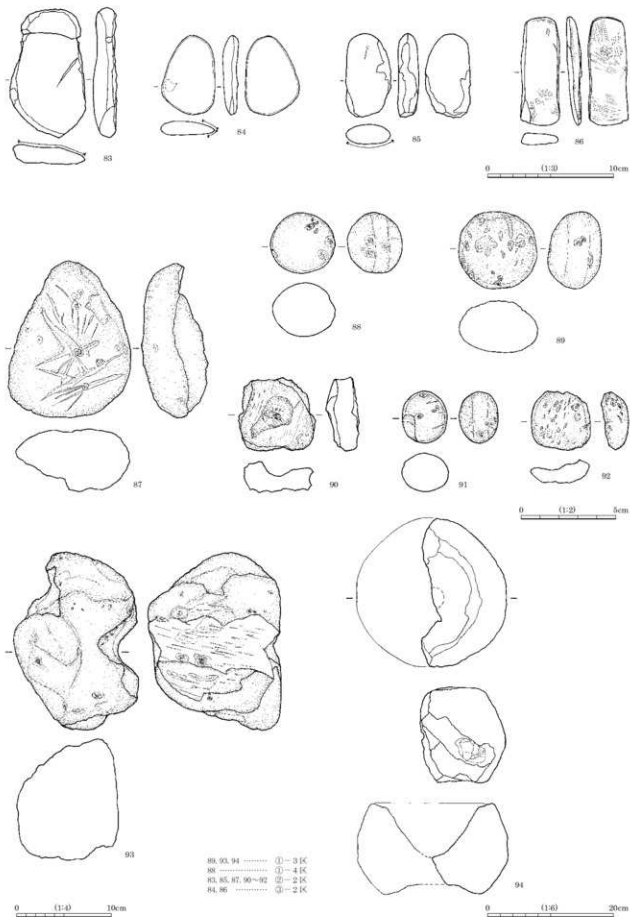
第108図 ①~③区 遺構外遺物図 (5)



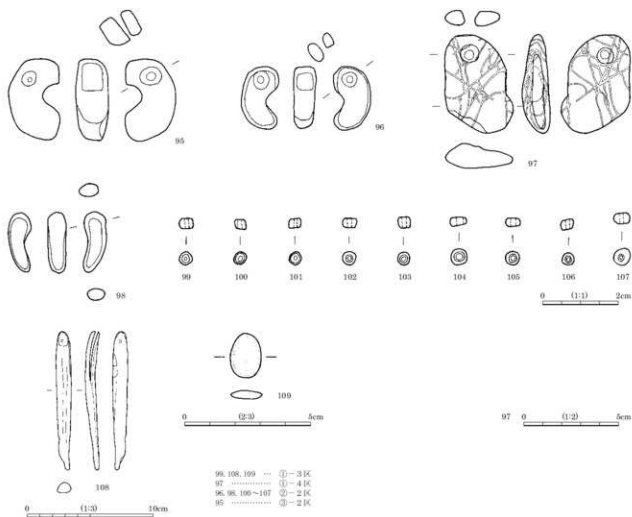
第109图 ①~③区 遺構外遺物图 (6)



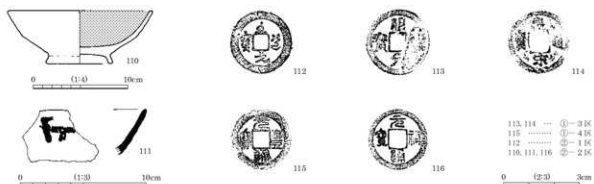
第110図 ①~③区 遺構外遺物図 (7)



第111図 ①~③区 遺構外遺物図 (8)



第112図 ①~③区 遺構外遺物図 (9)



第113図 ①~③区 遺構外遺物図 (10)

われる玉石である。玉石は他に写真のみを掲載した (PL76-7) のを含めて2点が出土している。いずれも珪質泥岩とみられる。この他、みがき石2点を写真で図示した (PL74-8・9)。

オ 玉類 [第112図 PL67・76]

玉類は遺構出土も含めて24点が検出された。すべて①～③区で出土している。このうち13点が遺構外からの検出である。95は比重をはかっているがヒスイ製勾玉とみられる。96は碧玉製の勾玉、97は垂飾りである。97の石材は装身具にはあまり用いられない流紋岩だが、赤鉄鉱がクラックに沿って沈殿したことにより独特の模様を醸し出しているために装身具として利用されたのであろう。98は勾玉状を呈するが穿孔がないため不明品といわざるをえない。99～107はスカイブルーのガラス玉である。99を除いて②-2区のⅢa層からの出土である。②-2区は周溝墓などの墓域になっており、SM21の小口孔からはガラス玉の出土をみている。遺構外出土ではあるが、本来はこのように墓に伴っていたものと推測できる。

カ 骨角器 [第112図 PL67]

骨角器が1点出土した。①-3区から出土したもので、長さは現存長で12.0cm、最大幅1.1cm、最大厚が0.9cmをはかる。両側から穿孔を試みた痕跡が認められるが貫通はしていない。側面には縦方向に亀裂が走っている。骨か角かの判断は難しいが、本郷一美総合研究大学院大学准教授のご教示によればシカ角の加工品である。

キ 銭貨 [第113図 PL76]

銭貨は5点が出土した。112は至道元寶(北宋・初鑄995年)、①-3区から検出された113は右の「道」は錆のため読めないが明道元寶(北宋・初鑄1032年)とみられる。114は①-3区から出土したもので銭文の下の「宋」の字しか判読できないが、銭文の下が「宋」字であるのは皇宋通寶(北宋・初鑄1038年)のみであるためこれに比定できる。①-4区から検出された115は元豊通寶(北宋・初鑄1078年)、116は②-2区から検出されたもので元祐通寶(北宋・初鑄1086年)である。

註1 第106図-29については、「土偶形容器」という名称で、平成22年2月に報道公開したものである。今回、「人形土器」として報告するにいたった経緯については、第5節にて記載している。



①-3区 調査風景 (1)



①-3区 調査風景 (2)

3. ④区

(1) 層序と調査面 (第114図)

本調査区の地形は微高地と低地に分けられる。低地においては地山までの最深部が地表から約1.8mを測る。水田跡が3面確認された低地での土層(土層7・第7断面)を踏まえてⅠ～Ⅴ層に分けた。なお、この調査初年度(平成16年度)に実施した④-1区の土層を本遺跡全体の基本土層とした。

現耕土～第1水田を覆う砂層までをⅠ層とした。一部では旧耕土も含む。また溶脱層と集積層に分層できる箇所もあった。続いて、第1水田耕土～第2水田を覆う砂層までをⅡ層とした。ここでも溶脱層と集積層に分層できる箇所もあった。第2水田耕土～第3水田を覆う砂層までをⅢ層とした。そして第3水田耕土をⅣ層としたが、本層は遺物包含層にもなっている。Ⅴ層は浅間第軽石流の堆積物で、これが地山となっている。

微高地の土層ⅠではⅠ層、Ⅱ層の直下は弥生時代中期後半の堅穴住居跡や円形周溝墓が掘り込まれている。土層ⅡではⅢ～Ⅳ層は分層できなかった。土層Ⅲ・ⅣはⅡ～Ⅳ層を分層できなかった。またこの層は黒色化していないため弥生時代に一度削平されているのかもしれない。土層ⅤではⅡ～Ⅲ層は分層できず、Ⅳ層の上に堆積する。土層Ⅵでは第2水田畦畔であるⅢ-1層の下層に漸移層のⅣ-3層が認められる。土層Ⅷは第2水田の被覆砂層(Ⅱ-6層)以下の層序を示した。

調査は、④-1区の低地ではⅢ層上面(第2水田)、Ⅳ層上面(第3水田)、Ⅴ層(地山)上面の3面を対象とした。ただしⅣ層上面の第3水田は一部でしか検出できなかった。平成18年度調査対象の④-2区では調査区北側の一部のみだが、被覆砂層が堆積していたため、第1水田を面的に調査することができた。一方、第3水田は認めることはできず、Ⅱ層上面、Ⅲ層上面、Ⅴ層上面の3面の調査ということになった。

(2) 第1調査面

ア 水田跡

第1水田 [第115図 PL43・68・76]

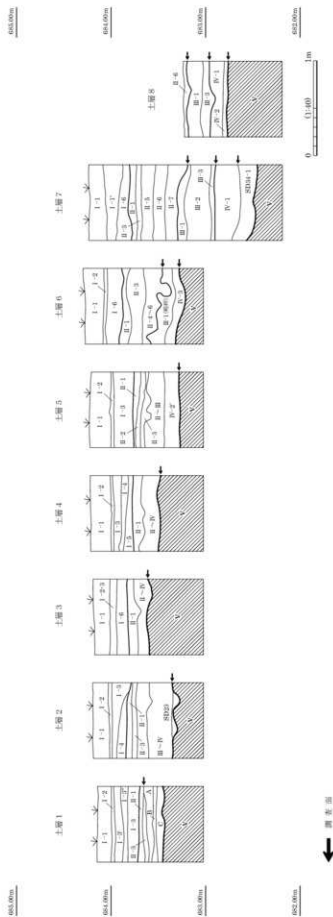
位置:④-2区、ⅠN16・ⅠN21・ⅠS01・ⅠS02グリッド

調査の経過:④-1区では、確認調査により現耕土直下に砂層をはさみ、水田面が存在することが判明し、これを第1水田とした。断面観察では第1水田を覆う砂層の堆積が調査区北寄りの狭い範囲に限られるものの、この部分については面的調査が可能と判断し、調査を試みた。しかしながら、この第1水田を面的に追うことはできず、調査は途中で断念した。また確認調査では湧水が激しく、堅緻な砂層上面(のちに第2水田の被覆砂層と判明・Ⅱ-4～7層)までしかトレンチを入れることができなかった。一方、平成18年度に④-2区において北壁際に排水用を兼ねた先行トレンチを入れたところ、現耕土の直下に砂層に覆われた水田跡の存在を確認した。④-1区でも土層断面ではこの水田層は認められたが、面的には追うことができなかったものである。

被覆砂層の堆積状況:砂層は、2層に分けられた。上層には約6～12cmの厚さで黄褐色砂層(第2層)が、また下層には約15～20cmの厚さで灰褐色砂層(ハナドロ・第3層)が堆積し、第3層が水田跡を直接被覆する。ただし、北側約10mの範囲のみにしか分布していなかった。

水田の検出状況:重機で2層中位まで剥ぎ、第4層上面までを人力で掘り下げた。畦畔の高まりと砂層が落ち込む窪みが検出され、水田跡と認定した。

水田の構造:確認された畦畔はSC401の1条のみであるため、本調査区だけでは水田構造は不明である。



第114図 ④区の層序

- I-1 黒褐色(1019K/1) しまりあり、粘性弱、現耕土、腐敗層。
- I-1' 埋め戻し土、段丘
- I-2 暗褐色(7, 53R/4) しまりあり、粘性強、現耕土、集積層
- I-3 灰褐色(1018G/1) しまりあり、粘性1-1よりはあり、目耕土、腐敗層。
- I-3' I-1層とI-3層の中間的な色相、上下に薄い集積層あり。
- I-4 暗褐色 しまりあり、粘性1-1よりはあり、目耕土、集積層。
- I-5 砂層
- I-6 灰黄褐色(1019H/2) シルト～砂、しまりあり、粘性1-3より弱。
- II-1 黒色(1019K/1) しまりあり、粘性強、頸日本田耕土、腐敗層。
- II-2 黒色(7, 53R/0) しまりあり、粘性強、頸日本田耕土、集積層。
- II-3 灰褐色(1018A/1) しまりあり、粘性あり、粘性強、頸日本田耕土、シルト主体に砂、バミス(φ1mm前後の小きもの)含む。
- II-4 暗褐色(1018A/1) しまりあり、粘性弱、細砂に若干シルトが混入、ラミニアあり、砂層①。
- II-5 灰黄褐色(1018A/3～5/4) しまりあり、粘性なし、粗砂主体、ラミニアあり、粗砂層②。

- II-6 灰黄褐色(1019H/4～6/0) 細砂～中粒砂、しまりあり、粘性なし、ラミニアあり、集積層あり、粗砂層③。
- II-7 暗褐色(1018A/1) しまりあり、粘性ややあり、粗砂層(III層)に灰褐色(II層)を部分的にバミス集積。
- III-1 灰褐色(1018G/1) しまり、粘性強、粘土、III層に比べ、やや灰褐色がかつてい砂層。
- III-2 黒色(1019K/1, 7/1) しまり、粘性強、下部の砂礫をまきこむ層所あり。
- III-3 灰黄褐色～灰褐色(1019H/1) しまり、粘性強、細砂～細砂、一部下層の赤色土混じる。
- IV-1 黒色(1019K/1) しまりあり、粘性強、細砂を含む。
- IV-2 V層フロシク(バミス)混入、土層に比して現に基土が滑り。
- IV-3 灰褐色(53R/2) しまりあり、粘性ややあり、黒褐色土と地山ブロックが混在、集積層。
- V 地山、現開掘層石炭。

- A 黒褐色(1019K/1) 黒色土、しまり、粘性あり、灰色土など混在。
- B 黒色(1019K/1, 7/1) A層に比して粘性強、腐敗物多量混入。
- C 灰褐色(53R/2) 黒色土と地山アロク基岩。
- II～IV(第2断面) やや黒色化が進む。
- II～IV(第3断面) 第1断面と同じく集積層がない、軟土期に一度閉平されている。
- II～IV(第4断面) 暗褐色(1019K/1)～黒褐色(1019K/2) しまり、粘性あり、バミス含む、黒色化していないため発生包含。
- II～III(第5断面) 暗褐色(1019K/1) しまりあり、粘性あり、木田城ほど黒色化していない。
- II-4-6(第6断面) II-1-5-6の部分ではない層。

※ A～C: 53R4埋土。

ただし、隣接する⑤区の水田Aとは層位的にみて同一水田と理解できる。SC401は、上端幅約40～50cm、下端幅約70～80cmを測り、主軸方位はN-145°-Eを示す。畦畔の高まりは、西側の水田面と約30cm、東側では約15cmの比高差があり、畦畔を境に西側では低くなる。

水田の範囲：被覆砂層の堆積がみられた、東西約4～6m、南北約11mの範囲でのみ認められている。

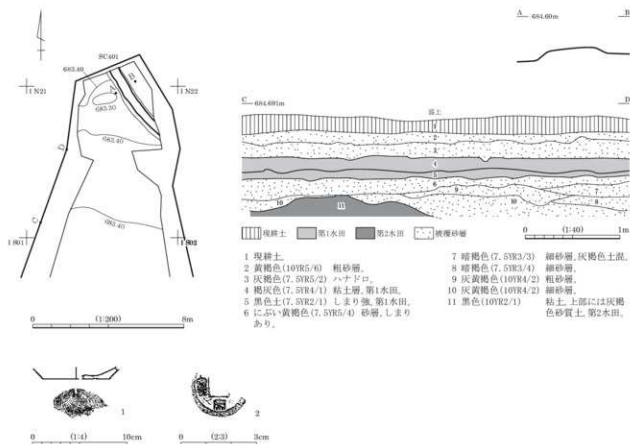
水口：水口は検出されていない。

水田層及び水田面の状況：水田層は2層に分けられた。第4層は褐色土層で約10～15cmの厚さである。第5層はしまりの強い黒色土層であり、約5～12cmの厚さである。窪みは水田跡全域で認められている。形状の異なるものが認められ、砂に埋まっていた。畦畔上にはみられない。人間の足跡として認定できるもの以外にも、円形の窪みもみられたが、何のものであるかは判断できなかった。人間の足跡は水田の畦畔に直交するような歩行列が確認できた(PL43-3)。

出土遺物：調査最終段階での畦畔解体および水田層の掘り下げを行ったが、土器は、1の平安時代に比定できる糸切り底の土師器杯1点が出土したのみである。他に2の銭貨1点が検出された。破片ではあつたが皇宋通寶(北宋・初鑄 1038年)とみられる。

科学分析：④-1区の東壁(土層7付近・第7断面)および西壁(土層8付近・第8断面)の2箇所の断面から試料35点を採取し、土壌分析(珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析)を実施した。このうち第1水田にかかわる試料は第7断面の試料1・2である(第202図)。試料2は植物珪酸体は約1,300個/gが検出された。イネ科葉部の機動細胞珪酸体は283個/gと短細胞珪酸体1,100個/gであった。

時期：時期決定に耐えうる出土遺物はみなかったが、層位的には隣接する⑤区水田Aと対応するとみられるため、近世以降の所産と判断したい。



第115図 ④-2区 第1調査面(第1水田)遺構図・遺物図

(3) 第2調査面

ア 水田跡

第2水田 [第116～119図 PL41・43・52・68・69・70・87]

位置：④-1・2区

調査の経過・検出状況：確認調査では湧水が激しく、堅緻な砂層上面（のちに第2水田の被覆砂層と判明・Ⅱ-4～7層）までしかトレンチを入れることができなかった。そのため、第1水田を確認したが、この砂層下の水田跡を把握できなかった。第1水田を覆う砂層の堆積のみられた調査区北側では、当初は第1水田の面的調査を試みたが、砂層の堆積がみられなかった調査区南側については、地山上面まで掘り下げ、遺構の検出を進めていった。この南側で検出された溝跡の続きをみるために、調査区西壁際に人力によるトレンチを掘削したところ、地山直上の遺物包含層と第1水田面との間層に、溝跡（SD17）および、その両脇に畦畔状の高まり、それに続いて砂層に覆われた水田面を確認した。溝の掘り込みが数度にわたって繰り返されており、水田に付属する水路と判断した。またその下層にも砂層に覆われた水田面が観察でき、計2枚の水田面の存在を確認した。

一方、第1水田の面的調査を途中で断念した調査区北側では、第2水田の被覆砂層上面まで重機で掘り下げたところ、ここでも溝跡（SD17）や畦畔（SC02・SC05）の一部が確認され、水田である確証を得た。以上のように第2水田としては平成16年度（④-1区）と平成18年度（④-2区）の2か年にわたり調査を行った。④-2区の調査ではSC03・04、SD17及びSC04は④-1区から続いていることが判明した。また調査区北側際には東西方向の溝を伴う畦畔SC402が検出された。

被覆砂層の状況：④-1区では基本土層をⅠ層：現耕作土～第1水田被覆砂層、Ⅱ層：第1水田面～第2水田被覆砂層、Ⅲ層：第2水田面～第3水田被覆砂層、Ⅳ層：第3水田面～弥生包含層、Ⅴ層：地山とした。このうちⅡ-4・5・6・7層が、第2水田被覆砂層である。約10～40cmの堆積である。Ⅱ-4層は褐灰色砂層で、細砂にシルトが若干混入する。Ⅱ-5層はにぶい黄褐色の粗砂層である。Ⅱ-6層は灰黄褐色砂層で鉄分集積がみられる。Ⅱ-7層は褐灰色砂層で下位層のⅢ層との境は凸凹が激しく削平されたと思われる。部分的に軽石が集中する。調査区東壁（第114図土層6・7付近）では、Ⅱ層の被覆砂層が厚い。しかも、粒度の粗い砂層であることや水田面での砂の混在や凹凸の激しさから、かなりの洪水であったことが理解できる。これに比べ、SD17の西側のSL5では、粒度の安定した砂層が水田面を覆っている。④-2区でも約20～50cmの砂層が堆積している。細砂層が主体である。

水田の構造：畦畔は南北のSC03・04と東西のSC06・07、SC02、SC402が確認された。このうち溝跡を伴うSC03・04、SC06・07、SC402が規模からみても大畦畔と理解できよう。SC01、SC02、SC06は小畦畔と考えられる。

東西大畦畔SC03・04はSD17をも含めて、下端幅約4.3m～6.3m、上端幅3.6～5.9mを測る。畦畔の高まりは約15～30cmであり、西側のSL5の方がやや低くなっている。SC03を中心に芯材に使用されたと考えられる礎の検出もみえた。SC06・07は溝SD17を含めて下端幅約2.6～2.9m、上端幅約2.4～2.6mを測る。畦畔の高まりは約10cmである。SD17は深さ約30cmであり、大畦畔に伴う水路と理解できる。この水路はSD83→SD27→SD17と3度にわたり作り替えられていることが理解できる（第120図）。SC06はこのSD27・28の覆土を畦畔の一部として利用している。SC402は下端幅約6.6～8.1m、上端幅約6.2～7.7mを測り、畦畔の高まりは約20～30cmである。

SC402も最深部で約35cmを測る水路を伴っている。小畦畔のSC01は検出長さ約60cmにすぎない。下端幅約40～60cm、上端幅約20～30cmを測る。SC02は下端幅約50～90cm、上端幅約20～35cmを測る。

SC01・02とも畦畔の高まりは数cm程度である。SC05は下端幅65～85cm、上端幅約50～65cmを測り、畦畔の高まりは数cm程度である。SD18とSD86は、第2水田被覆砂層を掘り込んで構築されていることから、本跡より新しい所産であり、したがって本跡に伴わないと考えられる。SD84は深さ約10～20cmであり、水田面を削る流水跡の可能性が高い。

水田の範囲：本調査区では北側が東西方向に延びる低地になっていたようである。それに並行して調査区南側は台地状となっている。台地との境・傾斜地で水田が途切れる。ただし、台地部分や低地への変換地区については、先行して弥生面まで掘削してしまったため、境界は不明である。低地は調査区北側へ広がっており、水路・畦畔も北へ延びるため、水田域も北へ広がっていたものと考えられる。

水口と水利形態：幹線水路はSD17である。北側から南へ向かい、台地にぶつかる部分で大きく屈曲して西へ流れる。急激に屈曲しているため、その部分の破損、オーバーフローが多かったようである。個々の水田への水まわしは、畦畔を切って水口は設置されている。水口は3箇所みられた（水口401～403）。水口402には木材片がみられた。また水口403は排水用の可能性がある。

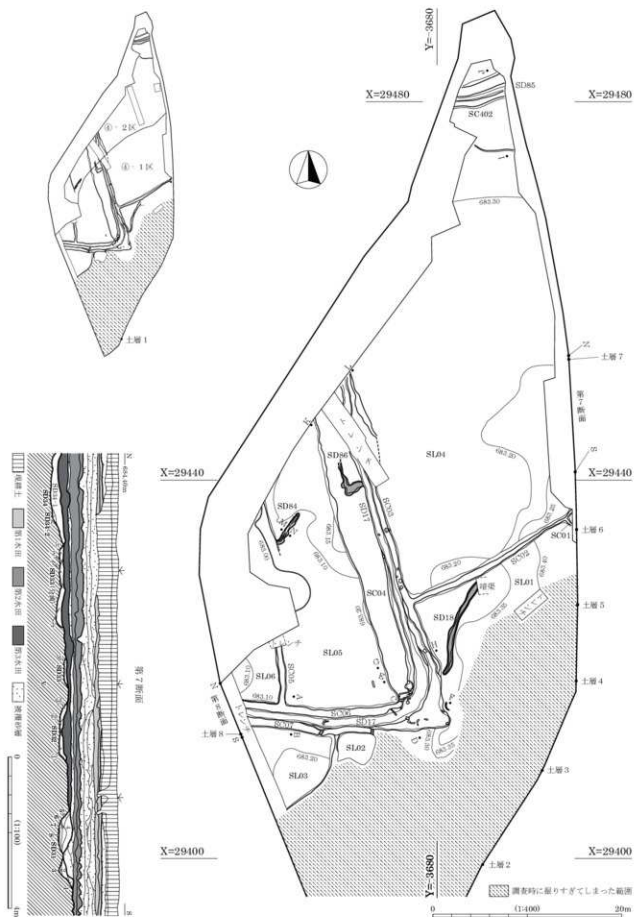
水田層及び水田面の状況：④-1区では、田面の凸凹が著しかった。SD17より東側のSL4の田面は軽石や砂を巻き込んだような状況を示しており、粗い砂も多い。田面自体が洪水時の削平を受けており、耕作面が残っていない可能性も高い。耕土を形成している土（Ⅲ層上部）は、黒褐～黒色で、粘性・しまりともに強い。Ⅳ層（第3水田耕土）よりはやや灰色がかった印象がある。④-2区でも同様なありかたが認められた。両地区とも窪みも認められ、砂で埋まっていた。畦畔上にはごくわずかしみみられない。人間の足跡として認定できるもの以外にも円形の窪みもみられるが何の窪みか特定はできない。

出土遺物：被覆砂層および水田面から出土した土器は約1,500gである。弥生土器が約1,400gと大半を占めるが、他に縄文土器1点と平安時代の土器11点がみられた。またSD17からは約1,000gの土器が出土し、弥生土器の他には土師器破片1点が検出されている。図示した土器は2点である。1は縄文時代前期の諸磯B式土器である。2はSC04から検出された須恵器甕の口縁である。図示はできなかったが糸切り底の須恵器破片等もある。石器は図示した黒曜石製石鏃1点、デイスイト製の打製石斧2点が出土した。木製品は2点を図示した。6はSD17から出土した成形された角材であり施設部材と思われる。樹種はカラマツである。

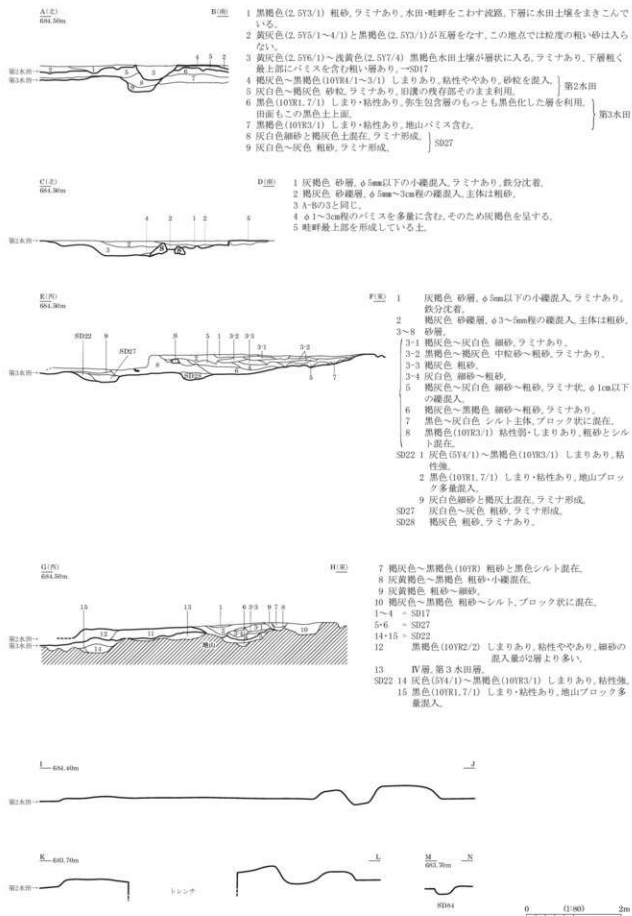
科学分析：東壁（土層7付近・第7断面）および西壁（土層8付近・第8断面）の2箇所の断面から試料35点を採取し、土壌分析（珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析）を実施した。また第2水田を被覆する洪水砂層中のテフラの検証も行った。

本跡においてのイネ属の機動細胞珪酸体含量は、35試料のなかで最も高く、西壁（第8断面）・試料2で約3,300個/gである。また被覆砂層に含まれるテフラは浅間軽石流堆積物に由来するものと考えられ、周辺に分布する軽石流堆積物が流水等の影響を受け再堆積したものと推測される。

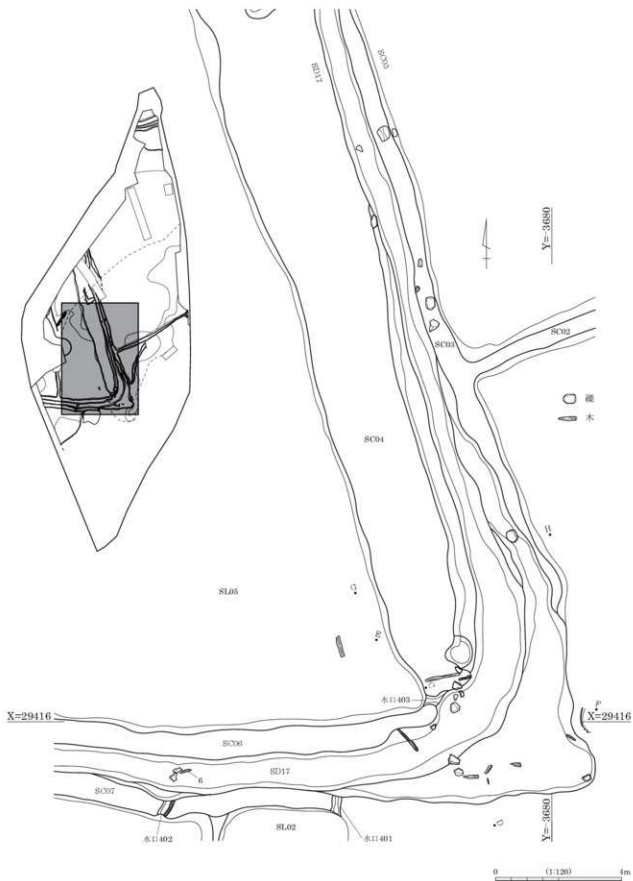
時期：出土遺物から最終的な埋没時期は平安時代9世紀以降とみられる。SD17は3度に渡って掘り直されているため、第3水田面から連綿と水田経営がなされていた可能性がある。しかし、水田開発時を示す埋納土器などは出土しておらず、開発時期は不明である。



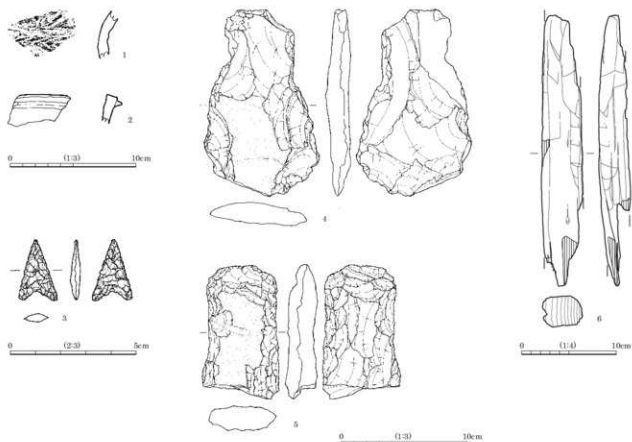
第116図 ④区 第2調査面(第2水田)遺構図(1)



第117図 ④区 第2水田 遺構図(2)



第118図 ④区 第2水田 遺構図 (3)



第119図 ④区 第2水田 遺物図

(4) 第3調査面

ア 水田跡

第3水田 [第120～122図 PL42・87]

位置：④-1区

調査の経過・検出状況：第2水田の項でも記したように、④-1区では第2水田の存在を認識できた段階ではすでに調査区南側は地山まで掘り下げてしまっていた。その際の土層断面観察により、第3水田の存在も把握されていたが、第2水田に比べ被覆砂層が薄いため、面調査は比較的砂層の堆積が厚い調査区西側でのみ実施した。一方、④-2区では被覆砂層が認められないため面的調査は実施しなかった。

被覆砂層の状況：④-1区では、第2水田と比べ被覆砂層は薄く、約10cmから最厚部でも25cmを測るにすぎない。にぶい黄褐色を呈する砂層であるが一部では下層のIV層の土も混じっている部分もあり、削平されていたことが理解できる。

水田の構造：SD27・SD28は第2水田の大畦畔SC03・04に伴う水路であり、SD17に造り替えられる以前に構築されたものであると考えられる。SD27とSD28は重複しており、調査区西壁の土層断面(第120図)の観察によればSD28→SD27の順で構築されたことがわかる。しかしながら平面プランでは新旧関係をつかむことはできなかった。SC08が大畦畔と考えられるが、このような第2水田に伴う水路の造り替えにより破壊されている部分が多く、本来の姿をとらえることは難しい。南北方向ではSD28部分を除いた部分で下端幅約3.4～3.7m、上端幅約3.1～3.5mを測る。東西方向は大半をSD27・SD28に壊されているため残存部の下端幅で約60cmと南北方向よりも狭くなっている。畦畔の高まりは20cm程度

である。SC08 上面には礫や木材が検出された。なかでも礫と木杭・木材が集中する箇所は SX01 という名称にした。また畦畔上では SX01 及び南東屈曲部で打ち込まれた木杭が 4 本検出されている。これらは SC08 畦畔の芯材であると考えられるが、南東隅にみられるものは第 2 水田に伴う可能性もある。SC09 は残存部で下端幅約 1.2 m、畦畔の高まりは数 cm である。SC10 は下端幅 45 cm、SD29 も含めると 1.2 m 程になる。SD27 は幅約 50～70 cm、深さ約 10 cm を測る。SD28 は幅約 65 cm、深さ約 15 cm を測る。SD29 は小畦畔 SC10 に伴うものであり、幅約 90～100 cm を測り、深さは約 30 cm である。

水田の範囲：第 2 水田面と同様、北側の低地部全域が水田面であった可能性が高い。南側台地部との境は砂が途切れているのみで、畦畔・土手などの存在は見つからなかった。大区画は、第 2 水田面とほぼ同じである。個々の水田については、小畦畔をつかむことができなかった。ただし、SD27・29 にかこまれた範囲内においても標高差が認められるため、小規模な区画の水田であったと考えられる。

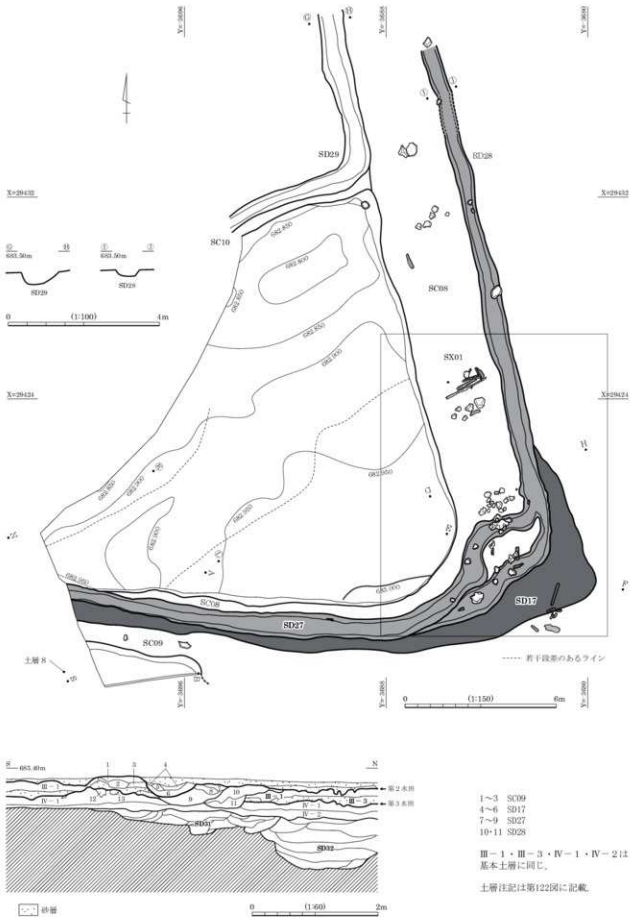
水口と水利形態：SD17 の下層にはほぼ同じ方向の水路が数本認められた (SD27、SD28)。これらは第 3 水田より新しい所産であるが、SD27・SD28 は SC08 に並行して走っていることから第 3 水田が機能していた段階でもほぼ同位置に水路が存在していた可能性が高いと考えられる。9 世紀代に埋没したと見られる SD 17 まで、位置が踏襲されている。ただし、SD17 が 1 本で幹線となっていたのに対し、この時期には、複数の小水路が設置されていたようである。SD28 の屈曲部に杭の打ち込みが認められた。また SC08 に並行して途中から屈曲する SD29 が加わる。これらが幹線水路と考えられ、第 4 調査面で検出された弥生時代の溝群とは明らかに経路が異なっている。各水田への水回しについては痕跡がなく不明である。水口は検出できなかった。

水田層及び水田面の状況：第 2 水田面の所見に示したように IV 層上面が水田面水田面上面には薄い砂層の被覆が認められた。耕土は黒色の IV 層である。粘性・しまりともに強い。ただし、第 2 水田面のような、耕土上部の灰色化は認められなかった。水田面の状況は明確ではないが、鋤痕・足跡、田面の粗起こしなどの痕跡は認められなかった。

出土遺物：土器は約 2,000 g が出土したが、弥生土器の他には平安時代の土師器片が 2 点検出されたにすぎなかった。また SD27 からは約 1,900 g の土器が出土した。SD28 からは約 1,000 g の土器が出土し、うち平安時代のものが約 100 g 検出された。木製品の出土もみている。写真 (PL87-6) のみだがサワラ製の板材を掲載した。SD29 からは約 140 g の土器が出土し、うち約 120 g が平安時代のものであった。木製品は大畦畔 SC08 上に礫とともに数点が、また屈曲部付近でも数点が検出されたが、図示したのは SC08 内で打ち込まれていた木杭 2 点を含む 3 点である。1 はサワラの板材である。2 はヒノキ科の角材であり、建材としても使用された可能性もある。ともに欠損している。3 は畦畔内から検出された板材で、樹種はサワラである。他にも木杭 1 点が検出されている (第 121 図 A-⑧-⑨セクション)。

科学分析：放射性炭素年代測定・土壌分析などを実施している。放射性年代測定は 1 の木杭を試料として実施した。結果、補正年代は 1,565 ± 20 yrBP、これらの補正年代にも基づく暦年較正年代は calAD436-calAD538 の数値を得た。5～6 世紀代の古墳時代にあたる。出土遺物との年代に齟齬を生じるが、ひとつの数値資料として提示しておきたい。またイネ属の機動細胞珪酸体含量は 1,000 個/g 未満である。低い数値であるが、先述した水田面の状況からすると洪水砂で耕土が押し流されてしまった可能性も考慮しなければならない。

時期：水田面での時期を決定できるような遺物は出土していない。層位的には弥生時代中後期の遺構検出面である第 4 調査面と平安時代 9 世紀以降に位置づけられる第 2 水田 (第 2 調査面) にはさまれた時期であることはいえるが、それ以上の時期決定はできない。先述したように放射性炭素年代測定も実施し、古墳時代後半期の数値を得ているが、第 2 水田と畦畔の位置が類似していること、わずかに出土した土器も



第120図 ④区 第3調査面（第3水田）遺構図（1）

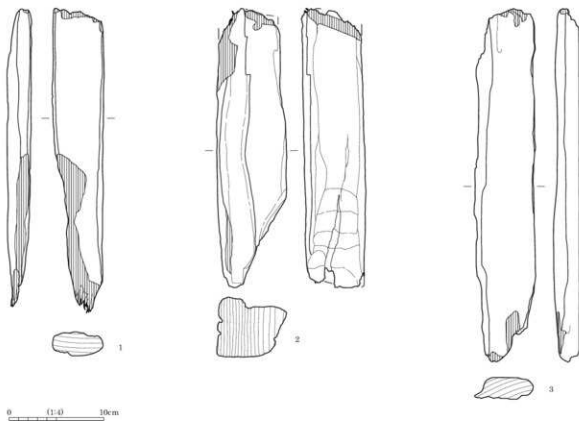


第121図 ④区 第3水田 遺構図(2)

第120図西壁 (S-N) 断面の土層注記

- 1 褐灰色(10YR4/1) しまりあり, 粘性弱, 砂混入。
- 2 にぶい黄褐色(10YR6/3) しまりあり, 粘性弱, 細砂主体, ラミナあり。
- 3 黒褐色(10YR3/1) しまりあり, 粘性ややあり, 砂・ペリス微量含む。
- 4 褐灰色(10YR4/1) しまりあり, 粘性弱, 粗砂へ小籠, ラミナあり, 鉄分沈着。
- 5 褐灰色(10YR4/1) しまりあり, 粘性弱, 細砂へシルト, ラミナあり。
- 6 にぶい黄褐色(10YR6/3) しまりあり, 粘性弱, 上部細砂, 下部粗砂, ラミナあり。
- 7 褐灰色(10YR4/1) シルト, しまりあり, 粘性弱, 4層より灰色強い。
- 8 黒褐色(10YR3/1) シルト, しまり・粘性あり。
- 9 にぶい黄褐色(10YR6/3) しまりあり, 粘性なし, 粗砂へ細砂, 鉄分沈着。
- 10 褐灰色(10YR4/1) しまりあり, 粘性弱, SD27が切り込んでいることで判断。
- 11 褐灰色(10YR4/1) にぶい黄褐色(10YR6/3) 混入, 10層に砂混入, ラミナあり。
- 12 IV-1層に砂混在。
- 13 IV-1層に砂混在。
- III-1 黒褐色(10YR3/1) 黒色土(10YR2/1) 混在, しまり・粘性強, 砂混入。
- III-3 にぶい黄褐色(10YR6/3) 砂層, 粗砂へ細砂, 一部下層の黒色土混入。
- IV-1 黒色土(10YR2/1) しまりあり, 粘性強, 細砂を含む。
- IV-2 黒色土(10YR1.7/1) IV-1層に比べさらに黒土が増す。

1~3 SC09
4~6 SD17
7~9 SD27
10-11 SD28



第122図 ④-1区 第3水田 遺物図

9世紀代のものであることを重視するならば、第2水田とさほど離れた時期ではない可能性が高い。

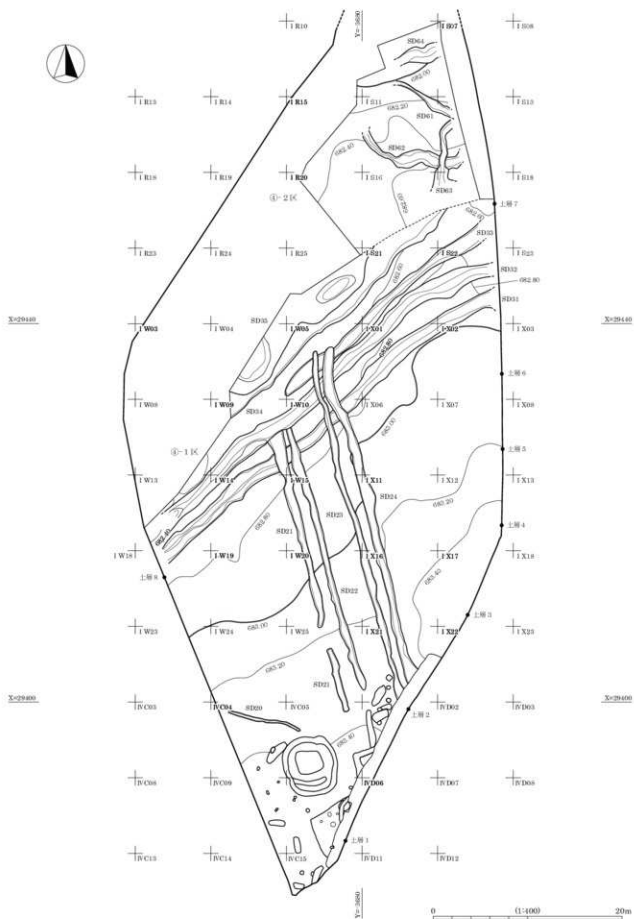
(5) 第4調査面

ア. 竪穴住居跡

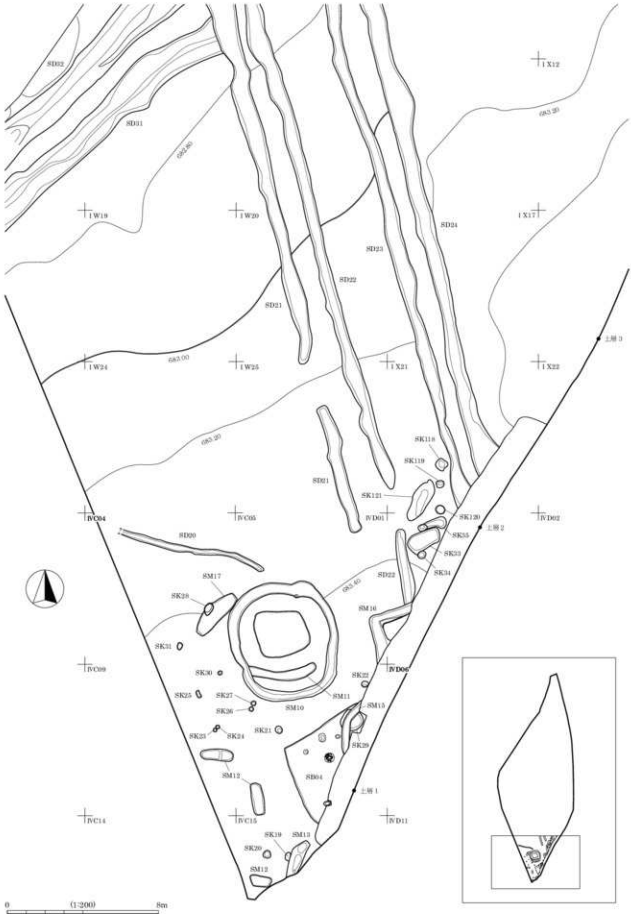
SB04 [第125・126図 PL15・53・74]

位置：④-1区、IV C10・IV C15グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。本跡の床面まで掘り下げた段階で円形周溝墓SM15と土坑SK29と重複することが判明した。SK29をSM15が切っていることはこの段階で理解できた。調査区東壁の断面観察 (I-J断面) ではSM15が本跡の第2層及び掘り方よりも新しい所産であることが判明し



第123図 ④区 第4調査面 遺構配置図



第124図 ④区 第4調査面 遺構配置拡大図

たため、SM15よりも本跡の方が古いと判断した。

形状・規模：東側は調査区外にあたるため、形状・規模は不明である。現存長は南北径2.38m、東西径3.39m

を測る。唯一わかる北西隅の形状からすれば、方形もしくは長方形を呈するものと推測できる。壁高は最大部分でも11cmを測るにすぎない。南北径を長軸とするならば、N-28°-Wを示す。

埋土：2層に分けられ、第2層は炭化物が多量に混入している。

床面：炭化材が広がっており、焼失住居跡と思われる。掘り方をもつ。

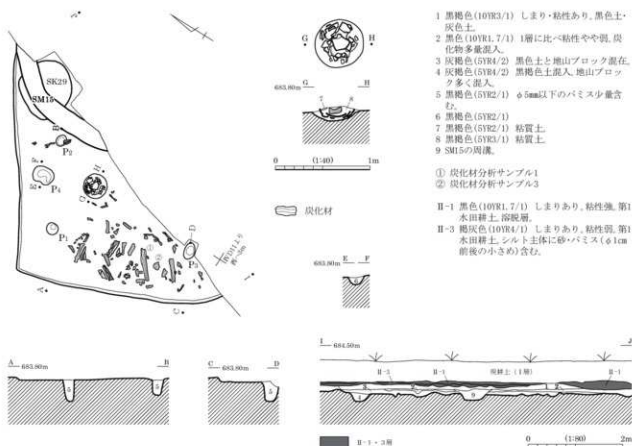
炉：5個体の土器片を重ねた土器敷炉である。

柱穴・ピット：ピットは4基が検出された。このうちP1・P2・P3が主柱穴と考えられる。

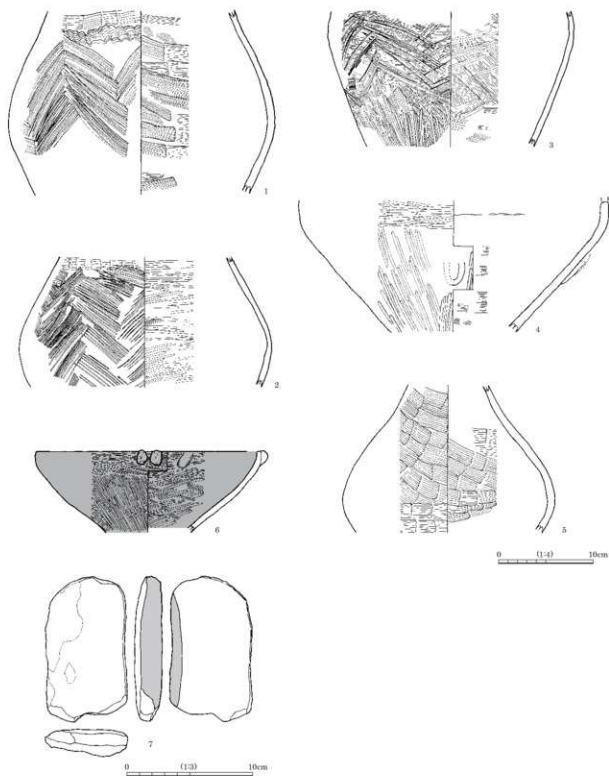
出土遺物：土器は約2,500gが出土し、このうち6点・約2,000gを図示した。1～5は胴部1/4程度の破片であり、これらを重ねて炉に用いられたものである。1～3は甕、4は壺で摩耗が激しいが突帯の痕跡が1箇所認められた。5も壺だがミガキがみられずハケメがよく残る。6は鉢で2箇所突起が口縁部につく。石器は砂岩製の砥石1点を図示した。側面に顕著な砥面がみられる。

科学分析：床面から出土した炭化材のうちサンプル1・3の放射性炭素年代測定を実施した。ともにコナラ亜属コナラ節で、サンプル1は試料の補正年代が2,020yrBP、暦年較正年代はcalBC54-calAD31、サンプル3は試料の補正年代が2,110BP、暦年較正年代はcalBC186-88を測る。紀元前2世紀末頃に位置づけられる年代である。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



第125図 SB04 遺構図



第126図 SB04 遺物図

イ 方形周溝墓・円形周溝墓

SM10・11 [第127・128図 PL20・73]

位置：④-1区、IV C04・IV C05・IV C10グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。重複関係はないが、調査段階ではSM10の内側にもうひとつ周溝が認められたことから、これをSM11としたが、一連のものとして報告したい。

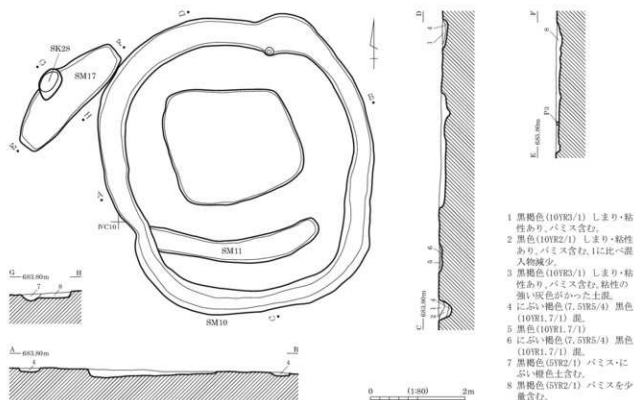
規模：南北径は6.3m、東西径5.7m程度を測る。周溝の幅は約40～55cm、深さは26～34cmを測る。SM11は深さ5cm程度と浅い。

埋土：周溝はにぶい褐色土の単層

主体部：中央部に2.7×2.4m程度、深さ20cm程度の浅い落ち込みがみられた。小口穴は検出されず、形態的には主体部としては考えがたい。

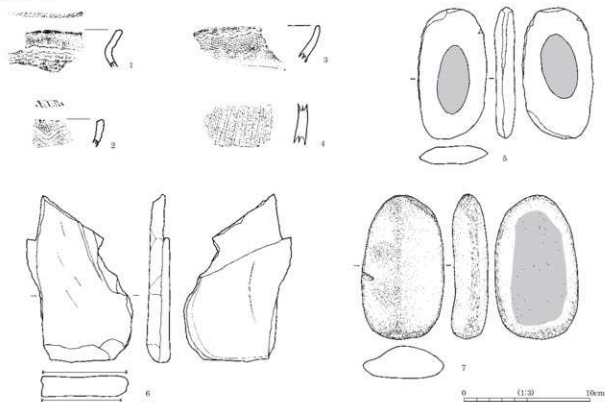
出土遺物：土器はあわせて約900gが出土し、SM10から出土した4点・約60gを拓影で図示した。1は口唇部に縄文を施し、2は刻みを入れている。3は口縁部に櫛描波状文を施す。4はコの字重ね文甕の一部と思われる。これら弥生時代中期後半の土器の他、図示はできなかったが後期土器片も認められる。石器は3点を図示した。5・6・7は砂岩製の砥石である。

時期：出土した土器には弥生時代中期後半から後期のものがみられる。後期に位置づけたい。

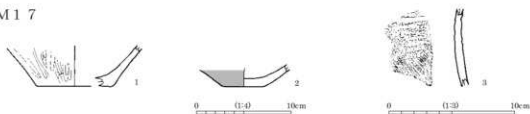


第127図 SM10・11・17 遺構図

SM10



SM17



第128図 SM10・17 遺物図

SM12 [第129図 PL21]

位置：④-1区、IV C09・IV C10・IV C15グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。西側が調査区外にかかるため、規模・形状は推定にとどまるが、南北径は7.5m程度と考えられよう。方形周溝墓の可能性が高い。

規模：周溝の幅は約55～65cm、深さは10～14cmを測る。

埋土：周溝は黒色土を主体とする単層。

主体部：検出されなかった。

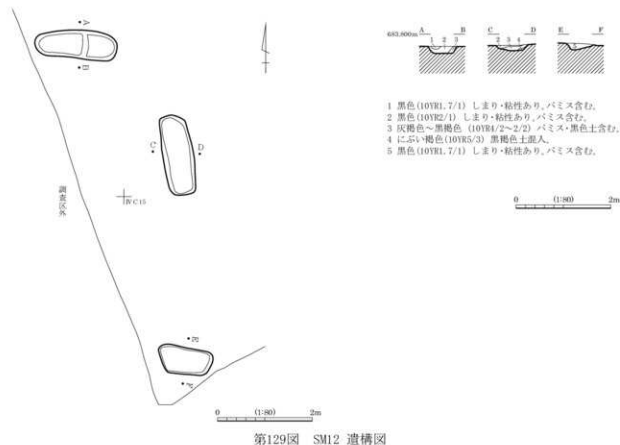
出土遺物：土器が約30g出土したのみである。図示した土器はない。

時期：出土土器は僅少だが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM13 [第130図 PL21]

位置：④-1区、IV C15グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。プランがはっきりしないが円形周溝墓と思われる。SK19と重複し、検出段階で本跡の方が新しいことが判明した。周溝は北西側の一部を除いて調査区外にかかるた



め、規模は不明である。

規模：周溝の幅は約70cm、深さは34cmを測る。

埋土：周溝は黒色土を主体とする単層。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：土器が約120g出土したが、図示した土器はない。

時期：出土土器は僅少だが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM15 [第130図 PL21・56]

位置：④-1区、IV C10グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。円形周溝墓である。SB04、SK29と重複する。SB04の調査を進めていく中で、重複に気がついた。SK29を切っていることから本跡の方が新しいと判断した。SB04とは、調査区東壁の断面観察（I-J断面）でSM15の立ち上がりがSB04の第2層及び掘り方より新しいと判断した。周溝は北西側の一部を除いて調査区外にかかるため、規模は不明である。

規模：周溝の幅は約43cm、SB04の床面からの深さは最深部で17cmを測る。

埋土：周溝は黒褐色土。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：土器が約180g出土し、3点・約140gを図示した。1は手捏土器で外面は底部を除き、内面も口縁部付近を赤彩している。2・3は甕の拓影である。

時期：出土土器は僅少だが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM16 [第130図 PL21]

位置：④-1区、IV C05、IV D01グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。方形周溝墓である。SD22と重複するが検出段階では新旧関係はつかめなかった。周溝は北西側を除いて調査区外にかかるため、規模は不明である。

規模：周溝の幅は約53～67cm、深さは約10cmを測る。

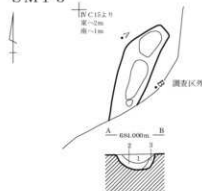
埋土：覆土の記録はとっていない。

主体部：検出されなかった。

出土遺物：出土した遺物はなかった。

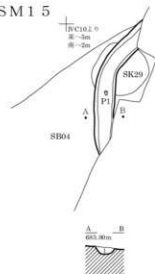
時期：出土遺物はみなかったが、周辺の周溝墓の状況から弥生時代後期の所産であると推定する。

SM13



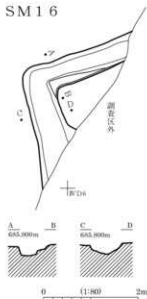
- 1 黒色 (10YR1.7/1) しまり・粘性あり、バミス含む。
- 2 黒色 (10YR2/1) しまり・粘性あり、バミス含む。より灰色がかかっており、砂粒増加。
- 3 褐灰色 (7.5YR4/2) しまり・粘性あり、地山ブロック混入。

SM15

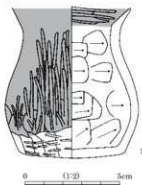


- 1 黒褐色 粘性あり。バミス少量含む。

SM16



SM15



第130図 SM13・15・16 遺構図・遺物図

SM17 [第128図 PL21]

位置：④-1区、IV C04グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。SK28と重複し、検出段階で本跡の方が古いと判断した。深さ10cmの落ち込みであり、周溝墓等の主体部と考える。

規模・埋土：277×93cm、深さ10cmを測る。長軸はN-45°-Eを示す。小口穴は検出されなかった。底

面は凸凹が目立つ。埋土は黒褐色土の2層に分けられた。

出土遺物：土器は約230gが出土し、3点・約150gを図示した。1は壺の底部、2は赤彩された鉢の底部である。3は縄文を充填したところに沈線を横に施す壺である。また骨片が検出されたが鑑定に耐えるものではなかった。

時期：出土した土器には弥生時代中期後半から後期のものがみられるため、弥生時代後期に位置づける。

ウ 溝跡

SD20 [第131図]

位置：④-1区、IV C04・05 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模・埋土：検出長は約8mであり、幅約25～40cm、検出面からの深さは約10cmと浅い溝跡である。東西方向へ走る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物：弥生土器が約100g出土したにすぎない。

時期：時期決定に足る出土遺物はないが、弥生時代中期後半～後期頃の所産であると考ええる。

SD21・22・23・24 [第131・133図 PL28・52・69・71]

位置：④-1区、I W05・09・10・14・15・20・25、I X06・11・16・21・IV C05・IV D01 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。これら4条の溝跡は南北方向へ走り、埋土や形態が類似するため、ここで一括して報告する。SD21・22はSD31・32と重複し、検出段階でSD31をより新しいことは理解できた。SD32との切り合いは不明確であった。SD22はSM16とも重複するが検出段階では新旧関係はつかめなかった。SD23・24はSD31・32・33より新しい所産である。

規模・埋土：4条ともほぼ同様な形態をもち、幅約60～150cm、検出面からの深さ約15～30cmを測る。SD21・22は途中で途切れる箇所もあるが、これは浅い掘り込みのためであろう。埋土はSD20と同じく黒褐色土粘質土である。

出土遺物：SD21からは約1,300gの弥生土器が出土したが、図示できるものはなかった。SD22は土器約900gが出土したが、図示したのは泥岩製の刃器1点(1)のみである。SD23からは約1,200gの土器が検出されたが、図示できた1の縄文時代後期の土器以外は弥生土器であった。石器では磨製石鏃片1点を図示した。SD24では土器は約850gを検出したが、図示したのは扁平片刃石斧1点(1)である。

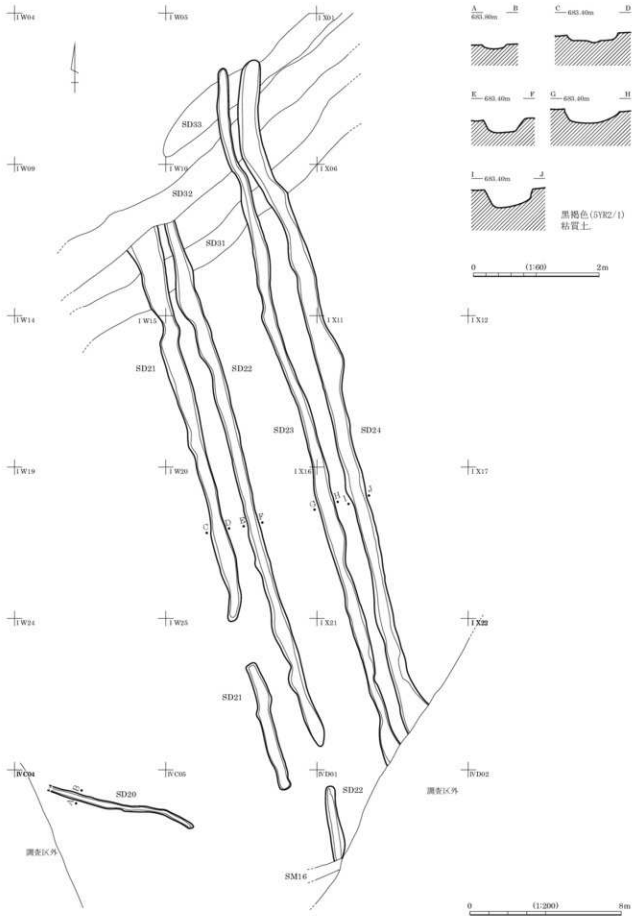
時期：いずれの溝跡も出土遺物から弥生時代中期後半から後期の所産と考えたい。

SD31・32・33・34・35 [第132・133・134図 PL28・61・69・70・72]

位置：④-1区、I R24・25、I S16・17・21・22、I W04・05・08・09・10・13・14・18、I X01・02・06 グリッド

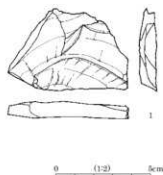
検出・重複関係：V層上面にて検出した。これら5条の溝跡は北東-南東方向に近接して走り、埋土や形態が類似しているため、ここで一括して報告する。SD23・24がSD31・32・33より新しいことは検出段階で判断できたが、SD21・22との切り合いはつかめなかった。またSD34よりもSD35の方が新しいことも検出段階で判断できた。

規模・埋土：SD31～33は幅約80～200cm、検出面からの深さ約15～40cmを測る。SD34はSD35に切られるため、幅は不明だが検出面からの深さは約20cmである。SD35も西側が調査区外にあたるため幅は不明であり、深さは約40cmを測る。埋土は砂層が主体である。後述する科学分析結果から埋設段階では淀

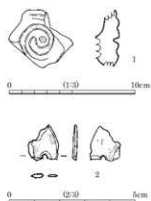


第131図 SD20～24 遺構図

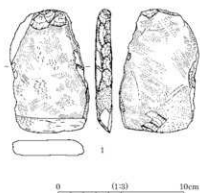
SD 2 2



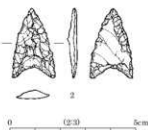
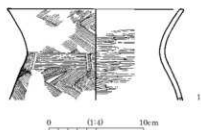
SD 2 3



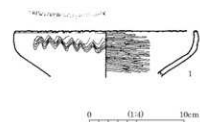
SD 2 4



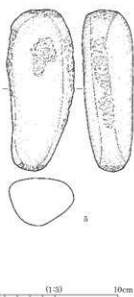
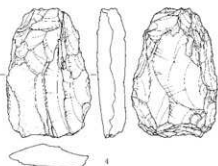
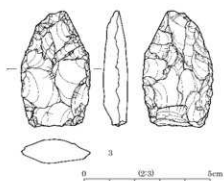
SD 3 1



SD 3 3



SD 3 2

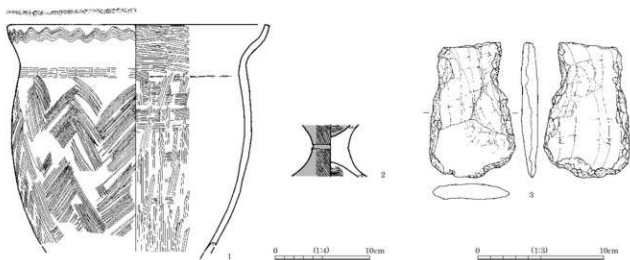


第133図 SD22~24・30~33 遺物図

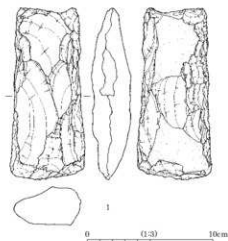
みのような堆積環境、水湿地的な環境が推定されている。

出土遺物：SD31からは土器約2,100gが出土し、甕1点を図示した。口縁部及び胴部には斜線文を施す。石器は2のチャート製の石鏃1点を図示した。SD32は土器約7,500gが出土したが、破片資料が多く図示したのは2点である。1は折り返し口縁にヘラで刻みをいれている。2は壺で口縁には刺突文を施す。石器は3点を掲載した。3は黒曜石製の石鏃の未製品とみられる。4は泥岩製の打製石斧、5は輝石安山

SD34



SD35



第134図 SD34・35 遺物図

岩製の敲石である。SD33は土器が約200g出土したにすぎないが1の受け口縁壺を図示した。

SD34からは土器が約2,200g検出され、2点を図示した。1は甕で口唇部に刻みを入れている。2は高坏の脚部であるが、段を有するものである。石器はアイサイト製の打製石斧1点を図示した(3)。SD35からは約500gの土器が出土したが、図示できたのは打製石斧1点(1)であった。またSD35からは自然木の溜まりがみられた。

科学分析：④-1区の東壁および西壁にて土壌分析(珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析)を実施した。西壁(第8断面)の試料にはSD32の埋土も含まれている。その分析結果によると、SD32の埋土では珪藻化石群集は、特徴的に多産する種類はなく、塩分や塩類を豊富に含む淡水～汽水生種、流水不定性種が産出し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種を伴うといった組成を示している。本跡で対象とした土層では、中栄養～富栄養の水質を呈する水域であり、流れの影響は小さく、淀みのような堆積環境であった可能性があるという。種実遺体は、大部分が草本類であり、カヤツリグサ科、ナデシコ科、キジムシロ類など開けた場所に草地を作る種類が多い。花粉分析結果でも草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等の開けた草地を作る種類が多く検出された。また、種実遺体や花粉分析には、ガンマ属、イボクサ、オモダカ科、イバラモ、タガラシ等の水生植物が認められるため、水湿地的な環境も示唆される。な

お、植物珪酸体分析ではイネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体はいずれも検出されなかったが、イネの穎が検出された。

時期：いずれの溝跡も出土遺物から、弥生時代中期後半から後期の所産と考えたい。

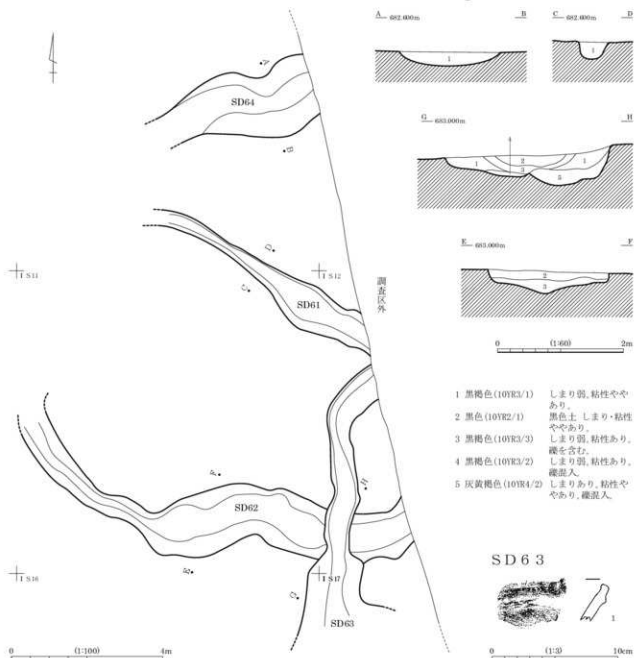
SD61・62・63・64 [第135図 PL35・52]

位置：④-2区、I S06・07・11・12・16・17グリッド

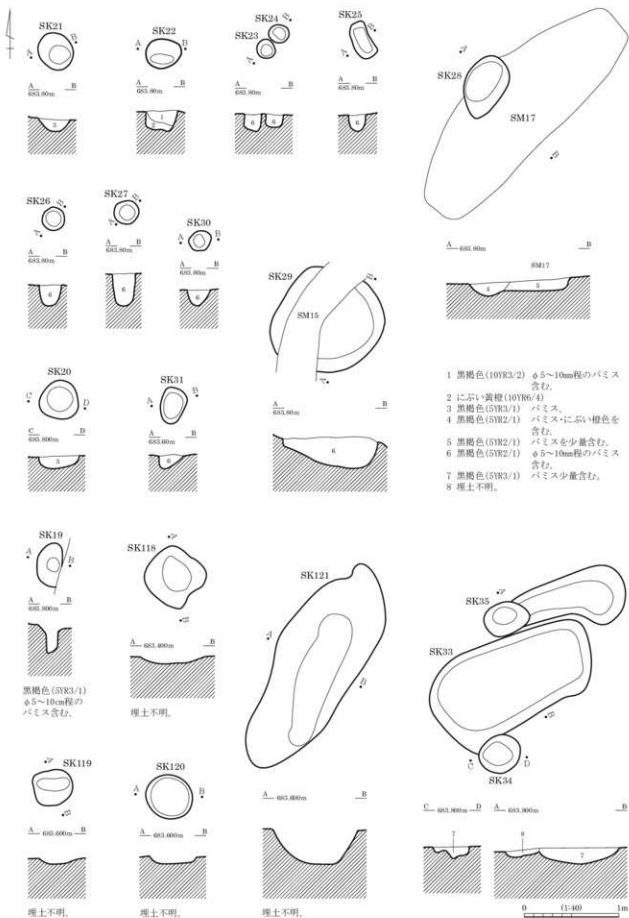
検出・重複関係：V層上面にて検出した。SD63がSD62より新しいことは検出段階でつかむことができた。

規模・埋土：4条とも蛇行しており、幅は約40～160cmと均一ではない。検出面からの深さは約25～60cmである。埋土は礫を含む砂層である。人為的に掘削した溝跡とは考え難く、自然流路であると判断した。

出土遺物：SD61・SD62では遺物の出土をみなかった。SD63からは約240gの土器が出土し、そのうち



第135図 SD61～64 遺構図・遺物図



第136図 ④区 SK 遺構図

縄文時代後期・堀之内2式の土器を図示した(1)。SD64は土器約20gが検出されたにすぎない。

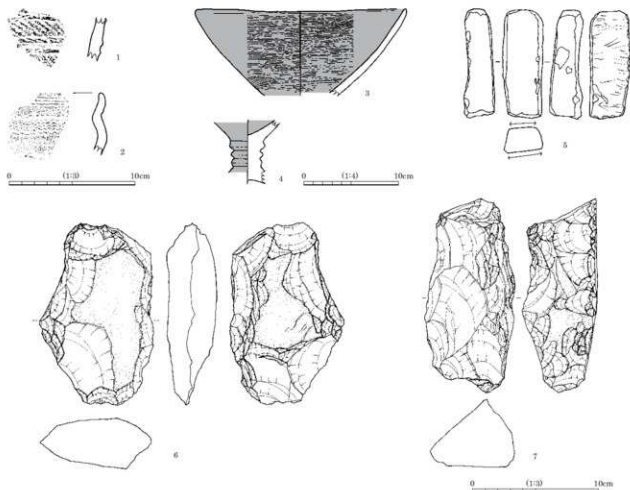
時期：時期決定に足る遺物の出土はみないが、層位的にみて、弥生時代中期後半から後期の所産と考えたい。

エ 土坑(SK)

土坑は20基が検出された。特記すべきものはみられない。第10表に一覧表を掲載してあるので、それを参照していただくこととし、ここでの個別記載はしない。

(6) 遺構外出土の遺物 [第137図 PL52・66・70・71・74]

土器は約8,500gが出土した。このうち4点を図示した。1は縄文時代前期・諸磯b式の土器である。他に中期末～後期前半の土器片も検出されている。これらを除くと他は弥生時代中期後半から後期の土器と古墳時代後期から平安時代の土器である。図示したのは2の甕、3・4の高坏である。4は高坏の脚部であるが、3つの段をもつ。図示していないが中近世土器は4点が出土した。13世紀頃のかわらけ片の他、内耳銅片や伊万里片が検出された。石器は3点を掲載した。5は砥石、6はデイサイト製の石鋸、7は細粒砂岩製の石核である。また、確認調査でトレンチ7にて銭貨1点を検出した(PL89-19)。④区に相当する箇所からの出土であるので本項で報告する。さびがひどくX線写真によっても判読できなかったため拓影は掲載しなかった。



第137図 ④区 遺構外遺物図

遺構 番号	遺構図取	地 区	グリッド	平面規模(cm)	深さ (cm)	出土遺物		備 考
						種別数量	掲載遺物	
SK19	第136図	④-1区	IVC15	45×23	61			SM13より古。
SK20	第136図	④-1区	IVC15	42×42	13			
SK21	第136図	④-1区	IVC10	40×35	18			
SK22	第136図	④-1区	IVC10	38×30	22			
SK23	第136図	④-1区	IVC09	21×18	17			
SK24	第136図	④-1区	IVC09	23×20	12			
SK25	第136図	④-1区	IVC09	40×20	16			
SK26	第136図	④-1区	IVC10	24×23	23			
SK27	第136図	④-1区	IVC10	26×25	28			
SK28	第136図	④-1区	IVC04	70×43	14	弥生土器約10g		SM17より新。
SK29	第136図	④-1区	IVC10	116×110	11			SM15より古、SB04とは不明。
SK30	第136図	④-1区	IVC09	24×21	17			
SK31	第136図	④-1区	IVC04	39×25	15			
SK33	第136図	④-1区	IVD01	183×93	17	弥生土器約310g		SK34より古。
SK34	第136図	④-1区	IVD01	45×40	14	弥生土器約20g		SK33より新。
SK35	第136図	④-1区	IVD01	50×33	7	弥生土器約60g		
SK118	第136図	④-1区	IX21	66×66	8			
SK119	第136図	④-1区	IX21	42×37	9			
SK120	第136図	④-1区	IX21	50×47	4			
SK121	第136図	④-1区	IX21、IVD01	245×90	39			

第10表 ④区SK一覽表



④-1区第4調査面(西から)

4. ⑤区

(1) 層序と調査面 [第138図]

本調査区は低地にあたり、地山の浅間第1軽石流まで最深部では地表から約3.4mを測る。湧水も著しいため、調査区際に排水用を兼ねたトレンチを四周に巡らし、土層観察を行った。その結果、砂層に覆われた水田面が3面検出され、地山を掘り込んだ溝跡や土坑も確認された。こうした観察を踏まえて、基本土層に沿って土層の対応を検討したが、水田面のなかには一部対比できないものがみられた。

水田跡は上層より、水田A、水田B、水田Cとした。このうち水田Aが隣接する④区の第1水田に、また水田Cが第2水田に対応することは層位のつながりや出土遺物などにより判断できた。

第1層は現耕土、第2層・第3層が水田Aの被覆砂層であり、基本土層のI層にあたる。

第4層は水田A、第5層は被服砂層のみられない土層1・3で確認される水田Aに対応する層、第6・第7層は水田Bの被覆砂層であり、これらが基本土層のII層にあたる。

第8層・第9層は水田Bであるが、他地区(③-2区・④区)には認められない水田面である。第10～14層は水田Cの被覆砂層であり、5つに細分したものである。

第15層は水田Cである。第16層は砂層だが、土層3付近にしかみられない。第15層・第16層は基本土層のIII層にあたる。

層位から第16層は第3水田跡の被覆砂層にあたるものと考えられるが、下位の第17～19層では水田層を検出することはできなかった。ただし、第17～19層は層位的には第3水田対応層であり、基本土層のIV層に対比できる。

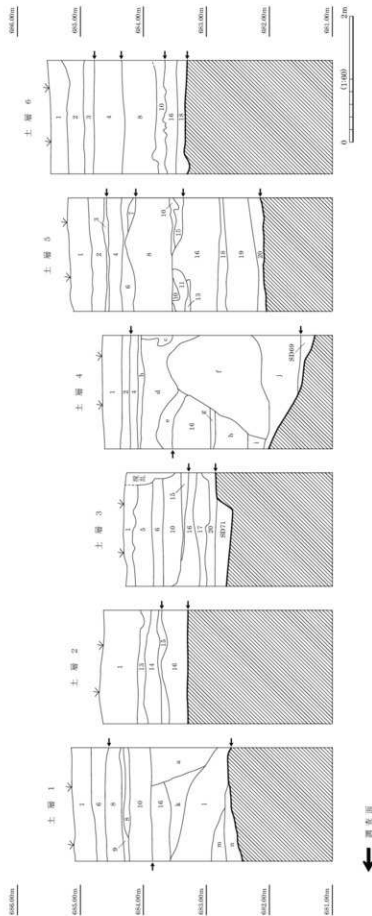
地山は浅間軽石流堆積物である。

調査は4面にわたり実施した。つまり、4層上面を第1調査面、8層上面を第2調査面、15層上面を第3調査面、そして地山上面を第4調査面とした。

また、本調査区は洪水による削平を多く受けていることが特記できる。水田跡の被覆砂層以外にも第2～4調査面では削平された部分が少なくない。土層1では、砂層の上に作られた水田C(16層)が洪水砂層により大きく削平されていることがわかる。土層4では、水田Aの直下が砂層であり、水田Bからその下層の水田Cまで削平されている状況が示されている。また他にもひとつの層のなかに砂層が混じるものも少なくなく、たび重なる洪水被害を頻繁に受けていた場所であることが理解できる。



⑤区北横断面(土壌試料採取箇所 第203図参照)



第138図 ⑤区の層序



土田Cを削り出す取層
 b→a 土田Bでaを削り出す砂層。
 b 掘くしまつた砂層。
 c 粒子が粗く均一な砂層。
 d 粒子が粗く均一な砂層。
 e 砂層、しまり強、 ϕ 5cm以下の礫を含む。
 f 粗砂層、粒子の大きさは均一ではない。
 g→h シルト、水田C以前に堆積した砂層。
 (1-aはシルト、前は砂層。)

13 黒褐色(10YR5/1) 泥層
 14 黒褐色(10YR5/1) 砂層(ハナド口)
 15 黒褐色(10YR2/1) 粘土、水田C
 16 暗褐色(10YR3/3) 砂層、 ϕ 1cm以下の礫を含む。
 17 暗褐色(10YR3/3) しまり強、 \sim 10cmの礫を対応するが、
 ハミスを含む。粗砂層も混じる。③区IV層に
 対応するが、
 18 黒褐色(10YR3/1) シルト、③区IV層に對
 応するが、
 19 黒色(10R2/1) シルト、しまり強、粒子や
 礫が多い。層の底にこまかな礫の分
 層はできてない。③区IV層に對応するが、

1 暗褐色土
 2 暗褐色(10YR3/3) 粗砂層
 3 灰褐色(10YR4/2) 砂層(ハナド口)
 4 褐色(10YR4/1) 粘土、水田A
 5 水田A対応層、下部に黒土が密状にみ
 られる部分あり。
 6 灰黄褐色(10YR4/2) 砂層、しまり強。
 7 6よりも粒子の細か4砂層。
 8 暗灰褐色(2.5YR4/2) 粘土層、水田B
 9 に近い黄褐色(10YR5/4) 砂層、水田B層
 の一部。
 10 に近い黄褐色(10YR4/3) 砂層、粒子細か
 い。
 11 黒褐色(10YR3/2) 砂層、 ϕ 1cm以下の礫を
 含む。
 12 暗褐色(10YR3/3) 砂層、 ϕ 1cm以下の礫を
 含む。

(2) 第1調査面

ア. 水田跡

水田 A [第139～142図 PL44・45・46・68・76]

調査の経過: 本格調査に先行して平成18年2～3月に実施した表土剥ぎにおいて、現耕土の直下に砂層が堆積していることが判明した。この時点では湧水が激しいため表土剥ぎはこの面とどめた。4月から開始した平成18年度の調査に際しては、調査区の四周に排水用を兼ねたトレンチを掘削し、土層観察を行った結果、砂層に覆われた水田3面があることが明らかとなった。本跡はその第1面目の水田である。なお、層位的にも出土遺物からも、④区第1水田と対比できものである。

被覆砂層の堆積状況: 砂層は第1層および第2層の2層に分けられた(第141図)。第1層は約12～40cmの厚さの暗褐色粗砂層である。第2層は約5～20cmの厚さの灰黄褐色砂層で、ハナドロである。第2層は東西畦畔SC507を境に南側では認められなかった。第3層も同様なありかたであったが、第138図-土層4地点付近ではみられず、土層5・6地点の北西壁付近でのみ認められた。

水田の検出状況: 砂層(第1～3層)中位までを重機で剥いだ後、人力で砂層を掘り下げた。第4層上面において畦畔の高まりおよび砂層が落ち込む凹みが発見されたため、水田面として認定した。

水田の構造: 南北方向に5条の、東西方向に2条の畦畔が確認された。SC501～505は南北畦畔であり、SC506・507は東西畦畔である。水田区画はSL51～56とした。調査区内で区画の規模を知ることはできないが、SC507で南側は区画されていることはわかる。SC507付近でのSC502～505のそれぞれの区画の東西長は6～12m程度であり、南北に細長い区画であることが理解されよう。最も検出長があるSC502をみると、畦畔は西側にやや膨らむ弧状を呈している。これはほぼ等高線に沿っており、東から西へ下がる地形の傾斜にあわせて区画していることがわかる。SC506をSC507と対応する北側の畦畔とした場合、おおよそ40m程度の南北長の区画であると想定されよう。

SC501はほぼ真北に主軸方位をもち、南側で削平される部分もあるが、上端幅約20～50cm、下端幅約70～120cmを測る。畦畔の高まりは、東側SL56の水田面とは約15cm、西側SL51の水田面とは約35cmの比高差があり、西側へ下がる段差をもつ。

SC502は暗渠により一部が壊されているが、水口を3箇所もち、上端幅約20～50cm、下端幅約50～80cmを測る。畦畔の高まりは西側SL52の水田面とは約15～25cm、東側SL51の水田面とは約10cmの比高差があり、西側へ下がる段差をもつ。

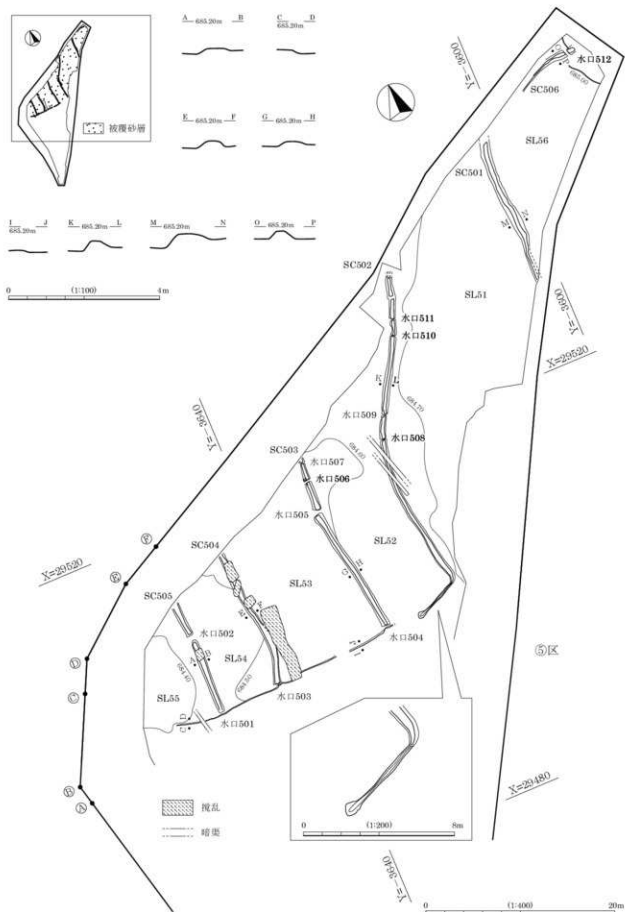
SC503は水口を2カ所もち、上端幅約25～40cm、下端幅約75～110cmを測る。畦畔の高まりは東側SL52の水田面とは約5～10cm、西側SL53の水田面とは約15cmの比高差があり、西側へ下がる段差をもつ。

SC504は、攪乱により壊されている部分が多いが、上端幅約30～50cm、下端幅約60～75cmを測る。畦畔の高まりは東側SL53の水田面とは約15cm、西側SL54の水田面とは約20cmの比高差があり、西側へ下がる段差をもつ。

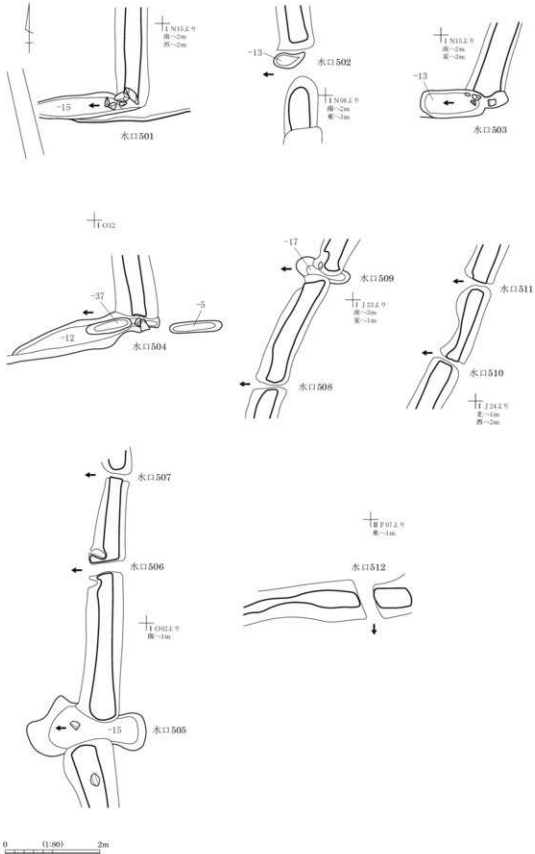
SC505は、一部で攪乱を受けている。主軸方位はほぼ真北にもち、水口は1カ所みられる。上端幅約30～60cm、下端幅約70～100cmを測る。畦畔の高まりは東側SL54の水田面とは約5～15cm、西側SL55の水田面とは約15～20cmの比高差があり、西側へ下がる段差をもつ。

東西畦畔のSC506は調査区北東際で検出され、上端幅約40cm、下端幅約80cmを測る。畦畔の高まりは南側SL56の水田面とは約15cmの比高差がある。これらの畦畔を断ち割ってみたところ、畦畔部分と水田層は明確に分層することはできなかった。

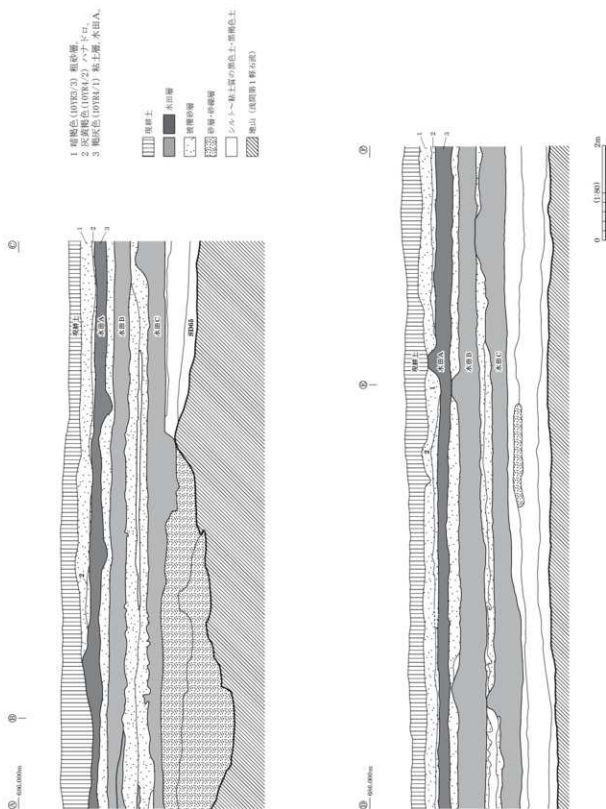
またSC503～505は水口をはさみ、約5～10cmの段差をもち、南側が高くなっている。この一段高い



第139図 ⑤区 第1調査面(水田A)遺構図(1)



第140図 ⑤区 水田A 遺構図(2)



第141図 ⑤区 水田A 遺構図 (3)

南側では砂層の堆積が認められなかったため、面的には調査できなかったが、西壁断面（第141図）で見ると、第1水田層は砂層のみられない南側へも連続しており、また第138図-土層3でも確認されている。南側部分では現耕土層の堆積が北側よりも厚くなっている。削平がより深くまで進んでいたため、被覆砂層が失われた可能性が高い。

水田の範囲：面的に検出できたのは被覆砂層が堆積していた北側のみであったが、本来は調査区のほぼ全域に広がっていたものと考えられる。

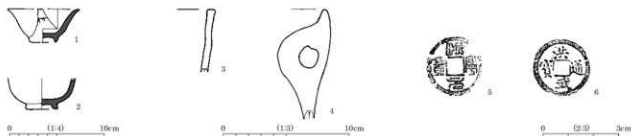
水口：水口は、SC502で4カ所、SC503で3カ所、SC505で1カ所が検出された。このうちSC505では水口501・502、SC504では水口503、SC503では水口504・505、SC502では水口509に深さ5～15cmの窪みがみられる。このことから地形に沿った畦畔をもち、傾斜に即した東から西への水回しが想定される。またSC502の南側に近接して溝状落ち込みがみられる。この部分ではSC507との段差がないものの、これも水口に伴う窪みであると考えられる。幅は南西端でややひろがるが、約15～25cmを測り、深さ約5cmの浅いものである。水口501・503・504・505・509では礫も検出された。

水田層及び水田面の状況：水田層（第4層）は褐灰色粘土層である。約20～30cmの厚さをもつ。水田面には窪みが全域で認められており、砂が埋まっていた。畦畔上には窪みは少ない。人間の足跡として認定できるもの以外にも円形の窪みが認められているが、何であるか特定はできなかった。PL45-8のように窪みの外側に細粒砂、内側に中粒砂が入っているものもみられた。歩行列は不規則であった（PL45-2）。

出土遺物：土器は約900g・42点が出土した。このうち被覆砂層からは9点が検出された。また調査最終段階で、畦畔はほぼすべて解体し、水田層は人力によるトレンチを入れて遺物採集を試みた。その結果、畦畔および水田層（4層）から33点が検出された。すべて破片であるが、弥生土器、須恵器、土師器の他には、12～13世紀の古瀬戸やかかわらけ、青磁、15～16世紀の内耳鍋、近世の伊万里や唐津、瀬戸美濃、在地産の火鉢などがみられる。図示したのは4点である。1は18世紀末～19世紀の伊万里の碗、2は瀬戸美濃の碗、3・4は内耳鍋である。1・2は被覆砂層から検出されたもので、3・4は水田層からの出土である。銭貨は2点出土した。5は被覆砂層から検出されたもので熙寧元寶（初鑄 1068年）、6は畦畔SC503から出土したもので洪武通寶（初鑄 明・1368年）である。

科学分析：⑤区北壁にて土壤分析（珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析）を実施した。本水田のイネ属の植物珪酸体は短細胞珪酸体が約4,100個/g、機動細胞珪酸体は約5,700個/g、穎珪酸体は約200個/gである。

時期：出土遺物から18世紀末～19世紀以降の所産とする。



第142図 ⑤区 水田A 遺物図

(3) 第2調査面

ア. 水田跡

水田B [第143・144図 PL47・48]

調査の経過：調査区の四周に排水用を兼ねたトレンチを掘削し、土層観察を行った結果、砂層に覆われた水田3面があることが明らかとなった。本跡はその第2面目の水田である。なお、層的にも出土遺物からみた比定年代からも、③区・④区でみられるいずれの水田面とも対比できないものである。

被覆砂層の堆積状況：砂層は第6層および第7層の2層に分けられた(第138図)。第6層は約16～40cmの厚さのしまりの強い灰黄褐色砂層である。第7層は約10cmの厚さの灰黄褐色砂層で、第6層よりも粒子が細かい。第7層は、第138図-土層5の断面にみられる畦畔に直接堆積するもので、この地点以外では認められなかった。第6層はSC517より北側には堆積していない。また第144図セクションC付近より南側では水田Bは削平されている。同じく断面C-①をみると水田Bを削平する砂層を切って第6層が堆積していることが理解できる。南北方向に2本のトレンチを入れたが、外周トレンチと同じ砂層の堆積であった。第6層は南で厚く、北では薄くなり、SC520以北の北壁では砂層(第6層)が認められていない。

水田の検出状況：砂層(第6・7層)中位までを重機で剥いだ後、人力で砂層を掘り下げた。第8層上面において畦畔の高まりおよび砂層が落ち込む凹みが検出されたため、水田面として認定した。

水田の構造：南北方向に6条の、東西方向に6条の畦畔が検出された。またSL66は北側のSL62、SL63より高い段差をもっている。高まりはみられず、本来は畦畔が存在していたが、洪水砂により削平された可能性が高い。水田区画がわかるのは、SL62、SL63である。区画の規模はさまざまであり、SL62は東西3～3.5m、南北12m程度の規模を、SL63は東西15m、南北4～11mの規模を測る。またSL65も東側の大半が調査区外にあたるが、残された部分から東西約17m、南北約14mを測るものと想定できる。

SC511は、上端幅約20～35cm、下端幅約40～65cmを測る。北側の一部には深さ約5cmの溝もあわせもつ。畦畔の高まりは、北側SL64の水田面とは約10～20cm、南側SL63の水田面とは約5～10cmの高低差があり、北側SL64が低くなる。

SC512は、上端幅約30～40cm、下端幅約60～65cmを測る。畦畔の高まりは、東側SL62の水田面とは8cm程度、西側SL61の水田面とは約10cmの高低差があり、若干ではあるが西が低くなる。

SC513は、上端幅約15～40cm、下端幅約35～70cmを測る。畦畔の高まりは、西側SL62の水田面とは約15～20cm、東側SL63の水田面とは約5～10cmの高低差があり、西に低くなる。

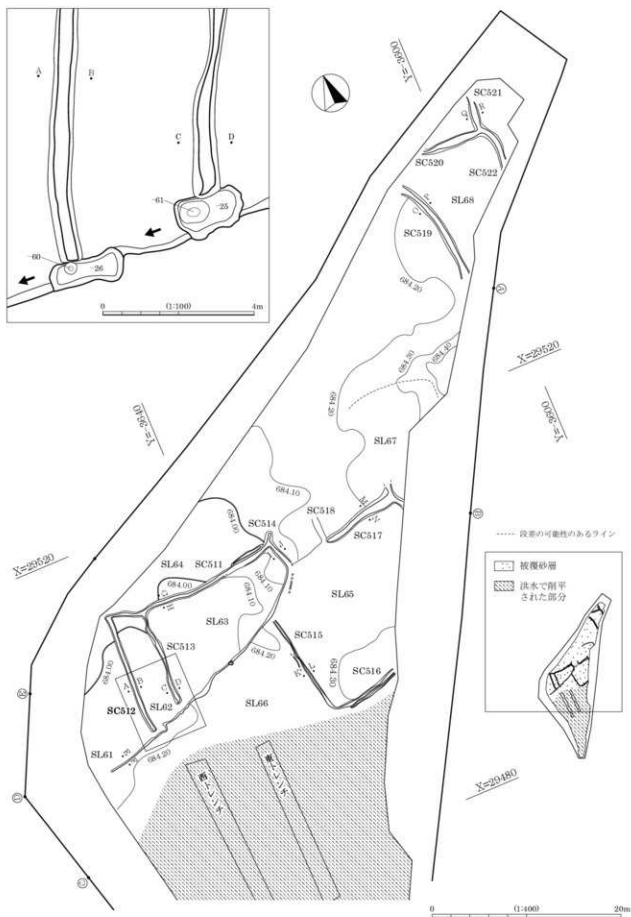
SC514は、上端幅約30～45cm、下端幅約70～75cmを測る。畦畔の高まりは西側SL63の水田面とは約5cm、東側水田面とは約10cmである。

SC515は、上端幅約10～20cm、下端幅約15～40cmを測る。畦畔の高まりは、東側SL65の水田面とは約3cm、西側水田面とは5cmであり、やや西側に低い。また西側には一部だが深さ4cmの溝状落ち込みの痕跡が認められた。

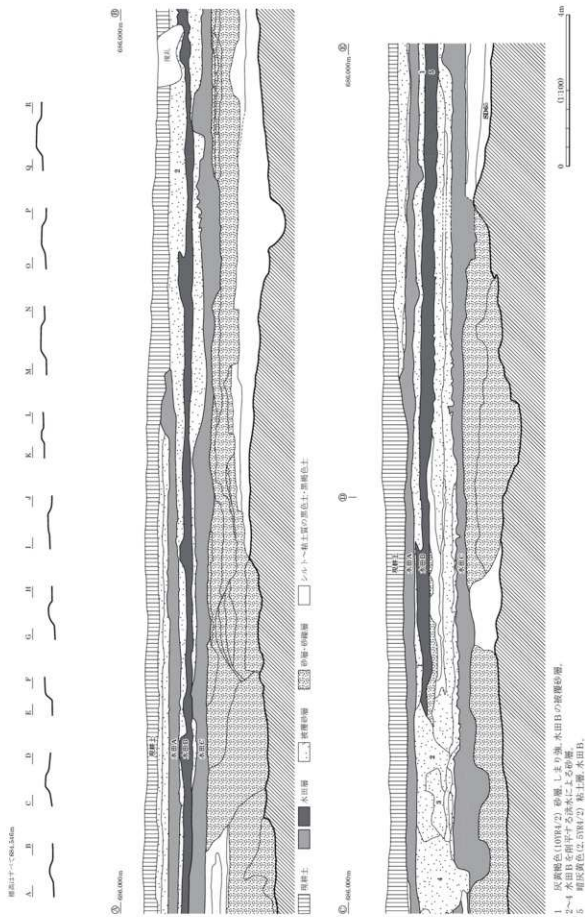
SC516は、上端幅約10～40cm、下端幅約35～60cmを測る。南側には深さ5cm程の溝を持つ。畦畔の高まりは、北側SL65の水田面とは約10cm、南側水田面とは約3cmと北側にやや低い。またSC516の南側に近接して深さ約5cmの溝状落ち込みがみられる。

SC517は、上端幅約50～100cm、下端幅約90～160cmを測る。畦畔の高まりは北側水田面と約5～15cm、南側SL65の水田面と約3～12cmであり、北に低い。

SC518は畦畔の高まりは失っていたが幅約70cmの帯状に土色・土質を異にする部分を検出し、これを畦畔と認識した。



第143図 ⑤区 第2調査面 (水田B) 遺構図 (1)



第144図 ⑤区 水田B 遺構図 (2)

SC519は、上端幅約40～70cm、下端幅約70～100cmを測る。畦畔の高まりは東側SL68の水田面とは約10cm、西側SK67の水田面とは約5～10cmで、ほぼ同レベルであるがやや西に低い。

SC520は、上端幅約40～80cm、下端幅約80～110cmを測る。畦畔の高まりは、北側水田面と約10～15cm、南側SL68の水田面とは約15～20cmであり、南に低くなっている。SC521は、上端幅約50～80cm、下端幅約90～100cmを測る。畦畔の高まりは、東側水田面と約5～10cm、西側SL68の水田面とは約10～15cmであり、西に低い。SC522は、上端幅約45～55cm、下端幅約70～100cmを測る。畦畔の高まりは東側水田面と約10～15cm、西側SL68の水田面とは約15～20cmであり、西に低い。

水田の範囲：調査区の南半部は、洪水砂層により水田Bの水田層は削平されているため、水田がどこまで広がっていたかは不明である。

水口：畦畔が途切れる水口は、SC512とSC513でそれぞれ1カ所が検出された。いずれも深さ約25cmの窪みがみられる。ともに最深部では約60cmの箇所も有する。傾斜に即した東から西への水回しを行う

水田層および水田面の状況：水田層（第8層）は暗灰黄色粘土層である。約40～50cmの厚さをもつ。第138図-土層1付近では、第8層中に約10cmの厚さの砂層（第9層）が帯状にみられる部分があり、この砂層も水田層の一部であることがわかる。水田面には窪みが全域で認められており、砂に埋まっていた。畦畔上には窪みは少ない。人間の足跡として認定できるもの他にも、円形の窪みも多くみられたが、何であるかの特定はできなかった。

出土遺物：出土した遺物は3点にすぎない。被覆砂層からは弥生土器片1点と平安時代の須恵器片が1点検出された。調査最終段階で、畦畔は解体し、水田層は人力によるトレンチを入れて遺物採集を試みたが、水田層から弥生土器片1点が出土したにすぎない。いずれも図示できるものではなかった。

科学分析：⑤区北壁にて土壌分析（珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析）を実施した。その結果概要は第6章を参照していただきたいが、本水田面のイネ属の植物珪酸体は概して少なく、短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体は約1,700個/gである。調査区の南半部は洪水砂で削平されていたことからその影響があるのかもしれない。

時期：出土した須恵器片から、水田Cの9世紀頃を上限とし、18世紀末から19世紀以降に比定する水田Aの時期を下限と位置づける。

(4) 第3調査面

ア. 水田跡

水田C [第145～150図 PL49～51・68・87]

調査の経過：水田Aの項でも記したとおり、調査区の四周に排水用を兼ねたトレンチを掘削し、土層観察を行った結果、砂層に覆われた水田3面があることが明らかとなった。本跡はその第3面目の水田である。なお、層位的にも出土遺物から、③区・④区で見られる第2水田に対比できる。

被覆砂層の堆積状況：砂層は調査区ほぼ全域に堆積するが、東壁③-④および西壁⑤-⑥では水田層が大きく削平されていることがわかる。砂層は基本第138図にみるところで第10～14層の5つに分けられた。第10層は約10～35cmの厚さの黄褐色砂層である。第11層は約15cmの厚さの黒褐色砂層のハナドロである。第12は約10～20cmの厚さの暗褐色砂層、第13層は約10～30cmの黒褐色砂層、第14層は約5～10cmの厚さの褐色砂層のハナドロである。地点により砂層の堆積は異なり、第138図の土層1・6では第10層が直接被覆し、他の砂層の堆積はみられない。一方、土層2・3ではハナドロの第14層が被覆する。ハナドロの上層には土層2では第12・13層が、土層3では第10層がそれぞれ堆積している。土層4は洪水砂により水田層が大きく削平される地点である。

水田の検出状況：砂層中位までを重機で剥いだ後、人力で砂層を掘り下げた。第15層上面において畦畔の高まりおよび砂層が落ち込む凹みが検出されたため、水田面として認定した。

水田の構造：東西に走る SC535 が大畦畔と考えられる。西側に洪水による削平を受けているが、上端検出幅約 40cm 以上、下端検出幅約 80 ～ 150cm 以上を測る。畦畔の高まりは、約 20cm であり、南北の比高差はほとんどみられない。本畦畔の検出段階で木製品が 2 点検出された（第 150 図-5・6）。畦畔をやや掘りすぎたことにより検出されたものであるため、本来は畦畔内に埋め込んだ芯材であると想定できる。また解体作業により、本畦畔断面には砂層もみられることが判明した（PL51-2・3）。この砂層は本跡以前の水田面の被覆砂層と判断でき、この洪水砂を取り除かずには本畦畔を造ったことが理解できる。また畦畔の南側には砂層が帯状に走っている。調査段階では水田 C を壊す洪水砂ととらえ、覆乱扱いとしていたが、整理段階で本来は大畦畔 SC535 に伴う水路であると考えに至った。また大畦畔 SC535 のみならず、その両側の水田面も 20cm ほど削平されている部分が広範囲にみられ、相当な規模の洪水に見舞われたことがうかがえる。

SC531 は、上端幅約 90 ～ 180cm、下端幅約 140 ～ 250cm を測る。畦畔の高まりは北側 SL70 の水田面と約 20cm、南側 SL71 の水田面とは約 30cm の比高差があり、畦畔を境にして南側に低い。SC532 は、上端幅約 40 ～ 90cm、下端幅約 70 ～ 110cm を測る。畦畔の高まりは数 cm 程度であり、北側部分ではその高まりも失っている。東西畦畔 SC533 は、上端幅約 20 ～ 40cm、下端幅約 40 ～ 60cm を測る。畦畔の高まりは北側 SL71 の水田面と数 cm、南側 SL74 の水田面とは約 15cm の比高差があり、南に低い。

東西畦畔 SC534 は、上端幅約 20 ～ 30cm、下端幅約 50 ～ 60cm を測る。畦畔の高まりは数 cm 程度であり、北側 SL72 と南側 SL74 との比高差はほとんどみられなかった。SC536 は、上端幅約 200 ～ 400cm、下端幅約 250 ～ 550cm を測る。かなり洪水砂の削平を受けている。畦畔上には幅約 1m、深さ約 10 ～ 30cm の溝状落ち込みが途切れながらもみられ、水路であった可能性もある。畦畔の高まりは北側水田面と約 10 cm、南側水田面とは 20cm であり、畦畔を境として段差をもち、南に低くなる。

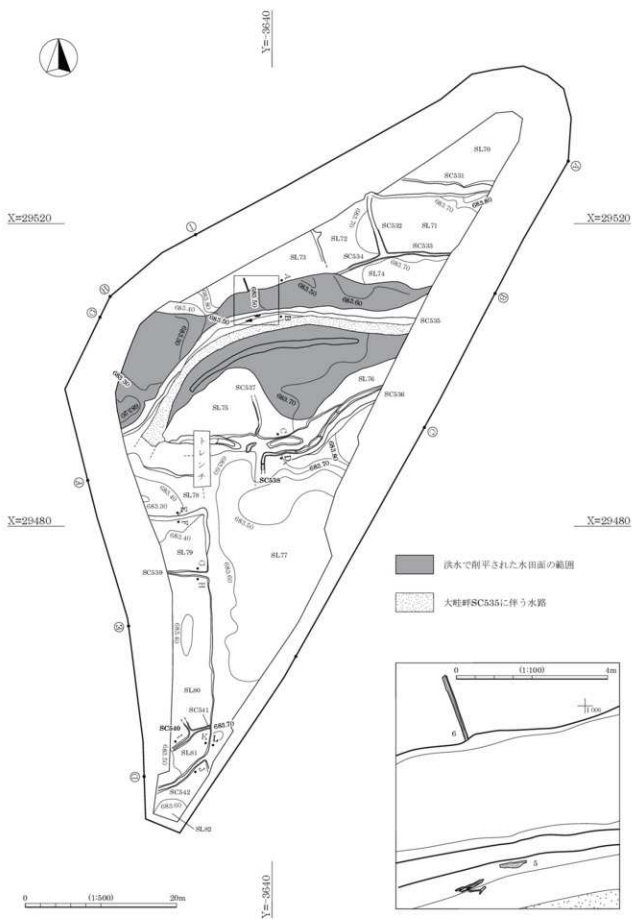
SC537 と SC538 は SC536 から南北へ走る畦畔である。SC537 は、上端幅約 20cm、下端幅約 40cm を測る。畦畔の高まりは最大でも数 cm で、北へ向かうに従い畦畔の高まりは失う。溝を伴う SC538 高まりはほとんどなく、溝を含めて約 110cm の下端幅が検出されたにとどまる。溝は SC537 から続き、幅約 45cm、深さ約 25cm を測るものである。

東西畦畔 SC539 は、上端幅約 20 ～ 50cm、下端幅約 45 ～ 85cm を測る。畦畔の高まりは北側 SL79 の水田面と数 cm、南側 SL80 の水田面とは約 15cm で、畦畔を境にして南側に低くなる段差をもつ。SC540 は、検出長約 1m の南北畦畔であり、上端幅約 20cm、下端幅約 50cm を測る。畦畔の高まりは数 cm と低く、北側では検出できなかった。畦畔を境にした段差はなく、ほぼ同レベルであった。SC541 は東西畦畔であり、上端幅約 20 ～ 30cm、下端幅約 40 ～ 60cm を測る。畦畔の高まりは北側 SL80 の水田面と 5 ～ 10cm、南側 SL81 の水田面とは 2 ～ 5cm と比高差があり、若干北へ低くなる。SC542 は、上端幅約 30 ～ 45cm、下端幅約 60 ～ 80cm を測る。畦畔の高まりは北側 SL81 の水田面と約 15cm、南側 SL82 の水田面とは約 5 ～ 10cm の比高差があり、北へ低くなる。

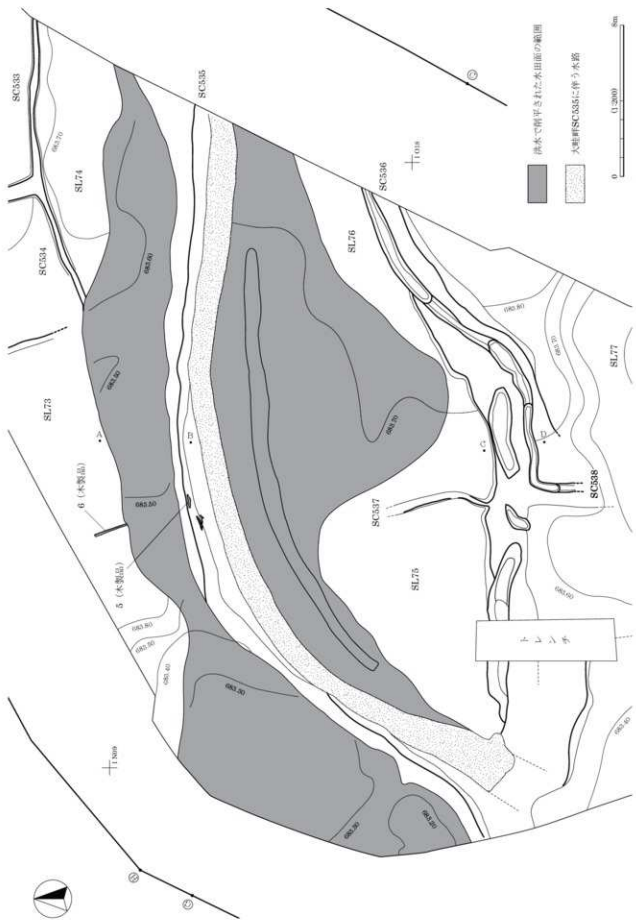
水田の範囲：調査区全域にみられるが、洪水砂による削平が著しい。

水口：認められなかった。

水田層及び水田面の状況：水田層（第 16 層）は黒色粘土層である。約 20 ～ 60cm の厚さをもつ。水田面は前述のとおり洪水砂で削平された部分が少なくない。また水田面には窪みが全域で認められており、砂で埋められていた。畦畔上には窪みは少ない。PL51-7 のようにつま先の指の形状がわかる人間の足跡、PL51-6 のようにひずめの形状がわかる牛の足跡もみられた。いずれも足跡の外側には細粒砂、内側には



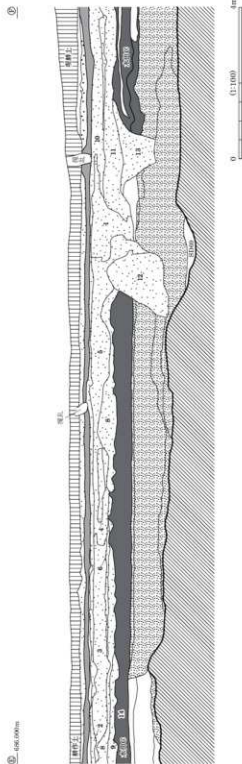
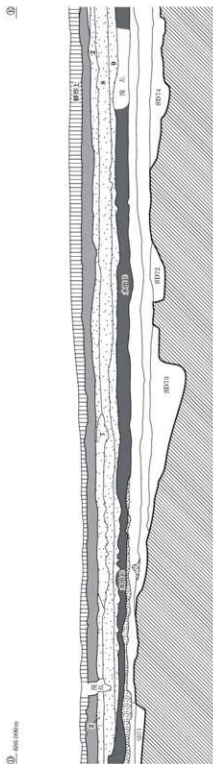
第145図 ⑤区 第3調査面(水田C)遺構図(1)



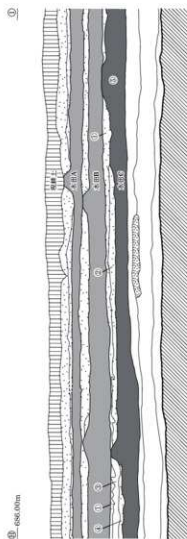
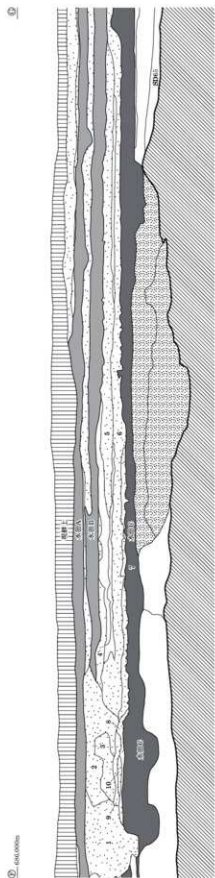
第146図 ⑤区 水田C 遺構図(2)

- 1 赤土・白土の粗い砂層。
- 2 赤褐色土(1018/1)を含む赤褐色土(1018/2)の層。5cmのバネを含まず、非常にしよりの良い砂層。
- 3 6~8cm厚の層を含む砂層。
- 4 6~10cm厚のバネ・ス・礫を含む砂層。
- 5 赤土の粗い砂層。
- 6 6~10cm厚の層を含む砂層。
- 7 赤褐色土(1018/3)の層を含む砂層。赤褐色土(1018/3)の層に細かく均一な細砂層。常に細かく均一な細砂層。
- 8 赤褐色土(1018/1)の砂層(ハ下D)。
- 9 赤褐色土(1018/1)の砂層(ハ下D)。
- 10 土質の強い砂層。
- 14 赤土(1018/2)・粘土・水田C。

- 赤褐色土
- 水田層
- 赤褐色砂層
- 砂層・砂礫層
- 赤土・粘土質の赤褐色土・赤褐色土
- 礫山 (灰層1層石礫)



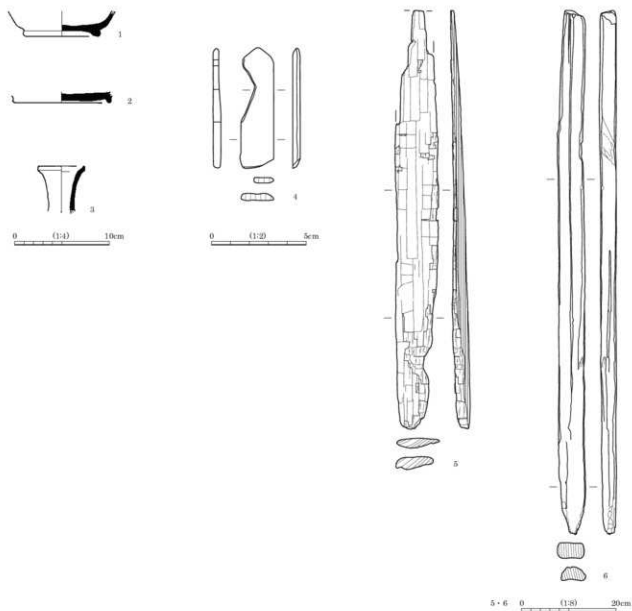
第148図 ⑤区 水田C 遺構図(4)



- ①-⑧
- 1~6 水田Cを覆う、もしくは水田Bも含めて閉する砂層、
 - 7 水田C
- ⑨-⑪
- ① におい、黄褐色(10YR4/3) 砂層、粘土層が、
 - ② 黄褐色(10YR5/1) 砂層(ハナドワ)、
 - ③ 黄褐色(10YR3/2) 砂層(ハナドワ)、
 - ④ 黄褐色(10YR3/3) 砂層、6~1m位の硬さを含む、
 - ⑤ 黄褐色(10YR2/1) 粘土、水田C、

- ⑥ ⑦-⑧ 水田Cを覆う砂層。
- ⑨ 黄緑土
- ⑩ 水田層
- ⑪ 試掘砂層
- ⑫ 砂層-砂層層
- ⑬ シルト(灰田層1層形成)
- ⑭ 畑山(灰田層1層形成)

第149図 ⑤区 水田C 遺構図 (5)

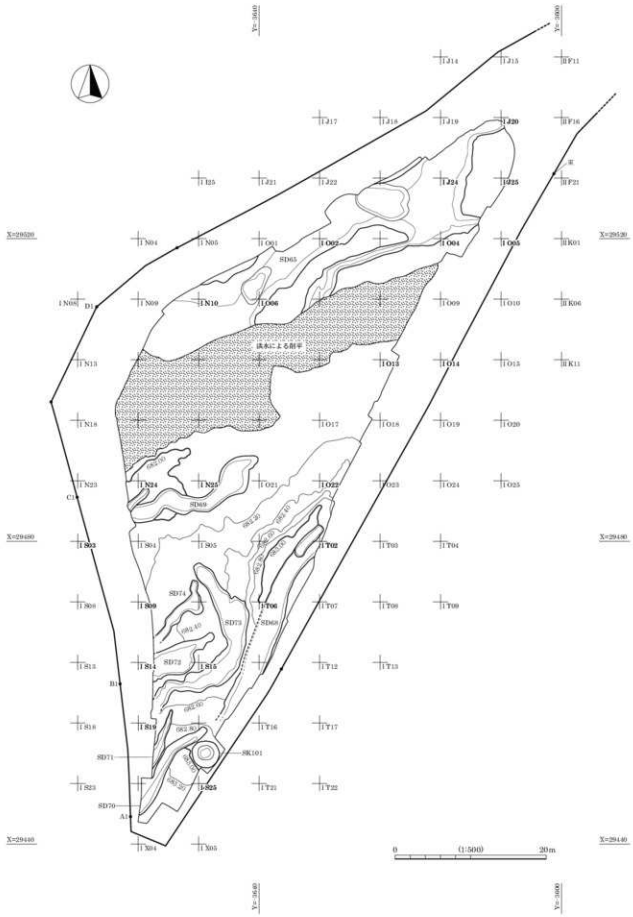


第150図 ⑤区 水田C 遺物図

中粒砂が入っていることがわかる。他にも円形の窪みも多く認められた。

出土遺物：土器は21点が出土したにすぎない。被覆砂層からは弥生土器片11点と平安時代の須恵器・土師器8点、灰釉陶器片1点が検出された。調査最終段階で、畦畔はほぼすべて解体し、水田層は人力によるトレンチを入れて遺物採集を試みたが平安時代の土師器片が1点出土したのみである。この他に北壁を精査中に水田C層から検出された平安時代の須恵器1点がある。図示したのは3点である。1は北壁の当該水田層から出土した須恵器坏、2は被覆砂層から出土した須恵器坏、3も被覆砂層からの検出で長頸壺である。木製品は3点を掲載した。4は水田層から出土したもので、形代の欠損品。馬形など動物形代の可能性がある。樹種はサワラである。5は大畦畔 SC535 に埋め込まれたものである。樹種はサワラで火を受けている。本来は壁材などの建築部材として用いられたものを畦畔の補強に芯材として再利用したと考えられる。6は水田層中から検出されたが、本来は床板などの建築部材として用いられたものである。樹種はサワラである。

科学分析：樹種同定の他、木製品の5を試料に放射性炭素年代測定を実施した。その結果、補正年代は



第151図 ⑤区 第4調査面 遺構配置図

2030±20yrBP、この補正年代に基づく暦年較正結果は calBC48-calAD213 という数値が出された。弥生時代に比定される結果となり、出土遺物からみた年代観と相当な離隔が生じた。水田Cの下層では弥生時代の土坑や溝が検出された第4調査面があり、木製品の出土も多くみられる。この数値を踏まえたひとつの解釈としては、水田Cの畦畔を補強する際に、下層から手に入れた木製品を再利用した可能性があげられよう。また⑤区北壁にて土壌分析（珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析）を実施した。本水田面のイネ属の植物珪酸体は短細胞珪酸体が約2,000個/g前後、機動細胞珪酸体は約6,000個/g前後である。**時期：**図示した1～3の土器から上限を平安時代・9世紀代に位置づけたい。

(5) 第4調査面

ア 溝跡

SD65 [第152～162図 PL35・52・61～64・69・72・79～82]

位置：⑤区、I J18～24・I N04・05・09・10・14・I O01・02・03・04・06・07グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。調査段階ではSD66を別の遺構とみたが、SD65の支流と理解した方がよいため、あわせてSD65として報告する。

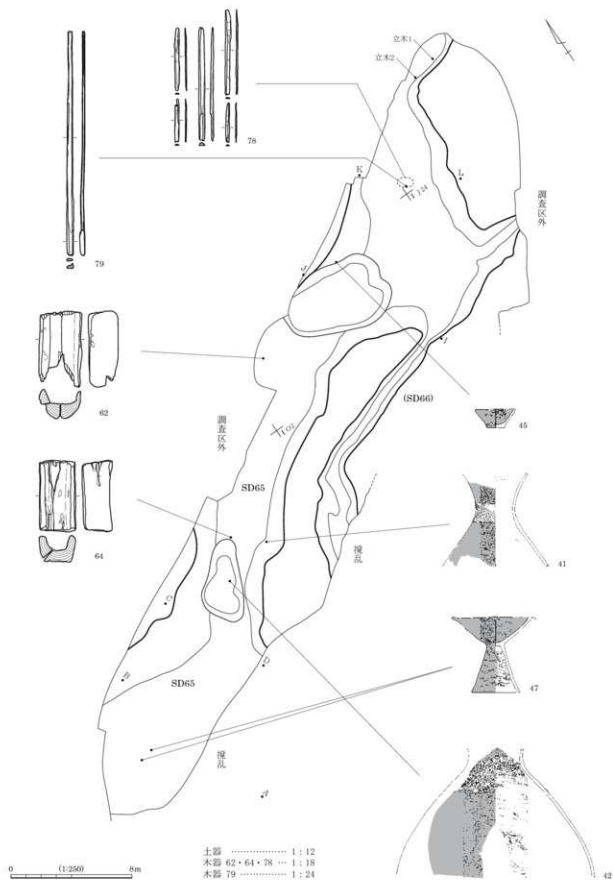
規模・埋土：調査区外にあたる部分が多く、また洪水等による削平も受けているため、全体像は不明だが、判明する箇所での幅は約5～10mを測る。埋土は上部にはシルト・粘質土（第153図第2～4層、第9・11・12層）がみられ、下部に砂層が堆積する。支流的な部分も少なくない。検出面からの深さは約50～140cmである。

出土遺物：遺物量は非常に多く、なかでも土器は約67kgを出土した。興味深いのは、そのうち壺が約34kgと半数以上を占めていることである。また層位でみると、第153図-第8層・15層・19～21層の砂層からの出土が大半を占める。

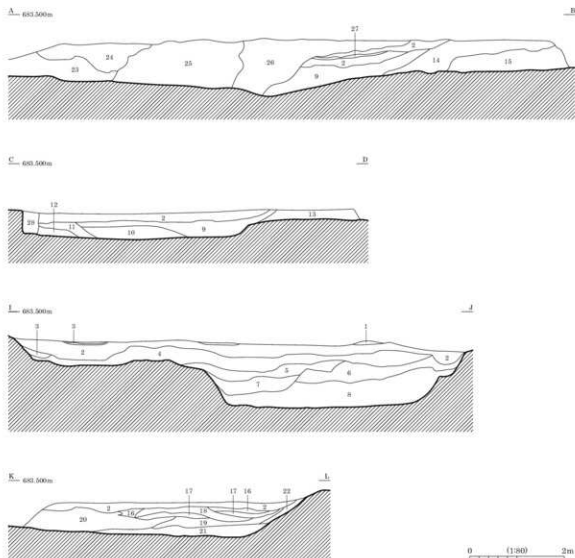
土器は50点を図示した。弥生土器が主体であるが、縄文土器も3点検出されている。1・2は縄文時代後期・堀之内式の土器だが、図示しなかったが同時期の土器片が1点出土している。3～32は甕である。3は頸部に円形浮文を貼付する。4は口縁端部に刻みがいがある。5～7は口縁部と胴部に櫛描波状文、頸部に糜状文を施文する。8は口縁がゆがんでおり、胴部には縦羽状文を施す。9～13は小形の甕であり、11は口縁端部を面取りしている。14～22も口縁部と胴部に櫛描波状文、頸部に糜状文を施文するが、特に口縁部の櫛描波状文は乱れた様相を示す。15は折り返し口縁に波状文を施す。23～25・28・29・33～35は口縁部に櫛描斜線文を施す。25は横羽状文となる。胴部は28を除くと櫛描横羽状文を施文する。29も横羽状文の一種とみるが施文に乱れがある。24は頸部に櫛描糜状文をもたない。26・27・31・32・36は口縁部を欠するが、口縁部と胴部は波状文を施文するものとみられる。37～42は甕であり、すべて赤彩されている。39は口縁部内面も赤彩される。38は頸部に糜状文、胴部上位には波状文を施す。40・41は櫛描横線文で画した頸部に櫛描斜線文を3段に施文する矢羽状文である。41は剥がれているが円形貼付文の貼付が確認できる。42は大形の甕であり、頸部には短い櫛描斜線文を横羽状に組み合わせた綾彩文を巡らす。43～45は内外面ともに赤彩された鉢、46は片口鉢である。47～50は赤彩高坏である。

石器は4点を図示した。51はチャート製の石鎌、52～54は敲石、石材は52が細粒砂岩、53・54が輝石安山岩である。

木製品は36点を図示した。55は鋏身である。クスギ属を用いている。縦方向の片側と柄孔上端部を欠損している。56は鋏柄の一部であるが、55とセットになる可能性が高い。樹種はクスギ属である。55は柄孔が認められるので56のような直柄に装着したことはわかる。一方で柄孔より上部は欠損しているため不明であるが、上に伸びる軸部を有する形態をもつ可能性もある。そうであれば後述するSK101出

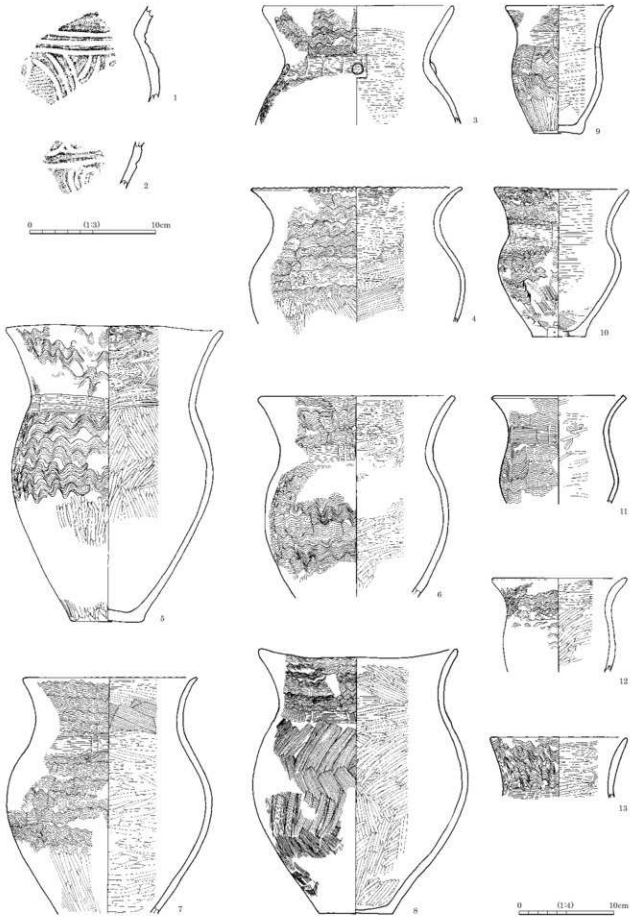


第152図 SD65 遺構図 (1)

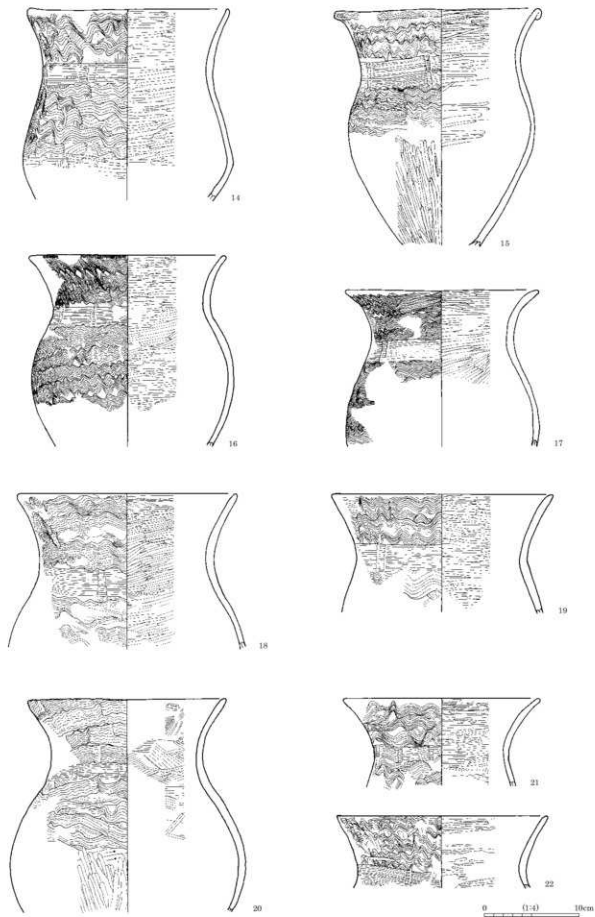


- | | | | | |
|---------------------|--|----------------------------|---------------------------------|-------------|
| 1 にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 砂、粒子やや粗い。 | 12 暗褐色 (10YR3/4) | シルト、細砂混入。 | |
| 2 黒色 (10YR2/1) | 粘質土、しまりあり、ヨシなどを含む。 | 13 褐灰色 (10YR4/1) | 粗砂、しまり強。 | |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 粘質土、しまり強、一部で砂も混入。 | 14 9よりもしまり強、φ2~5cm程のバミス含む。 | 15 上部には、にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細堅砂あり。 | |
| 4 黒褐色 (10YR3/2) | シルト、φ5~10cm程のバミス含む、ヨシなど含む。 | 16 2と比べ粘性弱。 | 17 黒褐色 (10YR3/2) | しまり強、粒子細かい。 |
| 5 黒褐色 (10YR3/1) | シルトと灰黄褐色 (10YR5/2)の粗砂、φ5mm~5cm程のバミス含む。 | 18 黒褐色 (10YR3/1) | 黄褐色粗砂が混入。 | |
| 6 黒褐色 (10YR3/1) | 帯状に灰黄褐色砂が混入、粒子が5より小さい。 | 19 にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 砂、φ1~5cm程のバミス含む。 | |
| 7 灰黄褐色 (10YR5/2) | 5よりバミスが大きい(φ10cm程)。 | 20 黄褐色 (10YR5/6) | φ2~10cm程のバミス含む。 | |
| 8 褐灰色 (10YR5/1) | 黒褐色 (10YR3/1)がわずかに含む、粒子細かい、遺物を多く含む。 | 21 黒褐色 (10YR2/3) | 砂、粒子細かい。 | |
| 9 黒褐色 (10YR3/2) | シルト~粘土質、細砂上部にあり、ヨシなどを含む、φ~1cm程のバミス含む。 | 22 黒色 (10YR2/1) | シルト、しまり弱、粘性あり、φ~10cm程の礫多くあり。 | |
| 10 暗褐色 (10YR3/3) | にぶい黄褐色 (10YR5/4)が混入、細砂。 | 23 黒褐色 (10YR3/1) | 粗砂、しまり弱。 | |
| 11 黒褐色 (10YR3/1) | シルト、しまり強、粒子細かい、細砂混入。 | 24 灰黄褐色 (10YR4/3) | 黄褐色粗砂、φ1~10cmの礫、バミス多し。 | |
| | | 25 黄褐色 (10YR4/2) | 粗砂。 | |
| | | 26 灰黄褐色 (10YR4/2) | 粗砂。 | |
| | | 27 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | シルト。 | |
| | | 28 砂 (φ~10cm程)。 | | |

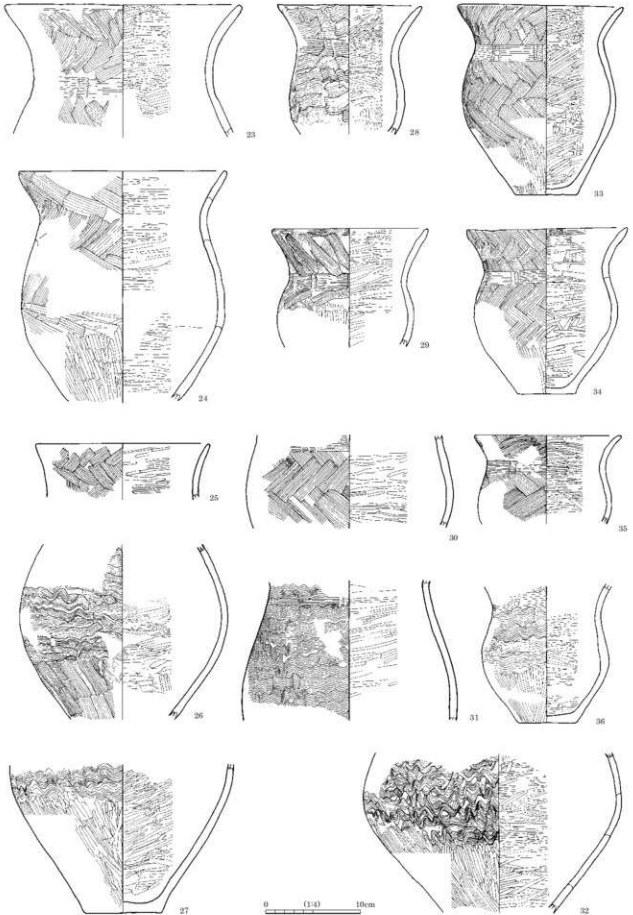
第153図 SD65 遺構図 (2)



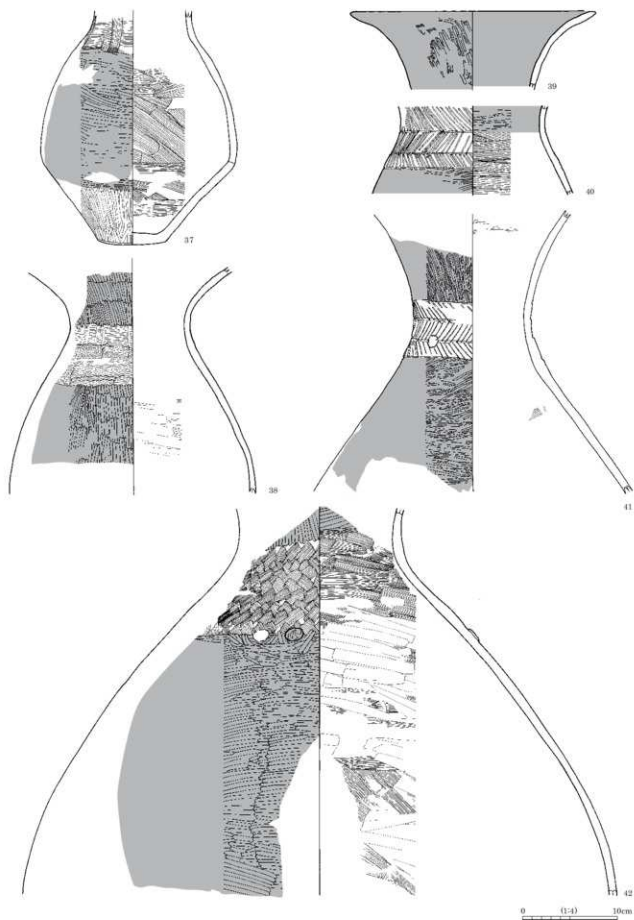
第154図 SD65 遺物図 (1)



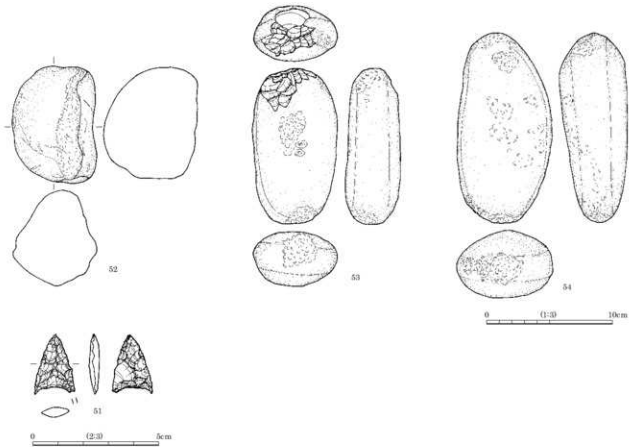
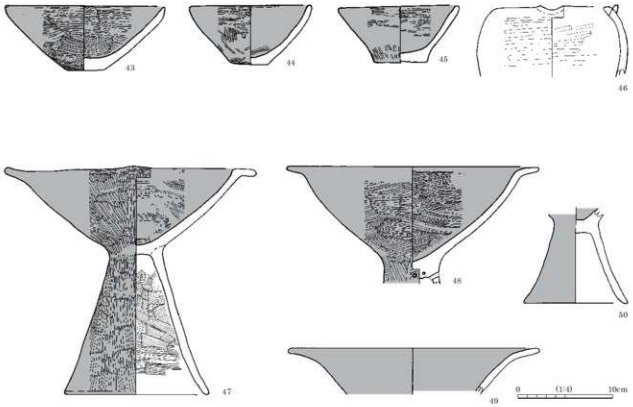
第155図 SD65 遺物図 (2)



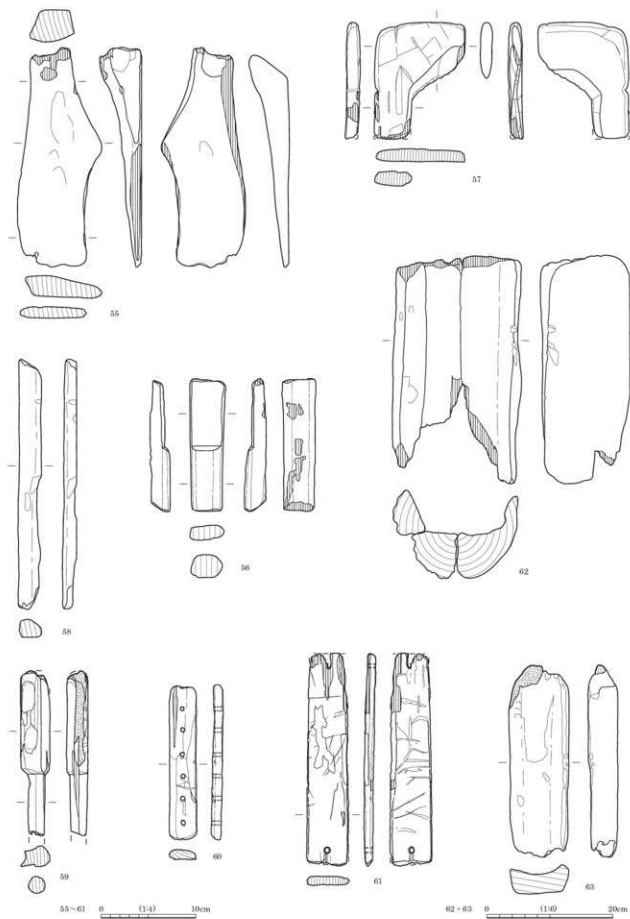
第156図 SD65 遺物図 (3)



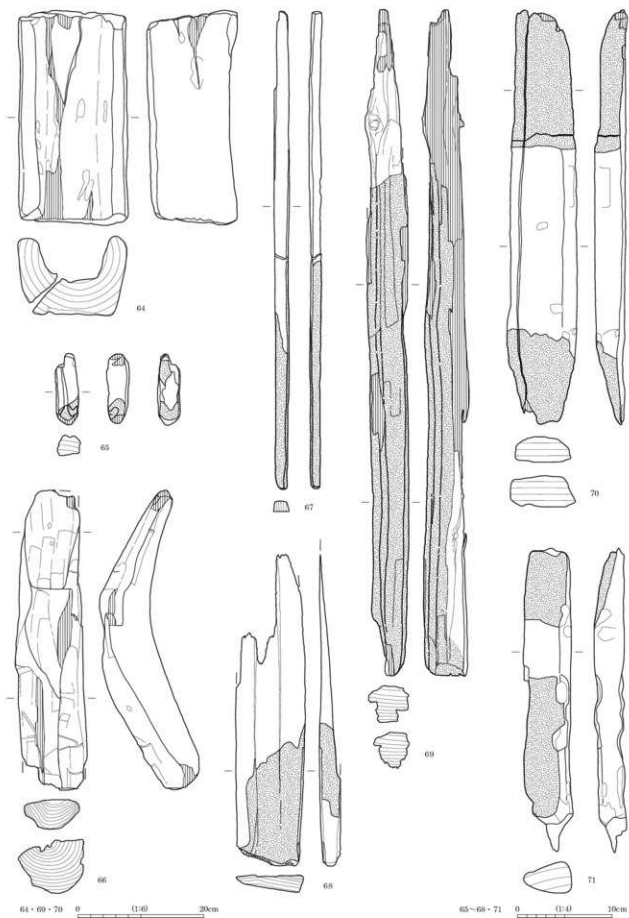
第157図 SD65 遺物図 (4)



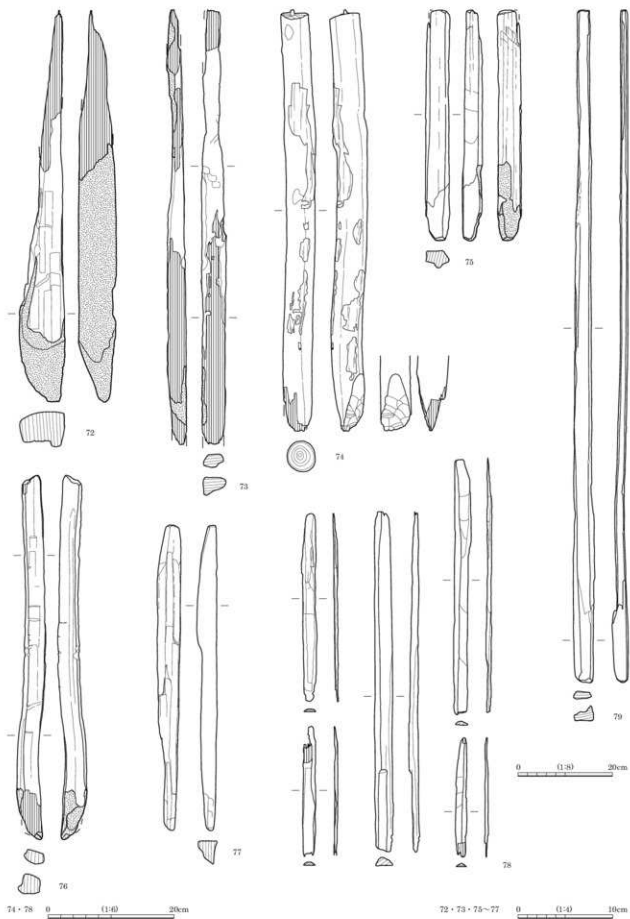
第158図 SD65 遺物図 (5)



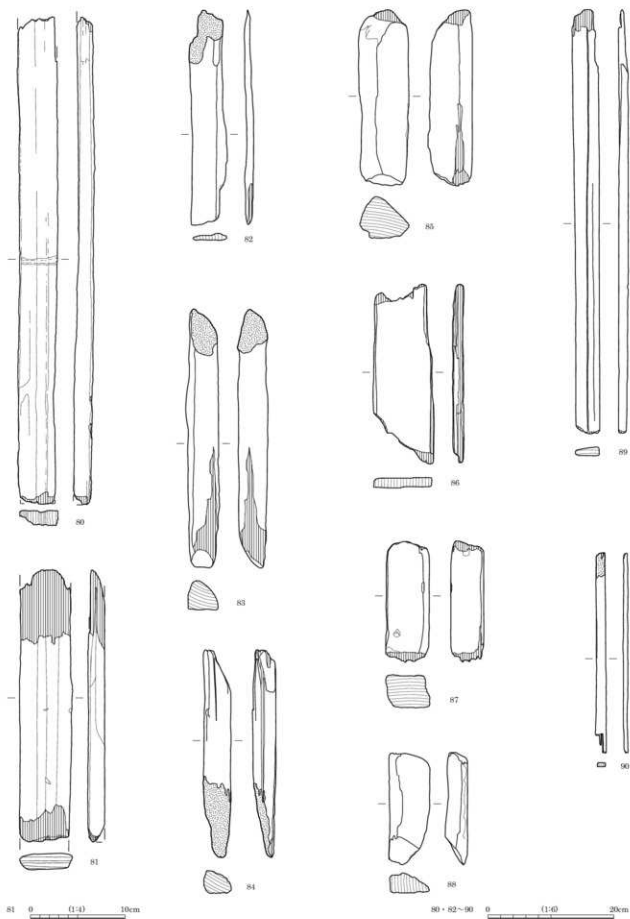
第159図 SD65 遺物図(6)



第160図 SD65 遺物図(7)



第161図 SD65 遺物図 (8)



第162図 SD65 遺物図 (9)

土の鍍身(第167-11)と同様に、手柄にも使用することができるタイプになることも考慮に入れる必要があろう。57はクスギ属の木鎌である。58は両端に穿孔の痕跡があり、を木釘で留める留め具と思われる。59は木釘、茅葺の屋根などを留めるのに使われたものとみられる。60・61は固定するための留め具である。62・63・64は桶である。62・64は桶のジョイント部分として使用されたものであろう。樹種は58～63がいずれもサワラである。64はケヤキを用いている。65～73は建築部材、65・66は屋根材の一部と思われる。樹種は65がコナラ節、66がオニグルミ、67がヒノキ科、68～70がサワラ、71がクリである。70は床板の大引材とみられ、板がのっていない部分は炭化していない。67・71・73・75・76は枿材、68は壁材、69は梁材か桁材、70は床材である。72も建築部材の一部であらう。74は杭、77は何らかの器具であるが欠損しているため製品は不明である。78・79は第152図K-Lセクション西壁付近で検出されたものである。78は角材の削片であり、その一部を図示した。79も図示したものを以外にも削片は多量に出土している(PL82-2・3)。接合はできなかったもののこれらは一連のものであろう。79の母材を削いだのではないかと考えられる。廃棄に伴う儀礼的な作業が行われたのか、あるいは何かしらの製作の場としての性格をもつものなのかは不明である。樹種はタニウツギの74以外はサワラである。80・81は板材であり、80には中央部には楔の圧痕が認められた。82・83・84は炭化しており、建築部材の一部の可能性がある。85・87・88は角材、86は板材、89・90は細い角材である。樹種は同定未実施の81・83・86・89を除くと、85がサクラ属、88がクリ、その他がサワラである。種実もオニグルミなど約170点を検出した。

科学分析:放射性炭素年代測定と土器内に残存した植物遺体の分析を行った。放射性年代測定は2個体の甕(5・18)に付着した炭化物(おこげ)の2試料と木製品のうち62の桶について行った。その結果は以下のとおりである。補正年代は5が $1930 \pm 25\text{yrBP}$ 、18が $1840 \pm 25\text{yrBP}$ をはかり、暦年較正結果は5がcalAD32-calAD12、18がcalAD133-calAD214である。5が紀元1世紀～2世紀前半、18が2世紀前半～3世紀前半にあたる。木製品62の補正年代は $1855 \pm 20\text{yrBP}$ 、これに基づく暦年較正結果はcalAD126-calAD213である。2世紀前半～3世紀前半頃にあたる。材質分析は、5の土器内の残存植物遺体について行い、その結果、裸子植物か双子植物あるいは単子葉植物の茎あるいは根と同定された。また、本跡から検出された立木(オニグルミ)についても放射性年代測定を実施した。 β 線計数法で行ったが、補正測定結果は $2248 \pm 80\text{BP}$ 、暦年較正結果はcalBC394-calBC204である。紀元前4世紀から紀元前3世紀に位置づけられる年代であり、先述した炭化物や木製品よりも古い数値が出ている。

時期:出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

SD68・69・70・71・72・73・74 [第163・164図 PL35・52・65・69・70]

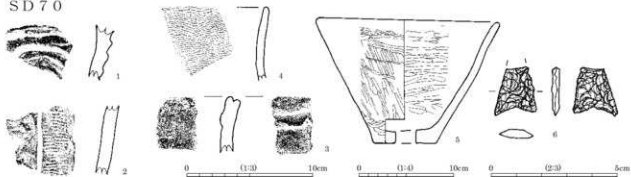
位置:⑤区、I O21・22・I S04・05・09・10・14・15・19・20・24・I T01・02・06・11・I N20・23～25グリッド

検出・重複関係:V層上面にて検出した。SD70がSK101と近接するが重複関係はない。

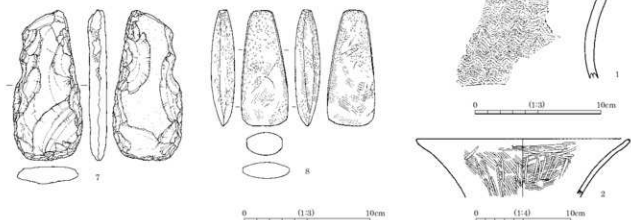
規模・埋土:西側を北東-南西方向に走り、7条とも調査区外へ延びていく。いずれもかなり蛇行しており、そのため幅は約1.3～4mと不均一である。検出面からの深さは約25～50cmを測る。SD68は途切れるため別遺構としたが、SD70につながるものとみられる。埋土は砂層が主体である。こうした平面形態から人為的に掘削した溝跡とは考え難く、自然流路と理解できよう。

出土遺物:SD70からは土器約8,700gが出土した。うち縄文土器は3点が出土した。1は中期末から後期前半、2・3は後期前半に比定できよう。他には弥生時代の土器として4・5を図示した。4は甕口縁の拓影、5は底部穿孔の甎である。石器は3点を図示した。6の黒曜石製の石鎌の欠損品が検出された。7は

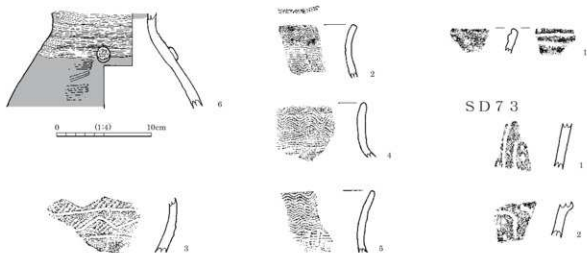
SD 7 0



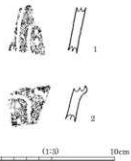
SD 7 1



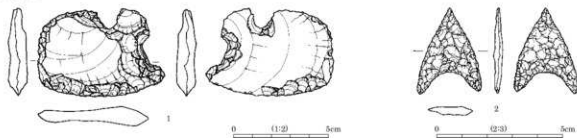
SD 7 2



SD 7 3



SD 7 4



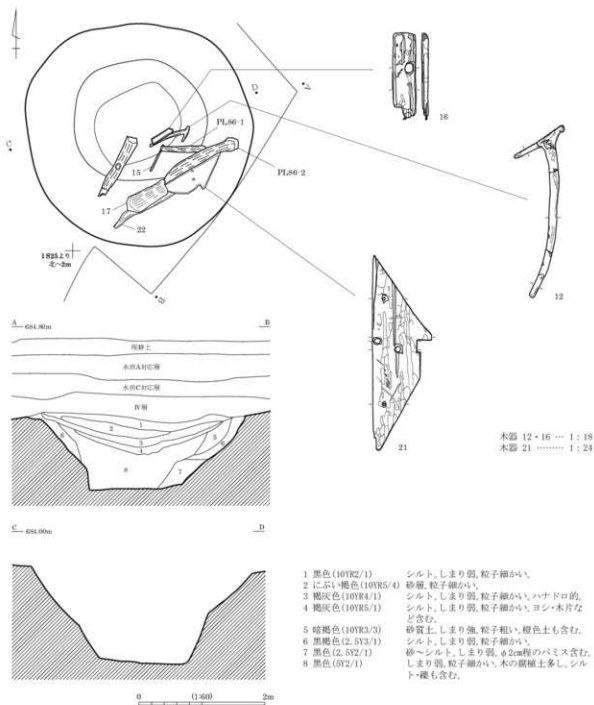
第164图 SD70~74 遺物図

イ 土坑

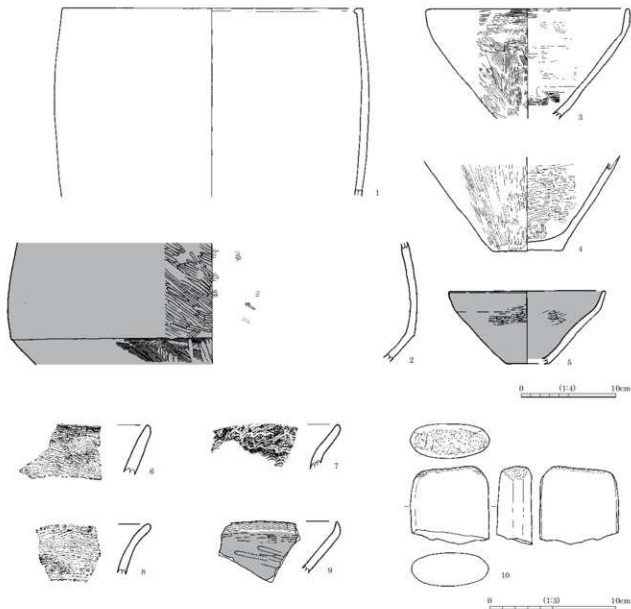
SK101 [第165～171図 PL34・52・72・81・84・85・86]

位置：⑤区、I S19・20 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。SD70と近接するが重複関係はない。北側に広がる低地から南側の微高地へと地形が上がっていくちょうど転換点付近にあたると思われる。



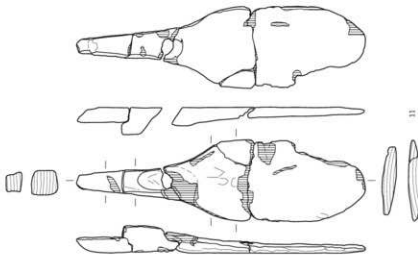
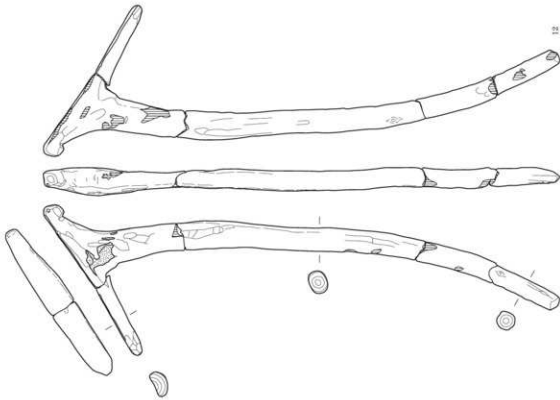
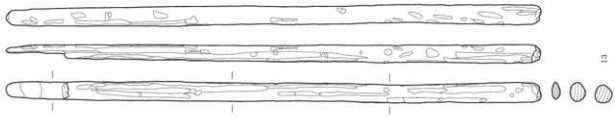
第165図 SK101 遺構図



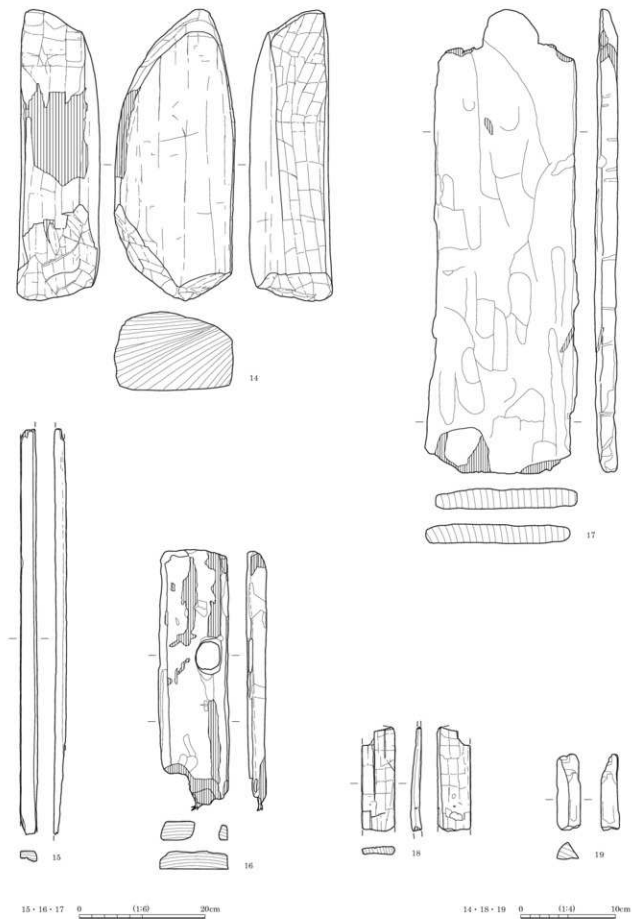
第166図 SK101 遺物図 (1)

規模：3.65 × 3.6mのやや不整な円形を呈する。検出面からの深さは約1.2mを測る。断面形をみると中位で段を有している。覆土は8層に分けられた。第8層は木製品の出土が顕著な層であったが、そのためか木片の腐食土が多く認められた。規模の大きい土坑であり、木製品が製品ばかりではなく、伐採されたのみの未加工木材なども多いことから、木材溜まり・木材の漬置き場ととらえたい。

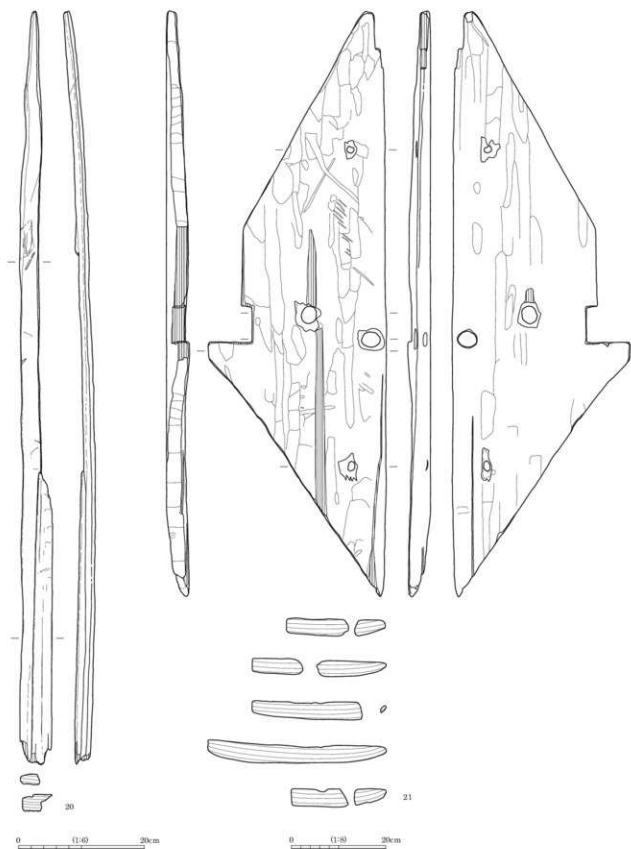
出土遺物：土器は約6,200gが出土し、そのうち約1,800g相当の9点を図示した。1は縄文時代晩期後半の深鉢である。2は赤彩された壺、3は鉢だが外面はかなり粗い調整である。4は壺の底部、5は赤彩鉢である。6～8は甕の口縁部の拓影、9は壺である。石器は1点を掲載した。10は砂岩製の砥石である。木製品は31点を図示した。11は鍬身、12・13は鍬柄である。11の鍬身は非常に特徴があるものである。上へのびた着柄軸があるため、頭部が屈曲した曲柄に緊縛することができるが、同時に柄孔もみられるため、直柄に装着することもできる。両方の使い方ができるという非常に珍しい鍬身である。樹種はクスギ属である。それに対応する曲柄・膝柄の12と直柄の13がともに相伴している。いずれも完形品である。



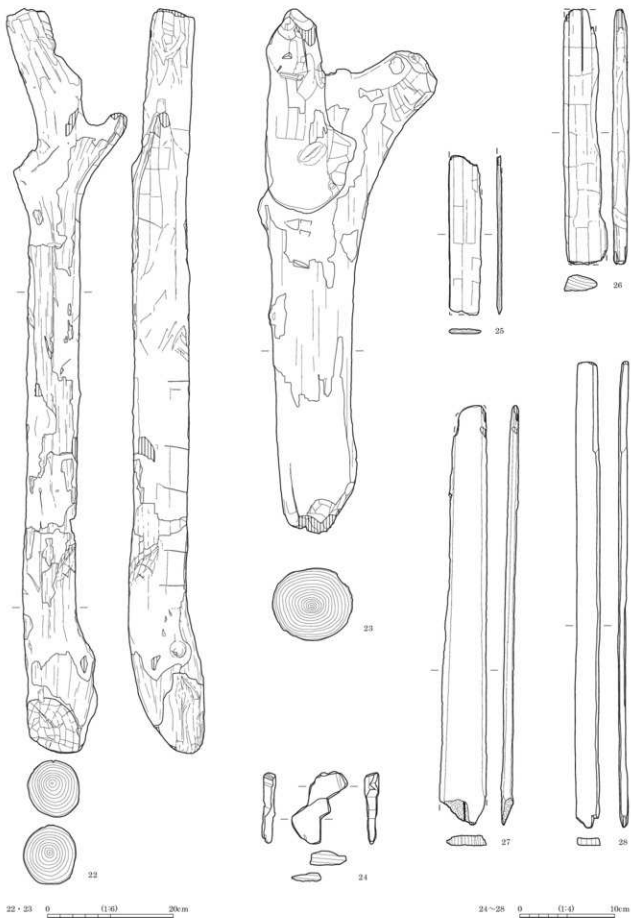
第167図 SK101 遺物図(2)



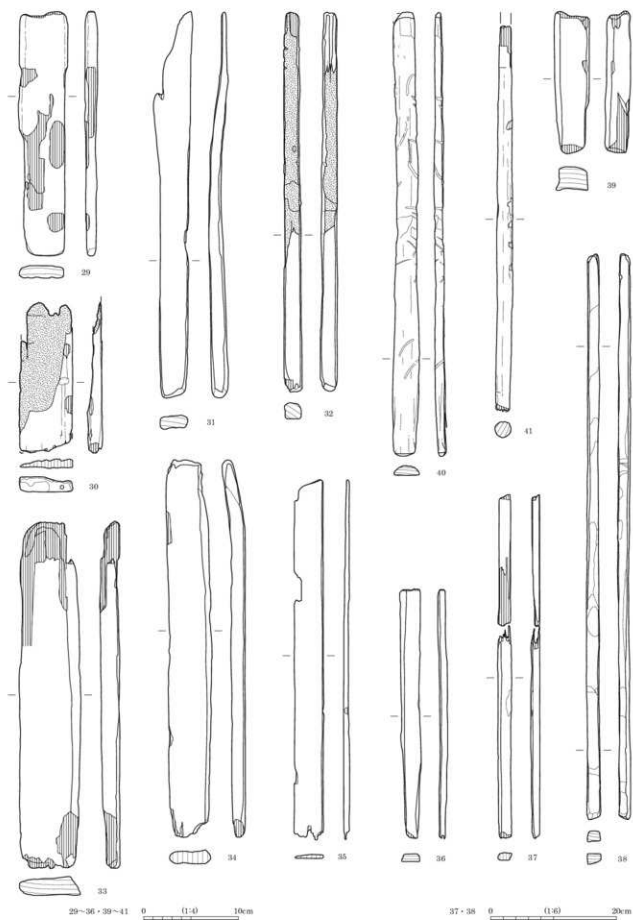
第168图 SK101 遺物图 (3)



第169図 SK101 遺物図(4)



第170图 SK101 遺物图 (5)



第171図 SK101 遺物図 (6)

12は曲柄のなかでも膝柄であり、平坦な装着面を作り、鉾台上端面と上の紐掛けは丁寧に形成しているが、下の紐掛けは明瞭ではない。13は柄の頭部に切り込みを入れて段差を作っている。樹種は12がニガキ、13がサワラである。14は芯去分割材を用いたコナラ節の大形の角材である。おそらく鉾・鋤類を製作した後に残った端材ではないかと推測される。15は棧材、16は扉で、穿孔があるがこれは扉の穴か軸受けと考えられる。ともに樹種はサワラである。17はケンボナン属の壁板か床板である。18・19は不明製品だが、19は楔の可能性もある。樹種は18がクスギ属で、19がヤマグワである。20はサワラの敷居か鴨居とみられ、段差も形成されている。21は切妻形破風板である。上端の一部が欠損している。表面はちょうど削っている。穿孔が4箇所認められるが、これは縄を通して固定するためのものと考えられる。また下端が薄く加工されているのは下部の材と接ぐためであろう。ひぶくら接ぎの可能性もある。樹種はサワラである。22はヤマグワの芯持丸木を用いた施設部材である。柵列などに使用されたか。下端と枝分かれの部分に加工痕がみられた。23もヤマグワの芯持丸木で石斧による伐採痕がある。製品として使用されたものとは考え難く、生活域の邪魔な木を伐採したものであろうか。24は加工の痕跡はあるが何の製品であるかは不明である。樹種はオニグルミである。25・26・27は板材である。25・26は表面を成形してある。いずれも樹種はサワラである。28～36は板材、37・38・39は角材である。40・41は棒状品である。樹種は33が同定未実施、39がモミ属である以外はサワラである。その他、写真(PL86-1・2)のみを掲載する2点も出土している。PL86-1は埋没時に一部が変形している。伐採痕は石斧によるもの可能性がある。PL86-2も伐採部および枝別れ部に石斧による痕跡がみられる。

科学分析：木製品の樹種同定および放射性炭素年代測定を行った。樹種同定は32点、放射性炭素年代測定はこのうちの3点について実施した。補正年代は芯持加工材23が $1,870 \pm 20$ yrBP、12が膝柄 $1,875 \pm 20$ yrBP、破風板21が $2,140 \pm \text{yrBP}$ であり、これに基づく暦年較正結果は23がcalAD84-calAD209、12がcalAD80-calAD207、21がcalBC338-calBC118の数値となる。つまり23・12が紀元1世紀後半～3世紀初頭頃、21が紀元前4～紀元前2世紀頃を示す。この数値の差異は23・12は芯持材であるため、最外年輪およびそれに近い箇所を測定対象にすることができたのに対し、21は板状の分割材の心材部を利用したものであるため、木製品に確認できる範囲での最外年輪の年代を示すと判断され、実際の伐採年代よりも古い年代を示すと考えられるとの所見を得ている。

時期：出土土器および放射性炭素年代測定の結果から、弥生時代後期に位置づけられる。

(6) 遺構外出土の遺物

⑤区の遺構外出土の土器は約4,300gをはかる。その大半は弥生土器であり、うち平安時代の土器は約140gが出土した。近世土器は、16世紀前半の青花(PL68-19)の他、瀬戸美濃の灰釉陶器や火鉢と思われるものなど5点が出土した。

5. ⑥区・⑦区

(1) 層序と調査面 [第172図]

⑥区は、流れ山残丘、微高地、低地と3つの地形に分かれる。そのため層序も①～⑤区とは大きく異なる。微高地では、現耕土の下に黒褐色土（A層・B層）がみられ、このうち上位層（A層）では遺物を包含する。その下層には漸移層（C層）をはさんで、浅間軽石流の堆積物が地山となっている。流れ山残丘では現耕土の直下はすぐに流れ山を形成する塚原泥流が地山となる。流れ山の西側にはシルト層や砂層など（第2～8層）が堆積する低地が広がっている。

基本土層と対比すると、第1層の現耕土はI層に、地山の軽石流堆積物がV層となる。また流れ山の塚原泥流はVI層とする。他の層は基本土層との対比が難しいため、それぞれ、A層～E層として区別しておきたい。

A～C層は⑥-1区にみられる土層である。

A層は黒褐色シルトであり、φ1～2cmのバミスを多く含む。遺物も多く包含する。

B層は黒褐色シルトであり、バミスを少量含む。

C層は黒色シルトであり、しまりが強い。漸移層である。

低地ではI層の下はシルト層や砂層を主体とする低地堆積土になっている。堆積はかなり深く2mほど掘り下げてでも底面は認められなかった。

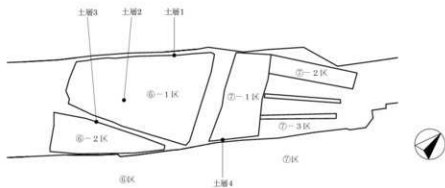
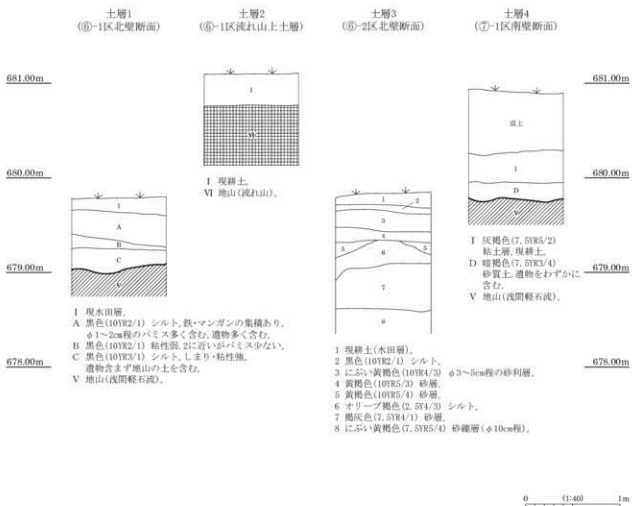
D層は⑦区にみられる土層であり、暗褐色砂質土で遺物をわずかに含むものである。

遺構確認は、低地堆積土のなかで1面（第1調査面・第174図E-F断面の第2層中で検出）、流れ山及び浅間軽石流の地山上面にて1面（第2調査面）の計2面で行った。第1調査面では弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居跡などの遺構と古代以降の遺物が出土する低地が検出された。土層3地点で見ると第2層以下は薄いシルト層をはさみながら幾層もの砂層が堆積しており、流水が激しかったことがうかがわれる。

⑦区は、盛土で覆われた現耕土の下には遺物をわずかに含む暗褐色土（D層）がみられ、地山の浅間軽石流堆積物上面を遺構確認面としたが、遺構は全く検出されなかった。



⑥-1区 A層 遺物出土状況 (VH06 グリッド)



第172図 ⑥・⑦区の層序

(2) 第1調査面

ア 溝跡

SD52・SD53 [第173・174図 PL36]

位置：⑥-2区、V L20・25・V M・16・17・21・22・V R01グリッド

検出・重複関係：⑥-2区での表土剥ぎは東側から進めていった。地山上面までを重機により剥ぎ取っていくと、西側で急に地山が落ち込んでいくことが理解できた。この段階で、この黒色～黒褐色を呈する低地堆積土をやや深めに剥いだところで、砂層を掘り抜いてしまったことに気がついた。この段階で重機による剥ぎを中断し、周辺も含めて精査すると、砂層を埋土にもつ溝跡が面的に迫ることがわかった。急速、土層壁を設定・観察した結果、断面E-Fの第3層から掘り込む遺構であることを確認した。

同時に調査区南東壁際にトレンチを設定し、土層観察を行ったところ、他にも溝跡が存在することがわかった、これをSD52とし、重機により一部掘り抜いてしまった溝をSD53とした。第174図G-H断面の第10層まで剥いだ時点で遺構を検出したことになる。G-H断面の第9・10層はE-F断面では第3層に対応する。この2条の溝跡は、調査区内では切り合い関係はみられないが、調査区南東壁のG-H断面の観察によれば、SD52がSD53を切っていることが理解できる。

規模・埋土：SD52は大半が調査区外にあたるため、幅長は不明である。検出面からの深さは約50cmである。SD53は重機による剥ぎの際に掘り抜いてしまった箇所があるが、幅約70～240cm、検出面からの深さは約35cmを測り、弧状を呈しながら調査区外に延びている。なお、溝跡の続きを把握するため、約24m西側の箇所トレンチを入れてみた。その結果、溝跡と思われる落ち込みは確認できたが、SD52なのか、SD53なのか、あるいは別の溝跡であるかは不明である。埋土は砂層が主体である。

出土遺物：SD52からは約230gの土器が出土したのみであり、9世紀頃の須恵器1点を除くと他は弥生土器である。SD53からは約930gの土器が出土した。11世紀の白磁碗片以外は弥生土器であった。図示できたものはなかった。

科学分析：第174図E-F土層断面において、SD52・SD53が検出された黒色土層からその下層の泥炭層までを層位ごとに6点の試料を採取し、土壌分析（花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体分析）を実施した。その結果概要は第6章でまとめている。第1調査面は、浅く水の出入りが少ない、富栄養な水域が推定される一方で、陸生珪藻が多産したことや、花粉化石の保存状態が悪かったことから、乾湿を繰り返すような環境であった可能性があるという。

時期：SD52の方が切り合い関係からは新しい。SD53から白磁碗片が出土していることから、ともに11世紀頃の所産と考えたい。

イ 土坑

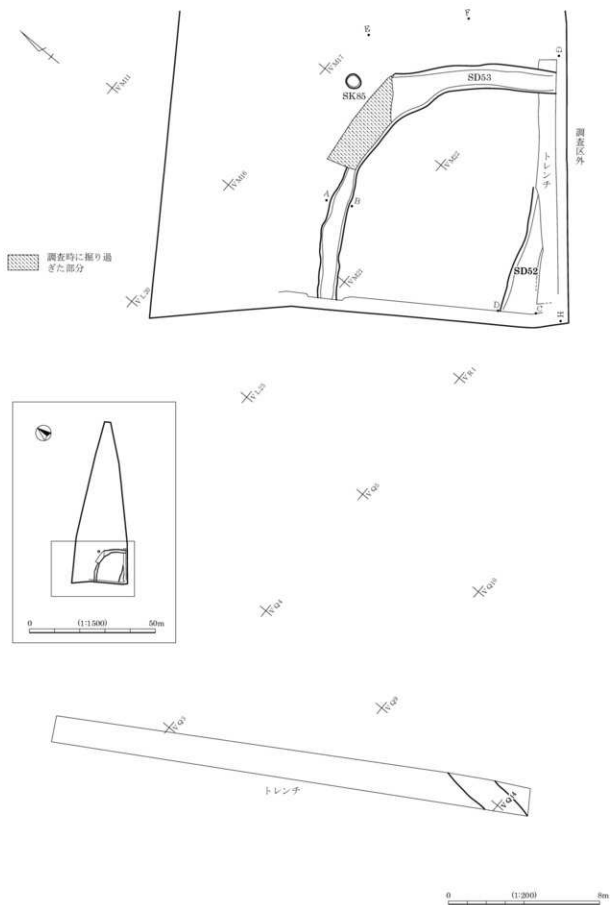
SK85 [第173図]

位置：⑥-2区、V M17グリッド

検出・重複関係：SD52・SD53と同一レベルで検出した。80×75cmの円形を呈する。検出面からの深さは記録にとっていない。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

時期：遺物の出土はみなかったが、SD52・SD53と同一面からの検出であるため、同じく11世紀頃と考えたい。



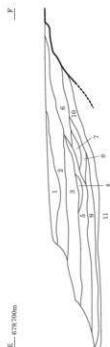
第173図 ⑥-2区 第1調査面 遺構配置図

断面図 A・B・C・D の埋土の性質



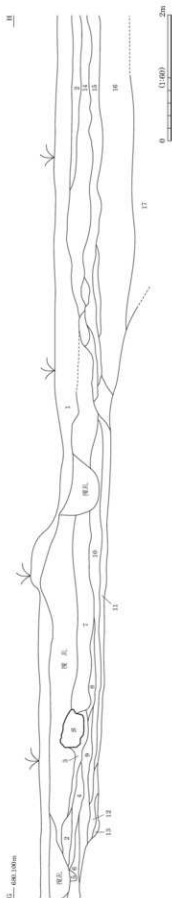
- 1 濃い黄褐色(10YR4/3) 粗砂礫、黒土が混入、小礫混入、粗砂リミナナあり(白面出土)。
- 2 黒色(10YR3/1)～黒褐色(10YR1/1) 粘土、しまりあり、粘性强、砂を少量混入。
- 3 黒色(10YR2/1) 粘土、しまりあり、粘性强、砂を少量混入。
- 4 黒色(10YR2/1) シルト、粘土、粘性强、砂を少量混入。
- 5 黒褐色(10YR4/3) 粗砂～シルト。
- 6 黒褐色(10YR4/3) 粗砂～シルト。
- 7 黒褐色(10YR2/1) 粘土～シルト、ブロッカ状に砂が混入。
- 8 黒褐色(10YR2/1) 砂～シルト。

断面図 E・F の埋土の性質



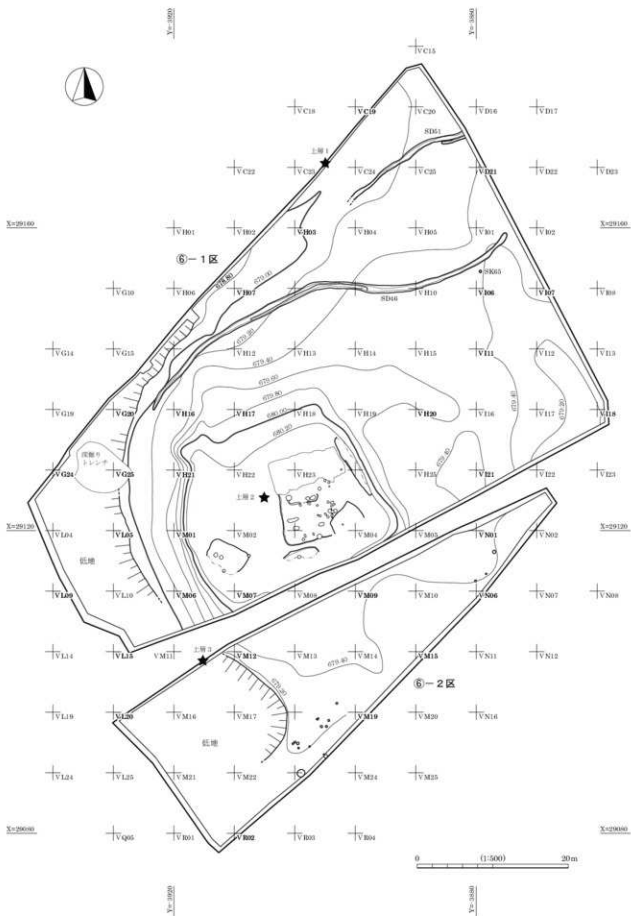
- 1 黒褐色(10YR4/1)～黒褐色(10YR2/1) シルト、砂、礫が混入。
- 2 黒色(10YR2/1)～黒褐色(10YR3/1) シルト～粗砂、礫を多く混入、3cに比べ、やや部分の沈着がある。
- 3 黒褐色(10YR3/1) シルト～粗砂、礫混入、灰色が混入している。
- 4 3cに灰混入する。
- 5 黒色上(10YR1.7/1) 泥炭層、砂礫多く混入。
- 6 3cに類似、礫の混入やや減少。
- 7 黒色(10Y1/1) 粘土、砂、礫を多く混入。
- 8 黒色(10YR2/1) 粘土、砂礫がまよく入る。
- 9 オリーブ黒色(5YR3/1) 泥炭。
- 10 オリーブ黒色(5YR4/1) 泥炭、砂の混入が多くなる。
- 11 黄褐色(5Y5/3) 粗砂～粗砂、この砂層中～下部で粘土出土。

断面図 G・H の埋土の性質

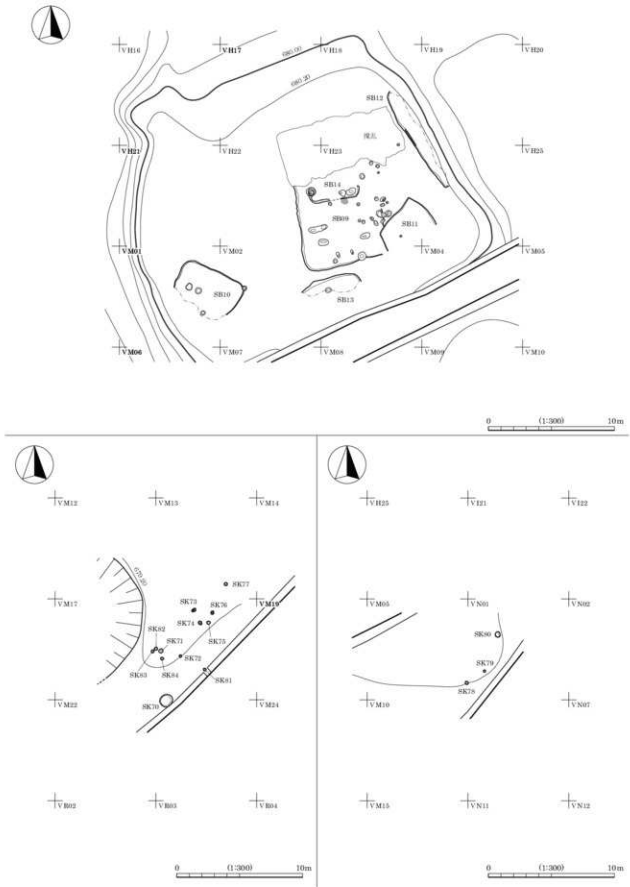


- 1 現木田層(泥炭層)。
- 2 現木田層(集積層)。
- 3 砂礫。
- 4 1にぶい、黄褐色、細砂主体。
- 5 砂礫。
- 6 黒褐色(10YR4/1)～黒褐色(10YR2/1) シルト～粗砂、小礫混入。
- 7 小礫混入。
- 8 1にぶい、黄褐色粘土。
- 9 黒褐色(10YR2/1) 灰色が混入している。シルト～粗砂、礫混入。
- 10 黒褐色(10YR3/1) 灰色が混入している。シルト～粗砂、大礫多量混入。
- 11 黒褐色(10YR1/3) シルト、砂、礫混入、35c2
- 12 1にぶい、黄褐色(10YR4/3) 粗砂、S53
- 13 黒褐色(10YR3/1) 砂礫、礫～シルト、粘土混入。
- 14 黒褐色(10YR1/3) シルト～粗砂。
- 15 黒褐色(10YR1/4) シルト、S4cを含む。
- 16 黒色(10YR2/1) 粘土～シルト、泥炭になる部分あり。
- 17 砂礫。

第174図 SD52・53 遺構図



第175図 ⑥区 第2調査面 遺構配置図



第176図 ⑥区 第2調査面 遺構配置拡大図

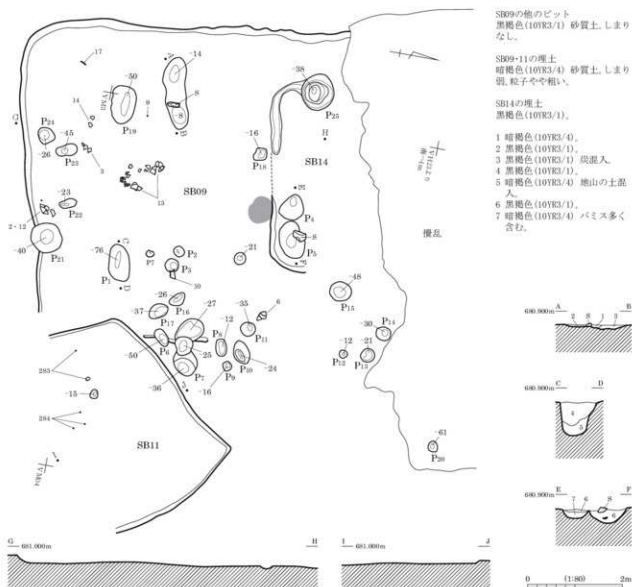
(3) 第2調査面

ア 竪穴住居跡

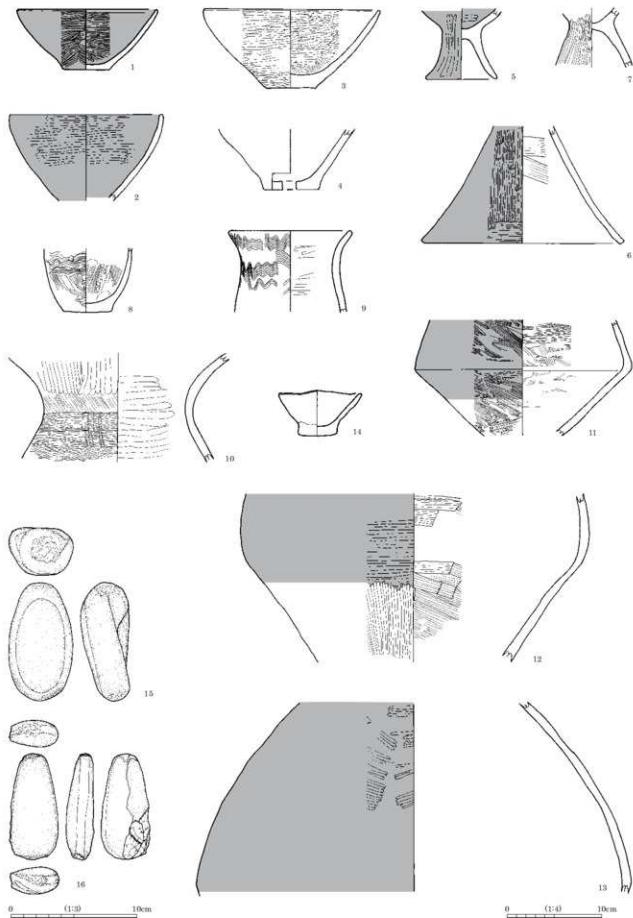
SB09 [第176～179図 PL18・54・55・74]

位置：⑥-1区、V H22、V H23、V M02、V M03 グリッド

検出・重複関係：Ⅵ層上面にて検出した。流れ山残丘に立地し、北側は大きく攪乱により壊されている。現耕土の直下が地山であり、埋土も浅いため検出作業は難しかった。本跡を調査するなかでSB11、SB14の存在がわかってきたため、新旧関係は調査段階ではつかめなかった。出土遺物から判断すると古墳時代前期に位置づけられるSB11より古いことはいえる。SB14は時期を決定できる遺物が出土しなかったが、埋土が黒褐色土で、SB09の暗褐色土と異なっていたことを重視するならば、本跡の方が古いと判断できる。



第177図 SB09・11・14 遺構図



第178図 SB09 遺物図(1)

形状・規模：北側を掘削で壊され、東側はプランがつかめなかった。西側にわずかに段差をもつ箇所があり、これを壁とみて東西径6.6mと判断した。南北径の現存長は7.45mであるため、おそらく南北径9m程度の隅丸長方形を呈するものと推定する。その長軸方位はN-10°-Wを示す。壁高は最大部分で26cmを測るが、大半は10cm程度である。

埋土：しまりの弱い暗褐色土が浅く覆っていた。

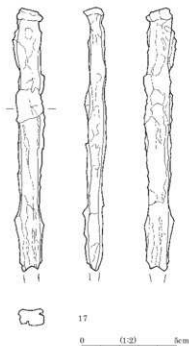
床面：貼床はみられず、周溝も認められなかった。推定プランのほぼ中央に位置するSB14の直近には焼土がみられている。

炉：西壁寄りに東西に長い不整形の落ち込みがあり炉石とみられる礫がみられるため、炉と判断した。

柱穴・ピット：ピットは25基が検出された。小ピットが多いが、このうち主柱穴としてはP1・P15・P19・P25が該当しよう。西側のP6～P13・P20は本跡に伴わない可能性が高い。

出土遺物：土器は約8,000gが出土した。床面から出土した遺物が多い。土器は13点・約4,000gを図示した。2・3・6・7・8・9・10・12・13・14は床面からの出土、他は埋土からの出土である。1～3は鉢であり、1・2は赤彩されている。3は被熱しているため赤彩が消失したと考える。4は底部穿孔の甌、5は台付鉢の脚部とみられる。6は高坏、7は台付甕か台付壺の脚部の一部と思われる。8・9は小形甕、10は11～13は赤彩甕、14は手捏土器である。石器は燧石2点を図示した。15は砂岩製、16は細粒砂岩製であり、16はP3から検出された。17は鉄製品である。床面出土である。遺存状態は悪く、亀裂や剥離が著しかったため保存処理を行った。鏝の部分も含めて現存長13.9cm、幅1.5cm、厚さ1.0cm、保存処理後の重量は37.2gを測る。断面形は長方形に近い形状を呈する。頭部（基部）を作り出している。先端部は欠損しているが刃部であると思われる。鏝状を呈するが鏝などを再加工して頭部を作り出したものである可能性もある。鏝状鉄製品としておきたい。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



第179図 SB09 遺物図 (2)

SB10 [第180・181図 PL18・19・55・67・72・74]

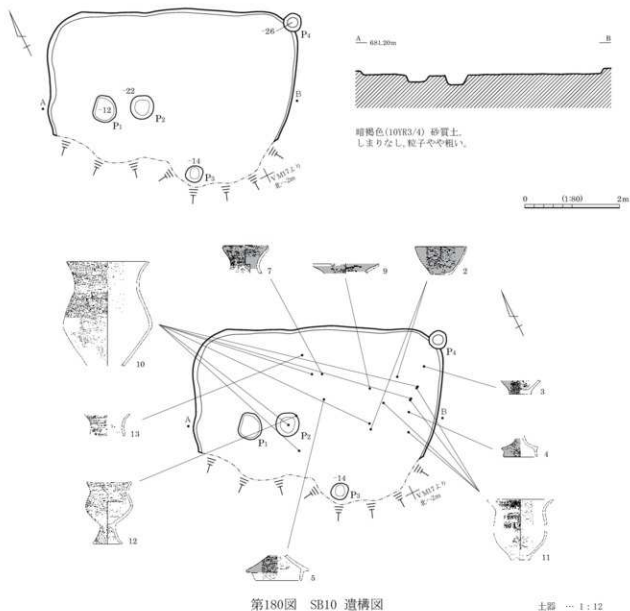
位置：⑥-1区、V M01、V M02グリッド

検出・重複関係：VI層上面にて検出した。流れ山残丘の南西に立地し、南側は削平されている。重複関係はない。

形状・規模：東西径は5.15m、南北径は削平されているため現存長は3.6mを測るが、隅丸長方形もしくは隅丸長方形を呈するものと考えられる。南北径を長軸にとれば、N-29°-Eを示す。壁高は数cmを測るにすぎない。

埋土：暗褐色土がわずかに覆っていたにすぎない。

床面：貼床はなく、硬化面も認められなかった。

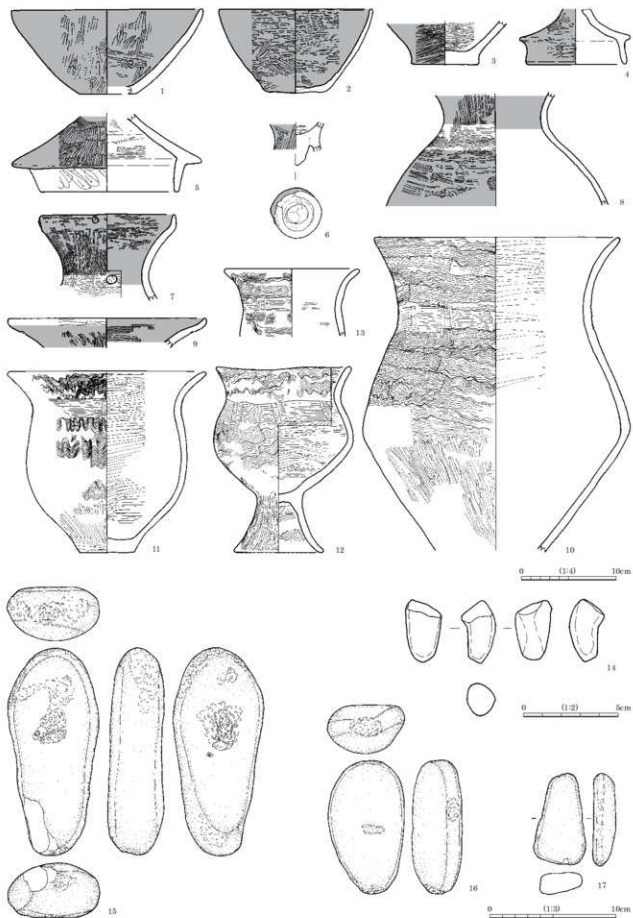


炬：検出できなかった。

柱穴・ピット：ピットは4基が検出されたが、支柱穴とみられるものは不明である。P4は本跡に伴わない可能性がある。

出土遺物：土器は約7,200 gが出土し、13点・約5,500 gを図示した。いずれも床面出土である。1・2は赤彩鉢、3は赤彩された壺の底部と思われる。4・5は蓋である。ともに外面を赤彩されているが、4は蓋の受部から下部にあたる部分も赤彩されているのに対し、5は赤彩されていない。このことから4は蓋でかぶせるタイプであったのに対し、5は蓋をはめ込むタイプであったことがわかる。6は高坏の接合部分であり、脚部と坏部を粘土棒で接合したことがうかがえる。7・8・9は赤彩壺である。10～13は甕、うち12は台付甕である。14は土製勾玉の欠損品と思われる。石器は3点を図示した。15・16は輝石安山岩製の敲石、17は細粒砂岩製の敲石とみられる。他には不明鉄製品の小破片が出土している。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



第181图 SB10 遺物図

SB11 [第176・182図 PL18・19・55]

位置：⑥-1区、V H23、V H24、V M03 グリッド

検出・重複関係：VI層上面にて検出した。SB09を調査するなかで、本跡の存在も判明したため、重複関係にはあるが、検出段階での新旧関係はつかめなかった。出土遺物からすれば本跡の方が新しい。

形状・規模：南側は壁を失っており、プランは明確ではないが東西径は5.15m、南北径は現存長で3.6mを測る。やや不整な方形もしくは長方形を呈すると推定される。壁高は非常に浅く、5cm程度である。

埋土：暗褐色土の単層。

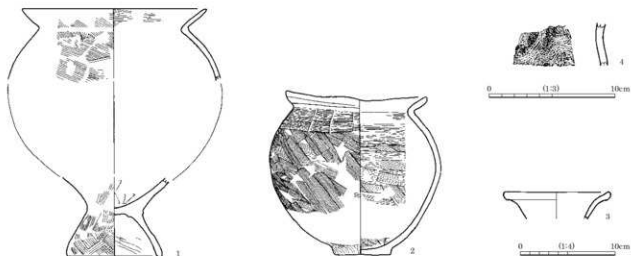
床面：貼床・周溝ともにみられなかった。

炉：検出されなかった。

柱穴・ビット：深さ15cmのビットがみられたが、柱穴とは考えにくい。性格不明である。

出土遺物：土器は約1,200gが出土し、3点・約970gを図示した。1は台付甕、2は甕であり、ともに床面出土である。3は壺の口縁、4は甕の破片である。

時期：床面出土の1・2の土器から、古墳時代前期初頭に位置づけたい。



第182図 SB11 遺物図

SB12 [第176・183図 PL18・19・55・56]

位置：⑥-1区、V H18、V H19、V H23、V H24 グリッド

検出・重複関係：VI層上面にて検出した。重複関係はない。流れ山の東斜面で検出されたため、大半は削平されてしまい、西壁付近の一部が残っていたにすぎない。

形状・規模：南北径は8.75m、東西径は1.15mが残存するにとどまるため、形状等は不明である。壁高は最大で39cmを測る。

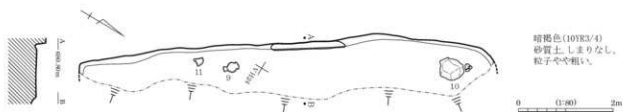
埋土：しまりのない暗褐色土。

床面：貼床はなかったが、比較的堅緻な面であった。

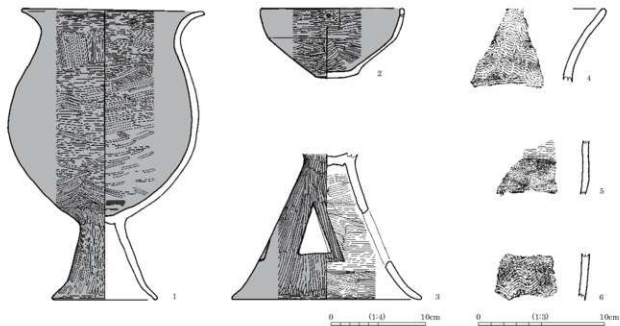
炉・柱穴・ビット：検出できなかった。

出土遺物：土器は約2,500g出土し、そのうち6点・約2,000g分を図示した。いずれも床面出土である。1～3はいずれも赤彩されている。1は台付鉢である。2は口縁部に穿孔が1箇所みられる鉢、3は三角透かしが4箇所ある高坏の脚部、4～6は甕破片の拓影である。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



暗褐色(10YR3/4) 砂質土。しまりなし。 粒子やや粗い。

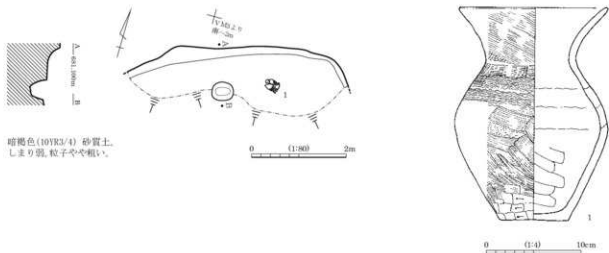


第183図 SB12 遺構図・遺物図

SB13 [第176・184図 PL18・19・56]

位置：⑥-1区、V M02、V M03グリッド

検出・重複関係：VI層上面にて検出した。重複関係はない。流れ山の南斜面で検出されたため、大半は削



暗褐色(10YR3/4) 砂質土。 しまり弱。粒子やや粗い。

第184図 SB13 遺構図・遺物図

平されてしまい、北壁付近のごく一部が残っていたにすぎない。

形状・規模：東西径が4.35m、南北径も1.3mが残存していた。わずかに残る北東隅の形状からすれば、隅丸方形か隅丸長方形を呈する可能性が高い。

埋土：暗褐色土の単層。

床面：貼床はなく、硬化面も認められなかった。

炉：検出できなかった。

柱穴・ピット：ピット1基のみを検出したが柱穴かどうかは不明である。

出土遺物：土器が約1,300g出土し、その大部分を占める約1,200g分の1点を図示した。1は床面出土の完形の甕である。火を受けた痕跡はみられない。口縁部にはハケメがよく残っている。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。

SB14 [第176・177図 PL18・19]

位置：⑥-1区、V H22、V H23、V M02、V M03 グリッド

検出・重複関係：VI層上面にて検出した。SB09と重複するが、SB09を調査するなかで本跡の存在がわかった。埋土の相違により、本跡の方が新しいと判断した。

形状・規模：北側の大半が攪乱で壊されており、プランは明確ではない。東西径は4m程度であるが、南北径は不明である。おそらく隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと推定できる。壁高はほとんど残っておらず、わずかに残る壁高も最大でも11cmを測るにとどまる。南北径を長軸とすると、方位はN-9°-Wを示す。

埋土：黒褐色土がわずかに覆っていた。

床面：貼床はみられなかった。周溝は南側で一部認められた。

炉：検出できなかった。

柱穴・ピット：ピット番号はSB09と共通して付けたが、P25は位置的にみてSB09の主柱穴であろう。P4・P5も本跡に伴うものとは考えにくい。

出土遺物：本跡に所属するものはなかった。

時期：遺物の出土をみなかったが、周辺の住居跡の状況から弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃に位置づけられようか。

イ 溝跡

SD46 [第185・186図 PL32・72]

位置：⑥-1区、V G15、V H03～11、V I01 グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

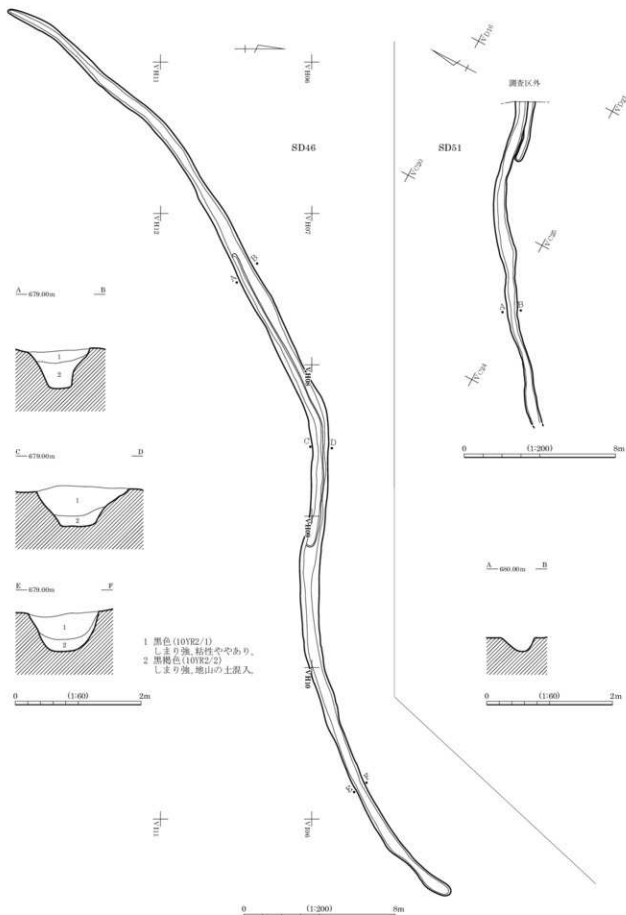
規模・埋土：調査区の東側から西側の低地流路の直前までを東西方向に走る。幅は約60～110cm、検出面からの深さは約70cmを測る。埋土はしまりの強い黒～黒褐色土の2層に分けられた。

出土遺物：土器は約3,700gを出土し、2点・約600gを図示した。1は甕であるが外面の摩耗が著しい。2は甕の口縁である。石器は敲石1点を図示した(3)。

時期：出土遺物から弥生時代後期に位置づけられよう。

SD51 [第185・186図 PL32・69]

位置：⑥-1区、V C19・20・23・24 グリッド



第185図 SD46・51 遺構図

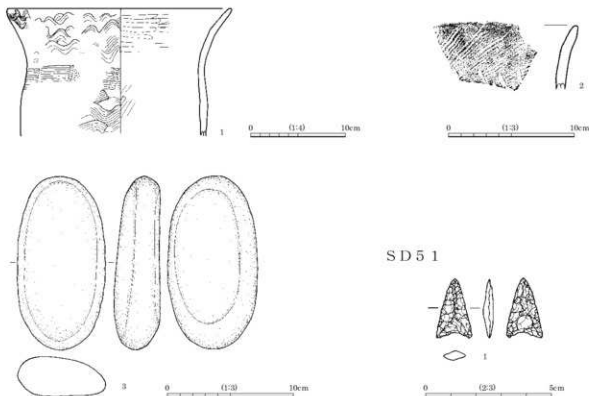
検出・重複関係：V層上面にて検出した。重複関係はない。

規模・埋土：東側は調査区外に延び、西側は検出長17m程で途切れる。幅は約50～80cm、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は2層に分けられた。

出土遺物：土器は約230gが出土した。弥生土器の他、平安時代とみられる須恵器片も1点・約30gが検出された。図示したのは黒曜石製の石鏃1点のみであった。

時期：須恵器片も出土したが埋土がSD46と同じであるため、混入と判断し、弥生時代後期に位置づけたい。

SD46



第186図 SD46・51 遺物図

ウ 土坑

土坑は16基が検出された。このうち個別記載するのはSK70のみとし、特記すべきところがない他の土坑については、計測値等を記した第11表の一覧表を参照いただきたい。

SK70 [第188図 PL33]

位置：⑥-2区、V M18・23グリッド

検出・重複関係：V層上面にて検出した。SK71～77、SK81が周囲には存在するが、重複関係はない。

規模：104×96cmの円形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。土層断面図は南東壁のものを図示した。埋土は5層に分けられ、底面近くの第5層からは炭化物粒などが出土している。

出土遺物：土器片がごく少量（約10g）が出土したにすぎない。

科学分析：第5層について花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析種実遺体分析を実施した。検出された花粉化石は、保存状態は悪かったが、大部分が草木花粉であり、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ

遺積 番号	遺構図版	地 区	グリッド	平面規模 (cm)	深さ (cm)	出土遺物		備 考
						種別数量	掲載遺物	
SK65	第189図	⑥-1区	V B01	35×30	10			
SK70	第189図	⑥-2区	VM18, VM23	104×96	40	弥生土器約10g		本文に記載
SK71	第189図	⑥-2区	VM18	35×33	33			
SK72	第189図	⑥-2区	VM18	21×20	22	弥生土器約5g		
SK73	第189図	⑥-2区	VM18	36×28	18			
SK74	第189図	⑥-2区	VM18	35×28	124	弥生土器約10g		
SK75	第189図	⑥-2区	VM18	30×25	25			
SK76	第189図	⑥-2区	VM18	28×25	20			
SK77	第189図	⑥-2区	VM13	27×25	10			
SK78	第189図	⑥-2区	VM05, VN01	29×25	10			
SK79	第189図	⑥-2区	VN01	20×20	5			
SK80	第189図	⑥-2区	VN01	46×39	10			
SK81	第189図	⑥-2区	VM18	24×22	18			
SK82	第189図	⑥-2区	VM17, VM18	29×27	230なし			
SK83	第189図	⑥-2区	VM17	24×22	230なし			
SK84	第189図	⑥-2区	VM18	24×24	230なし	弥生土器小片		
SK85	第174図	⑥-2区	VM17	80×75	230なし			本文に記載。第1調査面にて検出。

第11表 ⑥区SK一覧表

科、イネ科等が検出された。微粒炭が大部分を占め、未炭化の植物遺体はほとんど含まれない。

植物珪酸体では、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科などが検出された。植物珪酸体は草木6分類群（イネ、アワ近似種、エノコログサ属、ヒエ近似種、イネ科、ヒユ科）76個が検出された。このうちヒユ科17個を除く種実はずべて炭化する。栽培種は、イネの頭15個・胎乳6個、アワ近似種の頭・胎乳1個、ヒエ近似種の胎乳2個が確認された。微細物分析種実遺体分析の結果によると、炭化したイネ、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）の種実や、高率のイネ属植物珪酸体と初殻や葉部に由来する多くの組織片が確認された。微粒炭の産状等も考え合わせると、火を受け炭化（灰化）したイネの植物体が本土坑内に埋積したことが推定されるとの鑑定結果を得ている。これらのことから、本跡の周辺は開けており、湿潤な場所にはヨシ属が、やや乾燥した場所にはススキ属などが草地を形成していたと推定され、またイネ、アワ・ヒエ（近似種）の植物質食料としての利用も推定されるであろう。

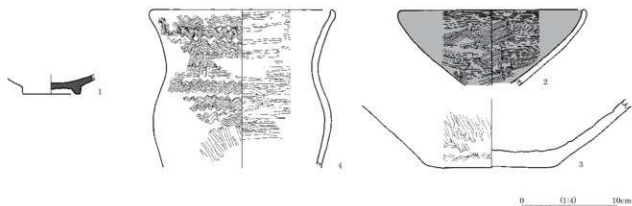
時期：弥生時代中期後半から後期の時間幅の中で位置づけられようか。

エ 低地部

⑥区低地 [第188・189図 PL38・39・68・88・89]

位置：⑥-1・2区、V H06、V G10・15・19・20・24・25、V L04・05・09・10、V M11・12・16・17・21・22、V L20グリッド

調査の経緯：⑥区の低地はその堆積土の様子から大きく2つに分けられる。⑥-2区の第1調査面も低地堆積土中で検出したものだが、⑥-2区では第1調査面の下層には黒色土及び黒色～オリーブ褐色を呈する泥炭層（第174図断面E-Fの第3層及び第4～10層）が堆積し、一部では砂礫が混じる箇所もみられた。この泥炭層は⑥-1区にはみられないものであった。一方、この黒色土層・泥炭層より下層は砂層の堆積に変わる。また⑥-1区では微高地上のV層上面までを重機で剥いでいったが、西側では微高地お



第189図 ⑥区低地 遺物図(1)〔黒色土層・泥炭層〕

よび流山残丘から低地へと地形が落ち込んでいることがわかった。その落ち際に帯状に走る砂層が南北方向に2条検出されたため、当初は溝跡2条が切り合うものと考えた。②-2区・③-2区のSD37・SD38でみられたように低地への落ち際に構築された溝跡であると理解したのである。これは⑥-2区にもつながっていくことが認められたが、⑥-2区も含めて適宜トレンチを節制し、土層観察を行ったところ、調査区内では西側の溝跡の立ち上がりが確認できず、また土層の堆積状況からみても溝跡ととらえたものは、低地に流れる流水の砂層の一部であると判断した。また⑥-1区には重機により深掘りトレンチを入れてみたが、かなり深いことがわかり、安全面も考えて2m程掘り下げたところでとめた。

一方の⑥-2区では、泥炭層直下にあたるE-F断面・第11層の砂層中～下部には、約10×5mの範囲に流木200点以上の集中が認められた。本層以下は一部でシルト層が入るが砂層を主体としており、上部の黒色土層・泥炭層とその堆積が大きく異なる。この低地は⑥-1区および⑥-2区では西側にひろがっている。なお、この⑥区の調査範囲より西側部分については、平成16年度に実施された県教委の試掘調査の対象地であった。その結果、低地が続くことが確認されているが、遺構・遺物、それに水田土壌等がまったく検出されなかったため、遺跡の範囲拡大がなされなかった範囲にあたる(県教委2007)。

出土遺物：遺物は、黒色土層・泥炭層出土とその下層に位置する砂層出土と分けて記述する。あわせて約12kgの土器が出土した。黒色土層・泥炭層出土遺物には土器と木製品がある。第1調査面の検出された土器は4点を図示した。1は白磁碗で12世紀に比定される。砂礫が多く混入するE-F断面第5層から検出された。2～4は弥生土器である。2は赤彩鉢、3は赤彩釜の底部、4は甕である。その他、図示はしていないが白磁・青磁については写真を掲載した(PL68-17・18・21は白磁碗、20は青磁碗)。

木製品は11点が出土し、すべてを図示した。第190図-5は、V M17グリッドから検出された建築部材の横架材あるいは又首材と思われる。長さ129cmを測る大形品である。横架材であれば斜めの切り込みはトラス構造によるものとみられる。2箇所穿孔は木軸を差し込むためであろう。樹種はサワラである。6は箱の側板もしくは板組の箱の枠材と思われる。両端部をやや欠けているが、図の右側寄りには上下2箇所穿孔がみられる。サワラを用いている。7は連歯下駄の歯の欠損品である。ヒノキ科を用いている。8は不明器具の部材であると思われる。樹種はアサダである。9はサワラの板目板である。炭化しているが材材の一部の可能性もある。10は完形品で両端を箱の材料と思われる。樹種はサワラである。11はサワラの板材であり、断面形は蒲鉾形、スリットは割った際に生じたものであろうか。12はサワラの追い柵目の薄板を用いた形代とみられ、扇や矛、剣を形取った可能性がある。13はヒノキ科の成形された角材で何らかの器具の部材である。断面形は蒲鉾形で下端側を細くしている。14はヒノキ科の柵目薄板であり屋根材と思われる。一方の砂層出土遺物では4点の土器を図示した。15は⑥-1区から出土した軟質

須恵器の坏で、9世紀後半に比定できる。木製品では6の斉串が検出された。サワラ製で上端側は欠損している。

自然遺物では先述したように流木が200点以上認められた。このうちの50点について樹種同定を実施し、広葉樹6種（オニグルミ・ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属・バラ属）に同定された。これらの木材の径は0.9～5.0cmと小径であり、ヤナギ属が調査試料の約90%を占め、河畔等に生育していた樹木の枝に由来するものと考えられる。種実もオニグルミなど数十点が検出された。

科学分析：先述した流木の樹種同定の他、木製品の樹種同定および放射性炭素年代測定、材質分析、土壌分析（花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体分析）を行なった。放射性炭素年代測定は第190図-5の又首もしくは横架材について実施した。その結果、補正年代は $1305 \pm 20\text{yrBP}$ 、これに基づく暦年較正結果はcalAD666-calAD764という数値が導き出された。7世紀後半から8世紀後半にあたる年代である。低地から出土する土器には弥生土器の他には、9世紀後半の須恵器坏および12世紀頃の白磁片がみられる。この出土土器に比べるとやや古い数値であるが、年代測定値のひとつとしてここにあげておきたい。

材質分析は、⑥-1区低地・砂層から出土した須恵器坏（第191図-15）内に残存していた植物遺体について行った。その結果、裸子植物か双子植物あるいは単子葉植物の茎あるいは根と同定された。

土壌分析は⑥-1区および⑥-2区から1点づつ採取した試料について実施した。

⑥-1区試料は⑥-1区・第187図のC-D断面第4層から採取した。

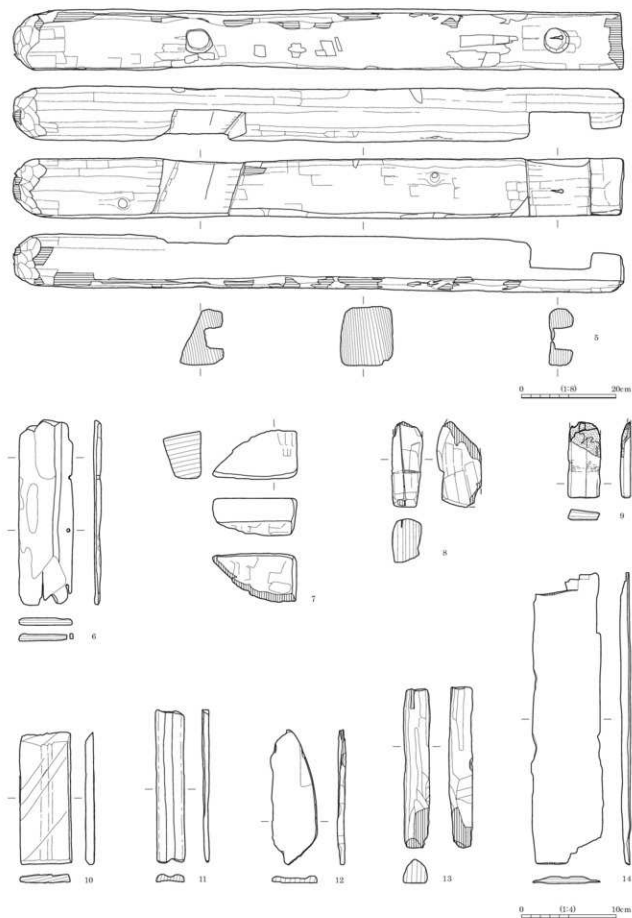
木本花粉では、コナラ亜属がやや多く、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などがみられる。草本花粉は、イネ科が多く、イネ科花粉中には栽培種のイネ属も確認される。この他に、カヤツリグサ科やヨモギ属が検出されるほか、栽培種のソバ属が検出される。微粒炭は、壁孔や放射組織の一部など木材組織をもつものや、イネ科等に特徴的な波状細胞壁をもつものが認められる。

植物珪酸体含量は約5,300個/gである。検出された分類群は、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族などが検出され、概してヨシ属の含量が高い。組織片では、ウシクサ族の機動細胞列が僅かに認められる。種実遺体分析では木本のタニウツギ属2個と、草本18分類群（サジオモダカ属、オモダカ科、ホッスモ近似種、イネ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ポントクタデ近似種、サナエタデ近似種、ナデシコ科、アカザ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、ハギ属、スミレ属、ウド、シロネ属、トウバナ属、ナス科、キク科）156個が検出された。栽培種は、イネの類が11個確認された。栽培種を除く分類群のうち、木本は、森林の林縁部などの明るく開けた場所に生育する落葉低木のタニウツギ属が確認された。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く確認され、沈水植物のホッスモ近似種や、サジオモダカ属、オモダカ科、ホタルイ属などの水生植物、ポントクタデ近似種、シロネ属などの湿生植物を含む。

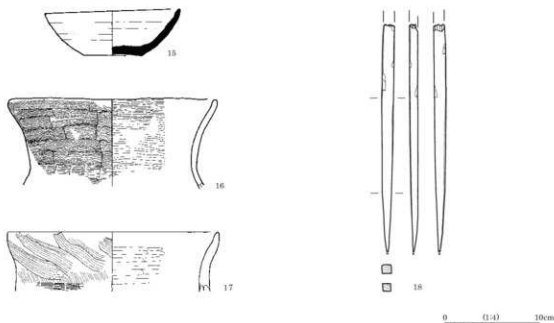
⑥-2区試料は第187図E-F断面第21層から採取した。

花粉化石は、木本花粉と草本花粉が同程度検出される。木本花粉では、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属等がみられるが、際だって多く産出する種類は認められない。草本花粉では、イネ科、キク亜科等が検出される。イネ科花粉中には、栽培種のイネ属が確認される。

植物珪酸体含量は約2.0万個/gである。栽培種のイネ属が検出されるが含量は低く、短細胞珪酸体が約100個/g、機動細胞珪酸体が約700個/gである。栽培種を除く分類群では、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出され、概してヨシ属の含量が高い。組織片は検出されない。種実遺体同定は、草本33分類群（サジオモダカ属、オモダカ属、オモダカ科、イボクサ、イネ、アワ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、アサ、ミズ属、ミゾソバ近似種、イヌタデ



第190図 ⑥区低地 遺物図(2)〔黑色土層・泥炭層〕



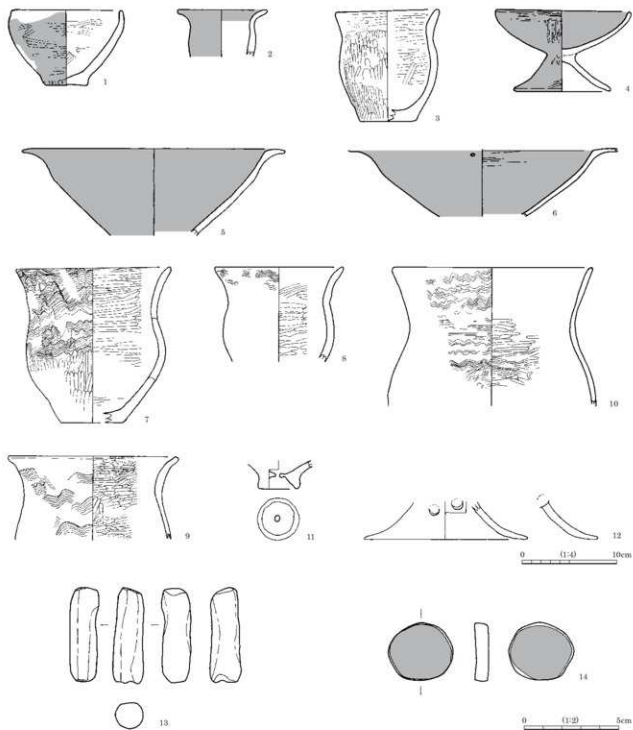
第191図 ⑥区低地 遺物図 (3) [砂層]

近似種、サナエタテ近似種、タデ属、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、タガラシ、キンボウゲ属、ミズオトギリ、アブラナ科、スミレ属、ゴキツル、セリ科、アカネ科、イヌコウジュ属、シロネ属、ナス近似種、ナス科、メナモミ属、キク科) 715個が検出された。このうち、イネの類4個、アワ近似種、イネ科、サナエタテ近似種、イヌコウジュ属各1個は炭化が認められる。栽培種は、イネの類44個、アワ近似種の胚乳1個、アサの果実4個、ナス近似種の種子1個が確認された。栽培種を除く分類群のうち、サジオモダカ属、オモダカ属、オモダカ科、イボクサ、ホタルイ属などの水生植物が全体の46%を占め、湿生植物のミズ属、ミソソバ近似種、タガラシ、キンボウゲ属、ミズオトギリ、ゴキツル、セリ科、シロネ属等も確認された。

時期：弥生土器を除くと、黒色土層および泥炭層では12世紀の白磁(1)が、砂層では平安時代9世紀後半の須恵器坏(15)が最も新しい遺物である。砂層中に9世紀後半の土器が含まれていることから、平安時代までは激しい流水を伴っていた低地であるが、その後は黒色泥炭層の堆積が少なくとも12世紀頃までは続いたようである。

(4) 遺構外出土の遺物 [PL66・67・69・74・76]

⑥区の遺構外からは約52kgの土器が出土した。⑦区からは約100gが検出されたにすぎない。またこの他に調査区不明の表採土器も約10kgみられた。このうち⑥-1区の黒色シルトの第172図土層1のA層にあたる層位からは弥生土器約45kgをはじめとする遺物の出土をみた。とりわけV H6～10グリッドに集中した。遺物は摩耗が著しいものが多い。図示したのは土器・土製品14点、石器5点、銭貨1点である。1～14の土器・土製品のうち、3と12を除くものが黒色土のA層からの検出である。1・2は赤彩鉢、3は無彩の鉢であろうか。4・5は赤彩の高坏である。6はかなり摩耗が激しいが、赤彩の痕跡がみられ、本来は内外ともに赤彩されていたものである。7～9は甕、10は円形透かしのある器台の脚部と思われ、古墳時代前期に比定されよう。11は台付の土器の脚部だが、底部に穿孔がみられる。10以外は弥生時代後期頃に位置づけられる。土製品には13・14がある。13は棒状で指頭痕がよく残っているが、用途は不明である。14は赤彩された甕の破片を利用した土製円板である。古代土器は⑥区で約250gが検出されている。中近世土器は13点が検出された。中世では11世紀から12世紀の白磁5点と青磁碗2点、

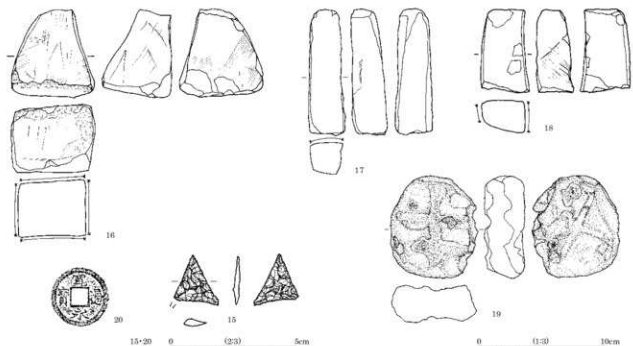


第192図 ⑥-1区 遺構外遺物図 (1)

13～14世紀のすり鉢がみられた。近世では幕末の伊万里、前山焼と思われる徳利、唐津など5点が認められた。調査区不明の表採資料にも破片ではあるが15点の近世陶磁器がみられる。16世紀後半の内ハゲ皿、17世紀前半の瀬戸美濃の天目茶碗、18世紀後半以降の伊万里、瀬戸美濃の御室碗や灰軸碗、前山焼と思われる18世紀末のすり鉢などが認められた。

石器は調査区が不明な表採資料も含めて5点を図示した。15・16は表採されたもので、15は黒曜石製の石鎌、16は砂岩製の砥石、17～19は⑥-1区から検出されたもので、17・18は流紋岩製の砥石である。19は軽石製品であり、両面に刻みを入れている。用途は不明である。その他、みがき石1点を写真のみで図示した(PL74-8)。

銭貨は寛永通寶1点が⑥-1区北西壁の砂層(第174図G-H断面の第3～5層、第193図-20・PL89-11)から出土した。



第193図 ⑥-1区 遺構外遺物図(2)



⑥-2区 調査風景

第5節 小結

1. 弥生時代の遺構配置 (第194図)

今回の調査区は、北東-南西方向へ約580mを測る長大なものとなった。佐久平北部を特徴づける田切り地形が消滅する地域にあたり、遺跡は、低地、微高地、それに流れ山残丘という多様な地形の上に営まれていた。遺跡の内容もこの地形に大きく左右されている。弥生時代に関して言えば、微高地と流れ山残丘上には集落域と墓域が展開し、低地には溝が走っていることが理解できた。

(1) 集落域

集落域は、A～Cの3グループに分けられる。集落Aは②-1区・③-1区・④-1区の微高地上に営まれたものである。ここでは円形周溝墓や方形周溝墓、木棺墓、土器棺墓からなる墓域にもなっている。出土遺物から判断すると、集落が廃絶されたのちに墓域になったと推測できる。集落は中期後半の竪穴住居跡4軒からなる。隣接する地点については佐久市教委による発掘調査が行われており(第194図-Bの範囲)、弥生時代中後期の竪穴住居跡8軒が検出されている。東側に向かい地形が上がっていくにしたがい、集落Aは東側に伸びていくことがわかる。濁川をはさむが、昭和47・48年・平成15・16年に行われた発掘調査地区もこの東側方面にあり、環壕を含む集落跡が発見されている(第27図)。この集落Aは、西側および北側は低地に面するが、西側は溝跡SD15およびそれを切るSD41で区画されていると考えられる。SD15およびSD41は①-2区から①-3区にかけて伸びる溝である。SD41はSD15の一部を作り替えられたものであり、ともに区画溝であると考えられる。北側は低地の落ち際にSD37・SD38の溝を掘削している。低地堆積土を掘り込んで構築されているが、これらも区画を意識したものであるかもしれない。

集落Bは、①-4区の微高地上に営まれたものである。竪穴住居跡3軒が近接して検出された。この3軒は弥生時代後期に位置づけられる。

集落Cは⑥-1区の流れ山残丘上に展開するもので、竪穴住居跡6軒が検出された。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのもので、流れ山上に営まれ続けていた。流れ山には古墳を構築する事例は少ないが、集落を営んだことがわかる稀少な事例となった。

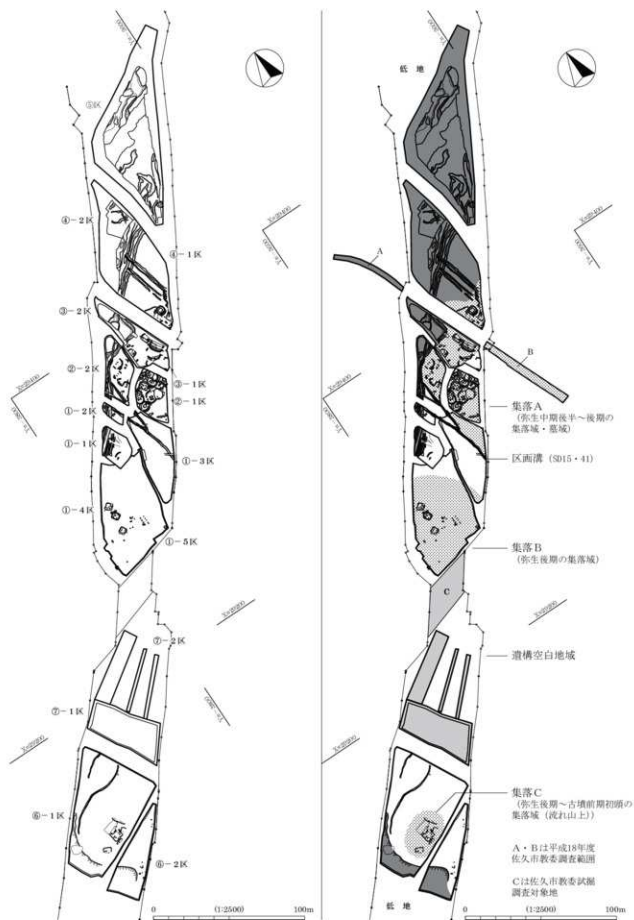
このように、集落は調査区内で3グループを確認できた。所産時期はそれぞれ異なるため、調査区内においてではあるが、時期により集落の占地を異にしたことがうかがえる。

(2) 墓域

墓域は、①～④区の微高地上に展開する。集落Aと占地を同じくするが、集落Aが廃絶されてから墓域になったと思われる。円形周溝墓、方形周溝墓、木棺墓、土器棺墓が検出された。周溝墓・木棺墓は時期決定に足る出土遺物をみないものが多かったが、後期に位置づけられると考えられる。

土器棺墓は、1基(SK08)を除き、SD15上面に構築されたものであった。現位置をどめていないものもあるが、SD15がほぼ埋没した段階でその埋土上面に土器棺墓を構築されたことが理解できる。SD41は、その南側部分はSD15と共有する。SD15上面に土器棺墓として利用するためにその部分を除いて新たに掘削したのがSD41であるとの想定もできる。SD15の埋土は黒褐色粘土である。SD41の埋土が砂層主体であるのと対照的であり、これはSD15を人為的に埋めたことを示すのではないかと考える。

このSD15より西側には墓域はみられない。したがって土器棺墓が墓域の西はずれに位置することが指摘できる。SD15・SD41が集落域の区画溝である可能性を先述したが、墓域にとっても重要な区画溝であったことが推測されるのである。SD15上面土器棺墓は5基を認定したが、その所産時期は後期初頭頃



第194図 弥生時代の遺構配置図・模式図

のいわゆる「吉田式」に比定される。SD15およびSD41からは中期後半から後期の土器が出土している。集落域の時期から墓域の時期にいたるまで、区画溝としての機能を保っていた可能性も高いのではなからうか。低地際に掘削されたSD37・SD38も同様である。

また、墓域から出土した鉄銅・鉄剣についても触れておく。鉄剣は円形周溝墓 SM14の主体部からの検出である。一方、鉄銅を出土したのはSM07である。SM07は溝をもたないことから木棺墓と判断したが、茂原信生京都大学名誉教授による出土した歯の鑑定によれば、性別は不明ではあるが、10代前半の人物であることが判明している。木棺墓はこの他には1基（SK47）のみである。若くして亡くなった人物に対しては、本遺跡群では主流の周溝墓ではなく、木棺墓に葬るという埋葬方法の区別が存在していた可能性も指摘しうるかもしれない。その当否は今後の課題であるが、土器棺墓もあわせて、埋葬方法・埋葬施設の差異が何に起因するのかの問題に対して、ひとつの資料を提示することができたと思う。

(3) 遺構空白地域

⑦区は全く遺構が検出されなかった。また①-4区と⑦区間は道路改良工事（市道11-1号）のため佐久市教委が試掘調査を実施したが、そこでも遺構は確認されなかった（第194図-Cの範囲）。したがってこの箇所は遺構空白地域と理解してよいだろう。

(4) 低地

②～⑤区の低地は、平安時代以降になると水田として利用されるようになるが、弥生時代にはまだ水田の存在は認められていない。面的に水田跡を調査できたのは③～⑤区である。また、前述のとおり、②区・③区では北側の低地への落ち際に溝跡（SD37・SD38）を掘削している。一方、④区・⑤区では北東-南西方向に溝が走っており、なかでも②区と③区にまたがる溝跡SD38と⑤区の溝跡SD65では木製品の出土も多く認められる。⑤区では木材溜まりとみられる土坑（SK101）も検出されている。これらは木材の廃棄あるいは木材の漬置きをする場所であったと考えられよう。一方の⑥区では平安時代頃まで流水が激しいところであったことがわかる。弥生時代の様相については詳細は不明だが、利用することができなかった場所であったことはたしかであろう。

2. 土器・土製品

縄文土器は、36点が検出された。早期の押型文土器、前期前半、中期末から後期前半、後晩期の土器がみられる。縄文時代に比定される遺構はない。早期・縄沢式の押型文土器はSD01から1点が、前期前半の土器は15点出土し、SD36、SD38、②-2区遺構外、④-1区第3水田からの検出であった。中期末から後期の土器は20点が出土し、SD23、SD63、SD65、SD70、SD72、SD73、①-3区遺構外、②-1区遺構外、②-2区遺構外、③-2区遺構外、④-1区遺構外から検出された。称名寺式から堀之内2式が中心である。SK101からは晩期とみられる土器が検出されている。

弥生土器は、中期後半から後期のものがみられ、本遺跡群で最も出土量が多い。約800kgの土器が出土した。堅穴住居跡からの出土土器は、埋土が浅いことも影響してか、良好な一括資料に乏しい。ここでは堅穴住居跡から出土した特徴的な土器について述べてみる。

SB03 中期後半の堅穴住居跡である。土器数炉をもち、第41図-2の甕を用いている。3は受け口口縁の口唇部に縄文を施し、頸部以下は櫛形羽状文を巡らす。1は頸部には櫛形麻状文を、胴部には櫛形羽状文を施す。4の注口土器は床下から検出されたビットから出土したものであり、弥生時代にはあまり類例のない注口をもつ形態をとる。口縁部は欠しているが、一部を除いて赤彩されている。

- SB08 後期の竪穴住居跡である。第45図-1・4を重ねて敷いた土器敷炉をもつ。2の台付甕はビツトからはほぼ完形で出土したものである。他に外面および口縁～頭部の内面を赤彩された壺(3)がみられた。
- SB10 後期の竪穴住居跡である。図示した土器は10点(第181図-1～10)であった。甕、台付甕、赤彩壺、赤彩鉢などの他、赤彩された蓋が2点出土している。この赤彩蓋は、返しの下位に口縁部がある珍しいタイプである。4は口縁部の外側にも赤彩がみられるのに対し、5には赤彩がないという差異がある。4がはめ込むタイプ、5はかぶせるタイプと使用方法に違いのあることがうかがえる資料である。
- SB12 後期の竪穴住居跡である。流れ山上に立地し、削平された部分が多かったが、台付深鉢、鉢、高坏脚部が床面より出土した(第183図-1～3)。いずれも赤彩されたものである。高坏は坏部を欠しているが、脚部は三角透かしをもつ。他には甕破片も検出されている。

古墳時代は、前期初頭に比定される竪穴住居跡が1軒(SB11)検出され、当該時期の土器が出土している。他には⑥-1区遺構外で前期初頭頃の器台脚部が1点みられる。また④-1区の遺構外からは後期に比定できる土器が微量だが検出されている。

平安時代の土器は、約3,500gが出土した。須恵器・土師器、灰釉陶器がみられる。破片資料が多いが、9世紀のものが中心である。須恵器は軟質のものが多く認められる。

中近世の土器・陶磁器は約3,000gが出土した。遺構は11～12世紀の白磁や美濃・古瀬戸が伴うSD52・SD53、18世紀末から19世紀前半の伊万里片が出土したSD44、18世紀後半から19世紀前半以降に位置づけられる水田Aを除くと、遺構外出土である。青磁、白磁といった11～12世紀の輸入磁器の他、中世では古瀬戸、常滑、かわらけ、内耳土器などが認められる。近世では伊万里、瀬戸美濃、唐津、肥前の他、地元の前山焼などがあり、18世紀後半～19世紀前半のものが多く認められる。

土製品は、後述する人形土器2点の他に、土製円板5点、紡錘車2点などが出土した。

3. 人形土器(ひとがたどき)

(1) 名称について

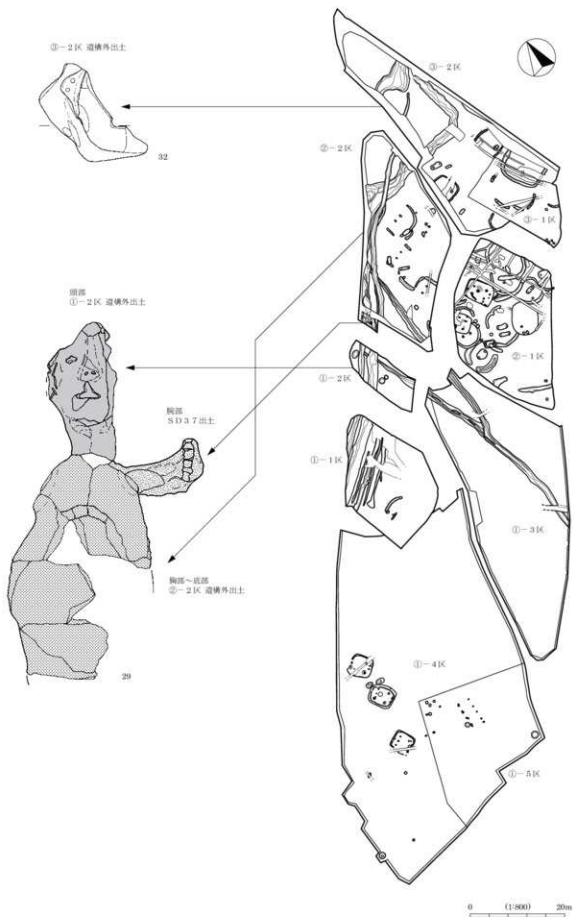
本遺跡群からは人形土器が2点出土した。この人形土器のうちほぼ全体像がわかる第106図-29については、平成22年2月に「土偶形容器」として記者発表し、埋文センター年報・速報展等でもこの名称で報告・展示してきた。しかしながら、報告書刊行に向けた整理作業を進めていくなかで名称について再検討した結果、「土偶形容器」ではなく、「人形土器(ひとがたどき)」と名称を変更して報告するに至った。名称を変更することにした経緯をここで説明しておきたい。

①土偶形容器との相違

土偶形容器は「頭部が開いた、中空で脚のない粘土製立像」である(設楽2011)。その機能としては再葬と深くかかわる蔵骨器であることがあげられる。開いた頭部は骨を入れるために不可欠なものである。しかしながら本例は頭部が中実であり、胸部にわずかな開口部を認めるにすぎない。蔵骨器としての機能は失われているとみてよいだろう。また土偶形容器は弥生時代前期末から中期中葉に集中してつくられているが、本例は後期に比定されるものである。こうした点から「土偶形容器」と呼称してよいのか再検討する必要性が生じてきたのである。

②人面付土器との関係

弥生時代の人体表現にかかわる遺物には、土偶形容器の他、鯨面(有髯)土偶や人面付土器などもあ



第195図 人形土器の出土地

る。このうち時期的に本例と合致するのは人面付土器である。人面付土器については石川日出志氏や黒沢浩氏、設楽博己氏、前田清彦氏をはじめとする諸氏が論じている（石川 1987a・1987b、黒沢 1997、設楽 1999、前田 2009）。論者により若干の認識の差異はあるものの、人面付土器を人面付土器 A と人面付土器 B の 2 つに分けて理解することでほぼ論は一致している。黒沢浩氏の分類によれば、人面付土器 A は「人面に細線紋などの装飾を施して鯨面とおぼしき表現をとり、また顎に相当するラインに髭状の隆帯をつけたりしているもの」であり、人面付土器 B は「人面に装飾的な文様がなく、鼻筋の通った顔だちのもの」である。黒沢氏は人面付土器 A には茨城県・女方遺跡例や長野市・松原遺跡例などをあげ、人面付土器 B としては群馬県・有馬遺跡例、千葉県・三嶋台遺跡例、神奈川県・上台遺跡例、神奈川県ひる畑遺跡例などをあげている。そして人面付土器 A は中期前半頃から出現し、中期後半頃に消滅するという。一方の人面付土器 B は中期後半頃に出現し、後期まで続くことを指摘する。本例は、人面に装飾的な文様がないことから人面付土器 B に分類されるものと理解できる。

③人形土器への名称変更

黒沢氏は、人面付土器 B は人面付土器 A とは異なる系譜下にあられることを指摘し、前田氏も人面付土器 A と人面付土器 B とは「その成立事情・時期・分布を異にする似て非なるもの」と言及する。黒沢氏は人面付土器 B のうち群馬県・有馬遺跡出土例については「特異な形態」とであると述べる。本例と同じく腕を有しより立体的な表現となり、しかも耳や口などを強調した表現である。

報告者もこの人面付土器 B のうち、腕を有するなどより立体的なものについては、「人面付土器」という語にはそぐわないのではないかと考えるのである。前田氏も人面付土器 A と B は呼称を別にした方がよいとの指摘をする。報告者も同感であり、近年、有馬遺跡と同じく群馬県・小八木志志貝戸遺跡の事例は、「人形土器（ひとがたどき）」という語で紹介されてきていることも踏まえて、本例も「人形土器」という用語が最もその特性をあらわすのではないかと考える。以上のような観点から本例を人形土器として報告するに至った次第である（註 1）。

本遺跡からはもう一点、第 107 図-32 も出土している。32 例も人面に装飾的な文様はないことは 29 例と一致している。32 例は頭部の左半部のみを残存であることからその全体像はつかめないが、開口部が後頭部にあることは確認できた。顔面が平坦ではあるが、開口部の位置などは千葉県・三嶋台遺跡の事例によく似ている。そこでこの 32 例も人形土器として認定したいと考える。ただし、29 例と 32 例を比べると、29 例は口を「⊥」状に表現するなど「異形」な様相を示すのに対し、32 例はそのようなつくりではなさそうである（註 2）。頭部が中空であることも異なる。有馬遺跡と同じく群馬県の小八木志志貝戸遺跡の事例は耳や顔、鼻を強調してやはり「異形」である。したがって、32 例や三嶋台遺跡の事例を人形土器 A 類、29 例のような「異形」なものを人形土器 B 類として細分してとらえるべきではないかと考える（註 3）。

なお、長野県内では長野市・榎田遺跡、現在整理中の佐久市・西近津遺跡群などでも破片ではあるが人形土器 B の出土をみている。また群馬県では先述した有馬遺跡、小八木志志貝戸遺跡の他、中之条町の川端遺跡などで出土している。いずれも耳や鼻を強調した異形の様相を示す人形土器 B であると理解できる事例である。

人形土器 A	第 107 図-32	いれずみなし 立体的な造形	非異形な様相
人形土器 B	第 106 図-29	いれずみなし 立体的な造形	異形な様相

④出土状況からみる人形土器の性格（第 195 図）

人形土器の出土状況において、注目されるのは、離れた地点から出土した部位が接合したことと、墓域

からの出土であることである。

ア. 離れた地点から出土した部位が接合したこと

第106図-29の人形土器の出土状況をみると、頭部は①-2区、左腕部は②-2区のSD37、胸部から底部は②-2区からと、その部位により出土地点を異にする。このことは、以下の2通りの解釈ができる。

①この人形土器が廃棄された後に、後世の攪乱などにより各部位が分かれてしまった。

②人形土器を意図的に破砕する行為があった。

この2つの解釈はあくまで推測の域を脱しないため、ここでは2つの可能性があることを指摘するにとどめたい。

イ. 墓域からの出土であること。

②-2区、③-2区からは円形周溝墓、方形周溝墓が18基、木棺墓2基が検出され、①-2区では①-3区へ続くSD15上面に土器棺墓5基が認められている。土器棺墓はこの他にも1基がみられる。群馬県・有馬遺跡や小八木志志貝戸遺跡の事例でも礎床木棺墓や周溝墓、土器棺墓など墓域からの出土である。このように墓域から出土したことは、墓と深い関係をもつものであると指摘できよう。

4. 石器・石製品

石器は、136点を図示した。打製石鏃33点（未製品2点を含む）、磨製石鏃2点、打製石斧11点、磨製石斧2点、太形蛤刃石斧1点、扁平片刃石斧1点、石錘1点、石匙1点、刃器5点、砥石26点、敲石28点、石槌1点、磨石3点、台石2点、くさび形石器2点（両極側離痕がある礫）、搗き臼1点、軽石製品9点、石核3点、玉石1点、2次加工のある剥片1点である。

石材についてみると、打製石鏃が黒曜石22点、チャート8点、泥岩1点、無斑晶質安山岩2点となる。磨製石鏃は、珪質泥岩1点、凝灰岩1点である。打製石斧はデイサイト7点、凝灰岩1点、泥岩1点、ホルンフェルス1点。磨製石斧は緑色凝灰岩1点と細粒砂岩1点である。太形蛤刃石斧は閃緑岩、扁平片刃石斧は安山岩、石錘は流紋岩、石匙はチャートである。刃器は細粒砂岩3点、砂岩1点、泥岩1点である。砥石は砂岩18点、砂泥互層岩2点、砂岩1点、流紋岩4点、緑色凝灰岩1点となる。敲石は輝石安山岩が17点と最も多く、次いで砂岩8点、細粒砂岩3点、デイサイト1点となっている。石槌は流紋岩、磨石は砂岩と輝石安山岩である。台石は砂岩、くさび形石器は安山岩と泥岩、搗き臼は浅間山の天仁の大噴火（1108年）で流出した追分火砕流中の火山岩である。石核はホルンフェルス1点と細粒砂岩2点、2次加工のある剥片は凝灰岩、玉石は珪質泥岩となっている。この他、みがき石とみられる2点（PL74-8・9）と玉石1点は写真のみを掲載した。なお掲載しなかった石器には、打製石斧10点、砥石7点、敲石38点、磨石6点、みがき石12点、剥片類などがある。

9点を図示した軽石製品は、本遺跡群の地山になっている浅間山起源の軽石流堆積物のなかに含まれていることから、材料の入手は容易であるため、他地域に比べて出土数は多いことが指摘できる（註4）。

また石製品も1点がSD38から検出されている。紡錘車と思われる。

5. 木製品（第196～199図）

本遺跡群からは240点を超える木製品が出土した。このうち109点を図示した。なお、削片などはまとめてひとつの番号を付けているものもある。図示にあたっては第2章第2節で記載したように4段階に分類したうちの4段階（完成品）を優先したが、佐久地方では木製品の出土が僅少であることから、第2・

3段階に分類したものについても可能な限り掲載することにした。木製品の所産の時代は、弥生時代と平安時代以降に分けられる。樹種は、針葉樹4分類群（カラマツ、モミ属、サワラ、ヒノキ科）と、広葉樹12分類群（オニグルミ、アサダ、クスギ節、コナラ節、クリ、ケヤキ、ヤマグワ、サクラ属、ネムノキ、ニガキ、ケンボナシ属、クニウツギ属）の計16分類群が確認された。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構から取り上げた木製品は205点を数え、このうち88点を図示した。農具8点（鋳身3点、鋳柄2点、鋤柄2点、木鎌1点）、農具素材の端材1点、施設部材2点、樋4点、作業台1点、杭2点、留め具3点、建築部材28点（木釘含む）、成形板1点、棒状品3点、板材18点、角材9点、芯持ち加工材1点である。この他に写真のみを掲載した芯持ち加工材2点と用途不明品1点がある。図示しなかったものには1～2段階の芯持ち丸木材や分割材（板材・角材・棒材等）、端材などがみられる。そのうちSD01、SD34、SD35からの出土もみだが、②-2区・③-2区のSD38・SD40、⑤区のSD65・SK101からの出土が大半を占める。

SD38からは55点をとりあげた。このうち鋳身、鋤柄、樋、杭、建築部材（床材、横架材、棧材、柱材など）、棒状品など15点を図示した。SD40からは14点をとりあげ、作業台、建築部材、施設部材等の6点を図示した。SD65からは60点をとりあげ、そのうちの36点を図示した。図示した木製品には鋳身、鋳柄、木鎌、建築部材等の他、角材を削いだとみられる削片もある。SK101からは73点をとりあげた。このうち31点を図示、2点を写真で掲載した。図示した木製品には鋳身、鋳柄、建築部材（破風板、扉、敷居類等）などがある。

出土した木製品についてみると、農具と住居跡の建築部材が中心であり、他は極めて少ないのが特徴といえる。また製品を特定することができない端材も多い。樹種はサワラが全体の約3分の2を占める。

① 農具（第196図）

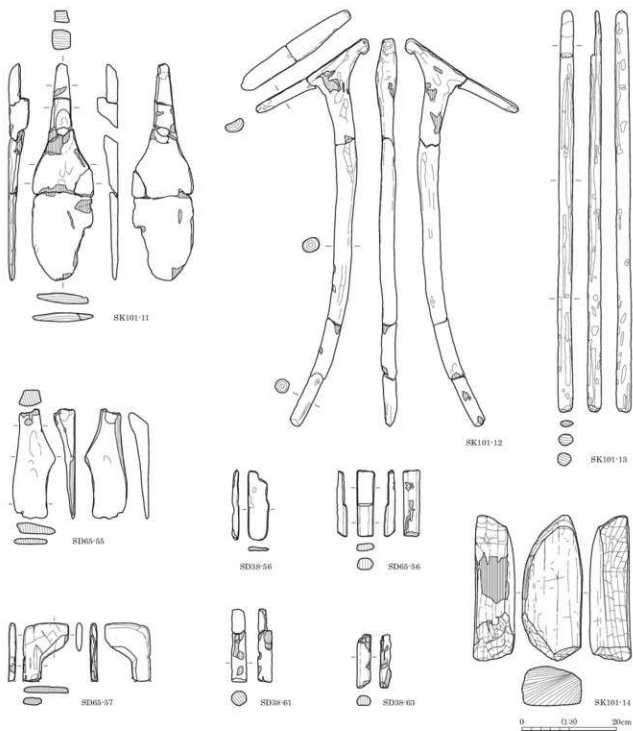
鋳身、鋳柄、鋤柄、木鎌が出土した。SK101からは鋳身1点（SK101-11）とそれに対応する鋳柄2点（SK101-12・13）が出土している。11の鋳身は曲柄（膝柄・SK101-12）にも直柄（SK101-13）にも装着できるという非常に珍しい形態である。またSD65出土の鋳身（SD65-55）と直柄（SD65-56）の欠損品は組み合わせるが、鋳身の上軸は欠損しているものの、こちらも同様に曲柄（膝柄）に装着できるものである可能性がある。このように曲柄にも直柄にも装着できるという両用タイプの鋳身は他に類例をほとんどみない。富山県下老子笹川遺跡から出土した鋳身が本例に近い形態を呈するとみられる程度である（富山県文化振興事業団2006）。類例が増えれば佐久地方の特徴となるかもしれない。SD38からは鋳身の刃部片（SD38-56）が認められた。また一木鐮の柄とみられるものの一部もSD38から出土している（SD38-61・63）。他には木鎌の欠損品（SD65-57）がみられる。除草などに使用されたのではないかと考えられる。SK101からはこうした鋳・鋤類を製作した素材の端材も検出されている（SK101-14）。

樹種でみると、鋳身はコナラ節やクスギ節を、鋳柄はクスギ節やサワラ、ニガキを用いていた。木鎌はクスギ節、素材の残材はコナラ節であった。鋳身や木鎌には強度の高い広葉樹材が利用されていたことがわかる。柄部には強度が弱いサワラなども使用され、樹種の選択の幅がより広いこともうかがえる。なお、弥生時代～古墳時代の県内出土農耕具の樹種はクスギが主体である（臼居2004）。ただし佐久地方で本遺跡群以外から唯一出土している佐久市後家山遺跡の炭化した鋳身の樹種はアサダである。

② 建築部材（第197図）

本遺跡群から出土した木製品で最も多いのが建築部材である。図示したものは破風板、床材・壁材、梁材、桁材、棧材など28点を数える。SD38では柱材（SK38-60）や壁材もしくは床材（SK38-68）、梁・桁材の横架材（SK38-64）、棧材（SK38-65～67）などがみられた。SD40では横架材（SD40-1）、床

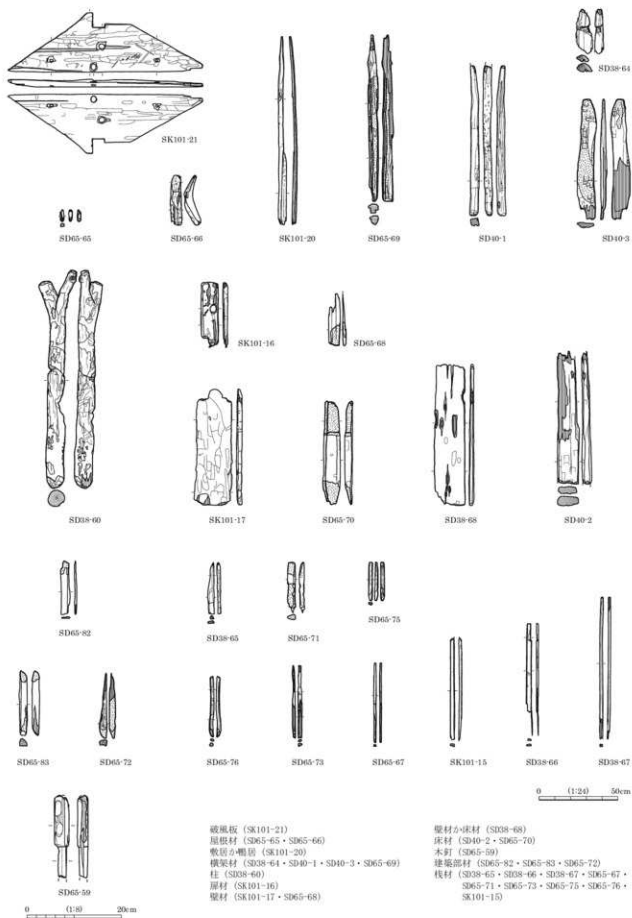
材 (SD40-2)、桁材 (SD40-3) が出土する。SD65からは木釘 (SD65-59)、屋根材 (SD65-65・66)、壁材 (SD65-68)、横架材 (SD65-69)、栈材 (SD65-67・71・73・75・76) が検出された。木釘は屋根材をおさえるためのものと考えられる。また、削ぎ取り加工段階のけずり削いだ削片 (SD65-78) がまともまってみられている。建築部材の角材 (SD65-79) をそいだものと思われる。建築部材の廃材を再利用する作業あるいは廃棄に伴う儀礼的な作業などがあったことを示すのかもしれないが、詳細は不明で



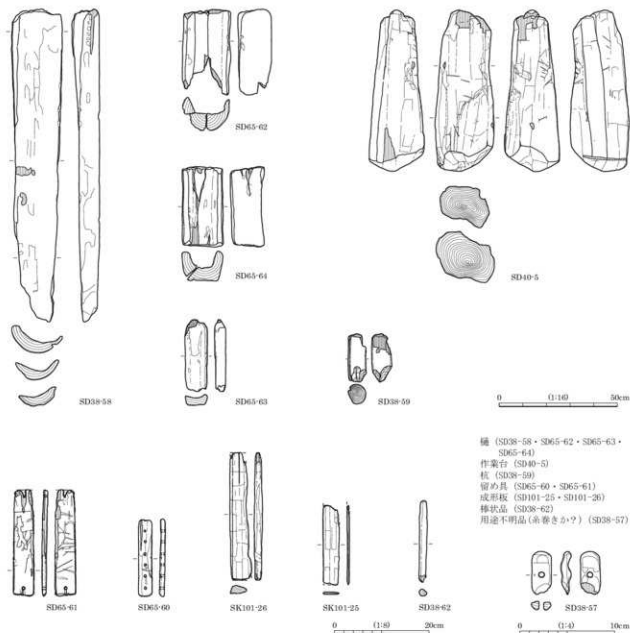
銀身 (SK101-11・SD65-55・SD38-56)
銀柄 (曲柄・膝柄 SK101-12)
銀柄 (直柄 SK101-13・SD65-56)

鋤柄 (SD38-61・SD38-63)
木鎌 (SD65-57)
素材の残材 (SK101-14)

第196図 木製品 (1) [農具]



第197図 木製品 (2) [建築部材]



種 (SD38-58・SD65-62・SD65-63・SD65-64)
 作業台 (SD40-5)
 杭 (SD38-59)
 留め具 (SD65-60・SD65-61)
 破風板 (SD101-25・SD101-26)
 棒状品 (SD38-62)
 用途不明品(糸巻きか?) (SD38-57)

第198図 木製品 (3) (種ほか)

ある。火を受けて炭化が認められるものも少なくない。SK101からは扉 (SK101-16)、壁材 (SK101-17)、破風板 (SK101-21)、敷居もしくは鴨居 (SK101-20) がみられた。なお、これらの他にも角材、板材に分類したもののなかにも建築部材の一部であるものが含まれている可能性がある。

樹種はサワラが多く、他にもオニグルミやコナラ節、サクラ属、ケンボナシ属、ヤマグワがみられ、強度が高い木材を利用する傾向が認められる。

③ 施設部材 (第198図)

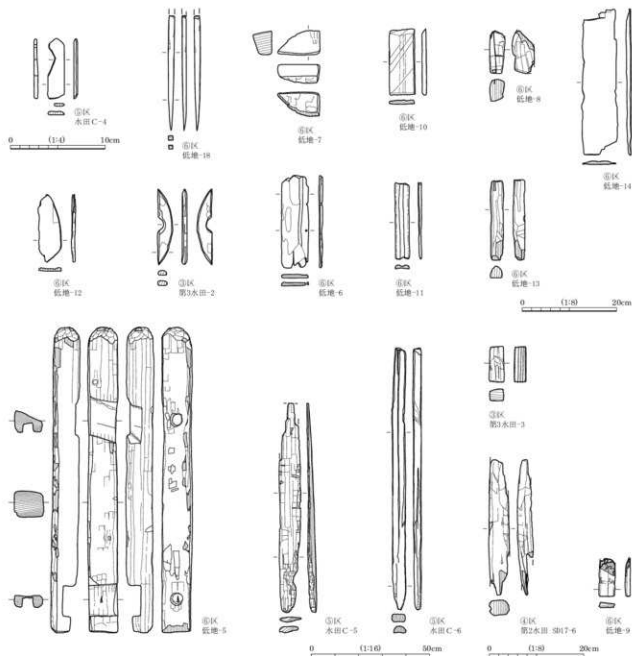
種が4点出土した。SD38からは130cm以上の種 (SD38-58) が出土している。SD65からはジョイント部分にあたる種が2点 (SD65-62・65) と浅く窪められた種1点 (SD65-63) が検出された。樹種はクリやケヤキが利用されている。他にも何らかの施設部材とみられるものが1点 (SK101-22) 出土している。

④ その他 (第198図)

SD40からは平坦な面が作り出されたオニグルミの芯持丸木材を用いた作業台がみられた (SD40-5)。

またSD65からは木釘などで留める留め具3点が出土している（SD65-58・60・61）。樹種はサワラである。この他には、竿と思われる棒状品3点（SD38-62・SK101-40・41）、杭1点（SD38-59）、用途不明製品8点が認められた。用途不明品のうちSD38-57は糸巻きの可能性もある。またSK101-25・26の成形板も何らかの部材の一部である可能性が高い。製品以外には、芯持ち加工材や角材、板材などがみられた。この他に写真のみを掲載した芯持ち加工材2点と用途不明品1点がある。

(2) 平安時代以降（第199図）



形代 (⑤区水田C-4・⑥区低地-12)
 番串 (⑥区低地-18)
 下駄 (⑥区低地-7)
 橋板 (③区第3水田-2)
 箱板 (⑥区低地-6)
 箱材料 (⑤区低地-10)
 板 (⑥区低地-11)

不明製品 (⑥区低地-8・⑥区低地-13)
 屋根材 (⑤区低地-14)
 構築材 (⑤区低地-5)
 壁材 (③区水田C-5)
 施設部材 (③区第3水田-3・④区第2水田SD17-6・⑤区水田C-6)
 棧材 (⑥区低地-9)

第199図 木製品 (4) [古代以降]

⑥-2区低地および③-2区・④-1区・⑤区の水田跡からの出土をみる。取り上げたのは36点、そのうちの21点を図示した。器種の内訳は建築部材5点、施設部材2点、箱板および箱材料2点、桶板1点、下駄1点、形代2点、齋串1点、用途不明製品2点、成形板1点、角材1点、板材3点などである。

建築部材には又首あるいは横架材とみられるもの、壁材、椀材、屋根材、そして床材と思われるものがある。サワラ、ヒノキ科を用いている。他の樹種についてみると、施設部材は2点ともカラマツ、箱板および箱材料・形代、齋串はサワラ、桶板・下駄はヒノキ科、板材・角材はサワラとヒノキ科となっている。用途不明製品にはアサダ、ヒノキ科が用いられている。全体として樹種には、サワラとヒノキ科が認められた。加工の容易な木材を選択したことがうかがえる。

出土場所についてみてみると、平安時代を上限とする④区第2水田では、水路SD17から出土した用途不明製品を図示した。この第2水田と対比できる⑤区水田Cからも3点を図示した。馬形とみられる動物形代（水田C-4）および建築部材（壁材・床材？）2点（水田C-5・6）である。建築部材は大畦畔SC535に補強材として用いられたものである。④区第3水田からは、大畦畔SC08内から出土した3点を図示した。角材2点（④区第3水田-3）と打ち込まれた杭2点（④区第3水田-1・2）である。角材は建築部材として使用されていた可能性もある。③-2区第3水田では水田層から桶板か樽類の蓋とみられるもの（③区第3水田-2）と炭化した施設部材の一部（③区第3水田-3）が検出された。このように水田の畦畔から出土した木製品には建物廃材を用いた事例が少なくない。

⑥-2区低地では黒色土層～泥炭層およびその下層の砂層から出土している。図示したのは11点である。建築部材（⑥区低地-5・14）、下駄（⑥区低地-7）、箱板及びその材料（⑥区低地-6・10）、齋串（⑥区低地-18）、形代（⑥区低地-12）、成形板（⑥区低地-11）、用途不明製品（⑥区低地-8・13）がみられる。形代は、扇、矛、剣、祭祀具などの可能性があげられるが特定はできない。

6. 金属製品

青銅製品では銭貨が10点出土した。④-2区第1水田で1点（北宋・皇宋通寶）が、⑤区水田Aで2点（北宋・熙寧元寶、明・洪武通寶）が検出されたのを除くと、他は遺構外出土である。先述したものの以外には、北宋銭の至道元寶、明道元寶、元豊通寶、元祐通寶と寛永通寶がある。④区に相当する確認調査のトレンチ7から検出されたものは錆のため判読不明であった。

鉄製品では、鉄剣と鉄釘の出土が特筆される。鉄剣は円形周溝墓SM14の主体部からの出土であり、鞘付であることが判明している。針葉樹製の鞘であった。鉄釘は木棺墓SM07からの出土であり、また外面には絹の繊維が付着していた。遺体を絹布で覆った可能性が高いと思われる。前述のとおり、SM07からは十代前半の若い遺体の歯が検出されており、この被葬者の右腕に装着されていたものであることが判明している。他にはSB09から壘状鉄製品も検出されている。

7. 玉類

玉類は、24点が出土した。すべて①～③区からの検出である。ガラス玉は19点で、木棺墓SM07からコバルトブルーを呈するもの9点（第61図-4～12）が確認された。他はスカイブルーを呈し、1点（第58図-6）が円形周溝墓SM21の小口孔からの出土である以外は、②-2区および①-3区の遺構外出土（第112図-99～107）である。このうち①-3区は1点のみであり、他は②-2区遺構外となる。

②-2区は周溝墓などの墓域にあたっており、これらも本来は墓に伴うものと理解できよう。この②-

2区では円形周溝墓SM23の主体部から鉄石英製の管玉1点(第59図-2)も出土している。ヒスイ製と思われる勾玉1点(第112図-95)も③-2区の遺構外から検出されている。勾玉はもう1点(第112図-96)出土しており、碧玉製である。また碧玉製の勾玉状を呈するものが認められるが、穿孔はないため、不明石製品となる(第112図-98)。興味深いのは流紋岩製の垂飾りである(第112図-97)。材質的には装身具としてはあまり用いられないものだが、赤鉄鉱がクラックに沿って沈殿したため、独特の赤色模様を醸し出していることから装身具に選択した材質なのであろう。なお、SB10からは土製勾玉とみられる土製品も1点出土している。

8. 水田跡(第200・201図)

本遺跡群の低地・③-2区、④-1・2区、⑤区において水田跡が検出された。③-2区では2面、④-1区では2面、④-2区では2面、⑤区では3面の水田跡を調査した。調査区ごとに記載を進めてきたため、調査区を越えた水田跡のありかたについてここで記してみたい。③区と④区については隣接する調査区ということもあり、水田面の対比が比較的容易であったため、上層から、第1水田、第2水田、第3水田として共通の水田面の呼称でとらえた。一方の⑤区では、③・④区にはみられない水田面が確認されたことから、調査段階では⑤区独自に上層から水田A、水田B、水田Cと呼称することにした。そして、出土遺物や検出層位の検討を経て、水田A=第1水田、水田B、水田C=第2水田、第3水田、という対応関係にあることを確認するにいたった。

(1) 水田A・第1水田

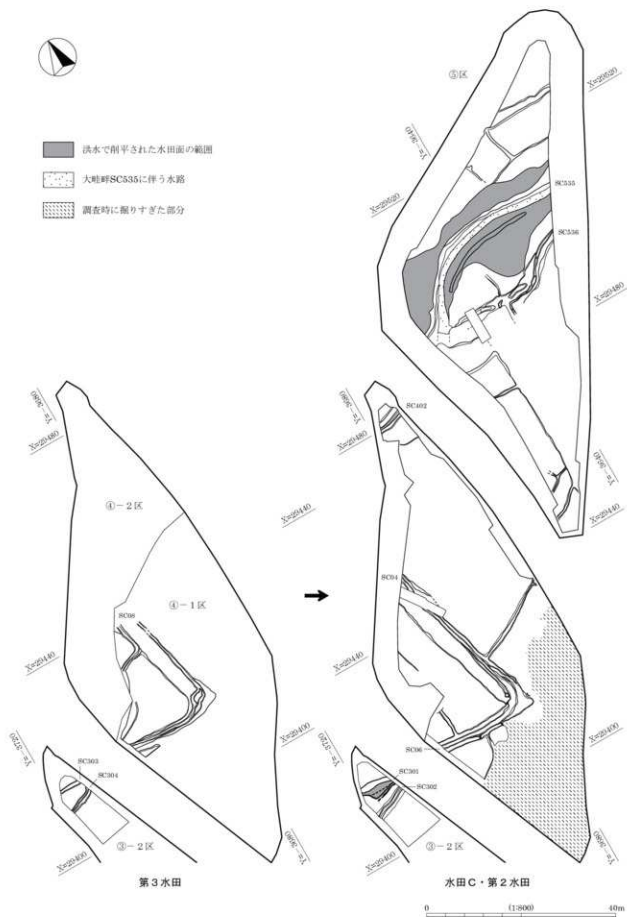
土層断面では③-2区・④-1区でも確認できたが、面的に調査できたのは④-2区と⑤区のみである。⑤区では被覆砂層が北側部分のみにしか認められなかったため、水田面の検出は被覆砂層の存在する箇所に限られた。④-2区についても同様で被覆砂層のみられた調査区の北寄りの一部のみの検出であった。畦畔は⑤区では、ほぼ南北方向に5条、④-2区では1条が確認できた。地形に沿って水田を構築していたことが理解できる。⑤区では調査区の北東隅にこれに直交するように東西方向に1条の畦畔がみられた。また被覆砂層が途切れる箇所にあたるため畦畔としての盛り上がりは不明であったが、南北畦畔と直交して東西方向には段差が認められる。ここにも東西畦畔が存在したと推測できる。調査区内においては水田の区画を知るには情報が足りないが、南北約40m、東西約7~15mほどの区画であったとの推測もできそうである。出土遺物は18世紀後半から19世紀前半に比定されるものが最も新しいため、洪水砂により覆われたのはこの時期をさかのぼらない近世以降に位置づけられよう。

(2) 水田B

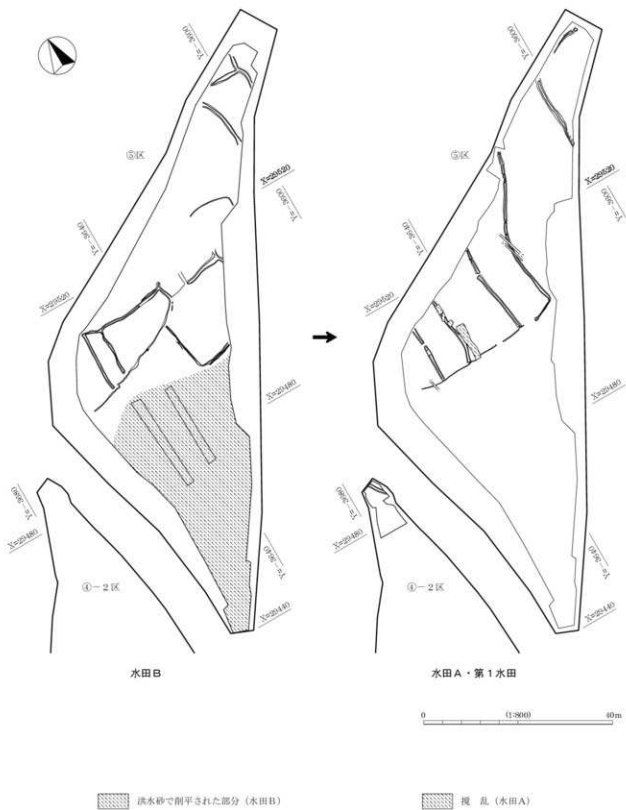
⑤区以外には認められなかった水田面である。南側は洪水砂により水田層までを削平されているが、北側では砂層に覆われた水田が検出されている。畦畔はほぼ南北-東西方向に構築されている。区画は推測できる限りで、約50mから約270mまでさまざまな大きさのものがみられる。方位は、水田A・第1水田と同じくほぼ南北を示す。最も新しい出土遺物が平安時代9世紀頃の須恵器であるため、洪水砂に覆われたのはこの時期より新しく、水田A・第1水田より古い時期のなかに位置づける。

(3) 水田C・第2水田

③-2区、④-1・2区、⑤区で面的に調査した水田面である。今回の調査で最も広範囲にその広がりが確認できた水田跡である。⑤区ではSC535が東西の大畦畔であり、これは④-2区のSC402に続く。④-1区の南北大畦畔SC04と交差するものと考えられる。この南北大畦畔SC04は、東西大畦畔SC06と交差し、③-2区のSC301へ続く。大畦畔は水路を伴い、ほぼ南北方位を示している。この大畦畔が区画す



第200図 水田の変遷 (1)



第201図 水田の変遷 (2)

る内部を畦畔畔により小区画がなされている。この水田跡を襲った洪水砂は相当なものであり、水田面が削平された部分が少なくない。③-2区と⑤区では水田面が数cmから10cmほど削平されていることが認められる。④-1区でも水田面の凹凸が著しく、削剝を受けていたことが調査時の所見に残されている。また植物珪酸体分析によれば③-2区の第2水田ではイネ属の植物珪酸体含量が少ないことがわかっている。所産時期は、最も新しい出土遺物が、平安時代・9世紀代の土器であることから、平安時代を時期の上限に位置づけられると考える。

(4) 第3水田

④-1区の一部でのみ面的調査ができた水田面である。畦畔の位置や水田区画は第2水田と非常に類似している。大畦畔に伴う水路も第2水田とほぼ同じ位置にあり、第2水田の水路SD17が構築される以前に少なくとも2度(SD27・SD28)は造り替えられていることがわかる。また植物珪酸体分析によれば、イネ属の機動細胞珪酸体含量は1,000個/g未満と少ない結果となっている。耕作期間が短かったことが推測されるのではなかろうか。時期は水田C・第2水田より古い所産であることは間違いないが、出土遺物や水田区画の類似性などからみればそれほど離れた時期とは想定しがたく、平安時代を中心とした時期に位置づけられると考えられる。

註1 前田氏は人面付土器Aを「髯面付土器」と「顔壺」、人面付土器Bを「仮称 非鯨面人形容器」と呼び分けることを提唱する。

有馬遺跡の報告書では人形土器、小八木志貝戸遺跡の報告書では人面付土器という名称となっているが、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団刊行の「群馬の遺跡 3 弥生時代」および同事業団のホームページでは「人形土器」の名称で紹介されている(群馬県埋蔵文化財調査事業団2004)。

なお群馬県中之条町の川端遺跡でも人形土器という名称で「人形土器」の出土をみる。

註2 29の人形土器は「異形」な様相であることがひとつの大きな特徴であることは、設楽博己(東京大学大学院教授)からのご教示によるものである。ご教示に感謝申し上げたい。

註3 佐久市西一本柳遺跡から出土した人面付土器は、頭部のみしか残存していないが、いれずみを施しておらず、立体的な造形である。人形土器Aに分類できると考える。

註4 浅間山南麓に位置する小諸市郷土遺跡は縄文中期後葉の大規模集落遺跡であるが、軽石製品が172点出土している(縄文センター2000)。また佐久地方では古墳時代後期以降のカマドの支柱にも加工した軽石を用いている事例が少なくない。



②-1区・③-1区 全景



③-2区・⑤-2区 全景

第6章 科学分析

濁り遺跡と西一里塚遺跡群では、自然科学的手法を用いて過去の自然環境や各種遺物の材質、遺物・遺構の年代などの情報を得るために、各種の科学分析を分析会社に委託して実施した。その分析結果の概要については当該ページに記載しているものもあるが、本項ではその実施項目・試料、結果概要等をまとめておきたい。なお、業者からの提出された報告書については、実施年度別に別添のDVDに収録してある。

科学分析項目・分析目的・結果概要

1. 放射性炭素年代測定（分析委託：バリノ・サーヴェイ株式会社）

(1) 分析目的

西一里塚遺跡群においては、放射性炭素年代測定が可能な炭化物や、炭化材、木製品などが出土した。遺構の所産時期あるいは埋没時期を推定するひとつの手段として、自然科学的年代測定による数値を得るために実施した。

(2) 分析試料・結果概要

ア 堅穴住居跡出土の炭化材（平成16年度実施）

西一里塚遺跡群のSB04から出土した炭化材2点についてAMS法により行った。これらは床面から出土した炭化材である（サンプル1および3）。ともにコナラ亜属コナラ節で、サンプル1は試料の年代（同位体補正）が2,020yrBP、暦年較正年代はcalBC54-calAD31で紀元前後の1世紀に位置づけられる。サンプル3は試料の補正年代が2,110BP、暦年較正年代はcalBC186-88を測り、紀元前2世紀末頃に位置づけられる年代である。2試料の較正年代はやや差異があるが、弥生時代中期後半の堅穴住居跡の炭化材から導き出された数値としてここに提示しておきたい。

イ 溝跡出土の立木（平成18年度実施）

西一里塚遺跡群のSD65から出土した立木（オニグルミ）1点について β 線計数法を用いて行った。補正測定結果は $2,240 \pm 80$ yrBPを示す。暦年較正結果はcalBC394-calBC204である。紀元前4世紀から紀元前3世紀に位置づけられる年代である。SD65は弥生時代後期に位置づけられるため、較正年代は大きくさかのぼる結果となった。

ウ 土器に付着した炭化物（平成21年度実施）

イの立木と同じ西一里塚遺跡群のSD65から出土した土器2個体（第154図SD65-5〔管理番号342〕、第155図SD65-12〔管理番号388〕）に付着した炭化物1点づつ、計2試料についてAMS法により行った。2個体の寛（5・18）に付着した炭化物（おこげ）の2試料である。その結果、補正年代は5が $1,930 \pm 25$ yrBP、18が $1,840 \pm 25$ yrBPをはかり、暦年較正結果は5がcalAD32-calAD122、18がcalAD133-calAD214である。5が紀元1世紀～2世紀前半、18が2世紀前半～3世紀前半にあたる。SD65は弥生時代後期に位置づけられるが、較正年代もほぼ合致するとみてよいだろう。

エ 濁り遺跡および西一里塚遺跡群出土の木製品（平成23年度実施）

濁り遺跡出土の木製品2点（SK28-3・4 [管理番号 W27・W12]）、および西一里塚遺跡群出土の木製品7点（④-1区第3水田-1 [管理番号 W7]、⑥-2区低地-5 [管理番号 W103]、⑤区水田C-5 [管理番号 W108]、⑤区SD65-62 [管理番号 W119]、⑤区SK101-12・21・PL85-2 [管理番号 W239・W240・W235]）について、それぞれAMS法により行った。

i) 濁り遺跡

SK28-3・4 [第21図 管理番号 W27・W12]

3・4は鍬身の身製品もしくは素材段階のものである。補正年代は3が $1,190 \pm 20$ yrBP、4が $1,235 \pm 20$ yrBPである。暦年較正結果では、3がcalAD782- calAD880、4がcalAD695- calAD855である。本跡から出土した土器は9世紀後半に比定できるので、大きな齟齬はないと思われる。

ii) 西一里塚遺跡群

a) ④-1区第3水田-1 [第122図 管理番号 W7]

b) ⑤区水田C-5 [第150図 管理番号 W108]

畦畔の芯材として用いられたものであり、本来は建築部材と思われる。補正年代は $2,030 \pm 20$ yrBP、この補正年代に基づく暦年較正結果はcalBC48-calAD213という数値が出された。弥生時代に比定される結果となり、出土遺物からみた年代観と相当な齟齬が生じた。水田Cの下層では弥生時代の土坑や溝が検出された第4調査面があり、木製品の出土も多くみられる。この数値を踏まえたひとつの解釈としては、水田Cの畦畔を補強する際に、下層から手に入れた木製品を再利用した可能性もあげられないだろうか。

c) ⑤区SD65-62 [第159図 管理番号 W119]

樋である。補正年代は $1,855 \pm 20$ yrBP、これに基づく暦年較正結果はcalAD126-calAD213である。2世紀前半～3世紀前半頃にあたる。出土土器からすると弥生時代後期に位置づけられるため、おおよそ較正年代の数値と合致する。

d) ⑤区SK101-12・21・23 [第167・169・PL85 管理番号 W239・W240・W235]

12は鍬柄（曲柄・膝柄）、21は破風板、23は芯持丸木を用いた施設部材である。補正年代は、12が $1,875 \pm 20$ yrBP、21が $2,140 \pm$ yrBP、23が $1,870 \pm 20$ yrBPであり、これに基づく暦年較正結果は12がcalAD80-calAD207、21がcalBC338-calBC118、23がcalAD84-calAD209の数値となる。つまり12・23が紀元1世紀後半～3世紀初頭頃、21が紀元前4～紀元前2世紀頃を示す。出土土器からすると弥生時代後期に位置づけられるため、12・23の数値とおおよそ合致する。

e) ⑥-2区低地-5 [第190図 管理番号 W103]

5は叉首あるいは横架材と思われる。補正年代は $1,305 \pm 20$ yrBP、これに基づく暦年較正結果はcalAD666-calAD764である。7世紀後半から8世紀後半にあたる年代である。⑥区低地から出土する土器には弥生土器の他、9世紀の須恵器や12世紀頃の白磁片がみられた。低地という性格からしてそれほどの齟齬はないとみてよいだろう。

2. リン酸分析（分析委託：バリノ・サーヴェイ株式会社、平成16年度実施）

(1) 分析目的

西一里塚遺跡群のSK08は土器棺墓である。土器内の土壌をリン酸分析することによって、遺体埋納の検証を行うために実施した。

(2) 分析試料・結果概要

西一里塚遺跡群の土器棺墓 SK08 の土器内および比較のため土器外から採取した試料 2 点について行った。その結果、土器外から採取した土壌は 1.70mg/g、土器内の土壌は 2.34mg/g と試料間に差異が認められたが、これらは火山性堆積物に由来する土壌で自然状態に含まれるリン酸量 (3mg/g) の範囲内にあるため、遺体埋納の指標となりうる有意差と指摘することはできないとの鑑定結果が出ている。

3. 材質分析 (分析委託：株式会社バレオ・ラボ、平成 21 年度実施)

(1) 分析目的

西一里塚遺跡群から出土した鉄鋼に付着する繊維および鉄剣に残された鞘の木質、土器内に残存した植物遺体の同定をすることにより、埋葬時における鉄鋼の状態や鞘の材質や植物遺体の種類を明らかにすることを目的に分析を実施した。

(2) 分析試料・結果概要

ア 鉄鋼に付着した繊維

SM07 出土の鉄鋼 (第 62 図-13) に付着していた平織状の繊維について実体顕微鏡による観察を行った後に、保存状態の良い箇所について電子顕微鏡を用いて観察同定した。その結果、全体的に鉄分が付着しているが、平織状の組織が観察され、それは絹の繊維であることが同定された。被葬者の着衣である可能性も否定できないが、ある程度緊縛しないと鉄鋼に繊維痕は残らないと考えるため、絹布で遺体を包んで埋葬したことを想定したい。

イ 鉄剣の鞘

SM14 出土の鉄剣 (第 56 図-1) に認められた鞘と思われる木質が付着していたため、電子顕微鏡を用いた観察同定を行った。その結果、複数箇所において付着していた木質は、針葉樹であることが確認できた。ただし全体的に鉄分が吸着しているため、樹種の同定まではできなかった。

ウ 土器内の植物遺体

⑥-1 区および SD65 出土の 2 点の土器 (第 191 図⑥-1 区低地-15 [管理番号 515]、第 154 図 SD65-5 [管理番号 342]) 内で認められた束状の植物遺体について、それぞれの材質を分析した。土器内に残存した植物遺体の分析を行った。5 の土器内の残存植物遺体について行い、その結果、裸子植物か双子植物あるいは単子葉植物の茎あるいは根と同定された。材質分析は、⑥-1 区低地・砂層から出土した須恵器坏内に残存していた植物遺体について行った。その結果、裸子植物か双子植物あるいは単子葉植物の茎あるいは根と同定された。ともに流水のある場所からの出土であるため、溝跡および低地において植物の茎あるいは根が入ったものと想定する。

4. 樹種同定 (分析委託：パリオ・サーヴェイ株式会社 平成 16・18・23 年度実施)

(1) 分析目的

炭化材や木製品、流木などの木材の樹種を把握し、利用された木材の傾向を把握するために樹種同定を行った。

(2) 分析試料・結果概要

ア 西一里塚遺跡群出土の炭化材 (平成 16 年度実施)

SB04 出土の炭化材 4 点を試料にして行った。その結果、4 試料とも落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属

コナラ節に同定された。コナラ節の木材は強度が高い材質をもつ。

イ 西一里塚遺跡群出土の流木（平成18年度実施）

⑥区低地から出土した流木のうちの50点を試料にして行った。その結果、広葉樹6種類（オニグルミ・ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属・バラ属）に同定された。なかでもヤナギ属が多く試料50点のうち45点を占める。根材は含まれておらず、枝に由来すると考えられる。ヤナギ属は河畔林を構成する種類として、より河道に近い場所にも生育が可能であるため、河畔に生育していた樹木の枝が検出されたとみられる。

ウ 濁り遺跡および西一里塚遺跡群出土の木製品（平成23年度実施）

両遺跡から出土した木製品のうち濁り遺跡27点、西一里塚遺跡群108点、計135点について行った。

濁り遺跡では、針葉樹2分類群（サワラ、ヒノキ科）と広葉樹4分類群（コナラ属コナラ亜属クスギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、キハダ）に同定された。6点を同定した柱材は芯去分割材では加工性、耐水性のあるサワラを、芯持ち丸木では強度の高いクスギ節、コナラ節、クリが用いられており、形状や木取りにより樹種構成が異なることが認められた。鋸身には強度の高いクスギ節およびコナラ節を用いていた。

西一里塚遺跡群では、針葉樹4分類群（カラマツ、モミ属、サワラ、ヒノキ科）と広葉樹12分類（オニグルミ、アサダ、コナラ属コナラ亜属クスギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、ケヤキ、ヤマグワ、サクラ属、ネムノキ、ニガキ、ケンボナシ属、タニウツギ属）に同定された。なかでもサワラは多く認められ、弥生時代の試料では全体の3分の2を占める。なお、用材別の樹種については第5章第5節に記載しているのでご参照いただきたい。

5. 土壌分析（分析委託：バリノ・サーヴェイ株式会社 平成18・21年度実施）

(1) 分析の目的

土坑や土層断面から採取した試料について、珪藻分析、植物珪酸体分析、花粉分析、種実分析を行うことにより、各時代の植生や水田稲作の状況などを把握するために実施した。

(2) 分析試料と結果概要

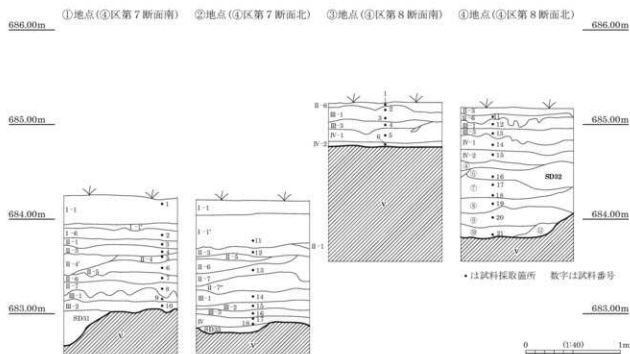
ア ②-2区、③-2区、④-1区、⑤区、⑥-2区低地（平成18年度実施）

い ④-1区

第7断面および第8断面において層位ごとに採取した計35点の土壌試料について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行った。さらに第2水田を覆う洪水砂のテフラの検証と第8断面の4試料については種実遺体分析も実施した。第7断面では2箇所の土層で試料1～18を、第8断面でも2箇所の土層から試料1～21を採集した（第202図）。第7断面では試料1・11が現耕土、試料3・4・12が第1水田、試料9・10・14・15・16が第2水田、試料5・6・7・8・13はその被覆砂層、試料17・18はIV層である。第8断面では試料2・3・12・13が第2水田、試料1・11がその被覆砂層、試料5・6・14・15がIV層、試料16～21はSD32の埋土である。

テフラ分析の結果、火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.500} \sim 1.502$ のレンジに極めて高い集中度を示した。この火山ガラスは、浅間火山から噴出した浅間軽石流堆積物と考えられる。試料は第2水田を覆う砂層から採取されていることから、周辺に分布する軽石流堆積物が流水等の影響を受け再堆積したものと推測される。

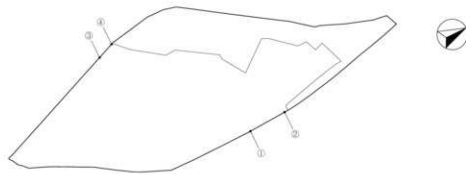
珪藻分析においては、各試料から珪藻化石が豊富に産出し、完形殻の出現率が約70%と珪藻化石の保



基本土層

- I-1 褐色(10YR4/1) しまりあり, 粘性弱, 塊状土, 溶脱層。
- I-1' 埋め戻し土, 複層。
- I-6 灰黄褐色(10YR4/2) シルト～砂, しまりあり, 粘性I-3より弱。
- II-1 黒色(10YR1, 7/1) しまりあり, 粘性強, 第1本田耕土, 溶脱層。
- II-3 褐色(10YR4/1) しまりあり, 粘性弱, 第1水田耕土, シルト主体に砂・φ1cm前後のパミス含む。
- II-4 褐色(10YR4/1) 砂層, しまりあり, 粘性弱, 細砂に若干シルトが混入, ラミナあり。
- II-4' 粗砂, パミス多量混入。
- II-4'' 灰粘質土を含んだ砂層。
- II-5 灰黄褐色(10YR4/3～5/4) しまりあり, 粘性なし, 粗砂層②, 粗砂土状, ラミナあり。
- II-6 灰黄褐色(10YR4/2～6/2) 細砂～中粒砂, しまりあり, 粘性なし, 粗砂層③, ラミナあり, 鉄分集積あり。
- II-7 褐色(10YR4/1) しまりあり, 粘性ややあり, 側溝層(III層境回凸盛しい), 耕土に砂・パミス混在, 部分的にパミス集中。
- II-7' 灰色細砂。

- III-1 黒色(10YR2/1) しまり・粘性強, 耕土, III-2層に比べやや灰色がかったりいる砂混入。
- III-2 黒色(10YR1, 7/1) しまり・粘性強, 下層の砂礫をまきこむ箇所あり。
- III-3 濃い黄褐色～にぶい黄褐色の砂層, 粗砂～細砂, 一部下層の黒色土混入。
- IV-1 黒色(10YR2/1) しまりあり, 粘性強, 細砂を若干含む。
- IV-2 黒色(10YR1, 7/1) 上層に比べ更に黒土が増す。
- V 地山(茂閑第1軽石流)。
- SD32 ④ 褐色(7.5YR4/1) しまりあり, 粘性ややあり, 砂・赤っぽいシルト混入。
 - ⑥ 黒色(10YR2/1) しまりあり, 粘性弱, 黒土に砂混入。
 - ⑦ 黒色(10YR1, 7/1) しまり・粘性強, φ5cm前後のパミス混入。
 - ⑧ 黒褐色(10Y3/1) しまり・粘性あり, パミスなどの混入物がほとんどない。
 - ⑨ オリーブ黒色砂礫層, しまり・粘性なし。
 - ⑩ 黒色(10YR1, 7/1) しまり・粘性あり, 砂・50の中間的な堆積土。
 - ⑪ オリーブ黒色砂層, 51に比べ黒色土の混入多く硬はなくなる。

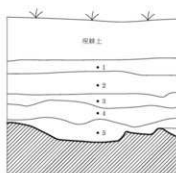


④区 土壌試料採取地点

第202図 土壌試料採取地点図(1)

⑤地点(②-2区西壁断面)

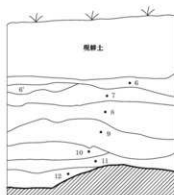
—693.965m—



- 1 黒褐色 粘土層, 水田層。
- 2 黒褐色 シルト, 第2水田対応層。
- 3 暗褐色 シルト, しまり強, 鉄・マグネシウムの集積大。
- 4 灰オリーブ色 砂質土, しまり強, 粘性あり, φ1cm程のバミス含む。
- 5 黒褐色 砂質土, しまり・粘性強, 包含層。

⑥地点(③-2区北壁断面)

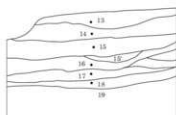
—694.00m—



- 6 砂層。
- 6' 粒子の粗い砂層。
- 7 第2水田。
- 8 暗褐色 砂〜シルト土, しまりあり。
- 9 第3水田。
- 10 暗褐色 シルト, しまり・粘性あり。
- 11 黒色 シルト, 包含層。
- 12 黒褐色 シルト, 粘性強。

⑦地点(⑥-2区低地)

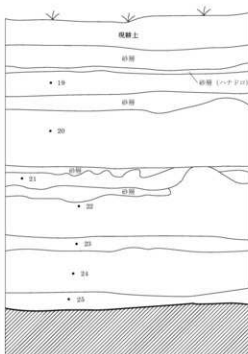
—679.50m—



- 13 褐色〜黒褐色 シルトに砂礫が流入, 自掘出土。
- 14 黒色〜黒褐色 13よりあらいシルト〜細砂, 礫を多く含む。
- 15 14に類似, やや灰色がかる。
- 16 15層に泥炭が凝結する。
- 17 オリーブ黒色 16よりやや明るい泥炭層。
- 18 オリーブ褐色 砂の流入が多くなる泥炭層。
- 19 黄褐色(2.5YS/3) 細砂〜粗砂, この砂層中〜下部でしがらみに似た自生樹木出土。

⑧地点(⑤区北壁断面)

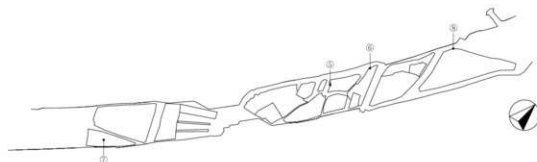
—695.40m—



- 19 水田A
- 20 水田B
- 21 砂層(ハナドリ)
- 22 水田C
- 23 暗褐色 粗砂層流入
- 24 黒褐色 シルト
- 25 黒色 シルト, 包含層。

●は試料採取箇所 数字は試料番号

0 (1:400) 1m



第203図 土壌試料採取地点図(2)

存状態は良好であった。第7断面では、淡水域に生育する水生珪藻が70%前後と優占し、次いで淡水～汽水生種が30%前後と多産、陸生珪藻は15%前後と少ないといった特徴を示した。第8断面では、淡水～汽水生種と水生珪藻が高い割合で混在する。第8断面下層のSD32埋土の珪藻化石群集は、特徴的に多産する種類はなく、塩分や塩類を豊富に含む水域を好む淡水～汽水生種、流水不定性種が産出し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種を伴うといった組成を示した。このことから、SD32が埋没する段階では、中栄養～富栄養の水質を呈する水域であり、流れの影響は小さく、淀みのような堆積（水城）環境であった可能性がある。また第3水田面を含むIV層でも同様な結果を得ているので、ここでも塩類を豊富に含む水域（沼沢～湿地）が存在したと考えられる。

花粉分析においては、第7断面では、木本花粉ではコナラ亜属の割合が高く、モミ属、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシダ属-アサダ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などが、また草本花粉では、イネ科とカヤツリグサ科が多く検出され、イボクサ属、ミズアオイ属等の水生植物も認められる。第8断面では、木本花粉はコナラ亜属とイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の割合が高く、モミ属、ツガ属等を伴うといった特徴を示す。一方、草本花粉では、第7断面と同様に、イネ科、カヤツリグサ科が多く検出され、イボクサ属、ミズアオイ属等の水生植物も認められる。また、イネ科やカヤツリグサ科は、上位に向かってやや増加する傾向が認められる。冷温帯落葉樹林としてはブナ林が代表的であるが、本分析結果ではブナ属は少なく、ナラ類が多産する傾向が認められた。周辺の山野ではブナではなくミズナラ林が優勢であったと推測される。針葉樹ではモミ属やツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科等がみられた。

植物珪酸体分析においては、各試料から植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良である。第7断面での植物珪酸体含量は、概して少なく、第2水田（第202図Ⅲ-1）が約5,000個/gと最も多いが、この他の試料は約1,000～2,000個/g未満である。産出する植物珪酸体の産状は、全体的にヨシ属の短細胞珪酸体が多く、次いでススキ属を含むウシクサ族やイチゴツナギ亜科の体細胞珪酸体が認められる。栽培植物のイネ属は第3水田の被覆砂層（第202図Ⅲ-3層）で出現し、上位の試料からも検出される。ただし、現耕土（第202図Ⅰ-6層）を除くといずれも機動細胞珪酸体のみであり、その含量は数十～数百個/g程度である。第8断面での植物珪酸体含量は、第7断面と比較すると多い。Na2で約4.2万個/gと最も多く、次いでNa19の約27万個/g、Na1の約1.7万個である。一方、Na5・13・14では約1,000個/g未満と少ない。産出する植物珪酸体の産状は同様な特徴を示し、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、不明キビ型が多く産出し、タケ亜科等が伴う。栽培植物のイネ属は、Na5で出現し、上位の試料からも検出される。Na2で短細胞珪酸体及び機動細胞珪酸体が最も多く、それぞれ約700個/g、約3,300個/gを示し、次いで、Na1で短細胞珪酸体は約100個/g、機動細胞珪酸体は約1,100個/gと多く、Na3・5・12・13では短細胞珪酸体は全く検出されない、或は僅かであり、機動細胞珪酸体はいずれも1,000個/g未満と少ない。珪藻分析結果や花粉分析結果では、塩類を豊富に含む水域であり、水田雑草となりうる水生植物の存在も示唆される。

なお、イネ属の植物珪酸体は、第2水田面及び第3水田面上位の土層から検出され、地点間及び試料間で差異が認められた。上述したように第8断面の第2水田面（Na2）ではイネ属の機動細胞珪酸体含量が多く、稲作の可能性が示唆される。一方、第7断面（Na9・14）では少ない、或は、全く検出されない。発掘調査所見によれば、第7断面の第2水田面は、耕土層が削割されていることが推測されていることから、地点間や試料間に認められたイネ属の植物珪酸体含量の差異、地点間のばらつきや耕土層の削割の影響を示している可能性がある。

種実同定により判明した種実遺体は、大部分が草本類であり、カヤツリグサ科、ナデシコ科、キジムシ

口類など開けた場所に草地を作る種類が多く、花粉分析結果でも草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等の開けた草地を作る種類が多く検出された。また、種実遺体や花粉分析には、ガンマ属、イボクサ、オモダカ科、イバラモ、タガラシ等の水生植物が認められることから、水湿地的な環境も示唆される。

ii) ②-2区西壁(第203図)

現耕土直下の土層から層位ごとに採取した5点を試料として、植物珪酸体分析を行った(第203図-試料1~5)。1は水田層、2~4は第2水田に対応するⅢa~c層、5はⅣ層である。植物珪酸体含量は、3.3万~12万個/gの範囲で認められた。各試料からは、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。試料5は、短細胞珪酸体約300個/g、機動細胞珪酸体約1,800個/g、顆粒珪酸体は約200個/gである。試料4は、短細胞珪酸体約400個/gに対して機動細胞珪酸体約4,000個/gと多い。試料3は、短細胞珪酸体約1,000個/gに対して機動細胞珪酸体は約700個/gと少ない。試料番号2は、短細胞珪酸体約700個/gに対して機動細胞珪酸体約2,600個/gと多く、顆粒珪酸体は約300個/gである。試料番号1は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体はそれぞれ約2,200個/g、顆粒珪酸体は約300個/gである。

この他の分類群では、タケ亜科やヨシ属、コブナグサ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められる。これらの分類群の産状は類似し、ヨシ属短細胞珪酸体の産出が目立ち、ススキ属短細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体の多い傾向が認められる。

iii) ③-2区北壁

現耕土直下の土層を層位ごとに採取した7点を試料として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行った(第203図-試料6~12)。7が第2水田、9が第3水田であり、6と8はそれぞれの被覆砂層となる。10・11はⅣ層にあたり、12は低地堆積土である。

珪藻分析においては、全般的に淡水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻)が全体の約65%と優占し、淡水~汽水生種も下部から試料10にかけて5~30%へ増加する。一方、好気的環境に耐性のある陸生珪藻は、上位に向かって減少する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)は、塩分濃度は、全般的に貧塩不定性種が優占するが、淡水~汽水生種と運動し貧塩好塩性種も多産する。水素イオン濃度は全般的に真+好アルカリ性種が優占し、PH不定性種は上位ほど減少する。流水に対しては、流水不定性種が全般的に優占し、上位に向かって真+好流水性種が増加する。弥生時代後期以前の土層とされる黒褐色シルト(試料番号12)における珪藻群集は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が優占し、好汚濁性種を伴うといった組成を特徴とし、陸生珪藻も多く産出した。したがって、弥生時代後期以前は、流水の影響の少ない沼沢地のような浅い水域であったと考えられ、これらの水域は富栄養化していたことが推定される。また、陸生珪藻が多産したことから、乾燥した環境となった時期もあったと考えられる。

花粉分析においては、試料11で花粉化石が少なかったが、この他の試料からは花粉化石が多く産出する。試料12は、シダ類胞子の割合が高い。木本花粉ではハンノキ属の割合が高く、コナラ亜属やニレ属-ケヤキ属が検出される。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科等が検出される。試料6~10は、花粉群集は類似し、木本花粉と草本花粉の割合は同程度である。木本花粉は、モミ属、ツグ属、トウヒ属、マツ属、ブナ属、コナラ亜属等が検出されるが、優占する種類は認められない。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が多く検出され、ガンマ属、ミズアオイ属等の水生植物も少量検出される。

植物珪酸体分析においてはその含量は、層位的な変化が認められる。試料12~9で約4.2万~14.8万個/gと増加し、上位の試料7・6では約1.6万~2.0万個/gと減少する。

栽培植物のイネ属は、試料12では検出されず、試料11から上位の試料より検出される。イネ属の植物

珪酸体含量も層位的な変化が認められ、試料11～9では、短細胞珪酸体は約600～2,400個/g、機動細胞珪酸体は約1,500～9,200個/gと増加する。一方、試料8では短細胞珪酸体は約300個/g、機動細胞珪酸体は約700個/g、試料7では短細胞珪酸体は約500個/g、機動細胞珪酸体は約1,100個/g、顆粒酸体は約100個/gと、試料9を上限として減少する傾向が認められる。

この他に検出される分類群や産状は類似しており、ヨシ属の産出が顕著であり、タケ亜科やコブナグサ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められる。特に、試料番号9ではヨシ属の植物珪酸体含量が多く、短細胞珪酸体は約5.9万個/g、機動細胞珪酸体は約1.1万個/gである。

iv) ⑥-2区低地（黒色土層・泥炭層）

第1調査面でもSD52・53を検出した段階で設定した東西方向の土層壁において採取した6点を試料として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行った（第203図-試料13～18）。試料13～15が黒色土層、試料16～18が泥炭層である。

珪藻分析は、全般的に水生珪藻が約60%、淡水～汽水生種が約25%産出する。ただし、試料番号15・14では陸生珪藻が約30%と多く産出する。淡水性種の生態性の特徴は、全般的に貧塩不定性種が優占し、貧塩好塩性種も約30%産出する。PHに対しては、真+好アルカリ性種が全般的に多産する。また、流水に対しては、流水不定性種が全般的に優占し、真+好流水性種も低率ながら各試料から産出する。

花粉分析においては、花粉化石の保存状態は悪く、産出数も少なかった。検出された花粉化石をみると、いずれも、この他の地点・試料で検出された種類からなり、木本類では、モミ属、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ亜属等、草本類ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が確認される。

植物珪酸体分析においては、その含量には層位的な変化が認められる。試料18～16では約5.7万～24万個/gと増加し、上位の試料では約4.9万、9.6万、6.1万個/gと減少する。

栽培植物のイネ属は、各試料から検出され、試料18～16では短細胞珪酸体は約500個/g、機動細胞珪酸体は約200～500個/gと少なく、試料15では短細胞珪酸体は約1,000個/g、機動細胞珪酸体は約3,000個/g、顆粒酸体は約500個/g、試料14・13では、短細胞珪酸体は約4,000個/g、機動細胞珪酸体は約7,200個/g、顆粒酸体は約200～500個/gと増加する。

この他に検出される分類群や産状は同様であり、ヨシ属の産出が顕著であり、タケ亜科やコブナグサ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められる。このうち、ヨシ属は、試料18～16で多く、試料16では短細胞珪酸体は約14万個/g、機動細胞珪酸体は約3万個/gである。

平安時代～中世の土層に相当する黒～黒褐色シルト～細粒砂（試料15・14）では、淡水～汽水生種、好汚濁性種を含む流水不定性種、さらに、堆積環境を異にする陸生珪藻が多産した。本地点の下の土層と同様に富栄養な堆積環境が推測される一方、陸生珪藻が多産したことや、本地点における花粉化石の保存状態が悪かったことから、乾湿を繰り返すような環境であった可能性がある。灰褐～黒褐色の砂礫が混じるシルト（試料13）も、淡水～汽水生種、好汚濁性種を含む流水不定性種の多産を特徴とすることから、浅く水の出入りが少ない、富栄養な水域が推定される。

v) ⑤区北壁

第1水田以下の土層から層位ごとに採取した7点を試料として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行った（第203図-試料19～25）。

珪藻分析においては、全般的に水生珪藻が約70%と優占し、淡水～汽水生種も20～30%みられ、陸生珪藻は少ない。淡水性種の生態性の特徴は、全般的に貧塩不定性種が優占し、貧塩好塩性種も淡水～汽水生種と連動して多産する。PHについては、真+好アルカリ性種が全般的に優占する。流水に対しては、全般的に流水不定性種が優占するが、試料24・21では真+好流水性種が30～40%産出する。

花粉分析においては、試料 21・24 で花粉化石の保存状態が悪く、化石は少なかったが、その他の試料からは花粉化石が多く産出する。花粉群集は、下位土層に相当する試料では木本花粉と草本花粉はほぼ同程度であるが、上位土層に相当する試料では、草本花粉の割合が高くなる傾向にある。試料 20・22・23・25 は組成が類似する。木本花粉は、コナラ亜属の割合が高く、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科等を伴う。草本類は、イネ科とカヤツリグサ科の割合が高い。一方、試料番号 19 は、木本花粉では、コナラ亜属も産出するがマツ属が優占する。草本花粉は、試料 20 と同様にイネ科が優占し、カヤツリグサ科が伴う。試料 20-19 からは栽培種のソバ属も検出される。

植物珪酸体分析においては、植物珪酸体含量は、層位的な変化が認められる。試料 25～23 では約 8.3 万～14.9 万個/g と増加し、試料 21 では約 2,500 個/g と減少する。また、上位の試料 20 では約 1.2 万個/g、試料 19 では約 4.8 万個/g と増加する。

栽培植物のイネ属は、試料 24・21 を除く試料から検出される。試料 25 では、短細胞珪酸体は約 1,400 個/g、機動細胞珪酸体は約 4,000 個/g、試料番号 23・22 では、短細胞珪酸体は 2,000 個/g 前後、機動細胞珪酸体は 6,000 個/g 前後、試料 20 では短細胞珪酸体は約 200 個/g、機動細胞珪酸体は約 1,700 個/g、試料 19 では短細胞珪酸体は約 4,100 個/g、機動細胞珪酸体は約 5,700 個/g、穎珪酸体は約 200 個/g である。この他に検出される分類群や産状は同様であり、ヨシ属の産出が顕著であり、タケ亜科やコブナグサ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められる。ヨシ属は、試料 25～23 では植物珪酸体含量が多く、短細胞珪酸体は約 2.6 万～6.5 万個/g、機動細胞珪酸体は約 1.2 万～2.0 万個/g である。

イ ⑥-1 区低地 (砂層)、⑥-2 区低地 (砂層)、SK70 (平成 21 年度実施)

i) ⑥-2 区 SK70

SK70 の埋土第 5 層から採取した 1 点を試料にして、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析種実遺体分析を実施した。花粉化石は、大部分が草本花粉であり、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科、イネ科等が検出された。サナエタデ節-ウナギツカミ節は虫媒花であり、これが多産したことは、近傍に生育していたものが花序ごと埋没したなどの状況が想定される。植物珪酸体は草本 6 分類群 (イネ、アワ近似種、エノコログサ属、ヒエ近似種、イネ科、ヒユ科) 76 個が検出された。このうちヒユ科 17 個を除く種実はずべて炭化していた。栽培種は、イネの穎 15 個・胎乳 6 個、アワ近似種の穎・胎乳 1 個、ヒエ近似種の胎乳 2 個が確認された。微細物分析種実遺体分析の結果によると、炭化したイネ、アワ (近似種)、ヒエ (近似種) の種実や、高率のイネ属植物珪酸体と粃殻や葉部に由来する多くの組織片が確認された。微炭粒の産状等も考え合わせると、火を受け炭化 (灰化) したイネの植物体が本土坑内に埋積したことが推定される。これらのことから、本跡の周辺は開けており、湿潤な場所にはヨシ属が、やや乾燥した場所にはススキ属などが草地を形成していたと推定され、またイネ、アワ・ヒエ (近似種) の植物質食料としての利用も推定される。

ii) ⑥-1 区低地 (砂層)

⑥-1 区・第 187 図の C-D 断面第 4 層から採取した。⑥-1 区低地では、木本花粉はコナラ亜属がやや多く、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などがみられる。草本花粉は、イネ科が多く、イネ科花粉中には栽培種のイネ属も確認される。この他に、カヤツリグサ科やヨモギ属が検出されるほか、栽培種のソバ属が検出される。植物珪酸体含量は約 5,300 個/g である。検出された分類群は、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族などが検出され、概してヨシ属の含量が高い。組織片では、ウシクサ族の機動細胞片が僅かに認められる。種実遺体分析では木本のタニウツギ属 2 個と、草本 18 分類群 (サジオモダカ属、オモダカ科、ホツ

スモ近似種、イネ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ポントクタデ近似種、サナエタデ近似種、ナデシコ科、アカザ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、ハギ属、スミレ属、ウド、シロネ属、トウバナ属、ナス科、キク科) 156個が検出された。栽培種は、イネの穎が11個確認された。栽培種を除く分類群のうち、木本は、森林の林縁部などの明るく開けた場所に生育する落葉低木のタニウツギ属が確認された。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く確認され、沈水植物のホッスモ近似種や、サジオモダカ属、オモダカ科、ホタルイ属などの水生植物、ポントクタデ近似種、シロネ属などの湿生植物を含む。

iii) ⑥-2区低地(砂層)

試料は第187図E-F断面第21層から採取した。花粉化石は、木本花粉と草本花粉が同程度検出される。木本花粉では、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属等がみられるが、際だって多く産出する種類は認められない。草本花粉では、イネ科、キク亜科等が検出される。イネ科花粉中には、栽培種のイネ属が確認される。植物珪酸体含量は約2.0万個/gである。栽培種のイネ属が検出されるが含量は低く、短細胞珪酸体が約100個/g、機動細胞珪酸体が約700個/gである。栽培種を除く分類群では、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出され、概してヨシ属の含量が高い。組織片は検出されない。種実遺体同定は、草本33分類群(サジオモダカ属、オモダカ属、オモダカ科、イボクサ、イネ、アワ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、アサ、ミズ属、ミゾソバ近似種、イスタデ近似種、サナエタデ近似種、タデ属、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、タガラシ、キンボウケ属、ミズオトギリ、アブラナ科、スミレ属、ゴキヅル、セリ科、アカネ科、イヌコウジュ属、シロネ属、ナス近似種、ナス科、メナモミ属、キク科) 715個が検出された。このうち、イネの穎4個、アワ近似種、イネ科、サナエタデ近似種、イヌコウジュ属各1個は炭化が認められる。栽培種は、イネの穎44個、アワ近似種の胚乳1個、アサの果実4個、ナス近似種の種子1個が確認された。栽培種を除く分類群のうち、サジオモダカ属、オモダカ属、オモダカ科、イボクサ、ホタルイ属などの水生植物が全体の46%を占め、湿生植物のミズ属、ミゾソバ近似種、タガラシ、キンボウケ属、ミズオトギリ、ゴキヅル、セリ科、シロネ属等も確認された。

⑥-1区低地、⑥-2区低地とも砂層から採取した試料である。分析結果からヨシ属や水湿地生植物が生育する環境にあったことが知られる。樹種同定でも⑥-2区低地の砂層上部ではヤナギ属の流木が多数確認されている。ヤナギ属の樹木もみられる環境が想定される。



④-1区第7断面 土層

第7章 総括

本書に掲載した佐久市の濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群は、中部横断自動車道建設に先立ち、平成16年度から19年度にわたり発掘調査が実施された。そして平成21～23年度に整理作業を行い、ここに報告書を刊行するに至った。今回の発掘調査により、明らかとなった成果をまとめてみたい。

1. 遺跡の立地

濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群は佐久市の塚原、平塚、岩村田地籍に位置する。長野幹線佐久平駅の南にあたる地域である。岩村田方面から県道下仁田浅科線を西へ向かい、赤岩橋を渡ると左手が濁り遺跡となる。そして濁り遺跡の南には、久保田遺跡、西一里塚遺跡群が続いている。石尊山北の血の池から発する濁り川の右岸地域にあたる。濁り川は湯川と合流し、千曲川へと流れ下っていく。

本書掲載の3遺跡が立地するこの地域は、佐久平北部の特徴的な地形である田切り地形が消滅し、代わって鳥状の高まりがあらこちに点在する独特の風景が広がっている。この高まりは流れ山と呼ばれるもので、約23,000年前に浅間山を構成する黒斑山が山体崩壊を起こした際に流出した土石なだれ（塚原土石なだれ）の残丘である。この塚原土石なだれを基盤とし、さらにその上に浅間山を起源とする軽石流の二次堆積物とみられる層が積み重なっている。流れ山の間には低地と微高地がみられる。つまりこの地域に立地する3遺跡は、流れ山の残丘と低地、それに微高地という多様な地形の上に営まれていたことがわかったのである。

今回の発掘調査は、3遺跡あわせて全長約1.1kmの範囲に及ぶ。つまりこの範囲に幅約50mのトレンチを南北方向に貫通したことになる。こうした多様な地形に応じて、遺跡の内容も時代も多岐にわたることが発掘調査によって明らかとなってきたのである。

2. 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺構・遺物は発見されなかった。これは第3章でも指摘したように、佐久平北部では約13,000～11,000年前に噴出した浅間山の軽石流の堆積により、それ以前の人間の活動の痕跡を厚い軽石流の下に埋没させたか、あるいは押し流してしまったと考えられるからである。

縄文時代は、遺構の検出はなく、遺物で土器片約40点を出土したにすぎない。時期は早期、前期前半、中期末～後期、晩期のものである。佐久地方の千曲川右岸地域では浅間山南麓および東部の関東山地沿いに縄文時代の遺跡分布が集中する。弥生時代以降は大規模な集落遺跡が展開する田切り台地上でも、縄文時代の集落跡の発見は少ない。ここは狩猟場となっていたようであり、陥し穴の検出が長土呂遺跡群、聖原遺跡、近津遺跡群などの遺跡で確認されている。一方、今回調査した濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群では、陥し穴の検出はなかった。田切り地形が消滅し、低地が広くみられるこの場所は、狩猟場としても適さない地であったと考えられる。

3. 弥生時代

中期後半に西一里塚遺跡群では集落が出現する。調査区内では竪穴住居跡4軒が検出された。隣接・近接する佐久市教委による過去の発掘調査成果も鑑みると、①～④区の東側に集落は伸びていくことが理解できる。

ところで、佐久地方では中期後半に湯川右岸の根々井地籍から一本柳遺跡地籍に大規模集落が出現する。西一本柳遺跡、北西の久保遺跡、五里田遺跡である。東西1kmほどの範囲にこれらの遺跡は集中しており、西一本柳遺跡は現在までに17次を超える発掘調査が行われ、140軒以上の竪穴住居跡が発見されている。北西の久保遺跡では竪穴住居跡91軒が、五里田遺跡では43軒の竪穴住居跡が検出されている。以上の3遺跡をあわせた中期後半・粟林期の居住域は約13haと想定されている（小山2011）。従来想定されていた以上の大規模集落の存在が明らかとなってきたのである。これらは西一里塚遺跡群から東方および南東方へ500mほど離れたところに所在している。また湯川の下流域にも根々井芝宮遺跡、寄塚遺跡群、川原端遺跡、森平遺跡など中期後半の遺跡がおよそ3kmの範囲に続いている。西一里塚遺跡群もこうした中期後半に出現する一連の遺跡群のひとつとして理解するべきであろう。この時期になり一挙に水田開発が進められたことを現わすとみられるが、中期後半に限らず弥生時代の水田跡は佐久地方ではいまだ発見されていない。西一里塚遺跡群の低地では平安時代以降の水田跡はみつがっているが、水田跡は確認できなかった。水田の立地が平安時代以降とは異なっていたためだろうか。今後に残された課題である。

後期になると、中期後半には集落域だった西一里塚遺跡群の①～④区の微高地は墓域に変わる。円形周溝墓、方形周溝墓、木棺墓、土器棺墓がみられてくる。集落は、①-4区の微高地上および⑥-1区の流れ山上に営まれている。円形周溝墓（SM14）からは鉄剣が、また木棺墓（SM07）からは鉄銅が出土する。佐久地方においての鉄剣の出土は、近接する五里田遺跡で中期後半の竪穴住居跡2軒から2点が検出されており、うち1点は布状の繊維が螺旋状に巻きつけてあった。鉄銅の出土事例をみると、五里田遺跡では中期後半の住居跡2軒から鉄剣2点が出土し、後期の円形周溝墓1基から7点の鉄銅が検出されている。鉄銅は中期後半の住居跡からも5点が発見された。佐久市平賀・瀬戸地籍に所在する後家山遺跡では螺旋形鉄銅が後期とみられる木棺墓から出土している。他にも上直路遺跡や柳堂遺跡などから出土をみる。

佐久地方の弥生文化は後期に最盛期を迎える。とりわけ佐久平北部で岩村田・長土呂地籍に遺跡は集中する。西一里塚遺跡群の周辺は、先述した西一本柳遺跡や北西の久保遺跡、円正坊遺跡、周防畑遺跡群、西近津遺跡群など大規模な集落遺跡が連なる。これらの遺跡からは先述したように鉄剣、鉄銅、銅鋼など稀少品の出土をみる。また西近津遺跡群では約18m×約9.5mという全国でも最大級の大形竪穴住居跡が発見される。このように佐久平北部の弥生文化の一大拠点であることが改めて再認識されてきている。西一里塚遺跡群では今回の調査で佐久地方においては出土例の少なかった木製品もみられ、こうした佐久平北部の弥生文化の実像に迫るための新たな資料を提供することができたといえよう。

一方の濁り遺跡、久保田遺跡では弥生時代の遺物が数点検出されたのみである。濁り川の氾濫原が主体を占めるこの地を生活の場にはできなかったのであろう。

4. 古墳時代から平安時代

西一里塚遺跡群では古墳時代初頭の住居跡1軒が検出された。その後は、後期の土器片がわずかに出土したにすぎない。

平安時代になると、濁り遺跡、久保田遺跡では集落が出現する。調査区内で検出されたのは、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、土坑23基のみであるが、集落は東側の調査区外に伸びていくとみられる。集落の

規模は不明であるが、9世紀後半に位置づけられる。遺物包含層出土土器をみても9世紀後半のもので占められているため、この時期に限定された集落である可能性もある。

佐久平北部の田切り台地上では7世紀後半から9世紀の間には、大規模な集落が密集する佐久郡の中核地域となっていた。小諸市・佐久市・御代田町にまたがる鋳師屋遺跡群、小諸市の中原遺跡群、佐久市の聖原遺跡、栗毛坂遺跡群、芝宮遺跡群、西近津遺跡群などがあった。東山道や長倉駅・佐久郡衙などの有力推定地もこの地域にある。こうした佐久平北部の田切り台地上に栄えた大集落遺跡群は次第に規模を縮小し、代わって9世紀後半以降には、新たな集落が各地に出現する。浅間山麓や佐久市の東山地域、南佐久郡南部の標高1,000 mを越える高地などそれまで集落が営まれなかった場所にも小規模な集落遺跡が発見されている。濁り川の氾濫原に接した場所に立地する濁り遺跡の集落跡もこうした動きのなかで理解できると思われる。

また、平安時代以降には西一里塚遺跡群の低地で水田が営まれるようになるとみられる。水田C・第2水田および第3水田が該当しよう。低地利用の大きな画期といえるかもしれない。また水田跡からの出土土器は、破片資料のため時期の細分は難しいが、西一里塚遺跡群の水田が濁り遺跡、久保田遺跡の集落と関連性をもつものである可能性は高いと思われる。濁り川兩岸の田切り地形が消滅する低地は、従来から生産地帯として想定されていたが、それは佐久市教委が平成4年度の濁り遺跡の発掘調査により立証された。これは佐久地方ではじめて水田跡を面的に調査できた遺跡となった。今回の調査区の隣接地にあたる。今回は、水田跡の検出はなかったが、平成4年度の調査では水田跡3面が調査されている。この水田跡3面のうち下位の2面については平安時代以前の可能性がある。今回の西一里塚遺跡群での水田域の発見ともあわせて、この地域が平安時代以降には生産地帯となってきたことがわかりつつある。

5. 中近世

中世を通じて岩村田は大井氏の城下町として信濃でも有数の町であった。特に15世紀には「民家六千軒」、「賑い国府にまされり」と『四鄰譚載』に記されているように、県内で最も繁栄する町となっていた(佐久市志刊行会1993)。

濁り遺跡の周辺は、かつてこの地域を蒲谷地と呼ばれており、古文書によれば、文禄3(1503)年に新田開発が始められたという(佐久市教委1996)。

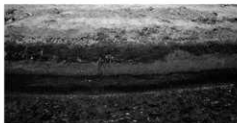
近世になると五街道をはじめとする交通路の整備が進んだ。五街道のひとつである中山道は、江戸・板橋宿から江州(滋賀県)草津宿までに67宿あり、そのうち佐久郡内には、軽井沢、香掛、追分、小田井、岩村田、塩名田、八幡、望月、芦田の9宿が置かれた。西一里塚遺跡群の北寄りに旧中山道にあたる県道塩名田佐久線が走っている。西一里塚遺跡群の遺跡名にもなった字名は、この近くに一里塚があったことによる。岩村田宿から塩名田宿へ向かう道筋にあり、平塚の一里塚と呼ばれ、慶長8・9(1603・1604)年頃に築造されたといわれる(佐久市志刊行会1992)。ただし今ではその痕跡は残っていない。近世には平塚地籍は平塚村であったが、そのはじめは中山道整備により人家が立ち並び、塚原新町と称されたことによるという。

西一里塚遺跡群では低地において水田跡が検出された。水田A・第1水田は出土遺物から18世紀後半～19世紀前半以降に比定される。その下位層から発見された水田Bは、出土遺物からみれば所産時期の上限は平安時代にあるので、それ以降ということになる。中近世の可能性も高い。また西一里塚遺跡群①-3・4区の溝SD44・45・48～50も18世紀後半～19世紀前半以降の所産と理解できる。遺構外出土の遺物もこの時期のものが多くみられる。また濁り遺跡と近接する常田居屋敷遺跡でも近世以降とみられる。

水田跡が発見されている(埋文センター1998)。濁り川流域が広く水田地帯となっていたことが知られよう。

6. 近現代

濁り遺跡、久保田遺跡では、現耕土の直下には、厚いところで約20cmの洪水砂層が確認された。堅くしまったこの砂層にはビニールや空き缶なども含まれており、聞き取り調査などから昭和34年の台風7号もしくは台風15号(伊勢湾台風)によるものと判断した。これらの台風が佐久地方にも多大な被害をもたらしたことは知られていたが、発掘調査によってもその被害の爪痕を確認できたことになる。



濁り遺跡 現代の洪水砂層(矢印の土層)

7. おわりに

これで濁り遺跡、久保田遺跡、西一里塚遺跡群の発掘調査成果の報告を終わりとす。濁り川右岸に立地するこれらの遺跡は、微高地、流れ山、低地という多様な地形に応じた土地利用を行っていた。微高地上と流れ山上には弥生時代の集落域・墓域が展開されていた。一方の低地では平安時代以降は水田域としての利用がなされていたが、弥生時代には水田として用いることはできなかったようであり、溝などがみられる場所であった。低地では、佐久平北部において調査事例が少ない砂層に覆われた水田跡を西一里塚遺跡群で計4面にわたり検出することができた。これはつまり水田を覆いつくすほどの砂を運んだ洪水に見舞われたことをあらわす。しかもその砂層を除去することができないため、新たな水田を砂層の上に造ったわけである。

記録に残る千曲川の大洪水としては仁和4(888)年の「仁和の洪水」や寛保2(1742)年の「戊の洪水」などがある。ともに佐久地方にも甚大な被害をもたらしたものである。今回の発掘調査で確認された水田跡を覆う洪水砂との関係ははっきりとはつかめなかったが、過去の災害の痕跡を後世へ伝える一助になれば幸いである。

本書が今後多方面にわたって活用されることを念願し、結びとしたい。

引用・参考文献

- 青木一男 1998「第4章第3節 長野県出土鉄銅の基礎的整理」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5-松原遺跡 弥生・総論6』長野県埋蔵文化財センター
- 石川日出志 1987a「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究 第8巻』雄山閣
- 石川日出志 1987b「人面付土器」『季刊考古学 19号』雄山閣
- 市川健夫 2007「千曲川流域の気候風土と地域文化」『千曲川大紀行』一草舎
- 井出正義・白田武正・大井隆男・尾崎行也 1982『因説・佐久の歴史 上・下』郷土出版社
- 岩本崇 2002「東日本における弥生時代鉄銅の製作背景」『古代文化』54号
- 白居直之 2004「5. 後家山遺跡出土の曲柄装着鍔について」『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市教育委員会

白居直之・町田勝則「中部高地における鉄器の出現と展開」1997「第4回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集」鉄器文化研究会

白田武正 1980「佐久地方の後期弥生土器について」『信濃 32巻4号』信濃史学会

白田武正 1982「餅田遺跡・西一里塚遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡 北・東信』

会下和宏 2007「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学 第23号』日本考古学協会

川越哲志 1993「弥生時代の鉄器文化」雄山閣

川崎 保編 2008「『赤い土器のクニ』の考古学」雄山閣

川崎 保・桜井秀雄・堤 隆 2012「特集 佐久地方の火山・洪水災害」『佐久考古通信 NO109』佐久考古学会

北佐久郡役所 1915「北佐久郡志」（今回は昭和48年に名著出版から再刊されたものを参照した）

黒沢 浩 1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル No416』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990「有馬遺跡Ⅱ」

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989「有馬桑里遺跡Ⅰ」

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ」

小諸市誌編纂委員会 1986「小諸市誌 自然編」

小山岳夫 1999「佐久地方の弥生土器」[99 シンポジウム「長野県の弥生土器編年」] 長野県考古学会

小山岳夫 2011「粟林期の集落を考える」『長野県考古学会誌 138・139 合併号』

小山岳夫 2008「中部高地における中期から後期の地域的動向」川崎保編「『赤い土器のクニ』の考古学」雄山閣

佐久考古学会 2007「佐久の遺跡」佐久考古通信 No99・100 記念号

佐久考古学会 1990「赤い土器を追う」

佐久市教育委員会 1973「岩村田餅田遺跡 - 佐久市岩村田餅田遺跡緊急発掘調査概報」

佐久市教育委員会 1996「濁り遺跡」

佐久市教育委員会 1999「鳴沢遺跡群 五里田遺跡」

佐久市教育委員会 2004a「佐久市文化財 年報 13」

佐久市教育委員会 2004b「市内遺跡発掘調査報告書 2003」

佐久市教育委員会 2004C「後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ」

佐久市教育委員会 2005「佐久市文化財 年報 14」

佐久市教育委員会 2006「市内遺跡発掘調査報告書 2004」

佐久市教育委員会 2007「市内遺跡発掘調査報告書 2005」

佐久市教育委員会 2008「市内遺跡発掘調査報告書 2006」

佐久市教育委員会 2009a「森平遺跡 北近津遺跡Ⅱ 西一里塚遺跡Ⅲ 大豆田遺跡Ⅲ」

佐久市教育委員会 2009b「市内遺跡発掘調査報告書 2007」

佐久市教育委員会 2010「西一里塚遺跡Ⅳ」

佐久市志刊行会 1988「佐久市志 自然編」

佐久市志刊行会 1992「佐久市志 歴史編（二）中世」

佐久市志刊行会 1993「佐久市志 歴史編（三）近世」

佐久市志刊行会 1995「佐久市志 歴史編（一）原始古代」

佐久市志刊行会 2003「佐久市志 歴史編（五）現代」

桜井秀雄 2011「住居跡から出土した石鋼をめぐる一考察」『考古学と陶磁史学 - 佐々木達夫先生退職記念論文集 -』

金沢大学考古学研究室

設楽博己 1999「土偶形容器と髹面付土器の製作技術に関する覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告第77集』

- 設案博己「第3章 男と女の弥生時代」『列島の考古学 弥生時代』河出書房新社
- 杉山和徳 2008「東日本における鉄剣の受容とその展開」『古文化談叢 第60集』九州古文化研究会
- 竹内理三監修 1990『角川日本地名大辞典』角川書店
- 田中広明「信濃の道後、坂東の道口」『佐久考古通信 NO102』佐久考古学会
- 堤 隆 2004『浅間嶽大焼』浅間縄文ミュージアム
- 堤 隆・藤森英二・小山岳夫・富沢一明・櫻井秀雄・森泉かよ子 2008『考古学が語る 佐久の古代史』ほおずき書籍
- 富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所 2006「下老子笹川遺跡発掘調査報告」
- 東京都北区教育委員会 1998『七社神社前遺跡Ⅱ』
- 豊島直博「弥生時代の鉄製刀剣」『弥生・古墳時代における鉄製武器の生産と流通に関する研究』奈良文化財研究所
- 長野県教育委員会 1997「大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－」
- 長野県教育委員会 2000「大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査2－」
- 長野県教育委員会 2003「大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査3－」
- 長野県教育委員会 2009「大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査4－」
- 長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6 下神遺跡」
- 長野県埋蔵文化財センター 1997「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡」
- 長野県埋蔵文化財センター 1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡」
- 長野県埋蔵文化財センター 2000「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19 郷土遺跡ほか」
- 長野県埋蔵文化財センター 2009「上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－野火附遺跡ほか」
- 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編』
- 野澤誠一 2002「銅鋼・鉄鋼からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要8号』
- 橋本裕行 1997「弥生人の顔」『考古学ジャーナル No416』
- 兵庫県埋蔵文化財調査会 1996『日本出土銭総覧』
- 樋上 昇「3～5世紀の地域間交流―東海系曲柄鉄の波及と展開」『日本考古学 第10号』日本考古学協会
- 平野進一 2004「土人形の謎」『群馬の遺跡3 弥生時代』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 北條芳隆 2005「螺旋状鉄鋼と帯状銅鋼」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念―』大阪大学考古学研究室
- 前田清彦 2009「土偶形容器と人面付土器」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
- 平林富三 1975「佐久市・南佐久」『新しな地名考』信濃毎日新聞社
- 御代田町誌編纂委員会 1995『御代田町誌 自然編』
- 宮本敬一 1999「三嶋台遺跡出土の人面付土器」『市原市郡本周辺の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会
- 山田昌久 2003『考古資料大観8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 八幡一郎 1934『北佐久郡の考古学的調査』

遺構一覧表・遺物観察表

濁り遺跡・久保田遺跡 遺構一覧表

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
ST01	①-1	第15図	掘立柱建物跡	
ST02	①-2	第16図	掘立柱建物跡	
SD01	①-2・3	第17、18図	溝跡	
SD02	欠番			
SD03	T26～28	第14図		トレンチ調査のみ
SK01	欠番			
SK02	欠番			
SK03	①-1	第19図	土坑	
SK04	欠番			
SK05	①-2	第19図	土坑	
SK06	①-2	第19図	土坑	
SK07	欠番			ST02-P1へ変更
SK08	欠番			ST02-P2へ変更
SK09	欠番			ST02-P3へ変更
SK10	欠番			ST02-P4へ変更
SK11	欠番			ST02-P5へ変更
SK12	欠番			ST02-P6へ変更
SK13	欠番			ST02-P7へ変更
SK14	①-2	第23図	土坑	
SK15	①-2	第23図	土坑	

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SK16	欠番			
SK17	①-1	第23図	土坑	
SK18	①-1	第23図	土坑	
SK19	①-1	第23図	土坑	
SK20	①-1	第23図	土坑	
SK21	①-1	第23図	土坑	
SK22	①-1	第23図	土坑	
SK23	①-1	第23図	土坑	
SK24	①-1	第23図	土坑	
SK25	①-3	第20図	土坑	
SK26	①-3	第20図	土坑	
SK27	①-3	第20図	土坑	
SK28	①-3	第21図	土坑	
SK29	①-3	第23図	土坑	
SK30	①-3	第22図	土坑	
SK31	①-3	第22図	土坑	
SK32	①-1	第23図	土坑	
SK33	①-1	第23図	土坑	
SK34	①-1	第23図	土坑	
SK35	①-1	第23図	土坑	

濁り遺跡・久保田遺跡 土器観察表

遺構・遺物 番号	図取 番号	写真図 取番号	管理 番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は 現存長、推定長)			残存率	外面色調	整形の特徴	備考
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)				
ST01-1	15	PL6-4	40	土師器	坏	P3の南	14.1	6.2	4.4	80%	75YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、ミガキ、内面黒色処理、酸化鉄の付着、底一回転糸切り	
SD01-1	18	PL5-1	1	須恵器	坏		13.9	6.5	4.1	50%	N7/0 灰白	回転ナデ、底一回転糸切り	黒書
SD01-2	18	PL5-2	2	須恵器	坏		14.5	6.4	3.5	80%	N7/0 灰白	回転ナデ、底一回転糸切り	黒書
SD01-3	18	PL5-3	10	須恵器	坏		(14.0)	7.0	3.8	60%	N7/0 灰白	回転ナデ、底一回転糸切り	黒書
SD01-4	18		5	須恵器	坏		(14.0)	(5.1)	3.7	25%	N5/0 灰	回転ナデ、底一回転糸切り、縦刻有	
SD01-5	18	PL5-5	3	須恵器	坏		13.5	6.1	3.9	70%	7.5Y6/1 灰	回転ナデ、底一回転糸切り	
SD01-6	18	PL5-6	4	須恵器	坏		14.6	6.6	3.9	65%	N8/0 灰白	回転ナデ、底一回転糸切り	
SD01-7	18		6	須恵器	坏		(13.4)	0.0	(3.0)	20%	N5/0 灰	回転ナデ	
SD01-8	18		8	須恵器	坏		(14.0)	8.0	3.5	40%	10Y6/1 灰	回転ナデ、底一回転糸切り	
SD01-9	18		11	須恵器	坏		(13.8)	(6.4)	4.0	50%	10 Y 5/1 灰	回転ナデ、底一回転糸切り	
SD01-10	18		13	須恵器	坏		(14.2)	-	(3.0)	20%	N7/0 灰白	回転ナデ	
SD01-11	18		15	須恵器	坏		-	7.2	(1.7)	底100%	N7/0 灰白	回転ナデ、高台付	
SD01-12	18		29	須恵器	坏		-	(10.0)	(1.8)	底30%	2.5YR6/6 橙	回転ナデ、高台付	
SD01-13	18		30	須恵器	坏蓋		-	-	(1.4)	つまみ	2.5YR5/6 明赤釉	回転ナデ	
SD01-14	18	PL6-1	17	須恵器	長頸甕		-	-	(6.1)	胴30%	N4/0 灰	回転ナデ	
SD01-15	18	PL5-4	24	土師器	坏		13.5	6.0	4.5	完形	10YR7/4 にぶい黄橙	回転ナデ、内面黒色処理、底一回転糸切り	黒書
SD01-16	18	PL6-2	25	土師器	坏		13.5	5.0	3.9	70%	7.5YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、内面黒色処理、底一回転糸切り	黒書

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物 番号	図版 番号	写真図 版番号	管理 番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は 現存長、推定長)			残存率	外面色調	整形の特徴	備考
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)				
SD01-17	18	PL6-7	28	土師器	坏	-	(7.1)	(1.4)	底40%	75YR7/3 にぶい橙	回転ナデ、内-黒色処理、 底-刻書	黒書	
SD01-18	18	PL6-3	26	土師器	坏	140	6.5	4.1	80%	75YR4/2 灰褐	回転ナデ、内面黒色処理、 底-回転糸切り、ナズリ		
SD01-19	18		27	土師器	坏	-	-	7.0	(28)	60%	75YR8/3 浅黄橙	回転ナデ、内面黒色処理、 底-回転糸切り、ナデ	
SD01-20	18		18	土師器	坏	(14.9)	6.0	4.5	60%	75YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、内面黒色処理、 底-回転糸切り		
SD01-21	18		20	土師器	坏	(16.1)	7.5	4.7	60%	75YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、内-内面黒色処 理、底-回転糸切り		
SD01-22	18		62	土師器	坏	-	(6.2)	(1.5)	底40%	1 0 YR7/3 にぶい黄橙	回転ナデ、内面黒色処理、 底-回転糸切り	黒書	
SD01-23	18		55	須恵器	坏	-	-	(3.3)	破片	N6/0 灰	回転ナデ	黒書	
SD01-24	18	PL7-1	56	須恵器	坏	-	-	(3.1)	破片	N7/0 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-25	18	PL7-21	65	土師器	坏	-	-	(2.2)	破片	75YR7/4 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書	
SD01-26	18	PL7-2	53	須恵器	坏	-	-	(1.8)	破片	N8/0 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-27	18	PL7-12	54	須恵器	坏	-	-	(1.6)	破片	75Y7/1 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-28	18	PL7-13	58	須恵器	坏	-	-	(1.9)	破片	75Y6/0 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-29	18	PL7-33	51	須恵器	坏	-	-	(1.7)	破片	75Y7/1 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-30	18	PL7-11	57	須恵器	坏	-	-	(3.1)	破片	N7/0 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-31	18	PL7-45	49	須恵器	坏	-	-	(2.7)	破片	N6/0 灰	回転ナデ	黒書	
SD01-32	18	PL7-32	48	須恵器	坏	-	-	(2.8)	破片	25GY5/1 オリーブ灰	回転ナデ	黒書	
SD01-33	18	PL7-42	59	須恵器	坏	-	-	(3.7)	破片	N4/0 灰	回転ナデ	黒書	
SD01-34	18	PL7-34	52	須恵器	坏	-	-	(2.6)	破片	N8/0 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-35	18	PL7-41	50	須恵器	坏	-	-	(2.1)	破片	5Y7/1 灰白	回転ナデ	黒書	
SD01-36	18	PL7-20	60	土師器	坏	-	-	(2.2)	破片	75YR7/4 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書	
SD01-37	18	PL7-29	64	土師器	坏	-	-	(3.2)	破片	10YR7/2 にぶい黄橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書	
SK25-1	20		41	須恵器	坏	-	6.0	(2.1)	底50%	10YR7/3 にぶい黄橙	回転ナデ、底-回転糸切り		
SK26-1	20		42	須恵器	坏	-	(6.3)	(1.9)	底30%	10YR6/3 にぶい黄橙	回転ナデ、底-回転糸切り		
SK26-2	20		43	須恵器	坏	-	6.4	(1.9)	底60%	10YR6/1 黄灰	回転ナデ、底-回転糸切り		
SK28-1	21		44	須恵器	坏	-	6.0	(1.5)	底部40%	25Y6/1 黄灰	回転ナデ、底-回転糸切り		
SK28-2	21	PL6-5	45	土師器	皿	(13.1)	(6.5)	(2.1)	20%	5 Y 2/1 黒	回転ナデ、内外面黒色処理		
①区外-1	24		47	須恵器	坏	(14.4)	(6.4)	3.6	30%	5Y4/1 灰	回転ナデ、底-回転糸切り		
①区外-2	24		73	須恵器	坏	IV a・b 層	(13.8)	-	(3.2)	25Y4/1 黄灰	回転ナデ	黒書	
①区外-3	24	PL6-8	33	土師器	坏	IV b層	-	7.5	(4.1)	50%	75YR7/3 にぶい橙	回転ナデ、内面黒色処理、 底-回転糸切り	黒書
①区外-4	24		37	土師器	坏	IV b層	(14.7)	7.6	4.1	50%	75YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、内面黒色処理、 底-回転糸切り	
①区外-5	24		39	土師器	坏	1層	(16.7)	-	(3.4)	20%	75YR8/3 浅黄橙	回転ナデ、内面黒色処理	
①区外-6	24		34	土師器	坏	IV b層	(16.0)	-	(4.6)	20%	10YR6/4 にぶい黄橙	回転ナデ、内面黒色処理	
①区外-7	24	PL6-6	46	土師器	坏蓋	トレ2	-	-	(2.9)	40%	5YR7/4 にぶい橙	回転ナデ、内面黒色処理	
①区外-8	24		32	土師器	碗	IV a層	-	(6.8)	(3.1)	高台 90%	5YR7/3 にぶい橙	回転ナデ、内面黒色処理、 摩耗多	
①区外-9	24	PL7-40	68	須恵器	坏	IV a層	-	-	(1.8)	破片	75Y7/1 灰白	回転ナデ	黒書

遺構・遺物 番号	図版 番号	写真図 版番号	管理 番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は 現在長、推定長)			残存率	外面色調	整形の特徴	備考
							口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)				
①区外-10	24	PL7-17	69	須恵器	坏	Ⅳa層	-	-	(19)	破片	N7/0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-11	24	PL7-10	70	須恵器	坏	Ⅳa層	-	-	(15)	破片	N5/0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-12	24	PL7-7	72	須恵器	坏	Ⅳa層	-	-	(28)	破片	N7/0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-13	24	PL7-5	76	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(32)	破片	N7/0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-14	24	PL7-4	77	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(42)	破片	N4/0 暗灰	回転ナデ	黒書
①区外-15	24	PL7-38	78	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(23)	破片	N7/0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-16	24	PL7-39	79	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(22)	破片	N8/ 0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-17	24	PL7-19	75	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(21)	破片	N8/ 0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-18	24	PL7-22	81	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(30)	破片	N7/ 0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-19	24	PL7-35	83	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(30)	破片	N7/ 0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-20	24	PL7-3	90	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(31)	破片	N6/ 0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-21	24	PL7-9	91	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(33)	破片	25GY6/1 オリーブ灰	回転ナデ	黒書
①区外-22	24	PL7-36	80	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(13)	破片	N6/ 灰	回転ナデ	黒書
①区外-23	24	PL7-8	94	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(23)	破片	N6/ 0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-24	24	PL7-23	95	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(16)	破片	25Y7/1 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-25	24	PL7-15	96	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(20)	破片	75Y7/1 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-26	24	PL7-18	97	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(16)	破片	75Y6/1 灰	回転ナデ	黒書
①区外-27	24	PL7-16	93	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(22)	破片	N6/ 0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-28	24	PL7-14	98	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(18)	破片	N4/ 0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-29	24	PL7-28	102	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(20)	破片	75YR7/3 にぶい橙	回転ナデ	黒書
①区外-30	24	PL7-37	86	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(33)	破片	25GY5/1 オリーブ灰	回転ナデ	黒書
①区外-31	24	PL7-43	92	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(37)	破片	N6/ 0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-32	24	PL7-46	71	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(15)	破片	N7/ 0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-33	24	PL7-47	82	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(23)	破片	N7/ 0 灰白	回転ナデ	黒書
①区外-34	24	PL7-44	85	須恵器	坏	Ⅳb層	-	-	(19)	破片	N5/ 0 灰	回転ナデ	黒書
①区外-35	24	PL7-26	74	土師器	坏	Ⅳa層	-	-	(31)	破片	10YR8/3 浅黄橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
①区外-36	24	PL7-31	99	土師器	坏	Ⅳb層	-	-	(28)	破片	75YR7/4 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
①区外-37	24	PL7-25	100	土師器	坏	Ⅳb層	-	-	(24)	破片	75YR7/3 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
①区外-38	24	PL7-30	88	土師器	坏	Ⅳb層	-	-	(24)	破片	75YR7/3 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
①区外-39	24	PL7-27	89	土師器	坏	Ⅳb層	-	-	(24)	破片	75YR7/3 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
①区外-40	24	PL7-24	101	土師器	坏	Ⅳb層	-	-	(27)	破片	75YR6/4 にぶい橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
①区外-41	24	PL7-48	36	土師器	坏	Ⅳb層	-	-	(26)	破片	75YR7/6 橙	内面黒色処理、回転ナデ	黒書
SD01		PL6-9	16	須恵器	壺		(200)	-	(100)	口20%	N3/ 0 暗灰	回転ナデ	

湧り遺跡・久保田遺跡 石器観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版 番号	管理 番号	器種	出土地点	法量(かっこ内は現在長、推定長)				石 材	備 考
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
ST02-1	16	PL7-51	S3	磨石	P1	134	69	60	527.1	火山岩	
SD01-38	18	PL7-49	S1	石鏃		25	1.4	0.4	1.1	チャート	
①区外-42	24	PL7-50	S2	石鏃		(28)	(1.6)	0.4	1.3	黒曜石	
②③区外-1	26	PL7-52	S4	石鏃	③区	61	5.0	1.25	26.9	磨石	

濁り遺跡・久保田遺跡 木製品観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種・用途	出土地点	法量(かっこ内は現存長)			時代・時期	形状	木取	樹種	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)					
ST02-2	16	PL8-5	W4	取っ手	P5	205	35	26	平安	角棒状	志去分割材(削出)	サワラ	成形材・器具の持ち手、取っ手(調査等)
ST02-3	16	PL9-1	W5	建築部材・柱材	P6	(57.4)	20.5	13.1	平安	角材状	志去分割材	ヒノキ科	分割材・志去材
SK25-2	20	PL8-7	W6	箸		(102)	1.0	0.8	平安	丸木状	削出丸木	ヤマブシ	細めの丸木
SK25-3	20	PL9-6	W7	建築部材・柱材		(59.1)	17.2(径)	12.6(径)	平安	丸木状	志持丸木	サワラ	細めの丸木
SK26-3	20	PL9-2	W9	建築部材・柱材		(35.7)	14.0(径)	11.2(径)	平安	丸木状	志持丸木	コナラ節	細めの丸木
SK26-4	20	PL10-6	W8	建築部材・柱材		(8.2)	2.6	0.9	平安	板状	榎目	サワラ	榎目板・成形した柱材の端材。
SK27-1	20	PL9-3	W10	建築部材・柱材		(43.7)	17.3(径)	14.3(径)	平安	丸木状	志持丸木	サワラ	細めの丸木
SK28-3	21	PL8-2	W27	鍔身		(42.1)	15.2	2.4	平安	板状	榎目	コナラ節	鍔の素材、鍔の可能性有
SK28-4	21	PL8-1	W12	鍔身		(42.4)	18.6	2.5	平安	板状	榎目	クリ	直柄鍔の未製品? 鍔の可能性も有
SK30-1	22	PL9-4	W13	建築部材・柱材		(53.2)	17.3	14.2	平安	角材状	志去分割材	クスノキ節	分割材、贈送時の紐掛け溝有
SK31-1	22	PL9-5	W14	建築部材・柱材		26.7	13.3(径)	10.0(径)	平安	丸木状	志持丸木	サワラ	細めの丸木
①区遺構外-43	25	PL8-1	W1	下駄	①-3区 No1	21.2	9.5	3.0	平安	板状	榎目	キハダ	鼻緒穴が右に偏っている(右足用)左側が欠けている。0脚の人が履いていたか?
①区遺構外-44	25	PL8-9	W26	曲物底板	①-3区 No2	(206)	(12.4)	1.0	平安	板状	榎目	クスノキ節	円形の曲物の底板、46と同一?
①区遺構外-45	25	PL8-6	W15	箸	①-3区 IV b層	(11.3)	1.0	0.8	平安	棒状	削出	ヒノキ科	欠損
①区遺構外-46	25	PL8-2	W2	曲物底板	①-3区 No2	(95)	(4.7)	0.8	平安	板状	榎目	クスノキ節	円形の曲物の底板、44と同一?
①区遺構外-47	25	PL10-1	W3	建築部材・屋根板	①-3区 NO3	(107-123)	(5.9-5.2)	0.5	平安	板状	榎目	ヒノキ科	板目の薄いへぎ板。こけら葺の屋根板?約20片
①区遺構外-48	25	PL10-7	W34	部材	①-3区 IV b層	39.3	7.5	3.8	平安	厚板状	榎目	サワラ	成形角材・何かの部材
①区遺構外-49	25	PL10-8	W16	建築部材・柱材	①-3区 IV b層	(11.2)	2.9	1.4	平安	板状	榎目	サワラ	柱材の端材
①区遺構外-50	25	PL10-4	W17	建築部材・柱材	①-3区 IV b層	(10.7)	2.6	0.9	平安	板状	榎目	サワラ	柱材の端材
①区遺構外-51	25	PL8-3	W31	用途不明品	①-3区 IV b層	(7.1)	4.5	1.4	平安	板状	榎目	コナラ節	鍔曲類の刀部の可能性有
①区遺構外-52	25	PL10-10	W32	建築部材・柱材	①-3区 IV b層	(8.8)	3.7	1.1	平安	板状	榎目	ヒノキ科	
①区遺構外-53	25	PL10-12	W33	建築部材・柱材	①-3区 IV b層	(10.4)	3.0	0.9	平安	板状	榎目	サワラ	
①区遺構外-54	25	PL10-5	W20	建築部材	①-3区 IV b層	(6.8)	4.7	3.7	平安	角材状	志去分割材	クスノキ節	成形角材、端材
①区遺構外-55	25	PL10-9	W25	建築部材・柱材	①-3区 IV b層	(13.0)	1.7	0.8	平安	板状	榎目	サワラ	
①区遺構外-56	25	PL10-11	W18	用途不明品	①-3区 IV b層	(12.4)	1.6(径)	1.4(径)	平安	丸木状	削出丸木	コナラ節	棒状木製品
①区遺構外-57	25	PL10-2	W23	用途不明品	①-3区 IV b層	(2.3)	1.5	1.3	平安	不定形	削出	サワラ	鍔部分の可能性有
①区遺構外-58	25	PL10-3	W36	用途不明品	①-3区 No2	(4.2)	3.5	2.8	平安	不定形	削出	クリ	棒状木製品の断欠品
①区遺構外-59	25	PL8-4	W19	鍔鍔身	①-3区 IV b層	(12.8)	(12.8)	2.6	平安	板状	榎目	サワラ	鍔曲類の断欠品

濁り遺跡・久保田遺跡 銭貨観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真番号	管理番号	出土地点	種類	径 (cm)	重量 (g)	名称	時代	初測	備考
SK05-1	第19図	PL6-10	M1		銭貨	24	26	富壽神寶	平安	818年	
②・③区遺構外-2	第26図	PL6-11	M2	③区	銭貨	24	25	寛永通寶	近世	1636年	

西一里塚遺跡群 遺構一覧表

遺構番号	地区	図版	遺構種名	備考
SB01	②-1区	第39図	竪穴住居跡	
SB02	②-1区	第40図	竪穴住居跡	
SB03	②-1区	第41図	竪穴住居跡	
SB04	②-1区	第125・126図	竪穴住居跡	
SB05	①-4区	第42図	竪穴住居跡	
SB06	①-4区	第43・44図	竪穴住居跡	
SB07	欠番			
SB08	①-4区	第43図	竪穴住居跡	
SB09	⑥-1区	第177・179図	竪穴住居跡	
SB10	⑥-1区	第180・181図	竪穴住居跡	
SB11	⑥-1区	第177・182図	竪穴住居跡	
SB12	⑥-1区	第183図	竪穴住居跡	
SB13	⑥-1区	第184図	竪穴住居跡	
SB14	⑥-1区	第177図	竪穴住居跡	
ST01	①-5区	第46図	掘立柱建物跡	
SM01	②-1区	第47図	円形周溝墓	
SM02	②-1区	第48図	円形周溝墓	
SM03	②-1区	第49図	円形周溝墓	
SM04	②-1区	第50図	円形周溝墓	
SM05	②-1区	第51図	円形周溝墓	
SM06	②-1区	第52図	円形周溝墓	
SM07	②-1区	第61・62図	木棺墓	
SM08	③-1区	第53図	円形周溝墓	
SM09	③-1・2区	第54図	方形周溝墓	
SM10	④-1区	第127・128図	円形周溝墓	
SM11	④-1区	第127図	円形周溝墓	
SM12	④-1区	第129図	方形周溝墓	
SM13	④-1区	第130図	円形周溝墓	
SM14	②-1区	第55・56図	円形周溝墓	
SM15	④-1区	第130図	円形周溝墓	
SM16	④-1区	第130図	方形周溝墓	
SM17	④-1区	第127・128図	周溝墓?	
SM18	②-2区	第57図	方形周溝墓	
SM19	②-2区	第57図	円形周溝墓	
SM20	②-2区	第58図	円形周溝墓	
SM21	②-2区	第58図	円形周溝墓	
SM22	②-2区	第59図	円形周溝墓	
SM23	②-2区	第59図	円形周溝墓	
SM24	欠番			SM21-3へ変更
SM25	欠番			SM23-2へ変更
SM26	③-2区	第60図	円形周溝墓	
SM27	③-2区	第60図	円形周溝墓	
SM28	③-2区	第60図	方形周溝墓	
SM29	③-1区	第60図	円形周溝墓	
土器植墓1	①-3区	第63図	土器植墓	
土器植墓2	①-3区	第65図	土器植墓	

遺構番号	地区	図版	遺構種名	備考
土器植墓3	①-3区	第65図	土器植墓	
土器植墓4	①-2区	第65図	土器植墓	
土器植墓5	①-3区	第65図	土器植墓	
SD01	①-1・2区	第69・70図	溝跡	
SD02	①-1・2区	第69図	溝跡	
SD03	①-1区	第69図	溝跡	
SD04	①-1区	第69図	溝跡	
SD05	①-1区	第69・70図	溝跡	
SD06	欠番			
SD07	①-1区	第69図	溝跡	
SD08	①-1区	第69図	溝跡	
SD09	欠番			
SD10	欠番			
SD11	欠番			
SD12	欠番			
SD13	欠番			SM14へ変更
SD14	②-1区	第71図	溝跡	
SD15	①-2・3区	第65・68・72・73図	溝跡	
SD16	欠番			
SD17	④-1・2区	第116・118・120・121図	溝跡	第2水田に伴う
SD18	④-1区	第116図	溝跡	第2水田より新
SD19	②-1区	第52図	溝跡	
SD20	④-1区	第131図	溝跡	
SD21	④-1区	第131図	溝跡	
SD22	④-1区	第131・133図	溝跡	
SD23	④-1区	第131・133図	溝跡	
SD24	④-1区	第131・133図	溝跡	
SD25	欠番			
SD26	欠番			
SD27	④-1区	第120・121図	溝跡	第3水田より新
SD28	④-1区	第120・121図	溝跡	第3水田より新
SD29	④-1区	第120図	溝跡	第3水田に伴う
SD30	欠番			
SD31	④-1区	第132・133図	溝跡	
SD32	④-1区	第132・133図	溝跡	
SD33	④-1区	第132・133図	溝跡	
SD34	④-1区	第132・134図	溝跡	
SD35	④-1区	第132・134図	溝跡	
SD36	②-2区	第75・86図	溝跡	
SD37	②-2・③-2区	第76・77・86図	溝跡	
SD38	②-2・③-2区	第78・86図	溝跡	
SD39	②-2・③-2区	第86・87図	溝跡	
SD40	②-2区	第88・90図	溝跡	
SD41	①-3・②-2区	第72・74図	溝跡	
SD42	欠番			

遺構一覧表・遺物観察表

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SD43	欠番			
SD44	①-3区	第91-92図	溝跡	
SD45	①-3-4区	第91図	溝跡	
SD46	⑥-1区	第185-186図	溝跡	
SD47	欠番			
SD48	①-3区	第91図	溝跡	
SD49	①-3区	第92図	溝跡	
SD50	①-4区	第91-92図	溝跡	
SD51	⑥-1区	第185-186図	溝跡	
SD52	⑥-2区	第173-174図	溝跡	
SD53	⑥-2区	第173-174図	溝跡	
SD54	欠番		⑥区低地砂層に変更	
SD55	欠番		⑥区低地砂層に変更	
SD56	欠番			
SD57	②-2区	第32図	溝跡	第2水田に伴う
SD58	②-2区	第33図	溝跡	第3水田に伴う
SD61	④-2区	第133図	溝跡	
SD62	④-2区	第133図	溝跡	
SD63	④-2区	第133図	溝跡	
SD64	④-2区	第133図	溝跡	
SD65	⑤区	第152-162図	溝跡	
SD66	欠番			SD65の一部
SD67	欠番			
SD68	⑤区	第163図	溝跡	
SD69	⑤区	第163図	溝跡	
SD70	⑤区	第163-164図	溝跡	
SD71	⑤区	第163-164図	溝跡	
SD72	⑤区	第163-164図	溝跡	
SD73	⑤区	第163-164図	溝跡	
SD74	⑤区	第163-164図	溝跡	
SD81	②-1区	第93図	溝跡	
SD82	①-1区	第99図	溝跡	
SD83	欠番			
SD84	④-2区	第116図	溝跡	第2水田に伴う
SD85	④-2区	第116図	溝跡	
SD86	④-1区	第116図	溝跡	第2水田より新
SK01	欠番			
SK02	欠番			
SK03	欠番			
SK04	欠番			
SK05	①-2区	第94図	土坑	
SK06	①-2区	第94図	土坑	
SK07	①-2区	第94図	土坑	
SK08	②-1区	第64図	土器棺墓	
SK09	②-1区	第96図	土坑	
SK10	②-1区	第96図	土坑	
SK11	②-1区	第96図	土坑	
SK12	②-1区	第96図	土坑	
SK13	②-1区	第96図	土坑	
SK14	②-1区	第96図	土坑	
SK15	②-1区	第51図	土坑	
SK16	②-1区	第96図	土坑	

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SK17	②-1区	第96図	土坑	
SK18	③-1区	第96図	土坑	
SK19	④-1区	第136図	土坑	
SK20	④-1区	第136図	土坑	
SK21	④-1区	第136図	土坑	
SK22	④-1区	第136図	土坑	
SK23	④-1区	第136図	土坑	
SK24	④-1区	第136図	土坑	
SK25	④-1区	第136図	土坑	
SK26	④-1区	第136図	土坑	
SK27	④-1区	第136図	土坑	
SK28	④-1区	第136図	土坑	
SK29	④-1区	第136図	土坑	
SK30	④-1区	第136図	土坑	
SK31	④-1区	第136図	土坑	
SK32	欠番			
SK33	④-1区	第136図	土坑	
SK34	④-1区	第136図	土坑	
SK35	④-1区	第136図	土坑	
SK36	欠番			
SK37	②-2区	第95図	土坑	
SK38	②-2区	第95図	土坑	
SK39	②-2区	第95図	土坑	
SK40	②-2区	第96図	土坑	
SK41	②-2区	第95図	土坑	
SK42	②-2区	第95図	土坑	
SK43	欠番			
SK44	②-2区	第96図	土坑	
SK45	②-2区	第95図	土坑	
SK46	③-2区	第96図	土坑	
SK47	③-2区	第63図	木棺墓	
SK48	③-2区	第97図	土坑	
SK49	③-2区	第97図	土坑	
SK50	③-2区	第97図	土坑	
SK51	②-2区	第96図	土坑	
SK52	欠番			
SK53	欠番			
SK54	欠番			
SK55	欠番			
SK56	①-4区	第94図	土坑	
SK57	①-4区	第94図	土坑	
SK58	①-4区	第94図	土坑	
SK59	①-4区	第94図	土坑	
SK60	①-4区	第94図	土坑	
SK61	①-4区	第94図	土坑	
SK62	欠番			
SK63	①-4区	第94図	土坑	
SK64	欠番			
SK65	⑥-1区	第188図	土坑	
SK66	欠番			
SK67	欠番			
SK68	欠番			

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SK69	欠番			
SK70	⑥-2区	第188図	土坑	
SK71	⑥-2区	第188図	土坑	
SK72	⑥-2区	第188図	土坑	
SK73	⑥-2区	第188図	土坑	
SK74	⑥-2区	第188図	土坑	
SK75	⑥-2区	第188図	土坑	
SK76	⑥-2区	第188図	土坑	
SK77	⑥-2区	第188図	土坑	
SK78	⑥-2区	第188図	土坑	
SK79	⑥-2区	第188図	土坑	
SK80	⑥-2区	第188図	土坑	
SK81	⑥-2区	第188図	土坑	
SK82	⑥-2区	第188図	土坑	
SK83	⑥-2区	第188図	土坑	
SK84	⑥-2区	第188図	土坑	
SK85	⑥-2区	第173図	土坑	
SK91	①-5区	第95図	土坑	
SK92	①-5区	第95図	土坑	
SK93	①-5区	第95図	土坑	
SK94	①-5区	第95図	土坑	
SK95	①-5区	第95図	土坑	
SK96	①-5区	第95図	土坑	
SK97	①-5区	第95図	土坑	
SK98	①-5区	第95図	土坑	
SK99	①-5区	第95図	土坑	
SK100	①-5区	第95図	土坑	
SK101	⑤区	第165-171図	土坑	
SK102	欠番			
SK111	①-1区	第95図	土坑	
SK112	②-1区	第95図	土坑	
SK113	②-1区	第95図	土坑	
SK114	③-1区	第97図	土坑	
SK115	③-1区	第97図	土坑	
SK116	③-1区	第97図	土坑	
SK117	③-1区	第97図	土坑	
SK118	④-1区	第130図	土坑	
SK119	④-1区	第130図	土坑	
SK120	④-1区	第130図	土坑	
SK121	④-1区	第130図	土坑	
SK122	欠番			
SQ01	②-2区	第99図	遺物集申1	
SQ02	②-2区	第100図	遺物集申2	
SQ03	③-2区	第101-103図	遺物集申3	
SC01	③区第2水田	第116図	畦畔	
SC02	④区第2水田	第116-118図	畦畔	
SC03	④区第2水田	第116-118図	畦畔	
SC04	④区第2水田	第116-118図	畦畔	
SC05	④区第2水田	第116図	畦畔	
SC06	④区第2水田	第116-118図	畦畔	
SC07	④区第2水田	第116-118図	畦畔	
SC08	④区第3水田	第120-121図	畦畔	

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SC09	④区第3水田	第120図	畦畔	
SC10	④区第3水田	第120図	畦畔	
SC301	③区第2水田	第32図	畦畔	
SC302	③区第2水田	第32図	畦畔	
SC303	③区第3水田	第33図	畦畔	
SC304	③区第3水田	第33図	畦畔	
SC401	④区第1水田	第115図	畦畔	
SC402	④区第2水田	第116図	畦畔	
SC501	⑤区水田A	第139図	畦畔	
SC502	⑤区水田A	第139図	畦畔	
SC503	⑤区水田A	第139図	畦畔	
SC504	⑤区水田A	第139図	畦畔	
SC505	⑤区水田A	第139図	畦畔	
SC506	⑤区水田A	第139図	畦畔	
SC511	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC512	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC513	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC514	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC515	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC516	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC517	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC518	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC519	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC520	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC521	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC522	⑤区水田B	第143図	畦畔	
SC531	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC532	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC533	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC534	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC535	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC536	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC537	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC538	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC539	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC540	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC541	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SC542	⑤区水田C	第145図	畦畔	
SL01	④区第2水田	第116図	水田区画	
SL02	④区第2水田	第116-118図	水田区画	
SL03	④区第2水田	第116図	水田区画	
SL04	④区第2水田	第116図	水田区画	
SL05	④区第2水田	第116-118図	水田区画	
SL06	④区第2水田	第116図	水田区画	
SL51	⑤区水田A	第139図	水田区画	
SL52	⑤区水田A	第139図	水田区画	
SL53	⑤区水田A	第139図	水田区画	
SL54	⑤区水田A	第139図	水田区画	
SL55	⑤区水田A	第139図	水田区画	
SL56	⑤区水田A	第139図	水田区画	
SL61	⑤区水田B	第143図	水田区画	
SL62	⑤区水田B	第143図	水田区画	

遺構一覧表・遺物観察表

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SL63	⑤区水田 B	第143図	水田区画	
SL64	⑤区水田 B	第143図	水田区画	
SL65	⑤区水田 B	第143図	水田区画	
SL66	⑤区水田 B	第143図	水田区画	
SL67	⑤区水田 B	第143図	水田区画	
SL68	⑤区水田 B	第143図	水田区画	
SL70	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL71	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL72	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL73	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL74	⑤区水田 C	第145図	水田区画	

遺構番号	地区	図取	遺構種名	備考
SL75	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL76	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL77	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL78	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL79	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL80	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL81	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SL82	⑤区水田 C	第145図	水田区画	
SX01	④区第3水田	第120図	水田区画	SC08 上面

西一里塚遺跡群 土器・土製品観察表

遺構・遺物番号	図取番号	写真図取番号	管理番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長,推定長) 口徑(cm) 底径(cm) 器高(cm)	外面色調	残存率	成形・調整
SB01-1	39	PL52-27	5	弥生土器	甕	床面	(25.4) - (15.5)	10YR6/3 にぶい黄橙	口→胴 30%	内→ハケ→ミガキ 外→口縁部・ 縄文 口縁部・縄文→櫛波状 状文。つの子重ね文, 円形浮文
SB01-2	39	PL53-1	468	弥生土器	甕		- 78 (17.7)	7.5YR5/2 灰褐	胴→底 70%	内→ミガキ 外→ハケメ残る。円 形浮文1箇所残る。単位不明、 つの子重ね文 底→ミガキ
SB01-3	39	PL52-28	25	弥生土器	甕		- (9.8)	10YR6/2 灰黄褐	20%	内→ハケ, 剥落多 外→縄文→櫛 波状文・櫛波直線文, ミガキ
SB02-1	40	-	29	弥生土器	鉢		(14.6) - (9.5)	10YR7/2 にぶい黄橙	口30%	内→ミガキ 外→粗ねミガキ
SB02-2	40	-	31	弥生土器	甕		- (5.2)	7.5YR4/1 褐灰	破片	櫛波状文
SB02-3	40	-	30	弥生土器	甕		- (5.9)	2.5YR5/1 黄灰	破片	櫛波状文
SB03-1	41	-	35・ 36	弥生土器	甕		- (6.4)	10YR7/2 にぶい黄橙	胴→底 25%	内→ミガキ 外→櫛波直線状文・ 櫛波直線羽状文
SB03-2	41	-	33	弥生土器	甕	69内	(18.2) - (9.4)	10YR4/3 にぶい黄橙	口30%	内→ハケ 外→櫛波直線羽状文・ 口縁部割み
SB03-3	41	-	34	弥生土器	甕		(15.8) - (7.5)	5YR6-6橙	口30%	内→ミガキ? 外→流状沈積 文, ハケメ残る
SB03-4	41	PL53-2	21	弥生土器	注口 土器	床下・ P9	- 5.0 (6.2)	7.5R4-6赤	90%	内→口縁部赤彩, ハケメ残る (口文) 外→ミガキ, 一部を除き赤彩
SB05-1	42	-	213	弥生土器	甕	床面や や上	- 6.1 (2.7)	10YR6/1 褐灰	底80%	内→ナデ?外→ミガキ
SB05-2	42	-	215	弥生土器	甕		- 4.5 (3.8)	5YR6/4 にぶい褐	底 100%	内→ハケ 外→ハケ, ミガキが わずかにあるか? 底→ケズリ
SB05-3	42	-	214	弥生土器	鉢?	土器敷 如	- 5.8 (5.8)	10R5/8赤	底 100%	内→摩耗多, 赤彩 外→赤彩 底→わずかに赤彩有
SB05-4	42	-	217	弥生土器	甕		- (4.7)	7.5YR5/3 にぶい褐	破片	櫛波状文
SB05-5	42	-	218	弥生土器	甕		- (6.5)	7.5YR5/3 にぶい褐	破片	櫛波状文
SB06-1	44	PL54-2	230	弥生土器	甕	南東隅 床面	(19.6) - (20.5)	7.5YR5/3 にぶい褐	40%	内→ミガキ 外→口縁部・割み・ 頸→胴部・櫛波状文・ミガキ
SB06-2	44	-	224	弥生土器	甕		(14.8) - (7.6)	7.5YR5/4 にぶい褐	口のみ 30%	内→ミガキ 外→口縁部・櫛波 状文, 頸部・櫛波直線状文
SB06-3	44	PL54-1	17	弥生土器	甕		(10.0) - (11.8)	10YR7/3 にぶい黄橙	70%	内→ミガキ 外→口縁部・胴部・ 櫛波状文, 頸部・櫛波直線状文
SB06-4	44	-	225	弥生土器	台付 甕?		- 6.6 (4.3)	7.5YR7/2 明褐灰	脚台の み	内→ナデ 外→摩耗のため不明

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD06-5	44	-	226	弥生土器	鉢		-	5.0	(3.6)	10R4/6赤	40%	内-赤彩 外-赤彩 底-赤彩 底-黒
SD06-6	44	-	222	弥生土器	甕	土器敷 如	-	12.0	(22.3)	25YR6/4 にぶい橙	50%	内-一部赤彩, 剥落多 外- 摩耗多, 一部赤彩 底-ケズリ
SD06-7	44	-	219	弥生土器	甕	P1 テ ラス	-	(7.4)	(7.3)	10YR7/3 にぶい黄橙	30%	内-摩耗 外-赤彩, 摩耗多 底-摩耗
SD06-8	44	-	221	弥生土器	甕	土器敷 如	-	15.0	(8.4)	7.5YR7/6 橙	100%	内-ハケ 外-ミガキ, ハケメ 残る 底-ミガキ
SD06-9	44	PL53-9	18	弥生土器	瓶	床面	(20.5)	5.4	13.1	7.5YR7/4 にぶい橙	60%	内-ミガキ, 外-ミガキ, わづか に赤彩痕, 口縁部ニヒオサエ
SD06-10	44	-	223	弥生土器	甕		-	-	(8.9)	7.5YR7/4 にぶい橙	破片	外-櫛歯状文, 櫛歯波状文
SD08-1	45	PL54-3	16	弥生土器	甕	土器敷 如	-	-	(19.8)	5YR6/4 にぶい橙	70%	内-ミガキ, ハケメ残る 外- 櫛歯状文→櫛歯波状文→ミ ガキ
SD08-2	45	PL54-4	23	弥生土器	台付 甕	P1	11.1	5.8	16.4	5YR6/4 にぶい橙	100%	内-ミガキ, 外-櫛歯状文, 脚部・指頭痕
SD08-3	45	-	228	弥生土器	甕	束壁周 溝上	-	-	(11.7)	10R4/8赤	内-割上30% 外-赤彩, 櫛歯状文	内-口縁-頸部に赤彩 外- 赤彩, 櫛歯状文
SD08-4	45	PL54-5	15	弥生土器	甕	土器敷 如	-	12.7	(13.6)	7.5YR8/3 浅黄橙	100%	内-ハケ→ナデ 外-ミガキ 底-ケズリ
SM01-1	47	PL56-5	24	弥生土器	高坏	主体部	-	16.8	(16.9)	7.5R5/6赤	90%	内-赤彩 外-赤彩
SM01-2	47	PL56-4	8	弥生土器	鉢	周溝	14.0	4.0	5.2	7.5R4/6赤	90%	内-赤彩 外-赤彩, 穿孔2 箇所 底-赤彩
SM03-1	49	PL56-6	470	弥生土器	甕	周溝	19.7	7.8	24.7	10YR4/1 褐灰	50%	内-ミガキ, ハケメ残る 外-口 縁部・櫛歯状文, ナデ, 頸部・ 櫛歯状文, 脚部・櫛歯状 文 底-ケズリ
SM03-2	49	PL56-7	45	弥生土器	甕	周溝	(16.0)	6.2	18.0	5YR6/6橙	70%	内-ミガキ 外-櫛歯状文→ 櫛歯波状文→ミガキ 底-ミガキ
SM03-3	49	-	47	弥生土器	鉢	主体部	(13.6)	-	(4.6)	10R5/6赤	口50%	内-赤彩, 剥落多 外-赤彩, 剥落多
SM03-4	49	PL56-8	46	弥生土器	鉢	主体部	11.2	5.5	9.8	10R5/8赤	70%	内-ハケ, ナデ, 口縁-胴部上位 赤彩 外-赤彩 底-ケズリ
SM04-1	50	-	547	弥生土器	甕		-	-	(3.9)	5YR6/8橙	破片	口縁部・櫛歯状文
SM04-2	50	-	548	弥生土器	甕		-	-	(3.5)	7.5YR6/2 灰褐	破片	口縁部・櫛歯斜線文
SM04-3	50	-	549	弥生土器	甕		-	-	(3.3)	7.5YR4/3 褐	破片	櫛歯状文
SM04-4	50	-	570	弥生土器	甕		-	-	(2.8)	10YR8/6 黄橙	破片	鹿指矢羽状文
SM05-1	51	-	550	弥生土器	甕		-	-	(3.1)	5YR6/4 にぶい橙	破片	口唇部・刻み, 受け口縁
SM05-2	51	-	551	弥生土器	甕		-	-	(3.6)	7.5YR4/2 灰褐	破片	櫛歯状文
SM05-3	51	-	552	弥生土器	甕		-	-	(2.5)	5YR7/6橙	破片	頸部・櫛歯状文, 櫛歯状文
SM08-1	53	-	554	弥生土器	甕		-	-	(4.7)	10YR2/1 黒	破片	櫛歯状文
SM08-2	53	-	553	弥生土器	甕		-	-	(3.6)	10YR4/1 褐灰	破片	口縁部・ナデ?
SM09-1	54	-	545	弥生土器	甕		-	-	(3.2)	7.5YR6/3 にぶい褐	破片	櫛歯状文
SM09-2	54	-	546	弥生土器	甕		-	-	(4.3)	10YR6/1 褐灰	破片	コの字重ね文, 刺突のある円 形浮文
SM20・21-1	58	-	563	弥生土器	甕		-	-	(3.9)	7.5YR8/3 浅黄橙	破片	口縁部・櫛歯状文

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SM20・21-2	58	-	564	弥生土器	甕	-	-	(38)	25YR3 淡黄	破片	頸部・柳描直線文	
SM20・21-3	58	-	565	弥生土器	甕?	-	-	(4.6)	10YR8/1 灰白	破片	柳描波状文	
SM20・21-4	58	-	566	弥生土器	甕?	-	-	(25)	5YR7/4 にぶい橙	破片	柳描直線文	
SM20・21-5	58	-	567	弥生土器	甕	-	-	(4.4)	25YR6/8 橙	破片	横走沈線文→横文	
SM22・23-1	59	-	565	弥生土器	甕	-	-	(3.5)	5YR6 橙	破片	口縁部・柳描縦羽状文	
SK47-1	63	-	243	弥生土器	甕	-	-	(9.6)	10YR7/3 にぶい黄橙	胴~胴	内-摩耗多、ハケ 外-赤彩、柳描直線文	
SK08-1	64	PL00-1	7	弥生土器	甕	-	120	(32.5)	7.5YR8/3 浅黄橙	40%	内-ハケ 外-ミガキ、焼成後穿孔、酸化鉄の付着 底-ナデ	
SK08-2	64	-	57	弥生土器	甕	-	-	(14.3)	10R5 6赤	10%	内-摩耗多、外-赤彩	
SD15 上面土 器箱-1	66	PL57-2	19	弥生土器	甕	(22.8)	9.8	49.4	10YR7/3 にぶい黄橙	80%	内-ハケ、ミガキ 外-ミガキ、頸部・柳描波状文→沈線文	
SD15 上面土 器箱-2	66	PL57-1	22	弥生土器	甕	-	7.2	(26.9)	7.5YR8/3 浅黄橙	80%	内-ハケ、ミガキ 外-ハケ、ミガキ、頸部・柳描直線文→胴部・焼成後穿孔	
SD15 上面土 器箱-3	66	PL57-3	14	弥生土器	甕	-	-	(45.3)	7.5YR8/4 浅黄橙	80%	内-ハケ 外-ミガキ、頸部・柳描直線文	
SD15 上面土 器箱-4	66	PL57-4	67	弥生土器	甕	-	-	(24.0)	10R4 6赤 7.5YR7/4 にぶい橙	70%	内-摩耗、器壁多、ミガキ、口縁部・赤彩 外-ミガキ、赤彩、矢羽根状沈線文	
SD15 上面土 器箱-5	67	PL58-1	13	弥生土器	甕	-	9.4	(34.7)	5YR6 6橙	70%	内-ハケ→ナデ 外-ハケ→ミガキ、頸部・矢羽根状文 底-ケズリ	
SD15 上面土 器箱-6	67	PL58-2	1	弥生土器	甕	(25.2)	10.6	53.9	10R4 6赤 10YR7/4 にぶい黄橙	80%	内-ハケ→ナデ 口縁ミガキ・赤彩、外-赤彩、口縁柳描波状文、ミガキ、頸部・柳描直線文→垂下文、胴部・ミガキ 底-ミガキ	
SD15 上面土 器箱-7	67	PL58-3	2	弥生土器	甕	-	10.1	(42.1)	10YR4 8赤 10YR8/3 浅黄橙	0.8	内-ハケ 外-摩状文、ミガキ・赤彩 底ケズリ	
SD15 上面土 器箱-8	67	PL59-1	66	弥生土器	甕	-	-	(40.8)	7.5R4 6赤 5YR6 6橙	60%	内-摩耗、器壁剥落 外-ミガキ、頸部・柳描直線文→垂下文→横走沈線文	
SD15 上面土 器箱-9	68	PL58-4	3	弥生土器	甕	-	11.7	(46.6)	7.5YR8/3 浅黄橙 10R5 8赤	60%	内-ハケ、器壁剥落多 外-ミガキ・赤彩、頸部・柳描直線文→垂下文→横走沈線文 底-ミガキ	
SD15 上面土 器箱-10	68	PL59-2	72	弥生土器	甕	(24.0)	-	(21.3)	10R4 8赤	口~胴 70%	内-ミガキ、器壁剥落多 外-ミガキ・赤彩、頸部・柳描直線文→垂下文	
SD15 上面土 器箱-11	68	PL59-3	77	弥生土器	甕	(13.6)	-	(10.0)	10YR6/4 にぶい黄橙	口~胴 50%	内-ミガキ 外-摩耗、口縁部・乱れた柳描波状文。	
SD15 上面土 器箱-12	68	PL59-5	76	弥生土器	甕	-	6.8	(17.0)	5YR4/2 灰褐	60%	内-ミガキ 外-ミガキ、口~頸部・柳描縦状文→柳描波状文 底-髭?任痕有	
SD15 上面土 器箱-13	68	PL59-4	73	弥生土器	甕	-	-	(26.8)	10YR7/4 にぶい黄橙	胴~胴 30%	内-ハケ、摩耗多 外-ミガキ、頸部柳描直線文	
SD01-1	70	PL52-1	53	縄文土器	甕	-	-	(20)	7.5YR5/4 にぶい褐	破片	縄文・押型文	
SD01-2	70	-	49	弥生土器	甕	(13.0)	(5.4)	(19.0)	25YR6 6橙	30%	内-ミガキ 外-柳描縦状文→柳描波状文 底-ケズリ	
SD01-3	70	PL61-8	54	手捏土器	鉢形	-	(5.4)	(2.8)	10YR6 2 灰黄褐	底 40%	穿孔多、貫通していないものも有	
SD05-1	70	-	63	弥生土器	鉢	-	-	5.7	10R4/4 赤褐	30%	内-赤彩 外-赤彩	

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD14-1	71	-	64	弥生土器	甕		(23.0)	-	(7.7)	75YR4/2 灰褐色	口40%	内-ナデ? 外-ハケメ残る。 乱れた櫛掻波状文
SD15-1	73	PL59-6	74	弥生土器	甕		-	-	(24.0)	75YR6/4 にぶい橙	30%	内-摩耗多、ハケ 外-櫛 掻直線文、ミガキ
SD15-2	73	PL59-7	68	弥生土器	甕		-	120	(15.6)	75YR8/4 浅黄橙	底50%	内-ハケメ 外-ミガキ 底- 摩耗多
SD15-3	73	-	75	弥生土器	甕		-	84	(8.2)	75YR6/4 にぶい橙	底70%	内-ハケ 外-ミガキ 底-ハ ケナデ
SD15-4	73	-	79	弥生土器	鉢		-	(6.0)	(7.4)	10R4/6赤	30%	内-赤彩 外-赤彩 穿孔2 底-赤彩
SD15-5	73	PL56-10	4	弥生土器	甕		-	56	(14.0)	75YR7/4 にぶい橙 75R4/6赤	60%	内-ミガキ、赤彩 外-赤彩、 鋸歯文、羽落跡有
SD41-1	74	-	80	弥生土器	甕		(14.7)	-	(10.5)	10YR3/1 黒褐色	口25%	内-ミガキ 外-炭化付着。 口唇部・削み
SD41-2	74	-	82	弥生土器	高坏		-	11.6	(11.5)	75YR7/6 橙	脚30%	内-ハケ 外-摩耗
SD36-1	75	PL52-5	531	縄文土器	深鉢		-	-	(4.6)	75YR7/4 にぶい橙	破片	縄文・前期前半
SD37-1	77	-	135	弥生土器	甕		-	-	(26.7)	75YR7/3 にぶい橙	20%	内-ハケ 外-ミガキ、頸部・ 櫛掻直線文→垂下文、炭化鉄 の付着多
SD37-2	77	-	136	弥生土器	甕		-	-	(34.6)	75YR6/4 にぶい橙	30%	内-ハケ、ナデ 外-櫛掻直線 文→垂下文、炭化痕有
SD37-3	77	-	131	弥生土器	甕		(12.9)	-	(2.8)	10YR6/4 にぶい黄橙	口30%	内-ナデ 外-口縁部・櫛掻波 状文、口唇部縄文、受け口縁
SD37-4	77	-	134	弥生土器	鉢か 高坏		(14.2)	-	(5.9)	10R4/8赤	40%	内-赤彩 外-赤彩
SD37-5	77	-	129	弥生土器	高坏		(29.4)	-	(2.8)	10YR4/8赤	口30%	内-赤彩 外-赤彩
SD37-6	77	-	130	弥生土器	甕?		-	7.0	(2.2)	10YR7/2 にぶい黄橙	底 100%	内-黒色化多 外-ハケ、両側 から焼成後に穿孔、紡錘車に 転用?
SD38-1	80	PL52-4	530	縄文土器	深鉢		-	-	(6.1)	5YR6/6橙	破片	縄文前期前半
SD38-2	80	PL52-3	529	縄文土器	深鉢		-	-	(3.9)	75YR7/3 にぶい橙	破片	縄文前期前半
SD38-3	80	-	145	弥生土器	甕		(24.4)	-	(16.4)	75YR7/2 明細灰	口-胴 上40%	内-ミガキ 外-口唇部・削み
SD38-4	80	-	156	弥生土器	甕		(17.4)	-	(10.2)	10YR4/1 褐灰	口-胴 上30%	内-ミガキ。ハケメ残る 外- 口唇部・波状沈線
SD38-5	80	-	142	弥生土器	甕		(12.6)	-	(9.2)	10YR5/2 灰黄褐	30%	内-ミガキ 外-口唇部・縄文、 頸部・櫛掻直線文、胴部・櫛 掻縦羽状文
SD38-6	80	-	155	弥生土器	甕		(17.8)	-	(5.3)	10YR3/1 黒褐色	口40%	内-ミガキ外-黒色化 口唇部・ 波状沈線文、口縁部・受け口縁、 櫛掻波状文
SD38-7	80	-	154	弥生土器	甕		-	-	(7.4)	10YR5/2 灰黄褐	胴50%	内-ミガキ、一部に赤彩らしき もの有 外-櫛掻縦羽状文
SD38-8	80	-	152	弥生土器	甕		(17.4)	-	(11.7)	10YR4/1 褐灰	口-胴 上30%	内-ミガキ 外-櫛掻縦羽状 文・櫛掻波状文→櫛掻直線文
SD38-9	80	-	153	弥生土器	甕		10.5	-	(10.4)	75YR7/4 にぶい橙	口-胴 上80%	内-ミガキ 外-摩耗多 櫛 掻縦羽状文
SD38-10	80	-	151	弥生土器	甕		(18.2)	-	(13.2)	10YR4/1 褐灰	口-胴 上50%	内-ミガキ、ハケメ残る 外- 口縁部・面取り、胴部・櫛 掻縦羽状文
SD38-11	80	-	157	弥生土器	甕		-	(7.8)	(11.0)	10YR7/2 にぶい黄橙	40%	内-ハケメ?外-胴部・櫛 掻縦羽状文 底-ナデ?

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD38-12	80	PL61-4	144	弥生土器	甕		18.4	-	(20.0)	7.5YR6/2 灰褐色	底欠 60%	内-ミガキ 外-摩耗多, 襷描 波状文→襷描麻状文
SD38-13	80	PL61-3	146	弥生土器	甕		11.7	4.8	16.0	7.5YR7/4 にぶい橙	90%	内-ミガキ 外-襷描麻状文→ 襷描波状文, ミガキ 底-ケズリ
SD38-14	80	PL61-6	150	弥生土器	台付 甕		11.8	-	(10.9)	7.5YR6/4 にぶい橙	脚欠 80%	内-ミガキ 外-襷描麻状文→ 襷描波状文
SD38-15	80	-	148	弥生土器	甕		(9.4)	-	(7.4)	10YR5/2 灰黄褐色	口30%	内-ミガキ 外-火をうけている 。摩耗多, 口縁部に縄文
SD38-16	80	-	149	弥生土器	甕		-	-	(11.5)	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	胴30%	内-ミガキ 外-摩耗多, 襷描 波状文
SD38-17	81	-	158	弥生土器	鉢		14.5	5.3	8.0	10R4/6赤	30%	内-赤彩 外-赤彩 底-ケズリ
SD38-18	81	PL61-9	137	弥生土器	高坏		-	-	(7.2)	10R5/8赤	坏-脚	内-ミガキ, 赤彩なし 外-赤 彩, やや段をもつ
SD38-19	81	-	141	弥生土器	高坏		-	10.8	(10.3)	10YR7/2 にぶい黄褐色	40%	赤彩は焼熱のため消失したか?
SD38-20	81	-	174	弥生土器	高坏		-	8.7	(3.5)	2.5YR5/8 明赤褐色	脚60%	内-赤彩 外-赤彩, 穿孔2 箇所あり
SD38-21	81	-	164	弥生土器	甕		-	-	(15.7)	7.5YR7/4 にぶい橙	10%	外-胴部・波状比線文, 縄文
SD38-22	81	-	160	弥生土器	甕		-	-	(10.8)	10YR7/1 灰白	口-胴 60%	内-赤彩 外-ハケのみ, 赤彩 は胴面文内
SD38-23	81	PL61-5	140	弥生土器	甕		11.0	-	(6.4)	2.5YR8/2 灰白	口-胴 100%	内-ミガキ 外-口唇部・縄文, 波状比線文
SD38-24	81	-	138	弥生土器	甕		(12.4)	-	(10.1)	10YR7/2 にぶい黄褐色	10%	外-口縁部・縄文, 胴部・縄 文, 横走比線文
SD38-25	81	-	173	弥生土器	高坏		-	-	(10.5)	10R6/6 赤褐色	脚50%	内-赤彩 外-赤彩
SD38-26	81	-	159	弥生土器	甕		-	-	(14.2)	10R4/6赤 7.5YR8/4 浅黄褐色	胴 100%	内-赤彩 外-襷描横線文→ 垂下文
SD38-27	81	-	161	弥生土器	甕		-	-	(12.4)	10YR8/3 浅黄褐色	胴80%	内-赤彩 外-赤彩, 襷描麻状文 →胴面文, ハケメ残る
SD38-28	81	PL61-7	143	弥生土器	甕		(21.5)	-	(21.3)	10R4/6赤 10YR6/3 浅黄褐色	口-胴 上70%	内-口縁部・赤彩 外-胴部・ 襷描直線文, 赤彩
SD38-29	81	-	168	弥生土器	甕		(18.4)	4.5	(27.0)	7.5R4/6赤 7.5YR7/2 明褐色	30%	内-摩耗, 口縁部・赤彩 外-摩 耗多, 胴部・襷描麻状文, 赤彩
SD38-30	81	-	162	弥生土器	甕		-	6.0	(23.4)	10R5/6赤 10YR7/3 にぶい黄褐色	50%	内-ハケメ 外-胴部・襷描直 線文, 赤彩
SD38-31	81	-	139	弥生土器	甕		6.3	5.8	(16.4)	10YR7/3 にぶい黄褐色	40%	内-ハケメ 外-摩耗多
SD38-32	81	-	171	弥生土器	甕		-	-	(10.3)	10YR7/2 にぶい黄褐色	胴30%	内-ハケメ 外-ハケメ残る, ミガキ
SD38-33	82	-	167	弥生土器	甕		-	(11.7)	(14.0)	10YR8/2 灰白	40%	内-摩耗 外-ミガキ 底-ケ ズリ
SD38-34	82	-	338	弥生土器	甕		-	(8.8)	(10.9)	5YR5/6 明赤褐色	10%	外-ミガキ
SD38-35	82	-	169	弥生土器	甕		-	(9.6)	(8.4)	7.5YR7/3 にぶい橙	10%	内-ハケ 外-ミガキ
SD38-36	82	-	170	弥生土器	甕		-	9.6	(12.8)	10YR8/3 浅黄褐色	20%	外-ハケメ残る
SD38-37	82	-	163	弥生土器	甕		-	9.0	(13.9)	10YR7/3 にぶい黄褐色	胴下- 底70%	内-ハケメ→ナデ 外-ミガキ, ハ ケメわずかに残る 底-ケズリ
SD38-38	82	-	165	弥生土器	甕		-	9.0	(11.3)	10YR7/3 にぶい黄褐色	底40%	内-摩耗 外-ハケメよく残る 底-ケズリ

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD38-39	82	PL06-6	175	手捏土器	蓋		-	-	(4.7)	10YR7/3 にぶい黄橙	60%	指頭直刷著
SD39-1	87	-	189	弥生土器	甕		(14.8)	-	(7.7)	10YR7/2 にぶい黄橙	口25%	内-ミガキ 外-摩耗多
SD39-2	87	-	187	弥生土器	甕		(18.0)	-	(8.0)	75R4/6赤 10YR8/2 灰白	口25%	内-口縁部・赤彩, 剥落多 外-赤彩, 口唇部・縄文, 受け口縁
SD39-3	87	-	188	弥生土器	鉢		(12.7)	3.9	6.2	75R4/8赤	40%	内-赤彩 外-赤彩 底-赤彩
SD44-1	92	-	540	陶磁器	碗		-	(3.2)	(2.5)	N8/ 灰白	20%	近世末・伊万里碗
SK07-1	98	-	56	弥生土器	甕		(22.4)	-	(9.5)	25Y8/1 灰白	破片	内-摩耗 外-口唇部・削み, 口縁部・波状沈線文, 縄文, 胴部・櫛掻簾状文
SK48-1	98	-	246	弥生土器	甕		(18.4)	-	(8.1)	75YR7/4 にぶい橙	破片	内-ハケ, ナデ?外-ミガキ
SK48-2	98	-	244	弥生土器	甕? 甕?		-	7.8	(2.9)	10YR7/2 にぶい黄橙	底 100%	内-ハケ 外-ハケ, 粗雑なつくり, 被熱 底-ケズリ
SK48-3	98	-	245	弥生土器	甕		-	-	(6.8)	N2/ 黒	破片	内-ミガキ 外-胴部・櫛掻簾状文, 胴部・櫛掻波状文, 櫛掻縦羽状文
SK63-1	98	-	248	弥生土器	甕	底面近く	-	8.0	(8.6)	10YR8/3 浅黄橙	底50%	内-ハケ 外-ミガキだがハケメよく残る 底-摩耗多, ハケメ残る
SK92-1	98	PL05-2	462	弥生土器	甕		(23.0)	(8.5)	(34.6)	75YR5/4 にぶい濁	50%	内-ハケ→ミガキ 外-櫛掻斜線文, ミガキ 底-ミガキ
SQ03-1	102	PL60-2	104	弥生土器	甕		-	-	(20.1)	10YR7/3 にぶい黄橙	胴~胴 25%	内-ミガキ 外-胴部・櫛掻簾状文, 胴部・櫛掻縦羽状文
SQ03-2	102	PL60-5	105	弥生土器	甕		-	-	(15.3)	75YR6/3 にぶい濁	胴~胴 25%	内-ミガキ 外-胴部・櫛掻簾状文, 胴部・櫛掻縦位羽状文, ハケメ残る
SQ03-3	102	PL60-3	106	弥生土器	甕		-	-	(21.0)	75YR7/4 にぶい橙	胴25%	内-ハケメ 外-ハケメよく残る 胴部・櫛掻縦位羽状文
SQ03-4	102	PL60-4	107	弥生土器	甕		-	-	(16.8)	75YR7/4 にぶい橙	胴~胴 25%	内-ハケ→ナデ 外-胴部・櫛掻簾状文→胴部・櫛掻縦位羽状文, 削突のある円形浮文
SQ03-5	102	PL60-6	103	弥生土器	甕		(19.5)	(7.0)	25.3	10YR7/3 にぶい黄橙	40%	内-ミガキ 外-口唇部・削み, 胴部・櫛掻簾状文, 胴部・櫛掻縦羽状文 底-ナデ
SQ03-6	102	-	114	弥生土器	甕		(15.7)	-	(7.8)	25Y8/2 灰白	口30%	内-ハケメ, ナデ 外-縄文→波状沈線文
SQ03-7	102	-	115	弥生土器	鉢?		-	5.4	(3.0)	10YR8/2 灰白	底40%	内-赤彩 底-焼成前穿孔
SQ03-8	102	PL61-1	102	弥生土器	鉢		(16.8)	6.0	6.6	10R4/8赤	80%	内-赤彩 外-赤彩 底-ケズリ
SQ03-9	102	-	111	弥生土器	甕		-	-	(3.7)	10YR7/4 にぶい黄橙	破片	縦面文
SQ03-10	102	-	113	弥生土器	甕		-	-	(6.4)	25YR5/6 明赤濁	破片	縦面文
SQ03-11	102	-	112	弥生土器	甕		-	-	(4.9)	10YR7/4 にぶい黄橙	破片	櫛掻簾状文
SQ03-12	102	PL60-9	116	弥生土器	付着土器か鉢		-	3.8	(2.5)	10YR7/3 にぶい黄橙	脚90%	手捏土器の可能性も有
SQ03-13	102	PL60-7	108	弥生土器	不明		(9.1)	-	(2.9)	10YR7/4 にぶい黄橙	破片	鳥形土器の一部か?
SQ03-14	102	PL60-8	110	弥生土器	甕?		(5.0)	-	(4.1)	10YR6/6 明黄濁	破片	円形浮文
①~③区外-1	104	PL52-2	528	縄文土器	深鉢		-	-	(3.9)	75YR6/1 濁灰	破片	縄文前期前半

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
①-③区外-2	104	PL52-8	202	縄文土器	深鉢	②-2区	-	-	(26)	5YR7/4 にぶい橙	破片	縄文前期前半
①-③区外-3	104	PL52-9	485	縄文土器	両耳壺	②-1区	(5.3)	-	(7.0)	10YR6/2 灰黄褐	破片	縄文中期末以降
①-③区外-4	104	PL52-16	122	縄文土器	深鉢	③-2区	-	-	(4.4)	2.5Y8/2 灰白	破片	縄文後期
①-③区外-5	104	PL52-17	123	縄文土器	深鉢	③-2区	-	-	(2.3)	2.5YR7/2 にぶい黄橙	破片	縄文後期
①-③区外-6	104	PL52-18	86	縄文土器	深鉢	③-1区	-	-	(4.9)	5YR6/6 橙	破片	縄文後期
①-③区外-7	104	PL52-22	127	縄文土器	浅鉢	③-2区	-	-	(3.6)	10YR7/3 にぶい黄橙	破片	縄文後期
①-③区外-8	104	PL52-25	513	縄文土器	深鉢	②-2区	-	(11.0)	(3.3)	7.5YR6/4 にぶい橙	底40%	縄文中・後期?
①-③区外-9	104	PL66-2	474	弥生土器	壺	②-1区	19.0	-	(14.1)	10YR6/3 にぶい黄橙	口-胴 70%	内-ハケメよく残る。口縁部赤彩。 外-口縁部・赤彩痕。胴部・縄文 →沈状沈線文。前面文内赤彩
①-③区外-10	104	PL66-1	476	弥生土器	壺	②-1区	(14.5)	-	(14.6)	7.5YR8/2 灰白	口-胴 60%	内-ハケメよく残る。外-口縁部・縄文、縄部・縄文、柳描 特選線文。
①-③区外-11	104	-	479	弥生土器	壺	②-1区	-	-	(9.0)	7.5YR8/3 浅黄橙	胴30%	内-ハケ 外-胴部・縄文、沈 線文
①-③区外-12	104	-	58	弥生土器	壺	②-1区	10.7	-	(6.4)	10YR7/2 にぶい黄橙	口 100%	内-ミガキ、割落多し。 外-ハ ケ→ミガキ、ハケメ多くのこる。柳 描横線文で面する。
①-③区外-13	104	-	510	弥生土器	壺	トレ13	(16.1)	-	(11.1)	10YR7/2 にぶい黄橙	口-胴 ハケメ残る 60%	内-ミガキ 外-口唇部・縄文、 胴部ハケメ残る
①-③区外-14	104	-	305	弥生土器	壺	②-2区	(27.8)	-	(6.5)	7.5R4/6赤 7.5YR7/6橙	口50%	内-赤彩 外-口縁部・縄文、 胴部外赤彩
①-③区外-15	104	-	478	弥生土器	壺	②-1区	-	-	(18.4)	10YR8/2 灰白	30%	内-ミガキ、ハケメ残る 外- ミガキ
①-③区外-16	104	-	477	弥生土器	壺	②-1区	-	-	(27.8)	7.5YR7/2 明赤褐	60%	内-ハケメ 外-ミガキ、ハケ メ残る
①-③区外-17	104	-	59・ 60	弥生土器	壺	②-1区	-	(10.0)	(24.8)	7.5YR7/4 にぶい橙	40%	内-ハケ 外-ミガキ、ハケ残 る 底-ケズリ、ナデ
①-③区外-18	105	-	475	弥生土器	壺	②-1区	-	9.0	(15.8)	10YR6/3 にぶい黄橙	底60%	内-ハケ、わずかに赤彩痕 外- ミガキ、柳描波状文 底-ケズリ
①-③区外-19	105	-	504	弥生土器	壺?	②-1区	-	-	(5.7)	7.5YR7/3 にぶい橙	破片	胴部・柳描籬状文、柳描縦羽 状文
①-③区外-20	105	-	471	弥生土器	壺	②-1区	(16.2)	-	15.4	7.5YR6/6 橙	口-胴 40%	内-ハケ 外-摩耗多 ハケ メ残る。口縁部・柳描波状文、 胴部・柳描籬状文、胴部・柳 描縦羽状文
①-③区外-21	105	PL65-5	190	弥生土器	壺	②-2区	(11.4)	-	(15.1)	2.5YR5/6 明赤褐	破片	内-ミガキ 外-折り返し口 縁、柳描波状文
①-③区外-22	105	-	65	弥生土器	壺	②-1区	(13.4)	-	(16.3)	10YR5/3 にぶい黄橙	胴50%	内-ミガキ 外-口縁部・柳描 斜線J文、胴部・柳描籬状文、 胴部・柳描波状文、ミガキ。
①-③区外-23	105	-	119	弥生土器	壺	②-2区	(17.6)	(6.4)	17.5	7.5YR6/4 にぶい橙	60%	内-ミガキ 外-胴部・柳描籬 状文、口縁部・胴部・柳描波 状文 底-ミガキ
①-③区外-24	105	PL65-3	473	弥生土器	壺	②-1区	(18.0)	(7.3)	24.2	7.5YR6/3 にぶい褐	70%	内-ミガキ 外-コの字重ね 文、円形浮文、2箇所残存。 本案は5単位か? 底-ケズリ
①-③区外-25	105	PL65-4	6	弥生土器	壺	②-1区	(24.2)	8.2	32.0	10YR7/4 にぶい黄橙	50%	内-ハケ→ミガキ 外-口唇 部・縄文、口縁部・柳描波状 文、胴部・柳描籬状文、ミガ キ、ハケメ残る 底-ミガキ

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
①～③区外-26	105	PL66-3	486	弥生土器	甕	②-1区	-	57	(36)	10YR4/2 灰黄褐色	底 100%	底外面に木葉状の線刻
①～③区外-27	105	PL66-5	117	弥生土器	瓶	③-2区	12.5	48	80	7.5YR7/3 にぶい橙	100%	内-ハケ、ミガキ 外-ミガキ、 ハケメ残る 底-焼成前穿孔、 ミガキ。
①～③区外-28	105	-	237	弥生土器	壺	①-4区	-	160	(63)	10YR7/3 にぶい黄橙	底 50%	内-ナデ 外-ミガキ 底-ミ ガキ、焼成前穿孔。
①～③区外-29	106	巻頭カ ラー	523	人形土器	人形 土器	遺構外 SD37	-	-	(28.2)	10YR 7/3 にぶい黄橙	70%	①-2区(頭部)、②-2区(腰部 以下)、SD37(腹部、赤彩)
①～③区外-30	107	-	503	人形土器	人形 土器	②-2 区V層 上面	-	-	(4.0)	10YR 7/4 にぶい黄橙	破片	29と同一個体の可能性有
①～③区外-31	107	-	504	人形土器	人形 土器	②-2 区V層 上面	-	-	(3.8)	10YR 7/5 にぶい黄橙	破片	29と同一個体の可能性有
①～③区外-32	107	巻頭カ ラー	120	人形土器	人形 土器	③-2区	-	-	(5.6)	10YR6/6 明黄褐色	頭 50%	V層から出土
①～③区外-33	108	-	211	人形土器	人形 土器	②-2区	-	-	(5.8)	5YR6-6橙	破片	32と同一個体か?
①～③区外-34	108	PL67-12	121	土製品	不明土 製品	③-2区	-	-	(4.2)	10YR7/3 にぶい黄橙	破片	土器の可能性有
①～③区外-35	108	PL66-11	511	手捏土器	鉢形	表採	-	35	(5.6)	10YR6/2 灰黄褐色	30%	底部付近に指頭痕
①～③区外-36	108	PL66-10	488	手捏土器	鉢形	②-1区	-	30	(3.0)	10YR6/2 灰黄褐色	底 100%	赤彩の痕跡わずかに有
①～③区外-37	108	PL67-2	194	手捏土器	瓶形	②-2区	-	(3.1)	(29)	7.5YR6/4 にぶい橙	30%	底-穿孔
①～③区外-38	108	PL66-12	207	手捏土器	瓶形	②-2区	-	5.2	(5.9)	2.5Y6/2 灰黄	底 100%	外-指頭痕多 底-穿孔
①～③区外-39	108	PL67-1	208	手捏土器	瓶形	②-2区	-	(4.8)	(1.6)	7.5YR7/3 にぶい橙	底 50%	底-穿孔
①～③区外-40	108	PL66-9	206	手捏土器	蓋形	②-2区	-	-	(4.0)	2.5Y6/1 黄灰	60%	摩耗多
①～③区外-41	108	PL66-7	489	手捏土器	蓋形	②-1区	-	-	(2.4)	10YR7/3 にぶい黄橙	50%	指頭痕有
①～③区外-42	108	PL66-8	490	手捏土器	蓋形	②-1区	3.1	-	(2.9)	10YR4/1 褐灰	50%	指頭痕有
①～③区外-43	108	PL67-5	91	土製品	土製 円板	①-3区	-	-	-	10R5/6赤	破片	赤彩帯の破片 3.9×4.4cm
①～③区外-44	108	PL67-9	247	土製品	土製 円板	②-2区	-	-	-	2.5YR5/6 明赤褐色	破片	土器片(葉)、摩耗多 3.3× 4.2cm
①～③区外-45	108	PL67-7	487	土製品	土製 円板	②-1区	-	-	-	7.5YR5/4 にぶい褐	破片	土器片(葉)、摩耗多 3.4× 3.0cm
①～③区外-46	108	PL67-6	90	土製品	土製 円板	①-3区	-	-	-	10YR6/2 灰黄褐色	破片	土器片(葉)、摩耗多 3.4× 3.7cm
①～③区外-47	108	PL67-10	521	土製品	土製 網罟	①-3区	-	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	100%	指頭痕有、穿孔 4.6×4.4cm 孔径 0.8
①～③区外-48	108	PL67-11	520	土製品	不明	②-1区	-	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	100%	粗雑なつくり、穿孔有 2.9×2.8 孔径 0.9cm
①～③区外-49	108	PL52-23	522	土製品	不明	②-2区	-	-	-	10YR6/4 にぶい黄橙	不明	不明製品 3.8×4.8×(2.7)
①～③区外-110	113	-	519	土師器	坏	②-2区	(14.8)	68	(5.6)	7.5YR7/6橙	50%	内面黒色処理
①～③区外-111	113	PL68-7	518	須恵器	坏	②-2区	-	-	(3.5)	5Y6/1灰	破片	墨書
④-2区 第1 水田-1	115	PL68-4	577	土師器	坏		-	(7.0)	(1.2)	5YR7/6橙	底 40%	

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
④区 第2水 田-1	119	PL52-7	535	縄文土器	深鉢		-	-	(38)	25Y8/3 浅黄	破片	縄文前期(諸磯b式)
④区 第2水 田-2	119	PL68-22	571	須恵器	甕		-	-	(23)	N4/灰	破片	口縁部
SB04-1	126	PL53-5	40	弥生土器	甕	土器敷 如	-	-	(190)	10YR7/2 にぶい黄橙	胴-胴 25%	内-ハケ 外-胴部・脚指線状 文, 横溝波状文, 胴部・脚指 線引状文
SB04-2	126	PL53-8	42	弥生土器	甕	土器敷 如	-	-	(138)	10YR7/2 にぶい黄橙	胴-胴 25%	内-ハケ→ミガキ 外-胴部・ 脚指線状文, 胴部・脚指線位 引状文
SB04-3	126	PL53-4	37	弥生土器	甕	土器敷 如	-	-	(140)	10YR6/3 にぶい黄橙	胴25%	内-ハケメ残る ナゲ?ミガ キ? 外-ハケメ残る, 胴部脚 指線引状文
SB04-4	126	PL53-7	43	弥生土器	甕	土器敷 如	-	-	(137)	10YR7/3 にぶい黄橙	胴25%	内-摩耗多, ハケメ残る 外- 摩耗多, ミガキ, 突部直有
SB04-5	126	PL53-6	41	弥生土器	甕	土器敷 如	-	-	(157)	7.5YR7/2 明細灰	胴-胴 土30%	内-ハケ→ナゲ 外-ハケメよ く残る
SB04-6	126	PL53-3	38	弥生土器	鉢		(23.6)	-	(8.4)	7.5R4/6赤	口75%	内-ハケ→ミガキ→赤彩 外- 口縁部・突起2箇所, 口唇部・ 山形突起, 赤彩
SM10-1	128	-	541	弥生土器	甕		-	-	(30)	7.5YR4/2 灰黒	破片	口唇部・縄文
SM10-2	128	-	542	弥生土器	甕		-	-	(22)	10YR4/1 褐灰	破片	口唇部・割み
SM10-3	128	-	543	弥生土器	甕		-	-	(29)	7.5YR5/1 褐灰	破片	口縁部・横溝波状文
SM10-4	128	-	544	弥生土器	鉢		-	-	(32)	7.5YR17/1 黒	破片	コの字重ね文の一部
SM17-1	128	-	561	弥生土器	甕		-	(7.9)	(4.3)	7.5YR8/3 浅黄橙	底30%	外-ミガキ
SM17-2	128	-	560	弥生土器	鉢		-	3.3	(2.4)	10R6/6 赤橙	底60%	外-赤彩
SM17-3	128	-	559	弥生土器	甕		-	-	(5.6)	7.5YR8/2 灰白	破片	縄文→沈線文
SM15-1	130	PL56-9	48	手捏土器	鉢形		-	5.0	(8.1)	2.5YR6/3 にぶい橙	60%	内-指頭直あり, 粗雑, 口縁 部赤彩, 外-ミガキ, わずかに 赤彩あり, 指頭直有
SM15-2	130	-	557	弥生土器	甕		-	-	(3.6)	2.5Y7/1 灰白	10%	内-ミガキ 外-横溝線引状文
SM15-3	130	-	558	弥生土器	甕		-	-	(5.0)	10YR17/1 黒	10%	外-横溝線状文, 横溝線引状文
SD23-1	133	PL52-14	93	縄文土器	深鉢		-	-	(4.8)	2.5Y 7/2 灰黄	破片	縄文後期
SD31-1	133	-	94	弥生土器	甕		(18.0)	-	(9.6)	7.5YR6/4 にぶい橙	口20%	口縁部・胴部・脚指線状文、 胴部・脚指線状文
SD32-1	133	-	96	弥生土器	甕		-	-	(3.4)	10YR6/3 にぶい黄橙	破片	折り返し口縁に割み
SD32-2	133	-	97	弥生土器	甕		-	-	(3.9)	7.5R4/6赤 10YR7/2 にぶい黄橙	破片	口縁端部・刺突, 赤彩
SD33-1	133	-	98	弥生土器	甕		(18.4)	-	(4.8)	10R2/1黒	口20%	内-ミガキ 外-口唇部・割み、 黒色化
SD34-1	134	PL61-2	101	弥生土器	甕		36.5	-	(24.0)	10YR7/3 にぶい黄橙	底欠 70%	内-ミガキハケメ残る 外-口 唇部・割み
SD34-2	134	-	100	弥生土器	高坏		-	-	(5.5)	7.5R4/6赤	10%	内-赤彩 外-赤彩, 段をもつ
SD63-1	135	PL52-15	453	縄文土器	鉢		-	-	(3.9)	2.5Y2/1黒	破片	縄文後期

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
④区外-1	137	PL52-6	534	弥生土器	深鉢		-	-	(3.5)	25Y8/3 淡黄	破片	縄文前期(諸磯B式)
④区外-2	137	-	506	弥生土器	甕		-	-	(3.9)	7.5YR4/3褐	破片	受け口跡
④区外-3	137	-	461	弥生土器	高杯		(21.7)	-	(9.1)	10R4/6赤 2.5Y6/3 にふい黄	40%	内-赤彩 外-赤彩
④区外-4	137	PL66-13	460	弥生土器	高杯		-	-	(6.8)	2.5YR4/6 赤褐	10%	内-赤彩 外-赤彩、3段の屈曲部
⑤区水田A-1	142	PL68-1	538	陶磁器	甕	被覆砂層	(7.8)	2.7	(3.5)	10Y8/1 灰白	40%	伊万里・17世紀後半
⑤区水田A-2	142	PL68-2	537	陶磁器	甕	被覆砂層	-	3.1	(3.3)	7.5Y8/2 灰白	30%	瀬戸美濃・18世紀末
⑤区水田A-3	142	PL68-5	576	内耳土器	内耳土器		-	-	(5.0)	10YR5/1 褐灰	破片	内耳土器
⑤区水田A-4	142	PL68-6	536	内耳土器	内耳		-	-	(8.6)	10YR17/1 黒	破片	内耳土器
⑤区水田C-1	150	PL68-24	514	須恵器	坏		-	7.7	(2.7)	5Y4/1灰	底50%	
⑤区水田C-2	150	-	572	須恵器	坏		-	10.0	(1.0)	N 5/ 灰	底90%	
⑤区水田C-3	150	PL68-23	525	須恵器	長頸甕		(4.8)	-	(5.0)	2.5Y7/1 灰白	口50%	
SD65-1	154	PL52-19	526	縄文土器	深鉢		-	-	(7.7)	10YR5/1 褐灰	破片	縄文後期
SD65-2	154	PL52-20	527	縄文土器	深鉢		-	-	(3.7)	2.5Y7/1 灰白	破片	縄文後期
SD65-3	154	-	354	弥生土器	甕		19.8	-	(12.4)	10YR4/1 褐灰 10YR6/2 灰黄褐	口80%	内-ミガキ 外-口縁部・刻み、口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文、内形貼付文が4箇所残る。本来は5単位か?
SD65-4	154	-	352	弥生土器	甕		(22.0)	-	(15.4)	10YR6/3 にふい黄橙	口-胴 40%	内-ミガキ 外-口縁部・刻み、頸部以下・櫛波状文、ミガキ
SD65-5	154	PL62-2	342	弥生土器	甕		23.0	7.8	30.6	2.5Y4/2 褐灰黄	90%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、ミガキ、頸部・櫛波状文、炭化物付着多(年代測定) 底-ミガキ
SD65-6	154	-	371	弥生土器	甕		(20.2)	-	(20.9)	10YR6/3 にふい黄橙	口-胴 40%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文
SD65-7	154	PL61-10	372	弥生土器	甕		(18.6)	-	(24.5)	5YR6-6橙 N3-0 褐灰	60%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文
SD65-8	154	PL62-3	383	弥生土器	甕		(18.4)	8.0	27.5	10YR5/2 灰黄褐 7.5YR5/3 にふい褐	70%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文、炭化物付着多(年代測定) 底-ケズリ
SD65-9	154	PL63-5	368	弥生土器	甕		(11.2)	5.0	13.3	10YR4/1 褐灰 10YR4/2 灰黄褐	80%	内-ハケ→ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、ミガキ、頸部・櫛波状文
SD65-10	154	PL63-3	378	弥生土器	甕		(14.2)	(5.4)	(15.5)	5YR5/4 にふい赤褐	80%	内-ハケ、ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文、ミガキ、ハケメ残る
SD65-11	154	-	366	弥生土器	甕		(13.3)	-	(11.4)	10YR3/2 黒褐	口-胴 上40%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文、炭化物付着。
SD65-12	154	-	377	弥生土器	甕		(13.5)	-	(10.0)	10YR6/1 褐灰 10YR6/2 灰黄褐	口40%	内-ミガキ 外-頸部多、口縁部・胴部・櫛波状文、頸部・櫛波状文

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD65-13	154	-	397	弥生土器	甕		(13.8)	-	(6.3)	10YR5/1 褐灰	口30%	内-ミガキ 外-口縁部・髷描波状文・頸部・髷描籬状文
SD65-14	155	PL62-1	358	弥生土器	甕		21.0	-	(19.9)	5Y3/1 オリーブ黒	口-胴 70%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・髷描波状文、ミガキ、頸部・髷描籬状文、ハケメ残る
SD65-15	155	PL61-11	356	弥生土器	甕		(21.1)	-	24.6	10YR5/2 灰黄褐	底欠 60%	内-ミガキ 外-口縁部、折り返し口縁、波状文、頸部・髷描籬状文、胴部・髷描波状文、ミガキ
SD65-16	155	PL62-4	419	弥生土器	甕		20.5	-	(20.2)	10YRL7/1黒 10YR6/3 にぶい黄橙	口-胴 80%	内-ミガキ 口縁部・胴部・髷描波状文、頸部・髷描籬状文
SD65-17	155	-	512	弥生土器	甕		(20.0)	-	(16.5)	7.5YR3/2 黒褐	口-胴 50%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・髷描波状文、頸部・髷描籬状文
SD65-18	155	-	388	弥生土器	甕		(23.0)	-	(21.1)	2.5Y8/3 淡黄	口30% 破片	内-ミガキ 外-炭化物付着、口縁部・胴部・髷描波状文、頸部・髷描籬状文
SD65-19	155	-	418	弥生土器	甕		(22.7)	-	(12.4)	10YR3/1 黒褐	口50%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・髷描波状文、頸部・髷描籬状文
SD65-20	155	PL62-5	379	弥生土器	甕		(21.0)	-	(22.4)	5Y3/1 オリーブ黒	60%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・髷描波状文、波状文はやや乱れる、頸部・髷描籬状文、炭化物付着
SD65-21	155	-	386	弥生土器	甕		(20.5)	-	(9.1)	7.5YR7/6 橙	口30% 破片	内-ミガキ 外-胴落有、口縁部・胴部・乱れた髷描波状文、頸部・髷描籬状文
SD65-22	155	-	396	弥生土器	甕		(21.8)	-	(7.8)	10YR5/1 褐灰	口25%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・乱れた髷描波状文、頸部・髷描籬状文
SD65-23	156	-	370	弥生土器	甕		25.2	-	(13.2)	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR4/2 灰黄褐	口50%	内-ミガキ 外-口縁部・髷描斜線文、胴部・髷描斜線文、頸部・髷描籬状文、炭化物付着
SD65-24	156	PL62-6	362	弥生土器	甕		(21.4)	-	(24.4)	5YR6/4 にぶい橙	50%	内-ミガキ 外-口縁部・髷描斜線文、胴部・髷描羽状文、ミガキ
SD65-25	156	-	401	弥生土器	甕		(18.0)	-	(5.9)	7.5YR4/1 褐灰	口20%	内-ミガキ 外-口縁部・髷描羽状文
SD65-26	156	-	374	弥生土器	甕		-	-	(18.6)	2.5Y2/1黒 2.5Y5/1 黄灰	胴40%	内-ミガキ 外-胴部・髷描波状文→ミガキ
SD65-27	156	-	387	弥生土器	甕		-	8.1	(15.7)	7.5YR7/4 にぶい橙	底60%	内-ミガキ 外-胴部・髷描波状文、ミガキ
SD65-28	156	PL63-6	376	弥生土器	甕		15.2	-	(13.4)	10YR4/1 褐灰	口-胴 70%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・髷描斜線文、頸部・髷描籬状文
SD65-29	156	PL63-2	382	弥生土器	甕		(16.2)	-	(12.4)	2.5Y2/1黒	口-胴 100%	内-ミガキ 外-口縁部、ハケメ残る、口縁部・胴部・髷描羽状文? 頸部・髷描籬状文、炭化物付着
SD65-30	156	-	390	弥生土器	甕		-	-	(9.9)	10YR7/3 にぶい橙	胴10%	内-ミガキ 外-胴部・髷描籬状文、胴部・髷描斜線文
SD65-31	156	-	351	弥生土器	甕		-	-	(14.8)	7.5YR6/3 にぶい褐	胴-胴 上30%	内-ミガキ 外-胴落有、頸部・髷描籬状文、胴部・髷描波状文
SD65-32	156	-	353	弥生土器	甕		-	-	(16.8)	10YR6/3 にぶい黄橙	胴60%	内-ミガキ 外-胴部・髷描波状文、ミガキ

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD65-33	156	PL63-1	341	弥生土器	甕		17.5	6.6	199	10YR3/2 黒褐	80%	内-ミガキ 外-口縁部・髷播 斜縦文、頸部・髷播縦文、ミ ガキ 底-ミガキ
SD65-34	156	PL63-4	380	弥生土器	甕		17.0	6.3	172	10YR5/2 灰黄褐	60%	内-ハケ→ミガキ 外-口縁 部・髷播斜走文、頸部・髷播 縦文 底-ミガキ
SD65-35	156	-	381	弥生土器	甕		(14.8)	-	(9.6)	10YR2/1 黒 10YR5/2 灰黄褐	口90%	内-ミガキ 外-割落多、口縁 部・髷播斜縦文、頸部・髷播 縦文、胴部・髷播横羽状文
SD65-36	156	-	359	弥生土器	甕		-	6.1	(14.5)	7.5YR5/4 にぶい褐	60%	内-ミガキ 外-頸部・髷播縦 文、胴部・髷播波状文、ミガ キ 底-ミガキ
SD65-37	157	PL63-8	349	弥生土器	甕		-	7.5	(23.2)	10R5/8赤 10YR6/2 灰黄褐	80%	内-ハケ、口縁部のみミガキ 外- 赤彩、頸部・髷播縦文、垂下 文 底-ケズリ、やや丸みをもち
SD65-38	157	PL64-2	409	弥生土器	甕		-	-	(23.5)	10R4/8赤 10YR5/3 にぶい黄褐	口-胴 上70%	内-割落多、赤彩直わずかに 有 外-赤彩、頸部髷播縦文 文、髷播波状文、胴部・ミガキ
SD65-39	157	-	361	弥生土器	甕		(25.5)	-	(8.3)	10R5/6赤	口30%	内-赤彩 外-赤彩
SD65-40	157	-	407	弥生土器	甕		-	-	(9.4)	10R5/4 赤褐	頸30%	内-頸部上部は赤彩、下部は ハケ 外-赤彩、被熱、頸部・ 矢羽状文
SD65-41	157	PL64-1	347	弥生土器	甕		-	-	(28.7)	10R4/4 赤褐 5YR6/3 にぶい橙	口-胴 50%	内-割落多口縁部、赤彩直わ ずかに有 外-赤彩、頸部・ 矢羽状文、円形浮文の痕跡ミ ガキ
SD65-42	157	PL63-7	343	弥生土器	甕		-	-	(41.1)	10R4/8赤 10YR6/3 にぶい黄橙	20%	内-頸部・赤彩 外-頸部、 被熱文、赤彩、円形浮文2箇 所(1箇所は割落)
SD65-43	158	PL64-5	410	弥生土器	鉢		(17.0)	4.2	6.5	10R4/6赤	50%	内-赤彩 外-赤彩 底-赤彩
SD65-44	158	PL64-7	346	弥生土器	鉢		12.6	3.3	6.1	10R4/8赤	100%	内-赤彩 外-赤彩 底-赤彩
SD65-45	158	PL64-8	360	弥生土器	鉢		12.4	5.6	6.0	10R4/8赤 2.5Y6/2 灰黄	90%	内-赤彩 外-赤彩 底-ケズ リ痕
SD65-46	158	PL64-6	415	弥生土器	片口 鉢		(11.2)	-	(7.3)	10YR5/6 黄褐	破片	内-ミガキ 外-ミガキ
SD65-47	158	PL64-3	340	弥生土器	高坏		26.0	15.0	23.7	2.5YR5/6 明赤褐	100%	内-赤彩 外-赤彩。突起4 単位、脚部被熱痕
SD65-48	158	PL64-4	408	弥生土器	高坏		(20.3)	-	(12.3)	2.5YR4/4 にぶい赤褐	坏60%	内-ミガキ、赤彩 外-坏底部 に4箇所穿孔、赤彩
SD65-49	158	-	417	弥生土器	高坏		(25.7)	-	(4.9)	2.5YR5/6 明赤褐	口40%	内-摩耗多、赤彩、被熱 外- 赤彩
SD65-50	158	-	412	弥生土器	高坏		-	10.7	(10.1)	10R5/6赤	脚40%	外-赤彩
SD70-1	164	PL52-10	533	縄文土器	深鉢		-	-	(4.8)	2.5Y2/1黒	破片	縄文中期末～後期前半
SD70-2	164	PL52-13	532	縄文土器	深鉢		-	-	(5.4)	2.5Y8/2 灰白	破片	縄文後期前半
SD70-3	164	PL52-21	424	縄文土器	深鉢		-	-	(4.5)	7.5YR5/2 灰褐	破片	縄文中期後葉～後期前半
SD70-4	164	-	429	弥生土器	甕		-	-	(5.9)	10YR6/4 にぶい橙	破片	口縁部・髷播波状文
SD70-5	164	PL65-1	420	弥生土器	瓶		(18.6)	6.5	13.3	10YR7/3 にぶい黄橙	80%	内-ミガキ 外-ミガキ 底- 被熱前穿孔
SD71-1	164	-	430	弥生土器	甕		-	-	(7.2)	10YR6/2 灰黄褐	破片	口縁部・髷播波状文
SD71-2	164	-	431	弥生土器	甕		(22.0)	-	(6.1)	5YR7/8橙	口40%	内-ミガキ、ハケメ残る 外- ミガキ、ハケメ残る

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD72-1	164	PL52-24	437	縄文土器	鉢		-	-	(19)	10YR8/1 灰白	破片	縄文後期加曾利B式
SD72-2	164	-	433	弥生土器	甕		-	-	(4.1)	7.5YR5/3 にぶい濁	破片	口縁部・縄文、頸部・櫛歯状文、櫛歯状文
SD72-3	164	-	436	弥生土器	甕		-	-	(4.2)	10YR7/1 灰白	破片	沈線文、縄文
SD72-4	164	-	432	弥生土器	甕		-	-	(4.2)	5YR6-6 橙	破片	口縁部・櫛歯状文、頸部・櫛歯状文
SD72-5	164	-	434	弥生土器	甕		-	-	(4.9)	10YR5/1 濁灰	破片	口縁部・櫛歯、頸部・櫛歯状文
SD72-6	164	-	438	弥生土器	甕		-	-	(10.2)	2.5Y7/3 浅黄	頸30%	内-頸部上位に赤彩有 外-赤彩、剣突のある円形浮文
SD73-1	164	PL52-11	449	縄文土器	鉢		-	-	(3.6)	7.5YR6/3 にぶい濁	破片	縄文後期(称名寺II)
SD73-2	164	PL52-12	450	縄文土器	鉢		-	-	(2.9)	10YR8/2 灰白	破片	縄文後期(称名寺II)
SK101-1	166	PL52-25	447	縄文土器	深鉢	(32.0)	-	-	(19.5)	10YR8/1 灰白	破片	縄文晩期後半
SK101-2	166	-	443	弥生土器	甕		-	-	(12.7)	10R6/8 赤橙	破片	内-割落多、ハケメわずかに残る 外-赤彩、ハケメ残る
SK101-3	166	-	445	弥生土器	鉢	(21.6)	-	-	(11.7)	5YR6-6 橙	破片40%	内-割落多 外-粗雑なミガキ、ハケメ残る
SK101-4	166	-	446	弥生土器	甕		-	7.3	(10.0)	10YR8/3 浅黄橙	底40%	内-ミガキ 外-ミガキ 底-ケズリ
SK101-5	166	-	444	弥生土器	鉢	(16.0)	(4.4)	(7.7)	10R5/6 赤	50%	内-赤彩、割落多 外-赤彩、割落多 底-わずかに赤彩	
SK101-6	166	-	439	弥生土器	甕		-	-	(6.3)	10YR3/1 黒黒	破片	口縁部・櫛歯状文
SK101-7	166	-	440	弥生土器	甕		-	-	(6.5)	10YR8/2 灰白	破片	口縁部・櫛歯状文
SK101-8	166	-	441	弥生土器	甕		-	-	(4.7)	10YR3/1 黒黒	破片	口縁部・櫛歯状文
SK101-9	166	-	442	弥生土器	甕		-	-	(6.1)	7.5R4/6 赤 10YR4/1 濁灰	破片	口縁部・波状文、赤彩
SD09-1	178	PL54-12	20	弥生土器	鉢	床面	14.3	4.9	6.3	10R4/6 赤	90%	内-赤彩、割落多 外-赤彩 底-ミガキ、わずかに赤彩痕跡
SD09-2	178	PL54-11	256	弥生土器	鉢		(15.9)	-	(8.9)	2.5YR5/8 明赤濁	40%	内-赤彩 外-赤彩
SD09-3	178	PL54-9	255	弥生土器	鉢	床面	(18.0)	5.3	8.6	7.5YR6/6 橙	60%	内-ミガキ 外-ミガキ、焼熱のため赤彩は焼失したか? 底-ナゲ
SD09-4	178	PL54-13	262	弥生土器	甕		-	5.8	(6.3)	7.5YR6/6 橙	底60%	内-ミガキ 外-ミガキ 底-ミガキ、焼成前の穿孔
SD09-5	178	-	261	弥生土器	台付鉢?		-	7.2	(7.4)	10R4/8 赤	脚90%	内-赤彩 外-赤彩
SD09-6	178	PL54-6	252	弥生土器	高坏	床面	-	(20.7)	12.1	10R4/8 赤	脚50%	内-ハケメ残る 外-赤彩
SD09-7	178	-	258	弥生土器	台付甕?	床面	-	-	(6.2)	10YR7/4 にぶい黄橙	脚20%	内-ナゲ 外-ミガキ
SD09-8	178	-	254	弥生土器	小型甕	床面	-	5.0	(6.8)	2.5Y7/6 明黄濁	胴-底50%	内-ミガキ 外-胴部・櫛歯状文、ミガキ 底-ケズリ
SD09-9	178	PL54-10	249	弥生土器	甕	床面	(12.6)	-	(8.4)	7.5YR5/4 にぶい濁	口-胴50%	内-ミガキ 外-櫛歯状文
SD09-10	178	PL54-7	251	弥生土器	甕	床面	-	-	(11.3)	10YR7/4 にぶい黄橙	頸50%	内-ミガキ 外-頸部櫛歯状文、櫛歯状文。

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD09-11	178	PL55-1	264	弥生土器	壺		-	-	(123)	75YR5/4 にぶい褐	割40%	内-ハケ 外-赤彩
SD09-12	178	-	257	弥生土器	壺	床面	-	-	(180)	10R4/6赤	割30%	内-ハケ 外-ミガキ、赤彩
SD09-13	178	-	265	弥生土器	壺	床面	-	-	(196)	10R4/6赤	割30%	内-摩耗多 外-赤彩
SB09-14	178	PL54-8	118	手捏土器	鉢形	床面	(8.6)	4.0	4.8	10YR6/4 にぶい黄橙	90%	内-ナア 外-ナア 底-ナア
SB10-1	181	PL55-2	272	弥生土器	鉢	床面	(20.2)	(6.0)	(8.8)	10R5/6赤	50%	内-赤彩 外-赤彩 底-わずかに赤彩
SB10-2	181	PL55-6	267	弥生土器	鉢	床面	(15.6)	6.3	9.0	25YR4/8 赤褐	60%	内-赤彩 外-赤彩 底-赤彩
SB10-3	181	-	266	弥生土器	壺	床面	-	6.8	(4.6)	10R4/6赤	底80%	内-ミガキ 外-赤彩 底-赤彩
SB10-4	181	PL55-5	271	弥生土器	蓋	床面	-	(10.4)	5.7	10R5/6赤	80%	内-ハケが残る 外-赤彩、つまみ部欠
SB10-5	181	PL55-4	274	弥生土器	蓋	床面	-	14.3	(8.3)	10R5/6赤	90%	内-ハケ、ナア、粗難なつくり 外-赤彩、受け部外面赤彩なし、つまみ部欠
SB10-6	181	-	279	弥生土器	高坏	床面	-	-	(4.5)	25YR4/8 赤褐	10%	内-赤彩 外-赤彩
SB10-7	181	PL55-7	275	弥生土器	壺	床面	14.2	-	(9.1)	10R4/8赤 25Y6/3 にぶい黄	口-頸 70%	内-口-頸部・赤彩、剥落多 外-頸部・櫛歯状文、櫛歯 波状文、赤彩、刺突のある円 形浮文1箇所
SB10-8	181	-	276	弥生土器	壺	床面	-	-	(12.0)	10YR8/3 浅黄橙 10R5/6赤	破片	内-頸部・赤彩、剥落多 外- 赤彩
SB10-9	181	-	268	弥生土器	高坏?	床面	(20.3)	-	(3.1)	10R5/6赤	口50%	内-赤彩 外-口縁端部を除き 赤彩
SB10-10	181	PL55-3	282	弥生土器	甕	床面	25.2	-	(31.8)	10YR5/4 にぶい黄褐	70%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・ 櫛歯波状文、ミガキ、頸部・櫛 歯状文
SB10-11	181	-	270	弥生土器	甕	床面	(20.6)	5.7	(18.8)	10YR4/4 褐	50%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・ 櫛歯波状文、ミガキ、頸部・櫛 歯状文 底-ミガキ
SB10-12	181	PL55-8	281	弥生土器	台付 甕	床面	13.8	9.2	19.7	10YR3/1 黒褐 10YR5/3 にぶい黄褐	脚90%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・ 櫛歯波状文、頸部・櫛歯状 文、脚部・ミガキ
SB10-13	181	-	277	弥生土器	甕	床面	(13.1)	-	(7.2)	10YR6/4 にぶい黄橙	口25%	内-摩耗多、ミガキ、外-摩耗 多、口縁部・胴部・櫛歯波状文、 頸部・櫛歯状文
SB10-14	181	PL67-3	280	土製品	土製 勾玉		-	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙	30%	欠損 (3.3) × (1.8) × (1.8)
SB11-1	182	-	283	弥生土器	台付 甕	床面	(18.9)	9.5	(25.2)	7.5YR7/4 にぶい橙	30%	内-口縁部・ハケ 外-ハケ、 図上復元
SB11-2	182	PL55-9	284	弥生土器	甕	床面	(15.2)	6.3	16.4	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR17/ 1黒	60%	内-ハケ 外-口縁部・ゆがみ、 頸部・櫛歯状文、胴部・櫛歯 斜線文 底-ナア
SB11-3	182	-	285	弥生土器	壺		(10.9)	-	(2.9)	10YR6/4 にぶい黄橙	口25%	内-ハケ 外-不明
SB11-4	182	-	287	弥生土器	甕		-	-	(4.7)	7.5YR5/4 にぶい褐	破片	櫛歯波状文
SB12-1	183	PL56-1	9	弥生土器	台坏 鉢	床面	18.5	10.4	30.9	7.5R4/6赤	80%	内-赤彩 外-赤彩、ミガキ
SB12-2	183	PL55-10	10	弥生土器	鉢	床面	(14.5)	4.4	7.3	10R4/8赤	70%	内-赤彩 外-赤彩、2箇所の 穿孔 底-ミガキ、わずかに赤 彩痕

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・ 遺物番号	図版 番号	写真図版 番号	管理 番号	種類	器種	出土 地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
SD12-3	183	PL56-2	11	弥生土器	高坏	床面	-	194	(15.5)	7.5R4/6赤	約80%	内-ハケ 外-赤彩, 三角通し 4単位。
SB12-4	183	-	290	弥生土器	甕	床面	-	-	(5.4)	10YR6/4 にぶい黄橙	破片	口縁部・櫛溝波状文
SB12-5	183	-	289	弥生土器	甕	床面	-	-	(4.4)	10YR5/4 にぶい黄褐	破片	櫛溝波状文, 櫛溝波状文
SB12-6	183	-	288	弥生土器	甕	床面	-	-	(4.7)	7.5YR4/2 灰褐	破片	櫛溝波状文
SB13-1	184	PL56-3	12	弥生土器	甕	床面	15.0	6.9	22.6	5YR6/6橙	95%	内-摩耗多, 輪積重 外-頭 部・櫛溝波状文, 胴上部・櫛 溝波状文, 胴下部・ハケ, ナ デ 底-ケズリ
SD46-1	186	-	317	弥生土器	甕		(23.2)	-	(13.4)	7.5YR7/2 明褐色	口70%	内-ミガキ 外-摩耗多
SD46-2	186	-	318	弥生土器	甕		-	-	(5.0)	10YR4/3 にぶい黄褐	破片	櫛溝斜線文
⑥区低地-1	189	PL68-20	517	陶磁器	碗	遺構外	-	(5.9)	(2.0)	5Y7/1灰白	底30%	白磁
⑥区低地-2	189	-	335	弥生土器	鉢	遺構外	19.0	-	(8.0)	10R4/8赤	破片	内-赤彩 外-赤彩
⑥区低地-3	189	-	329	弥生土器	甕	遺構外	-	11.0	(7.3)	7.5YR8/4 浅黄橙	底 100%	内-剥落多 外-ミガキ, わず かに赤彩 底-ケズリ, ナデ
⑥区低地-4	189	-	326	弥生土器	甕	遺構外	(18.6)	-	(16.8)	7.5YR8/3 浅黄橙	破片	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・ 櫛溝波状文, 胴部・櫛溝波状文
⑥区低地-15	191	PL68-3	515	須恵器	坏	砂層	13.9	6.0	4.5	10Y7/1灰 白	100%	鉄貫
⑥区低地-16	191	-	320	弥生土器	甕	砂層	21.4	-	(9.5)	10YR5/2 灰黄褐 10YR7/3 にぶい黄橙	口-胴 50%	内-ミガキ 外-口縁部・櫛溝 波状文, 胴部櫛溝波状文
⑥区低地-17	191	-	319	弥生土器	甕	砂層	(21.7)	-	(6.3)	10YR5/2 灰黄褐	口25%	内-ミガキ 外-口縁部・櫛溝 斜線文
⑥-1区-1	192	-	303	弥生土器	鉢	遺構外	(11.4)	4.4	(8.0)	10R4/8赤 10YR7/3 にぶい黄橙	70%	内-ナデ, ハケが残る 外-赤彩
⑥-1区-2	192	-	307	弥生土器	鉢	遺構外	9.0	-	(5.0)	10R5/6赤	口30%	内-口縁部・赤彩 外-赤彩
⑥-1区-3	192	-	313	弥生土器	甕	遺構外	(11.6)	(5.9)	(11.7)	10YR7/3 にぶい黄橙	50%	内-ミガキ, 外-ミガキ
⑥-1区-4	192	PL66-4	306	弥生土器	高坏	遺構外	(13.9)	9.9	8.5	10R5/8赤 10YR7/2 にぶい黄橙	90%	内-赤彩, 剥落多 外-赤彩, 剥落多
⑥-1区-5	192	-	305	弥生土器	高坏	遺構外	(26.0)	-	(9.2)	7.5R4/6赤	口50%	内-赤彩 外-赤彩
⑥-1区-6	192	-	304	弥生土器	高坏	遺構外	-	-	(7.2)	7.5R4/6赤	口30%	内-外-摩耗多, 赤彩
⑥-1区-7	192	-	310	弥生土器	甕	遺構外	(13.4)	(6.5)	(16.5)	10YR6/4 にぶい黄橙	50%	内-ミガキ 外-櫛溝波状文, ミガキ 底-ミガキ
⑥-1区-8	192	-	299	弥生土器	甕	遺構外	(13.5)	-	(10.0)	7.5YR6/3 にぶい褐	口30%	内-ミガキ 外-摩耗多, 櫛溝 波状文, 櫛溝波状文
⑥-1区-9	192	-	296	弥生土器	甕	遺構外	(17.3)	-	(8.8)	7.5YR7/4 にぶい橙	口30%	内-ミガキ, 外-櫛溝波状文
⑥-1区-10	192	-	295	弥生土器	甕	遺構外	(20.7)	-	(14.7)	10YR6/3 にぶい黄橙	口25%	内-ミガキ 外-口縁部・胴部・ 櫛溝波状文, 胴部・櫛溝波状文
⑥-1区-11	192	-	300	弥生土器	台付 甕?	遺構外	-	3.8	(3.0)	7.5YR8/4 浅黄橙	底 100%	内-摩耗 外-摩耗 底-穿孔
⑥-1区-12	192	-	322	土師器	高坏	遺構外	-	16.9	(4.0)	2.5Y4/2 暗灰黄	10%	内-ハケ 外-円形通し2ヶ 所, ミガキ
⑥-1区-13	192	PL67-4	298	土製品	不明土 製品	遺構外	-	-	-	10YR7/6 明黄褐	100%	製品不明 5.0×1.6×1.4

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	種類	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長,推定長)			外面色調	残存率	成形・調整
							口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
㊦-1区-14	192	PL67-8	297	土製品	土製円板	遺構外	-	-	-	75R4/6赤	破片	赤彩塗の破片 3.1×3.4
㊦区水田A	-	PL68-8	578	陶磁器	碗	耕土	-	-	(21)	10Y6/2 灰オリーブ	破片	青磁, 圓花文, 12世紀後半~13世紀前半, 龍泉窯系
㊦区水田A	-	PL68-12	579	陶磁器	鉢		-	-	(31)	25Y6/4に ぶい黄	破片	瀬戸美濃, 片口鉢か椀形, 近世
㊦区水田A	-	PL68-10	580	陶磁器	碗	被覆層	-	-	(25)	25Y6/4に ぶい黄	破片	唐津, 17世紀後半~18世紀前半
㊦区水田A	-	PL68-9	581	陶磁器	鉢	耕土	-	-	(26)	5Y6/2 灰オリーブ	破片	古瀬戸, 中近世
㊦区水田A	-	PL68-11	582	陶磁器	丸皿	耕土	-	-	(24)	10YR5/4に ぶい黄褐色	破片	瀬戸美濃・18世紀
㊦-2区	-	PL68-14	585	陶磁器	碗	表採	-	-	(16)	25Y6/2 灰黄	破片	青磁, 12世紀後半~13世紀前半, 龍泉窯系
㊦-4区	-	PL68-13	586	陶磁器	碗	IV層	-	-	(33)	5G7/1 明緑灰	破片	青磁, 12世紀後半~13世紀前半, 龍泉窯系
㊦-2区	-	PL68-15	587	陶磁器	碗	IV層	-	-	(31)	10Y6/1灰	破片	青磁, 12世紀後半~13世紀前半, 龍泉窯系
㊦区	-	PL68-18	588	陶磁器	碗		-	-	(32)	5Y7/1灰白	破片	白磁, 11世紀
㊦区	-	PL68-17	589	陶磁器	碗		-	-	(28)	7.5Y7/1灰白	破片	白磁, 11世紀後半~12世紀
㊦区低地	-	PL68-20	590	陶磁器	碗	遺構外	-	(54)	(19)	5Y7/3浅黄	破片	青磁, 12世紀後半, 同安窯系
㊦区低地	-	PL68-16	591	陶磁器	碗	遺構外	-	-	(23)	5G6/1 オリーブ灰	破片	白磁, 12世紀後半
㊦区	-	PL68-19	592	陶磁器	碗	遺構外	-	-	(29)	5B7/1 明青灰	破片	青花, 16世紀前半

西一里塚遺跡群 石器・石製品観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長)				石材	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
㊦-2区第3水田-1	33	PL71-3	S78	くさび形石器	畦畔内	100	74	39	4340	安山岩	兩端潤滑痕のある碑
SB01-4	39	PL74-16	S69	砥石		(54)	35	14	35.9	砂岩	
SB03-5	41	PL75-2	S60	砥石		8.3	39	14	72.3	砂岩	
SB06-11	44	PL69-39	S54	大型蛤刃石斧		(4.8)	55	4.3	167.7	閃緑岩	
SB06-12	44	PL72-18	S122	砥石		8.8	(4.1)	4.3	184.4	砂岩	
SM01-3	47	PL69-27	S242	石鏃	周溝内	2.3	2.1	0.5	1.5	黒曜石	未製品か?
SM03-5	49	PL69-1	S3	石鏃		2.2	1.6	0.3	0.7	チャート	
SM05-4	51	PL72-20	S182	磨石	周溝内	9.4	6.4	3.3	288.7	砂岩	
SM07-2	61	PL69-2	S1	石鏃		2.3	1.6	0.4	0.9	黒曜石	
SM07-3	61	PL69-3	S2	石鏃		1.9	1.7	0.5	0.9	黒曜石	
SD15-6	73	PL71-6	S207	刃器		6.5	7.0	2.7	135.7	砂岩	
SD15-7	73	PL72-15	S133	砥石		10.5	6.2	3.8	429.0	輝石安山岩	
SD37-7	77	PL72-9	S124	砥石		8.2	6.4	3.6	285.0	砂岩	
SD37-8	77	PL72-6	S135	砥石		10.0	6.0	3.0	262.1	輝石安山岩	
SD37-9	77	PL76-8	S45	軽石製品		9.9	6.3	2.6	44.2	軽石	
SD38-40	82	PL69-29	S82	石鏃		2.8	2.0	0.5	3.0	安山岩?	無製品質か
SD38-41	82	PL70-4	S35	打製石斧		(8.3)	5.4	1.3	56.9	チャート	
SD38-42	82	PL71-9	S237	刃器		5.6	4.0	1.4	25.4	細粒砂岩	
SD38-43	82	PL71-4	S206	刃器		10.9	7.7	1.9	178.3	細粒砂岩	
SD38-44	83	PL72-7	S109	砥石		14.8	6.5	3.4	486.5	砂岩	
SD38-45	83	PL75-6	S117	台石		13.8	9.2	3.2	599.4	砂岩	
SD38-46	83	PL72-12	S111	砥石		10.5	8.8	3.5	474.2	輝石安山岩	
SD38-47	83	PL74-1	S114	砥石		7.8	5.4	2.2	124.1	砂岩	

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種	出土地点	法 量 (かっこ内は現存長)				石 材	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
SD38-48	83	PL74-3	S120	砥石		8.3	3.2	1.5	39.1	砂岩	
SD38-49	83	PL74-2	S119	砥石		10.0	6.0	1.3	81.0	砂岩	
SD38-50	83	-	S118	砥石		9.8	6.1	1.7	144.2	砂岩	
SD38-51	83	PL75-1	S64	砥石		(8.6)	3.2	3.0	76.2	砂岩	
SD38-52	83	PL73-12	S65	砥石		9.9	5.0	2.4	125.7	砂層	
SD38-52	83	PL75-4	S68	砥石		(6.1)	(5.0)	1.1	38.8	砂泥互層岩	
SD38-54	83	PL75-8	S194	台石		(15.6)	21.6	5.6	2619.1	砂岩	
SD38-55	83	PL67-14	S40	石製品		3.0	2.9	0.4	5.1	安山岩?	紡錘車?
SD39-4	87	PL72-19	S136	砥石		9.6	4.6	3.2	111.0	砂岩	
SD50-1	92	PL69-7	S8	石鏝		2.6	1.7	0.5	1.5	黒曜石	
SD50-2	92	PL69-5	S6	石鏝		2.2	1.8	0.4	0.9	黒曜石	
SD50-3	92	PL69-6	S7	石鏝		2.1	1.7	0.4	0.7	黒曜石	
SK49-1	98	PL75-3	S66	砥石		(6.8)	4.9	1.3	58.4	砂泥互層岩	
SQ02-1	100	PL70-1	S39	打製石斧		10.7	6.4	1.5	125.0	アイサイト	
SQ02-2	100	PL74-4	S138	砥石		7.7	4.4	1.4	51.9	砂岩	
SQ02-3	100	PL70-13	S204	石槌		9.0	8.0	5.5	430.5	ホルンフェルス	
SQ03-15	103	PL73-1	S187	砥石		16.1	9.7	4.0	887.6	輝石安山岩	
SQ03-16	103	PL73-3	S186	砥石		15.3	7.0	4.8	596.8	輝石安山岩	
SQ03-17	103	PL73-4	S189	砥石		14.8	6.6	3.8	354.9	輝石安山岩	
SQ03-18	103	PL73-8	S191	砥石		(9.0)	5.3	2.5	125.3	アイサイト	
SQ03-19	103	PL73-6	S190	磨石		10.8	6.1	5.4	626.8	輝石安山岩	
SQ03-20	103	PL73-5	S188	砥石		8.6	7.5	2.8	240.8	輝石安山岩	
SQ03-21	103	PL73-7	S185	砥石		10.4	5.9	4.2	350.7	砂岩	
SQ03-22	103	PL73-2	S193	砥石		9.4	8.8	5.5	668.4	輝石安山岩	
①～③区外-50	109	PL69-9	S14	石鏝	①-1区	1.8	1.6	0.3	0.5	チャート	
①～③区外-51	109	PL69-10	S10	石鏝	①-3区IV層	1.5	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
①～③区外-52	109	PL69-11	S11	石鏝	①-3区IV層	2.1	1.5	0.4	0.7	黒曜石	
①～③区外-53	109	PL69-12	S13	石鏝	①-4区IV層	(1.4)	1.8	0.3	0.6	チャート	
①～③区外-54	109	PL69-14	S15	石鏝	②-1区表採	2.7	1.9	0.4	1.1	チャート	
①～③区外-55	109	PL69-17	S18	石鏝	②-1区	2.4	1.7	0.3	0.9	黒曜石	
①～③区外-56	109	PL69-21	S28	石鏝	②-1区	2.9	1.9	0.7	3.2	泥岩	
①～③区外-57	109	PL69-16	S17	石鏝	②-1区	(1.6)	1.7	0.3	0.6	チャート?	
①～③区外-58	109	PL69-18	S29	石鏝	②-1区	1.7	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
①～③区外-59	109	PL69-15	S16	石鏝	②-1区	(1.2)	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
①～③区外-60	109	PL69-22	S22	石鏝	②-2区V層上面	2.3	1.9	0.3	1.0	安山岩	無塵品質か
①～③区外-61	109	PL69-13	S19	石鏝	②-2区Ⅲa層	(1.9)	1.3	0.4	0.8	黒曜石	
①～③区外-62	109	PL69-20	S21	石鏝	②-2区Ⅲc層	(1.7)	1.6	0.5	1.0	黒曜石	
①～③区外-63	109	PL69-19	S20	石鏝	②-2区Ⅲb層	(1.9)	1.4	0.5	0.8	黒曜石	
①～③区外-64	109	PL69-25	S25	石鏝	③-2区	2.6	1.3	0.3	0.7	黒曜石	
①～③区外-65	109	PL69-24	S24	石鏝	③-2区	1.8	1.6	0.2	0.4	黒曜石	
①～③区外-66	109	PL69-23	S23	石鏝	③-2区	1.6	1.4	0.4	0.5	黒曜石	
①～③区外-67	109	PL69-33	S26	石鏝	③-2区	2.9	1.2	0.4	0.9	黒曜石	
①～③区外-68	109	PL69-36	S56	磨製石鏝	②-1区	(2.4)	(1.4)	0.2	0.9	珪質泥岩	
①～③区外-69	109	PL70-6	S37	打製石斧	①-4区IV層	14.1	5.1	2.1	200.2	アイサイト	
①～③区外-70	109	PL70-7	S80	打製石斧	②-1区	9.0	5.0	1.5	81.5	凝灰岩	
①～③区外-71	109	PL69-28	S52	磨製石斧	①-4区IV層	(3.6)	4.2	2.0	44.0	緑色凝灰岩	
①～③区外-72	110	PL71-5	S208	刃部	②-1区	8.5	4.9	1.8	58.6	細粒砂岩	
①～③区外-73	110	PL70-12	S203	石槌	②区	8.2	8.3	3.6	289.3	細粒砂岩	
①～③区外-74	110	PL71-2	S209	くさび形石器	①-3区IV層	6.8	5.7	1.5	77.3	泥岩	両側に磨痕のある種
①～③区外-75	110	PL71-7	S202	2次加工のある剥片	②-2区Ⅲa層	5.1	8.9	2.2	87.7	凝灰岩	

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種	出土地点	法 量 (かっこ内は現存長)				石 材	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
①～③区外-76	110	PL72-8	S139	磁石	①-4区IV層	134	60	37	4236	輝石安山岩	
①～③区外-77	110	PL72-16	S181	磨石	①-4区IV層	123	65	31	3280	輝石安山岩	
①～③区外-78	110	PL72-17	S180	磨石	①-3区	105	68	42	5421	輝石安山岩	
①～③区外-79	110	PL74-21	S140	砥石	③-2区IV層	68	41	14	529	砂岩	
①～③区外-80	110	PL72-1	S55	石鏝	①-3区IV層	(106)	(54)	32	2667	流紋岩	
①～③区外-81	110	PL74-10	S73	砥石	①-3区IV層	(72)	35	23	776	流紋岩埋品	
①～③区外-82	110	PL74-19	S69	砥石	②-2区Ⅲa層	105	34	17	662	砂岩	
①～③区外-83	111	PL74-17	S72	砥石	②-2区Ⅲc層	101	59	18	1149	砂岩	
①～③区外-84	111	PL74-20	S71	砥石	③-2区Ⅲ地トレンナ	62	42	12	355	砂岩	
①～③区外-85	111	PL74-18	S70	砥石	②-2区V層上面	(66)	34	16	471	砂岩	
①～③区外-86	111	PL72-2	S67	砥石	③-2区Ⅲ地	86	31	11	401	緑色凝灰岩	自然石を利用した扁平両方石斧の可能性あり
①～③区外-87	111	PL76-9	S47	軽石製品	②-2区	83	63	34	681	軽石	
①～③区外-88	111	PL76-2	S43	軽石製品	①-4区IV層	32	35	29	117	軽石	
①～③区外-89	111	PL76-1	S41	軽石製品	①-3区IV層	41	41	28	200	軽石	
①～③区外-90	111	PL76-5	S49	軽石製品	②-2区Ⅲc層	39	4.0	1.7	6.2	軽石	
①～③区外-91	111	PL76-3	S48	軽石製品	②-2区Ⅲa層	27	2.4	2.0	5.3	軽石	
①～③区外-92	111	PL76-4	S46	軽石製品	②-2区	31	31	1.4	4.7	軽石	
①～③区外-93	111	PL75-7	S42	軽石製品	①-3区	138	288	130	8741	軽石	
①～③区外-94	111	PL75-5	S87	揚き臼	①-3区	135	234	144	2500	火山弾	
①～③区外-109	112	PL76-6	S89	玉石	①-3区	18	1.2	0.4	1.2	建築用岩	
④区第2水田-3	119	PL69-28	S27	石鏝	畦畔内	24	1.5	0.4	0.8	黒曜石	
④区第2水田-4	119	PL70-10	S31	打製石斧	畦畔	145	91	20	2502	アイサイト	
④区第2水田-5	119	PL70-2	S38	打製石斧	畦畔	107	60	25	1865	アイサイト	
SB04-7	126	PL74-15	S61	砥石		(115)	64	22	1999	砂岩	
SM10-5	128	PL73-10	S62	砥石	田溝内	103	54	16	1022	砂岩	
SM10-6	128	PL73-9	S63	砥石	田溝内	(133)	(83)	19	1797	砂岩	
SM10-7	128	PL73-11	S179	砥石	主体部内	114	65	29	2614	砂岩	
SD22-1	133	PL71-8	S232	刃器		43	63	09	288	泥岩	
SD23-2	133	PL69-35	S57	磨製石鏝		(14)	(12)	02	03	凝灰岩	
SD24-1	133	PL69-41	S53	扁平片両方石斧		98	61	13	1431	安山岩	
SD31-2	133	PL69-4	S4	石鏝		28	1.7	0.4	1.1	チャート	
SD40-3	133	PL69-34	S5	石鏝?		46	2.7	1.0	122	黒曜石	
SD40-4	133	PL70-4	S32	打製石斧		103	66	22	1711	泥岩	
SD40-5	133	PL72-5	S134	砥石		128	54	40	4106	輝石安山岩	
SD34-3	134	PL70-3	S33	打製石斧		(105)	68	13	1113	アイサイト	
SD35-1	134	PL70-8	S34	打製石斧		134	60	31	3114	ホルンフェルス	
④区外-5	137	PL74-11	S74	砥石		86	31	25	1051	流紋岩	
④区外-6	137	PL70-9	S79	打製石斧	V層上面	141	90	39	5285	アイサイト	
④区外-7	137	PL71-1	S305	石鏝		154	71	54	6881	細粒砂岩	
SD65-51	158	PL69-31	S84	石鏝		(24)	16	04	1.2	チャート	
SD65-52	158	PL72-11	S296	砥石		67	93	73	6422	細粒砂岩	
SD65-53	158	PL72-13	S121	砥石		149	74	53	7763	輝石安山岩	
SD65-54	158	PL72-10	S137	砥石		124	66	43	5100	輝石安山岩	
SD70-6	164	PL69-30	S83	石鏝		(20)	1.7	0.4	1.0	黒曜石	
SD70-7	164	PL70-5	S36	打製石斧		120	53	14	1291	泥岩	
SD70-8	164	PL69-40	S51	磨製石斧		92	37	19	402	細粒砂岩	
SD74-1	164	PL69-37	S58	石鏝		46	6.6	1.1	31.3	チャート	
SD74-2	164	PL69-26	S30	石鏝		34	2.5	0.4	1.7	黒曜石	
SK101-10	166	PL72-3	S86	砥石		62	61	28	1719	砂岩	
SD09-15	178	PL74-7	S129	砥石		94	51	44	2378	砂岩	

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種	出土地点	法量(かっこ内は現存長)				石材	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
SB09-2	178	PL74-5	S128	磁石	P3	84	3.8	2.2	94.5	細粒砂岩	蟹状
SB10-15	181	PL72-4	S132	磁石		164	7.1	44	690.1	輝石安山岩	
SB10-16	181	PL72-14	S130	磁石		106	6.1	3.9	379.4	輝石安山岩	
SB10-8	181	PL74-6	S131	磁石		7.3	4.1	1.8	69.2	細粒砂岩	
SD46-3	186	PL72-21	S184	磨石		137	7.0	3.6	527.3	輝石安山岩	
SD51-1	186	PL69-8	S9	石鏝		24	1.4	0.4	0.9	チャート	
⑥-1区外-15	193	PL69-32	S85	石鏝		20	1.7	0.3	0.5	黒曜石	
⑥-1区外-16	193	PL74-14	S77	磁石		(7.0)	6.6	5.4	282.8	砂岩	
⑥-1区外-17	193	PL74-13	S75	磁石		100	2.9	2.8	119.5	流紋岩	
⑥-1区外-18	193	PL74-12	S76	磁石		6.6	3.9	2.8	102.3	流紋岩	
⑥-1区外-19	193	PL76-10	S50	軽石製品	複層内	8.1	6.8	3.1	58.7	軽石	
	-	PL76-7	S90	玉石	①-3区V層層	1.4	0.9	0.5	0.9	珪質泥岩	
	-	PL74-9	S98	みがき石	②-2区V層上面	5.6	3.6	1.0	25.4	砂岩	
	-	PL74-8	S104	みがき石	⑥-1区黒色土	7.3	4.9	2.5	129.8	砂岩	

西一里塚遺跡群 木製品観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種・用途	出土地点	法量(かっこ内は現存長)			時代・時期	形状	木取	樹種	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(径)(cm)					
③区第3水田-2	33	PL87-1	W87	桶板?		15.9	3.0	1.0	平安	板状	板目	ヒノキ科	桶板あるいは樽類の蓋・栓。孔を形成
③区第3水田-3	33	PL84-7	W86	施設部材		(7.5)	3.2	2.5	平安	角材状	志去分割材	カラマツ	施設部材の一部。炭化
SD01-4	70	PL77-1	W1-1	用途不明品		(8.4)	4.5	1.0	弥生	板状	板目	アサダ	成形してあるが製品不明
SD01		PL77-2	W1-2	用途不明品		(9.0)	5.0	1.1	弥生	板状	板目	アサダ	成形してあるが製品不明
SD38-56	84	PL77-3	W67	鎌身		(14.8)	4.5	1.5	弥生	板状	板目	コナラ節	曲柄鎌の刃部
SD38-57	84	PL77-5	W92	用途不明品		(4.6)	2.1	0.9	弥生	板状	板目	ヒノキ科	製品不明。糸巻きの可能性有
SD38-58	84	PL78-2	W95	桶		(13.2)	21.4	11.5	弥生	平丸木状	手裁(割貫)	サワラ	蓋がカ蓋蓋か不明
SD38-59	84	PL77-4	W24	杖		(20.2)	8.3(径)	8.3(径)	弥生	丸木状	志持丸木	ネムノキ	先端は石斧による加工か?
SD38-60	84	PL78-1	W22	建築部材柱材		138.3	11.5(径)	11.5(径)	弥生	二股材	志持丸木	サクラ属	下部は鉄斧で切断。支柱の股の部分には横木を嵌めたか?
SD38-61	84	PL77-7	W98	曲柄		(15.4)	3.0(径)	3.0(径)	弥生	丸木状	削出丸木	クスノ節	一本曲柄の柄の一部
SD38-62	84	PL84-6	W78	用途不明品		(17.1)	1.6(径)	1.6(径)	弥生	丸棒状	削り出丸棒	ヒノキ科	棒状木製品
SD38-63	84	PL77-8	W99	曲柄		(11.3)	2.9	2.1	弥生	棒状	削出丸棒(楕円)	クスノ節	一本曲柄の柄の一部
SD38-64	85	PL77-9	W57	建築部材横架材		(28.2)	9.7	5.5	弥生	板状~分割材状	志去分割材~板目	ケンボンシ属	横架材(梁、桁)等の端材か?
SD38-65	85	PL77-6	W25	建築部材枕材		(32.5)	4.0	2.1	弥生	厚板状	板目	コナラ節	
SD38-66	85	PL77-12	W36	建築部材枕材		(70.8)	3.0	1.1	弥生	細板状	板目	サワラ	
SD38-67	85	PL77-10	W33	建築部材枕材		(89.8)	2.0	1.6	弥生	角材状	志去分割材	サワラ	
SD38-68	85	PL77-11	W47	建築部材		(89.5)	19.4	3.0	弥生	板状	板目	サワラ	壁材か床材
SD38-69	85	PL77-14	W50	板材		(44.2)	4.4	1.3	弥生	板状	板目	サワラ	製材板
SD38-70	85	PL77-13	W35	板材		(42.6)	6.9	3.9	弥生	分割材	志去分割材	サワラ	両面整形加工。端材

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種・用途	出土地点	法量(かつこ内は現存長)			時代・時期	形状	木取	樹種	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(寸)					
SD40-1	89	PL83-3	W18	建築部材 構架材		(945)	5.5	5.2	弥生	角材状	志去分割材	サワラ	施設部材か構架材(梁、桁材)
SD40-2	89	PL83-4	W13	建築部材 床材		(835)	13.3	6.0	弥生	厚板状	板目	サワラ	両面に凹凸を除く加工
SD40-3	89	PL83-1	W11	建築部材 構架材		(758)	11.1	3.7	弥生	板状	板目	サワラ	桁材、炭化、一端に束柱が乗る加工
SD40-4	89	PL83-6	W21	板材		(505)	5.3	2.1	弥生	板状	板目	サワラ	板材
SD40-5	90	PL83-5	W15	作業台		(680)	23.0	21.4	弥生	丸木状 (二股材)	志持丸木	オニグルミ	平らな面を形成、作業面に刃痕
SD40-6	90	PL83-2	W10	施設部材		(1102)	5.0	4.8	弥生	角材状	志去分割材	サワラ	分割の整形角材。施設、構造物の部材・両木口欠損
SD17-6	119	PL87-3	W2	施設部材		(286)	4.4	3.2	平安以降	角材状	志去分割材	カラマツ	成形角材
④区第3水田-1	122	PL87-8	W7	板材	畦畔内	(320)	5.3	2.5	平安以降	板状	板目	サワラ	
④区第3水田-2	122	PL87-7	W5	角材	畦畔内	(291)	7.2	6.4	平安以降	角材状	志去分割材	ヒノキ科	建築部材として使っていた可能性有
④区第3水田-3	122	PL87-2	W8	板材	畦畔内	(373)	6.2	2.7	平安以降	板状	板目	サワラ	分割材
⑤区水田C		PL87-6	W6	板材		(625)	6.0	3.0	平安以降	板状	板目	サワラ	
⑤区水田C-4	150	PL87-9	W107	形代		6.3	1.8	0.4	平安以降	板状	板目	サワラ	馬形か?
⑤区水田C-5	150	PL87-5	W108	壁材		(883)	9.0	3.2	平安以降	板状	板目～板目	サワラ	壁材を芯材に利用、炭化
⑤区水田C-6	150	PL87-4	W109	建築部材 床板?		(1108)	5.6	3.2	平安以降	角材状	志去分割材	サワラ	床板を芯材に利用
SD65-55	159	PL79-1	W168	鎌身		(232)	8.0	2.1	弥生	板状	板目	クスギ節	直柄と曲柄の両方で使用できる形態
SD65-56	159	PL79-2	W143	鋤柄		(140)	3.7	2.2	弥生	丸木状	削出丸木	クスギ節	直柄の一部、楔を入れる段差の加工
SD65-57	159	PL79-4	W128	木鎌		(128)	9.4	1.4	弥生	板状	板目	クスギ節	
SD65-58	159	PL81-12	W134	留め具		(265)	2.0	1.5	弥生	板状(角材状)	板目 (志去分割材)	サワラ	木釘で両端を留める留め具
SD65-59	159	PL79-3	W165	木釘		(174)	3.1	2.2	弥生	棒状	削出	サワラ	萱などの屋根材を留めたか?
SD65-60	159	PL79-7	W123	留め具		(162)	2.8	1.0	弥生	板状	板目	サワラ	木釘で留めたか?
SD65-61	159	PL79-6	W124	留め具		(224)	4.3	1.0	弥生	板状	板目	サワラ	木釘で留めたか?
SD65-62	159	PL79-9	W119	樋		(360)	19.7	14.0	弥生	平丸木状	半葺(割貫)	クリ	ジョイント部分
SD65-63	159	PL79-5	W167	樋		(303)	9.3	4.5	弥生	板状	板目	サワラ	
SD65-64	160	PL79-8	W166	樋		(339)	17.2	13.0	弥生	角材状	志去分割材(割貫)	ケヤキ	ジョイント部分
SD65-65	160	PL80-13	W130	建築部材 屋根材		(75)	2.3	2.2	弥生	角材状	志去分割材	コナラ節	屋根材
SD65-66	160	PL80-9	W141	建築部材 屋根材		(316)	6.9	5.5	弥生	平円形棒状	半葺木	オニグルミ	屋根材
SD65-67	160	PL80-1	W126	建築部材 棧材		(505)	1.6	1.2	弥生	角材状	志去分割材	ヒノキ科	棧材
SD65-68	160	PL80-10	W150	建築部材 壁板		(329)	7.2	2.2	弥生	板状	板目	サワラ	壁板
SD65-69	160	PL80-8	W110	建築部材	北側排水 トレンチ	(1054)	6.8	5.7	弥生	角材状	志去分割材	サワラ	構架材(梁か桁)、炭化

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種・用途	出土地点	法量(かつこ内は現存長)			時代・時期	形状	木取	樹種	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(径)(cm)					
SD65-70	160	PL80-7	W117	建築部材 床板		(65.5)	10.5	4.9	弥生	厚板状	板目	サワラ	床板(大引材か?)、炭化
SD65-71	160	PL80-6	W111	建築部材 枕材	北側排水 トレンチ	(320)	5.0	3.2	弥生	板状	板目	タリ	枕材、炭化
SD65-72	161	PL80-12	W153	建築部材		(41.3)	4.8	4.0	弥生	角材状	志去分 割材	サワラ	炭化あり
SD65-73	161	PL80-2	W160	建築部材 枕材		(45.8)	2.5	2.0	弥生	角材状	志去分 割材	サワラ	枕材
SD65-74	161	PL80-11	W115	枕		(66.6)	4.9(径)	4.9(径)	弥生	丸木状	志持丸 木	タニウツ ギ属	先端を加工
SD65-75	161	PL80-3	W161	建築部材 枕材		(24.3)	2.5	2.0	弥生	角材状	志去分 割材	サワラ	枕材
SD65-76	161	PL80-4	W159	建築部材 枕材		(38.4)	2.3	2.1	弥生	角材状	志去分 割材	サワラ	枕材、屋根材の 可能性も有
SD65-77	161	PL80-5	W148	用途 不明品		(32.2)	2.4	2.0	弥生	角材状	志去分 割材	サワラ	欠損のため製品 不明
SD65-78	161	PL82-3	W121	削片		-	-	-	弥生	角材状 (三角形)	志去分 割材	サワラ	角材を削いだ削 片。刃物痕有
SD65-79	161	PL82- 1-2	W122	角材		(142.2)	4.2	3.2	弥生	角材状 (板状)	志去分 割材(板目)	サワラ	角材を削いだ削 片も多数出土
SD65-80	162	PL81-1	W118	板材		(77.0)	6.0	2.8	弥生	板状	板目	サワラ	楔の圧痕有
SD65-81	162	PL81-8	W137	板材		(28.6)	5.5	1.8	弥生	板状	板目	サワラ	
SD65-82	162	PL81-9	W154	建築部材		(34.1)	5.4	1.2	弥生	板状	板目	サワラ	割材分割板
SD65-83	162	PL82-5	W151	建築部材		(41.1)	4.9	4.6	弥生	角材状 (三角形)	ミカン割	サワラ	割材炭化材 屋 根や壁の材材料
SD65-84	162	PL82-6	W152	角材		(32.9)	4.2	3.7	弥生	角材状	ミカン割	-	
SD65-85	162	PL81-3	W147	角材		(27.7)	7.8	6.7	弥生	角材状	ミカン割	サワラ属	
SD65-86	162	PL81-7	W131	板材		(28.3)	9.3	1.8	弥生	板状	板目	-	
SD65-87	162	PL81-5	W142	角材		(19.1)	6.7	5.2	弥生	角材状 (厚板状)	志去分 割材(板目)	サワラ	
SD65-88	162	PL81-4	W155	角材		(17.5)	6.4	3.3	弥生	角材状	ミカン割	タリ	
SD65-89	162	PL81-2	W113	板材	北側排水 トレンチ	(67.2)	4.0	1.5	弥生	板状	板目	-	
SD65-90	162	PL82-4	W112	角材	北側排水 トレンチ	(31.7)	1.5	0.7	弥生	板状	板目	サワラ	
SK101-11	167	巻頭カ ラー	W238	鎌身		45.8	(130)	4.2	弥生	板状	板目	クスギ節	直柄と曲柄の両方 が装着できる形 刃部 23.7cm、背部 5.8cm、幅部 16.3cm、 刃厚 0.8～2.0cm
SK101-12	167	巻頭カ ラー	W239	鎌柄		81.8	4.3	5.0	弥生	丸木状	志持丸 木	ニギキ	炭化
SK101-13	167	巻頭カ ラー	W184	鎌柄		84.8	3.0	2.8	弥生	丸木状	削出丸 棒	サワラ	薄鋸型の楔を入 れて固定する為 の段の加工有
SK101-14	168	PL84-1	W221	農具の 素材		(30.8)	12.5	8.4	弥生	角材状	志去分 割材	コナラ節	農具の素材の残 材
SK101-15	168	PL84-9	W220	建築部材 枕材		(64.2)	2.7	1.7	弥生	板状	板目	サワラ	
SK101-16	168	PL84-3	W219	建築部材 扉材		(40.4)	11.0	3.1	弥生	板状	板目	サワラ	穴は扉の輪受け (まぐさ木)
SK101-17	168	PL84-2	W218	建築部材 壁材		(73.5)	23.2	3.3	弥生	板状	板目	ケンボナ シ属	壁板か床板 楔 で削った際の痕跡
SK101-18	168	PL84-5	W232	用途 不明品		(10.9)	3.5	0.9	弥生	板状	板目	クスギ節	両木口欠損

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種・用途	出土地点	法量(かつこ内は現存長)			時代・時期	形状	木取	樹種	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(径)(cm)					
SK101-19	168	PL84-8	W213	用途不明品		80	2.5	1.9	弥生	平丸木状	半截木	ヤマグリ	櫓の可能性有
SK101-20	169	PL84-10	W185	建築部材 敷居か鴨居		(1192)	5.0	27	弥生	角材状～板状	芯去分割材(楕目)	サワラ	敷居か鴨居、段の加工有
SK101-21	169	巻面カラー	W240	建築部材 破風板		1237	37.6	4.8	弥生	板状	楕目	サワラ	下の材と接ぐ為に下端は薄く加工。欠損有
SK101-22	170	PL85-1	W223	施設部材		(1179)	9.3(径)	9.3(径)	弥生	丸木状	芯持丸木	ヤマグリ	先端と枝分かれの部分に加工有
SK101-23	170	PL85-2	W235	芯持加工材		(830)	125(径)	125(径)	弥生	二股材	芯持丸木	ヤマグリ	伐採痕有、石芥で伐採か?
SK101-24	170	PL81-6	W182	板材		80	5.9	1.5	弥生	板状	楕目	オニグルミ	分割板
SK101-25	170	PL81-10	W178	板材		(168)	3.4	0.5	弥生	板状	楕目	サワラ	成形板
SK101-26	170	PL81-11	W215	板材		(269)	4.3	1.7	弥生	板状	楕目	サワラ	成形板、角はすり減っている
SK101-27	170	PL81-14	W193	板材		(442)	5.0	1.1	弥生	板状	楕目	サワラ	整形板
SK101-28	170	PL81-15	W194	板材		(493)	1.4	0.9	弥生	板状	楕目	サワラ	
SK101-29	171	PL81-13	W195	板材		(258)	5.0	1.3	弥生	板状	楕目	サワラ	
SK101-30	171	PL86-70	W211	板材		(159)	5.6	1.5	弥生	板状	楕目	サワラ	炭化
SK101-31	171	PL81-17	W173	板材		(410)	2.9	1.7	弥生	板状	楕目	サワラ	
SK101-32	171	PL86-3	W191	板材		(402)	2.0	1.7	弥生	角材状	芯去分割材	サワラ	
SK101-33	171	PL81-18	W171	板材		(365)	6.5	1.9	弥生	板状	楕目	-	
SK101-34	171	PL81-16	W172	板材		(399)	4.5	1.5	弥生	板状	楕目	サワラ	
SK101-35	171	PL86-8	W186	板材		(380)	3.0	0.6	弥生	板状	楕目	サワラ	
SK101-36	171	PL86-10	W187	板材		(262)	2.0	0.8	弥生	細板状	楕目	サワラ	
SK101-37	171	PL86-4	W241	角材		(545)	2.1	1.3	弥生	角材状～厚板状	芯去分割材(楕目)	サワラ	
SK101-38	171	PL86-6	W192	板材		(897)	2.8	1.8	弥生	角材状	芯去分割材	サワラ	
SK101-39	171	PL84-4	W175	角材		(150)	3.7	2.5	弥生	角材状	芯去分割材	モミ属	平輪で湾曲
SK101-40	171	PL86-5	W174	用途不明品		(468)	2.7	1.0	弥生	平円棒状	楕目～楕目	サワラ	棒状木製品、草か?
SK101-41	171	PL86-9	W229	用途不明品		(407)	1.7(径)	1.7(径)	弥生	丸木状	削出丸木	サワラ	棒状木製品、何かの柄か草?
SK101-1		PL86-1	W237	芯持加工材		(1310)	17	11.5	弥生	丸木状	丸木芯持	ケヤキ	伐採痕は石芥の可能性有
SK101-2		PL86-2	W236	芯持加工材		(157)	21	130	弥生	丸木状	丸木芯持	ヤマグリ	伐採痕有、枝別れ部分の痕有
⑥-2 区 坑地-5	190	PL89-1	W103	建築部材 構架材?	黒色土層	1290	12.6	11.5	平安以降	角材状	芯去分割材	サワラ	又白か横架材
⑥-2 区 坑地-6	190	PL88-2	W76	箱板	黒色土層	(196)	5.6	0.7	平安以降	板状	楕目	サワラ	箱の側板
⑥-2 区 坑地-7	190	PL88-4	W84	下駄	黒色土層	(90)	5.0	4.0	平安以降	角材状	台表が楕目	ヒトケギ	蓮菌下駄の菌の欠損有
⑥-2 区 坑地-8	190	PL88-8	W85	不明製品	黒色土層	(90)	4.6	2.1	平安以降	角材状(厚板状)	ミカノ割(楕目)	アサテ	不明製品の部材
⑥-2 区 坑地-9	190	PL88-7	W71	建築部材 棧材	黒色土層	(80)	3.4	1.1	平安以降	板状	楕目	サワラ	板目板、棧などの焼失品か?、炭化
⑥-2 区 坑地-10	190	PL88-3	W66	箱材料	泥炭層	139	5.4	0.9	平安以降	板状	楕目	サワラ	両端欠損
⑥-2 区 坑地-11	190	PL88-5	W65	板材	泥炭層	(162)	2.9	0.6	平安以降	板状	楕目	サワラ	スリットは割った時に入ったか?

遺構一覧表・遺物観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	器種・用途	出土地点	法量(かっこ内は現存長)			時代・時期	形状	木取	樹種	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(寸cm)					
⑥-2区 坩堝-12	190	PL88-6	W69	形代	黒色土層	(142)	4.6	0.7	平安以降	板状	追紐目	サワラ	硝・矛・刺か?
⑥-2区 坩堝-13	190	PL88-9	W73	不明製品	黒色土層	(171)	2.8	2.4	平安以降	角材状	削出	ヒノキ科	不明製品の部材
⑥-2区 坩堝-14	190	PL88-10	W91	建築部材 屋根材	黒色土層	(308)	7.4	1.0	平安以降	板状	板目	ヒノキ科	製材板
⑥-2区 坩堝-18	191	PL88-1	W75	遺串	砂層	(240)	1.2	0.9	平安以降	角材状	芯去分 割材	サワラ	欠損

西一里塚遺跡群 鉄製品観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	種類	管理番号	出土地点	法量(かっこ内は現存長)				備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
SM14-1	56	巻頭カラー PL89-2・3	鉄刻	M1	主体部	33.3	3.1	0.6	153.7	長さは隅も含む
SM07-1	62	巻頭カラー PL90-1~6	鉄削	M2	底面より数cm上	7.2			57.4	内径5.0~7.8cm 外径6.0~8.4cm 材幅0.6~1.0cm 材厚0.2~0.25cm
SB09-17	179	PL90-7・8	盤状鉄製品	M3	床面	(13.9)	(1.5)	(1.0)	37.2	

西一里塚遺跡群 銭貨観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	出土遺構・地点	種類	径(cm)	重量(g)	名称	時代	初鋳	備考
①~③区遺構外-112	113	PL76-11	M4	②-1区遺構外	銭貨	2.5	3.0	至道元寶	北宋	965年	
①~③区遺構外-113	113	PL76-12	M5	①-3区遺構外	銭貨	2.5	2.4	明道元寶	北宋	1032年	
①~③区遺構外-114	113	PL76-13	M6	①-3区遺構外	銭貨	2.4	1.4	皇宋通寶	北宋	1038年	
①~③区遺構外-115	113	PL76-16	M7	①-4区遺構外	銭貨	2.4	3.2	元豊通寶	北宋	1078年	
①~③区遺構外-116	113	PL76-17	M8	②-2区遺構外	銭貨	2.4	2.6	元祐通寶	北宋	1086年	
④区補1水田-002	115	PL76-14	M9		銭貨	-	1.0	皇宋通寶	北宋	1038年	
⑤区水田A-005	142	PL76-15	M10	被覆砂層	銭貨	2.4	1.9	熙寧元寶	北宋	1068年	
⑤区水田A-006	142	PL76-18	M11	畦畔	銭貨	2.3	2.1	洪武通寶	明	1368年	
⑥-1区遺構外-020	193	PL76-20	M12		銭貨	2.3	2.0	寛永通寶	近世	1636年	
④区遺構外		PL76-19	M13	確認調査トレンチ7	銭貨	2.3	2.4	不明			鋳のため判読不可能

西一里塚遺跡群 玉類観察表

遺構・遺物番号	図版番号	写真図版番号	管理番号	種類	出土地点	法量(かっこ内は現存長)				材質	備考
						長径(mm)	短径幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
SM21-6	58	PL67-19	J5	ガラス玉	西側の小 口孔	30	30	30	0.04	ガラス	
SM23-2	59	PL67-18	J4	管玉	主体部	60	30	30	0.07	鉄石英	
SM07-4	61	巻頭カラー 左から1番目	J15	ガラス玉		70	(40)	70	0.27	ガラス	欠損
SM07-5	61	巻頭カラー 左から2番目	J16	ガラス玉		80	70	70	0.49	ガラス	
SM07-6	61	巻頭カラー 左から3番目	J17	ガラス玉		70	60	70	0.42	ガラス	
SM07-7	61	巻頭カラー 左から4番目	J18	ガラス玉		80	80	60	0.53	ガラス	
SM07-8	61	巻頭カラー 左から5番目	J19	ガラス玉		70	70	60	0.40	ガラス	
SM07-9	61	巻頭カラー 左から6番目	J20	ガラス玉		70	70	60	0.42	ガラス	

遺構・遺構番号	図取番号	写真図取番号	管理番号	種類	出土地点	法量(かっこ内は現存長)				材質	備考
						長さ(mm)	短径幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
SM07-10	61	巻頭カラー 左から7番目	J21	ガラス玉		70	70	80	0.43	ガラス	
SM07-11	61	巻頭カラー 左から8番目	J22	ガラス玉		70	70	60	0.41	ガラス	
SM07-12	61	巻頭カラー 左から9番目	J23	ガラス玉		80	80	70	0.51	ガラス	
①-③区遺構外-95	112	PL67-15	J3	勾玉	③-2区	210	130	80	4.20	ヒスイ	
①-③区遺構外-96	112	PL67-16	J1	勾玉	②-2区	170	100	60	1.20	碧玉	
①-③区遺構外-97	112	PL67-13	J24	垂飾り	①-4区	510	360	140	26.30	流紋岩	赤鉄鉱の沈殿有
①-③区遺構外-98	112	PL67-17	J2	不明	V層上面	160	60	50	0.60	デイス イト	②-2区
①-③区遺構外-99	112	PL67-20	J6	ガラス玉	IV層	40	30	30	0.06	ガラス	①-3区
①-③区遺構外-100	112	PL67-21	J7	ガラス玉	Ⅲa層	30	30	30	0.04	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-101	112	PL67-22	J8	ガラス玉	Ⅲa層	30	30	30	0.03	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-102	112	PL67-23	J9	ガラス玉	Ⅲa層	40	40	30	0.05	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-103	112	PL67-24	J10	ガラス玉	Ⅲa層	30	30	30	0.05	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-104	112	PL67-25	J11	ガラス玉	Ⅲa層	40	40	20	0.05	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-105	112	PL67-26	J12	ガラス玉	Ⅲa層	40	40	20	0.04	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-106	112	PL67-27	J13	ガラス玉	Ⅲa層	30	30	30	0.04	ガラス	②-2区
①-③区遺構外-107	112	PL67-28	J14	ガラス玉	Ⅲa層	40	40	30	0.08	ガラス	②-2区

西一里塚遺跡群 骨角器観察表

遺構・遺物番号	図取番号	写真図取 番号	管理番号	器 種	出土地点	法量(かっこ内は現存長)				備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
①-③区外-108	112	PL67-19	B1	骨角器	①-3区IV層	(109)	1.2	0.8	10.4	シカ角製



西一里塚遺跡群の現在の風景(2012.2.11撮影)